





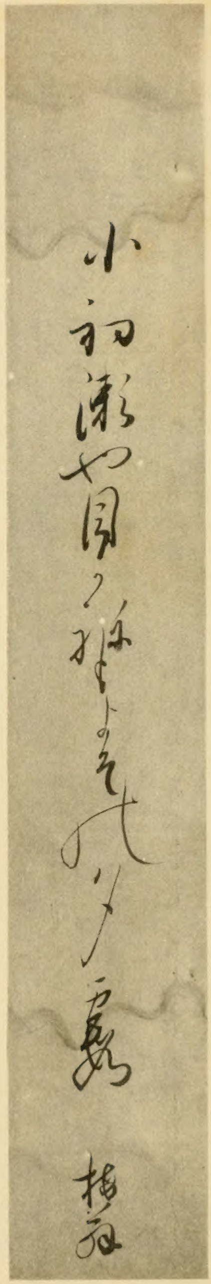




談林俳諧集

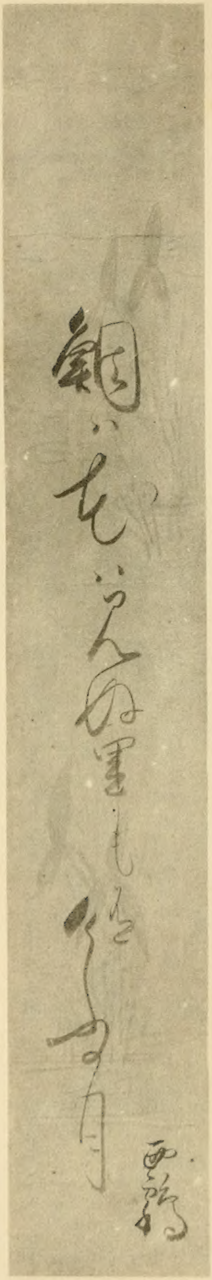
装幀　津田青楓

宗因短冊　（武藤一郎氏藏）



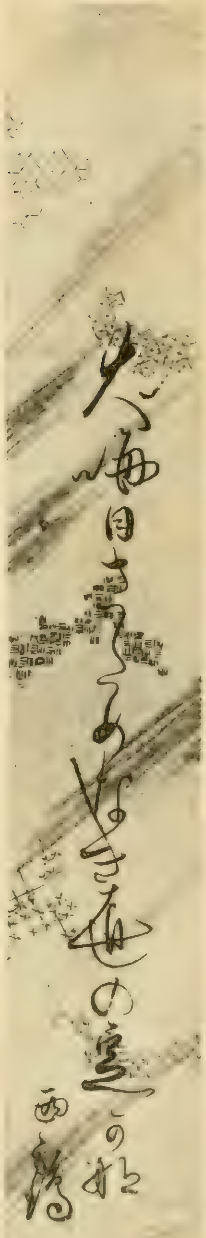
小初瀬や目かれも』よその夕霞　　梅翁

西鶴短冊　（同）



鯛は花は見ぬ里も有けふの月　　西鶴

西鶴短冊

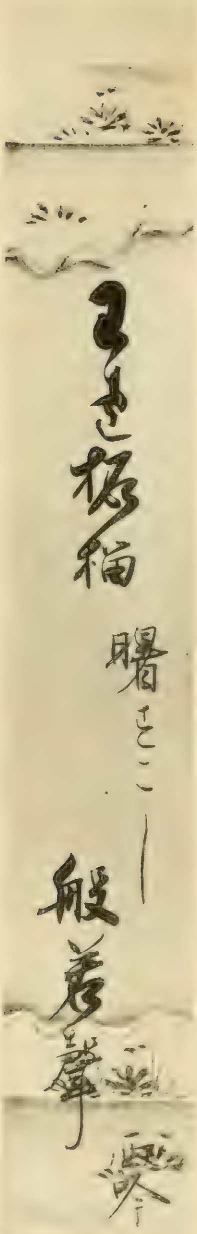


大晦日さだめなき世の定かな

西鶴

（舫野平三氏藏）

西吟短冊



われ柘榴曙すこし般若聲

西吟

（同）

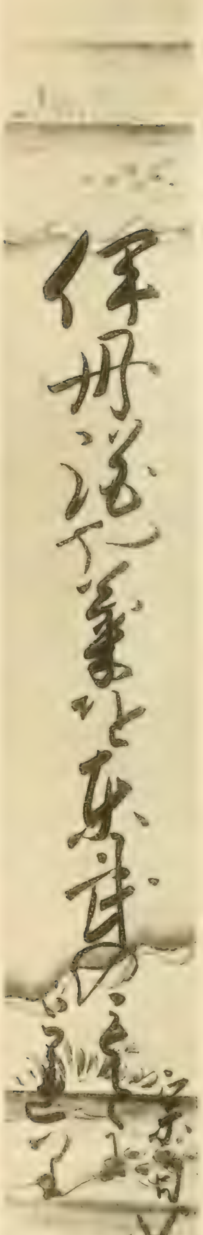
惟中短册　（崎野平三氏藏）



檀の浦にて　ゆふたちにうちあひさしちかふ入日哉

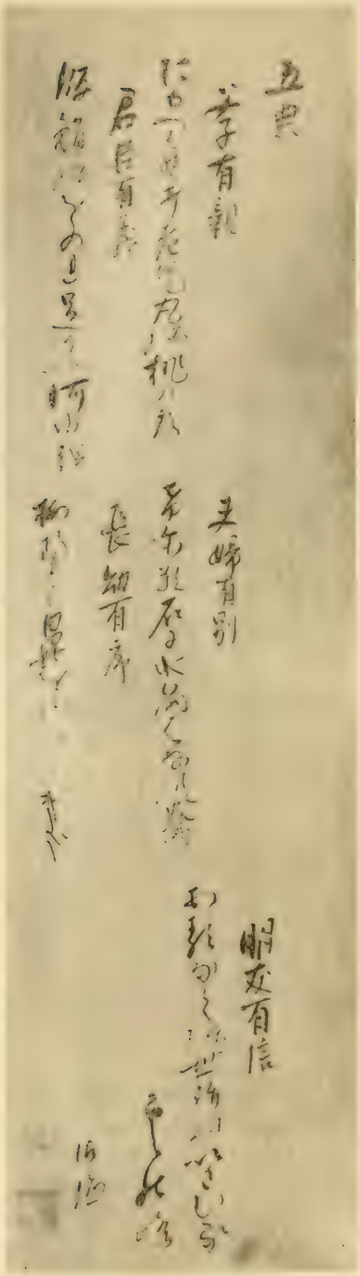
一時軒惟中

宗旦短册　（同）



伊丹酒や菊を東武のもとにとれり

宗旦



沾德筆蹟

（武藤一郎氏藏）

解題

大坂獨吟集

延寶三年板　　横本　一冊

談林派を起した大坂の西山宗因はもと武士で、遁世後は禪もあり、里村流の連歌を好くしたが、「和蘭丸二番船」の獨吟、「今筑波や鎌倉宗鑑が犬櫻」の發句でも解るように、頗る洒落な心境で、どうせ戯れの俳諧をするなら貞門の掟を守るより、宗鑑の『犬筑波』を當世風に行かう程度の野心を持つてゐたに過ぎないから、世間に名前の出るのも割合に後れて、談林派がつひに貞門を壓倒する勢ひの延寶時代には、もう七十の坂を越えた老翁であつた。が、流石に『大坂獨吟集』の評語を見ても頷かれるように、迚も若い氣持で言葉も洒落れたもので、老人めいた一徹な頑固なところはちつともない。その藝術的にいつも水々しい若さ、鋭さ、奇警さ、そして氣分の新しさが、奔放な談林調となつて流行したので『大坂獨吟集』はまさに宗因一派の頂点にあらはれたのである。集中の作者は彼の早口で勝氣のばかに強い西鶴の鶴永や、女人形の來山の義父由平や、幾音や、重安や、悦春や孰れにしても大坂方の中堅分子で、その一人〳〵が技倆の限りを見せた百韵十卷に對し、宗因がすべて引墨して、ねんごろな句評を施したものなので、一卷といへども迂潤に見落されない代表俳諧である。外題の下に西山宗因点取とあるのは、宗因がその意に叶つた句のかしらに平點及び長點を引掛けた卷々をさしたので、後世行はれた點〆落卷のごとき坐興式の點取の事ではないであらう。その平點はついと斜に輕く筆を落した＼で、長點はその上にさらにちよんと點を置いた＼で以て、點の高下

を示し、卷毎に愚墨何句、そのうち長何句と通算して記すのが通例なので、宗因もそれに倣つてゐる。點數の多寡からいへば未學の六十二句長廿六句が最高で、悅春の四十八句長廿一句がどん尻であるが、そればかりで人物價値を判ずる譯にはいかない。

談林十百韻　延寶三年板　小菊本　二冊

大坂で成功した宗因は飛体といつて輕蔑するらしい江戸の風聞に接して、その新俳諧を理解させるため延寶三年江戸へ下つて來た。その前、宗因派の八九人が鍛冶町にとき〴〵會合して、「此席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申すべけれ」といひ合せ、世間の方でも談林と呼び慣はした同志が、宗因の下向を「是ぞ幸ひ渡に舟と」喜んで招待し、百韻の卷頭句を望んだので、「されば爰に談林の木あり梅の花」と如才なく痴て、同志の雪柴は「世俗眠をさますうぐひす」とさつそく脇句を附けて一卷成就した。その「次で面白きに人〻發句せよ」とてそゝのかし合ひ、百韻十卷を纏めたのが卽ち『談林十百韻』である。重安の『糸屑』に宗因は同年の夏京へ向けて出立した事が見えるから、此の一座で出來た或る卷には助言もし、添削もしたらうが、余卷殘らず捌いたのではあるまい。開板までの仕事は多分松意が引受けてやつたのであらう。松意は田代氏、純江戸人ではないが、大坂に寓居した時代宗因風に心醉し、その急先鋒として江戸に來てゐたのであるらしい。十百韻以後は檀林軒とさへ改號して談林流行の主要な人物となつてゐる。『談林十百韻』には作者の抱負がなか〳〵あつたようで、跋に「此連衆の内に一兩年つとむる作者三四人加ル」のは事實だが、たとへ俳道に多少の未熟者が同坐するからといつて、「年老の人々に敢て、をとるべきにあらず」と傲語する風に出方が高飛車であつたので反響も大きく、談林といへば、たゞちに宗因風の事と領かせるように全國的に波

及したのであつた。延寶三年の初板本が江戸から出て、すぐ翌年は京都の書肆寺田から別樣式の横本仕立で、再板される勢ひで、國々へ傳播して行つた。かうした書史的方面から考察しても『談林十百韻』は、輕視し難い反撥力を持つてゐるので、當時の人を激しく刺戟したであらう事は疑ひない。

虎溪の橋　　延寶六年板　　横本一冊

大坂の西鶴と江戸の松意とが、ある日京は智恩院前の徘宿亭に寄り合ひ、「是はと三人笑ひ」ながらの三吟三百韻、一日の中に卷き上げて、「花はなき櫻木にちりばめける」といふのが、『名殘の友』に書き殘した西鶴の思ひ出で『虎溪の橋』に就いてのおほよそはこれで推諒されるが、その時松意は「俳道修行のためとてはる〲上り」徘宿を宿として、その三百韻以外にも「京の作者殘らず參會して」頗るさかんな俳席がもよほされたらしい。同じ京の作者ながら高政をこの一坐に引き入れたならば、まだずつと面白い幕が打てたかも知れない。大坂・京・江戸を通じての談林三人男は西鶴・高政・松意であるから三人同坐して、西鶴が阿蘭陀張りで異体な前句を出せば、高政は惣本寺一流の珍重々々であしらひ、松意は飛体の變化じ三句の渡りを附けたならと殘念に思はるゝが、西鶴・高政は大矢數の爭ひで不和だつたので、溫厚な徘宿が西鶴・松意の二人の仲を取持つ事になつたのであらう。虎溪三笑の故事はたゞ外題に借りたまでゞ本文に關係はないし、この三吟を開板するにも西鶴一人の才覺であつたようで、附錄の歌仙はその二人とは無交渉な對馬の俳人定俊と西鶴の兩吟である。「又の日は對馬の人にさそはれて」嵯峨野をさまよひ、祇王の舊跡にたゝずんで懷古の情を歌仙につゞつた前文がこれに附いてゐる。

誹諧當世男

延寶四年板　　小苅本　二冊

撰者の系統から見れば貞門末期の部に入れるべきだけれど、集中の作者や、句振りや、内容はまぎれもない談林風なので本集に收むる事とした。それは撰者の蝶々子が環境に支配されて變風して行つた爲めである。嚴格に論ずれば蝶々子は『談林十百韵』などゝは、ちよつと叉行き方を異にして、江戸座以前の浮世風といふような情調を持つてゐるが、そこまで突詰めずとも談林傾向のものと見て置けばよい。蝶々子は中嶋氏、花樂軒は號で、もとは紀伊の人ださうである。明曆二年の『夢見草』には貞宣の本名で入集し、「中嶋内藏丞、京之住」とあるので、一時は貞門流の遊戲本位な句作に安堵したが、寛文八年の『伊勢踊』には名寄に『江戸住、蝶々子』と出てゐて、井坂春淸と爭ひを起して、いつとなく談林派と交渉を持つようになり、その心境に動搖を來したが、貞門の反逆者ともなり得ないので、折衷的に浮世風の行き方を案出したのであらう。序文は徒然草の初段の擬作めいたもので、「前なる玉手箱の鏡を押たて、誹諧當世男と作りなし」とあるからその意味は解る。その『玉手箱』は前年蝶々子の開板した四冊本であつて『當世男』と同体裁の句集である。本書上卷に四季發句を配した中に宗因や桃青の作もちよく／＼出て來る。下卷は四季及び神釋その他に類別した付句で、戀の部にある「出ふねの酒をすごせ道づれ」の前句に對して、蝶々子の「らべいかで名殘を惜む歌も有」の一聯は俳諧南蠻記の考證材料になりさうな情景で、こゝらに貞德の異國趣味的な氣分を持ちつたへてゐる。本文は前年偶然原本に接して筆寫したものをもとゝし、和露文庫本によつて發句の部は再び校訂したが、付句の部は缺本のため自寫本にある通り二三の不審はあつたが其のまゝ手を附けないで置いたから、諒察を願ひたい。

俳諧雜巾

延寶九年板　　中本　三冊

貞門か談林か人別のうるさい京都で、一了簡を以て變風した蛇の介常矩は、評判の「蛇之介がうらみの鐘や花の暮」で人望をつないでその位置を落さなかつた。田中氏、常矩はその名、薙髮して眞齋と號したが、俳諧は良保門とも常長の甥で、その家をついだともいひ、貞門の流を汲んだ一人に違ひない。變風後と雖全く談林のお先棒となつたのでなく、宗因とは互格の交際をして、秋風の『打曇砥』のごとき宗因・常矩の追善集が存在する位であるから、談林の圏外にあつて彼一流の俳諧を支持したと見るのが公平であらう。常矩の集には『破篩』とか『塵取』とか、この又『雜巾』とかの風に、掃除道具を外題としてゐるが、掃き込む、拭き出すのような洒落と共に、撰者として卑下の心をふくんで附けたのであらう。『雜巾』の序にも「自句我氣にしやしければ、他句人の心にあまねくはいかでかなはん」と謙退してゐる。その甲乙二卷は四季の發句で、作者に貞門や談林の知名な人物のまれなのは、彼がその一流を支持した態度をしめすもので、附錄の一卷に『滑稽雜巾』の別みだしを置いて、獨吟二百韻と秋風の歌仙を採り入れたのも同一の心事からであらう。許六が「歴代滑稽傳」に「洛の談林は大方常矩が門弟なり」と述べた說は、『雜巾』その他常矩の集を以て見れば過大の言で、無條件に受け容れられないが、常矩の生前は談林の色彩ある者から畏敬されて、勢力も強かつたので、そんな評判が近國に行はれたのであらう。殊に許六が「常矩を見破る」事になつたのは後年で、それまでは熱心な常矩信者であつたのだから。――『雜巾』の中に大津の尚白が蕉門に歸依しない以前、常矩門人としての句を寄せてゐるのは注意を懈れない一つで、芭蕉と同席した事のある加賀の歡生の句の多いので見ると、歡生も、或は同じく常矩門人であつたかも知れない。

當流籠抜　　延寶六年板　　中本一冊

近衞家の御領で氣風は悠暢であるし、大きな酒造家ばかりで裕福であるし、攝津の伊丹には華道や蹴鞠の共に、新文學の俳諧を愛する者があらはれた。延寶二年京都から重賴門の宗旦が引越し、その「性甚愛㆑酒」といふ嗜好上からも生活に適したので、こゝに也雲軒を構へ、子弟を俳諧に導き入れたのでいよ〳〵盛行した。『當流籠抜』はその第一結集である。「ふまれけり花口おしか今一度咲ケ」の宗旦の發句といひ、「つら見しつてゐる來年の春」の木兵の脇といひ、談林風の奔放と奇警を向ふに廻して決してひけを取らない作なので、それと對抗する奇抜な新體として伊丹派の名聲を一擧に高めたのであつた。五吟作者中の鬼貫は中年俳諧のまことを提唱したが、藝術的には既に『籠抜』の附句に多分な口語の形式、そのリズムを洗錬して、より高き文學價値にまで向上させたので、伊丹派の本色は『籠抜』の卑野な、あくどい、けば〳〵しさにあるのだから、しばらくその發達といふ點を無視するならば、同じ宗旦の晩年の集よりは『籠抜』の方に特徴の存する事を主張したい。外題は最後の「あうといふより籠ぬけの春」の擧句から取つたのであらう

江戸蛇之鮓　　延寶七年板　　中本一冊

江戸談林の荒波に揉まれて、浮沈のはげしい俳諧の海を泳いでゐたのだから、たとへ貞門系統であつたところが、言水の撰集を談林派の中の異分子として取扱ふのに異存なからう。『江戸蛇之鮓』はその江戸の新しい流行體を知らせようとしたので、わざ〳〵江戸の二字をかしらに置いた用意をうかゞはれるが、蛇の鮓は附錄の獨吟「蛇のすしを下

に馴たる沖の石」に詠み込んだそれで、北華の「北越巡杖記」に蛇の鮓そのもの丶説明が出てゐる。作者は純粋の談林派の人々で、露沾子の邸にもしば〳〵伺候したと見えて、「ならの葉も江戸に匂ふや八重の花　露沾」の發句に「万句の卷頭願奉る處に古郷迄おぼしめされて」と、畏れ入つたような詞書があるので察しられる。桃靑の「阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍」など、談林の風調に低迷してゐた時代の芭蕉の發句に接するのはめづらしい。四季發句の外に言水の獨吟百韵一卷と同じく歌仙一卷を添へてある。本集に收めたのは柳亭種彥がその初丁を透き寫しとして、以下は他に筆耕させた帝國圖書館本によつたもので、種彥が再度原本と讀みくらべて不審の文字には朱字で註をしてあるから、板本と同じく信用してよいと思ふ。たゞ序跋共に缺けてゐるのが、どうだかと案じられるが。

東日記　延寶九年板　小本　二冊

撰者の言水は一日、知己の才麿の寓をたづねて、携へたこの「東の日記と名付て一軸」とした稿本を見せて、「これより先三たび句帖を顯はし、三たび古し」と閑語したその三句帖は、『江戸新道』及び『江戸辨慶』と前の『江戸蛇之鮓』であるが「三たび古し」の一語がその常に新しさを求めて、流行の先驅とならうとする努力を思はせるではないか。才麿は言水の謙遜をさへぎつて、「ふるき、あたらしきをいふ時は、眞人を待て天倪にまかすべき事しかり」と勵聲して言葉のうらに『東日記』の禮讃をしてゐる。この問答は才麿の序にあるので、本文は乾の卷に春・夏・秋三季の諸家の發句を採り、坤の卷に冬の發句を入れ、附錄に幽山・言水の兩吟の外に都合十卷の歌仙を收めてある。發句の作者は『蛇之鮓』と大差はないが、桃靑の發句の中の「枯枝に烏のとまりたるや秋の暮」は蕉風開發の作と傳唱さるゝもので、一說に「たる哉」ともいふが、それは「や」と「哉」とはいづれにも通用するので、「哉」とあつたところで「カナ」とよ

まず、「や」と取つて差支ない。『曠野』に「とまりけり」としたのは再案であらうから、此の場合それは問題にならない。秋の日暮か、それとも暮秋かゞよく疑はれるが、これも類題別の體裁で、その一句前の定俊の作に「秋晚」とあるので推斷をくだされない事はない。『東日記』の價値は桃青の發句を拾つたゞけでも、この時代の新しい傾向を知り得るで解らう。板下は種彥の考證によると其角が書いたのださうで、書體にそれらしく酷似したところがある。本文の上卷は種彥校合の帝國圖書館本により、坤卷は和露文庫本の原板によつて校訂したのである。

江戸八百韻

延寶六年板　　中本一冊

江戸の新しい傾向の俳諧師八人が、幽山の發企で興行した八吟八百韵である。幽山は高野氏、言水と同じく重賴の系統で、談林に款を通じた一人、晚年任口子に仕へ、竹內爲入と改めて任口子の領地伊勢久居に轉住したが、江戸本所川岸に久しくその庵を構へてゐた、言水の『元柏』にこの八百韵を行つたころ「素堂と打つれ歸るさの夜いたく更ぬ」と、同席の來雪——後の素堂といつしよに戾り道の事を敍した中に「所は本所一鐵が許、家まばらにして、かきねのうの花咲り」とあるので一鐵の家にも會合したようで、或は八人順廻りに宿をして一卷宛卷いて行つたのでもあらう。風體は再三前にいつた通りで格別の事はないが、「畜生塚に女あらはれ」の來雪の前句に、「胴は馬髮はから輪の立姿」の靑雲の附け句のような、當時の怪異小說から材料をかりて來たらしいものがあつて面白い。素堂の發句で名高い「茶の花や利休が目にはよし野山」は第七の卷の發句である事なども考證家を喜ばせる一つである。作者の中で一鐵が「談林十百韵」の一黨である外は、宗因の直統と思はれる人は居ない。貞門の無氣力にいや氣がさして、談林風に同じ、それにも亦慊焉たるものがあつて、新風體にあせつてゐた時代的煩悶が、この八百韻にも反映してゐるように思はれる。

七百五十韻　延寶九年板　中本一冊

桃青の『次韻』はこの『七百五十韻』が千百韻となるには、二百五十韻の不足があるので、その風體を承けて「韻を次ぐ」爲めに興行したので、越人の主張によると『次韻』は蕉風の開基であるから、桃青を感動させた點からいつても此の『七百五十韻』は俳諧史的に重要なものであらねばならぬ。これを發企した信徳は伊藤氏、貞門梅盛の門下であるが、「大系圖」に「毎ニ家事務有テ東府ニ往反シ、數、檀林ノ徒ニ會シテ、師風ヲ變ズ」とある如く、當時流行の變風者であつて、桃青より「近上都ノ風體何如ント」と書信を寄せたので、同志と相會して討論し、「不レ覺至レ欲ニ酒數斗ニ」漸く「雨の日や門提て行かきつばた」の眼前致景の一句を詠じた逸話を傳へられてゐる。「八人や俳諧うたふ里神樂　如泉」の第八の卷が五十韻で、「挨拶を爰では仕たい花なれど　正長」「又かさねての春もあるべく　常之」を以て了るので、『次韻』には此の二句を詞書の如くに扱つてゐる爲め、研究者をして戸惑ひさせるが、兩者を對照して見れば疑念の起る氣づかひはない。其角が「春澄にとへ稻おほせ鳥といへるあり」の句は第五の卷の春澄の「雁にきけ」にからかひ氣持で詠んだので、いかに新風體をとあせつて居たのでも、やはり遊び氣分であつた事が、かうした態度で想像されるのである。原本は和露文庫本を借覽したが、奧附に「板行」の二字のみあつて出板書肆の名がないので、私の所藏本の「次韻」と同時に六林の解題を添へて名古屋から再刻されたものと同一の板木でないかと考へられたが、本文は孰れにしても延寶板と異同ない筈である。

續の原　貞享二年板　大本一冊

時代は既に蕉門に移つてゐるが、撰者不卜及び判者は桃青の友人なので、これを蕉門の書として取扱ふ譯にならないので、談林の延長と見做してこゝに收めたのである。不卜の序に「五とせ六とせ先の向の岡は」とある『向の岡』は桃青の作さへ「蜘何と音を何と鳴く秋の風」の寓言風なもので、『續の原』の平明な調子とは格段の相違であるが、その『向の岡』の續集として十二番の句合を四卷、それ〴〵別な判者に廻してその判詞を求めたもので、春は素堂、夏は調和、秋は湖春、冬は桃青が判者となつてゐる。句合の作者は其角や去來や純然たる蕉門の徒が多い。その句合のつぎに調和その他の歌仙五卷を附して、更に諸家の發句を四季別として添へてある。不卜は岡村氏、貞門未琢の系統で、江戸に住して談林化せられた一人である。桃青の舊知己でその追善として「ほとゝぎす啼くねや古き硯箱」の作が殘つてゐる。貞享板は大本でかつて偶目したが、本集に採つたのは文政二年碓嶺が、米澤の麗岑といふ俳人の許に藏する貞享板によつて飜刻したので、別に『新つゞきの原』二冊を附してあるが、もちろん複刻を記念して開板したもので、本文には沒交渉であるから取除き、『續の原』の原文と飜刻の由來を記した跋だけを附載したのである。

おくれ雙六　　延寶九年板　　中本一冊

惣本寺ばたけの京談林は、その主著『中庸姿』が貞門と論爭の原因となつたので、便宜上前卷の『貞門俳諧集』に揭出したので、再びそれを見返す必要があるが、その以後の傾向は他の談林派と比較して、大差あらうとは思へない。『おくれ雙六』は高政系統の清風の撰であるが、同時代の江戸の諸集と同一の内容である。清風は鈴木氏、出羽尾花澤の紅花問屋で、顏料の紅花を京阪に仕送りし、取引のついで京都に立寄つて、高政の「珍重〳〵」の擧句の仲間入りをしたので、芭蕉も細道行脚の砌に「清風は富めるものなれど」風雅の志あるを慕ひて投宿し、その關係から蕉門

に歸依する事になつたので、その著『一つ橋』は蕉門の俳書視されるが、『おくれ雙六』より系統を引くもので、純粹の蕉門と見るには早い。『おくれ雙六』には高政の發句「今朝國土笑はせ初ぬ俳諧師」とあるが、言水の撰集に出て來る同作者のもの多く、四季發句を前に掲げて、清風の獨吟二百韻を附錄とし、二卷とも作者名を省略してあるが、序文に「初手に爰かしこの發句をしるし、後に愚の獨吟をつゞり」とあるので疑ひなく清風の自作である。西瓜の日本渡來に就いて諸說あるが、當時季題に扱はれて、この「おくれ雙六」にも西瓜の題で三句載つてゐる。新年の題の「初連歌」も後を忘られた一つなので、ちよつとめづらしく感じられる。

誹諧庵櫻　　貞享三年板　　中本一冊

大坂の郊外櫻塚に落月庵を結んで、風流を愛した西吟の知己より送られた發句を一集としたので、『庵櫻』は落月庵のほとり近くの二木の櫻を外題に取つたのである。西吟は水田氏、西鶴に師事して、その『一代男』八卷の板下を書いた能筆であつたが、『うつぶしぞめ』に長柄の橋柱で、文臺を拵へてこれを祕藏した事が見え、いろ／＼の趣味を持つた好事家であつたらしい。『庵櫻』には伊丹の鬼貫が、百丸と落月庵の扉をたゝき、折からの花を眺めて戲れの句を殘し、三吟の歌仙に日暮れて「今宵は華の下ぶしに、いまやうを語りたまはんかし」とて、賑やかな夜に入つた事などがある。大阪談林の末期には西鶴が「爰ぞ万句誹諧名所の櫻塚」にむかしの手振りを句はせてゐる位で、孰れもおとなしい上品なものに納つて、時代の推移に驚くような變化である。それと伊丹の俳人の目に立つて多いのは、西吟の晩年が伊丹で出來た『在岡逸士傳』から探り出される事から推して、兩者の接近には何か特別の事情があつたのでないかと思はれる。上卷は諸家の發句を掲げ、下卷はその延長であるが、幸方の天滿宮奉納千句の各卷第三までを載せ、

別に西吟の獨吟歌仙一卷を添へてある。原本は帝國圖書館にあり、口繪も原本にあるまゝを凸版に取つたのである。

談林一字幽蘭集　元祿五年板　大本三冊

大名で俳諧を好んだ人は、御前へ伺候する俳諧師の幇間的の氣輕さを喜んだので、眞に俳諧を愛して、その道に入つたのは露沾子だけのようである。露沾子は内藤家の若隱居で、その父君風虎子と宗因に師事したちやき〳〵の談林で、點料は取らなかつたらうが、望みの者あれば批點もしたし、門入をも許して、意に適した者あれば俳號を與へたので、門下に露言や露月や沾凉のような一流の俳諧師を擁してゐた中に、沾德を信任して、父君風虎子の遺著『夜錦』・『櫻川』・『信太浮嶋』の三部書が世の中に忘られつゝあるをなげき、その再選を托した結果、『一字幽蘭集』の開板となつたのである。沾德は水間氏、合歡堂と號し、談林の直系であるが、蕉門の徒に接して後の江戸座を起した才人である。『一字幽蘭集』は經書、詩文の書から主要な文字を抄出し、それを題として適當な句を分類したので、引用書の目錄を見たゞけで衒學的氣分に打たれるが、露沾子の序といひ、素堂の漢文の序は佐々木文山の筆であつたり、さすがに大名の好みと、その註文によつて開板された堂々たる體裁を備へてゐる。上・中・下の三卷を通じて大部分は發句で、紛れやすき假名には漢字を註し、句中の古歌又は古詩に因めるは本文の引用を懈らず、歌仙・百韵各一卷を附錄してある。原本は藤井紫影博士の好意で京都大學藏本によつて筆寫し、その中卷を缺けるは和露文庫本にて補ひ、校正の際は再び川西和露氏の援助にてその和露文庫に完備する全三卷を借覽し、充分校訂に注意を拂つたつもりである。

蓮實　元祿四年板　中本一冊

元祿になると談林調は、あの奔放さ、あのはげしい反抗氣分をうしなつて、無氣力な、魂のない形骸ばかりを持ち殘したに過ぎない。と、かう觀察して大過ないが、談林派の存在は決して無視するを許さないであらう。西鶴の如きも浮世草子に着手してから全く俳諧を抛擲したようにいはれるが、その事實を誣ふるの甚だしきは元祿時代の俳書を覗けば、たゞちに理解されるであらう。『蓮實』は談林末期にかうした誤解を一掃する好適の書で、撰者の賀子は齋藤氏、西鶴の大矢數四千句に脇座十二人の中に選まれた談林作者である。『蓮實』の體裁は連句四歌仙を最初にかゝげ、四季發句をその後に廻して、卷末に又一歌仙を添へてあつて、作者は談林系統の者を中心として、芭蕉の發句をも採つてゐる。西鶴・賀子の連句を見るに、「蓮の實を袖に疑ふ霰哉」はあまり數のない西鶴の發句が、悉く難解であるのにこれは又頗る平易な敍法で、賀子の「旅寐の宵を荻に起され」も飽氣ない脇である。內容は談林の生氣乏しくして、いたづらに時代の風に同化されつゝある事を看過し難い。本書も亦和露文庫本に據つて校訂したのである。

誹　枕

延寶八年板　　橫本三冊

國々を廻つて旅中の收獲を頭陀袋に收め置き、それを再び撰び出して諸家の發句と共に國別に配列した俳諧地誌である。撰者幽山は素堂の序に「西は榛の津にひら包をかけ、東はつるがのはて迄足をおもしとせず」全國を跋渉して、殘る山川のない旅行者で、いづくの寺社は「何間ばりにどちらむき」をもそらに知り、「實方がつかの薄一もとまけ折り、緒絶の橋の「木の切をふくろにをさめ」て、その好事癖からこの『誹枕』の編纂となつた來由を記してある。上・中の二卷及び下の一部は國別の發句で、作者は談林の先蹤維舟の貞門ばたけである以外は、宗因の梅翁その他談林の系統とそれに接近してゐる人ばかりである。友賢の漢文の後記と、みちのく名所の句と、盤齋の「名所の草木を見て」

の序と和歌、同じく狂吟の長哥があり、宗因の「むさし野やつよう出てきた花見酒」の獨吟歌仙、その他十一卷の連句が附錄になつてゐる。國別の中には幽山の足跡の至らないところもあらうが、「外國」とある中には「他國もつむるやかほちやるすんつほ　如貞」の滑稽な取なしといひ、「入札や心當にもおらんだ荷　三昌」や「阿蘭陀や札もおち塩湊舟　宗旦」は南蠻趣味からの句作であらうが、當時のおらんだ入札がしのばれるようで興味を覺える。友賢や蕪齋の記に寛文九、同十年とあるのと、素堂の「寛文のころ櫻木にあらはすべきを」といふ序によると、開板までには約十年を要したので、幽山の苦心を察してよからう。原本は和露文庫本を底本として、その缺けたところは家藏本にて補寫したのである。

大矢數

延寶九年板　　橫本五冊

三十三間堂の大矢數は的に向つて强弓を引きしほつて、はつし〱と射るので、覘ひさへあやまらなければその成功も信じられるが、これは文臺を控へ、口をやすめずして吟じて行くうちに、指合見あつてその附句の前句・打越しに同字・障りあれば咎めるので、西鶴のような二萬三千五百句は一日一夜の時間に割つて何句と計算して、果して可能なりやの疑問が起るけれど、記錄を信ずれば事實として肯定しない譯にいかぬ。西鶴は延寶五年の五月廿八日大阪生玉の本覺寺で、獨吟千六百句興行を成就したのが、その第一回で「初花の口びやうしきけ大句數」を卷頭として全卷『大句數』の標題にて開板されてゐる。その評判の高さを羨望して、多武の峰の紀子は翌六年、奈良にて千八百句を獨吟し、高政の序を添へて『誹諧大矢數』を板行し、西鶴より二百句詠み勝つたのであるが、仙臺の三千風は同七年三月、一日二千八百句を獨吟し、『仙臺大矢數』を出板したので、西鶴はより以上の句數を吟じて、その二人に對抗しなければならな

い形勢となり、延寶九年四月一日「生玉に大矢數うたせ、一日四千句の大矢數俳諧を吟ず」と鬼翁の序にある如く、「天下矢數二度の大願四千句也」の獨吟を『大矢數』五卷に分載して、天下早口の第一人となつたのである。役人は指合見より後座まで通計五十餘人、その大掛りの興行であつた次第は本文に詳しい。貞享元年六月、また〳〵住吉の神前で一日一夜に二萬三千五百句を獨吟し、大矢數の俳諧爭ひは、これを最後として西鶴以上に吟じ得たものはない事になつた。原板本は帝國圖書館の舊藏であつたが、震災にて灰燼となつたので、自寫本の一部と『西鶴全集』所載の覆刻とを對校したのである。

白根嶽　貞享二年板　中本一冊

俳諧點者としての門戸を張るには門弟の多い方がよい。江戸では調和が門人を擁した點では第一番であつたらしい。調の字のついた作者は悉くその一門と見做さるゝので頗る景氣がいゝ。調和は岸本氏、貞門の安靜系統で江戸の呉服町に居住したが勢力は國々に及んで、殊に甲斐には『白根嶽』の撰者として一瀨調賓が一門の發展を後援してゐた。序文に「御江戸の調和先生、壺瓢の滴りを市川に汲む」といふ壺瓢は調和の軒號、市川は調和の住所である。拮据な漢字づくめで、言ひ廻しもぎし〳〵してゐるが、才麿の「秋は夕を男は泣ぬ物なればこそ」は談林調として、人情美の溢れるような傑作である。四季別として發句の外に、調和が市川に遊杖した時の「雪を雪ゝ見て甲城の戸に艷し」の發句に、調賓の「鍬の余力ニ挑ク寒月」の脇ある歌仙一卷を収めてある。外題は序に「今此甲斐の白根が嵩おろし」といふ甲斐の名山から取つたので、撰集の體裁には内容のような異色を見ないが、漢句の散見するのは、さうした類書に乏しいので、はじめて見た人に不審を起させるであらうが、これは漢和、又は和漢の連句から來たので、「塁ハ被ヶ奈

良曝」のごとく五言にて成立し、それを發句と同格に見るのである。本書も和露文庫本に據つたのである。（勝峰晋風）

本集は三千風の『行脚文集』の長編な爲め覆刻を他日に讓り、惟中の『俳諧三部抄』才麿の『坂東太郎』は編輯締切までに筆寫の見込みが附かなかつた爲め見合せたので、『虎溪の橋』と『白根嶽』を入れて、讀者の寛容を乞ふ次第である。

日本俳書大系　第七卷　談林俳諧集　目次

筆蹟

宗因・西鶴・西吟・惟中・宗旦――短册　沾德

大坂獨吟集

西山宗因點取

十百句　上・下

大坂獨吟集　西山宗因批判　十百句

上巻
幾音
素玄
三昌
意樂
鶴永

下巻
山平
同
未學
悦春
重安

獨吟

幾音

寛文十三　癸丑のとしの内に春立けれは

＼去年といはんことしとやいはん丑のとし
　え方らしの年とは今こそ承候へ
＼庄屋のそのゝうぐひすの聲
＼青柳も殿にやこしをかゞむらん
　草木もなびくばかり也
＼其一國をふくはるの風
＼きり晴て價千金月に影
＼墨跡かけて鳫わたるらし
　本尊かけ鳥より風味よく候
＼折釘もうつや礎の槌の音
　からりころ〳〵こち〳〵まじりに聞事に候
＼蕪鉄まじりの淺茅生の宿
　新しき取合候
＼日覆も霜よりしもに朽果て
＼大工つかひや橋のつゝくり
＼晝めしの櫃川さしてはこぶらし
　秀句あたらしく候
ふしみ竹田も植るたゞ中
＼かり鶴籠のねぶりを覺す郭公
＼たばこのけぶりむら雨の雲
槇のはに霧立のぼる高棧敷
芝居もはてゝ秋はさびしき
＼むしの聲かんぜぬ物はなかりけり
かゝる名句もあり明の月
　自まんほどに候
臨終にうち向ひぬる西の空

そこのき給へ人〻いづれも
花をふんで勿躰なしや御神木
さりとては〳〵
梅の立枝にこく鳥のふん
我宿の箒木の先やかすむらん
ありとは見えで棟の天水
一生は棒ふり虫のよの中に
狂言綺語觀念のたより二ゅ
かち荷もちして日ぐらしの聲
山姥や月もろ共に出ぬらん
はるゝ舞臺のまへの前きり
巾着も大慈大悲の觀世音
南をはるかに見る遠めがね
鉄炮の先に。あぶなきおとこ山
ふるぐそく着てたてりとおもへば
ひかへたるかのやせ馬に針の跡
姉が小路をくろ木は〳〵
八嶋一ばんのだてもの〻句躰ニゅ
えいやえい三條殿の床ばしら
蔦口もつてくるよしもがな
人にしられでのうたニや
二ウ
いかにせん火事ほどもゆる我おもひ
折ふし戀風はげしかりけり
かろくやすらかにてかんしんにてゅ
忽に家もつぶるゝおごりやう
日貫小づかも後はふるかね
奈良の都ねるは御座れの地黄せん
たゝく太皷の音もなる川
明ぬとて起別れ行く道のもの
まくらのゆめもやぶれ草鞋
小づかひの錢懸松を吹あらし
度〻一見の心ちしゅ
しぐれもめぐる念佛講中
十四日五日の暮の月寒て
大しほさせば千鳥なく也
ちり〳〵やちつた所が花の波
面白とは此ときか
春風誘ふ瀧の糸くづ
三
山姫やのこれる雪の綿仕事

立田のおくは手習どころ
哥よみや紅葉〻分て入ぬらん
＼猿丸太夫きく鹿の聲
＼判官のまなこさやかに月更て
太夫よく付ゆ
＼すゝめ申せば寢酒何盃
靜が抄おもひやられゆ
小夜衣おもき咳氣の枕もと
鍾馗のせいかゆめかうつゝか
＼節句までありてなければかみのぼり
誠によく書物ニゆ
菖蒲かる野ゝ末のはつけ木
＼池波のよる〳〵來るやおちひねり
＼ときはの里にばけものゝさた
後からそんぞとしたる松の風
＼芭蕉はやぶれて肌着一枚
三ウ
古寺のからうすをふむ庭の月
＼菩提もとこれ木おとこ冷し
＼ほんなうのきづなをきるや向髮

＼戀の山また遁世のやま
＼やもめでは物の淋しき事ばかり
＼始末をしても入あひのかね
＼一かせぎいのちのうちにと存ゆ
御こゝろがけ尤ニゆ
江戸まで越る佐夜の中山
甲斐がねをさやにもみしか旅がたな
似せ侍もいさやしら雪
たつときも團左衛門も花に來て
＼あるひは猿樂蝶〻の舞
猿かれにあふては猫のまへの蝶ニゆ
＼春日野は七日が間のどやかに
近〻來春も見るやうニゆ
＼若菜つみつゝ今朝は増水
名
かせ世帯我衣手にたすきかけ
＼妻子にまよふ闇の鵜づかひ
＼瀧つせやいとゞかはいの涙川
＼岩ねの床にだいたかしめたか
奥山に扠も狸のはらつゞみ

〽東西〳〵さるさけぶ聲
入みだれ軍はその日七つ時
〽飯燒すてゝかまくらの里
〽鮨桶を由井の汀に急ぎけり
〽ゆめぢをいづる使者にや有らん
鮒壺すしを肴にこそ
口上のおもむき聞ば寐言にて
ねつきはいまださめぬとばかり
夕月や額のまはり照すらん
けぬきはなさぬ袖の秋風
〽ウ人はたゞはたち前後か花薄
多かれたる身にもうらやましくゅ
〽いたづらくるひのら〳〵の露
〽夜遣には庭もまがきものり越て
かけがねもはや更る閨の戸
〽をとがいを水鷄やたゝきやまざらん
いかほどたゝく共あき有まじくゅ
〽さてもさしでた洲崎嶋さき
〽きく王や舟に共比花の春
其日の形勢此句ニあり

異國もなびく御代のどか也

愚墨五十四句
長廿九
西幽子判

郎輿かうもあらふか

こていうしにからすきかけて、もつてひらく作においては、かへす〴〵も、申ばかりはなかりけり。

〽松にばかり嵐や花の片贔屓　素玄
かづらき金剛山のむかし思やられゅ
〽仰のごとくなびく藤がえ
〽小うなづき二つ三つめに春暮て
三つめあたひ千金の所也
ねぶるあいだもみじかよの月
〽酒すこしきいて味はふ郭公
聞やうにおいて此うへあるまじくゅ
〽宿はづれにてはらすむら雨
〽旅の空日はまだ殘るつかひ錢

わたしの舟を出さふ出すまひ
都鳥とへばしれたる似せなまり
糸の似せ侍よく見立られ候
歌の師匠をとるやむなぐら
弟子坂東ものにや
目に見えぬ鬼もやはらで打たふし
鬼拉躰相見え候
年越の夜はたゞ一寐入
するくと往生申鉢たゝき
うらやましく候
うづめば土と成しへうたん
何もかもひよくらへうたんに成候
貧しきか住こし跡を田畠に
いつくたまゝぞよはる虫の音
貧家の舊跡虫までめいはく尤ニ候
露霜の置ばさび付鼻毛ぬき
座敷の壁に月の鏡を
肴舞鐘撞の精靈あらはれて
ぞつとするほどきれな小扈從
もみうらのだての薄着を吹あらし
頭巾の山やまたこひの山

梟の羽かはしたる中なれや
めづらしき羽にて候
手水鉢にも廻る清水
炉釜にや音羽の瀧をしかくらん
羽の字ちかきさし合ながら
初雪の景くろき筋なし
明白也
山眉の小袖がさねの朝風に
味噌酒過す陸奥のたび
薄鍋を亡者は泣ゝ見送て
さて〳〵は伎獵師も一つ成候哉
地ごくのさたも悪錢かする
博奕打子は三界のくびかせよ
こゝろはやみに夜もろくにねず
俄めくら夢かうつゝかうつの山
時宜にて人にあはぬ也けり
夕ぐれの月のさはりの女かも
二ウ
下十五日かよひ路の露
秋の海淺瀨は酉に有と申
新しき通路ニて候

＼上荷とるらし彼岸の舟
＼薪買百味飲食とゝのへて
＼あたごの坊の納所ともみゆ
トしこためしかねや鳥井に成ぬらん
落墮ならで鳥居建立きとくニゆ
＼家藏共外たつる天びん
＼とのかうのかたり付たる仲人口
＼よいとしをして紅粉やおしろい
トこの異見耳にあたるもしらね共
心いきさても〳〵
君をながすの御沙汰冷し
京はたゞひそ〳〵として秋淋し
七つさがれば門をさす月
ト花の火もあだにちらすな城の內
用心時花の火までに心を付たる珍重
＼くま手鳶口ならびに鑓梅
三 雪とけて流木取がち國ざかひ
＼角田がはらの浪のわれふね
＼いくたりか淺草橋にこもかぶり

トおたすけたまはれなむくはんぜ音
ト諷ずき引取息の下までも
臨終正念南無觀世太夫もおどろくべし
ト箸はすたらぬなら茶なるらん
奈良用に立一字千金也
小豆さゝげ粟嶋殿の初尾にて
かぶり太鼓も秋のかたみに
＼いたいけを抱て恨の露なみだ
＼鎌田が醉るさかづきの影
＼上るりの扨も其後さゆのみて
やくしの反化がなをす痳病
土の籠出れば虎のいきほひに
のびたる髭を吹風の音
三ウ みめよしはおどろかれぬる松浦人
トたがしのびてかはらむ佐与姫
左手彥留守の間しれまじくゆ
＼繼衣おもきが上に打かけて
ト待宵のかねはらふ町役
繼よりも公役及雜義ニゆか
家主はわかぬ別れの牢人に

＼委細の事はたがひに江戸から
＼道づれと箱根の切手見合て
やぶれつゞらを明て悔しき
＼あるゝとやにくき鼠を取にがし
へる油火も消る秋風
ひら岡へくる姥玉のよるの月
＼宮司が衣うちかへしけり
ト神木の花見虱やうつるらん
トかすむ塩垢離身もふくれつゝ
身もふくるゝよく出申候
名ト吉日と舟乗初るちからこぶ
又ちからこぶ云々也
ト喧嘩におよぶ尼崎うら
ト焼亡の煙をかつく壁隣
かつく妙の一字ニ候
＼何のかのとてしれぬ境目
＼たうとさや同じやう成佛ほさつ
ト十方はみな浄土すご六
＼お日待の光明遍照あらた也

おこりまじなふよし水のみね
東山に位有人のあかり膳
蒔絵に見ゆる半切の数
能衣裳松の村立はしがゝり
ト未明にはじまる此宮うつし
月くらく三井寺さして落たまふ
作例も不存此はじめて承故驚入候
むかしにかへる妻をよぶ秋
ウ身入ていろはにほへと書くどき
＼戀の重荷のしるしや有らん
さらぬのみか尻にしかるゝ百貫目
欲には人のよくまよふ也
六道の辻切をする夕まぐれ
トなふかなしやとてなく鳥邊山
付心やすくて有感か
ト咲花を引むしるてふすほろ坊
かなしの心かはりてめづらしく候
＼氣まゝにそだつ少年の春

愚墨五十九句
長廿八

もとより御作意存知ながら、獨吟ははじめて一覽、句毎におどろき入、老眼あらたなる心ちして

ぬきんでたそのさくらやの茂りかな　西

梅花翁

西山のかいあるかげに、猿さけぶ

獨狂言、尾もない事を

ヽかしらは猿足手は人よ壬生念佛
ヽ投火をともす花の最中
ヽ春の日や名殘のうらに暮ぬらん
さらばといひてかへる波風
なま魚の塩路はるかにいらぬ事
へうたん一つ山のはの月
肩さきや裙野に結ぶ露分て
ヽ矢つほ慥になく鹿の聲
ウ
ヽ秋の田の其まゝそこに五百石

三昌

ヽされば御製もうかむ廻船
　廻船妙所ニ候
浦切手上代風で有まひか
ヽもの毎かたき須磨の關守
ヽ木枕に幾夜ね覺の丸はだか
蚊はらひ一本松の下陰
線香の烟亂るゝあらし山
ヽ瀧のしら波はやい句作り
水邊にしばしもためず打こみて
ヽ月をのせてやかへるからふね
ヽ鴈がねや貨物と成て渡るらん
色づく山やうへのまち人
ヽ夕日影ゆびさす事もなるまひぞ
　何にも自慢相見え候
ヽ雲のはたてにはづす兩馬
二
ヽひつくんで名乘中にもほとゝぎす
　よき名乘所ニ候
ヽ鷲尾龜井片岡の森
　よくつゞき候
ヽまはり狀其かみ山の奥迄も

＼松むしの聲のこす口上
＼たゞいまか芝居破りの秋の風
火繩のけぶりはらふ雲霧
狼のまなこさやかに月更て
いきてはたらくとらの刻限
＼あそばした一字の夢やさますらん
＼其時てい家むねに手ををく
一字題の哥の時歟
＼はたさんとゆふべちかづく揚屋町
＼戀にひかるゝ弓矢八幡
＼爰に又はたち斗のおとこ山
弓力の盛ニてゆ
＼三月五日たてりとおもへば
近日ニ被成ゆ

二ウ

鬮札のかすみや春をしらすらん
＼鬼門にあたる鶯の聲
一うちの針の先より雪消て
＼出る日影やうつる天秤
＼蜻蛉の命惜くば落ませい
賓の字なくておもしろくゆ

＼我等は城を枕の下露
大石のかたぶく月に手木の者
＼ざゞふり出してみねの白雲
＼かづらきの神はあがらせ給ひけり
＼もはや久米路のはしごひく也
珍重〳〵
＼埋木や鋸の柄になしぬらん
釿のさきをかけ波の音
＼散花を踏てはおしむむかふずね
ふやが軒端に匂ふ梅が香

三

＼春のよの價千金十分一
此ほど發示ニ下居ゆ
＼月もいづくにかけ落の跡
ながらへて年より親のおもひ草
又くる秋にいたむよはごし
ねぢまはすにぎりこぶしに露ちりて
＼うるし吹こす風は有けり
＼三よしのゝ吉野を出て獨すき
へよんな事する妹とせの山

麻衣たつ名もしらで後から
獨事何事とは不知ゆへどもいか樣用有さらにゆ
汗になりぬる戀路はい〳〵
無理若衆になしたる歟
倫(綸)言はおほせのごく馬に鞍
双六のさいてつちはくるか
お日待の更行空に湯のみたい
岩戸をすこしひらく辨當
三ウ
花に來て鬼一口にならばなれ
諸行無常のかねかすむ暮
煩惱の夢はやぶれて春の風
そもじつれたい雁かへるとて
御誓文跡なき雲と成にけり
驪山宮にものこるくさ墨
もろこしもかいはらの庄有やらん
かいはらは不存くさきすみおほくゆ
六丁道につゞくわらぶき
世の中はとてもかくてもかはせ駕子
あまの小ぶねのさかなは〳〵

引塩にさゝれてのぼる新酒にて
月を片荷にかくるうら役
いろかへぬ松の梢や千木ならん
時雨の雨や白き水かね
名
骨うつき定なき世のならひなり
あばら三まひ化野ゝはら
かすかいも柱にのこる夕あらし
白波落す橋のまん中
茶の水に釣瓶の繩をくりかへし
ふり分髮より相借屋衆
講まいりすでに伊勢馬立られて
さいふに入る錢かけの松
帳面にあはせてきけば蟬の聲
婆〳〵で汝が白雨の空
一生はたゞほろ味噌のごくにて
たのしみは又さかしほにあり
二日まで肱を枕の今朝の月
姥がそへ乳もこの秋ばかり

二日の字殊勝ニゅ

ウ
一かさね仕着せの外に紅葉して
入日こぼるゝ鼻紙のうへ
さし出す楊枝にかゝる淡路嶋
焼鳥にする千どり鳴也
おとこめか妹許行はへ緒付て
御身いかなる門に立らん
齋米をひらける法の花衣
願以至功德あけぼのゝ春

愚墨五十三句
長廿二

梅翁判

かしらは猿、尾は猛龍、其吟虎のいきほひありたれか是なおそれざらんや。

鼻は袂、涎は懐をうるほし、余念なき腹の上に指を折も、いくつれ幾つ起て、それも是もさ待かれし春の日もちよろり暮ては、又く明て、わが年も今朝老て、二度兒の樂さあどなきとば、ふつふさ出次第、しからば怒れしかるさまゝよ

意樂

十といひて四つの時めく年始哉
發句よりは若老ら出しくゅ
春日かゞやく算盤の上
積り高何程とゝふ雪消て
鵯ふし際に來鳴うぐひす
道服のすそより霞む山つゞき
領内ひろくはやり出の醫師
百姓のかくのりものに月をのせて
塩屋の一家花野の遊舞
ウ
夕露は浦邊におゐて隠なし
とふにおよばぬあれは船持
呑酒の其壺許は合點じや
市立さはぐ中の目くばせ
とらへぬる盗人は是妹と背と
美豆野の里に簀垣かく也

〽白雨や扨京ちかき瓦ふき
〽奉加すゝむる山ゝみね〳〵
〽客僧は北陸道に拾二人
きのふも三度發るものゝけ
〽難産を告る使は追〳〵に
葵の上の御産尤ゝ
酌をもとめてよ馬でいそがせ
花の宿に醬油舟は月の暮
長閑にすめる江戸の川口

二

〽殿風に立春風やおさるらん
〽弓はふくろに雲はどちやら
一句の取合不都合にてよく又相叶ゆ
〽天下みな見えすくやうに治りて
眼力奇妙ゆ
〽紙一牧（枚）に名所舊跡
〽扇まつ哥人居ながら拔出し
みださどりける大うちの時宜
〽果報力つよき上戸の差合に
〽耳引手をねぢ分も御座らぬ
〽喧嘩をばかやう〳〵に仕ちらかし
下ゝのありさま見るやうにゆ
〽目安にのするより棒の事
たゝかれたるよしを申上ゆ歟
〽私儀木戸のものにてゆき
〽錢はもどりに慈悲を給はれ
月影も廻り忌日の寺まいり
隨（マヽ）氣のなみだ袖に置露

二ウ

芋の葉風只ふりしやりと別れ様
男にくみのいそぐ叺（畝）みち
〽布を經る所は爰と余所心
〽あれたる駒をつなぐ打杭
晝休みあたりにちかき國境
狩場の御供これまでにこそ
〽かたみわけ三日かけて以前より
〽書置にする五人組判
〽憐にも見とゞけ申鰹ぶし
土佐ぶし上ゝ
うたがひもなき初雁の汁

〽律儀者の下屋敷にて月の會
　脣汁しそこなはぬ亭主歟
〽所もところ和哥も身にしむ
〽咲花は紀路の山のとつとおく
しぶちの椀も霞む辨當
三 春の風古道具みせ音信て
〽一條通り雪はすつきり
〽夏の月入てあとなき鬼のさた
極樂らくにきくほとゝぎす
〽夕涼み草のいほりにふんぞりて
〽頓死をつぐる鐘つきの袖
　笑中風夕涼み過ゅ歟
〽高砂や尾上につゞく親類に
〽かしこはすみのえ狀のとりやり
　かしこはすみのえ耳なれゅへどもいつも面白ゅ
〽相場もの神の告をも待たまへ
　信心殊勝ニゅ
〽七日まんずる夜の入ふね
　よくまんじゅ
〽墓まいり扱茶の子には餅ならん

なみだかた手に提る重箱
とはじとの便うらむる下女
おもひはいろに出かはり時分
三ウ 一はいの付さも霞む小宿にて
〽ぬるめる水ももりませぬ中
入なをす桶の輪竹の永日に
〽久しくなりぬうどん商賣
〽我見ても常住おろすこせうのこ
〽同じ拍子にくさめくつさめ
　拍子事一ニゅ
〽雨だれの落くる風や引ぬらん
　又拍子よくゅ
〽おかはもあらひ戸障子もさせ
〽はひ出もの月さす閨に呼よせて
〽露の情はいやでもをふでも
　申され分無余氣ゅ
〽秋風にあふた時こそ縁ならめ
〽後の彼岸の善智識様
　西こそ秋の門跡様にや

高座には異香薫ずる花散て
彌陀の來迎目前の春
名ヽふつとふく息やうらゝに出ぬらん
並導大師滿悦たる可ゆ
ヽ浪間かき分およぐ海士人
一句新しくゆ
ヽ破損舟實それよりは十三艘
ことばよく直されゆ
ヽ四國九國のうら手形也
米俵あらためらるゝ吉利支丹
ヽ大黑のある銀貳百まひ
お住持の不儀はへちまの皮袋
念比ニ被付句作やすらかにゆ
ヽからかさ一本女郎町の湯屋
ヽ飴を賣人の心もうつり瘡
右同前
ヽ颪はひ出る神前の月
ヽ秋まつり古ふんどしも時を得て
ヽ相撲の芝居ゆるされにけり

ヽ位にも昇る四條の役者共
清和の御位河原者ニ成ゆか乍恐誹諧御免とこそ
引三線は座頭よりなを
ウ
ヽ鯨よる浦づたひしてふなあそび
五分一は先たつ友千鳥
勘定帳幾夜ね覺にとぢぬらし
手代のこらずきくかねの聲
下くだりあかぬ別や惜むらん
ヽ堺のうみのしほよなみだよ
和泉灘花の浪立うき名立
戀風東風ゝ吹とばすふね

愚墨五十六句
長廿三
梅翁判

毎句金言えり分がたく、僻墨おほかる可ゆ。此上兩がへに見せらるべし

伏見の里に日高につき、下り舟待

いさまありければ、西岸寺のもさ
へ尋ねけるに、折ふし淀の人所望
にて、任口
鳴ますかよゝ〳〵とどにほとゝぎす
めづらしき句を聞、我もあいさつ
に此句を言捨、其よもすがら、ひさ
りねられぬまゝに書つゞけ行に、
あかつきのかね八軒屋の庭鳥に、
おどろき侍る

ト輕口にまかせてなけよほとゝぎす　　鶴永
郭公を追付がたくや
＼瓢簞あくる卯の花見酒
ト水心しらなみよする岸に來て
＼こぎ行ふねに下手の大つれ
ト橋がゝり今をはじめの旗ごろも
下手にはあらで句体は齋藤高安に見えゆ
虹立そらの日和一段
＼文月や叒元無事にてらすらん
きんかあたまに盆前の露
＼懸乞も分別盛の秋更て
トこらへ袋に入相のかね
よき商人と見えゆ
＼かひなつく命のうちのしかみがほ
＼前髮はゆめさよの中山
菊川の鍛冶が煙と弟子は成て
仕きせの羽織のこる松風
今朝見ればゞ霜月切の質の札
ト道場に置二十八算
おとりこしの折からお珠數に存ゆ
ト知惠の輪や四條通にぬけぬらん
拂子はうたがひなくゆ
＼竹の菌生の山がらの籠
わこさまは人間のたね月澄て
とりあげばゞもくれて行秋
ト見わたせば花よ紅葉よおたい櫃
まかたひのばゞ見るやうゆ
浦のとまやのさら世態也
＼朝夕に隨緣眞如の波立て
トきけばこそあれ住吉の公事
和田のはら立たる公事者え〳〵

＼駕籠かきや松原さして急ぐらん
＼ト醫者もかなはぬ木曾の御最後
さても〳〵道三半井家ゟ叶がたく覺ゆ
＼はや七日寐覺の床のゆめうつゝ
＼ト勸進すまふありてなければ
ゆめからつゝか有てなければの本哥此句のためによみ置たるかと思れゆ但丸山岸左門ニたづねたくゆ

白紙は外聞ばかりの花野にて
まだくれがたの月に挑灯
約束も時付をして仲人かく
＼一順箱は戀のよび出し
＼物まふは夜分に成てどれからぞ
＼芝居のしくみ明日はつらみせ
看板に僞のなき神無月
＼時雨ふり置うらやさん也
＼ト年の比雲なかくしそ手かけもの
高安の女のおもかげゟうかびゆ
晦日までの末のかねど

＼やどかへやすめば都の町はづれ
＼こしばりにする公家衆の文
＼取賣もその跡とふや小倉山
いかさまほり出し可有ゆ
＼ト十分一ほどさく花すゝき
半金二十枚は此句ニ有之
虫のねも世間各別鳴そめて
うてば身にしむ針は當流
食後にも今宵の月をこゝろがけ
はたごやたちて名どころの山
＼かりころも花見虱やのこるらん
＼ほとけのわかれなげく生類
盤得がぐちのなみだに雪消て
五十二類の中よりみくじに取付ゆ哉
＼こよみえよまず春をしらまし
＼けぶり立夷が千嶋の初やいと
＼あまのあか子も田鶴もなく也
＼ト小便やもしほたれぬる朝ぼらけ
行平卿の抬子にやといたはしくゆ

〽須磨の上野にはゆるつまみな
塩汁にても旅行の砌は賞味たる可ゅ
〽山家までかまぼこ汁に霧晴て
まつりや秋のとまり客人
〽御造作や夕月ながる龍田川
泊なるらんと云る幽成所よく被思召出ゅ
〽からくれなゐのせんたくぞする
のり鍋や衛士の焼火のもえぬらん
禁裏の庭に蝿は一むら
大師講けふ九重を過越て
匂ひけるかな槙木のお達
〽井戸輪の下行水やかするらん
〽焼亡は三里よその夕ぐれ
〽御見廻に尾上のかぜも聲添て
〽脉うちさはぐ松陰のみち
風邪とはやゆびの先ニ見えゅ
〽料理してむれゐる鷺やたゝるらん
〽鬼門にあたるまな板の角
王城の鬼門よりおどろきか鬼一口にたゝる可ゅ

〽ひえの山高さをつもるさしものや
〽はたちばかりの年切ぞをく
〽手形にもたしかに見ゆる力こぶ
〽二王もとほす白川の關
秀平が光栄よりと手形ニ出しゅ哉
〽都をばあうんと共に旅立て
出入息やのむ若たばこ
うかれめも十七八の秋の月
〽初瀬をいのるかほは冷し
〽さばき髪けはい坂より花やりて
風呂屋の軒をかへるかりがね
〽行灯のひかりのどけき天のはら
〽ふりさけ見れば淀のはしぐる
かうぶりの聲も跡なき夕まぐれ
みゝづくさはぐ萩の下露
〽野ゝ色もあかい頭巾やそよぐらん
〽木やりで出す山のはの月
おききやるか〳〵明白なる月ニゅ

〽くらきよりくらきにまよふ日用共
わらんづ脚半六道の辻
〽たつたいま念佛講はおどろきて
そのあかつきに見えぬ錢箱
明星か市立跡のあれ屋敷
〽上下も下戸もばけ物もなし
〽君が代は喧花の沙汰も納りて
〽苺のむすまでぬかぬわきざし
〽うて香や富士の煙の立次第
ならびに料足あしたかの山
〽はなれ駒九十九疋やつゞくらん
〽あとのまつりにわたる神ぬし
素毵も白木綿なれやゆでちらし
茶屋もいそがし見せさし時分
〽花のなみ伏見の里をくだり舟
〽あげ句のはては大坂の春
天滿橋八軒屋なりと吟じあげ句南無天神ばしにひゞきて感應うたがひなくこそ

愚墨六十句

長十九
ほとゝぎすひとつぬ聲の落句なし
さや申べからん。是こそ誹諧の正風とおぼゆるは、ひがこゝろへにやあらん。しらずかし

西翁判

獨吟

くさめな誘ふ夜寒のあらし、何さしてかはしのがんさいひもあへれば、煮豆腐うり是へなそしさ夕なみの、所もさころ松かにな、はぢけば落る血のなみだの、白川よふれにはあらで、淀の河づらしかめて、かくおもひよりぬ

舟夕子 由平

〽鼻のあなや紅くゞる唐がらし
さながら紅も染やうにて新らしくこそ
〽夕日こぼるゝすりこぎの露
飛鳥井殿の夕日もきえ可申ゅ
〽古筆の先より秋の雨はれて

〽飛ゆく鴈をみちの記の末
それの年のその比そこの月の景
貫之が筆の跡めづらしくゆ
聞たやうなる松風の聲
等類はのがれがたしや磯のなみ
〽其外悪魚鰐のかるくち
親世が音曲聞心ちしゅ
ウ
〽火ゝ出見の尊も腹をかゝへられ
神代のかる口めこれにはよもや
〽いま人倫に疝氣もつぱら
つたへをかれたる末世の病にこそ
だい〳〵もうけがたき世に身をうけて
〽吹矢の先にかゝる秋風
〽散露のこまかな所御らんぜよ
よき所ねらはれゆ
〽月をそむいてしはひこゝろね
つきあひも鳴音淋しきむしの聲
〽穢多が軒ふる霜の朝風
〽つなぬきの革を袢やとぢぬらん
扨もよき細工にてゆ

〽下樋の水をはこぶ六尺
山陰に半季先よりすみ衣
〽二月二日に松の木ばしら
〽旅芝居花のさかりにとてもなら
〽まへ髪ごそり少年の春
二
〽親のあと踏ては惜む雪消て
いかほどの知行譲にも器量之仁
〽死一倍をなせ金衣鳥
耳いたき子共衆あるべくゆ
〽呉竹のよこにねる共ねさせまひ
〽ふるき軒端につよきつつぱり
〽亂以後もかはらで住る月更て
〽子をさかさまに老が身の秋
珍重〳〵
ながらへてあられうものか露の間も
〽八重のしほぢを推量せられよ
〽酢醤油もろこしかけて生肴
〽けふぞ我せこはな鰹をかけ
〽戀衣おもひたつ日を吉日に

折から節小袖の用意大悦〳〵

あしにまかせてかのか行末

てゝめにはかくせ嵯峨野ゝかた折戸

はづいて來たぞ千代の古道

二ウ

ふところへつゝと押込松のかぜ

かたみのあふぎこなたはわすれず

行平のゑみがほ思やられ候

君すまば朝鮮國のはてまでも

その鬼しやくはんゆるせかよひぢ

約束でゆけば極樂はるか也

釋迦はやりてと夕暮の空

西方は十万貫目一いきに

廿あまりに成かへり此分限ニて一いき有度候

入くる〳〵おらんだ船が

早飛脚武州をさして時津風

御普代家とてひかる月の夜

鬢つきも出頭はけに秋のいろ

露のしのはらたてふとふせうと

鑓持は花の安宅の關越て

きのふも三人出かはる小もの

三

不埒なる酒のかよひの朝がすみ

念比しられぬ晋の七賢

酒代さしのべらるべし不律義はいかなれ七賢ニ候

法度ぞと孔子のいはく衆道事

遊女のいきは論におよばず

繪草紙と成はつべきの心中に

錢一もんのかねぞのする

わかれより始末を告る烏の聲

又あふ坂とおもふ腎水

道鏡や音に聞えし音羽山

かたりもつくさじ共果報者

身躰も次第にはり上〳〵て

天竺震旦からかさの下

ありがたくも此寺の一本からかさが

大きにもやはらげ來る餡は〳〵

あつかひ口もねぢた月影

三ウ
＼御もたせの手樽ののみの露落て
羽織の下にはるゝ秋霧
＼夕あらし膝ふしだけに吹通り
湯ぶねにけづる杉のむら立
＼めづらしき御幸をまてる大天狗
＼さて京ちかき山ほとゝぎす
＼はせよしの殘らずめぐるむら雨に
ちりさふらふよ花の中宿
＼今朝見れば春風斗の文とば
猶うらめしき寺のわか衆
＼竹篦をくるゝものとはしりこふた
ひねるとこそはかねて聞しか
＼三牧（枚）のかるたの外に月の暮
氣疎秋ののらのより合
名
＼その犬のまたほえかゝる村薄
＼夜ふけて誰じや萩の下道
＼火打箱さがすや露の置所
手きざみたばこ風にみだるゝ

＼むら消る雲にしやくりの聲す也
＼引立見ればひづむ天の戶
＼ぬか釘も時雨もみねによこおれて
磯部の松の針とがり行
＼はれものゝうみすこし有須磨のうら
＼瘤はかたほに見ゆる舟人
柴かりのいはれぬはなし又一つ
＼雪の山路もくちへ出るまゝ
照月の氷も谷へさら〳〵
湯漬も玉をみだす春風
ウ
油斷すな花ちらぬまの早使
頓死をなげく鶯の聲
跡識の公事は霞てみとせまで
＼彼行平のちうな分別
＼無疵ものあけて一尺五六寸
＼命しらずの靡の手ぬぐひ
＼柄杪よりつたふ雫のよの中に
＼あらんかぎりはのめよ酒壺

愚墨六十句
長廿七

傳きく天寶の唐がらし、鼻より入て口より
いづる色あひは、たちうり染のもみ紅梅、
一句〳〵のこまやかなるは、おいまかけし
かのこ、後藤がほりすがたうるはしく、や
すらかなるは、柳に櫻あさぎにうこん、源
左衛門が海道下り、筆でかくさも即點合、
おそれながらもいふべく候

西鶴子判

いもはく〳〵先月をうる夕詠
是は名高き天滿の市より、貴賤の
口にふれ腹にあぢはひ、禁好物の
きらひなき種をもとめて

卜芋堀て見れば月こそ籮にあれ　舟夕子　山平
風味すぐれて月と共に名物なるべし

ヽ鴈は枴と成て行空
ヽ秋風や腰の骨までなぎぬらん
慮外千万野路の夕露

卜旅送り此盃をそれへとは
てにはひとつにて付られたるめづらしくこそ
ヽとかふ申せば馬かさうと云
ヽくだり舟まだ宵ながら是は扨
卜雲のいづこにやどる煮どうふ

ウ

卜胡桝の粉むせんで聲を郭公
たし鳥をころしたるさたは無之物を
ヽ藥研のそこな爰なむら雨
卜錫屋殿わざと呼ふた、と御座らふか
そこなこゝなよくうつされ候
ヽひごろのうらみ根はぬけました
ヽうつり瘡やみぬるうちはとのかうの
ヽいかいやつかいかくるゆの山
卜たんかうにいでそよ今日も五人組
卜員せかたなる入相のかね
毎度はやり事ながら句作にははじめて也
ヽ味噌こし碁又まいらふか峯の坊
ヽおせきもつ共遅き月影
卜はるかなるからかね鍋の酒のかん

上戸衆まちかねられ候はん

＼仲丸髭につけんしら露
＼花のあぶら天平の比ねりそめて
延寶二年竹へらの春
二＼君が代はのどかに造る腰ふさけ
ト袴の山も苺のむすまで
トおとなしやなづともつきぬ若之介
雨句天津乙女もほの字でかゝらんか
＼我くろかみは法躰をせん
＼一かせぎもはや望みもなかりけり
トもとの江戸とはちがふ分別
ト穴藏の沙汰もほつとり納りて
御褒美あるべく候
ト地獄おとしをかくるといなや
トぬれものにたとへいかなる御僧も
ちごくおとし新しく候おとさるゝ人おほかるべく候
そこをはらはん布施のかねご
なき跡に殘しをかれし皮袋

ト三とせがほどのへちま也けり
だんぶくろもかく物にこそ
トふるさとの月もさびすやみがくらん
さびすはしらず付はみがきたて候
にやりと志賀の山越の露
松の色似せ侍はどこやらが
いひたいがいにあらし吹行
ト借錢を仰はさにて候へと
いひのこしたる心底ふかし
＼先書に申入る物きは
ト雪の事手前忘脚（卸）是非もなし
つれ〴〵草の色をまし候
ト見らるゝ躰の杉の下庵
詞ひとつにてさ〴〵しく付られたる奇妙〳〵
ト一宿はやすき義なれどさりながら
又さりながらおとらず候
＼亭主にとはん須磨のうら風
＼鷗とやいや〳〵あれは夕ちどり
見よかぶりふるかれ芦の月
細工人龍師西来意生うつし

〽肱をたちぬる小刀の先
楽道すき數度の高名花盛
誰ゐ感狀を出すべくゆ
〽安堵の誓紙うぐひすの聲
〽秀（衡）平が命のうちに雪消て
あすまたきかん淨るり芝居
くもりくるちりてれてんもはれよかし
〽親仁が留守にしぐる松風
〽こつそりと窓よりくゝ（るカ）かねの音
〽その手をとつてわかれうかいの
〽やわらにも戀のくせものわげられず
〽はつしのきいた君はきよくなや
また明ぬ閨の懸がねいつのまに
言傳せうもの旅の行末
千万里へだつこゝろも不性から
〽たがひにかよふあしもあらはず
よごれあし句におゐては玉より明也
〽月におもふそなたの風を引そへて
いまは芭蕉葉にうん〱と斗

三ウ
〽置露の身は古寺の米をうち
六祖もきねをわたさるべくゆ
〽狸のみこそ与七なるらめ
〽案内もうしり聲もなし跡もなし
〽おくすり一ぷくよはり果ぬる
門からにげられたる有さま見ろやうニゆ
〽むねくるし夜の目もあはぬ相場もの
人參にても療治如何ましてひんろうし不及沙汰にゆ
〽行てはかへりかへり手形に
〽逢坂山なしくづしにやくづすらん
〽かるたのまんをくるよしもがな
おそらくもなんこうならば一こぶし
もつてまいらふさかづきの影
むしの音のりんといふ下女いま爰へ
〽へしたふしてよ戀草の露
すでに手から早わざ相見えゆ
〽花に垣それをいはせて置物か
無理破り所望花の執心不斜
小蝶もともにとんだ作者の

名 ヽ のら猫にはねをはやしてざへづらせ
　換骨羽化したる句躰に候
劫へてをとるまな板のあし
ヽ むぐら生あれたる宿の臺所
ヽ つれなきかゝをよぶとせしまに
　本哥一字をかへて千金也
目かけもの内へいれんとおもひきや
ヽ ときぐかよひたらんこそぐ
ヽ はらますはあたまのくろい鼠すら
ヽ 法師に申せあのいたづらを
ヽ 手習の手ぬるくさふらふ二郎太郎
ヽ そのきつさきで天狗とはよも
　二刀のむさしが中分か
ヽ むなぐらをとられて行しやんま山
　花月があり樣色白なる天狗たる可候
巾着しぶいたみねの松風
ヽ 月に影あたいはこきり申まひ
ヽ ざれ繪をさつと末廣の露
ウ ヽ かる口の方にみせたら荻薄
守武以後の夕ぐれの秋

七十の翁は無事に攝州住
ヽ ゆつくり千代をみつの濱松
居蘇白散まちこひぬらん花の春
ヽ 一類その以下霞にくるり
ヽ はり上て武略さまぐうたひそめ
　觀世が一曲年頭之御祝儀万歳樂に納候
万歳樂は關東までも

惣墨六十一句
長廿九
西 梅花翁

句毎に目をおどろかし、是かかれかさまよひ候而、付墨正躰有まじく候

俳諧の道、卒土の下の土龍、いまだ土氣のさらぬ百韵に、普てんの上を請奉りて、鍬かまでの慈斤のれがふこそ、槿花一日おのづからえいの餘り
ヽ 朝顔の花のあるじやうごころもち　未學
　前書首尾さもある可候

＼蜘も穴に露の一時
和哥の徳によび出さるゝ蜘一時の大悦か
＼釣針とうたがふ三ケの月入て
＼又雲上の風ぞおどろく
繪にかける龍のいきほひさても〳〵
＼虎すむ竹の友づれの聲
千里行道は股よりはじまりて
ウ
塞つもりてや鼻と成らん
＼中天狗みるや〳〵とみねにかけり
杉の木末に鳶がまひまふ
＼大かしら旅立すれば日和にて
古郷の妻がせんたくののり
すり鉢のすりこすらるゝ中はうし
＼猪の牙より猶あらきさめはだ
あだな立波のぬれ衣紋付て
＼染川といふ我はけいせい
句のすがたにも戀ぞめ川ニてゅ
をのづから書つくしてよひぜんかさ
猿とゆふべの露は水かね

＼月のかゞみとぎ立見れば訴人にて
＼御褒美も穂に出る小山田
＼點取の卷の奥成花紅葉
尋ねて來ませ宗鑑が庵
二
油屋のしめ木の音をしるべにて
＼しのびて明る戸やきしむらん
＼ひづんだる君が心の奥ふかし
＼大工のかねにつもる戀やみ
＼命こそ棹なぐるまのもめんぎれ
＼冥途黄泉はくわらぢがけ
此旅支度日たおどろかすありさま也
＼罪科のおもきをかへる駕子の者
閻魔廳までいかほどのかごにか
＼煮うりとなれる鵜つかひのはて
＼大井川田樂串を筏にて
此筏孔子も飛のらるべくゅ
＼奉行ふりにしせつかい一ツ
看板の跡は有けり山おろし
闘路の鳥の錢はもどりじや

ヽやりませうから尻馬に月をのせて
　　ゆや女良ものられべくゆ
うしともおもはぬ土佐坊が秋

二ウ
ヽ山里の小鹿をうつす金屏風
ヽ一むら薄まねくふるまひ
ヽ乞喰やわつはさつはと荻の聲
いせのうみづらよく見しつたぞ
ヽいとゞしく過行かたの久しぶり
七世の孫がもつかたの上
ヽつたはりし瘤や人めをつゝむらん
　　代々の瘤無双の一物ニゆ
ヽ鬼にとられて風呂敷もなし
　　鬼もきもつぶすべし
ヽまとかはあだちが原のばくち事
　　同前
ヽま弓月弓右三ケ條
　　三ケ條の内前句に出されたる珍重く
ヽかりがねや祕鳥と成て渡るらん
　　古今のひ鳥くはゝりゆ
まつ毛の先をはらふ雲霧

ヽつげの小櫛花の火をもてあたゝめて
なだのしほやの紅粉かねの春

三
ヽ女方かすむ一夜の宿をかせ
ヽ爰なひじりは男なりひら
　　車にてにげられたる形[illegible]也
ヽある時はかり衣のすそきり賣に
ヽ峨ゝたる山の狼く
　　遠山狩のえもの新しくゆ
ヽ柴の庵つぶるゝほどの雨もりて
ヽ義朝殿のねぶとさびしき
　　長田舘にてねぶとのさたはじめて承ゆさびしき金言ニゆ
ヽおもひ出る常盤はらをやさするらん
　　さすりたる後いかゞねぶとのいたみたるべくゆ
いはねばこそあれ戀の重荷を
ヽあほうげな心の馬をつながせて
ヽ太郎次郎ゝ手を合せつゝ
ヽ奥州の金佛をほり出し
　　秀平が子共[illegible]心元くゆ
ヽ善のつなにもけふの細布

むねあはぬ法花淨土の法の月
ならざらしもいかでかおよぶべき
信長時代の秋風ぞふく

ニウ

地子ゆるす都の柳かつちりて
明智日向守が善根是一つこゆ
蜘てふむしの家の賣かひ
あれやしきと見えゆ北野西陳たるべし
樽肴詩につくつてや見せぬらん
衣きぬ山の帶のいはひに
白天もにこ〳〵たる可ゆ
昨日かもころびあいしか朝ぼらけ
朝ぼらけ祝義のたゞ中也
なみだの雨にかくる下踏のは
石原や苺の生まで物おもひ
のどへとをらぬ山川の水
一休に風のかけたる小脇ざし
まくらもとには猫も抄子も
月花のながめはえてにほたて貝
いの字のついた圀の東風ゝ

のこる雪いやそれにてもさぶらはず
ぞく〴〵とうき立心ちしゆ
かぶりふるまにうぐひすのなく

名

はりぬきの人形らしき高間山
ふのりたなびくみねの白雲
天乙女まちつと先にけがついて
ぬら〳〵すら〳〵と誕生ぼさつゐ雲によろこびたるべし
あかい羽ごろも扨一かさね
帝釋天より拜領か
ひろふたや梢によする三保の松
富士のけぶりは鍋釜にこそ
からき世はしほじりの樣に所帶して
山桝ばゝと人はいふなり
月づかひのたつみの方やたゝるらん
常ふり坊に引茶ぬるとは
おもひきやかびのはへたる夕まぐれ
かうかつ物に秋をしるらし
親の〳〵とつとの山のあなたの月

〽手がらばなしに蜩の聲
しゞが端か聞が原かいな様千石所あり
ウ
＼むかふ疵とおもへば森の陰なれや
＼痲院の毛をふかせられ
〽これも又いむとていはぬ鳥のしり
此鳥のしり楽道ならば五百石はかならず〳〵
＼鉄かほたるかあまのたく火か
＼捨舟のすはれてのぼる磁石山
＼生死のうみはたゞいまの事
〽やす〳〵とねがひのまゝの花ざかり
浄土不退の花盛愚老が望む所なれば
雪間に見ゆる竹の子は〳〵

愚墨六十二句
長廿六

梅翁判

入しれぬ塊にうづもれたる土龍、はれがはへて飛きつたる作意には、世になりわたる花におごる鷲、よこ飛のかはづも、音ないれらるべくぞおぼゆ。但又老ぼれのひがめにやあらん。世人さだめらるべし

俳諧の小兵者やり句な提、硯にむかひ、上の五文字にまかす

悦春

〽ちいさくて天地まろめし霰哉
禪話を聞心ち仕ゅ
＼紙袋より風寒空
＼あさき椀朝市立る袖見えて
＼お國のふねもあすは出て行
＼かたほ波あしべをさして早飛脚
浦の笘屋の門たゝく音
月を見る疊の上に立ほこり
相龍ものには秋の夕ぐれ
ウ
白玉じや玉じやと露をあらそひて
＼蝸牛の角の先やまひきり
＼砥石にも苔のむすまで遣ひ捨
＼代は万年に鳴瀧の山
砥取山ちかく充ニゅ

廣澤のいける仙人無事なれや
いかにも無事たる可く候但さたは不承候
さそふ水あらば穴へはいらん
食物に彼浮草をところてん
めづらしき穴を尋出られ候
霍亂ならばうかりける旅
初瀬路に殘るあつさをへその下
灸ならずばさめ申まじく候餘熱と見え候
尾上のかねに一寸の秋
されぱこそへそ一寸の灸穴にて候秋の殘なき心尤に候
ちつくりと月影赤き猿の尻
一寸は尾上にゆづられたる奇妙
たのふだ人は狂言のすき
猿の尻是は種彌右門太夫に候歟
大わらひ次手に花もわらひけり
具足の櫃をあけほのゝ春
彼形を取出たる歟
一 三よしのゝ山もかすみて落たまふ
落たまふ大手がらなる句躰に候
判官殿の御返事の文
さては前句は大塔のみやにや
戀はたゞ僧正坊のふところに
むつかしき懷中若故なればこそ
たんほあたゝめ與の杉むら
殊に此谷寒く候尤に候
敷皮に狸は迯ておらばこそ
筆屋尋て行由井が濱
盛久おもしろく取被成候
順禮もはらみ地藏をふしおがみ
佛も本は發句なりけり
いか成發句も不聞候へども經の偈頌の由に候
青〳〵と樒は春の季なるべし
かすむ山坂道五十丁
愛宕といはずしてよく聞え候
駕籠かきも友達かたらひ歸雁
鳥羽田の末は雨がふる〳〵
無になすな今夜の月のいもあらひ
二ウ 後の出かはり過るますらお
相撲取高圓山と名のりけん

高間のむさゝびの介となのりゆか
雲の余所なる布袋大こく
＼安樂を天津乙女に尋ばや
＼須彌の四州は生老病死
天上壽命佛説まことならばうら山しくゆ
ト釋迦如來つれ〴〵草をかんぜられ
世尊も褒美有べき文章ニゆ
嵯峨と吉田のあいのちかさよ
＼淨るりに所〳〵やかたるらん
名所〳〵おぼえたるよ聞えゆ
中に名のたつ中はくせ物
＼待といふ使は來り馬に鞍
ト御朱印あればお手かけも有
ト鎗臺の箱根の關を江戸下
調いよき上手のさし物ニゆ
腹にたゝるや水うみの水
＼盃にさゞなみよする花見酒
さて〳〵藤のながき日ぐらし
三
＼暮春まで悔の八千度郭公
ト石藏山をたゝくよこ槌

トうごきなき代々のむかしのもめんたび
＼艸路の松陰腰かけの上
＼草履取まねきよせつゝ茶道して
草履取の茶道所さも有べき事とたゞいま存ゆ
ト醫者は醫心又あだ心
ト付さしも過るを以毒ならし
百藥に多分見ゆやまりゆ
寢ての朝けの鯨の汁
水莖のおかし堺の浦そだち
＼葛のはなしの末は舳の松
＼莟一再に烁の蟬
一聲おもしろくゆ
＼いづれの哥書の切ぞ身に入
ト忠度の留守の盜人月更て
哥書ならで内方もゆぶたくゆ
ひよんな事ある須磨の浦風
三ウ
ト蝦にもなるやうしろの山のいも
鵜のまねしたる鳥むれるる
はつとひろげ森の木陰の扇の手
＼野ゝ宮人も的矢をぞるる

まくをはる行衛もつゞく峯の雲
葬禮牛にはか風ふく
ヽあるときはちよこ〳〵ばしり練供養
二上山の狐ばけぬる
椎柴の葉がくれ見ゆる馬のふん
箒の先にはらふ薄霧
十徳や夕ア〳〵の月の友
衣の棚の仕事身にしむ
ヽ丸薬の匂ひに花も咲次第
さゆを茶碗に入てきさらぎ
名ヾお歯ぐろの次手おもしろ春の色
おもしろ紅粉の色あひ見るやうニ也
八百八公家誰を忍び路
うきおもひ重きが上の錢の數
奉加帳にも入相のかね
ヾはり出しをならの都にしつらひて
ヾ名所によする三笠からかさ
ヽ茸狩のあるが中にも是見さい
ヽ紅葉のあきの色上戸也

あたら月いかにいびきをかく斗
ヾうちあをのきにむさしのゝ原
しがみつくたか聲をして零鳴て
すけ取手から見え也
ヽ大名風のあとのまよひ子
ヽ鎌倉の谷七郷に札を立
かねも秤もいらぬ世の中
ウ法楽の能見にとてやいそぐらん
衛士のたく火は未明なりけり
大團八瀬の里より捨て
天狗飛行比えの山〳〵
三熱のひよろ〳〵と鳶鳴て
鼠の知恵ははかられもせず
ヽ算用におく〳〵もなき花盛
東西南北日本の春

付墨四十八句
長廿一句

西翁判

ちゞむれば芥子の中にも入、ひろぐ

れば虚空に滿る作意、發句にあらはれけり

獨吟　　　　　重安

薬喰や七日干ざらん料理鍋
此木哥今まで殘り哉珍重〻
霜さき鴨も冬ごもるゆき
狩場には出立こゝろの駒留て
殿の目見えを待て有明
秋風の手分し尋ぬ中屋從
貳百俵と雁に告こす
北前の舟賃ちろり虫の聲
荷をつくらする小田の綿買
御年貢は一村里の九十月
春をえまたで奉公のくち
白身番添番太郎町〳〵に
光る燈心三筋四つ辻
小まものや出見せのめがねめさるべし
長崎よりものぼるまたう人
耳のあか取梶はらではやるらし
やすさに入のある芝居錢
備略の世は皆醉りかぶき子に
かの裏小袖ひきちぎる月
千話くるひぬいておとする太刀の露
座興がましく夕ぎりかほる
物語にも哉源氏頭中將ノ舞歟
花の比はかし銀濟せ懸碁うたん
やらふやるまひ此家ざくら
二
談合は永〳〵の日の緣組に
膝を直する我戀の山
若後家の手代と中もよい所帶
藪の鍋尻やくたいもなし
大船のあかかへ修理をとくせなん
住よし參浪にぬらすな
蛤を磯立ならしにじるとて
腰からげ見る松もはづかし

＼おさあひを一里塚までおい女房
つれ待合やすむ在郷
＼草むらにたふれ死さへ生かへり
＼分散衣類賣しあだし野
＼十露盤の露塵埃拂捨
＼橋の掃除は月の明ぼの
二ウ
＼大寺は淨き流れの水施餓鬼
＼念佛の聲もちる柳陰
身を投る最期たゞしきつれ〴〵に
雨より詩作しつほりとして
＼なが〳〵の旅道の記をおもひ侘
＼ほさぬ袖なし羽織枕に
＼足輕は野にふし山にとまり狩
＼くみしかすみにいのち延はる
＼花の下此春中はかへるまじ
巢立の鳥の聲いつきかん
月の有夜は專に口高く起
杯いろこのむ國はういたり

＼たをやめとおどりかたびら址さらし
三
＼わか氣のいたりいまに直らず
＼喧嘩してたゝかれ疵も晴がまし
＼男はならぬ引込思あん
＼いざよひの月の踏哥は拍子きゝ
女踏哥ときこえゆ
＼百敷もよき機嫌うらゝに
＼揚鞠をけふもかざしの花の陰
かはき砂子も散る袴ずり
＼鳥邊野ゝ煙はたえぬ葬禮場
＼鳶もからすもくさめはせぬか
めづらしくゆ
＼さかりたる蛸賣憎み譏る也
＼はしり痔病の口はさがなき
若衆のみちはすたりし心だて
＼獨ねまくらなげ打にこそ
＼年越の夜におとづるは鬼やらん
＼せんたく衣ぬはゞ戸をさせ
三ウ
＼抑入のあらぬ先より比丘比丘尼

〽人のものをもうばそくうばい
〽御法度を背燈くらがりに
〽博奕うつけかぬいつぬかれつ
親達のいけん突たてしなんとや
〽書置の事とはゞとへかし
〽撰集に入ても祕する哥の道
〽勅勘の身に通路はならず
〽蕨堀山高うして里遠し
池田の市町かすむ竹へら
〽札紙を押る木綿の糸遊に
定宿しるきまくの紋がら
〽水の月巴にめぐる湯口にて
つかふ長刀打直す秋
名
兵法を習ふに露の障もおし
〽臣下を待し諸事の訴
〽寫繪の影に形は添よりて
〽みせぬる扇戀のかなめぞ
雲井よりたゞもり給へ立名さか

〽鶴にのつたる人はまとか
〽馬さへもおそろしければ余所事に
〽扈し軍のあはれ落あし
〽運は天に任て三年山ごもり
〽父のあとしきかねへらばへれ
〽飛彈たくみ細工道具を又もせん
禁裏の御普請おいそぎの比
月夜よし東の君の上落（洛）に
〽露またずしもあらぬ商ひ
ウ
〽新米の出來世の中は窕ぎて
〽秋まつり客したる行水
〽生るをば放つ手毎は腥（ナマグサ）し
〽みやげにかたれしま好む池
〽紀伊國の千里の濱の石の景
〽拾ふ貝がら盆山に見ゆ
〽花入に籠を懸たる床の内
啼ふるまひに來なけ鶯

意樂六十句

長廿六

梅翁判

于時延寶三乙卯歳初夏仲日行旼

村上平樂寺

談林十百韻（だんりんとつぴやくゐん）

上・下

松意

御代ゆたけき餘慶に此道甚さかむにをよび、その風俗まち／＼たり。あすか川の昨日の淵にふかくのぞき入て、けふの瀬をしらず。今日の瀬をあさく踏て、浮洲に首たけはまるもおほし。爰に八九人の侘のひやみ、久堅の天の御下あらがねの槌音絶ぬ鍛冶町と云所へ、時／＼會合して、向後の初心悪にそまらん事を悲み、端ゝ此事をのべて、おほくまよへるをたすくる其中に、此席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申べけれなど、たはぶるゝよりおこりて、皆人談林と云ならはす。この折節難波江より道の名僧梅翁不斗下向し給ふ。是ぞ幸ひ渡に舟と、江戸の海の廣き思ひをなし、談林にこもるやつがれしたしみより、發句を乞えて既(既に)百韻を興行す。次而面白きに入ゝ發句せよ。十百韻などうなづきあひて、六七座にして終にみたし畢。談林へ勤る疎學の曰、此十百韻の事ねがはくば、それがし躰の新發心濟度のために、板行して見せしめたらんやと乞。もとより談林のことぐさ辭(辭こ)べきにあらず。ともかくもとゆるしつかはす。凡市中に多年よし

と思へるふるくさきものと、今又あたらし過て、一句のたゝざる二の悪を見れば、水火の二河たり。中に四寸の白道あり。此白道のあかりをはしらんとのみ立る所談林の法也。見る人爰を専に眼を付らるべし。

梅翁（西山氏）

されは爰に談林の木あり梅の花　梅翁
世俗眠をさますうくひす　雪柴
朝霞たはこの烟よこおれて　在色
駕籠かき過るあとの山風　一鐵
なかむれは供鑓つゝく峰の松　正友
追手にちかきかけはしの月　志（イ本志計）斗
小男鹿や藁人形におそるらん　一朝
五色の紙に萩の下露　松臼
ウ
星合の哥を吟する夕の風　ト尺
頭をかたふけて水銀茶碗　松意
香薷散召上られて御覧せよ　執筆
なふ〳〵旅人三伏の夏　在色
なみ松の聲高ふ（ら）して馬やらふ　雪柴
礒うつ波のさはく舟着　正友
傾城をあらそひかねてまくり切　志斗
泪の淵をくゝるさいの目　一朝
勘當や夢もむすはぬ袖枕　松臼
つよくいさめし分別の月　ト尺
お盃存しの外の露しくれ　松意
ふらるゝうらみ山の端の色　雪柴
一分は男自慢の花さかり　一鐵
小知をすてゝ歸る雁金　志斗
二
欠鞍の春やむかしに墨衣　在色
いて其時の鉢ひらきにそ　松臼
去間衆生濟（度）渡の辻談議　正友
三千世界からかさ一本　松意
ふんぎつて樹下石上をめくら飛　一朝
子ともがまなふ吉野忠信　一鐵
草双紙より〳〵是を窓の雪　ト尺
風腰張をやふる柴垣　在色
ゑ（え）りうすき（イ本うすく）衣かたしくす浪人　雪柴
住持のやつかい小蓮の月　正友
山門の破損に秋やいたるらん　志斗
手代にまかせをけるしら露　一朝
御秡に伊勢の濱荻聲そへて　松臼
上荷をはねる大淀の舟　ト尺

二ウ
生肴五分一わけて歸る波　松意
すてに城下の明ほのゝ風　雪柴
つき鐘に夢を殘して代番　一鐵
あかぬ別に中万日　志斗
移り香の袖もか様に薬抹香　在色
思ひつもりて瘡頭かく　松臼
百とせの姥となりたる道の者　正友
むはらからたちする〻のはたこや　松意
用心は殘る所もゆはす　一朝
風やふきけす有明の月　一鐵
扨こそな枕をまたく虫の聲　卜尺
童子か好む秋なすの皮　在色
花娵を中につかんてかせ所帶　雪柴
りんきいさかひ春風そふく　正友
三
大泪そこらあたりの雪消て　志斗
五十二類や野邊の通ひ路　一朝
とめ山は下葉しけりて分もなし　松臼
爰にあら神千年の松　卜尺

要石なんぼほつてもぬけませぬ　松意
鯰の骨を足にぐつすり　雪柴
はきための瓢簞一つゆひき　一鐵
阹をまけたるうら店の秋　志斗
藪醫者も少工夫のさち(ぢ)の月　在色
諸方のはしめ冷ておとろく　松臼
其形こりかたまりて今朝の露　正友
灰かきのけて見たるあたし野　松意
穴藏の行衛いかにと忘水　一朝
宿かへをせし東路の果　一鐵
三ウ
借錢は人のこゝろの敵となり　卜尺
桓武天皇九代の呑ぬけ　在色
道外舞塩辛壺とはやされたり　雪柴
戸棚をゆらりと飛猫の聲　正友
戀せしは右衛門といひし見世守ッ　志斗
お町におゐて(イ本さニ誤ル)皆きせるやき　一朝
起請文既に宿老筆取にて　松臼
今度の訴訟(イ本謡ニ誤ル)白洲をまくら　卜尺

網引場月の出はには西にあり　松意
木佛汚す蠣からの露　雪柴
秋風をいたむ小寺の片庇　一鐵
新發心寒く成まさるらん　志斗
久堅の天狗のわるさ花の雪　在色
先谷ちかき百千鳥なく　松臼

名

音羽山かすみを分て禮返し(イ本禮拜)　正友
闕のこなたにばさ〱あふき　松意
俄そりかゝる藁屋を命にて　一朝
あはれ今年の內に病功　一鐵
青表紙かさなる山を枕もと　卜尺
一ッふしかたる松の夜あらし　在色
色をふくむ二三の糸の片時雨　雪柴
君か格子によるとなく鹿　正友
文使山本さして野邊の秋　志斗
衆道のおこり嵯峨の月影　一朝
追腹やその古塚の女郎花　松臼
千石の家たてりとおもへは　卜尺
儉約を守(守る)といつは手鼻にて　一鐵
水風呂よりも寧洗足　松意

名ウ

旅衣幾日かさねて氣むつかし　志斗
その澤のほとりあと付枕　松臼
切どりはにけて野中の朝朗　一朝
代官殿へひゞく(響)松風　雪柴
つき臼を民のかまど(竈)に立ならへ　在色
難波の京に大力あり　一鐵
連俳や何を問ても花衣　松意
一座の崇敬万年の春　正友

梅翁一句　正友十一句　卜尺十句
雪柴十一句　志斗十一句　松意十一句
在色十一句　一朝十一句　執筆一句
一鐵十一句　松臼十一句

青からし目をおとろかす有様也　出來氏 松臼
磯うつなみのその鮒鱠　卜尺

客帆の臺所ふねかすみ來て　一鐵
小つかひのかねひゝく夕暮　一朝
巾着の尾上に出し月の影　正友
瑚珀のむかし松の下露　松意
きのふこそ稲葉と見しか塵と變し　雪柴
ねこだをくみしあとの秋風　在色
火影立へついの外に飛螢　志斗
てんか(が)く〳〵宇治の川舟　執筆
日傭取ともに印をなひかせて　卜尺
材木出す山おろしふく　松臼
こもりくの泊瀬の寺の奉加帳　一朝
檜原を分し僧にて候　一鐵
淡雪の夕さひしき宿からふ　松意
駒牽とめてたゝく柴門　正友
されはこそ琴かきならす遊ひ者　在色
膝をまくらに付さし三盃　雪柴
腕を引漸こゝろを取直し　松臼
口話のゝちに見る笑ひ負　志斗
さく花の床入いそく暮の月　正友
中腰かけにかすむどらの音　卜尺

二

山寺の乗物下馬に雪消て　雪柴
禪尼の分る苔の細道　一朝
ぬり笠に松のあらしやめくるらん　一鐵
手拍子ならす庭の夕暮　松意
たうづきも月にはみたるゝ心あり(有)　志斗
五人張よりわたる鴈また　在色
わたつ海みさごかあくる素波の露　卜尺
須佐の入舟さす棹の哥　松臼
汐風に袖ひるかへす伽やらふ　一朝
烟はそらにすい付たはこ　正友
朝ほらけへだての雲にさらは〳〵　松意
よしのゝ里のするのはたごや　雪柴
水風呂に瀧の流をせき入て　松臼
ちろりの酒に老をやしなふ　一鐵

二ウ

腰もとは隱居の夢をおとろかし　在色
かはす手枕珠數御免あれ　志斗

思ひの色赤地のにしき(錦)袈裟衣　正友
あつはれ和尚兒性すき也　卜尺
万石を茶の具にかへて身しりぞき(退)　雪柴
遠島をたのしむ雪のあけぼの　一朝
そなれ松七言四句や吟すらん　一鐵
藏主の名殘見する古塚　松意
すみ染の夕の月に化狐　志斗
深草の露ちる馬の骨　松臼
秋は金たのめしすゑの秤さほ　卜尺
水冷にくむくすり鍋　在色
湯の山や花の下枝のかけ作ッ　一朝
宗祇その外うくひすの聲　正友
三 手鑑に文字をのこして歸鴈　松意
刀わきさし朧夜の月　雪柴
難波潟質屋の見せの暮過て　松臼
出格子の前海わたる舟　一鐵
あた波のなかれの女小うなづき　在色
すゝりなきには袖のぬれもの　志斗

敷たえの(イ本こんニ誤ル)ふとんの上の戀の道　正友
あはて(こ)うかりし文枕して　卜尺
むは玉の夢は在所の傳となり　雪柴
道心堅固あゝ南無阿彌陀　一朝
齋米やあるかなきかの草の庵　一鐵
筧のしつくにこる水棚　松意
細たふら峯の浮雲引はへたり　志斗
山陰にして馬のすそする　松臼
三ウ 明日はかまくら入と聞えけり　卜尺
うきかきりそと夫すて行　在色
所帯くつし契を余所に身を賣て　一朝
大くべのはてむねの火とこそ　正友
扨も此野邊の土とは仕なしたり　松意
城山すかれてそよく栗稗　一鐵
わたり來る小鳥たかへぬ時の聲　松臼
月落すてにおひ出しの鐘　雪柴
置錢や仙と〳〵の露なみた　在色
おもひをつみてゆく舟問屋　志斗

涌手形此もの壹人前髪あり　正友
詮議におよふしら波の音　卜尺
山類の言葉をかりて花の瀧　一鐵
いかに老翁かすむ岩橋　一朝
名 有難や社頭のと(上)ひらあ(明)けの春　雪柴
鏡のおもてしろ〳〵と見る　松意
口中に若衆のいきやみがくらん　志斗
兼保(康)のたれおもひみたるゝ　松臼
しのひ路はつらき余所目の關の住　卜尺
首たけはまる中の藤川　在色
から尻の駒うちなつみけし飛て　一朝
とある朽木をこすはや使　正友
すり火打きせる袋にからめかし　松意
こまもの店にわたる夕風　一鐵
寺町の鐘に命のおもはれて　松臼
かつしきのわかれ又いつの世か　雪柴
身か袖に出舟(イ本うか)うらまん今日の月　在色
悋氣いさかひ濱荻の聲　志斗

名ウ あたら夜の床をひやしてうき(憂)思ひ　正友
此子のなやみうばかいたつら　卜尺
青き物又ある時はつまみ喰　一鐵
盆に何〳〵むすひ昆布あり　一朝
岩代の野邊に宗匠座をし(下)めて　雪柴
たのむうき世の夢の追善　在色
一通義理をたてたる花軍　志斗
その七本のすゑの鑓梅　松意

松臼十一句　正友十一句　志斗十一句
卜尺十一句　松意十一句　執筆一句
一鐵十一句　雪柴十一句
一朝十一句　在色十一句

いさ折て人中見せん山櫻　雪柴
懷そたちの谷のさわらひ　正友
鼻紙の白雪殘る方もなし　松意
揚枝の先に風わたる也　卜尺

朝ほらけ氷をたゝく手水鉢　松臼
なくる一錢霜に寒ゆく　在色
今日の月宿かる橋にあめ博奕　志斗
馬士篭かき秋の雲介　一鐵
ウ
御上使や勢ひ猛にわたる鴈　一朝
草木黄みすてに落城　執筆
獄門の眼にそゝく露時雨　正友
にせ金ふきし跡のうき雲　雪柴
看板に風もうそふく虎つかひ　卜尺
十郎なまめき（原本缺字イ本亦同じ）　松意
擧屋入たかひにふいやと引力に　在色
成ほとおもき戀のもと綱　松臼
上り舟やさすか難所の泪川　一鐵
さかまく水に死骸たつぬる　志斗
すつほんは波間かき分失にけり　雪柴
（辛）からさけうとき蓼の葉の露　一朝
樂や月花同し糙粃瓶　松臼
世間をよそに春の山風　正友

二
抹香の煙をぬすめ薄霞　松意
卒塔婆の文字に歸る雁金　卜尺
破損舟名こそおしけれ薩摩潟　志斗
かくなり果て肩に棒の津　在色
玉章に腸を斷なま肴　一朝
あゝ蔦ならは君かかたにそ　一鐵
すて詞こはよせしとの繩はりか　正友
おもひは色に出し葉たはこ　雪柴
若後家や油ひかすの髮の露　卜尺
おりやうのしめしすむ胸の月　松臼
鹿の角（ど）きのふは今日のひ（び）んさゝら　在色
をとりはありや〳〵山のおく（恩）にも　松意
今そ引宮木にみねの松丸太　一鐵
禰宜も算槃三一六二ノ（イ本六三）　志斗
二ウ
注連にきるあまりを以帳にとち（閉）　雪柴
かさりの竹をうくひすの聲　一朝
袴腰山もかすみて門の前　松臼
八丁鉦もさへ（え）かへるそら　正友

莚なら一枚敷ほ(程)と雪消て　松意
飼付による雉子鳴也　卜尺
山城の岩田の小野の地侍　志斗
そうがう額尾花波よる　在色
夕間暮なく虫藥虫くす(藥)り　一朝
あれ有明のゝさまを見よ　一鐵
山颪の風うちまねくぬり團　正友
麓のまつりねるせうき(ぎ)持チ　雪柴
神木の餘花は袂に色をかし　卜尺
垢離かく水の影をにごすな　松臼
三
うこきなき岩井に立る賣僧坊　在色
無邊なりけり山のむら雲　松意
一流の寸鐺の先や時雨るらん　一鐵
分捕高名冬陣にこそ　志斗
燒あとに殘る松さへさひしくて　雪柴
三昧原に夕あらしふく　一朝
千日をむすふ庵の露ふかし　松臼
邪見の心に月はいたらし　正友

長き夜も口說其間に明はなれ　松意
なみたの末は目やにとも(もカ)なる　卜尺
記念とはおもはぬ物をふくさもの　志斗
あらためさるは父の印判　在色
借金や長柄の橋もつくる也　一朝
しまつらしきを何にたとへん　一鐵
三ウ
初瓜は飯かい取てわたくしなし　正友
家子が中言うらみなるへし　雪柴
返事神ぞ〱とかく斗　卜尺
あはれふかまを待し傍　松臼
友たちのかはらてつもる物語　在色
十万億の後世のみちすち　松意
珠數袋こしをさる事すへからす　一鐵
隱居の齡ひ山の端の雲　志斗
御病者は三室の奥の下屋敷　雪柴
たゝ好色にめつる月影　一朝
虫の聲かるゝも同しぬめりふし　松臼
釜中になきし黑豆の露　正友

あをによし奈良茶に花の香をとめて　松意
一座の執筆鳥のさへ(え)づり　卜尺
名 遠近の春風まねく勢揃　志斗
山もかすみてたつ番かはり　在色
大伽欄(藍)雲に隔たる朝朗　一朝
つとめの鐘に佛法僧なく　一鐵
煩悩の夢はやふれし古衾　正友
小部屋の別れおしむ妻藏　雪柴
玉ふ(ぶ)ちの笠につらぬく泪しれ　卜尺
かたしけなさの戀につらるゝ　松臼
かはらしと君か詞のやき鼠　在色
鶉ころものしきせ何そも　松意
見世守り床の山風夜寒にて　一鐵
秤のさらにあふみ路の月　志斗
合藥や松原さして匂ふらん　雪柴
眞砂長して石火矢の音　一朝
名ウ 敵味方海山一度にどつさくさ　松臼
淨瑠璃芝居須磨の浦風　正友

巾着や三とせは爰にすりからし　松意
傾城あがり新まくらする　在色
伊達衣今は小夜き(ぎ)の袖はへ(え)て　志斗
旅のり物に眠る老らく　卜尺
道の記やちりかいくもる四方の花　一朝
あふのく山の春雨のそら　一鐵

雪柴十一句　松臼十一句　一朝十一句
正友十一句　在色十一句　執筆一句
松意十一句　志斗十一句
卜尺十一句　一鐵十一句

郭公來べき宵也頭痛持　野口氏 在色
高まくらにて夏山の月　松意
涼風や一句のよせい吟すらん　正友
旅乘物のゆくすゑの空　松臼
うき雲や烟をかつくたはこ盆　志斗
時雨をませて亭に手たゝく　雪柴

欄干もあらしにうごく大笑　一鐵
酒醉をくるあと(跡)のしら波　一朝
蜑人の喉やかはきてぬれ衣　卜尺
かの海底の玉のあせかく　執筆
さら〳〵ともみにもふてそ一いのり　松意
くだけて思ふ散錢なげさい　在色
まつ宵の更行かるた大明神　松臼
泪疊の塵にましはる　正友
腹切はあしたの露と消にけり　雪柴
軍散して野邊のうら枯　志斗
虫の髭人もかくこそ有へけれ　一朝
目かねにうつる夕月の影　一鐵
唐船は遠の嶋山乘すてゝ　在色
何万斤のいとによる波　卜尺
見あくれはあゝ(イ本千斤ニ誤ル)千片たり花の瀧　志斗
孤雲の外に鳥はさえつる　松意
二
打かすむ山ふかうして谷の庵　正友
わらひよち(ぢ)折る苔の衣手　松臼
これも又王土をめくる鉢ひらき　一鐵
慈悲はこゝろの鬼をほろほす　雪柴
わつさりと一たひ唱せなふ女郎　卜尺
うき名は何のそれからそれ迄　一朝
御仕置やゝふれかふれの衆道事　松意
家老をはしめすてに付さし　在色
城の内あすをかきりの八九人　松臼
しまひ普請のから堀の月　志斗
金山の秋をしらせ(す)る鴈鳴て　雪柴
訴訟のとは菊の花咲　正友
我宿の紐中名ぬし罷出　一朝
賣渡し申軒の下風　一鐵
二ウ
一此(ざ)さうりわらんち雨過て　在色
死骸をおくる山ほとゝぎす　卜尺
奥の院花たちはなや匂ふらん　志斗
むかしは誰かたてし常灯　松意
舟入も廣きめくみの守護代ッ　正友
四面にさうかの哥うたつ(ふ)てくる　松臼

錢さしに泪つらぬく夜の空　一鐵
念佛講も欠てゆく月　雪柴
相店の人の世中すゑ(末)の露　卜尺
分散何〱なく虫の聲　一朝
舟板のわれからくゝるあかの道　松意
あらかねの土うかつ穴藏　在色
久堅の天日花生瀬戸物屋　松臼
口利はいかゝ見る庭の梅　志斗
三
出替りや大宮人の御座直し　雪柴
けはひけすりてけふもくらしつ　正友
俤やきり狂言におしむらん　一朝
半疊敷ても命さまならら　一鐵
護摩の壇思ひの烟よこをれて　在色
しゝつと笑ひさる狐つき　卜尺
終や舟はたをたゝいて取上たり　志斗
源平たかひにたうからし味噌　松意
さもしやなかた〱は皆やつこ風　正友
金にはめて(で)し戀はいきこみ　松臼

勞瘵(癆)の聲にひかれて樽をいたき　一鐵
内二階より伽羅の追風　雪柴
とさやく唐人宿の月を見て　卜尺
長き夜食のにはとりそなく　一朝
三ウ
下冷や衣かたしく骨うつき　松意
打たをされし道芝の露　在色
追からし昨日はむかし馬捨場　松臼
志賀のみやこにたかる青蠅　志斗
から崎の松かね枕葺ね坊　雪柴
朽たる木をもえる丸太舟　正友
石臺や水縁にしてあきらか也　一朝
二十五間の物ほしの月　一鐵
秋の空面にむかへば角屋敷　在色
兩替見世のすゑの雲霧　卜尺
袋もと峯立ならす鹿の皮　志斗
山の奥より風の三郎　松意
神鳴の太皷の音に花散て　正友
罪業ふかき野邊のうくひす　雪柴

名

雪汁のながれの女と成にけり　一鐵

柚に筏のさはくそらなき注　松臼

毒かひやむなしき跡の事とはん　卜尺

うはの(野)か原にあはれ里人　一朝

これやこの(此)鷹場の役に幾十度　松意

黒羽織きてたなゝし小舟　在色

津國の難波堀江のはやり醫者　雪柴

玄關かまへみゆるあしぶき　志斗

さひ鑓や門田を守る氣色なり(也)　松臼

一犬ほゆる佐野の夕月　正友

こもかぶり露打はらふかけもなし　一朝

疵に色なる草まくらして　一鐵

追剝や此辻堂のにし東　在色

弓手に高札め手に落書　卜尺

名ウ

下馬先に御かご童僕みち〳〵たり　志斗

遠所の社花の最中　松意

ゆふしてやあらしも白し米櫻　正友

雀は巢をそかけ奉る　雪柴

やぶれては紙くすとなる(成)哥枕　一鐵

ねり土にさへ傳受ありとや　松臼

見ひらくやさとりの眼大佛　卜尺

三千世界芝の海づら(づ)　一朝

在色十一句　志斗十一句　卜尺十一句

松意十一句　雪柴十一句　執筆一句

正友十一句　一鐵十一句

松臼十一句　一朝十一句

くつろぐや凡天下の下涼み　小澤氏 卜尺

民のかまとはあふき一本　松臼

はやりふし感せぬ者やなかるらん　一朝

乘かけつゝくあけほのゝ空　在色

遠山の雲や畑のきせる筒　雪柴

柚かうちわる峰の松風　一鐵

岩かねやかたふく月に手木枕　志斗

そこなる清水橋寺の露　松意

ウ
芋籠の下くゝり行さゝら浪　正友
平鍋ひとつ志賀のから崎　執筆
火かふるや大宮人の臺所　松臼
神鳴とんとみまくほしさよ　卜尺
何と〳〵法性坊の腰の骨　在色
比叡の山よりやいとの烟　一朝
吹をろす杉の嵐の抹香(イ本味噌ニ誤ル)くさい　一鐵
雜水腹にきくほとゝきす　雪柴
村雨の客さためなきつかへもち　松意
こはひ夢見し露の世の中　志斗
たまいたる女の念力月ふけ(更)て　卜尺
擧錢のかねうこく秋風　正友
口舌には花も紅葉もなかりけり　一朝
のきさりの身は谷の埋木　松臼

二
すこ〳〵とかたけて過るつゝら折　雪柴
やけ出されたるあとのうき(浮)雲　在色
落城や朝あらしとそなり(成)にける　志斗
はや馬はい〳〵松の下道　一鐵

此浦に今とり〳〵の生肴　正友
酢樽にさはく沖津しら(白)波　松意
半切や入日をあらふそめ(染)物屋　松臼
上京下京しくれふり行　卜尺
ひかれ者木の葉衣を高手小手　在色
神農のすゑ似せくすりうり　一朝
なて(で)付の額を見ればこぶ二つ　一鐵
鬼か鳴よりやはら一流　雪柴
辻喧嘩度ゝに鎮西八郎兵衛　松意
公儀の御たつね二千里の月　志斗

二ウ
廻狀に初雁金のあととめて　卜尺
明後夕かた雲霧のそら　正友
引入は山の腰もとかつてんか　一朝
泪の瀧の水くらはせう　松臼
待ふせやおもひの淵へ後から　雪柴
いかに前髮比興さばくな　在色
御恩賞今つゝまりて九寸五分　志斗
隱居このかた十德の袖　一鐵

貝からの内をたのしむ名膏あり　正友
蒔繪に見ゆる棚先の月　松意
町人の香をなくく虫の聲　松臼
庄屋九代のすへ(末)の露霜　卜尺
花の木や抑これはさかい杭　在色
國まはりする春の山風　一朝
三 鶯や小首をひねる哥まくら　一鐵
かうしてどうして雪のむら消　雪柴
むかふからうつてかゝらは飛火野に　松意
羽買の山の天狗そこのけ　志斗
八重の雲見通すやうな占算　卜尺
乙女か縁組しはしとゝめん　正友
色好みしかも漁父にて大上戸　在色
よたれをなかすなみた幾度　松臼
肉食に牛も命やおしからん　一朝
はるかあつちの人の世中　一鐵
祖父と姥同し臺の念佛講　雪柴
つらぬく錢の高砂の松　松意

秋の月外山を出て官一つ　志斗
狐飛こすあとの夕露　卜尺
三ウ かうはしう爰に何やら野への色　正友
柴の折戸にすりこぎ(木)の音　在色
去聞ひとり坊主の朝ほらけ　松臼
いや〳〵舟にはあと(跡)のしら波　一朝
革袋たしか桑名の泊まて　一鐵
古かねを買ふなみ松の聲　雪柴
燒亡は片山里にきのふの雲　松意
糊にくみこむ瀧の水上　志斗
そけ者はやせ馬引て歸る也　卜尺
談合やふる佐野の秋風　正友
ぬすまれぬかねこそひゝけ月の下　在色
目さとく見えてうつから衣　松臼
花は根に夫はいまた旅の空　雪柴
思ひは石のつはくらのこゑ(聲)　一鐵
名 春雨やなみた等分手水鉢　一朝
一儀何とそ神ならは神　松意

敵めを御閣にまかせてくれう物　志斗
かけたてまつる四尺八寸　卜尺
看板はいつれ眼のつけところ　正友
川の事ともおこたるへからず　在色
置頭巾分別くさくまかり出　松臼
しもく杖にて馬場乘を見る　雪柴
朝またきうら門ひらく下屋敷　一鐵
露と命はいつれ繩付　一朝
觀音の首より先に月おちて（落）　松意
奉加すゝむる荻の上風　志斗
衣手か耳にはさみし筆津虫　卜尺
名所舊跡とをさかりゆく　正友
ウ
帆柱や八合もつてはしり舟　在色
すばる滿時沖の汐さい　松臼
久堅の天地同根網の魚　雪柴
七歩のうちにたつ鷁雲　一鐵
棒手ふりそのまゝそこに卒中風　一朝
家主所謂大法四あり　松意
一町の公事あひ半花散て　志斗
證據正しきうくひすの聲　正友

卜尺十一句　雪柴十一句　正友十一句
松臼十一句　一鐵十一句　執筆一句
一朝十一句　志斗十一句
在色十一句　松意十一句

髮ゆひや鷄啼て櫛の露　豐島氏一朝（イ本豐役一朝）
口すゝきする手盤の月　志斗
秋の夜の千夜を一夜の大酒に　卜尺
詞のこりて意趣となりけん　雪柴
馬士は二疋があひにたうと落　在色
そこのきたまへみたけ錢あり　松臼
追出しの芝ゐ（居）過行夕嵐　正友
茶辨當よりうき雲の空　松意
六
小坊主の袖なし羽織旅衣　一鐵
川御座下すあとのしら波　執筆

夕涼み淀のわたりの藏屋敷　志斗
いて來し手かけと月を見る也　一朝
大分のかねとの末鴈の聲　雪柴
勘當帳に四方の秋風　卜尺
町中を以礎の小袖こひ　松臼
十市の里の愚僧也けり　在色
眼玉碁槃(盤)にさらして年久し　松意
どつとお聲をたのむ蜘舞　正友
旦那方まさるめてたき猿廻し　一朝
常風呂立て湯女いとまなし　一鐵
伽羅の香に心ときめく花衣　在色
出合の余情春の夜の夢　志斗

二

打果す野邊はあしたの雪消て　卜尺
御公儀沙汰のうくひすの聲　雪柴
谷の戸に拜借米やわたるらん　正友
二度家をうつす金山　松臼
傾城は錦を斷て戀ころも　一鐵
然は古哥を今ぬめりふし　松意
鬼神もころりとさせん付さしに　志斗
あるひは巖をまくら問答　一朝
山道や末口ものゝ手木つかひ　雪柴
たはこのけふり峯のしら雲　在色
籠鳥の羽虫をはらふ松の風　正友
月は軒端にのこる朝起　卜尺
露霜の共色こほす豆腐箱　松臼
小鹿の角のさいの重六　一鐵

二ウ

汐ふきし鯨油火かき立て　松意
浦の笘屋にすむ番太郎　志斗
辻喧嘩佗とこたへてまかり出　一朝
博奕の法たゝすへら也　雪柴
見臺に子曰くりかへし　在色
裏座敷なる窓の月影　正友
かこひ者心やすます秋の暮　卜尺
親ぢさくれはうき袖の露　松臼
かの町へかよひ路の橋取はなし　一鐵
ばつと川波苔に名の立　松意

かゝり燒一寸先や胸の月　志斗
さらされ者にうしろゆひ(指)さす　一朝
かたわな(成)る捨子の命花散て　雪柴
首の木札に東風かせそふく　在色
三
組討の手柄を見せて歸る鴈　正友
春の海邊にはか道心　卜尺
念佛は破る舟板の名殘にて　松臼
法水たゝゆる波のしからみ　一鐵
叡山の嵐を分る夕月夜　松意
兒の心中色かへぬ杉　志斗
しらせはや破篭のかい敷露泪　一朝
硯懷帋は手向也けり　雪柴
御前のぬさ取あけてふし拜み　在色
既にあからせたまふ神詫　正友
武士のかうへをてらす星甲　卜尺
霞たは(ぼ)しる菊水の幕　松臼
風寒て吹上にかゝる屋形舟　一鐵
小哥三味線田鶴鳴わたる　松意

三ウ
妹にこひ松原越て一をとり　志斗
ほゝへさし込文月の影　一朝
後朝の露をなてたる鬢鏡　雪柴
擧屋の手水かけまくもおし　在色
心さし起請の面にたつた今　正友
五人の子とも田地あらそひ　卜尺
草分の名主も終は老にほれて　松臼
御傳馬役に駑馬をさす也　一鐵
旗の文かく行とかゝれたり　松意
木の下か(陰)けにおくるゑきれい　志斗
山伏や清水を垢離にむすふらん　一朝
そこなる岩を火打つけ竹　雪柴
さかむかへ關をへたてゝ花莚　卜尺
家中の面〳〵雲霞のとし　正友
名
軍ふれ忽きほふ春の風　在色
天狗といつは鳥のさへ(え)つり　一朝
朝戸明て看板てらす日の鳥　一鐵
膏藥かさる森の下町　松意

飛神や爰に時雨の雲晴て　正友
謹上再拝あり明の月　松臼
見わたせは山河草木紅也　雪柴
坐にあひすあき樽の露　卜尺
紙くすに泪ましりの文一つ　一朝
思ひにやけてはたく石灰　在色
あはてのみ女郎は鰹の棚さらし　松臼
人音まれに鎌倉海道　一鐵
草庵はちかきうしろの山の内　松意
岩井の水にかしく齋米　志斗

名ウ

すりこ(木)きの松のひゝきに是如我聞　卜尺
たゝけはさとるせんだく衣　雪柴
おもはくか故人なからん旅の空　在色
一盃つくすひとりねの床　松意
欝佗ておもきまくらの薬鍋　一鐵
うき中言の返事をうらむ　松臼
咲花のあるしをとへは又留主じや　志斗
すましかねたる金衣鳥なく　正友

一朝十一句　在色十一句　一鐵十一句
志斗十一句　松臼十一句　執筆一句
卜尺十一句　正友十一句
雪柴十一句　松意十一句

峰高し上ゝめとをり松の月　山村氏 志斗
揚て無類な岩の下露　一鐵
礒清水喉に秋もやくゝるらん　松臼
葛の粉ちらす濱荻のころ　正友
海士の子かせんたく衣は(張)り立て　雪柴
旅の幸便さためかねつる　一朝
取あへす一筆令啓(イ本ニ啓上)達ぃ　卜尺
出來合料理御こゝろやす(やさ)く　在色
居つゝけに是非と挙屋の内二階　松意
誓紙その外中事あり　執筆
足利の何左衛門か役かはり　一鐵
御藏にこれほと殘ルそめ絹　志斗

入札は他の國より通ひ來て　正友
一座をもれて伽羅の香そする　松臼
酒盛はともあれ野郎の袖枕　一朝
思ひみたるゝその薩摩ぶし　雪柴
立わかれ沖の小島の屋形舟　在色
花火の行衛波のよるみゆ　卜尺
いさや子ら試樂を照す秋の月　志斗
神慮にかなふ鈴虫の聲　松意
金ひろふ鳴海の野邊のぬけ參　松臼
草のまくらに今朝のむた夢　一鐵
二　ばか〱と一樹の陰の出合宿　雪柴
他生の緣の博奕うちとも　正友
公儀沙汰かりそめながら是とても　卜尺
覺書見て行使番　一朝
門外にかし馬引よせゆらりと乘　松意
まはれは三里朝熊の山　在色
曇なき鏡の宮の境杭　一鐵
訴狀をかつくむくつけ男　志斗

御白洲へ御息所やめされけん　正友
題は今宵の月にまつ戀　松臼
なく泪持と定むへし雁の聲　一朝
胸よりおこす霧雲のそら　雪柴
大龍やひさけの水をあけ(げ)つらん　在色
文學(覺カ)この時うがひせらるゝ　卜尺
二ウ　二日醉高雄の山の朝ほらけ　志斗
別にやせてときすとそなく　松意
思ひの火四花患門にされはこそ　一鐵
終にかへほす人間の水　正友
世の中はごみに交る雜喉なれや　松臼
宮もわら屋もたてる味噌汁　一朝
子取ばゝとり上見れは盲目也　雪柴
右や左に隱蜜(密カ)の事　在色
くときよる中は十六斗にて　卜尺
むずとくみふせ頬すりをする　志斗
色好みあつはれそなたは日本一　松意
螢をあつめ千話文をかく　一鐵

月はまだお町の涼み花莚　正友
名主を愛にまねく爪（瓜）鉢　松臼
三 府中より武蔵野分て籠見廻　一朝
むかひの岡の公事の頭取ッ　雪柴
伐たふす松のいはれをなが〳〵と　在色
尉と姥とが臼のきね哥　卜尺
むかしさつと隣の郷の名を立て　志斗
なすび畠の味な事見た　松意
夕皃をしかとにぎれは五六寸　一鐵
うすばの疵に肝がつふるゝ　正友
常ゝか億相也けり納所坊　松臼
若衆のふくれもつとも至極　一朝
付さしの酒にのまれて是は扨　雪柴
巾着ふるふ後朝の鐘　在色
女房に見付られたる月の影　卜尺
はらはんとせしもとゆひの露　志斗
ウ そちがい（イおいための二談ル）さめいかにも聞えた虫の聲　松意
野邊のうら枯後世をおとろく　一鐵

見わたせは千日寺の松の風　正友
常香のけふりみねのうき雲　松臼
人中をはなれきつたる隠居住　一朝
岩井の流茶釜をあらふ　雪柴
二三枚木の下たよる苔莚　在色
眠をさます蝉のせつきやう　卜尺
夕立のあとや涼しき與七郎　志斗
簓木の先のみしか夜の月　松意
出来星は雲のいつこにきえつらん　一鐵
空さためなき年代記也　正友
風わたるからくり芝る花ちり（散）て　松臼
所望か〳〵うくひすの聲　一朝
名 手本紙おそらく殘ンの雪の色　雪柴
かつそうあたま春風そふく　在色
青柳の糸もてまはる鎌つかひ　卜尺
葛城山の草をたはぬる　志斗
岩橋の夜のちきりに蚊をいふし　松意
枕に汗のかゝる美目わる　一鐵

戀風や敗毒散にさめつらん　正友
なみたは袖に一はい半分　松臼
夕まくれ貧女がともす油皿　一朝
夜なへに籠をつくる裏店　雪柴
雪隠のあたりにすたく蛬　在色
りつはに見ゆる萩垣の露　卜尺
はき掃除尻からけして今朝の月　志斗
住持の數寄の山ほとゝきす　松意
ウ
橋の喜内と申小性衆　一鐵
きのふはたれか軒の宿札　正友
洪水の流てはやき(早)大井川　松臼
嵯峨丸太にて丸にたふるゝ　一朝
ぬかり道足にまかせて行ほとに　雪柴
作麼生(ソモサン)かこれ疊の古床　在色
山寺を仕まふ大八花車　卜尺
鴬口歸る春の夕暮　松意

志斗十一句　雪柴十一句　松意十一句
一鐵十一句　一朝十一句　執筆一句
松臼十一句　卜尺十一句
正友十一句　在色十一句

夜も明はけんへきうたんから衣　(遠藤氏)正友
ちりけもとより秋風そ吹　松臼
化ものゝすむ野の薄穂に出て　一朝
毛のはへた手のきりくす鳴　松意
大力ふけゆく月の枕引　一鐵
ゐいやくに又かねのこゑ(聲)　卜尺
雲かゝる尾上をさして何千余騎(イ本何千騎)　在色
假名實名山ほとゝきす　志斗
ウ
お尋を草の庵の帳に見て　雪柴
奉加の金は太儀千万　執筆
わる狂ひさとれは同し此世界　松臼
女房ともをとをくさる事　正友
手屓かと立より見る(イ本みれは)に股をつき　松意
戀の重荷の青駄也けり　一朝

旅衣思ひの山をそろり〱　卜尺
一首の趣向うき雲の空　一鐵
初鴈は余情かきりに羽をたゝき　志斗
大まな板にのする月影　在色
水桶に秋こそかよへ御本陣　正友
いかに面〱火用心〱　雪柴
此所けしからすふく(吹)花に風　一鐵
そりやこそ見たか蛇柳の陰　松臼

二

消やらで罪科ふかき雪女　一朝
悋氣つもつて山のしら雲　松意
通ひ路は遠き龍田の奥座敷　在色
けふも蜜(密ゝ)談さほ鹿の聲　卜尺
あの人にやらふやるまひ姫萩を　雪柴
何百石の秋の野の月　志斗
詠むれは道具一すち(筋)露分て　松臼
はり付柱まつ風の音　正友
江戸はつ(づ)れ礒に波立むら鳥　松意
御殿山より明ほのゝ空　一鐵
木枕に掃除坊主の夢を殘し　卜尺
小性の歸るあとのおも(面)かけ　一朝
下帯の伽羅の烟を命にて　志斗
ちやかほこの聲絶し揚り場　在色

二ウ

水道や水の水上崩るらん　正友
立付あをる川おろしの風　雪柴
一駄荷の下知して曰ク舟に乘　一鐵
東國方より出し商人　松臼
わらんへをかとはさはやと存しゆ　一朝
みたれたる世はたゝ風車　卜尺
其比は壽永の秌の影灯籠　在色
法然已後の衣手の月　松意
見渡(霞せは)は靈岸島の霧晴て　雪柴
三俣をゆくふ(船)ねをしそ思ふ　志斗
全盛を何にたとへん夕涼み　松臼
中に名とりの大夫染きて　正友
かたはちに花なさかせてぬめりふし　卜尺
入日をまねく酒旗の春風　一鐵

三
燕や水村はるかに渡るらん　松意
川浪たゝく出ｼの捨石　一朝
人柱妙の一字にとゝまりて　志斗
ましなひの秘事物いはしとそ　在色
桃李今枝もたはゝにふらさかり　正友
猿手をのはす谷川の月　雪柴
杣人にたかる虱の聲もなし　一鐵
やまひの床の細帯の露　松臼
鍋底にねるやねり湯の割の粥　一朝
せつかい持て行は誰か子そ　卜尺
さひ長刀木の丸殿に何事か　在色
やせたれと馬立し神垣　松意
散銭は障子のあなたにからりとす　雪柴
談義の場へすて(三)に禪尼の　志斗

三ウ
ねかはくはかの西方へ鐘木杖　松臼
世は山からの一飛の夢　正友
露むすふ柿ふんとしもわかい時　卜尺
相撲におゐては信濃のた(立)て石　一鐵
風越山爰なる木の根に月落て　松意
雲は麓にかよふ斧音　一朝
すは夜盗野寺の門に朝朗　志斗
日比ためたる金佛あり　在色
古郷へは錦のまもり肌に付て　正友
田薗將に安堵の御判　雪柴
境杭子ゝ孫ゝに至ま(迄)て　一鐵
舟着見する松の大木　松臼
志賀の山花待得たる旅行の暮　在色
京都のかすみのこる吸筒　卜尺

名
重の内みなれぬ鳥に雉子の聲　一朝
燒野の見廻いはれぬ事を　松意
塗垂に妻もこもりて恙なし　雪柴
三年味噌の色ふかき中　志斗
この程のかたみの瘡氣おし灸　松臼
それ者を立し末の松山　正友
仕出しては浪にはなるゝ舟問屋　卜尺
秤の棹に見る鷗尻　一鐵

白鷺の香を濃に割くたき　松意
釜の湯たきる雪の明ほの　在色
神詫に松の嵐もたゆむ也　志斗
岩根にじつと伊勢の三郎　一朝
夕月夜二見か浦の鮑とり　正友
波も色なる蛤の露　雪柴
名ウ
肰箱のかさしにさせる萩か花　一鐵
ようこそきたれ荻の上風　松臼
夕暮の空さためなき約束に　在色
日もかさなりてはらむと云か　卜尺
そちに是を旅宿の名殘小脇指　一朝
落られまいそ尋常に死ね　松意
同しくは花に對して醉たふれ　雪柴
麁相に鐘を春の日はまた　志斗

正友十一句　一鐵十一句　雪柴十一句
松臼十一句　卜尺十一句　執筆一句
一朝十一句　在色十一句
松意十一句　志斗十一句

革足袋のむかしは紅葉踏分たり　岡瀨氏 一鐵
尤頭巾の山おろしの風　在色
おほへいに峰の白雪めにかけて　雪柴
春ゆく水の材木奉行　志斗
青柳の岸のはね橋八年ふり　一朝
又落書にかへるかりかね　正友
朧夜の月をうしろに具軍　松意
ひつはかれぬるあけほのゝ空　卜尺
ウ
うき世町枕のかねをふきあけて　松臼
わすれぬ戀の荷持歩行持　執筆
しのふ山しのひてかよふ駕籠も哉　在色
人のこゝろのかたき岩茸　一鐵
松の葉の露をかてんの隱家に　志斗
なる程せはき窓の月影　雪柴
ふいこ(ご)より雲に嵐の音す也　正友
あん餅をうるかつらきの山　一朝
ふりにける豊等の寺の御開帳　卜尺
善の綱うらそよく竹の葉　松意

灯明やそれより出て飛螢　一鐵
物おもふ身のこもる神前　松臼
血の泪扨は並木の花の雨　一朝
親はそら(空)にて鳥の巣はなれ　在色
二
うははみは霞をのたる山の岫　雪柴
鎌おつ取てはしる柴人　志斗
野境の言葉たゝかひ事おはり　松意
平家の方より塚をつく也　正友
庚申や九代の末にまつるらん　松臼
無間の鐘ににはゝ(鶏)鳥の聲　一鐵
別はの思ひや胸の火の車　在色
なみたいくたひあけ屋の門を　卜尺
またるゝはそれか雪踏の音絶て　志斗
この文ひとつ犬こゝろせよ　一朝
むは玉の夜はひも夜討の手立あり　正友
富士のすそ野に落すふんと(ど)し　雪柴
白妙の雪の夕月(イ本夕暮)厄はらひ　一鐵
煤をおさむる城の松風　松意

二ウ
から鮭の尾上にちかき臺所　卜尺
猫のにやぐ〳〵いつれ山ひこ　松臼
柚人やなたの下より悟るらん　一朝
苧くすの衣すさの塵の世　在色
信濃なる木曾屋か藏も荒にけり　雪柴
押込強盜みやはとかめぬ　志斗
小男のさも小さかしき同心衆　松意
消すに火のこのくゝる股くら　正友
長持を所せくまて(迄)かきすへて　松臼
此殿様へ浄るり(留理)大夫　一鐵
女郎客簾中ふかく入給ふ　在色
衣引かつきはや新枕　卜尺
花も月もなんでもない事戀の道　志斗
わつかのなさけ春の夜の夢　一朝
三
やふ(藪)入や世のうき橋を渡るらん　正友
三人笑てたゝく手みやけ　雪柴
たのしみやおはすか(ず)さす(ず)に子を愛し　一鐵
年のきはともしらぬ老鶴　松意

鎌倉の將軍(已)以來の松の雪　卜尺
東海道にあらし寒ゆく　松臼
追出しの鐘に目覺て馬やらふ　一朝
人間万事まよふうかれめ　在色
方便や今此娑婆に佛御前　雪柴
夫おもんみる戀のみなもと　志斗
恨ては晝夜をすてぬ泪川　松意
水もたまらすあはれ一太刀　正友
眞向にさしかさしたる月の色　松臼
すゝみ出たるはつ鴈の聲　一鐵
三ウ
秋風の吹につけても食つきて　在色
旅なれたりし萩の下露　卜尺
行暮て飛脚は野邊の假枕　志斗
何十何里夢のかよひ路　一朝
あら海の岸による波泪じやもの　正友
誰か邪間入て中の破舟　雪柴
うき思ひ問屋次第にともかくも　一鐵
今此さと(里)のりんきいさかひ　松意

なかむれは烟絶にしかせ所帯　卜尺
をきわたしたる質草の露　松臼
影てらす三月切にや虫の聲　一朝
一夏はすてに秋いたる也　在色
法の花火江湖の波の夕氣色　正友
ゆく舟屋かた(形)終は彼岸　志斗
名
かやうとはおも(思)はさりしをなかし者　雪柴
七月(ツキ)半の喰あはせうき　一鐵
中さぬか脉にすゝんてあた心　松意
朝ゐの床をはつ(づ)る小娘　卜尺
しやな〱としゝしに行けは亂髪　松臼
乘物出しあとの追風　一朝
腹切やきのふはけふの峰の雲　在色
何百年の辻堂の月　正友
飛彈の工兹に沙汰してきり(ぎ)〱す　志斗
金岡か筆くさむらの色　雪柴
片しくれ(時雨)價いくらの松の風　一鐵
美濃のお山の宿に夜あした　松意

洗足に(釣)垂井の水やむすふらん　卜尺
追剝しまふあとの血刀　松臼
名ウ
義盛かゆかりなるへしす牢人　一朝
夜日三日のくすりこしらへ　在色
水風呂や枯木をたゝき焼立たり　正友
こぬかみたれて晴天の雨　志斗
まつ宵の油こほるゝうき泪　雪柴
かゝる思ひをねすみひかぬか　卜尺
恨ては社の花に五寸釘　松意
中をかすめてうき天満橋　松臼

一鐵十一句　一朝十一句　松臼十一句
在色十一句　正友十一句　執筆一句
雪柴十一句　松意十一句
志斗十一句　卜尺十一句

田代氏 松意
雪おれやむかしに歸る笠の骨
落葉は土にうつ(埋)む下駄の歯　一朝
はきためはあたかも軒の山と見て　志斗
平太に雲を分る舟入　在色
浪風もあたりをはらふ御成先　卜尺
すかぬやつめか訴状一通　一鐵
新田場人をとまれな今朝の月　松臼
小家三つ四つむすふしら(白)露　雪柴
ウ
きり〳〵す念佛講にこゑ(聲)そへて　正友
煮しめその外萩の花など　執筆
はる〳〵と野路の玉川留守見廻　一朝
入魂中の勢田の長橋　松意
俵一つ御無心申かねのこゑ　在色
大雨にはかによその夕暮　志斗
ほとゝきす万民是を賞翫す　一鐵
花柚をこゝにうける盃　卜尺
小刀の峯より月のかけ(影)落て　雪柴
品玉とりや夜寒なるらむ(ん)　松臼
渡る雁そも神變はいさしらす　松意
鳥羽田の面の虫のましなひ　正友

庭の花伏見の山をねこきにて　卜尺
霞にむせふうけ出され者　一朝

二

春やむかし忘れ形見の革つゝら　志斗
なんた足袋屋か板敷に落　在色
(二)こみほこりうき名つもりて高崎(イ本高砂)や　松臼
いのる妙喜の山おろしふく　一鐵
手あやまち三尺斗もえ揚ッ　雪柴
ゆかみをなほす棒は眞二つ　松意
人らしき心もたすはもたせゝそ　正友
所帶を分てうさもつらさも　卜尺
世の中はへんてつ一衣かるい事　一朝
あかつきおきの瓢簟の音　志斗
小便やしはらく月にほとゝきす　在色
病目もはるゝ夏山の雲　松臼
凉風や峯ふき送る藥師堂　一鐵
かけ奉る虎やうそふく　雪柴
花生はもとこれ竹の林より　松意
相客七人はるのあけほの　正友

比丘尼宿はやきぬ〳〵に歸る鴈　卜尺
かはす誓紙のからす鳴也　一朝
終は是死尸さらす衆道事　志斗
豆腐のぐつ煮夢かうつゝか　在色
す行者もこよひは爰にかり枕　松臼
番場とふけはつもる大雪　一鐵
駒とめて佐保山の城打なかめ　雪柴
朝日にさはくはし臺の波　松意
苔むすふ石を袂に拟こそな　正友
子ともの小鬢かせそ過ゆく　卜尺
伽羅のあふらかほる芝ゐの月明て　一朝
川原おもての貝からの露　志斗

三

目前にうつす二見の秋の景　在色
反平をふむちとりなく也　松臼
出家おち(三)妹かり行は小夜更て　一鐵
諸行無常とひゝくかね言　雪柴
付さしの口に飛込氣色あり　松意
蠅にならひて君に手をする　正友

はけあたま甲をぬいて(で)旗を卷　卜尺
名は末代の分別ところ　一朝
有明の月の夜すから發句帳　志斗
京都大坂江戸の秋風　在色
穀物の相場さためぬ露時雨　松臼
先算盤に虫のかけ聲　一鐵
綱うらは麓の野邊に御影石　雪柴
何院殿の法事なる覽　松意
羅(ロツ)拂ひそれらか命拾ひもの(物)　正友
三ウ
角のはへてや來る傳馬町　卜尺
胸の火をかな輪にもやす亭女　一朝
別はの酒寒いにま一つ　志斗
長枕寢肌の雪の朝ほらけ　在色
待くたひれてうくひすの聲　松臼
峯の雲花とおとろく(驚)番太郎　一鐵
人丸か目やかすむ燒亡　雪柴
年月と送る藁屋のめし時分　松意
つとめの經やすみの衣手　正友

うき世かな(哉)おくれ先たつ夫婦中　卜尺
大和の國になみた雨ふる　一朝
りん氣にや宇野か一黨さはくらん　志斗
月に向ひて戀の先かけ　在色
名
文つかひ夕の露を七の圖まて　松臼
木刀のすゑ尾花波よる　一鐵
一流のむさしの廣く覺たり　雪柴
千家万家に分る水道　松意
下り酒名酒にてなとなかるへき　正友
大江山よりするのかし藏　卜尺
踏分て生野の道の鼠くそ　一朝
笹枕にそたてしあら鍔　志斗
鑓持や夢もむすはぬ玉霰　在色
口舌に中は不破の關守　松臼
年經たる杉の木陰の出合宿　一鐵
いかに待みむ(ん)魚くらひ坊　雪柴
一休を眞似そこなひし胸の月　松意
三文もせぬ筆津虫なく　正友

名ウ
智恵つけや先小學の窓の露　卜尺
藥をきざむ軒の呉竹　一朝
箱根路を我越來れは子をうむ音　志斗
狐にばかされ明てくやしき　在色
待ほうけまつ毛のかはく隙もなし　松臼
思ひの色や晨砂なる筧　正友
玉垣の花をさゝげていのり事　雪柴
女性一人簾前の春　一鐵

松意十一句　卜尺十一句　正友十一句
一朝十一句　一鐵十一句　執筆一句
志斗十一句　松臼十一句
在色十一句　雪柴十一句

連俳の席にて毎度聞侍るは、去もの途中にて、紹巴法橋にあひて、何方へかと尋る。けふも又いつもの板かへしにまかると、申されしなればとて、古き物を上を下、裏を表へおしかへす物と斗心得たる族多し。さすが名人の詞、道理に叶ひて覺る。板かへしをするに、もとの古き斗にてなるものかは。あたらしきを過半加へざれば事たらず。俳諧はおほくまぜたる程手づよし。前書にも古きとあたらし過たる、二の惡をあげたり。あたらし過たるは、その過たる所をけづり捨れば可也。ふる朽て苔のむしたるは、けづるにたよりなし。何れの道もかく有べけれど、俳諧は共手筋と、心がけにてはやくたれり。此連衆の内に、一兩年つとむる作者三四人加ル。おそらくは年老の人〻に、あへてをとるべきにあらず。これにて初學の人〻、能〻心得給ふべし。凡世上の俳諧をわるくするは、古功者のわざ也。初心の人〻、作意・風情を生れつくといへ共、爰を切、かしこをたて入よならぬ事をまぜて、その作をうしなふ。一卷の點など見るに、云ひかけ・取なし、さま〲ふるめかしき事を好む。世人これ

をよき事と思ひて、見る〳〵あしき道へ引おとされ畢。頃日去いそのかみの口ずさびに、何れも今あたらしき付合をこのみ給ふ。めづらしき事おほくは侍らぬ物を、二三度用て付れば、それも又古し。後には付物に事かきてんやと申されし。尤のやうにて、信用しがたし。梅翁若年のむかしより、今七十有餘に至るまで、連俳の道あたらしき詞に事をかゝれず。行末を案じ給ふもの哉と思ひき。をのが作のはたらかざる事をばいはず。廣き難波のよしのずいから天を見るのみ。おかし。かゝる作者は、此十百韵など、さだめてそしらるべし。それ程の相違なければうれしからず。今世間の俳諧より、此方をば飛躰など號て、わけなき物のやうに思ふ。大きなるあやまりなり。神代の哥、いまだ文字のかずさだまらざるとあるは、皆俳諧也。哥の姿のはじまりとは見えたれども、往昔は一句二句の云捨斗にてやみぬ。はるかに守武・宗鑑出生して、初而百韵に事たる。その後俳諧にて身をたつるものおほく出て、守武・宗鑑の俳躰をあらため、程〻の子細をのべ、一句に俳諧一つ二つ有事をして、惣躰皆連哥なり。その門弟、京田舎にはびこる。かゝるまぎらしき事をして世をわたるは比興の至り、誠口おしきわざにあらずや。此連衆などおよばずながら、守武・宗鑑の旨趣を守らんとほつす。かるがゆへに是を本躰と思ふ。世上の俳諧、その付道具はふるびにたれど、守武・宗鑑已後の異躰なれば、號て末躰といふ。前後する所分明にわきまへしらば、此道にちかゝらん歟。

延寶三卯十一月吉日

(校訂者曰、本文は延寶三年坂の小菊本により、同四年の版本に假名を漢字に改めたるもの、又は誤書と思はるゝをイ本或は( )の中に收めて補へ、濁點は原本にあるものゝ外は施さず。)

俳諧

虎溪(こけい)の橋(はし)

西鶴　江雲　松意

三吟

大坂松壽軒 井原西鶴
京都 雉宿翁
江戸談林 田代松意

賦何餅俳諧

みつがしら鶉鳴也くは〳〵くわい〳〵　西鶴
口拍子よき野邊の秋風　松意
月影の皃(白いか)を黑いとさ夜更て　江雲
かさゝぎのはしわたり手をうつ　鶴
小商人泊り定めぬ雲の空　意
四五疊敷の海士の捨舟　雲
置所ぬか味噌桶の塩滿て　鶴
茄子白瓜芹川鶴のこゑ　意
小便の流久しき君が代に　雲
姥がそだつるわかの遠山　鶴
念佛講へう〳〵としてきはもなし　意
たゞ忙然と夢の世の中　雲
女房もたず月代そらず髭ぬかず　鶴
戀をはなれし帝壹人　意
ぬぎ給ふ夜の衣を五何去て　雲
この暑さには庭のまつ風　鶴
切もぐさ軒端の山のうす煙　意
いたむ所に柴の戸の露　雲
早繩や木玉の通ふ袖の月　鶴
たゞ雲水を替る井のもと　意
今もつて枯しはせまい峯の花　雲
東は山に咲さくら町　鶴
角屋敷あかぬ色かな春霞　意
夜番つとめてかへる鴈金　雲
行燈の數かきけして浪の上　鶴
若衆とらへて梶枕する　意
藻塩草かゝずと是非共起請文　雲
傳受の烏に明てわかるゝ　鶴
手くろ者關はゆるさじばくち打　意
勘當帳をたからかによむ　雲
一度は東路に晒汐見坂　鶴

平家の聟並松の庵　意
肩をならべひざをくみたるねこた敷　雲
首引すれば蚤うつるらん　鶴
十二つかひ樂み同じ夏の月　意
具足の櫃を夢のまくらに　雲
兄分ににげ尻見せて立かくれ　鶴
小柴の陰に口說仕出して　意
浮世町分入たまふ御すがた　雲
親仁の首尾はけつこうな良　鶴
隱居領本知の外に是程迄　意
三ケの庄にわかすせんじ茶　雲
暮かゝる野寺に寄て入佛事　鶴
すこし包しかねひゞくなり　意
さらば〳〵泪片手の一夜妻　雲
今朝は嵐の吹風呂屋者　鶴
うす情は(はらカ)ゝをやりたる雲の帶　意
目前のけしき前渡りする　雲
是は夢花咲雪ふり月出て　鶴

名譽な事共夕暮の空　意
さそはれし雲のはたての大天狗　雲
そなた隙なら棧敷へおじやれ　意
何もせぬ提重箱やひらくらん　鶴
よせいは杉の楊枝くわへて　雲
なかでなど大きなつらを時鳥　意
一村雨のはれやまひなり　鶴
あら笑止や俄にかもふりなくゆ　雲
うすはに秋の風がかはつた　意
有馬山霧にへだつも世間躰　鶴
千句の月のかけたりみちたり　雲
白粥にさゞ浪よする朝ぼらけ　意
藻屑の煙匂ふやき味噌　鶴
蜑の住芦や薄屋の軒つゞき　雲
金槌の音定かねつる　意
二道に通ひなれたる鋸は　鶴
戀のしん木は相生の松　雲
石臼の岩ほと成迄廻りましよ　意

母衣にかけたる天の羽衣　鶴
彼漁翁役かへありて使番　雲
まさに見たりし樽さかな有　意
前髪を廿斗の山おろし　鶴
麓にかぶき子かへさせたまへ　雲
花薄さあはじまりの太皷かね　意
神代の秋の火用心時　鶴
月の影手桶の水をくゞるとは　雲
座禪の床のうどんそば切　意
極樂の花の臺の棚請狀　同
霞も煙もたて山しら山　鶴
鳥や今水衣きてかへるらん　雲
礫を打し岸の高浪　意
取すますむこの川筋流れきて　鶴
おもひも家もゆづり葉が嶽　雲
八重の雲浮世の中のはそん組　意
うれいの雨におつる神鳴　鶴
夕煙ゑんせうくさいわるくさい　雲
足輕が住須磨のうら風　意
歩行衆又は關路の鳥毛持　鶴
にせ山伏も先達となる　雲
若切者（功者）七十五日と申には　意
御よろこびの跡のいみあき　鶴
さかやきのながいはおそれ月の前　雲
たゞわたくしは次の間の露　意
さだまりて逮業の外の荻の壁　鶴
いかに男鹿の皃をしかめて　雲
武藏野のはらの皮切二つ三つ　同
にしに名高き山を見ませう　意
駕籠かきよ花にはつらき夕日影　同
合羽取出す春の風雲　鶴
つゝけのみ煙も霞たばこ入　同
ねおきに見たる千代の長閑き　雲

賦何紙俳諧

酔の色や是三人の笑ひ草　江雲

ありとはきくに桔梗苅萱　西鶴
野邊の月化物くさい風過て　松意
によつとみこした薄霧の空　雲
のびあがる足引の山隣殿(取カ)　鶴
理り申て瀧のしら浪　意
お暇は七日のぼりし京参　雲
馬に鞍かけ能のはじまり　鶴
味方の陣太鼓矢倉に雨もりて　意
道場の前橋は引たり　雲
夕浪の立て川越お取こし　鶴
ぢいばゝ丼に千鳥飛行　意
火桶ひとつ幾夜寢覺の命にて　雲
けふから寒に入相のかね　鶴
山寺の敎やぶりて玉子酒　意
衣をかけて何地黄丸　雲
烏羽黑の夜るすごさるゝ證據には　鶴
憔な子ども戀種の露　意
月のくれ五十四郡に名は立て　雲

彼事しらするせきれいの判　鶴
哥の道花に心を中間中　意
狐川よりぬるむ普請場　雲
八重霞あたま數讀男山　鶴
揚屋の朝氣うしろめたくぞ　意
身躰を夜の間の風にふかれたり　雲
むねにたく火は消ずみになる　鶴
かたみこそ今はあだなれ革羽織　意
戀の重荷を乘かけの上　雲
先は誰跡は合點じや旅芝居　鶴
追付あの世へたつた六文　意
かり橋は爰で御座るぞ泪川　雲
釘かすがいやうつ浪の音　鶴
ふいごより出し嵐のそなれ松　意
屋尻切たる岡野邊の里　雲
月更て人はこたへずねいりばな　鶴
ゐんりよもなくて打から衣　意
見わたせばすねなげ出して渡る鴈　雲

高根に雲の引物細工　鶴
仙人が雨を封じたこせう壺　意
草にうどんの汁そゝぐ也　雲
芋川の野になき跡を吊（弔）ひて　鶴
馬士に詞をかはしけるぞや　意
前だれの色に出たる其おもひ　雲
おくり膳には付さしの酒　鶴
へや住の虎は座敷に見へざりけり　意
露ゝ泪よもるぞおそろし　雲
薄霧の一重下にはおとし穴　鶴
嵐はげしき要害の月　意
花ちらすひゝ鳥越の聲立て　雲
淀のつぎはしゆるゝ春雨　筆
洪水やつらしとみたる雪なだれ　意
くふ物がない笹の屋の中　鶴
住侘る片山岸の病もの　雲
高枕にて松風のこゑ　意
閼置ば枯て次第にさがり藤　鶴

塩は俵に田子の浦浪　雲
みそ大豆の煙をかづくあま衣　意
龍宮のならびに所帯わかりて　鶴
先渡すつり鐘の高百貫目　雲
後記にとまるあつらへの後世　意
日牌や立行雲の奥の院　鶴
其暁の齋坊主よぶ　雲
まな板や西にかたぶく有明の　意
ぶだうの葉末古道具棚　鶴
大宮や堀川通一またげ　雲
則その身のかるい公家衆　意
燈心を今引哥にあそばされ　鶴
煎薬の方本草に有　雲
紙袋明暮心を窓の前　意
また新鷹はうごくくれ竹　鶴
行幸の供奉に集る御溝水　雲
千とせの秋をふれながす浪　意
月に影鬼子をうみて捨小舟　鶴

風のまに〳〵黒塚の露　雲
行雲の袖ひるがへす橋かゝり　意
虹たつ跡の山高ふして　鶴
かづらきの花見の草臥こりはてた　雲
霞を躰てまなく時なく　意
茶屋に寢て別れをいそぐ佛様　鶴
諸行無常のかねごとの末　雲
革袋今は浮世のづだ袋　意
見し夢覺る萬小間物　鶴
忘るなよ我も忘れじ覺帳　雲
ほどは雲井を分る道中　意
天人も色黑になる山越て　鶴
六尺二ぶん富士のしら雪　雲
立煙またぐらよりも詠れば　意
けふもはかなし野ざらしの骨　鶴
堀しまふたがねの先に秋暮て　雲
四つとめ口の草のうら枯　意
からうちの糸のゆかりの亂れ萩　鶴
無疵にてらす三五夜の月　雲
つもり見る古人の心貳千貫　意
かぶきの入は高砂の松　鶴
淡路嶋向棧敷に花待て　同
茶辨當より一滴の春　意
飛胡蝶露の命を晝休み　雲
夢といふ字を手習子とも　鶴
しきたへの疊をかゆる寶舟　雲
無事にて千代の春を待宿　意

賦何雀俳諧

類船や京江戸大坂三ケの月　松意
誰が浦手形落る鴈金　江雲
芦の花さく介五年極りて　西鶴
在所の方の風わたるなり　意
明日は爰元を立むら時雨　雲
芝居の見せ物すかぬ黑雲　鶴
あやかしが付てゆ腰の廻り　意

やいとの煙たゝぬ日もなし　雲
よりかゝる隨緣眞如の浪枕　鶴
前は生死の海じや押まい　意
まづかした法の力のそくいへら　雲
障子の紙を卷向の山　鶴
忍路やのぞきをくれし穴師吹　意
禿よぶなる瀨戸の汐相　雲
たばこ盆煙にかへる奧つ舟　鶴
けつまづいては夕日こぼるゝ　意
南無三寶とあるふし木の村挖　雲
鉋をおしむ秋はかね也　鶴
西の山砥づらを走る滝の露　意
戸無瀨い月を布きせにして　雲
御先へ傘持や花ぐるま　鶴
辻をかためし棒粘の春　意
きそはじめ孫を幾たり子持筋　雲
はま弓はご板鶴の毛衣　鶴
詠れば(一字虛)くてたみたる君が代じや　意

ふのりの流こけのむす迄　雲
はやめ藥今で御座るぞこしの山　鶴
親類中へ雪をめぐらす　意
先無事に罷歸た舞の袖　雲
天津乙女を入るゝ水風呂　鶴
かる石やいわほなるらん是とても　意
りん病たちまちあら礒の浪　雲
きはつきて袖の湊はわるくさい　鶴
もろこし舟にばいた寄見ゆ　意
泪さぞ流し待らんはした錢　雲
はやくはん桶に入かたの月　鶴
精進物五十二類の虫のこゑ　意
毒立にある萩の下露　雲
左様にはやせ野ゝ薄横にねて　鶴
掛乞の詞あらふふく風　意
はかり竿端山の腰にさし遣へ　雲
かせをつもりて布引の瀧　鶴
裏店に幾代經ぬらんやもめかゝ　意

われ鍋ひとつむねの火をたく　雲
大地しんゆるかときけばちぎりにて　鶴
鹿嶋のかみさまつよひ鼻息　意
りんき言是やこなたへ御免なれ　雲
血で血をあらふ赤地の錦　鶴
花に幕童子がおこりし岩やの月　意
さいの川原のきしの山吹　筆
火にもえて色なる水やぬるむらん　鶴
樟腦すこし香に匂ひける　雲
人はいさ心もしらずひぜんかさ　意
床へは入たがさはりもせなんだ　鶴
くらまぎれ鼠の引し新枕　雲
やがて別れのとりもちをねる　意
此跡の太夫を惜むよしの山　鶴
何ほどつぶいたかねのみたけぞ　雲
浮雲の厚ふ見へたる上はゝき　意
きやはんとをつて露時雨行　鶴
おくたびれすいりやう申た夜半の月　雲

懐帋は末の文字のかり金　意
松山は浪のうち越木名所　鶴
十五万石雪のゆふぐれ　雲
使者男袖打はらふ大馬代　意
みじかい刀ながひ口上　鶴
人形はいきてはたらくどくにて　雲
いやはやきたいなてうふくの壇　意
夜に三度口に三度づゝ亂れ髪　鶴
かしやくのせめの長き心よ　雲
じだらくな人を佛はなげかれて　意
ふんどしかゝずに越雲雀山　鶴
焼亡よ軒のいらかの秋の風　雲
既に落城露の世の中　意
聲立てむし同前の二千よき　鶴
三味線の糸ほそき月影　雲
西門に數年を經たる花散て　同
つら扶持斗の老の鶯　意
雪汁に富士は礒なるいはしさい　鶴

五文で買た田子の浦浪　雲
巾着の底の汐風絶ずして　意
毎日いしやがかよふ眞砂地　鶴
是や此すくなひこなの宮所　雲
手水手ぬぐひ天の薄衣　意
初霜に雲のあはたつ茶筅松　鶴
ちいうは互に奥山の鹿　雲
寐物語ついくち〳〵の鹿の聲　意
うらみは根のないくずの葉の色　鶴
月にいのる神のいがきのかしらはけ　雲
大宮人のなま風呂の戀　意
此上はお暇〳〵いとまあれや　鶴
つめ奉公に情がつゞかぬ　雲
たいふたうあまふからふも世に住ば　意
きゝんに成をしつたりかんたり　鶴
雜菜をば子曰つみためよ　雲
十五の春と申里の子　同
いたはしや夜半にまぎれて歸る鴈　意
包丁の峯雲の行すゑ　同
花をふんで岩根の床の疊さし　鶴
公儀もつぱら藤の門口　同

又の日は對馬の人にさそはれて、嵯峨野は秋の半、まだ小倉の岑も常の色にて、薄・露草を分て苔路はるかなる岩間づたへに、瀧口の舊跡さて一句すきの道すがら、程なく歌仙につゞりぬ。

歌仙俳諧

女のふけるよこ笛によるや秋の鹿　河野氏定俊
禿の紅葉こいよ手づゝみ　西鶴
盃をあらはす水に影見えて　俊
又吸物のあとの山川　鶴
一つけは外科にかけたる浪の音　俊
前句に松の風をひきやるな　鶴
夕飯後天の羽衣薄着して　俊
湯殿をあがるみよしのゝ山　鶴

ぶしやう者垢をためては苔清水　俊
耳かき朽て竹の下陰　鶴
火が消て螢むなしき細物屋　俊
巡禮たてば夜は明にけり　鶴
葛城の神も袖なし羽織にて　俊
久米路のはしをこりやかけ躍　鶴
娘どもは心してゆけ初あらし　俊
中人がいふは皆空の月　鶴
花咲ば急で來れ狐馬　同
同じ穴より出るうぐひす　俊
御閣ふる一二三には雪消て　鶴
大黒殿の袋には風　俊
懸乞が見る白がねの山高し　鶴
感陽宮のうちはから也　俊
時節にて燒蛤の夕煙　鶴
下戸であつたか蛋のひく息　俊
不公儀を大臣なげき給ひけり　鶴
衞士籠などはしらぬ袖の音　俊

蛬は消て夜はやう〳〵戀衣　鶴
小指くはへて三輪の山本　俊
獺太郎瀧に引込暮の月　鶴
千人力や水のしら露　俊
奉加帳すゝむる所の萩（荻）の聲　鶴
萱が軒端に正眞の彌陀　俊
つき磨の上に不思議の光さし　鶴
祇園會の山跡の浮雲　俊
花の春それより夏は凉み床　同
秋はかねもち冬はしら雪　鶴

寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衞板

誹諧當世男

蝶々子

ひとり燈臺のもとに懷紙をひろげて。見し世の作者を伽とするぞ。こと(マヽ)なうなぐさむわざなる。俳は心付のあはれなる卷〳〵。崑山集老師のことば雜句の過。此園の誹諧師どもの書るものも。いにしへのはあはれなる事多かり。發句こそ猶おかしきものなれ。あやしの。芝。山の手のことばもいひかくればおもしろく。をそろしき猪のしゝも。愛宕の使者といへばたうとく成ぬ。此比の句は一ふうおかしくいひかまへたりと見ゆるはあれど。ふるき句どものやうに。いかにぞやことばの外に景氣おぼゆるはなし。いざや今もいどみあへるに。おなじこと葉趣向もむかしの人のつゞるは更におなじ物にあらず。やさしくすくやかにして。てにはもきよげに作意もふかく見ゆ。しかはあれど佛も種々說法以方便にこそ本顯心實の妙道の有がたきには引導し給ふめれ。我きくかくのごときの句どものうちにて。仕立あたらしきをえりつくろひ。前なる玉手箱の鏡を押たて。誹諧當世男と作りなし。若手の棠にまじはりて。點をかけんも おとなげ なけれど。又ふるくさきとて人〳〵にあなづられんも口惜かるべしなればゞ。老後のおもひ出是に過じ。御免あれと。望む延寶よつのとし。辰の文月はじめつかた硯の水に筆をうるはす

花樂軒蝶々子序

誹諧當世男　春部

歳旦

外はなんの福と壽命と御代の春　松樂軒 立志
年男こや与五平がきみの春　卜養
よべ芝にこもりて今朝や江戸の春　未調
年徳や御身かろげに見むまより　大坂 宗因
しれた事よいのらずとても君が春　吟市
天鉦(秤)や京江戸かけて千代の春　桃青
丸き代やふくりんかけし千ゝの春　小澤氏 卜尺
鳳凰や下腹はげし御代の春　仙風
誰がかけぞ又くる年もくる年も　泰徳
御代や凡千疊敷の松の春　酒井氏 青雲
明る氣色筆捨松や四方の春　藤井氏 安昌
君が代や見て來たやうに千ゝの春　吟松
江戸の春や光をかざる金馬代　松屋 重治
のゝ字計我趣向也筆はじめ　長谷川氏 一心

君が春や扨そのほかの人までも　嶋崎氏 友里
千代やくた申さぬとても君の春　高井氏 立詠母
うるや暦竹にはさみし四方の春　永井氏 淺山
上下をぬいだ心ぞ今朝の春　平野氏十歳 政陳
大こくや一にほだはらふまへたり　同七歳 億丸
板木屋にこそぐられてや若夷　見石
朝霞おたちやれ〳〵下馬の春　柴田氏 吟舟
書初や御出の通り帳の面　城悦
花の都是は扨置江戸のはる　信州高遠 意計
大下馬の汀の春や龍の口　伴氏 貞次
是一つ世間なみ也老の春　角田氏 定共(カ)
おもはくや筆にいはせん神の春　ふしみ町 久米助
筆初鶯の音や御きゝ番　長井氏 可夕
かど松やなのりもあへず三ヶ日　作者不知
手習子かしこき代とて試筆哉　同
書初や請取申年の事　同
くる年やなげ鞘にしる君が春　書林
その山や爰にたとへて組蓬萊　立志

江戸は都いつか來にけん花の春　世我和氏 重秀

君たれば新道たつや江戸の春　川瀬氏 巴笑

（華子）翰信がこゝろやかざる松の下　前田氏 利武

年頭や朝一ぺんの薫をしく　細野氏 正貫

哥心筆が見するや春の色　若村氏 種秀

武藏野や人の心が江戸の春　杤氏 慶豊

御朱印や千代に八千世の筆初　蝶々子

歳旦や唐土はしらず日本には　上村氏 睡白

きみが春一天四海の内のみか　宗作

七種

引なづなやあれ追懸はやさぬか　宇都宮住小川氏 立些

左義長

左義長や扇を擧て是をたとへ　蝶々子

霞

一霞山万歳をうたふたり　宗作

鶯

鶯は智者のほとりの童部らし　清水氏 爲川

鶯や衣を墨にそめもせで　母友庵 酒云

梅

春の夜の闇は是非なし梅の花　吉江氏 荷雪

朝東風や梅のしらする枕かみ　房州西江 茂次

龜井戸天神にて

梅櫻松にて有しよな御神木　緒方氏 露竹

春雪

かつといふや灰吹にさへ殘る雪　神宮氏 觀了

柳

日には見ねど柳えだ先合點か　泰德

松若緑

鶴川一松、髪そりて誹諧興行に

一松や誹言てたつた若緑　可雪

椿

鉄炮洲筑地にいたりて

すて石や花のしがらみちり椿　宗作

花

まゝ事の昔なりけり花の山　卜尺

駕籠かきも休むや花に肩をかし　泰德

花見也けにや安樂世界より　吉田氏 委心

おりにけり花に氣骨と足骨と　書林

上野にまかりて

塔の前に醉をすゝめり花は客　一薫

花の雪や富士を根こぎの東ゑい山　内田氏 一閑

咲花はいかに盛久清水堂　木俣氏 一龜

人のいふ花のもとゝや牛天神　小野氏 一笑

花の價万貫も何寛永寺　西原氏 菊也

德利にも使はきたり花盛　億丸

山寺の花にお僧の御狀かな　かな川山本氏 玉章

花見也けに半日の客たりしも　濃州澁江氏 光春

御番衆や春また(宵カ)千石お花畑　岡村氏 不卜

おもふ也太山の花を薪店　泰德

かねこそちれ花に宿かる揚や町　青雲

花は香と月は光と身は財と　蝶々子

政はたがこゝろにしるや花の枝　政陳

花見にやしやゐ引つれて浮藏主　新宮氏 不人

やあ〳〵風までとゝはん花の瀧　泰德

粹狂や花になれ行あだし身が　貞次

耳ふさぎ餅ならつけよ花に鐘　作者不知

花見するぞ只雲水を便として　宇都宮上村氏 中也

いふ事なかれ今日花見ずして來日と　露竹

花見せんよし〳〵すこしは遲く共　同

花の山やいばらがきしる戾り足　宇都宮服部氏 安步

もらふはなや同じく惜む少人も　吉英

山の手ややつこれやさいた花盛　本 越一藤

火消番や花見過行春の雨　億丸

共心花一ほんのながめかな　萩原氏 好幸

江戶酒や上野の花に拂かた　一松

花に鐘や見な一同に春の暮　泰德

山寺にかきこもりてゐし比

是でこそ憂世の外の花盛　宗伴

櫻

人心猿になりたり山ざくら　政陳

板木にやほり句なれ共先櫻　勝信

雲井櫻天もひゞけと譽上たり　貞陳

咲ぬ間や長屋で暮す江戶櫻　伊與松本氏 之方

牛に馬や乘かへゆかん山ざくら　するが江尻 吉里

見渡せば錦の小路や櫻まち　女 香屋

上巳

七寸の屏風やけふの内裏ひな　見石

あとのけふせなかに見しを蓬餠　仙風

青鬼やうすに移りて蓬餠　松倉氏 嵐松

是は木に酒が成たり桃の花　女 ねい

たつかたや互にちからをとり合　作者不知

燕

つばくらがそれは越路よ我は又　種秀

歸雁

歸るかりよいざ事とはん京都には　伊與宇和嶋 之方

横山や後藤左衛門歸るかり　酒云

鴈は誰にいとま申て歸る山の　作者不知

歸るかりが雲井の都いつか又　泰德

蝶

人は酒に酒は胡蝶に成にけり　同

蛙

和國也水にすみぬるかはづ迄　宗伴

藤

藤つるや三尺ばかりはなのしなへ　泰德

藤づるやあれに見えたる下り松　田中氏 良景

岩藤や肩に立浪松之助　房州鹽見 松吟

春郭公

鶯がそちにきけがし郭公　江州辻村田中氏 重春

三月盡

日は永しとは申せども春の暮　作者不知

雜春

おもふ事いはで唯にやん猫の妻　一鐵

浦谷一毛子といふ人身まかられしないたみて

是はさて難波の浦谷春の夢　蝶々子

誹諧當世男　夏部

更衣

春と夏と布子と袷と猿が餠　觀了

貧僧や他力をもつて衣更　良景
質札や何どの月切ころもがへ　貞次

新樹

藤六が木末に歸る若葉かな　幽山

風爐茶

息をながく風爐のちやかほこ下されたり　泰德

卯花

あし毛馬や卯の花流す大井川　維舟

四月八日に土田宗伴落髮に

あたまくだし卯花くだしや法の雨　一鐵
卯の花や見れば月こそ梳にあれ　酒云

郭公

郭公いかに鬼神も慥にきけ　宗因
時鳥聲あらばこそ名乘もせめ　泰德
古鄉の扇見せふかほとゝぎす　調也
六日飛脚よき次第也時鳥　維舟
我耳をいつ留主にして郭公　蝶々子
黑雲よきゝ度事有郭公　遠州 吟林
上戸なら一盃うけふに郭公　村上氏 武矩
花紅葉月雪なんの郭公　觀了
ほとゝぎすなのれ〱とせむれ共　立些
惣芝居雨になく也ほとゝぎす　嵐窓
まつ人はふるかね買か釘木鳥　立詠
地黃丸やほとゝぎす聞待まふけ　菅沼氏 宗也
御評判うつたり太鼓ほとゝぎす　泰德
郭公醫者に見せたしそれならば　政陳
初音をもいつがお定ほとゝぎす　竹水
ほとゝぎすいよ〱御無事ニゆや　笑遊
番太良も聞耳するや時の鳥　板木屋 五兵
鉢まきやといて見して見時鳥　書林
ほとゝぎす我も七十一度とぶ　宗因
郭公一聲をその百部一　花鳥
餅つきや子共が耳に郭公　中也

螢

螢〱おどろきあへぬ人ごゝろ　慶豐
螢こそよきかぶき子のなり風情　笑遊

暮て見たり四方白壁螢の火　柴女

夏虫

みゝにかゝりうしや蚊の聲夏頭巾　同

下帯やもみぢ折かくのみのふん　宗伴

若竹

若竹や用木達者な男だて　小柴氏 蝶流

境町肥前が座にて

若竹のすゑ一段やうき世ぶし　宗因

五月雨

質物や雲にながるゝ五月雨　酒云

天水やそれとも見えず梅の雨　千之

端午

けふ甲人形店や武者所　立志

菖蒲刀延寶四年作は誰　調和

長刀や扠十文字かみのぼり　田中氏 良景

簡略や人あつうしてかみのぼり　櫻場氏 不及

菖蒲刀それにも似せや本手物　藤田氏 成利

弓は袋菖蒲刀や竹のへら　仙風

五月雨やふる屋の修理にあやめぐさ　笑遊母

印地きりや所も河原おもて疵　良景

氷室

富士山や箱にいれたる雪おろし　蝶々子

清水

歸國の次手に鎌倉へまかりしに
幽山似春追來て三吟に

よれくまん雨馬が間に礒清水　宗因

蟬

無口なもおかしき物ぞ蟬の哥　一閑

夕立

白雨や千疊敷も片通り　岡野氏 一世

夕だちや水もたまらず土壇迄　立些

夕立やたいこをうつて一通り　政陳

（マヽ）清天に夕立見するかいげかな　宗原氏 守友

雲嶺

あれを見よ村立きたつて雲の嶺　江悦

富士はものか鴈頸に立雲の嶺　重秀

扇

扇は風ふくにつけてもかなめ〳〵　形部氏 柳香

是にあり手風神風御田扇　荷雪

艮くひや一本したる扇引　作者不知

ふじの雪炙にたとへて地紙かな　政陳

山王祭

ねり母衣や甲の渡し鎧が嶋　蝶々子

瓜

たてわりや以テひらいて眞桑瓜　嵐松

まくは瓜や水に凉しき夏の月　億丸

鵜川

鵜づかひや陸にあがれば鮎の魚　泰德

暑氣付納涼

暑やとの先五文字やとの外　觀了

はだか嶋にいつか來にけん此あつさ　勝信

天目の水にかへけり玉の汗　酒云

龜井戸天神にて

凉けり干飯をくらひ水をのみ　露竹

凉しさは炙ぞ安樂世界の圖　清宗

江戸棚や戸ざしせぬ世の夕凉　宗因

だき籠や枕ならぶる靈照女　一松

瓢簞や川邊にすゞむ船遊び　うつの宮 驢鞭

かほる也小田原町のみなみ風　億丸

雜　夏

じけり行草津の姥を餅の情　宗因

安部の市やいさまだ人を夏紙子　同

誹諧の道など傳ける人懸物にすべきよしなれば

一口やお爲にのこすところてん　同

おほこでも天晴をのれ一夜鮨　慶豐

味よしの鮨になるゝや中ふくら　秋田氏 正清

誹諧當世男　秋部

初秋

風の外やとへど答へず今朝の秋　種秀

くはしくは文月にこそけさの秋　清定
たばこ盆秋きにけりと驚かす　見石
夏秋の句切也けりけさの露　書林
十六の袖にはいれなけさの秋　重秀
北窓を誰かあぐべき今朝の秋　江川氏 恥計
水帳や筆にもふくむけさの秋　大橋氏 廣隆
くる秋や一枚(敗)にしる箔仕事　書林
今朝の秋や障子の透間物(切カ)あひを　政陳
米つきも肩をいれけりけさの秋　觀了
風門やぞつとたち來るけさの秋　白井氏 逆言

上野にまかりて

今朝の秋燈滅はいかにぬれ佛　一松

一葉

諷の師なりける人の遠忌に

一葉ふくや聲を力のたすけ舩　泰德

七夕

糸かけよ星の妻戀猫の皮　幽山
水も干よ將に七度天の川　蝶〻子
此うらにかし座敷あり出合星　江悦
天野川岩もる水や出合ほし　泰德
養父入や空にしられぬ出合星　倉屋
七夕もとばば嘸〱鳥がなく　岡山氏 秀辰
星よ逢瀬心中ならば岩枕　可夕
男ほし書をば何とうば玉の　調也
七夕やおもふ事あらば文一つ　中星氏 重範
篠の葉や秋をしらする屋根の上　勝富
星の中やされば花より紅葉より　種秀
星は二つ空は一つに何もなし　一閑
七夕も今宵何やらしみた中　三州 三十息
秋風が中立してや夫婦ほし　柏木氏 源五一
指鯖やおなじ枕の星の中　宗作

秋扇

秋風に浪人するや武者扇　勝信

玉祭

そのまゝに八百屋がたなや魂祭　蝶〻子
桐經やよむともし火の影法師　爲川

杉葉たつ又六が爲か高燈籠　似春
夕顔や聖靈棚に駒むかへ　慶豐

花火

淺草の花火やむかし春の暮　梅水

踊

時に是をならふに似たり踊哥　器水

から子の踊かきし繪に
踊はねるちんぷんかんや三つ拍子　酒云

相撲

それ見たかさしもおもひし幡テなげ　小熊氏 調加

霧

風口や霧の海邊の大みなと　井上氏 安守

槿花

朝顔の花見にいざやきせる筒　億丸

荻

蝶々子こゝ近づきになりて後に
本町の風義やかたる荻の聲　雪前

萩

萩大名對の道具や鹿の角　幽山

芭蕉

二人ねよふよは芭蕉ばのゆめの内　酒云

虫

きり〴〵すなくは霜夜のすて子哉　武矩
せゝなげの水に音あるみゝず哉　政陳

鹿

武藏野や一寸ほどな鹿の聲　桃青
山か谷か木玉にきかふ鹿の聲　重秀

鹿の兼題を請て
鹿の句や三日かけて以前より　鶴遊
遠近や鉡日にしる鹿の聲　蝶々子

雁

雁金や秋はかならず御指紙　白洲氏 長短子
初雁のないてわたるや筆の先　泰德

月付二度名月
あげ藤や月にうそぶく氣色有　泰德
三日月や天水桶の内かんな　畧月氏 黃吻

かたり出すや扨もそのゝち月の友　疎元
月をのせて塩路かんなや船遊　蝶々子
遠山や月をかくして穴態が　嶺窓
懐に月やかくしててゝなし子　宗伴
あふのいてかうも御座らふ月見哉　村田氏 政次
今宵もや月を木末に杉楊枝　書林
万民や一輪みてりけふの空　立和
常さへも今宵の月や名を以テ　作者不知
海原や海馬も定てけふの月　在色
月をこふ人もや今宵袖がつぱ　調也
たぞ有か編笠もてこいけふの月　卜尺
さればこそ夜分のがれてけふの月　吟松
名月はとかふいふべきことばもなし　宗伴

十三夜雨ふりしに

ゆで栗の畑や今宵雨と成　在色
よう見やれ名残の月は合點か

碪

藁一束うつや番太が唐衣　見石
そば切や信濃に捨て麻衣　観了

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆　桃青

きくすりやなれば

我宿のくすり袋や菊の酒　正名
さかづきや若衆しのばゞ菊之尉　見石

紅葉

紅葉山や時雨またなん御成道　政陳
木枕や頬と顔との村もみぢ　一遊
朝風や紅葉をさそふ豆腐箱　重秀
時雨きや歌人乗ながら紅葉狩　露竹
鹿蔵やもみぢをちらす秋袷　酒云
あらめ橋かゝる所や紅葉鮒　宗因

芋

にて候高野山より出たる芋　同

茸

松茸かなるや徳利の口の露　重秀
是はしたり天然つぶて天狗茸　青夢

雑秋

火吹竹や虎藏うそぶく初嵐　岸松

家をやぶる盗人あなる野分哉　破扇子

秋風やかさねのきぬの下小袖　鹿友

雪前といふ人の許へ初て行

とふて曰秋風や窓の雪の前　蝶々子

傀儡師を見て

人形や秋風めぐるにしの宮　億丸

七十になりし＝那智高野をかけありきて

那智高野中にぶらりや年の秋　宗因

硯箱や色を替てもとば書　久保氏十二歳 清明

秋なれやまだき時雨の青たばこ　書林

誹諧當世男　冬部

初冬

大小は定なきかな神無月　泰徳

乘行や三方荒神かみの旅　破扇子

僞のないとやくだの神無月　可夕

錢神や馱ちん拂にお旅さき　宗伴

時雨

口切の時に使や一しぐれ　殊正

我まゝな時雨はぬれぬ袂かな　御

唐人やよい事あれば一時雨　億丸

ときは木や紺屋のあさつて初時雨　黄吻

落葉付散紅葉

風の通る道や木のはのはき掃除　政陳

目で時雨耳でこのはや二つ三つ　億丸

長一丈もみぢ亂すや鬼ざらさ　折子

夕風やもみぢを亂す油皿　酒云

霜

鉢坊や里をばかれず霜の朝　泰徳

骨我慢が身にも哀れは霜夜哉　宗伴

氷

雪や氷へだてゝ同じ歌連歌　作者不知

雪

初雪に數屋もあきれてたつたりけり　在色
初雪やたまりもあへず芭蕉より　書林
紫の雪ころばしか小豆餅　犬坊
傘やかうべにさせる雪の花　作者不知
密夫のしのび路いかに夜るの雪　同
何うたがふ辨慶あれば雪女　信章
白き事五色の外ぞ六つの花　秋田中嶋氏 政乘
典樂や皆白妙の竹の雪　嵐窓
茶の外や織部を以て雪の景　一松
此雲に彩色してやふじの雪　政陳
今朝見ればこもかぶり也雪女　見石

鷹

それ鷹やへ緒をひかへてしたひ行　石塚氏 隨柳

水鳥

龍田川紅葉鳥とや赤かしら　可夕
酒盛や嶋にすさきに千鳥あし　宗作

埋火

埋火やふらぬ雨夜のものがたり　秋田梅津氏 忠眞
夜るにきえて物をこそおもへこたつの火　同大橋氏 永春
炭は下地夏にいろどる扇かな　蝶々子

節分

除夜の鬼や屋形をならべひつしと打　慶豐
いり豆や鬼をあざむく其威勢　中嶋氏 良長
上下宿やそれは旅人の寶船　泰德
表向やもつてひらいて鬼の豆　秋田一部氏 風誰
候や此年こしも御無事にて　宗作

年内春

年の内に春は來にけり麹室　庄内佐々木氏 幽好

歳暮

人形もがつてんしたか年の暮　重秀
日本橋や渡りくらべて年の暮　蝶々子
そろばんのほこりや拂ふ大晦日　柴女
掛とりも狐はませよあすの春　玉井
節季ぞろが横手を丁と是は拍　重秀
明日の春をかたげてくるや山の松　京 千之

月次おさめに

連中やざつとめでたふ年の暮　蝶ゝ子

清帳や先に以上に年の暮　宗伴

雑　冬

嶺の松障子の引手冬籠　政陳

裏替や踏皮を新にするに有　立詠

寒垢離や身のしろ衣荷賣店　作者不知

唐がらしやつこが袖や冬支度　政陳

ふぐ汁や生前一樽のにごり酒　卜尺

ふぐ汁や其外悪魚鰐の口　泰徳

那須の石玉川の水ふぐと汁　一鉄

薬喰やきく人かんを催せり　泰徳

煤をはくや鍋釜そのほかむさし坊　重秀

寒聲やそも〳〵是は番太良　書林

これや見たか當世男年忘れ　宗件

誹諧當世男　付句

春

しれた事よいのらずとても君が春

いかにも門は千代の松陰　小西氏 似春

跡末を幾書ぬらん筆始

さしもおもひし歳旦のうた　作者不知

たつた今一ぺん通る雪なだれ

面八句をうぐひすの聲　良長

不思議やな枯たる木にも花咲て

ちゝんはい〳〵うぐひすの聲　太田氏 宗作

文使とり違てや歸る雁

北條殿に霞たな引　荒木氏 可馴

をつときほふた四方の初空

酒一つせよとや山も霞むらん　似春

卯月八日は來月の事

一霞あたらばあたれなんのその　蝶ゝ子

さだめのとをり傳馬は出しつ　西岡氏 泰徳
日本橋より年のあけほの
駄賃付さだめの通り雪消て　藤井氏 安昌
柳はみどり人は祖父祖母
昔〱あつた堤の雪消て　良長
鶯の聲肝をつぶした
殘る雪うそをついたるごとくにて　野口氏 在色
品川海苔よ扱はめづらし
雪汁にすこしあしらふ芝肴　似春
朝霞立出て見て人がまし
名もあらばこそ花に短尺　作者不知
きつたといふ聲遠山の色
巾着や人目隔るはなの雲　蝶々子
夢も破れて殘る彌二郎
扇拍子花は嵐の音にのく　酒井氏 青雲
されば大師のいにしへの空
あのくたら花は三百三十本　風虎
いな顔つきや衣手の露

寺の花もゝ尻にてぞ見られける　蝶々子
花の下歸らん事は旅行の暮
かゝる折にも桃の酒樽　京 可雪
大竹そびえて青陽の空
關札や東風も都にのぼるらん　小澤氏 卜尺
革足袋はのこんの雪に德も有
東風かぜひゞく皿や天目　蝶々子
臺所匂ひおこせよ生肴　坂口氏 定之
木魚のひれに氷流るゝ
春風の聲は有けり蛙股　蝶々子
四十年來嶺のしら雪
其道を遠ずしてや歸る雁　同
色〱のことばに花をさかせたり
品玉にさへ種おろし有　同旨
やあしばらく花に對して鐘つく事
春宵一刻石町の暮　定之
道づれとなる烏追も有
淺草や春切米の拂かた　宗作

夏

卷頭に卯花をこそ出されたれ
十人揃て山ほとゝぎす　成田氏 常俊

流され人のその耳のあか
郭公足ずりをして待あかし　良景

くらのうちまで五月雨の空　宗併

草の庵夏を一種のたのしみに
茄子の煮物やまほとゝぎす　桃青

明松出せといふ五月やみ
錢の數おほつかなくも郭公　蝶々子

行衛もしらぬやれ郭公
たち花やむかしの袖の古着買　幽山

紹巴其時かしらをかたぐる
五月雨日向の守がしたごゝろ　宗併

長門をさして山郭公　在色
御評判うつたり太皷郭公

さあ〳〵とじや五月雨の空　泰德

たる泪くらさはくらし雨がふる
五月のかげにあはす左右の手　書林

納所坊さすが名を得し其身とて
扇うち敷おふせいたゞく　作者不知

朱印とていたゞきまつる朝耶
さらし一疋何にたとへん　吟市

蚊の聲に斷食さする紙帳哉
とりもちの上繩の禁足　幽山

秋

間鍋の鉉についたる土左衛門
やつこ豆腐に秋はきにけり　立和

何としたいやたつ今夕月夜
あつらへて來るそば切の露　作者不知

宿札は物まう中虫の聲
かるたをひねる袖のしら露　嵐定

辻風の荻のうは葉に渡るらん
からかさ虚空に露ぞこぼるゝ　嵐松
竹馬や足にまかせて月の暮
風なき時は子ども露ちる　泰徳
さげ重や梢の色をかい敷に
なくやらんひねりもぐさに虫の聲　政陳
お白砂さして露時雨行
すは〳〵影もうごくつき鐘　蝶々子
眞白な露はさながら霜夜にて　宇都宮 猿口
見付筋二十三夜の月待に
屋内繁昌濱松の露　泰徳
むかはりや吊ふ袖に露ぼらり
みそはぎのすゑ例の秋風　遠州 重慶
瑞籬あたりを掃ふ葉うり
はやる花火を君はしらずや　宜時
三笠の山の盆の月かも
一をどり奈良の上々袖はえて　似春
ようひが鳴にさそふ秋風

日本橋一本鑓に霧はれて　政陳
有明の月鏡とぞあり
遠山にのつとつたる霧の空　卜尺
ちろり〳〵と見ゆる也けり
松むしのちんと鳴しをとらへ來て　道頓
杉の下より駒はいはい〳〵
瓢箪の紋をひかへてしたひ行　一閑
海上に見えたる物は月計
きいたか〳〵今のかりがね　作者不知
落す茶碗のそこの露ちる
鼻のさき棹に成たる雁の聲　卜尺
とかく中間は手形つく也
挾箱の月に一組名を呼て　宗伴
目がねによする一葉の舟
飾箱にたくみて月も作りたり　鶴遊
やれ行幸は俄がましき
是は扨壽永の月をむだ〳〵と　良長
引こみ頭巾なむあみだ佛

我主を月の夜かげに見そこなひ　猿口
されば風にはなびく秋草
爰に又君子の心月晴て　作者不知
炭やきが霞を酌に果もなし
八王寺から月のむさし野　定之
水道も見なぎりおつれ秋こそは　蝶々子
青き眼のよき座敷ぶり
猫間殿おいでなさるゝ月更て　在色
ひら茸かりを泊り懸にも　蝶々子
さかづきの興を催し詩を作
三五の月は何より以テ　信州高野氏 友心子
名月に鞭をうつてや出ぬらん
まはらば三里芋畠かも　好茂
喰物とては常に腎薬
我庵はとつと是より山の芋　中川氏 友元
秋風やうら店迄も通ふらん
新酒何升使同人　福嶋氏 順正
いつの間にやら結ぶ白露
きのふ迄早苗取しが錢ざしに　泰徳
ねられう物か此長き夜を
二つ三つ酒あたゝめてなふ申　立些
筆つ虫そむる懐帋の大笑
具足櫃にも秋風ぞふく　宗作
當年は又めづらしき月出て
おほせのごとく秋風ぞふく　如流
その葉の紅葉はかうも御座らふか
いかにも〳〵時雨ふる秋　宗因
衣川浪もたつたる其氣色
尾ひれをうつて鮭のぼる也　重慶

冬

さればこそ棒の先より一時雨
木のは衣を着てさとり顔　作者不知
わすれがたしや付ざしの酒
うそ寒き夜さりはさすが恩愛の　蝶々子

朝朗てうどまいつて候よ
かゝるさむさを酒でなふては　似春
今一筆はのこしても哉
此雪をなんともいはぬひが〱し　愚鈍
ふぐ汁や其外悪魚鰐の口
のがれがたしな雪に大酒　岡村氏 不卜
あかしの岡の竹の子の皮
板行に通ふ千鳥の聲添て　卜尺
夢なれや三日さらして其後に
寒の水さへ風わたる也　幽山
ひざをいるゝにやすきうら店
置こたつ有にまかせて冬籠　宇津宮 調味

神祇

やつ七郷に誰の御子息
二柱ふとしくたてゝ宮まいり　宗伴
杉の下枝に八りう鉦あり　利武
古郷に八旬にあまる親もあり
文の使によね守り迄　不卜
逆鉾の昔の春や春知らぬ
たつて見居て見拝む神前　泰徳

釋教

跡や先にと修行者一人
なむあみだあみなむあみだあみなむだ　幽山
喜撰法師がうてる（一字不明）やい
空の月雲にのこれる法問に　宗伴
いかれる額よする川なみ
水上を尋て見れば瀧不動　吟市
一七日は涙なりけり　蝶々子
柏木の數露ぞこぼるゝ
さればこそ千部を誘ふ荻の聲　青雲
是正眞のあみだ佛也
よべばこそ來れりといふ齋坊主　一水

風の手よりもふいといふらん
結ぶ印太虚に渡る物なれや　蝶々子
數珠さら／＼と其時辨慶
代待は五條の橋に立あがり　作者不知
難行苦行嶺の白雪
齋料といふ聲高き松の風　同
水の月よつてのぞけば朝日影
都のたつみ來迎のくも　風庇
ね起にうがひし拜む寒月
かすめきの喝といふ字に悟を得　作者不知
琴の音ひゞく草の花瓶
霧晴て芥も爰に持佛堂　幽山
百韵は是迄なりや歸るとて
すなはちふけんをとふ何年忌　吟市
なまぐさや茶船をかりて釣垂て
なふ／＼お僧は醫者にてゆか　作者不知
其時に不熊童子一かなで
地獄やぶりや普代の侍　宗伴
番錢たまる過去帳の面
外に又六道の辻ごみの事　在色
程なく鐘樓に雲ぞたな引
やあ暫く一紙半錢山と成　清定
三途川質に置てや流すらん
あはせかるゝの釋迦もむなしき　見石

戀

紫の雲のかけ橋一筋に
及ばぬ戀をふんどしのすゑ　宗因
戀すてゝさつてもといたりくどひたり
この文ひとつやんれそこ迄　泰德
泪にむせぶわかれ際うき
千話文や又都にと有しかば　見石
そもじなどとめやうこそは有べけれ
あまりみぢかひめでたくかし　嵐松
老のかしらと成し仲人

文箱もあけて悔しき戀心　蝶々子
よもさらふとはおもはなんだが　在色
松のはのかけどもつきぬ勢にて
こまざらひほどよせた千話文　作者不知
羅綾の袂お歸りを待
水莖にちいさきかぶろ先にたて　種秀
涙はら〳〵送る千話文
なびかぬはあゝなむざんや戀心　一治
胸の烟にまがふ炭竈
戀ゆへや靑ふてほそくやつれたり　作者不知
是非ともとこそおもひいれたれ
誰もかも戀のこがねを玉手箱　西岡氏十二歳 勝女
木枕ひとつ哀れ世の中
かなはざる事は手子でもゆかばこそ　可雪
蚊のどく跡より戀は責てきて
胸のけぶりやもゆるおがくず　卜尺
うきおもひ御用の物と成にけり
戀の重荷や大木大石　蝶々子

下女があかゞりさえ歸る也
夜ばいする比は睦月の末つかた　宗作
一七日はなみだなりけり
別鍋のこがれて物や思ふらん　嵐窓
猶やうき目を水鳥共虐のけ
幾田川人がはまらば我も又　泰德
心中づくにふせぎたゝかふ　蝶々子
いつ迄くす〳〵もゆる胸の火
戀衣今はあだなり革羽織　見石
音せねむしはしらみ也けり
落し置ふるふんどしの主は誰　作者不知
夢はやぶれ衣きれ計や殘るらん
くゝり枕のふるされし中　吟市
百一つめときぬ〴〵の時
鐘の音もやれ〳〵形見と成にけり　村上氏 武矩
戀しき人を夢にすこしも
今の世に反魂香がたかれうか　泰德
夢や夢うつゝやうつゝとてもなや

枕が戀をかなはせた今朝　春廣
長し短し君が心ね
秋の夜もかたる間はないもいなふと
うしろ髮ひかへて少袖の下
道盛その時かたものものを　蝶々子
どん／＼と心せかるゝ別れ時
ふたりの中にまつり渡して　心友
おなさけを一盃請て持にけり
たがひの心中神水にあり　可別
さあふくと驚れぬる風の音
男めづらしその嶋のもの　酒云
そちへよらしやれかみ爲の聲
うはなりやうつて腹だにいるならば　同
佛道をいつに忘れて戀心
ぼんのふあればお大黑あり　思計
數珠さら／＼と露も涙も
恨みいふ二人の中を抑隔　立志
南無三寶思はぬ人をさぐりけり

君がこゝろはさうでないもの　在色
下女がなみだの袖のかい敷
からし酢でもゆかぬ恨をいかゞせん　蝶々子
しやくになりたる共胸の月　嵐松
戀ゆへや枕に殘る汗を恨む
その面かげもこはき夢なり　友光
出ふねの酒をすごせ道づれ
下べいかで名殘を惜む歌も有　蝶々子
双六の石のかたくなこゝろ
能きけば沙元來おとり腹　立知
かたみの小刀鰹ぶしかく
そば切や三とせは爰に戀衣　長俊
錺屋のむかし年ぞ暮ぬる
くどかれしその前髮も今は扨　忠義
一匁ほどなみだおち來る
戀病や今はみいらを賴みなん　作者不知
幕の内にもちりてんの春
屋形船君をばしゆごしたてまつり　一閑

竹のふしをもぬくおもひ念
君すまばながしの樋も忍びなん　作者不知
いたづら事になつた世の中
むだ夢や何にたとへん朝朗　一友
夫婦のちぎり結ぶ繩帶
心中や一つの利釼を額にあて　書林
こは何事ぞしめ出しのさた
ちかひをば見る迄もなし小指の血
くひつきぬるもいとしけれやこそ　蝶々子
その中や餅に砂糖のあぢ物じや　立和
東へまはつて夜這をぞする
他屋の事月頭には影もなし　酒言
からうすの音に驚く盗人め
となりをきけば密夫のさた　心友
廬路からも盗人通ふされればこそ
大事のとよあのまおとこは　不卜
泣別れさらばと云て又さらば
あげ屋のかどの末の横町　作者不知

たぶらかすとり／＼化生の其姿
太夫格子に又はしつぽね　泰徳
幣にきる紙さら／＼と押もみて
しなこそかはれ太夫の床いり　笑種
唯世の中はたばこ一ぷく
名もよし野命也けりはし局　観了
あたまをこそと行衛しらずも
我おもひふじの烟とよまれたり　調味

無常 付哀傷

しつぺいや夕ア／＼に替れ共
浮世はゆめの前の關白　吟市
哀れはかなきえんり江戸橋
火打石電光朝露まの前に　作者不知
どこへ行やらぶらり／＼と
果は皆魂ひとつとんだ迄　第二
詮儀つまつて唯ほとゝぎす　長俊

常〲に思ひの外と成にけり
達者であつたがいとし若死　井上氏 安守
白かたびらにまがふ白露
といし時桶と答て消なまし　一閑
かすはきや跡より癪のせめくれば
せんかたなみだ臨終にあり　信州 重村
ふすべらる烟は紫雲と立登り　利武
鐘の音にぞ氣を付にけり
ひつくりとよみ歸りぬる夕時分　風虎
鶯はなくより外の事もなし
からだをうづむ雪のむらぎえ　作者不知
足をこそすれ〱
きえふ物何ぞと人のといし時　勝女
なみだの雫手だらひの露
剃刀や此世の外の初あらし　宗伴

述懐

むかし〱をかたり申さん
なまめける扨も其後姥となり　光友
洪水や淵は瀬と成きのふけふ
ながれてはやき質物は何　有靜
後は又大笑にやなりぬらん
悪事ばかりがつゞかふものか　柴女
かりの世間よ雨ふらばふれ
なんの其月もる宿も晦日切　作者不知

旅

から尻馬のはやき雲あし
狀箱や風のかけたる棒のさき　幽山
盃や是迄めぐるにはか雨
關もり跡から此橋のかけ　泰徳
旅人既に趣く方に夜は明て
まくらをゆするすゑの波風　作者不知

侍と又侍がゆく道に
見そこなふたか渡し錢とは　海野氏 宗市
やう／＼月は出て山崎
御覧ぜよ都を隔る花の雲　壽信
無間のかねも殘る夕暮
のり懸の右に見えたる山おろし　仙風
ふきつゞきたるみんなみの風
見渡せば紀の路の遠山渺々と　作者不知
あふのきて見れば靜な春の暮
ふじのすそ野で歌が御さらふ　同
おたづねはかたじけなしや嬉しやな
かくて都の町も遠／＼　鶴遊
鉄炮のあらためのある番所
一位とる共明年までは　宗作
御袂をのほりの先へ結付
何丸彼丸無事に川口　同
手だらひ程に見ゆる湖
鐘（讀）山いざ立よりて詫そらん　宗因
向ひにあたつて畑出し有
大山の見え候は富士候か　見石

雜

手板のかねによその夕暮
かまほこの杉の昔は初瀬山　幽山
うこんとかやはふは／＼の色　青雲
下男若をたゝむで釜の下
納豆に引瀧のしら糸　卜尺
いさみつゝ敵も味方も名乘懸
三盃つゞけて亂酒とぞなる　可別
はかりで其色としらなかりけり
酒にえふたは米かみ計　蝶々子
しやんとしたるはよき物ぞかし
酒の上水増水を申つけ　忠盛
こもかぶりいづれおろかはなき中に
風味のますは南部諸白　立袋

初瀬山金もへりたる物思ひ
二もとの杉くさる桶かず　蝶々子
古かねの見世みちのくの末
さあ御座れいづくはあれど地黄塚　同
小藥鑵に入目(日カ)を洗ふ沖津浪
漁村の夕部山歸來のむ　同
万木千草夢想也けり
賣藥いかに鬼神も慥にきけ　作者不知
五ヶ所の糸の別れてぞ行
脉は先師の臓より顯れて　宗因
二月二日是迄なりや嬉しやな
塩やいとにはねきりはつきり　不卜
見ぐるしきいほといふ物ゆひて　同
いでもの見せんとだい〱の汁(シル)
油おとすそこのき給へ人〴〵よ
ひよか〱としらぬ男の寄きつゝ
もし旦那様此うは書は　蝶々千
せんじやう生姜を入て常のごく　宗伴
ふじの横雲たつた今こそ
法印が筆にまかせて何十歳　笑種
屋敷方はり合に成露時雨
誰まとより入札のおも　鈴木氏花鳥
盗人をとつておさへてつらくはせ
百がものあるくまがへの市　蝶々子
風の吹しく敷皮の上
錢指もつらぬき留る雨替屋　幽山
月の中の桂は凡何程ぞ
かねにてかはん雲の一むら　桃青
御白砂のさき春雨ぞふる
使者奏者思ふ心の底意なく　宗伴
新發意も今引かへて長羽織
清和のながれおかち奉公　在色
爰元へ罷出たる舞臺先
からかさもつてあぶない事や　蝶々子
あの躰で中〱住持はかなふまい　泰德
おもひやるさへきのどくな事

親の目にもあまるあの子が行末も　直重
たゞ見て造る船つき賑ふ
いやが上とみを重し角の倉　作者不知
洗濯するやあまの羽衣
うら店やなへ共つきぬ繩暖簾　蝶々子
一字のかけの水くゞる也
され板に軒の雨だれ音添て　淺山
荷ひ賣折節あたりに松もなし
莚屏風にかゝる羽ごろも　作者不知
子どもをしるべうら店の月
船板や聲を帆に上げちんめくら　蝶々子
筥ひとつ前に抱て柏子有
口にはうばる竹釘の數　高遠本田氏 重時
長嘯の心にかなふ筆つむし
壁にむかふは徹書記にこそ　幽山
楠は天水桶をゆはせたり
鳶居させじと未來記にこそ　宗伴
源平たがひに請負をする

海の面一町ばかりごみ捨場　同
あたまはえしに人たかりけり
日本橋けふ三日に及迄　同
遠〳〵と見やる末野の御本丸
松原つゞき下馬の札あり　淺井氏 滿政
ふじのすそ野にうてる穴一
田子の浦さざごなんどがあるにより　可別
そこさへにほふ袖しらみわく　蝶々子
さゝがにの蛛や以前の舟大工
八丁ほりとかねてしるしも　鶴遊
丸頭巾二兩重てざつくと着
まはれば三里烟たつ也
下知して曰名主その外
手あやまちよはきに風をふせがせて　良長
長刀の柄もとをはしとけあてたり
何あみそのとき眼をきつと　作者不知
としやおそしと出る食堂
鼻ねぢやもつてひらいてそれ見たか　同

なで付の神を懸たる誓の末
やはらといつぱ鹿嶋一りう　青雲
御傳馬に驚れぬる共風情
誰もかくこそあはれ科人　同
むんずとくんで新枕する
欠落者三年めにて見付たり　調也
一首はかうぞ犬がほえ出す
盗人やさすが名を得し共身とて　作者不知
池の端にて口をこそきけ
目あかしは見知たるらん鬢髭を　長信
相店はとなりゐ替てどちへやら
いたづら事も三度に及ぶ　蝶々子
撫ぬるや佛のつらを何（一字不明）　立志
入道殿のりんきふかさを　泰徳
迷ひ子のそのうしろより立廻り
これほど多き人の巾着　蝶々子
大方推量中番太郎
巾着の御用心とぞよばりける　酒云

あづかりものは札に禁制
見渡せば山も霞の酔紛れ　松屋重治
あかうら頭巾ひくり返して
御望に又判官と有しかば　卜尺
雨陳（陣カ）互に竹杖のさき
見しつたぞそつちの矢倉はくろ矢倉　見石
先度もこたつのそばに子がゐた　蝶々子
見わたせばせと物見世に香合
しめとりもあり飼とりも有　作者不知
戀のうた仰付られかしこまり
三味線の手を引ぞわづらふ　同
戸棚にひゞく山ほとゝぎす
鼠さへ誘ひ顔なるさよ更て　伴氏貞次
あみ笠や數さへ見ゆる幕のうち
えいや／＼に太皷三味せん　淺山
あの格子はゞが五間に横八間　酒云
鼓峠に繩ばりぞする
せこに逢て狸も腹をかゝえたり　作者不知

彌陀の三尊兼てしるしも　同
　浦浪の聲をしるべに恨ごと
あれは松にてこそ候へよ　泰德
　そだて給へよいづれよい子じや
金本の心にあるぞ新芝居　同
　逢てこそ白し黑しはいふべけれ
血くさひ目にも日取善惡　蝶ゝ子
　さのみえはふかもそつとまいれ
夜は更つねさせらるより外はなし　作者不知
　乞食をして七十五日
初ものを我もねぎるがくるしいか　調也
　燒亡はきのふと過て葛城や
あな藏のふたあくる侘しき　桃青
　人丸が目にめじろとや見る
押あふたり共席しかも十八日　蝶ゝ子
　名釼やもろこし迄も隱れなし
とさら今はよろこびの折　殘松

此一まきのあらまし、今世の風義として人ゝの學ぶ所也。
翁の集置れしを、けふ校合に及びて書堂におほせるのみ。

太田氏
宗伴

俳諧雑巾（はいかいざふきん）

甲・乙　常矩

滑稽雑巾　貳百韻

すべてよしとおもひてあつめしかども、今見るに自句我氣にくやしければ、他句人の心にあまねくはいかでかなはん。ふるきに似たる姿もあらば、古風をたふとむたぐひのなぐさみにもならむ。新しき一ふしも見えば、今やうをもてあそぶやからの友ともなれかし。可不可は千差万別ながら、よしと聞えんはその句の譽なるべし。あしといひけたれなは、作者の科にはあらずして、撰者ひとりが罪也。世人見ゆるしてよ。

俳諧雜巾

春之發句　部立混雜

元旦

吾國や千頭植る大蓬萊　玉尺
いつ彌生山伏籠の雲を着衣始　露沾
ほの〳〵と熨斗目たなびく春社けさ　順也
神代にぞ刮り初て若夷　加州小松堤 歡生
此朝ふんどしゆるし若夷　友靜
誰が言ッしごまめのけしき小蛤　信德
橘や宗祇のにほひ髭野老　遠藤 由卜
穗俵や雲柑類の跡をうづむ　宇野 定治
初聲や其日の鷄明なりける春　加州金澤高田 貞之
つたはれり守武かづらなをも春　谷口 重以
砂敷の都の聲や禮雪踏　宇野 利次
山あつてころ柿白く柑子黄也　如泉
蓬萊や高千穗峯よ年の山　常矩

蓬萊や米高うして武家の春　備後長屯 和洞

はじめての老を

いかに寢て手水はじめのさゝれ皺　磐田 宗雅

同じ心を

よしや春齡(ヨハヒ)とはれて耻はじめ　小嶋 如雲

手鞠哥下棚姫の春ぞとて　小野 介木

初穗長牛房の杣の下草哉　北村 如葉

千代高し國の鯆(サチホコ)掛小鯛　渡邊 氏常

鳥追や人手を拳(ニギレ)ば袋を出ス　增山 直貞

古錢數寄太平廣し代ゝの春　森 茂清

干(ホシ)鰯民のもとなり國の春　岡田 扇風

遠目鏡天下道あり君子の春　伊勢津住柴田 一陽

神の皿いかにまがへて糊屋の春　曾谷 一有

初夢や獏(バク)が齒固枕の今朝　猪飼 常可

あゝさうじや日本めでたき門の松　三井 秋風

門徒の春松はしるしもなかりけり　宇野 慶之

初茶筅御製のかまどけさとても　下山 一帆

強牽惟王ノ所ナリレ止ル　小川 虎慶

りうたつや未來をうたふ千代の春　川井 正長

人魚のひれ吸物に見ん君が春　美濃高須住 西斯

鯛ふるし人魚やつらん若夷　坂口 鹿丸

初聲や鳥うぐひすわか夷　抃悦

江戸かち栗一天かたし武威の春　中林 陳次

ちよく紅粉や爪の跡絕ず筆始　女 さは

山つくる少(スクナ)彥名(ヒコナ)や小殿原　豐長

角(ツノ)大師たつや元三かざり炭　中林 常二

初鳥に世のかけごひの鬪もなし　福嶋 宗俊

けふといへば貨物飛脚も初鼾(イビキ)　一味

初音哉初朝戸出の麻袴　運 可因

羅髭もけさこゝろ見ん供の春　彥根中河原 八々

三年米天の羽衣民の春　同住佐藤 中々

天秤や檜の木の鳥井みしめ繩　士候

麩や男蹞(キビス)ゆたかに春なれや　荒木 可定

若夷あらはれ出つ石の海　彥根近藤 曰々

鶴の札ためし朽せじ代ゝの春　如生

鳳凰の庭籠や出て天下春　野本 和文

君は船水からくりや都の春　潟 淺 勝直
若夷婆利簺女をや釣給ふ　喜多村 一遊
佐保姫や足の食粒わかゐびす　重魚
大黑のつちやこふしやおさなゐびす　石田 一之
初糸や問丸明てわけゐびす　森 喜清
立砂の千坂の春や代ゝの數　海老名 可寛
卦引紙御代や寫して天地の春　松井 金生
火消番や燒鳥に足緒御代の春　焉求
革羽織袋に裁ん御代の春　彦根森川 可ゝ
御代なれや箔屋が卑下の氷樣　加州宮腰久津見 一平
國玉子黄むく白むく初重　清家 口樂
延寶九年のたくはへありて民や春　彦根 廣千立
正直や猫の頭をえ方にかざれば　同青苔軒 久ゝ
☰☰や春をむかへてかざり炭　員明
穂俵や炭のいはほの苔むせる　和田 一思
まき砂や大門樣事四方の春　池田 淨堅
羽箒も住やならへる柱の春　加州小松 木端
雜巾もこゝろありけりけさは春　寺本 元三

餅屋方杵が朝寢や四方の春　井口 久信
なしてゐや雜煮はるかに滿珠の芋　川野 不水
蓬萊哉琥珀の橘珊瑚の海老　岡田 雨夕
よね山や北に構てにしざかな　磯田 宗利
春若し袴十徳綿被　喜多川 祇元
捨りけり岩井が家職御代の春　美濃高須 常イ
殘更のかねかけ松や門の春　柳澤 常益
遠山松それはなつかし門かざり　加州宮腰杉野 閏之
屠蘇の瀧卷昆布の耳をあらひけり　中村 匪名
蓬萊にはころ柹の猿あそびけり　野拙
むくろじの十かへり深し繪具の松　荒川 和充
氷砂糖けふやとくらん諷初　大津 治周
茯苓や世に千年きくヒ始　醫師 如春
初買や富る事をしつて若夷　加州小松瀧川 宗好
一に鯛ふむや蛤わかゐびす　岸田 光之
打鎰やかけたてまつるわかゐびす　森 重國
面黑や神代の御影わかゐびす　前田 元種
え方の神笊籬にいらせ給ひけり　幸夕

とゞめたりやりはね乙女松になん　河村 友之
裏白やむしがれかざる納屋の春　伊佐 杉嵐
筆始是文を好む竹なるべし　坂口 一閑
四方の皺波しづか也樂の春　山脇 正次
年既に八聲に白しちやほの空　和州小泉 白歴
八番に祝言うたふ初鳥かな　加州小松武部 正儀
屠蘇酒に額の波や緋縮緬　松嶋 永之
屠蘇袋酒の和泉や紅所　加州金澤高田 貞之
屠蘇袋世や赤染が榮花の春　一味
蓬萊や麓に銚子の海をたへ　加州小松堤 歡生
門松やよも一きいて千代の聲　同
千ゝの松武門の綠手にみてり　彦根佐藤 中ゝ
色ぞ春錫蒟蒻千代根草　直貞
おりはへて裏白凉し棚やしろ　定治
裏白やしき波こえて長鬚國　如葉
穗俵に千代のさし櫛や嶋の龜　常二
二階羽子むすめやおもふおろの影　陳次
ながれ哉下盃の四海初御禮　加州宮腰久津見 一平

蘭奢待國にとめてやきそはじめ　茂淸
老萊子面影からんきそはじめ　如雲
仕付苧や三わけのこりて着衣始　女 さは
兎の毛にて硯なからなん君が春　可定
御神妙に万代の初段春の聲　友靜
万歳のかざり炭や牛玉の龜　宗雅
掛小鯛南京あやつりなりけりや　利次
齒朶が原や相生小鯛波間より　吉岡 元親
ころ柿や霞よこぎる穗長原　慶之
裏白や五歩に一葉千尋の繩　草川 休嘉
太箸や民の檜木二葉とも　常矩

初芝居

あすもこんほのじの玉川初芝居　加州高田 貞之

人日

けふ賣は七草薺よなあぞなぞ　加州小松駒井 正堯
若菜や今朝俎板時〻鳴之　河村 友之

十五日粥

小豆嶋めぐるや天の粥柱　北村 吉長

具足餅

武家餅や小豆下濃の御きせなが　岡田 則長

梅

いかに猫我すむ障子梅の風　彦根青苔軒 久ゝ

梅の花後家が軒端の東風ふかば　常矩

浮世袋ぬふてふ鳥の梢哉　如葉

天神奉納に

梅にやどる鳥井縫てふ笠木哉　加州小松堤 歡生

同じく

此梅花實や色にそみ神めでし　同住技醉軒 木端

奉納同千句卷頭

梅の神國に文臺盛なれば　重以

おなじ時に

梅とんで鳥ちやるめらを吹にけり　利次

北野にて

ありとやこゝに栗餅來鳴神の梅　一味

紅梅や誰が袖ふれし疱(イモ)の神　彦根佐藤 申ゝ

師の一周忌に

伽羅盡たりことしも梅は匂へども　大津住 治周

作州榮春興行に

高田心文好む木にかはく間も　常矩

鶯

鶯や貞安ノ曰論の外　加州堤 歡生

鶯にいかゞこたへん澁染屋　樋口 當清

子飼を興じて

鶯や又谷たのむ小摺鉢　木川 想例（渊か）

同千句卷頭に

鶯や法樂千に句をひとつ　如雲

猫妻戀

男猫あり妻むかへ船蚫から　一有

恨ては爪の數みんかよひ猫　可寛

かよひ猫こなたの里に犬はあれど　坂口 一閑

おもふ事いかでたゞにやあ猫の戀　木村 重善

軒礫よめ入猫の夕かな　吉岡 元親

海雲

八重海雲龍の宮垣つくるとかや　可因

無心して沖を出たる海雲哉　備後小野 福富

餅配

もろこし餅配りをくれしよしの山　友静

出替

出替りやそれもさるものにて今一季は　加州松任 薫煙

出替りやうら屋によする釣小舟　利次

出替りや伏見の里の筒もたせ　川井 正長

飯蛸

飯蛸の足なかりせばもぎ茄子　氏常

飯蛸やふせる旅人明石潟　友静

うつはものに手づから飯蛸とりてけり　吉岡 元親

初鮒

初鮒や關の杉さし越ゆけば　大津住 治周

田螺

牛の子にふまる田螺とィ有ける　當清

若鮎

若鮎や大根防風の峯をわけ　閑 求笑

涅槃

餅散て鼠も鳴り涅槃の枝　如春

針に目あり世界の泪縫涅槃　陳次

紙鳶

鳶幟いつぞや糸をひかれしかば　淀加藤 咋木

色繪烏賊天に花咲地に子あり　今喜多 笑種

春雨

古足駄化て出けり春の雨　友静

春月

腎は意也哥人の見たて春の月　伊勢津 一陽

嶋村蟹おもかはりせん春の月　重以

蛙

哥さへぞしなびたりける干蛙　介木

筒桶や蛙子ひちてわらび繩　野拙

蕨

與をとはん黒木がうへの初蕨　秋風

土筆

つく〳〵し千躰佛の羅漢と見えたり　由卜

花

和人参花より外の種もなし　利次

いかに茶屋明智なしとて花の陰　雨夕

へぎ守や花物いはぬ陰ぞとて　友之

町かねは山に捨けり花の時　大津住 治周

千金あり質屋の目にも花の時　加州堤 歎生
編笠賣初音告けり花の時　同
人くさし鬼なき世なり花の山　宗雅
短尺や泥よりなりて花の山　彦根 廣千立
山は花都女の咲にけり　介木
花の山松根によつて巾着なし　加州小松 一笑

東山にて
花奢り丸山兀としてあほう騒　等通
右所花をぞ朱引よしの山　佐久間 圓齋
さきがけて花氈見せけり荷ない棒　加州小松駒ヶ 西堯
腰ぬけやうたがひはれぬ雲と花　同住堤 歎生
鍋の尻朝に嬉し花ぐもり　陳次
今に花草履作りや錢の雨　彦根 久ゝ
花ざかりあぶないものはなかりけり　大津 倘白
塵劫記いや花にあり男女の數　焉求
相場米花におさるゝ都哉　茂清
よしやともいへ花見硯に筆のおほき　加州金澤六西 宗規
花清水都のたつみ鹿藏供　同小松瀧門 宗好

祇園にて
小袖幕ちもとの花やちらし紋　女 さは
茶の錢や馬におぶせて花見駕籠　加州宮腰杉野 閭之
駕籠棒に六尺すゝめり御代の花　同金澤 貞之
杉重や下戸の草くき花の山　露沾
花の雨四方の上戸をうるほせり　行田 長和
花嫌ひ浮世の上戸なかりせば　陳次
花ざかり上戸の腹や沖の石　直貞
山酔り花に都の底たゝく　一味
世は花見留守居ひとりや酒はつれ　備後福山住 福富
花守に水銀呑すちろりかな　如春
柳はみどり花は暮方酒は京　坂口 一閑
酒遠し花にのまれんさもあらばあれ　重以
ひとつにはそへ哥もあり花見樽　伊勢栗田 一陽
花貴て樽は地獄に落にけり　宗雅
費長房柄はよもや花見樽　彦根中河原 八ゝ
世の泣言口をとめけり花見樽　茂清
樽さそふ庭ぬけ風や花ならで　一思

禪寺の花に暮して

花いかに狗子の佛性樽の暮　常矩

かい敷の青葉になりぬ花の鐘　同

鐘突の目くらか扨も花ざかり　加州小松住 歡生

祇園にて

花やちる諸行無用のかねの聲　同

黃檗にて

花に鐘其外木魚鰐口など　宇佐美 兒齋

入あひの踵に花を見せしよな　常矩

下り坂入あひせばし花の山　宗俊

家つとや桃灯の餅花の暮　一有

家に鼠國に奉加あり花の風　彥根 久ゞ

茶辨當しろく灰がちにちれるや花　秋風

花散て後はいぬことなるものを　彥根佐藤 巾ゞ

櫻

挑灯やよるの枝折のさくら陰　如葉

哀とおもへ我にごまめを山ざくら　友之

四五日の都ありけり山ざくら　利次

山ざくらはすきり鼻を見せにけり　常二

乞食が目には暮唉にけり山ざくら　雨夕

腰辨當羽織ぞいのち山ざくら　彥根青盲軒 久ゞ

小袖幕いづれさくらの梢ぞと　一葉

ちろりこそいとゞ櫻はめでたけれ　一遊

杖突もけふこそさくら棒のさき　柳悅

櫻風呂よきてふけとは花にこそ　昨木

檜物屋よ門は櫻ぞとぢつらん　重以

雪吹よの指田が家のかばざくら　友靜

やは見捨ん琵琶の大臣のいせざくら　如雲

誰が言し飛脚到來江戶櫻　如山

木柾皷に熊谷ざくらなどはよも　淀 昨木

立春てより七十五也姥ざくら　加州小松堤 歡生

生醉の無念はらしぬをそざくら　備後水野 福富

櫻鯛

生櫻科は陽吹ぞうらみなる　介木

遲櫻夷の手風もれけりや　常二

上巳 付タリ桃

帝雛民のむすめもにぎはひぬ　陳次
小屏風の殿つくりせり都雛　介木
女夫雛けふや屏風の八重垣を　元三
大宮姫柳かざしてけふや雛　可因
けふとてや紅(モミ)の媚ある衣裳雛　女 さは
雛膾皿不ノ字をなす初献の日　口樂
胡粉のかしら桃花の甕(モタヒ)にひたしける　笑種
桃酔り何とて柳すめなりける　如泉
間鍋やかざしにさすといはふ桃　草川 休嘉
鍋の桃いきた酒中花といふべし　一有
あさつきや綠しづんで魚けしき　宗雅
都ぞ春の段子(ドンス)なりける草のひし　氏常
餅青く餅白くして人來去ヌ　加藤 如墋
是ぞ餅石上の苔ンノ杵ニ穿(ウガツ)　定治
餅ぞ玉草薤の杵八咫の臼　常矩
ゆで篷常盤の臼もけふくれば　介木
有徳なる物塩干の瀉なる大きなる鯛　山卜
桃林にいの字つなげり陰の聲　加州宮腰住 閏之

藤

木にもあらずさゝげなりけり花の藤　加州金澤 貞之
蛸足の箸捨松や藤の髭　常矩

山吹

山吹と菜種と下種と上臈と　如雲
山吹咲けり脾胃虚のうきね波枕　露沾

御影供

大師けふ辨當閉て入にけり　常矩

雜春

いたどりや片手の御野の娘狩　友之
酒たらずしほめる獨活の色なくて　土候
あらば香よ常盤の山葵蘇鐵の木　休嘉
聲悔し稚子篭に待巣雀の　一帆
なき母の香をなつかしみ煎茶時　秋風

俳諧雜巾

夏之發句

更衣

持統天皇今朝袖輕し山姿　露沾
四方山の暮をぬぎけり今朝の夏　如生
綿ぬきや魚屋がなげき夏始　如雲
中いれにけさきぬ〴〵と成にけり　寺井右久
衣がへ蚕の古巣はあれにけり
伊達男今時得たり衣がへ　加州堤歡生
置替うきけふにもある裁質衣　口樂

郭公

あつかひに初ほとゝぎすなりにけり　如雲
杉苗や賴母子かけし子規　如生
雲ゆきや鬼門いとはじ子規　扇風
いかん虫の炑しやれの枕に子規　露沾
木枕よすかしのあらば子規

聲ぞさく枕の桐ぞ子規　加州宮腰杉野波之
あれ鼠枕に嬉し子規　同
璧枕腰張衾ほとゝぎす　介木
硯紙枕ひまなりほとゝぎす　陳次
初聲を小紅粉屋いかにほとゝぎす　樋口當清

日待に

五月十八日時鳥待をしたりけり　秋風
茶をくれな夢てふものは子規　笒通
莚算をき明しけり子規　肥後八代加藤正伴
袖紙羽それさへゆかし子規　光成
からかさやわすれがた見の子規　加州小松住歡生
聞番よ墨のひぬまに子規　同宮腰久津見一平
木綿也たき物すれども子規　同
聞香炉岩倉燒あり子規　同金澤貞之
一聲や鳶の糞くふ子規　岩井梅純
異見谷にありてや山の子規　加州宮腰杉野閏之

比叡にて

頭は猿中堂は虎尾は子規　六津吉武

庚申堂にて

きかざるよせめて片手は子規　利明

目通りや聲心引子規　木村重善

杉立や聲のあうなす子規　一思

一念や虵杉となつて子規　則長

板にとへかまぼこ山の子規　焉求

鮒の腹聲もちこもれ子規　池田淨堅

聲や賣又六が門子規　阿州雲好

妻戀や袖の明(ミョウ)襟(バン)子規　友静

先そへつあくびになみだ子規　彦根佐藤申ゝ

まつて見よ繼母かけて子規　女さは

ねぬに我頭たがへけり子規　常益

盲(メクラ)が曰ク聲が花歟子規　元親

耳かきに口ばしもがな子規　京一閑

増上寺の入相獵師しるべし子規　露沾

春宵一刻そのたちねあり子規　可因

身まかりける人をしたひて

野雪隠刀わすれん子規　重以

村立の杉灰句へほとゝぎす　加州歡生

灌佛 付タリ**夏花**

比丘尼寺にて

釋迦の鐘十文字咲けり竿の花　可因

卯月来て花筐釘にかけさせ給フ　友静

新樹

鳴瀧人の山庄にて

岩根筋蟻の枝折や若葉垣　常矩

螢

ねお籠や螢を入てさぎつちやう　烁風

しほりぐさ菜種や朽て螢去ル　貞明

香の圖や溝にながれてゆく螢　不木

夏草のたもとやのしてゆく螢　彦根八斤ゝ

懐(ふところ)得ヨリ少年貢長者とぶ螢　重以

蛛の目に火付と見けりとぶ螢　小澤愚口

善導や魄は此世にとぶ螢　大津治周

米引とふ表紙しげみの螢哉　一帆

經箱明て螢の影もなし　利次

をのが音や螢鳴なるにやん〱　樋口當清

蚊 付紙帳

棒振や羽を以テハ夏に鳴ナリ　如春

定治妻追善に

扨も夢蚊屋ひろくなる世也けり　常矩

聲凉し蚊屋のうへゆくながれ川　由卜

唐網に打こまれけり蚊屋の内　秋風

こや園曉風殘月蚊帳に入　員明

言水雨吟に

それはそれ宗因の紙帳難風　友靜

鵜河

よるは物の觝あるをしる鵜舟哉　一有

鮓

鮓虫や屋つこが錢のあらはれける　則長

古五輪これや鮓魚の殺生石　坂口一閑

鮓桶やおもきがうへの笹ごろた　大橋義扇

蓼の杣飯鮓切て出しけり　兒齋

五月雨

物とては晝寢の鼾五月雨　信德

五月雨や杖のしたゝり足駄嶋　家木兼族

沓ぬぎや浮寢の鳥の五月雨　彥根八斤ミ

五月雨蔦の晴間やかひ肴　一味

五月雨や千石とをし庭うつし　茂清

熊蛭や海帶さかまく五月雨　木村重善

端午

菖蒲の湯とめ伽羅ぬるく成にけり　女さは

ふき菖蒲淺香の桶はあれにけり　陳次

半門徒引ぞわづらふ軒あやめ　一思

鞍馬笹蘭から跡あり七まがり　常矩

八重蘭からけふ九重の笹だにも　直貞

粽笹鮓魚のいかりをなだめけり　利次

すべてはたまき名付て粽二把といふ　宗雅

塗小船芦の葉がくれや買粽　由卜

我は野に出て百病の根を驅にけり　如雲

武者幟子共あさひなや紙やぶり　雨夕

甲城にかはの守りかためける　宗雅

甲馬ふのりの海をわたしける　利次

甲山木鐘をもつてたつとしとす　一遊

甲哉青巌の形を側かけ

やす甲槍物屋の四郎と名乘ッて　氏常

高甲あつぱれお乳母候よ　如葉

競馬

馬とんで賀茂にいたれば人躍り　宗俊

早苗

共田植凡哥には六なりあり　加州小松住 歡生

樽封や早苗とりしかちやせん髮　坂口 一閑

半夏生

三上山唾ふりけり半夏生　大津 吉武

虎涙

狼より漏ぞおそろしとらが涙　加州 貞之

氷室

餅閉て夏やとをさぬ氷室守　扑悅

へぎ餅に氷室の岸や崩るらん　可寛

扇

紋阿彌あつて小賣とくし扇見せ　加州金澤寺田 貞之

ところてん又月涼し地紙の山　常二

蠅 付蚤

鞘に落る蠅の妹兄や盥川　宗雅

蠅たゝき鍋取に柄を付にけり　喜清

もゝ小町がよるの衣や床の蚤　加州金澤大西 宗硯

蟬

蟬あつて毛虫涼しく聞えけり　常矩

瓜 付茄子

遠目影蠅の呼聲瓜小船　如雲

蛤や青瓜原の波間より　一味

印眞桑九條の御所を出にけり　宗雅

半切やとばに波こす眞桑瓜　大津 治周

枇杷林檎瓜のかたはらの太山木也　定治

丸太船箸さす波や茄子汁　片岡 貞隨

小便に茄子なるなり町の門　加州金澤杉野 問之

蓮

臣は水君子なる哉蓮小舟　如山

泥坊の蓮華ひらくる世なりせば　淀川 昨木

夕㒵

獅子舞やさぞ夕㒵の下凉み　重以

雲峯

夕鳥影一刷毛や雲の嶺　秋風

白雨

草履取帯にはかする夕立哉　加州堤 歡生

土用干

徳利子の蜘舞と見ん土用干　杉嵐

色なをし又耻かしや土用干　利次

內證や風の見すかす土用干　如雲

納凉 付抱籠

汗拭蚤ぞながるゝ泉川　露沾

濟まぜて江戸こそ夏のあそび舟　若州 懷泉

夏いかに眞桑切麥夕津波　金生

抱籠やぬらさぬ水の川ながれ　直貞

へりとりやしのに折はへ川凉み　利次

綸莚や花に敷しか夏枕　秋風

雜夏

法師哉漬梅老て紫蘇衣　家木 雞族

引磨や雷をもつては麥粉と成　丹後宮津羽田 保春

棒ふり虫みさひや匂ふ花丁子　草川 休嘉

羽衣や巖は終に額の汗　彥根中河原 八ゝ

おるかなる汗そ玉なすところてん　重以

音羽皿黑き筋なし水品膾　彥根中河原 八ゝ

門賣や棚なし小舟ところてん　焉求

仁淸や夏を燒出す水茶碗　加州宮腰杉野 閭之

御所染やならの都の八重さらし　土橋 義扇

御祓

輪茄子やきりに切ても夏祓　彥根近藤 曰ゝ

水無月や茄子を切て是をたとへ　和充

六月盡

明石縮夏をしぞ思ふ襤がくれ　口樂

待ほどに六月晦日ほとゝぎす　大津 尙白

俳諧雜巾

秋之發句

立秋

いかに髪結きのふの寢起けさの秋　由卜

ひや水とは臍が笑ふぞけさの秋　丹波龜山池内 梅雪

生れ子のはじめて涼し四方の里　露沾

一葉

一葉や硫黄の帆影けさの海　大津 倚白

桐の葉も踏分がたし片木履　加州小松駒井 正堯

秋扇

置や秋趣向の竹の風だにも　膳所住 一葉

かなめいれ我身ひとつの秋也けり　直貞

常團扇(トコウチハ)布袋の里に秋やなき　可囚

秋蟬

榮也追善

もぬけの秋小裁衣になく音かや　友靜

門弟追悼

秋の蟬とはおもひきや古懷紙　常矩

七夕

鵲の星の浮橋あなにへや　介木

鵲や箱階かけてくた星　喜多川 祐元

牛とめて猶胡麻かはん天の川　如雲

星更て妹がりおそく牛ぞ泣(ナク)　同

星の牛和哥の六種(クサ)を飼にけり　常矩

あら牛や七夕(タナバタ)の手にも及まじう　如葉

ひかば猶牛房手向んけふの空　一思

梶の葉やけふのよだれの文字にても　一帆

おほん目には天川の岩を牛と見給ふべし　如葉

牛に分別なし足あるならば男星　口樂

牛獨こよひぞやもめちぎり川　一味

梶の葉賣ル聲に天下の鰥(ヤモメ)露けき秋也　常矩

素麪の梶の葉懷紙むすびける　利次

梶や笘へき折小船星やどり　可寛

かこ星や梶の葉姫をむかへ舟　扇風

たなばたや素麪をよれる綱にはよくつながれ　常二

素麪や星の白木綿天祭　可因

手向瓜車數かきぬらん星　宗雅

八手(ヤツデ)に哥彦星ねたむ女もありけり　山卜

寺子のよりそ梶の葉とつらね侍りける　介木

こよひ哉帶橋をなすかし小袖　口樂

天川かし船かし床かし枕　定治

濁るこそ枕のほこり天川　野村通朝

佐渡小判かはせやわたすふたつ星　喜清

玉緒しめむすぶやちぎいふたつ星　坂口一閑

地にあらばれん木摺鉢女夫星　女さは

おぼえがある親にかゝりやけふの星　烌風

後家星や袖に常(ジヤウ)雨(アメ)天川　氏常

雨天に

星のため人參ふれりけふの空　樋口當清

辨慶が妹御覽ぜよ女七夕　重以

盆

くり足のさし鯖あゆむ時なりけり　和充

比ならん荷(ハス)葉動て鯖あそぶ　口樂

魂祭

來し魂や六の枝折の根芋とて　氏常

やよ根芋世は子ありての親祭　常矩

世中よにごきなりしかからの箸　秋風

あさがらよ名のみ昔の箸包　順也

槇にこそ聖靈のかげけしきばかり　同

高野槇けふの玉川手向けり　宗雅

ゆふこ馬槇の下道むかへけん　野本和丈

常世が魂やせゆふこにも腰かけなん　可因

餓鬼いかに肥あぶらつきたらん棚の食　土田充雪

過去帳やふるかげよする棚まつり　今喜多笑種

一向宗なりければ

僧の往來大路見たるこそ玉祭　焉求

なき玉ながら歸る秋なし門徒の家　和充

門施餓鬼六條のちまたまよひもなし　一有

くるわ餓鬼出てや蓮の納戸食　元三

蓮の食佛の脇香といふべし　介木

水や空茄子たなびくわさ菩薩　利次
かゝをとへばとゝぞおしへて蓮の露　秋風
親の杖よはりしはてや棚麻木　常矩

おもひにこもり居て
素麪に箸をく盆にあひにけり　由卜

送火

魂をくり棚なし舟になりにけり　常矩
余波とや麻木ひれふる影小舟　宗雅
をくり火や山あるかたに柴小舟　一之

維舟追善に
貞室が送火もいかに袖今露　露沾

燈籠

夏虫のみいら車や舞燈籠
水燈籠うかべる油に魚あそべり　一昧

踊

盆白し小むすめが暮をのわらは　宗雅
召かとて小坊主はしりぬさよ踊　笑種

花火

過し夜の鵜匠や妖て花火舟　加州宮腰杉野 閭之
むかし誰かゝる櫻の夕花火　伊勢津 一陽

荻

荻の聲寝言に響かけにけり　和丈
荻や聲軒東西〳〵と　兒斎
耳や引人夢ぬすまるゝ荻の聲　阿州 雲好
常日待軒の荻いちすゝめけり　介木
夢判師宿はあれけり荻の秋　常矩

槿花

あさがほは青豆賣の出花よな　土候
吹矢哉あさがほ入し筒ながめ　如雲

蘭

ふぢばかまたがぬぎかけし野雪隠　友靜

薄

花薄拂子ぞ人のゆくゑなる　獨笑

女郎花

又やみん辨慶あらば女郎花　利次
をみなへし誰と寝し野の室糀　坂口 一閑

蔦

のほり蔦䖸の立木や蛇の鱗(ウロコ)　如雲

秋袷

帯のさき猶あまりあり秋袷　如雲
片淋し綿の跡とふ秋袷　陳次
樟腦風うらめづらしや秋袷　如春

若煙草

若相思草(タバコ)色しり人のながめ哉　一思
つんほきせる甲斐やなからん若煙草　加州小松 宗好

霧

眞鍮の鳥烟にすむや竹の霧　口樂

野分

屋根ふきや足を空にまどふ秋の聲　伊勢 一陽

虫

虫目鏡風はさやかにきかねども　加藤 如塿
きり〳〵すなくや霜夜の後家也ける　加州 歡生

研鐵虫と云探題にて

斑猫や藥研をくゞる秋の聲　品計

鹿

鹿の音遠し入すもあらなん玉藥　加州小松 宗好
在家にてはさもおほへぬべし鹿の聲　由卜

月 付名月

春宵のやす賣あてありけふの月　重以
月見哉枕は箱に戸は袋　高木 無辨
百合若もちりけをすへんけふの月　女 さは
あき樽や明夜うらみん臈(マヽ)の月　彦根 廣干立
酒家の門明てうらみなしけふの月　不水
目のうへに樽を寢させて月見哉　丹後龜山 梅雪
樽礫高根の月におびたゞしや　利次
三ヶ月や樽にのまるゝまへ鉋(カンナ)　加州宮腰杉野 波之
諸腕や世人皆長し月ひとり　松嶋 永之
影なれややどりもはてぬ所の月　膳所 一葉
天窓にぞ口をあけたるけふの月　加州小松 正儀
晨明や土器の猿影をのぞむ　同住 木端
晨明や瓦燈のひかり納戸にこそ　元種
北州の頭の光哉行燈(アンド)の月　同
珍重也鏡臺の月〇二〵　加州小松 一笑

〻（松笠）や月の何からの雨ぐもり　一閑
秋は月聾（ツンボ）に盲（メクラ）影もなし　一之
月こよひ濃茶ひかする里もなし　宗俊

追善釋教俳諧に

よするばかり袖に弘誓の舟也月　加州 歡生
糊の山月のくまなさをけさぞみる　由卜
さし板や思案半の杯の月　友靜
月夜よし酒屋芋賣陬（マヽ）磨赤石　常矩
たづぬべし月は日來の芋畠　介木
ほれば月青葉の波の嶋よりこそ　陳次
楊枝の猿こよひの芋を望みける　可因
心ある下女がたもとや芋の月　宗雅
月の塩河原の院の芋なりける　如生
親芋や心のやみもけふの月　一帆
浮世哉月にはまふた芋に砂　杉嵐
ゆるせ月芋に空直をはかるとも　友之
芋は〳〵月見る方に町めぐり　充雪
けふや月三百貫を楊枝にふる　粟津 定房

月ひとつこよひぞ茶汁の最中なる　秋風
芋糊や龍を封じてけふの月　佐藤 山〻
けふの月生るを放つ山のいも　治周
水に影三五の月や一二ノ二　常二
こよひ月二千里の外故人の耳　口樂

九月十三夜大津にて

喰ほすやさや豆七斗湖水の月　野拙

駒迎

将棊さす人のもとにて

龍の駒卦引の道をむかへけり　片寄 似卷

秋田

天皇の御着替も哉田面の露　加州 歡生

鶉

蒔繪筆や化して鶉の床硯　同 貞之

碪

糊衣槌ぞ更ゆく里借屋　介木

紅葉

礒山や猩〻のみいら初紅葉　露沾

紅葉見や一斗むなしき樽の底　抃悦

墓所にて

菩提もと逆修の紅葉うへにけり　扇風

湯殿姫紅葉や亂すふもと河　可寛

万木皆醉ッ下戸ならぬこそ此時さめたれ　陣次

鮭

初鮭や九重の空最上川　露沾

紅葉餅

龍王のみゆきまたなん餅の秋　如春

餅の香やたへず紅葉青磁皿　行田 長和

茸

松茸やありし御幸の柚の車　如泉

松茸や波こす柚酢をしぼりつゝ　常矩

わらしべやぬふてふ笠の椰茸　坂井名 行貞

木實

丹波毬毛(イガ)まだふみも見ぬ鼠やな　口樂

捨毬毛は猿のかしらのもぬけよな　宗雅

大和柿人の齒莖を種として　泥 昨木

肴舞や糸にひかれて蜜柑の猿　前田 品計

息は風柚の皮船や酒津波　土田 充雪

下戸はよも柚の下陰を宿とせば　中河原 八々

摺胡木は實が根に歸る柚味噌哉　服部 重治

栗生姜子は埋ぬや柚味噌釜　慶之

菊

花鳥賊や海士苔よする波の菊　定治

あやまたれける柚味噌の蓋を菊の花　順也

生大根烋なき時や薄及の菊　宗雅

秤の柄いく世のかなめ菊の露　喜清

銀煙筒(キセル)けぶりやうへて菊の霜　一之

灰吹は淵となりけり菊たばこ　加州 歡生

重陽

菊や酒漬山桝を茱萸の房　一有

香やとんで下戸胸躍る菊の淵　常矩

菊の淵なみのよする賦賣場舟　元三

綱もつて德利やのぞく菊の淵　氏常

大上戸けふのすいかく也菊の淵　如生

鍋の指瀬ぶみなりけり菊の淵　和充
波こすや蒔繪の松に菊の淵　片岡似巻
陶淵株や賣けん菊の露　利次
蕨繩菊の樽垣その八重や　介木
菊酒や千秋樂には樽をなで　備後ノ野福富
封紙やきせわたとなる樽の菊　女さは
櫃の蓋栗のきせわたなるべしや　一味
櫃の鶴栗の林にあそぶ也　笑種
けふや櫃を丈あけにかける白菊は　如葉

雜秋

らう竹は傳授の鳥のやどり哉　加州小松木端
文道をしらで中秌哥もなし　土橋義扇
むらさきの二葉やひしこもぎ茄子　寺井右久
はらゝ子や匂ひをかへて梅もどき　可因
南天の實誰がなめわけて豐心丹　扑悦
篭波や柵くゞる芋筏　茂清
八月九月まさに芋桶にしられけり　加州宮腰久津見一平
かんなれり指のしたゝり新酒嶋　同
内畠袖に間引の朝しめり　秋風
木槿垣捨梨(カラスキ)の跡や秋　利次

道中にて

遠目鏡腕首たるゝ富士の秌　常二
松風や與謝のぬけふし浦の秌　加州金澤間戸理方
結句宿に居たがまし也秋の暮　加州小松獄生
なれ共又秋は夕ぐれ七芝居　常矩

俳諧雜巾

冬之發句

時雨

一時雨申さぬ事か似せいざり　友静
時雨に高ねの雲は晴にけり　伊勢津 一陽
作り髭剃刀やふる横時雨　加州堤 歡生
給の醉松のおもはん横時雨　宗雅
やよ時雨目があかいかと松の聲　重口
時雨る夜宗和の宇治ぞ思はるゝ　加州久津見 一平
軒時雨樋や淵瀬の飛鳥川　金生
黑雲や時雨ふりをく奈良油煙　焉求
目藥や小鹿の角のいく時雨　一遊

霜

捨子ないて霜橋にみつ夜半の聲　常二
足跡やくろきをみれば橋の霜　如春
馬子やとき飛脚やおそき橋の霜　常矩

霞

煎釘や霞たばしる不破の關　彦根佐藤 中ゝ
春日野や奈良茶たばしる小夜霞　利次
秤竿末のためしや大霞　大津 治周

雪

朝手水柄をれの杉や雪の聲　可因
雪折や柚が朝寢のあて有ける　南山子
雪寒し丸はだ姿伏德利　重以
根深賣尻聲つよしけさの雪　利次
夜の雪唐がらし味噌竹先知ル　口樂
物あり箸玉子ひらけし雪の窓　宗雅
夜半の雪抄人肩をうたせけり　由卜
夜半の雪玉子のからぞつもりける　則長
紅葉より雪ぞ燒付酒のかん　通朝
あゆみけり目の玉ふたつ雪の鷺　印代 宗甫
雪なれと志賀の山越馬合羽　阿州 雲好
糊賣や雪の物いふ世なりける　安倍 季高
塩漬や孟宗靑し雪の竹　雨夕

うろたへて孟宗格子をねぎりけり　秋風

雪中味噌汁といふ探題にて

煮出し籠鳥の哢や雪の竹　元三

溝(ミゾ)石に聲あり雪の傘(カサ)おろし　似巷

沓ぬぎの雪や胡粉の硯石　（坂口）一閑

木履の歯開平つもる雪道哉　（家ホ）兼逸

駿河路やせかぬ馬次ふじの雪　（加州松任）薫煙

つむぬきやなりは塩尻色は雪　元種

光成興行に出山の像をかけられ
當座所望に

釋迦ふるし一句に命雪の山　常矩

初雪や文臺の足御免あれ　順也

山や雪ふもとの煙人の息　（佐久間）圓齋

雪に罪なふしてちろりを釜に落しけり　一思

冬梅

木の匂ひ炭團の雪にうつりけり　陳次

天神や禿の匂ひ雪の中　宗俊

炭

花すゝきいつ暮果て炭俵　介木

今も炉に鱗を得たりけり炭頭　（伊勢津）一陽

獣炭火吹に虎のうそぶいたり　（加州）獣生

なり瓢竹にふかれけり囲炉裏炭　（加藤）昨木

菊の後又あり霜の輪切炭　可寛

白(ゼ)炭(ウ)散て穴の雪吹よ竹の聲　（岡田）薄古

水鳥

裏形のあれて寝覺ぬいく衛　陳次

闘守や尿瓶にかよふ小夜衛　（加州）歡生

鴨の骨や鉄の箸羽をたゝく　元三

網代

若衆はすつぽんのよる網代哉　（備後）福富

氷

初氷葛たまりかな池に鮒　喜清

河(カハ)童(ラウ)がちからおとしや厚氷　和丈

鱈

棒鱈や雲あらざるに何の龍ッ　常矩

河豚魚

砒礵石瀬ぶみなりけり鰒汁　坂口 一閑

鰒汁是なん悪魚梡の口　草刈 休嘉

煮賣也さよの中山河豚汁　川井 正長

我や獏荘子が夢を鰒汁　直貞

とくせなんつれなき人の鰒汁　可因

折を嫌ふべき歟鰒の皮に猫の舌　宗雅

杉焼

とき櫛也根深の白髪鯛の骨　笑種

蠣

ひねり蠣指の佛の破戒哉　如雲

鉢扣行

かしがましとて捨しもあるを霜夜の聲　可定

子祭

子祭はとうしみをしてわたしけり　順也

布の高尾にも住し歟子とうしみ

子燈心袖こす波をちぎりけり　如生

子燈心たが面影のつくも髪　重以

納豆

つかね薬夕には納豆かしこくも　口楽

神楽

哥神楽眉ぬく猫の皮よりや　常矩

寒紅粉

ちよく清し薄花櫻寒の色　露沾

節分

麦食や目に見ぬ鬼もやはらかに　利次

大豆うてり今宵大悲の鉄炮には　重以

雑冬

釣鐘を枕の瓦燈寒にけり　茂清

牛馬が腹ぞさびしき野べの冬　當清

いふべくもあらず冬野の芝生(シバフ)朝ほじろ　介木

つもるらしあきだるさむくなりまさる　同

うち綿や寒さは覺えず竹先しる　加州小松 木端

綿仕事よしそれとても女車　彦根竹原 不障

なけ頭巾や横折ふせる紗綾の山　同

風呂吹はさむさをふせぐ兵哉　定治

しもく杖犬木にのほる毛尻切(シキリ)有　和充

しる人ぞしる服部煙草伊勢海鼠腸　常矩
海鼠腸や乾坤の外の雲を起ス　前田元種
海鼠腸のわたらば薄刄ともよめり　宗雅

歳暮

大きはのさかやきにさへ成にけり　介木
御製を感じては世人蟹也年の暮　露沾

滑稽雑巾　獨吟二百韻歌仙

獨吟　常矩

といへども下戸たつ山の花は豈
櫻にくもる八重の色菓子
おゝん賀の哥たてまつる翅哉
屛風のひかり村消にけり
假舞臺峯の梯雨過て
小便所筏をくだしぬ
地龍浮レ水ニ嵐吹レ月ノ
螻蛄の故郷波に荒ゆく
立歸り又も秋見ん唐鍬や
もぬけの日備綴衣のこして
なるらんと食重箱の人たがへ
きざみ海帶の寢頭亂るゝ
老猫の寺まかなひに妖たるか
つゝみ錢などかともおもはぬ

蘇枋弓八隅をにぎる器量とて
　しるしの火桶ゆづりまし〳〵
尒時世尊滅後の夜番つとめよと
　邪婬の惣嫁ふかきいましめ
戀責て打付階子のぼらする
　おもひのしるべとて犬を飼いれ
月ゆふべ扈從牢人淋しさに
　ながめ捨ても方丈の秋
剃屑よいづれの柳散つくす
　はじめて造る蘭船なるらん
盃石のをのころ嶋を生たまふや
　ふるもの宮の遠木の片腦
眞榊のみどりの頭巾紙小人
　おふくの面の雪の香來山
ひさかたの飴傘の影うすき
　雲を埒にのこす賭的
子規腕捨羽織聲ちりぬ
　禿馴ての床の山なる

色とふとも替名漏すなやよや月
　傳授の木草かれこれの露
庭數奇の尊者笑ける會座の秋
　須達ふるまひに金もつて來りし
打わたす方四十里のへぎ敷て
　櫓炉疊や撫盡すべき
いつとなく戸棚がもとの枕引
　砂鉢ひゞきて德利たふれ
青嵐蓼酢をふらす空もよひ
　吟じて龍の瘧氣おこるや
岩根道士持杖を投しより
　陰神の穢れを草鞋にて隔る
八重鵜羽中間長屋葺捨て
　礒の波くむ藥鑵茶の月
湊風姥呼聲の秋なれば
　目見えすがたの難波女や露
袖の花伽羅火燒歎の下こがれ
　棧敷簾の霞の間よりも

三

蛸蛇蒲鉾雲雀聲アリケル
荻のすぐろの字盡しをよむ
若薄でつち小坊主打そよぎ
居湯のしまひ眞野の入海
さよ衛明ば正月告なんと
ねざめの枕つとめ文かく
物思へば指くれなゐをくゝるよな
焦熱地獄鬼ノ間鍋
薯蕷鈎の枝におろすとの
和泉式部が哥本草見し
常の間の唐木の机色硯
塵壺羽箒馴てさびしき
音とては榧の破殼松の㭵
鼠がやどり道まどふ月

ウ

露ながら伏樋落て三瀬川
重荷車の焔をめぐらし
函谷鉾感陽宮にちかければ
童男丱女を肩くまにのせ
川ぞひのおんぼが里にとゝふや
波血刀の跡をしたひて
水鳥の嫉妬ごゝろの根ふかくも
娌居るに居られず霜袖をうるほす
落葉しく廊下雪隠行歸り
月閣草履の色くもれとや
禰宜烏帽子塒を霧の朝立て
八十のうちまき穗を亂しつゝ
森の花芝生の杉茶小柴垣
袖振胡蝶村葛籠笠

名

妻戀ののらの風流男聲うつす
親あちらむき子はそこをたつ
此臭さ天よりや降けん地よりや涌けん
象は塩辛壺のやうになんあり
あらはれて糀の情のまみへしが
拄杖の下に莚たゝかれ
菩提もと椶櫚の葉末の蝿一ッ
流轉の縄さゝがにの家

捨る世の身を古下踏(ゲタ)の置所
　態手が奥のふかき三芳野
番幕もおなじよそ目の花や雲
　影笠ぬいで朧人ゆく
東風あらき中有の道の鞘とがめ
　觀音馬をひかへ地藏棒を出ス
ウ
彼岸(カノキシ)の弘誓の歩荷(カチニ)やらふとて
　あやしき雲の煮賣薫ずる
あらかねの土棚なりて代はじまり
　足たゝずして眠るゐのころ
燒飯の玉見しる人なかりけり
　うづもれ武士の楊枝さびたる
朝手水白河橋の末くみて
　祇園寶前一夏口參
夕聲や紅葉にかはく泣(ナキ)上戸　　常矩
　片袖尾花裾(スソ)引の山

出端の月道ゆき杖に影かして
　あたまあまたの雲の半天(ナカゾラ)
初(ウブ)めざしうす色櫻ほの〲と
　へぎより奥の春をたづねて
遠霞溝分小船さほさすや
　功成名遂テ鉄(カナ)挺(テコ)退ク
ウ
一生よいつまでとての力瘤(コブ)
　三界無安いきつみにけり
鷲の山海蘿(フノリ)をとかせ給ふ時
　樹下石上の板疊に座し
釘かしら猿の毛衣やぶりける
　水の底とるせゝなぎの月
欠(カケ)木履はき捨人の露けきは
　誰ねたみ切萩こぼすらん
朝込の樞(クルヽ)の小野の風さびて
　おもひの螢挑灯が飛(トブ)
あくがれ出る見こし入道かとぞ見る
　胴骨よしのたそがれの山

世を夢の市郎兵衛ちるや花
　春の水流て淨瑠璃とゞまらず

二

霞しく筏の床の尻皷
　ふんどしくろく岩根ふりたり
北局火打が岡の松さむき
　茶碗手水のなみだたばしる
わたしがね夜るの契のとだへして
　衣桁がもとをさゝがにに借ス
あれ捨て猫の寢所かへにけり
　二親の敵を數の子のねらへば
楊枝は袋を太箸は箱を出るとかや
　中居こしもと春しづかなり
よぶこ鳥半襟賣にとひよりて
　質のながれの布引の瀧
天の河座本の水上といひしも
　兀鬢の月露ぞをくなる

ウ

朝顏の扨も面皰はあるものを
　後家が垣根の烁をかなしむ
きりぎりすいとしき袈裟のつゞりさす
　おもひの塵に敷紙の霜
おもかげの追込莚松たちて
　其御心ゆへにこそ霍亂はおこり給へ
石花菜すゝめをきこしめさぬ事
　終に伍子胥が西瓜はねられ
初塩の八重の小便滿來るは
　阪磨の浦風うしろ堂烁
消炭の繪嶋が崎の月見えて
　かき暗より松に明ゆく
棚雲の大黑咲て花笑り
　露奥ある傳教の山

三

春の風洒轉童子を吹おろす
　奉掛神垣ノ雪
杉赤く燈籠青く見渡せば
　どうやらものがおもはれぞする
よしや君ならざなるましまでなれど
　戀路の諸禮中〳〵

古後逵御所馴ゆふべ里ながめ
月を袂の縫箔の雲
歸圓寂靈供盛物霧煙
髪髭そらず爪とらす怺
穂に出る豐芦原をはなれ國
粟蓬彈鳫常世行
きけばとて跡なき雲の虚咄し
夜食待間の急雨や空
ウ
小新發意寢ぬに目覺す心地哉
教は釋迦のかるたよまんと
阿羅漢の十六むさしとり捨て
供腰掛に居を安ずる
万歳を竹の子笠のよばふ也
河豚魚鍋の雲のうへとて
隙役者五衰のさむさ有けるや
人間穢土の富士垢離の水
なればこそ和光垂迹瀬ゝの月
布に留りける鮎さびて以來

濁り酢の浴より露のしたゝりぬ
わるかねくもる軒の木がくれ
藪醫師たゞさへ花も佗しきに
譜代のあほう春たけにけり
名
横霞薪が前の鉈枕
鼬の尿や夢をうつ雨
泪川鼠の汗にみかさます
形見の雲となびく古綿
若煙草此世の油盡はてゝ
露の砥盥わかあらばこそ
月もりてよごれ板敷あれまくも
よいものは着られずたゞ怺の風
村薄雨替中間まねく時
御用はてなき大名の原
折膝のしびりに塵の山遠く
雲肥肉の跡を埋める
子規をのが土壇に聲きれて
老會の森の母親のこゝろは

ウ
鏡山盂蘭盆經のくもりなき
　佛法の晝月の烁の夜
飛鴈の日本の男女數見ゆる
　わけをたてそめし天(アマ)の浮霧
或(アル)夕(ユフベ)屛風がくれの袖時雨
　死やうの意趣木葉かきをく
名取河手代ごゝろの花朽て
　霞の底に始末ひさしき

秋風

獨吟歌仙

長閑からまし酒のなる木を植しより
　小桶の茅花澁帋のやね
落書が田舍の春に歸來て
　上(カミ)座になをる姑なりけり
久堅の障子を明てされば月
　虫啼捨て雲の一ふき
荻萩薄鎌かしなしの夕煙
　此年までも息災にござる
手に結ぶ茶(チャ)湯(タウ)の數は重りて
　けふも身あがりむごひ詞や
夏草の茨(ホヽ)菰(ヅキ)掘て戀くらし
　葛をぬりたる美目の生さき
あればとて二間間半と小百兩
　運にまかせて捻る大肌
世中に青豆賣のなくもがな
　雪踏をとへば跡の白露
月の顏五木川をなんいとくらきに
　蒼朮(ヲケラ)をともす鉄輪を戴き
ごすいでんおほその頭はかなくも
　藥手拭をしぼらせたまふ
朝には團をおさめ夕には
　をくれ先立謠おしゆる
しばしとて溝除(ヨケ)石の片眠
　湯をおませふか藥のみやる歟
ほんくの二ン月堂の札もある

　猿銀ン契り春なわすれそ
轉心(ウタヽコヽロ)余所に東風吹馬子殿よ
　替てくれぬかゆくと胸當
つゝ井筒るづゝの端でぬれし月
　明霧たゆむ燈籠の苔
一盃の紅葉をかざす禰宜さびて
　腰に付たる椋(ムク)の黐(トリモチ)
なふおそろしや上帷子の麻の杖
　子がかはゆさの闇に迷ふみ
編笠におこしいたとり枝の花
　鳴ぬ手皷樂しみの春

延寶九年辛酉五月中旬開板

俳諧當流籠抜（たうりうかごぬけ）

五吟五百韻

宗旦

ふまれけり花口おしか今一度咲ケ　宗旦（伊丹也雲軒）
つら見しつてゐる來年の春　木兵
歸鴈朩の字小紋の羽織著て　百丸
はかまの山に雲はけぬめり　鬼貫
講尺の跡は淋しき窓の月　鉄幽
牛(ゴ)粉(フン)硯に蚉啼　旦
人形のところはげたる野人の色　兵
次郎太郎又吉桔梗刈萱　丸

ウ

朝朗文庫の鎰(カギ)に露むすぶ　貫
留主をあづかる跡の白波　幽
呼續(ヨビツギ)の濱べに出て茶のましやれ　旦
千鳥の串さし田樂もある　兵
人數を能因法師のよまれしに　丸
時に西行宗旨帳かく　貫
丁已保延三年八月日　幽
山は染りて崇(シュ)徳(トク)院(イン)也　旦
露の玉岩にせかれて打われる　兵
鈴虫松むし見一の聲　丸
虚空よりサヽラへ男手代望む　貫
仕著せの外に金銀の山　幽
養父(ヤブ)入の榮花は盧(ロ)齊(セイ)なるまいぞ　旦
長閑き楚(ソ)女(ヂョ)を久しぶりで抱(ダク)　兵

二

腎(ジン)がつよひまことは春の非情(ヒジャウ)の情　丸
にきびさかつて遠の山づら　貫
波荒て剃(カミ)刀(ソリ)とちる戸難瀬川　幽
なまぬるわかして梔みだるゝ　旦
入月は只一息に咽をゆく　兵
悪所つもつて無分別露　丸
天津鴈舊(キウ)里(リ)きられて音を留る　貫
破れ木綿の薄色の雲　幽
雑(ザウ)巾や朝四五へんの壕(ホリ)をはく　旦
軒のしたゝり黒ふながるゝ　兵
掛樋にあまりて落る宵の雨　丸
階(ハシ)子(ゴ)をさいて龍が上るは　貫
道(ダウ)桶の波を蹴(ケ)立る火けし奉行　幽
御見舞申す鴨のむら聲　旦

二ウ
なんといの山陰以來共通　　兵
　さてもといふて笠取の峯　　丸
巾著が有かとおもへば夏の月　　貫
　膝ぎりの羅紗斷はづしの雲　　幽
よい衆のまねをしらるゝ村鳥　　旦
　日用の死人行玉の輿　　兵
切返す此壁土の下にこそ　　丸
　むかしの論語布袋屋をうつ　　貫
みだけ錢一もつて是を貫けり　　幽
　神きこしめせ御鬮の有樣　　旦
火をともす烟かすかなあたまつき　　兵
　額朝雪踏よその夕榮　　丸
西洞院關東までも花に行　　貫
　都の鶯江戸風をなく　　幽
三
鬢先に雪を殘して一文字　　旦
　假契買のくせ春雨悶る　　兵
よしや雲つとめなりやこそあのさまの　　丸
　彌陀成佛をうなる戀風　　貫
長枕紫磨黄金の肌ふれて　　幽
　うちかひきつとむすぶ下紐　　旦
行末の松の陰道嘘どうやら　　兵
　頭が痛ひ夕山の風　　丸
杜宇坊主にあふて巾樣　　貫
　黑燒にしたる幽靈是迄　　幽
篠原の土を凹てまん丸に　　旦
　犬の雪隱霰たばしる　　兵
雲に月法華に御光かざすならば　　丸
　諸ゝの比丘に告て秋風　　貫
三ウ
象牙にも紅くゝる襖栬　　幽
　夕べの枕笄の露　　旦
あふのけに手のよひ蚫体あらはれたり　　兵
　扨も不首尾な女人禁制　　丸
誓文で高樓に登つてうそをつく　　貫
　寒行月の眞白な事を　　幽
太股に夜半の嵐を片敷て　　旦
　味ひ爰にある鬼の山　　兵

肴すき詠につゞく鰤の園　丸
波間の鰯ふゝあれをなあ　貫
沖津風もどかしさうに吹て行　幽
氣が短ふて眞砂みだるゝ　旦
花の山物もいはずにひやでのむ　兵
担那の余所目久三等は春　丸
名
跡からは霞あぶなき岩づたひ　貫
ちんかり〳〵乘掛の雲　幽
頰髭の暮にかゝりて奴茶屋　旦
五躰やすめる草分る風　兵
哥よみの祖母のいへらくくるしいと　丸
哀れなるやうにてつよからす杖　貫
傢一つ同笠をまいらする　幽
かるひ合力宮城野の露　旦
炎上の庵の月が影かくす　兵
我を響かす無縁寺の聲　丸
我色はどうやら淋しひ夕催ひ　貫
されば下痢で玉松の風　幽

ねば〳〵と柳は絲蛤に　旦
談義はぬくひ波よする磯　兵
厚氷あれれにはまだようとける　丸
緒盃あたま揃る春風　貫
雲とぢて一まいになる花曇　幽
飛子暦あがつて藤の若葉に　旦
八間口もらふて過るこひの山　兵
隱居以來も袖はぬれけり　丸
篠分て眉に文字の霜をたる　貫
いかに尉殿見え渡りたる雪　幽
雨に行や神鳴樣ひも時鳥　(岡崎氏)木兵
雲に隱する臍の夏山　鐵幽
空は月腹あて隔て影もなし　鬼貫
戻り駄賃の秋暮にけり　宗旦
二人してひいて見たりし花薄　百丸
草の庵の石臼の風　兵

甃桶に谷もる水の漲りて　幽
猿さけんでは四足の板　貫
ウ
此夕べ文臺際になおりけり　旦
坊主あたまに松風の音　丸
二つ三の子ども片敷苔莚　兵
岩が根枕ねん／＼ねんね　幽
舌先で鹿の音おろし幽也　貫
心の臟から山はいろづく　旦
今朝の月功者な衆に見せけるに　丸
其まゝとんだ一句の雁がね　兵
のたまはく柱杖をもつて衣をうつ　幽
達磨尊者の古卿(マヽ)の空　貫
狀箱に我大君の御名をかく　旦
妥女なりけるはやり傾城　丸
色好むゆるしをとつた花の袖　兵
雲雀は雲に高足を蹴る　幽
二
時に雉子あふのいてこそ立にけれ　貫
石田の小野につぶりうちやるな　旦
逢坂の關の戸ざしはくゞりにくひ　丸
一六はなひか引たひなあ琴　兵
彼町を千手も泣／＼立出て　幽
悉退散はおもはくの紋　貫
二世かけて戀の關路の大挑灯　旦
たはけをつみてもめの舟行　丸
十箱の余つぶしの小哥波の聲　兵
はんま千鳥か豆腐屋のくれ　幽
片見世に雪をそゝけて出して置　貫
學問者には似合ざりけり　旦
月に雲あの厚鬢が髮僧なら　丸
とんてきの風義は有まいに露　兵
二ウ
女房でもよふてやつたら宿の秋　幽
定て勞咳夕べ淋しき　貫
波の色二十四種あり須磨の浦　旦
燒藻の烟伽羅校して　丸
誰あらふてきにもらふたぬれ衣　兵
上らせ給ふ公家のおもはく　幽

大寸白玉敷庭があるかれぬ　貫
芥辛子(カラシ)亂れて霰たばしる　旦
門ふさぎやる星の光りは寒ながら　丸
はあ〱なひ〱もう是は月　兵
手すかずに伊駒の山の霧隠れ　幽
温飩(ウドン)にきはまる萩の下露　貫
茶屋か所一時(イチジ)のなさけ花をくれる　旦
まはると見えし春の夜の夢　丸

三

むねうちに横雲に入鳥はぎい　兵
なぜ出さなひさ舟の朝風　幽
公義の未進(ミシン)宇治の橋守年をへて　貫
なれをしそ哀れ水籠(ロウ)の底　旦
そこで驚伏まろびつゝ鳴るたり　丸
つぶす平家の弱(ヨワ)者が肝　兵
催促(サイソク)を源氏の方より付らるゝ　幽
六孫(ソン)王も代々の門徒　貫
伊弉諾(イザナギ)の尊(ミコト)已前の御剃刀　旦
小間物所出雲八重垣　丸

わかひ男蛇体の栖(スミカ)にあそんでゐる　兵
かねは則遣ひ手じやいの　幽
月は西勘當箱にのつて行　貫
東寺が見えるか別路の露　旦

三ウ

野へは皆大師の組下色にふけり　丸
筆道みがく巾頭(キントウ)の山　兵
蝶番(テフツガ)ひ六牧(枚カ)たゝむ岩づたひ　幽
刷(ハケ)ではいたる一片の雲　貫
紅粉ちよくに光りをやどす朝朗　旦
嵐を賣し京針が聲　丸
ふづくつたらついなりさうな草枕　兵
伏見に通ふ孫左衛門後家　幽
きのふけふつい三年は呉竹の　貫
雲の立まひひね米の露　旦
病(ヒ)者心の山に月明て　丸
弦(ゲン)數(ソク)にくる色鳥の聲　兵
時によれば打きれのする花の波　幽
雲の玉水こねやうがわるひ　貫

名
共理屈ひとつもたゝぬ朝霞　旦
口舌に成し吉野唐土　丸
こなたのまあだましの泪瀧つ波　兵
姥にだかれてあの松がほしい　幽
目をむいて安部の海道詠やる　貫
聖徳太子怒つていはく　旦
喧嘩の事來ぬ世の卷にかいてある　丸
ねたばのはへた胎内の若　兵
ごすい殿西にむかはせたまひけり　幽
岡部の六を摩迦陀國へ投る　貫
蔦かづらこんでい駒はけつまづく　旦
もみぢぬ松も十八でうん　丸
峯の月兒を近付きねをゆづる　兵
餅やの親仁かくれがの山　幽
満
耳塚に木玉の音も聞えぬは　貫
高麗入の末は大風　旦
あがりけり目利に見する相場書　丸
たのしみしらずのかしこだての衆　兵

陸修靜揚屋の諸わけはかいもくじや　幽
晋の國から丸軒へはどう　貫
青牛にのつて花見る戀の山　旦
相圖の寒笛春風通る　丸
秋風や常是の吹出し今朝の露　上嶋氏 鉄　幽
一歩みだれて桐落る山　百　丸
張ぬきの鼠色つく木の下に　木　兵
反古を誘引野分散けり　鬼　貫
鉄灸に雲もかくれる夜半の月　宗　旦
ジリ／＼ト云鰶の峯　幽
在所者時宜をこねつゝ並び松　丸
いわほの肩に帷子の羽織　兵
ウ
漆紋日本の地にもつきにけり　貫
蒔繪にみゆる末は長崎　旦
鼻柱遠の旅人瘡をかく　幽
あかぬ別れの鷄冠を燒ク　丸

こきまぜる袖のうつり香醤油の　兵
　七月めにて上ゞおろし有　貫
天下一初瀬の山ぞうかりける　旦
　江戸づめをする小笛鶯　幽
夕雲雀八郎右衛門が跡留て　丸
　男をたてる霞のとぎれ　兵
あたまそれよふ云たなあ青柳を　貫
　風をひかしてうれしいか花　旦
山は雲繼母(まゝはゝ)が手に渡る月　幽
　井戸よりぬけて鹿はきよろりと　丸

二

秋の水爰はいづくぞ龍の口　兵
　ぎやあ〳〵の露釋迦の夕聲　貫
或時は樹下(ジユゲ)石上のすくみ鷺　旦
　苔なめらかに探幽(タンユウ)これを圖(ヅ)す　幽
大廣間詠めの末は床の山　丸
　鑓をならべて近江路通る　兵
はりつけも今も最後(サイゴ)の高言(カウゲン)と　貫
　諸人のにくみ猶甚(ハナハダ)し　旦
あのわろの孫子の末が見たひまで　幽
　かけま成らん浦嶋の波　丸
古里では木綿風情のこひ衣　兵
　塵(チリ)紙の文こしかたの雲　貫
月はむかし背炉(キセル)の掃除もなつてこそ　旦
　御隙もらふて養生を露　幽

二ウ

津國の明衣(ユカタ)の山の霧の幕　丸
　ぬれふんどしに鳫がね包む　兵
ぬくひわろをかけて來つらん地藏丼　貫
　まだ死にきらぬ童子一人　旦
茨木がしばし按(アン)じて中手留ゝ　幽
　其時將棊の駒もすゝます　丸
さうあれば麒麟(キリン)といふは是じや迄　兵
　孔子の狩場西の行末　貫
ゆるさるゝ夜見世は民を安(ヤス)んじて　旦
　御代の鏡は假契(ケチ)部屋(ベヤ)の月　幽
いにしへもいきはみがきし虫の聲　丸
　念者の談林末の大露　兵

世間から高野の花を云たつる　貫
外聞わるき草庵の春　旦
三 顔淵が跡は六分に引霞　幽
冉伯牛も四貫目の損　丸
窓よりも其手をとつて荷ひぶた　兵
あけて見たればまんていか也　貫
葛城の神はよろづをやはらげて　旦
しげりみつちやの哥の父母　幽
とつともと敷銭の文字も定らなんだ　丸
當代ははや皆しりやるごとく　兵
松平吹風枝もそれはその　貫
空は時雨て御朱印の山　旦
藤澤から六十四州雲めぐる　幽
衆生を救ふ大的子の月　丸
芋たいて出離の道を喰て行　兵
盛親僧都かなしけれ秋　貫
三ウ 物讀に邪魔の衣を擣すさむ　旦
千聲萬聲わちやくちや〳〵　幽

朝もよひ木戸の者にて有つるか　丸
五輪の見えし肘の講尺　兵
鷹つかふ本來逸物なき時は　貫
和尚薪に雪の夕暮　旦
錠きつて其後立て俳徊す　幽
太眞殿に强盜の組　丸
玉のひかり墨にぬりたる顔みえて　兵
かづきの蛋が瓦燈作れり　貫
つけ替る書院の先は須磨の浦　旦
床に掛たる人丸の海　幽
暖簾を髮ゆひが目には花の波　丸
霞の勘判骨うづきの月　兵
名 棒でもつて板（坂カ）の春風ないで行　貫
慳貪いそぐ雨しきり也　旦
時鳥御出待入申ゆ　幽
宿屋の便が岩橋高間　丸
善鬼坊つかまるゝとは太夫づか　兵
又八文字踏分ル道　貫

古狸かならず人を迷はして　旦
おまん戻れば鐘も音せぬ　幽
龍宮より正味をせしめて波を追出す　丸
なひ物にとりては徳叉迦の寶　兵
法華經の序品に曰くしろうるり　貫
大地がわれて粕漬となる　旦
茶碗鉢ゆすり落して棚の月　幽
やくにたゝずの猫の上露　丸
秋の穴こそ〳〵するによそをみる　兵
親仁に西で薄あひけり　貫
術なさの涙は野べを染出す　旦
辛芥子にむせんで鼻くゝる風　幽
すごさるゝ大食天狗納豆汁　丸
脉證沉に花の山行　兵
どうしても寂は雨じやぞ春の空　貫
むし〳〵〳〵もゆる蜻蛉　旦

豆の番今宵の月に棒つく事　上嶋氏 鬼貫
雲井に鳫の木をたゝく聲　宗旦
夕飯の茶碗の山に霧晴て　鉄幽
奇麗一片過る松風　木兵
夫は其慾な心は礒の波　百丸
かきついでなりと藻塩焼也　貫
苫の窓神鳴あがりかねらるゝ　旦
耳をふさいで袖くゝる雨　幽
横さまに猿がふかする山おろし　兵
蹈はづしては腸をたつ　丸
雪隱へなし物壺をすへられて　貫
蔓がはへたか庭の片角　旦
走井の水もる所しつけふかし　幽
夕かけの駒山歸來御用　兵
一つ酒一つ煎じ茶野路の月　丸
露をたのしむ白居易がばゝ　貫
時に秋産はやすふて子を先だて　旦
爰に味噌汁紅葉をたく　幽

石上(セキジヤウ)にあぶなふ見えしすりこ鉢　兵
野干(ヤカン)の姿は内かたの玉　丸
請人の舅(ヲヂ)ぼんおとす袖(の)花　貫
担那はづして鶯の聲　旦

二

來る春もあはでぞ歸る留主のよし　幽
すりがはやるに波のぬく太ら　兵
夕暮は藏無の濱さいておけ　丸
鼠に赤裳(アカモ)をくはれたらまあ　貫
太閤もしばし枕をそばだてゝ　旦
國家(コツカ)安康(アンコウ)遺愛(イアイ)寺の鐘　幽
草庵の壁の土くれを動かさず　兵
こうしてゐられた顏を九年が間は　丸
今まではよふ生のびし長中風　貫
夫うつゝらは水舟を宿　旦
突(ツキ)出す箱屋の山の凝海藻(トコロテン)　幽
青磁(セイジ)の鉢は似せの松がえ　兵
小夜時雨かづきにあひし月の笠　丸
胡椒頭巾に村雲むせぶ　貫

二ウ

そちが命天のたすくる所也　旦
ぬけともせぬかれぬさやの中山　幽
浦の波犬のこひ風さはぐらん　兵
親仁は松をわかさうに見て　丸
消にけり朝日長者の庭の雪　貫
金の衣を鳥が著てゐる　旦
逐にこちは聞も及ばず夕雲雀　幽
花は煙つて醤油かほる　兵
ぐれついて箸にかゝらぬ妹背山　丸
姥おじやいなふ空に泣らん　貫
姑(シウトメ)のおもひを告る時鳥　旦
盧橘(ハナタチバナ)の古くさひぬれ　幽
あれでもはやかつゑた時は十市の月　兵
あるほどつくす香久山の秋　丸

三

鹿よきけ今までおれは子はもたず　貫
竹の根ほらして薄亂るゝ　旦
永平寺(エイヘイジ)吹につけてもあなめ／＼　幽
頰(ホウ)がふくれて恁麼(ソヽサン)か是　兵

鼎康へすこびたでつち來りつゝ　丸
明後早々哥の一會　貫
月代を九條の家にてそられける　旦
綱は塵とりたまはつて行　幽
力瘤肘に琥珀の玉をなす　兵
四本柱の七寶莊嚴　丸
行事は又紫磨忍辱の襴　貫
慈悲の眼は町中の月見　旦
ざる籠に露を入つゝほつておく　幽
なぐれの秋に氣のくさる祖父　兵

三ウ

松の情五分假契とぞ現じたり　丸
おもひのたばこ風が吹する　貫
泣泪雨よこぎつて小半疊　旦
腰には黒印別路に雲　幽
かしつたひまだ夜をこめてせなをやる　兵
波きいてくれい鐘がつまらぬ　丸
友千鳥いなふ〳〵と啼わいやい　貫
糺の杜に母を見しつて　旦
あゝうつすあつかの瑞籬詠やる　幽
月にみがける伊達こきの神　兵
思はくの秋湯津の爪櫛二つ紋　丸
角かけておく御しら露　貫
弦絆も公義の捉花に風　旦
江戸大霞樽屋北村　幽

名

富士の春仲居がゝりにくすまれる　兵
付食より仕上て雪に味つく　丸
枝に鳴聲なかりせば燒鳥也　貫
杉に跡見る狩野の一流　旦
壺印の文字はさだかにみえねども　幽
七八兩が物はあらふまで　兵
ケ樣の躰禿の玉子をつれて行　丸
ぬくめて居たに床はなれする　貫
汗かいて袖こす水をしぼらるゝ　旦
見めが有なら樂をせうになあ　幽
こし張の清書を見て首をなげ　兵
分別くさき窓の朝明　丸

鼻の下髭もる月の影淋し　貫
病後の草臥まさに長夜　旦
一つ露點を御掛下さるべくや　幽
天神橋をかういての秋　兵
ぎうつれて夕まぐれこそたゞならぬ　丸
錦木朽て八角をつく　貫
古郷へはたとへ抜身で來ルとも　旦
此文三遍空に聲して　幽
つみきつて左右へ捨たる花の雲　兵
景清踵あらき春風　丸

塩賣や肘首うつて雪の景　森氏 百丸
ざる籠寒る竹の下風　鬼貫
堤普請一村さはぐ夜は明て　宗旦
火繩横たふ雲けぶる也　鐵幽
中だめの音も重なる峯高く　木兵
へつたら三文玉松の露　丸

立よりてみれば月こそ水嚢にあれ　貫
濁酪こしらへて秋もいぬめり　旦
ウ
此蝠あはれことしの初物じや　幽
七十五日いきのびる虎　兵
御の衆寒山豐干取上祖母　丸
唐土の風に綿帽子かふい　貫
天の原ふりさけみれば黄にそまる　旦
馬嶋にかゝる夕暮の雲　幽
第一に松の畑をいむべき也　兵
さく〳〵として手合の墨　丸
へそ村に虫齒のうづく男有　貫
此水海の七度燒にぞ　旦
滅金鍔五つの色の波かくる　幽
つい見た時は上ゝの眞砂　兵
庭の月そりや品による花も花　丸
金剛今春小蝶みだるゝ　貫
二
鞍懸は野べの霞に隔られ　旦
雪はぐる山上塗をやる　幽

鶯の羽風重なる大址に　兵
奈古曾の關の口があくまい　丸
松嶋や緒じめの海士の巾著は　貫
貧乏すつほかく間もなし　旦
家内にもり桶あつる軒の雨　幽
疊くさつてさし足の雲　兵
古帳の神備南山や尋らん　丸
三室の岸も身体くづるゝ　貫
ひと拍子違ふて來れば根なし草　旦
皷はつゝみばら／＼の露　幽
玉の兎官人をもつてさがし出し　兵
小芝居にして見する秋の野　丸
二ウ
山の色さあ替りじやあ／＼　貫
御本丸より嵐を急ぐ　旦
惣堀や曖かけて雲埋む　幽
龍あまさがつて魚の絶命　兵
仙人の堅炭おこす大火鉢　丸
竹の筒から姿を吹出す　貫

湯屋におのこ返魂香をたかれたり　旦
清凉殿に板の間も有ル　幽
尻べたを溫暖すべく行はる　兵
子細をこねけり匙の朝露　丸
籠履の盜物巾と出た門の月　貫
われ共食に荻の上風　旦
紙細工箆が咲する花紅葉　幽
煤の流るゝ瀧津くろ波　兵
無慾者屋根葺仕まふて歸也　丸
むかしの二腰今鎌になる　貫
下成腹さもあらばあれ持籠り　旦
戀ぞ積つて河瀬の卒都婆　幽
鵜のふんも衆道者是を日にかくる　兵
地獄の厨子へ墮罪すべきを　丸
蕎麥切をかねの棒にてうたれけり　貫
夜ばなしの聲松尾松虫　旦
もはや月何時で御ざろ五十嵐殿　幽
寐むさうなあしばらくの露　兵

内ゝのぬれを見せる氣小篠原　丸
　あつた物てなひ俤の山　貫
野水の瀧は群集の中に落る　旦
　おもひの棧敷泪にぞかる　幽
三ウ
二三人割かたにして夢通ふ　兵
　米味噌薪住の江の松　丸
覺日記長柄の橋もつくる也　貫
　おこさぬ我に道具借ぬぞ　旦
出入するこよしがかゝは不律義な　幽
　しのび路の關は內かたの關　兵
思はくの心をためす關五器に　丸
　漆をまぜてうそでかためる　貫
透膠獄卒の手にかゝりけり　旦
　張貫にする罪障の山　幽
四五錢の藤六さそふ無常の風　兵
　地黃煎桶にむかつて巾さく　丸
われにけり此石二つに鑿の花　貫
　間歩がさかりて山吹の月　旦
名
中戸にて息どしさうに蛙鳴　幽
　太皷のきらすしびりの霞　兵
內裏にて七日が間雲を敷　丸
　武者を集めて嵐に競ふ　貫
阿麻久作も君になひかぜ打つぶせ　旦
　伊奈左の辨天通ひ路の堺　幽
苔古し鯰男のいきぢみがく　兵
　戀の青淵首たけと出る　丸
胴骨をくゝり合して南無阿彌陀　貫
　科の重さを見せしめの松　旦
近江のや浄玻璃の山立つれば　幽
　むかでの峯を七卷の雲　兵
吐かくる淡より消し夜半の月　丸
　眞鍮たゝけば竹けぶる露　貫
満
看經に秋をしらする窓の聲　旦
　糸につらなる百八の鴈　幽
兩岸の苔のはへたるあしたの鐘　兵
　日影にさはぐ筒とりの波　丸

むまひ物ぐひ源五郎が海詠め行　貫
あれ一松肥蒲をしられた　旦
たいていの帶にはならひて態花　幽
あうといふより籠ぬけの春　兵

延寶六年
午霜月日

寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衞板

誹諧 江戸蛇之鮓

發句 并 獨吟

言水撰

春部

此朝夢のきれ目や江戸の春　云奴
扶持をやる鳥がしらせけり庭の春　露沾
けさ匂へ梅の枝柿はつ雑煮　由言
下萠や雑煮の鍋のはつ若菜　楞木
待宵の侍従も笑べし今朝の春　幽山
野老の髭おとは蓬萊の山がつか　安昌
万歳(マンザイ)やあ富士の山彦明の春　青雲
ほら貝や春知りそむる江戸の海　泰徳
蓬萊の片山里や下戸の春　如流
吉野遅しはぜを蓬萊の山櫻　鉄林子
米粒や三社の詫も民の春　巖泉
組蓬萊子ともあらすな松嶋や　心棘
歌屑(クヅ)や冬の存分を餝り松　心色
君が代や天兒(アマガツ)稀にきそはじめ　安茂
齒固やみちのく山の壹歩剃　卜支
折帋や御ン麒麟(キリン)一疋君が春　峯 幽石
大茶湯其代はおかし庭竈(カマド)　一翠
けさや雑煮雪の下草菜大根　輕部 未染
松が根や眞木のかたそぎ神の春　泰清
万代(ヨロヅヨ)やもろこし迄も今朝の春　幸順
門の松雀の千聲かすか也　未計
わか水に秋を捨けり菊持童(ドウ)　安明
事觸らあきれはてけり御代の春　津地 調古
若水や腰たはむまで荷棒　露木
上髭や岸の松原居蘇の浪　可心
耳たぶや君にひかれて万の春　幽風
白箸の翁さへあるを宿の春　如幻
むさし野や富士を射(ア)垜(ヅチ)に弓始　莊覺
銚子より打出る浪や居蘇の花　露炀
西行は富士を詠けんが組蓬萊　青水
摺小木は戀の染木よ水あみせ　破笑子
半切やふみかへされては水祝　調加

かた糸やあはすは何を筒ふぐり　正木堂 若風
はつ若菜あらめづらしやでつちが親　安昌
御忌参都ぞ錦珠數袋　言水
籠かきよ御忌は則遠からず　安昌
出替や宿はとはゞ櫃一つ　一鐵

二月堂行に

から井戸の御法待らんあま蛙　言水
灯心に火櫻ちかし二月堂　同
濱椿波やよせ繼榮螺がら　貫吻
信濃路や璧のはなしの呼子鳥　如中
木舞竹猫の逢夜の闘守けり　調管子
竈(ツイ)に鍋の數見ん猫のつま　不卜
つらし人鳥には比翼ねこの妻　仙風
猫の妻犬一口にくひてけり　益林子
首綱や君にひかれて夜這猫　調加
縫のねはん幾世誓の御手の糸　尺草
みよし野や天王かくす八重霞　言水
かき板や柳に見と(だか)す花しゆちん　如蛙
柳下駄糸に玉ぬくはな緒哉　調加

御當地な旅立人のかたへ

馬蒲園わかむらさきや國みやけ　言水
枝は浪あらそひかねつ柳はへ　調賦子
鉄橋や雉子はながらの橋柱　仙風
いつの恨蛇(ヘビ)は尾をうつ野邊の雉子　心棘
けふぞ干瀉虎の子渡しからやまと　心色
けふ迄はよるの契や箱雛　寺尾 一明
京雛もけふや吾妻の土御門　末染
色深しゑくぼの巴もじの水　吉俊
舟足も蛤ふまんけふの海　飛州 不入
けふぞ干瀉鳥の羽休め鯨の背　大眉 吉久
けふぞ知る滿干を龍の眼玉　言水
腰骨や花にいたまぬ老の坂　風虎

万句の卷頭望奉る所に古郷迄おぼしめされて

ならの葉も江戸に匂ふや八重の花　露沾
世人花に魂一つ木性也　云奴

毛氈や時雨をまくる花の幕　芦舟
酒やつたふ桶屋の樹神峯の花　調管子
山は青葉數盃やもとの花　出思
よしの河魚もよるべし花煎餅　松風
忠峯が目臘やあらふ花の瀧　幽山
阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍　桃青
杉楊枝人通ひけり花の山　不卜
魂魄や花の梢のむら雀　直世
傳奏衆かへるかざしやこがね花　青雲
京江戸の花の木間や東海道　如流
腰ひざや目につかはるゝ花の山　一吟
狸ゝや賣場とらるゝ峯の花　泰徳
酒めしや吉野はつせの花の種　竹勢
むかひ氣や根にかへしたる花に酒　如蛙
春や名殘花見虱をむしめがね　同
花に下戸宗祇の蚊屋のたとへ有　露沾
諸勸進付り鐘鑄村の花　友夕
奥は上野花に下馬なし酒へうたん　佐々木松滴

花や浪蛇の目をあらふ幕の紋　九州丸山氏雲水
定家おかし四方の熱心花かづら　言水
しめ鳥やあらしに花の羽買山　中村言林
るり灯や夕日をかへす花の雲　大場言湊
花見かへり袖くひさくな宿の妹　幽山
日和見や月の思はん明日の花　安茂
花に眼鳥啼也しやれ首　杉化
明樽や小者が肩の花ざかり　飛州不入
辨當や山路の名殘留主居の花　調古
かば焼や花待老の藥喰　一明
待得てや眼にゆづる世話の花　渡部調要
山高し谷中や花のかくれ里　廣嶋住道折
笑かへせをのが山賤帝都の花　利重

なりひら天神へ手向けるに

花筒や杜にかけしまろが竹　横谷丁首
太山路や杖に村雲花に親仁　調加
あたら花下戸の見る日や山颪　間水
花賣や斧の柄くちし芳野山　淺草長河

花は猶待らん物を辨當屋　調吟

寺中の花に

佛縁や花に座をなす眼尻　与風

洒さびけり花に絶にし芝肴　松波

酒塩や雨露のめぐみの花鰹　女蛙

花ぞやどり乞食(コジキ)浪人幕づくし　言水

筏の床嵐の花や敷衾　同

杣人も思へ花にはなた捨谷　長河

女酒盛醍醐やうつす江戸櫻　露沾

雨降ければ

草履の尻折てかへらん山櫻　桃青

二日醉朝日や匂ふ山ざくら　茶瓢軒

提重や漆まだ干ぬはつ櫻　心色

屋形舟上野の櫻散にけり　杉風

思案人とばや殘す遲櫻　常俊

盜人や櫻は花にあき辨當　笑角

梅が香を櫻にゆづれ柳樽　春蛙

挑灯に入相もなし山ざくら　語友

老て今朝煮(ニ)ばなやむかし初櫻　重正

陸づけや見れば旅宿の櫻鯛　泰清

もりかたの箸やかざしの櫻鯛　今村 口拙

詣るや京衆の如來お身拭　重吉

御身拭淨土や北の越後布　言水

比ぞ花揚屋の盛壬生念佛　同

羽ごの子やいかに恨みん烏賊幟　會田 玄重

子を思ふ道のもつれや烏賊のぼり　安茂

空ぞ海末の松山いかのぼり　泰德

唐人だこ介來(ツ)る方(カタ)や糸貨(クハ)物　言水

孫の手やうしろの山の若蕨　南部米内 貞政

もとの春あつ湯にかへれ塩わらび　調古

塵山や古巣にかへる玉子のから　伊與田 調弧

切つゞらふりにし里や藤かづら　調加

賣て行春の湊や芝肴　風虎

三月晦日松風計句ひけり　調和

夏部

追出しの鐘錦ぞ散ける衣がへ　幽山
帯五寸あまりてなどか昨日の春　似松
ともうらやあかしも須磨も更衣　盆林子
けふよりは風呂敷かろし衣がへ　安昌
衛士篭や花の焼さし衣がへ　茶瓢軒
今朝ぞ袷花なき里の歸鴈嶋　言水
石わたもぬぎてやかろき莓衣　幽風
ぬり桶や山もあはらに衣がへ　常俊
耳の穴關守も有郭公　風虎
よもの耳杉もしるべし夏の空　露沾
心なし沅湘日夜郭公　松風
金堀の額のたえ間や郭公　調管子
玄賓にとふ人繁し郭公　幽山
蛇つらし讒言の耳郭公　泰徳
御物部屋椋橋山よ郭公　露言
せみ丸や山をわが物ほとゝぎす　水哉
太山木や聲のもとしめほとゝぎす　茶瓢軒

青羅砂や聲の綾織る時鳥　青河
油皿瀬にかはりけりほとゝぎす　流也
家賃高し松の下庵ほとゝぎす　黄吻
富士南江戸に雲なしほとゝぎす　松滴
ふじぞ雪夏のかたはな子規　一吟
目には花よけふから耳の世郭公　友可
天井や多ほとゝぎす鼠の子　利重
卯花の雪をれはなし竹の筒　風虎
うの花や浪の釣舟付書院　同

極樂寺千眼茶臼ニて

聞ぞめや千眼茶うすのむかし沙汰　言水
うつほ木や頼朝朽て飛螢　露沾
火打石聲は有けり飛螢　芦舟
夜軍や火ともしの上手飛螢　茶瓢軒
葭眞や浪にながれてとぶ螢　重倚
鍋尻や影は雨夜の飛螢　若風
田植女能因後の歌也けり　言水

かまくらニて袖垣ニ橘の咲けるを

花橘ふとしく立けり鼻柱　同
花橘後家や驚く閨の風　調古
はなたちばなむかしの人や宗祇の髭　心色
蛇の腹の蛙ふりけり五月雨　幽山
小人嶋芦の葉漕べし五月雨　如流
五月雨やかこち良なる鬼瓦　間水
三室の岸人足切レけり五月雨　泰清
草葺の岡の屋形や蓬菖蒲　調和
子に世話を狂人ともいへ笹粽　言水
鍛冶の隙菖蒲刀の代也けり　三上茂辰
引やあやめしころはこなたへ甲棚　露件
童や風を寝覚の帋のぼり　安將
菖蒲刀ぬけば散けり鉋屑　熊谷承計
牡若床や澤邊の蓮棚　幸順
夏菊は陶淵明がひや也けり　言水
床丸太茂りやかへる砂の物　内海材種
豐岡や軒の山彦諫鼓鳥　露沾
爐地下駄の音や梢のかんこ鳥　言水

沖膾箸の雫や淡路嶋　同
わすれ草後家のねざめや若牛房　同
先達や今朝の御山を氷室守　同
穴藏や鱈をつるして氷室守　風虎
三嶋手の瀬戸に住けりはつ鰹　松滴
塩に朽む名こそ惜けれはつ鰹　無適

かまくら網引地藏にて

鰹網地藏や浦のあたま役　言水
鏡磨秋や心の花ざくろ　泰德
枇杷のさね道の行衛やしゆろ帚　言水
天人の世捨所や雲の峰　四友
尻切レ龍あとの詠や雲のみね　水哉

ふじにて

山は扇汗は清見が關なれや　來雪
氣うつによし鶴亂によし富士が嵩　一鐵
汗拭ほすや浪路の棹の川　幸順
世のあつさいとふ迄こそ熊谷笠　如蛙

四條河原にて

吾妻路の毛ずねはづかし涼床　一鐵

かみゆいにとはゞや橋の朝涼み　似春

むかし思ふ枝の嵐や澁團扇　材種

もん學や夏をわらはん瀧詣　一利

わらは也殘る十筋も夏頭巾　泰德

枝高し耳にをれ込せみの聲　茶瓢軒

ある御かたにて

御一座や天の羽衣夏羽織　泰清

むし干や御代は晝寢の小手枕　如中

蚤虱いかではてなんはだか嶋　幸順

足摺や蠅も流罪の鉢の海　調加

數かくや來ぬ夜の曉蚤の跡　南部日戸 鋭秀

ながき日や山鳥の尾の蠅はらひ　風虎

蚊帳こそ枕をめぐる小夜時雨　露沾

江の嶋にて

夏草や嶋に氣を増白蛇散　言水

大井河名越のけふや蠅はらひ　同

瓜むきや岩切とをす御秡河　由言

秋部

分て今朝四方も秋也皆我の宿　露沾

つねながら八百屋が露も秋也けり　茶瓢軒

上髭や空にしられぬ露の宿　西學（莫カ）

髪結と青豆うりと白露と　信德

人足や夕立しきる花灯籠　泰德

灯籠やうき世は假のそくゐ文字　松意

はし立の椋橋川やせがきのめし　調加

から松や浪に十かへり花火舟　破釜子

深川や花火をよする歌枕　露沾

丸切や夕日こぼるゝ山西瓜　重吉

鬼灯や色をふくむといへどもあゝ　幽山

咳氣聲夜着やもぬけの秋の蟬　言水

鶉衣野はそきつきや初穂の風　閑中

濱荻や風のかけたる白洲干　若風

荻の穂や風のやどりの御本陣　可心
子守いかに庭の荻原急鷲風　調古
草刈や牛より落て女郎花　花洛春證
摺小木や糊よりなれし小夜衣　四友
大閤に打とられけりうら衣　盆林子
盆山のすそ野ゝ秋や錦縁　如流
人丸の手水盥や霧の海　一鐵
芋降て月吹にけりみどりの空　幽山
此月に慰めかねつ下戸拾山　仙風
人丸貫之破哥習はんけふの月　云奴
よしや明日は六度の落馬今宵の月　可心
芋がらや松に殘して里の月　言水
目あかしや生るを放つ神の庭　同
勘略や影をせばめて窓の月　長短

庚申の夜に

鳥の聲までばぞ月を猿眼　獨樂
臙門や見付をわたる大鳥毛(ケ)　重正

衣河にて

つとにして鮭のぼる也袖みやげ　言水
むさし野ゝ秋の寢覺や半分道　花洛春澄
日の出とや庭の朝がほ藥取　調古
あめの魚うごかしてけり土生姜　重尙
手挑灯に武藏野せばし虫の聲　調古
かよふらん青磁の男菊の水　云奴
けふの意趣豕子にかへせ菊の下戸　曲言
酒はやし根さへかれめやけふの露　濯心子
江戸酒や岩もと雫菊の瀧　露言
菊万童子や守る御藥薗　仙風
きくやかざし蓬が嶋の下り酒　水哉
九(ク)年(ネン)母(ボ)や膾に浪の菊流し　寺戸鶯雪
お物師の自慢草也花の菊(キク)　場和
曾我菊(キク)やあらしにはづす金目貫　貞清
花ばたや八重菊(キク)つくる出雲鍬　了首
赤壁や梔もあをき湊塔　米内貞政
小刀も紅葉しにけり袂草　青嵐
文臺や梔を分る筆の聲　松風

眞ジン切や栬を誘ふ小夜あらし　吟嘯
しがらみや紺屋の垣根栬川　一市
山彦や火蓋迷す鹿の聲　調古
粕漬やさはら木の森鹿の床　芦舟
わが名ゆく栗の枝折や丹波守　調管子
峯の栗猿が恨や里の月　泰清
青梨子や栬の秋の取落し　安昌

那須野川ニて
石焼ヤキや落鮎則那須の河　言水
下くゞる水ぬきはやし末の秋　吟市
たばこ數寄や此御番日を秋の暮　内田一因

須磨にて
道頓堀きのふは見しが須磨の秋　一鐵

冬部

口切や今朝はつ花のかへり咲　風虎
色見えて炭の精やかへり咲　如蛙
ふじぞ雪庭の松原爐のあられ　幸順
纜ツナ馬や夕空（雲カ）くれて岩城炭　風虎
霜白し鳥のかしらかへり花　言水
むら鳩の腹や淋しき神の留主　調古
吉田殿へ暮をやりけり神無月　言水
お見舞や戸帳のはしに神な月　矢木調隨
蒲團張むすぶの神や旅出立　調加
こがらしや身はならはしの障子骨　幽焉
朝良の花やへんじて薄氷　安昌
冬枯は遠目鑑也四方の山　露沾
峯の松木挽風や片時雨　似春
時雨ゆく木葉や庭のあらひ砂利　茶瓢軒
散や栬麓のあくた海老のから　同
爼マナイタや鹿の音おろす藥くひ　風虎
薄鍋は草のいほりよ藥喰　小林吉達
白箸や鹿のしがらみ藥くひ　如流
霜焼ヤケや下女がほむらの眞木さつぱ　調狐
鷺の色を烏吐出す霜夜哉　可心

鐘つきの肩休め也霜の聲　山臨 道折
竹へらや風の關守る古紙子　調古
古郷や小者が錦紙衾　紫塵
夜あらしや皮足袋寒み行千鳥　了首
煎茶や淡路のちどり須磨の庵　日戸 銑秀
鯁賣や籠の渡りの憂世の綱　露言
磨あげや氷をたゝく化粧水　幽焉
捨てだに頭巾や袖の冬籠り　調樂

碓(ウ)嶋ニて

袖ぬるゝ海士の子さむし涎懸(ヨダレ)　言水
袖やばいしむかしの小笹霞形　作者不知
去狀や心のあらし床の冬　頤成寺 遊水
海鼠だゝみやをのが栖の浪の淡　安昌
納豆の濱名にわたせ精進ばし　曲言
きれ〴〵や錦の棚の初鯨　交計
味噌こしや音無(オトナシ)の瀧氷鮒　樗木
今朝ぞふし首筋さする里の雪　幽山
白粉有り凸の峯雪のふじ　茗風

富士や詠雪さしくだす芝浦舟　如蛙
見るやふじわが身をのけに雪こかし　一吟
ふじの雪繪師には恥をかゝせたり　飛州 不入
下地窓雪おもげ也胡粉壁　如申
しら聲や風のつかひし雪の松　一吟
塵の世とてそれは無下也帚の雪　友可
今朝の雪湯屋が寢覺を急ぎけり　調古
吸がらや竹に散り置雪曇　重正
大神樂親に添寢の夢(ユメ)もなし　言水
唇やをのが友よぶ寒の紅粉　飛州 不入
なき跡や澤庵漬も石一つ　似春
揚句なれや伽羅を燒屋の煤拂　露沾
煤はきや月日のあくた鼠の子　立吟
お納戸に香久山ひくし衣クバリ　沾木
餅花や迦葉(カセウ)の笑しおさな皃　言水
もち花や都しめたる家ざくら　同
あすの事松にとはゞや年忘　泰德
わすれ草菜飯につまん年の暮　桃青

槃特が愚智も徳有リ年忘　言水

花月の千金かへせ年の暮　幽山

延寶七未五月上旬

撰者　紫藤軒言水

何籠

言水

蛇のすしや下に馴たる沖の石
はるかに見わたす蓼の海魚
生灸入日の浪や崩るらん
帚の翅雁落る聲
灰すくひ霞は遠き秋の霜
たがむさい事を笹分し月
さあ胴をうてようたせよ小夜衣
日比あらしはにくまるゝ星
人くひ狗雲にほえたる夕暮はて
入道相撲闘の八重山
見れば地藏竹の下闇幽にも
消し螢のあとの骨箱
精進めし苫火焼屋人よせて
淺漬はやす灘の汐風
置捨る楊枝一本漂冷
浪もてゆへる假の髮わけ
花に月朝日匂す若つほね
びいどろ障子戀へだつ春
結講な事中も恐雲かすみ
よみぢ歸りの極樂のさた
散錢を岩屋にふらす四方の風
社僧かゝぐる龍のともし火
房崎の矢大臣あり一むかし
万代いのる丸龜のさと
御袖にかつらの葵時めきて
伽羅のはつ音の雲に行鳥
いその上ふるき小佛おがむ也
ある時は寒垢離赤肌の山
遊女ばくち果は名埋む月の雪
壁書に枯るゝ戀くさの露

舟間屋みなとを袖に松さはぐ
　前だれたすきかけし化波
友かせぎ平口の契朽せねば
　世悴生れて淡路嶋山
枕蚊屋そよぐ所の難波風
　都をあふぐ澁園扇也
唐がらし春を錦の焼豆腐
　けふが七日目雉子鳴たつ
四花すでにうるほひかへせ雪の水
　くらがり數寄のこひの埋木
宵まどひ思ひ休めの蓐莚
　下もる雫乳房はなして
峯に雲洗濯物が氣にかゝる
　隣あはせのよし野かづらき
鼠とも穴師は里に聲更て
　餅のかたわれ秋のよの月
老の霜奥齒の露はまらは(まばらカ)也
　次第にゆるぐ小薄の風

卷轆轤花には遠き野づら石
　頼朝建立きさらぎの別
五十二類梶原虫の春迄も
　本草綱目首帳をよむ
窓の雪北國は皆手の下に
　それ永平寺法さかん也
物相の菩薩の誓ひ空に滿
　ぬかみそ皿に樒つむ山
しはいやつ朝日が嵩を起出て
　赤はぢかゝせ朱の玉垣
まおとこを木綿付鳥の告わたり
　小歌でころす中の關守
夕芝居月を見捨る須磨あかし
　火繩のもえさし藻塩木の色
秋風に町内さはぐ濱ひさし
　かくし女房置まどふ霜
三ウ　夜半の鐘母にきかせて此戀を
　はつせの便江戸からの文

武運長久弓槻（ツキ）が下に願ふ也
　其上御疱瘡跡なかれ雲
片時雨秋を染ゆく紅雀
　嶋ひよ鳥の遠の浦山
あたまの白い柴人急ぐ暮の月
　七百歳におよぶ古鎌
靈寶の寶藏爰に名を留て
　さらしの綱のならの葉の里
鞍をいて伊駒が峯やとばすらん
　今の外科箱見えず成ゆく
ふらすこに匂ひをとめよ花に風
　雛（ヒナ）の酒盛くれかゝる春
名
みだれ髪中居茶の間も呼子鳥
　三ケの大事りん氣おこりて
枕がたな夢もあやなき向疵（キズ）
　蔦（ツタ）ひつしばる松の下庵
知恵つけに子を思ふ鶴秋立て
　つかみくらひの鷲（ワシ）を見よ露

月落て畜生道に至りけり
　比丘尼のをしへ竹の下風
蓮の糸蛛の古巣に引はへて
　來べき暮也膾（ナマス）でもせよ
うす烟水風呂一つ見せかくる
　隣のおとこもけふは御太義
遠の花みやげぞなどゝくれしかば
　今迄泣（ナイ）たが山はらふ也
横霞道外（ダウケ）は幕に立かへる
　小鬢に雪を殘す毛頭巾
臆（アク）病者驚かされて松の聲
　所の神詫浦の鈴舟
折烏帽子浪かけ衣ひつかけて
　大江の千里遠めがねにみる
家ゝのつりは貨（クワ）物にわかれゆく
　東西南北御當地の空

何襌

夏の夜は山鳥の首明にけり
　俎たゝいて水鶏ゆく里
槇の戸に摺糊木見えて月もなし
　紺青緑青秋しらぬ峯
額ほりの松はしやれたる露時雨
　内裏普請の雲の八重垣
ウ
風に棒鬼門の守る番所
　ふもとはさゞ浪白髭の親仁
痰せきのどのひる事七度迄
　赤いはしより燒つけの色
欄干にしいら兵庫の名を殘し
　獅子王といふ出刄を給はる
園みやげ文殊の淨土立かへり
　空海一筆小づかひの帳
算盤に法のともし火影暮て
　三千世界屋守まかせに
辻喧嘩若戸引たて闇の花
　霞に月をくゝれやい注連

名
吹鼠ほこらの嵐春あれて
　幣の袋の小ぬかもる雨
茄子賣關路の別よびかへし
　納所坊主の能因とやらん
あみだ經それ中比のよみ手也
　世間のひゞき鐃鉢の聲
きのふ迄物を云たが飛鳥河
　ゆきゝの岡に見ぬ貞をする
つはけばきたがこき捨し眞萩原
　巴豆をかはれてむしよはる暮
先度の意趣月に村雲それなるか
　手さぐりの石音高の山
ウ
口がねよこせ老曾の森の老ぬれば
　耳は捨物やよほとゝぎす
講尺日坪なき影の雨曇
　世はつなぎ舟浪人の庵
小性まはし水行花の鬢かゞみ
　晝寢の思ひ胡蝶さめちる

誹諧

東日記

乾・坤

言水撰

八重瓠のきはを閉て狗杞はまがきに荒たるに、露の葉のふみ分がたき夕、しの麥の穗に出初て、まねくとはなきに入來る人あり。誰ヤ、紫藤言子也。東の日記と名付て一軸を携さへ、閑語して曰、これより先三たび句帖を顯はし、三度風躰をかへて三たび古し。狂子竊思ふ、道にあそぶの族、蟻磨をめぐり、魚の千里に迷ひて境を出ず、河豚の前に死をなげき、水鶏西瓜に敲く事をすかる。五月雨に海をよせ、霧には必色を染てをのづからなる風景をしらす。作を離れて作ある處を見ず。此時にのぞむでは、學者もなづみ、達人も筆をすつ。此たび此集粗志ある句ゝを撰んで、これが爲に序をかゝしむ。

有レ言邪其無レ言邪其以爲レ異ニ於鷇音一有レ辨乎其無レ辨乎。ふるきあたらしきをいふ時は、眞人を待て天倪にまかすべき事しかり。

延寶九夏月日

桑特小僧才麿

東日記（乾）春之部

元旦

水若し轆轤のひゞき明の松　寒泉

いつ彌生山伏籠の雲をきそ始　露沾

大筋やこしの白峯のきそ初　露竿子

似せ物語下女若水に通ひけり　青河子

いざ喞し初祖父は蓬萊へ柴刈に　幽山

餅を夢に折結ふしだの草枕　桃青

江戸山王溜池の翁春幾春　露言

初雑煮上戸が里やおそ櫻　才丸

初あけぼの一筆鳥聲にてぞ　泰徳

在江戸の比

生蓬萊小普請もなし年の杣　京 友靜

鶯や歌人の囚はつゝあした　心色

麒麟に鞍けさは來にけり年の花　松滴

組蓬萊眞砂かぞへん礒日鑑　水柳

組蓬萊寸白の薬尋ぬべし　錦林 在然
味噌煮せし鮒のかしらや氷様　露吸
蟻の皇居あらば沙糖奏せん氷様　言計
鶴の巣も季を持べしや組蓬萊　蒲生 不入
玉子地や鳥の跡たへず筆始　豊前中津 加中
百人一首繪像や鄙(ヒナ)の小朝拜　菊池 寢覺
ゆづり葉や齢の枝折けさの山　加藤 東水
蓬萊の松の調や榧のから　輕部 笹船
向ふ鏡餅にはづかし頬襷(タスキ)　久巨
今朝の雜煮貫之の中の味噌粕也　尾花澤 清風
へラ鷺の羽子ゆかりや殘すそくる板　大輪田 照龍
駒しげしカルタの家造ッ明の春　調皷子
のしめの五色片器に山有瀧の春　堀 言弓

延寶九年に

九年也達磨もえがほ明の春　小室 瀧巴
民ぞ春鳥の一聲火うち箱　熊谷 不存
蓬萊の洲崎や米のさゞれ石　山形玉野 蟹夕
羽子の鷺松の代安(ヤス)し門の森　言水

初芝居

あらなんや外山の霞初芝居　幽山
粧(ヨソヒ)初め御階(ミ)かゝりや屋臺姫　才丸
朝げしき蔦の音取を初芝居　瀧水
錢やふらす龍の生捕初しばる　桐生 才葉
世のうきめ見えぬ山路や初芝る　羽州長崎 未覺

水祝

水祝へゆかた羽衣有渡の濱　堀 言瀧
進退を油烟かためや水祝　宇都宮 一樂(マヽ)

寶引

寶引や奥上﨟の玉(タマ)むすび　路山

子日

今朝引ん城の御垣の小松原　口青
子日して我石臺や千とせ山　言水

若菜

うかれ雀妻よぶ里の朝菜摘　其角
隣男妹見けんかも若菜垣　言水

芹

灯心賣たが手すさみの初根芹　川越 無塩

法師又立ッ芹やき比の澤の暮　言水

養父入

ひとつ衣浮名よこしややぶ入暮　松滴

やぶ入や俄信心神まふで　鯉龍

やぶ入やお物師の別糸による　へ齋

御忌

花遠しつかばつかなん御忌の鐘　泰徳

若後家や煩悩菩提御忌詣　熊谷 如水

具足餅

御代なれば也歯莖の血祭具足餅　自交

梅

錫屑や雪を帶たる里の梅　日上 一靜

散や花泉式部が閨の塵　對州 未幽

珠數屋思へ菅家の御罰花の梅　孤夕

岩戸口記梅より外の花もなし　小田 幽水

鶯の瀧や今朝しる梅嵐　川越 忘水

奉納に

戸冠や御姿ひらく梅見時　言水

柳

柳の水秤目かるし糸かづら　心色

柳屋や増花うらの下緑り　一靜

蚍柳やしうとめ心朝もよひ　言瀧

風に柳物に狂ふがおかしいとや　不入

野老

山嵐の風や蘚の髭あをち　京 友靜

野老うる聲大原の里びたり　其角

松花

松の花ときわの虚(ウツ)を咲にけり　佐野 凡如

白魚

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき　桃青

笹折て白魚のたえ〴〵青し　才丸

鶯

室の戸に鶯來り麴うり　松水

鶯がねぐら笛吹おこせ笹鼠　其角

霞

越中へ立人の挨拶

戸山の霞下の句ぞ我心なる　似春

人中や覺へぬ不禮八重霞　蝤蠊子

月ぞうき世そこひ盲(メクラ)の朧山　言弓

珊瑚珠や筑羅の夕日遠霞　言扇

目前の山も過去也八重霞　露深

猫戀

猫の出合狸や太皷淺茅里　忘水

執心の尾や虵となる猫の妻　同

毛ふとんや我妻ならぬ猫の床　調榮

ぬれぬ先こそ親の前でも猫の戀　春吟庵 柳梢

餅配

餅配リ國栖人ごまめ奏シてより　其角

餅の後待なむ獄の金配　言水

初灸

雁の羽や腨(スネ)の初灸國かへり　佐原 政信

凰の子よ障子破らば初やいと　岩付 茂則

初灸臆病神にけがるべし　口青

出替

出かはりや見ぬ先祈る竈(カマド)神　水哉

出替りや末の松山普代者　尹雪

薪能

山姥や春は梢にたきゞの能　不門

猿澤や姿見いらず能もよひ　祝 忍水

大伴の九郎薪の能けしき　言水

涅槃

北(ミツ)期の釋迦住やならへる花なき里　根岸 意輪

鼻屎や濟度方便一つかみ　京 友靜

佛の別れ雜(ザツ)伽羅袖に殘りけり　松林 山井

四辻や巷の別れいし佛　吉田 幸順

雨もりや膠のわかれ古佛　露宿

殘雪

雪丈(タケ)長となだれ山鳥鏡しだり尾の　不外

一思案富士にてにはぞ殘雪　官原 調味

蛇穴出

心の蛇穴を出けり下緒ぬき　無塩

鹿角落

おとし角臭てや己れ春としる　松濤

鹿子紋染屋に角を落しけり　言瀧

鹿角や畜生道のやく落し　紀州 義武

虞氏の位小鹿の角に落にけり　和肘

燕

雀の酒安軒端の燕舞にけり　蝸蟻子

歸雁

是なるべし雁立澤の春の暮は　不卜

かへる鴈花の世界やあすか風　露吸

鴈の泪眼や飛ンで北斗の星　對州 彌平

角芦

窓の子や今は角くむ芦原國　亭枕

若芦にちるか玉蟹のそばへ草　杉風

穂綿まつ繼母心角見えけり　言水

野鷄

庖丁や草なぎかざす虵腹雉　立獨

鍋は湯にその執心や虵腹雉　調味

ながらの橋地震恨みん鐵砲雉　竹堀 吟夕

上巳 付汐干

けふぞ干潟虚性なれ共嶋一つ　寒泉

今朝世界蓬が嶋や雛の貴妃　照龍

江戸棚や雛の行ふ大掌會　蝸蟻子

盃や巴になるゝ節供買　入齋

眞砂しる雛の内裏や哥合　露迎

飛鳥井殿干潟のけふを思はるべし　露關子

けふぞ干潟童の浦貝合　志摩 破枕子

三月三日付リ汐干蓬餅　不入

豆蟹や七歩の作に汐干の今日　岩非 如蛙子

角樽を今朝桃林に放しけり　露宿

蛤やもとの砂水今日の海　羽州 未覺

蚫佛けふの干潟や東海寺　言弓

箱雛桐壺の扉明にけり　立訓

舟底や鼠汐引ク今日の濱　幸順

雛の酒たゝみの上や塩干潟　小野 石橋

艶なる雛是や桃花の精成べし　久巨

霞けり目薬ひろふけふの海　大坂　重直
乘利(シャウリ)劔(ケン)腰に澁(サビ)なん塩干の今日　自交
けふぞ塩干腎水かれて油貝　へ齋
賈方雀張子なくらん内裏雛　言弓
干潟有蚫さだおか聟雛　言水

花

盛じや花に坐浮(ソゾロ)法師ぬめり妻　桃青
花吹ためて雪を煮る也木陰茶や　才丸

江戸外に住て

人まれ也犬なかりせば花捨場　山夕

讀莊子

彼是は嵐雪の僞花のうそ　其角
酒中花や今刈萱の身にしあらば　言弓
悲(イーチ)上戸びいどろつらし花の下　破枕子
世擧(コゾリ)て待花遲し咳氣やみ　露吸
待花に碁盤の漆消にけり　同
肉林酒池木の間の花や風流(タハレ)妻　照龍
それ成松花見の時ぞ嵐の關　花詠軒　蝶夢
松風の里花のかたみや三とせ酒　飯田　隨笑
酒樽や花の塵つむあくた川　松聲
なかりけり枕の鬼門花の山　意輪
初花も根に歸りけり地震國　館林　十三歳　才し
花くれぬ箸を捨撥(バチ)太皷樽　肥前木下　如此
花の雨等類ながせよしの川　寒泉
華は盛月は隈なきをのむ物かは　熊谷　如水
花に酔ッ手酌の罪は五百生　芦水
酒に名代あり花待比の四方の里　鯉龍
目薬や花に頼をかけ無盡　太田　友孝
繪莚や山花ひらけて錦緣ッ　調味
けふぞ上野花のつらみせ出來芝居　如此
けにや上野九品上戸の花げしき　幸友
思ふべし月夜に挑灯花に伽羅　蝶夢
冷酒は枝につぼみの花也けり　中嶋　止幽
むだ花や薪を負る懷帋のさま　館林　中嵐
上野谷中花や根にもつ茶屋かつら　森嶋　東水
醒安が夢の間おしゝ花直　佐野　丸落

庄司が娘今も世にあれ昏の花　井尻 一夕
深底の蒔繪や大虵心の花　（十七）一葉

さよ國にて

しめ縄や蜘のゐを引花の塵　久巨
夫花につらきは峯の嵐や田舎人　紀州 吉淸
辻駕籠や雲に乘行花の山　肥後 西雀
花有肴有酒中の天地氣樂界　松賀
四方の花裾の色帋を形見也　幽水
詩作りや花ふむ鳥に文字礫　浮雀
風可也よしのゝ河すそ花の宿　米澤 伽夕
惜ゝでも花二分は塵よ皮草履　三州西尾 釋在延
好事門を幾重の花の小柴垣　さの 丸紅
日まけ人花の枝折や三笠山　同 丸武
森の花人を釣けり葦狐　亭枕
花に來て花なき里や下戸の貞　阿州 言泉
花ぞ吉野京樂と見へて通し籠　羽州山形 常之
小袖幕木陰や花のさくや姫　一悠
冷きらひ梢は惜し花眞柴　言水

櫻

櫻が塵糞蟲は世を下葉菴　才丸
伊吹もくさ共比無事に山櫻　調味
浮助や扈從見にゆく櫻寺　其角
酒の淵瀨變ならぬ世を遲櫻　高山 嵐吟

あり明櫻に

晨明や眼の入ささくら陰　松水
位山楊貴妃櫻咲にけり　露迎
せい高嶋櫻咲けり責太皷　言瀧
信濃路や下戸はとがめじ遲櫻　調榮
花に八重山有相撲入道犬ざくら　調子
ふゞき越菅笠かたし櫻風　蒼鹿
龍神のくさめいく度おそ櫻　柏[illegible] 友水
遊山かへり櫻は花に折られ皃　露角
兒櫻たが袖ふれし色しほみ　犬坊
揺地門雲ぞ卷こむ遲[三八]櫻　羽州左澤 吟水
田舎上戸ならの櫻や音にのみ　米澤 慰夕
此所礫禁制也犬ざくら　鶴殿 吟山

虎の尾や花の威をかる稲荷山　熊谷遊翁
山川に人魚つるらん糸ざくら　さの丸尺
女わかしゆ鼻先高し山櫻　友水
咄し上手口まぶられんはつ櫻　亭枕
御垣守へ手入もいらじ山櫻　寂之
子櫻や雨露を恵のあら乳山　立訓
綿かみや花見小袖の初ざくら　野澤幽谷
よしや世は田舎櫻もくだり酒　さの才遊

櫻鯛 付貝

墨染に鯛彼櫻いつかこちけん　其角
鯛散てえら影沉む青葉哉　友夕
一重成よし櫻は椛に興津鯛　學白
めづらしく花にとけ有櫻篭　言柳
隱元が目には木魚なるらん櫻鯛　大器一法
搔鯛や浪の都の八重ざくら　調機
毛を吹て庖丁疵や櫻鯛　對州未幽
拾ひ得たり花成玉を櫻鯛　工迪

壬生念佛

猿おかし法の灯臺壬生念佛　川越忘水

海苔

富士のりや雲行客の坊料理　黄吻
のり汁や紀の朝もよひ入佛事　心色
紙草にのり藻漉也淺草川　工迪
いせのりや難波の芦を干簾　交林
鳴やの濱とは姫のりを戀るの名なるべし　さの丸寸

馬刀

さながらの馬刀や小柄の貝つくし　同丸木

田螺

古郷を思ひ出るや田にしぬた　言雀
賤の子の泥干遊びや田にし瀉　立吟

喚子鳥

未勘國哥に山あり呼子鳥　調管子
泣上戸さめ間の森やよぶこ鳥　言管子
不奉公眠の森ぞよぶこ鳥　言弓
呼子鳥啓書記淋し松の月　露沾

相婦鶉

相婦うづら垣間見おかし水鏡　露章

蛙

草茎や蛙なますの初若葉　言籬

いでや車前手負蛙の戸板草　露宿

ひづみ戸の溝は蛙のゆふべ哉　言管子

蛙消て哥にやはらけ蛇の腹　中嶋寛水

蝶

胡蝶の舞袖に夢みん女がた　露吸

枕屏風眠やゆづる蝶づかひ　彌平

蝶飛で貘ざれかゝる氣色哉　言水

菜花

山吹の露菜の花のかこち顔なるや　桃青

菫

やぶ醫師やとはれぬ宿の菫草　蝸蟻子

指ぬきや小手さし原の花菫　露宿

筆菜

金澤の松昔拾けりつくづくし　粧猿

水茎のつくしや野部の物語　吟席

蕨 付獨活

あみ蕨何山姫の下すだれ　才丸

耳かきや黒髪山の下わらび　忘水

天蓋や死出の山路の枯蕨　和肘

京燒や獨活こきまぜて錦なる　佐野丸水

鳳凰巾

鉄拐が息なるらんや人形鮹　黄吻

鴟たこや西に太郎の山颪　心色

藤

虻蜂の吸がらやくや藤の棚　志摩住眉言

浪や巻からくり大蛇藤蘰　調機

わが宿に咲けり藤の繩簾　水柳

山吹

山吹や井手の玉木目蘗膳　黄吻

ぬしや誰レ野やしき圍ふ早山吹　松濤

躑躅

山つゝじ是や樵夫のかくれ里　太田友孝

琉球つゝじ虻ぞ鼓弓をしらべける　無塩

山賊（ぬすびと）や血の枝折の夕つゝじ　言水

茶摘

摘けんや茶を凩の秋ともしらで　桃青

雜

春の日や宗柱坊が際のこま　青鷺子
穴師山隱家とはん初神鳴　露章
飛魚はねぐら求ん海雲（もづく）陰　心色

暮春

暮春の夜〳〵土圭を縛（しば）る心哉　曉寥
扇賣は惜まぬ春の名殘哉　蛤蝶子
春つながず花山の牧と暮にけり　調和

夏之部

更衣

餓鬼姿今朝夏あやし初衣　露沾
中綿や今朝卯花の波まくら　日上一靜
臥香や竹の薗生の衣がへ　言瀧
初あはせのしめの腰や飛鳥風　如船
百とせのばゝ昔おもはん衣がへ　水柳
けふぞ夏佐のゝ中綿取はなし　幸延
糊うりや天のかぐ山夏衣　小室瀧巴
先しばし肌はゆるさじ衣替　吟夕

扇給

雨帝桐油扇を給はりけり　言籬

青簾

かけ糸や染殿の后青すだれ　調味
虛勞やみ往來や耻る青簾　言皿

筑摩祭

鍋の數みんつくまのけふの高旅籠　南部楓林
つくま人かざしの花や眞鍮鍋　彌平
鍋すみやはげをかくせし筑摩姬　言水

灌佛

生御殿卯花葺の尊とかや　調和
大佛や錢に生れてけふの場　友夕
腹帶の地藏したり良也佛生會　尹雪

生姿金の卦体や初ほとけ　蝸蝓子
玉の釋迦海士の腹より生れけり　松滴
今日の産着猶積るべし丈六尺　（富士大宮）吉重

牡丹

手折けり文殊四郎に牡丹薗　露章
渡りどんす花めづらしく初ぼたん　蝸蝓子

卯花

里の鳥啼そこなひや小夜卯木　泰徳
里寺の卯花垣や夜手習　松滴

石菖

石菖の露日玉ぞやどす花の跡　（佐藤）之矩

郭公　所の名を聞て

聲かるゝな生麥の里ほとゝぎす　露言
茬しめよ蜜柑の花に郭公　才丸
扨こそ富士耳に隙明て郭公　（大坂）重直
彌勒の世正に明なんとして時鳥　嵐吟
郭公麥負鳥とやいはむ　工迪
池田の朝臣が耳の根をほれ鵑　立吟
蛇の道蝮が知ル鶯いかに郭公　云笑
待わびて目がねや耳に杜宇　松流
時鳥賣人の初音の世也けり　調梔
郭公蛙の日干さへおゐを　不外
雲はやし馬に鞍をけ時鳥　調柴
天の邪鬼耳付かへよ郭公　寒泉

ならにて

良辨杉乳はなれし時や時鳥　尺草
花ざかりも一羽おそし郭公　不言
つまづくや石に科なし蜀魂　（館林）立丸
法師あり待郭公一夜痩　（豊前）山蛍
行蛍耳とづてんほとゝぎす　（山本）笑予
雲に聲ぞ喜撰が姿郭公　（大墨）一法
物もうや俳諧中間ほとゝぎす　（左原）政信
むら雨やな付紙おとす杜宇　（根岸）意毓
かくれ簑寶くらべや郭公　（尾花澤）清風
目あかしを雲に乞けり鵑　（最上山田宮）柳和
此枕角はへりしかほとゝぎす　（同石黒）春甫

かまど山薪はもえし郭公　一静
聲つなげ三わけの糸に時鳥　飛州 爲笑
我耳よ遲牛も淀ほとゝぎす　一春
關の杉幾夜の小町ほとゝぎす　露吸
宵の酒いづち行らん郭公　無塩
玉の緒よしばし次信郭公　言扇
御日記にも今朝の初音を時鳥　眞崎 冬虫
山里や我一人のほとゝぎす　紀州 義武
壁ひくし耳は梢の郭公　へ齋
鳴ものじやとは誰その森や時鳥　忘水
世のせわをかはる異見や時鳥　交扇
雪月花それか鳴ねは時鳥は　千丁
思はるゝ望都が目に郭公　比企 應作
卯月雲聲なかくしそ節替リ　幽水
寢處の定に入けり郭公　松賀
麓寺うこぎか奥を郭公　其角
蜀人の幽靈は黑し卯木原　言水

諫鼓鳥

ぬき捨る髭の林やかんこ鳥　破枕子
籠守や延喜の御代のかんこ鳥　獨平
病鵲ひるねの森やかんこ鳥　路山
玉水や榮螺から鳴かんこ鳥　言水

杜若

三河記や腹卷うつすかきつばた　立獨
腰かはり水ゆく川やかきつばた　〔マヽ〕一樂

若竹

笋や利休をよそに寺小僧　言瀧
筍牙やすのこの下の土龍　破枕子
八重垣や七人の奉行笋時　園井 瀧夕

若葉

爪紅粉やこがるゝ楓若局　言瀧

花柚

柚の花やちるを惜まぬ小盃　日上 一静
極め上戸花柚心をやぶりけり　言瀧
人はいさゆの花折て下戸いぢり　言水

新樹

青梅の梢を見ては息休めけり炉路男　東水子

しのばずにて

池ぞ鏡神も女の若梢　久巨
榧の木やもとの下闇風呂の内　忘水
辻切や木の下やみの待乳山　露章
仙の庵日月おそし木葉闇　云笑
下やみや葉守の神の岩戸入　長河

玉卷蕉

經つゝみ玉卷けらしはせを寺　才丸

端午

端午の御祝義として柏木の森冬枯そむ　盲月
在郷者けふのあやめや忘れ草　松陰
井樓（セイロウ）の山や梢の四方のかしは餅　黍豊
大和人蓬の猫の軒端かな　才丸
里は夏たり小旗の松原櫻狩　露沾
軒ぞあやめ下水の沼の青かつみ　工迪
引入の大臣あやめもといの紫や　露言
あやめ鉾雫こりけりまこも嶋　露鶴

杜若あやめなりひら柱色縷　立吟
五月雨の軒鎧の渡ッけふなれや　如船
釜の淵龍や水まく角粽　亭枕
四方の軒あやめ颪に下戸もなし　青柳
かざり竹の末や榮て端午の門　最上富氏 秀勝
富の小川銚子にかよへ花あやめ　露惠
菖蒲酒根にかへるらん埋水　言弓
うら住や佐野の常世の甲棚　友孝
繪幟や風に顆うつよろひ馬　榮政
甲姿十才（サイ）の翁なるべしや　露宿
芦に雀粽米にぞかられける　言水

五月雨　付闇入梅

富士白し江戸橋山の五月やみ　工迪
五月雨に鶴の足みじかくなれり　桃青
狹（さ）布子のひとへ夢の時雨の五月庵　杉風
道まつ毛袖の闇路や五月雨　松滴

題江戸八景

住ぺくはすまば深川ノ夜ノ雨五月　其角

五月やみ鼠のほこら開帳也　森嶋 東水
軒ぞ瓦水巴の字をなす五月雨　忘水
五月雨やさうり作りの冬籠　最上土屋 自興
五月雨や松前昆布の國歸り　熊谷 遊翁
入梅の穴親にはつげよ作り鮫　調幸子

早苗

聲ふるや田簑の嶋にさなへ哥　如船
あらがねの土御門の代也さなへ哥　與風

水鶏

夜普請やくるな我折ん川やしき　云笑
田中菴水鶏音を何と鳴鼈　才丸
扇時淺黄の澤や初くるな　調桐子
箱飾小夜の枕や里くるな　忘水
ねぬなはや水鶏の夜伽疊り水　言水

螢

さん屋亂火是ぞ螢の玉かづら　乘豐
愚にくらく棘をつかむ螢哉　桃青
灸おさへ室の八しまやてる螢　調子
金具紋袖師のうらや飛螢　和肘

かまくらにて

青葉隱螢や星の今下り　金川 言笑

百合

姫ゆりのしほれ釣花入やうつほ舟　如船

瓜 付茄子

闇夜きつね下はふ玉眞桑　桃青
むしなすや沼かき分る龜の甲　無塩
二月いつ身柱忘るゝ初まくは　勇招
茄子女妹が垣根をまたげけり　彌平
干瓜や輪ぬけ數そふ綱渡り　露深

鮨

太皷樽神嶋の鮓となりにけり　言弓

鰹

ちよく白し薄紫の初がつを　乘豐
ある人よめり蓼穗隱れの遲鰹　岩泉
礒山の栖浪にや入ぬはつ鰹　京 友靜

沖鱠

沖膾滿干の塩や玉鬼灯　幸友

蝿
蚊 付蚤

蝿の精京へのぼらん馬の尾や　鳥跡
青首の蝿の浮巣や鷄(モチ)ながし　才丸
蝿ぞ今笠にはらはぬ塗牡丹　無塩
あかり障子調や蝿のはり鼓　水滴
蝿合戰櫃川の橋をひかれたり　言弓
馬糞紙は蝿の都の御製哉　朧意
留主分也蝿が物申肱(ヒヂ)に夢　久巨
蝿は餓鬼食櫃まもる鬼もじ也　冬虫
蝿の初音うたゝねの森にも讀や　立吟

世をいとふ心はあれど猶はた物
くらふ事のあまり成をにくみて

かくれ家や蚤の心を種として　似春
蚊は名乗けり蚤虫はぬす人のゆかり　其角
そよや風篠にあや折枕蚊屋　蒼席
夕やみや蚤蚊の床のねらひ狩ッ　山骨
蚊はらひやかへす其手はけさの蝿　羽州 未覺
獨蚊屋家のつたへや歌まくら　棠政
血の泪蚤やこぼしてつめの先　夏入
蚊柱や下水の波の滞しるし　忘水
面向不背蚊の即佛や似せ琥珀　閑水

帷子

染入の松や木平の中納言　調幸子
品てるやかたびら時の茶屋女　ロ青
半さらしてりもせず曇もやらず　絲系
炭焼や雪に馴しを夏小着布(キハ)　言水

氷室

氷室山里葱(ネギ)の葉白し口かけ草　其角
嵐や餌(エバ)雪を生洲の氷室山　言籠
いづれか先に塩の買置氷室もり　擧白
朝つとめ豆腐の箱や氷室守　吟山
紙袋あつきにしるや氷室守　初入
清盛も其代をしらば氷室守　言水

富士詣

白鷺や池にむれ入不二道者　加夕

彌陀笠や富士千体の詣人　幸順

蟬

菩提有梢の高座せみ衣　正友
太(フト)物店蟬のきぬあり木下闇　一夕
蟬の聲耳なし山か世也けり　彌平

藻花

藻の花や蜑の釣舟蚫貝　寒泉

蓮

蓮折舟鮒の浮子をすくひ得(タリ)　才丸

夕皃 付晝皃

夕皃の白く紙燭あやうし藁後架(ワラカウカ)　無塩
晝皃や夜盗の里の留主づかひ　言水

扇 付團扇

咄興(ジ)たり扇をあけて橋涼　調管子
入波淺し石はしる瀧江戸扇　山夕
繪圖をさぞやこふらん女嶋　松水
八重の雲路風ぞ通詞の唐扇　水猿
蚊はたき扇そも一戒を破りけり　路山
聞書の扇汗の妙藥なりぬべし　石橋

持扇あらしの山は名に社きけ　羽州山形 常之

白雨

水嚢や馬の尾分る一白雨　照龍
白雨や女ごゝろのあらひ髪　立訓
阿野の松や夕立來つて暑氣をうつ　伊勢 望心
夕立や神鳴つけて切狂言　調榮

雲峰

音樂の三筋の瀧や雲の峯　松林 山井
西に日を盧生が夢や雲の峯　松滴

嘉祥喰

古錢數寄同腹中や嘉祥喰　内田 一囚
長崎算けふ菓子にみん嘉祥式　正友
兵の交物その數や嘉祥喰　學白

土用干

虫や干藻に住蜑の里衣　彌平
土用干役は姿をあらはせり　與風
蛛舞や身はそれながら土用干　随笑
時やある讃岐が袖も土用干　言水

納涼

涼み所や花うらみしか山凬　嵐吟

宇治人や網代園に橋涼み　調機

月明小艇宿二三股一

夕人をしからむ風の盛川　杉風

芝浦より南山に對して

悠然として房州浦を遠涼　瀧夕

世にあり佗て西行の跡なつかしきまゝに

獨すむ友よ朧の糒雪清水　其角

日に涼し書院硯の岩清水　佐野丸水

風や笑ふよし野泊瀨の下涼み　太田友孝

醒井や結ばぬ里もところてん　青河子

干飯を田子に浸すや不二の暮　言扇

吉野太布花の香ゆかし汗拭　戸田立澤子

庭の松ひゞきに汗は入にけり　調味

太刀の魚獻上涼し龍の宮　中條流水

死の海を汗の浮雍や夢中人　其角

雜夏

大珊瑚珠夕日や沉む夏羽織　佐々木芳徑

夏瘦や三苻にねころぶ管の床　捻少

夏の夜は長崎遠く明にけり　意輪

夏のよや蒐の尾より朝しらみ　吟山

むつ言や早物がたり夏の月　一夕

神虵や脫かけ衣三輪の杉　調鼓子

ぬきかへ衣形の小野や女へビ　言弓

殺生戒夜學ぞ破る夏の虫　竹垣吟夕

すじ甲山は着にけり夏の不二　蝸蝶子

青梅や似せ紫の壚ころも　三浦言松

鴛に舟浮巢や絕し栫羽かひ　學白

ひさりの法師ふたりの野逸、しげみが原を分こえてふりたる塚姿に

世の浮巢塚守よいざ都鳥　才丸

蕗の臺にと思ふも悲し深草寺　其角

幻やつかめば螢ひたい帋　言水

又の折ふし

一木哀に蟬ぞ今さらせめ念佛　京 友靜
手向香夕越里や細蚊やり　立吟

御祓 付夏神樂

桶川や身の垢すゝぐ秡竹　銀竹
世の垢や明衣白木綿御秡時　立吟
白干や大井にかへす御秡串　言水
片よ空藥錐鑵のたぎり夏神樂　正友
とも云べし吉川帷足夏はらへ　露沾

穐之部

颯涼

鎌鼬道の秋もれ今朝の關　志摩住 破枕子
長持や秋風起つて雲紙飛　幽山
秋やけさ四方の浦人龜の首　露拾
京扇白川の關に捨にけり　千丁
豆板なぶり氷や碎くけさの秋　調榮

捨扇鹿嶋の神もなかりけり　飛州 泡水
猛武士も後を見けりけさの秋　露吸
世人けさ心戒學ぶ秋也けり　忘水

一葉

よるべをいつ一葉に虫の旅ねして　桃青
春日〱や風こぐ猿の一葉川　其角
桐の一は鳳凰丸を工ミけり　一ゝ
付石や梧桐葉落てよもの色　友水
蜘のゐの一葉や軒の茶臼山　和肘

七夕

星河や七里の渡し妻迎　山夕
身あかりや臥ては牽牛織女の星　不外
牛の玉星はあへども片思ひ　齋藤 青幽
出合星空の紅葉ゝ心あらば　露數
東岸居士星にすゝめよ天の川　自交
添寐の星懷硯あらひけり　調味

刺鯖

鯖の塩泥中の蓮もある也けり　尺草

新豆腐

茶のけしき咄しむ比や新豆腐　其角
はつ旅や岡部の里を新とうふ　彌平
萁（マメガラ）や釜にうらみの新豆腐　對州 綠葉
澄（スミ）てるや一葉に沈む新とうふ　才丸

西瓜

茄子淋しく西瓜の富をにくむとかや　調和
瓜かれていつ迄草の西瓜守　才丸
手さぐりやくらがり峠山西瓜　朧意
切口や水の月とる山西瓜　小山 溜水
なれ時や鳴戸の渡り舟西瓜　露關子

新蕎麥

しとろの里そば刈男ととはん　曉夕寥
花そばや月より埋む秋の雪　才丸
新そばや明る侘しき淺黄碗　言柳
初花や布のむらそば信濃山　蒼席

玉祭　付送火

妹背聖靈十ふの添ねや枕爪　露章
初ものや生てかひなき聖靈の　加夕
蓮の葉舟糸や手ぐりの餓鬼祭　露鶴
送火や女聖靈えみすがた　言流

灯籠

茄子灯籠下女や捧し貧供養　村岡 芦水
揚灯籠執心の水をくまれけり　言弓

躍

踊召して番の太郎に酒たうべけり　其角
馬鹿踊おかしき故にや其名をうる　栗林 西雀

露

風を論ず露を淺茅生深茅原　才丸
白露や葉草の庭を上下宿　岩村 茂則
櫛の露に曇るといふらん朝鏡　備前 雪鷄

霧

湯あがりや霧の海原はだか嶋　黄吻
水風呂や霧立こもる一夜川　忘水

はこねにて

於ゝい峠吐息の霧に富士はなし　言水

虫類

酒さびて螽(イナゴ)やく野の草紅葉　其角

里の子や貝がらこするきりぎりす　青幽

露と波とに蛚鳴らん芥川　才丸

古聲や鳴蓋の岡のきりぎりす　同

木槿

花むくげはだか童のかざし哉　桃青

むくげうへて少年の塚に爭ふ　才丸

道心の妻しほれ來て恨む槿垣　其角

賤の戸や褌(シメシ)にしぼむ花むくげ　言水

秋草

きのふ迄水に立しか葛のはの　梅翁

蕣(アサガホ)や若衆の盛下戸坐敷　志摩 眉言子

朝顔や眠をさますきせる皿　熊谷 如水

むべ山風文屋が皺(シハ)の蕣也　幸順

朝良や物くさ大郎の日の目見　春雪

蕣は世帯くづさぬ詠哉　冬虫

せゝなぎやさゝやきの橋たばね荻　忘水

手帚や内義がまねく花薄　同

妄執のよする軍や須磨の萩　言瀧

カステラやお乳が手に散女郎花　戸田 立澤

濱町や荻の夕ぐれ自身番　岩井 如蛙子

武藏に着て

風はじめて頭巾見ぬ野も錦哉　大坂 久永

八朔

たのもの禮見しやかゝしもわら袴　渡部 異風

鳩吹

猫舌や吹間の思ひ鳩雜水　言弓

鳩吹や今しめ鳥の目利にも　照龍

若莨菪

烟千里虎膚(フ)の竹や若たばこ　水猿

たばこ荷や秋行里の馬烟　心色

月

玉子啼て卅日の月の明ぬらん　素堂

月に成ぬ波に米守(ル)たかせ哥　其角

姿見や後に月を北座敷　言扇

朝食や月にはもたるゝ心あり　意輪
也にけり物數寄の庵月の昏　松葉
へり御坐や月見る夢のやかた舟　露角
江戸廣し月は德利の家より家　米墨 伽計
月やうつす上戸の姿見大茶わん　角閏 自性
乞食や月をともしびむら虱　不云
かまぼこや三かの月もる板庇　溜水
月に盞我影對して友有けり　露深
ふもと河月より下す棹鰻　擧白

いせへつかはす

角赤や二見てる月戻子の國　言水

名月

芋洗ふ翁影を濁すな神田川　蒼席
芋井の里ずいき刈曾原や月　才丸
けふの月猫の目もなしかまど山　吟山
更にけふ田毎の月よ段目鑑　鳥跡

閏に

撞たり芋久方の朝臣月明　意輪
千金や閏の一字月のけふ　羽州大谷 秀勝
芋洗ふ女に月は落にけり　言水

放生會

時にあへり生るを放つ雷鳴鳥　云笑

駒迎

燒杉の陰や子昴(スコウ)の駒むかへ　言水

雁

毛枕の僞りつげよ天津雁　松滴
白鷹や青土佐渡る胡粉筆　(マヽ)　一樂

鮭

雪吹も同じ越の洲鮭てるや　才丸
はらゝ子に八十瀬の苦勞讓(ユヅ)りけり　水哉

色鳥

菓(コノミ)鳥色に熟すの名なるめり　擧白
やき筆や鳴(キ)鵯(ヒヨドリ)のはね箒　小田 言流
人の代や鶺鴒のをしへ水後(コウ)架　笑夢

鴫

だし鰹我ぞ數かく小夜の鴫　無塩

あみたはご鳴の看經なるべしや　黄吻

鶉

鼠鶉をはむ世はかなし二頭鳥(メイく)　露吸
夕淋し下戸の我から片うづら　調柳
あんやきの鶉鳴なる淺草や　仙半風

砧

漉返し浪うつ音や水衣　對州 未幽
須磨の夜や蒲鉾うちし蛋衣　同 彌平
小つま木綿よその契や小夜砧　伴色
雨露や蚰が衣をうつの山　冬虫
小夜碪黄檗山や三十棒　調味

鹿

角細工琴のしらべや鹿の聲　政信
角めでゝ鹿こそ通れ云入樽　岸志

菓 付柑類

酒遠しわすれぬ柚子を吹嵐　似春
少しと覺ぬ御所柿の目出度に似(タリ)有　松陰
問來(コ)かし椎るる里の松葉賣　其角

金柑や梢のすもりなます皿　山夕
芝居菓子うる聲連よ圓坐柿　山口 言繩
袖みやげ衣の玉や房ぶだう　無塩
ぶだう哉藤のおほつかなきさましたる　不卜

茸

松菌や西行朽て苔淸水　山夕
むくふ世や人のつかみし天狗茸　調味

重陽 付菊

山道やませのあや織菊小袖　泉舟
白菊やみつねが宿の濁(リ)酒　孤夕
御酒所給りにけりけふの菊　調味
なけしの菊あるじの千代もしられけり　言瀧
濱菊や榮螺のふたの匂けり　破枕子
露の梢枝に天ふる大白星　蘭山
酒異見けさ菊にあり童子教　言水

蔦

殘る世や利休かづらのつた灯籠　瀧水
卷添や松に秋あるつたかづら　笑儒

木(コ)葉(ヘ)の食羅を狄(エビス)の錦哉　其角

紅葉

初紅葉はづかしの森や隠し下戸　言弓
富士の姿雪に梍や腰かはり　左澤江田 正壽
負の梍いはでの森や內氣妻　露迎
春の花えみ敵(カタキ)也秋の山　捻少
前だれや紅葉の嵐茶屋の客　越柏崎 似水
もみぢ狩下戸と化物なかりけり　紀州 義武
糸巻や織かけ錦三むろ姫　言瀧
海松や時雨が底の紅葉狩　勇招

後名月

夜〻鶉(ウヅラ)ニ虫は月下の栗を穿ッ　桃青
月と栗馬喰も色を爭ひけり　蝸蠊子
いが栗の仕形咄しや月の輻　露宿
鬼歯あり栗一口にけふの月　內田 一因

雜秋

ゆふき入道手織おどしや新紬　露章
針自然龍灯かゝけり油はぜ　浮雀

箸引の山芋は汁の青海や　源五一
稲づまよ忍び編笠田のかゝし　北條 昌順
秋の夜は針の耳ずも明にけり　幽山

秋晩

嗎おもはん下戸たつ山の秋の暮　對州 定俊
枯枝に烏のとまりたるや秋の暮　桃青
柴の戸や探幽も我を秋の昏　松翁
碁打坐頭暮ゆく秋や馬に鞍　露沾
秋淋したため息やつく遠寺の鐘　幽水
俳諧不知いつもの秋とくれにけり　佐の 才若
虛勞やみの世とふりにけり秋の昏　山形玉野 疊冬
山祖母も山を出にけり秋の暮　横井 柳鬼
枕土圭遠寺やうつす秋のくれ　攝州 梅翊

東日記（坤）

初冬

宗鑑留守詑宜の笠時雨きや　幽山
きせる袋熊野ほくちや神の旅　調相子
目に見えぬお物入也神の旅　蝸蝓子
大社勝手見廻や竈神　幸友
女神旅寐ぞあやし屏風岩　加藤東水
此度は牛に鞍をけ神の旅　松滴

時雨

いづく霽傘（カサ）を手にさげて歸る僧　桃青
紅粉時雨うつしかねてや剃毛捨松　蒼席
耳役やおもひ捨てもむら時雨　調柴
竹釘や口よりこぼす村時雨　山本笑予
莓莚尾上や時雨やからかね　露迎
古やねや隣の時雨小夜あらし　角田宗忠

落葉

うてよ木戸關行老と散椛　露吸
落葉衣繪姿寒し仙の洞　云笑
木刀や僧正が谷の冬げしき　露宿
山うばや凩かしぐ朝餉　一（マヽ）一

枯野

捨車かれ野や牛のみいら國　松滴
草双紙とぢ糸切レて枯にけり　無塩

下野の國に行脚しける比、出流（イヅル）がはらに草枕して

心覺（サメ）て蓬霜枯の古髏（カウベ）　才丸

十夜

赤手拭金澤猫や十夜參　調柴
十夜鉦（カネ）明日の納豆もたゝきけり　言水

歸花

彌勒佛其世ぞ遠き歸り花　藤倉一春
白鷺や枯し梢のかへり咲　對州以笑

埋火

宮殿爐也女御更衣も猫の聲　素堂

火燵して風に涼む夕べ哉　才丸
埋火や付句を嫌ふきせる皿　水猿
わく火鉢輪廻の罪やおこし炭　言瀧
秋の名残炉に鳴虫や池田炭　孤夕
にくまれ戀火燵やね間の書枕　白性
黒塚やつぼね女のわく火鉢　言水

紙子　付頭巾 踏皮

風の闕肩に名古曾の奥紙子　村岡 芦水
右郷の事紙子に語れ富士颪　言籬
置頭巾山彦おかし咳(セキ)ばらひ　忘水
胡桝頭巾鶯鳥を殺せし科やらん　黒部 随笑
天目や碁打親仁の置頭巾　露宿
西行や富士を後へなげ頭巾　羽州庄内 器水
身や頭巾山は淺黄にかくれ家の　信府 江鶏
くゝり頭巾山下部し鳴の枝　忘水
置頭巾山と見しこそ江戸男　松島 正春
唐木綿いとふ近社せちべん足袋　吟夕

湯婆

姨捨人たんぽにかへせ雪月夜　言水

夜興

夜興ひく盗人犬や龍田山　其角

霜

霜と鼻のうごかぬ世也二柱　亭枕
別鐘霜や揚屋に置土産　飛州 泡水
はだし道婆婆の業也鐘霜　言瀧
虫のねを霜に埋めりは白粉　加夕
古元結たが置捨し橋の霜　千賀 如川
霜をふんで巾着のかね日本橋　大坂 久永
鵁鶄(ゴイ)鳥や木葉をうへ毛夜の霜　對州 緣葉
鷺足や雲井の階子今朝の霜　十三歳 金丸
霜解やひけども更に駒の爪　松水

暦奏

物たちや曆奏する御所支度　言籬
暦奏や天地万物の塁書　一春

顔見せ

貞見せや玉川の流所帯の藤　調柴

雪

その葉の塵ひぢ此嵩にこそと
こしかたよりおもひしもげに

とみれば雪塊(ツカエ)になりぬ左不二　京 文靜
草戸や皆にと問ふ雪おこし　寒泉
雪深し片野の暮の女狩　幽山
雪の山里水乞鳥の涸(カレ)音哉　才丸
雪を汲ンで猿が茶ッ煮けり太山寺　其角
羽園のなごりや杉の雪下風　可然
酒杜氏(トウジ)奥歯みせけりけさの雪　云笑
砂糖ふつて薬研や雪の捨小舟　定俊
雪淋しあみだの光ふじの嵩　調柳
よそはふるらんかゝが懐小夜の雪　玉夕
雪の鷺や此松伐に聲替ッ　羽州長崎 未覺
茶執行や渡りくらべて瀬戸の雪　千丁
初雪や哥人の心上戸腹　吟山
王子の夜かん鍋鳴て雪もなし　意輪
毛ふとんや雪の夜涼し夏衣　伴色

雲けしき来べき宵也雪女　寒泉
ちるや粉糠臼井峠の雪下風　應作
伏猪の鳥屋獵師か咲(エミ)の雪ぞ今朝　路山
酒かいや見しよの姿雪化粧　露角
塩漬のからす鳴けん森の雪　友水
雪の扉ねがほ耻けり妹脊山　調鼓子
波頭むれるる鷺や雪の綿　さの 丸雪
明の雪見松ぞ十かへり箱枕　同 丸龍
さばへけり雪折竹に虎毛猫　小川 水柳
舟板や胡粉のふゞき富士颪　加夕
大かゞみ向の岡やふじの雪　露深
竹帚雪があみけり爐路すだれ　森嶋 東水
初雪や筆に棹さす石の海　青幽
越の山雪を天下の新關也　最上 秀勝
富士や飯哥人の口にけさの雪　政信
耳に趣向竹先しるや夜の雪　調味
湯殿姫こぬか降けり肌の雪　蝶夢
江戸はふる吉原の早雪の暮　京 千之

富家ハ喰ヒ肌肉ヲ丈夫ハ喫ス菜根ヲ

予ハ乏し

雪の朝獨リ干鮭を嚙得タリ　桃青

山居雪

雪ならぬ日の鉢へかくあらば欲を山菴　言水

霰

鼠嫌ひ霰に肝を小夜枕　笑夢

爐の朝手品ぞふらす初霰　對州　琴流

氷

冬も猶夏の字ともに氷けり　擧白

水鳥

黒鴨やうきね枕の毛びろうど　千丁

流しもち戀慕の鴛のきづな也　蝸蟻子

引哥を東鑑やみやこ鳥　赤井　松有

藥喰

藥喰尾上の鹿やはりま鍋　調子

庖丁や白歯をならす藥喰　最上　頭也

胴がらは狐にはません藥喰　中嶋　止嘗

頼朝や二度すそ野に藥喰　作色

鰒

鰒うり時後家や數の床の海　言弓

月は霜重ねふとんやふぐの腸　露吸

松幾代岡付ふぐの行末は　京　友靜

河豚ノ記ねぶかど宿に我獨居て　其角

身はなき物となん讀しは鰒の濱　津田　少羽

金澤にて

繪にだにも筆捨松や鰒嫌　言水

納豆

汁の妻あはずば何を糸納豆　へ斉

砧盡て又のね覺や納豆汁　其角

網代

佳人や鑊を網にて引網代　久臣

神樂

朝待や神取若狭里神樂　山骨子

八乙女や五人の日傭神樂錢　調柴

大よせや四十末社の若神樂　如嬰獨

窓岩戸女躰ぞ見えし辻神樂　云笑
お初尾や鼻紙通ふ里神樂　言籬
よみ人しらず古今万葉伊勢かぐら　岩城 元侗

寒

寒念佛後生願ひの時鳥か　友夕
寒聲をつかひ奉る臣下也　熊谷 如水

首毛振

雲烟生駒の首毛ふりにけり　忘水
首毛振(フレ)ッ常灯の烟數繪馬　無塩

年忘

心待ヶ花の隣や年わすれ　露章
年忘れたり跡へは取にかへられず　紀子
かり方や客うそ貞の年忘　寺嶋 春曙
羽衣や松に忘るゝ年の數(シハ)　言水

煤拂

年木問屋太山の奥や煤拂　調賦子
鵲のわたす階子や煤はらひ　甲府山下 吉正
佛や日斗のこる煤はらひ　(マヽ)一樂

煤とりや篠の葉かくれ新坐舗　一夕
すゝ芥しばしと佗ぬ世捨藪　其角
持もよひ人の掛の煤をれ竹　才丸
薩いとはじ白(シラ)禿(クモ)あたま煤拂　對州 幽僻

佛名

名やとなふいたり上人伽羅佛　調柴
心なき木挽有けり御佛名　山夕

餅花

枯柳餅の菩薩も若がへり　露鶴
餅花やいづれを先に姥櫻　幸順
もち花や母が心の闇の梅　言水

衣配

相の僧都御法ぞ床し衣配ッ　言瀧
付札や千代を松屋が衣配ッ　千丁
大夫もと明まつ客や衣くばり　播州 梅朝

節分

里ぞ今宵豆の雨ふるかくれ笠　館林 一束
豆男東の方へ年越なん　調鼓子

雜冬

菰一重わぶや乞食のぬくめ犬　其角

ぬくめ鳥梢の鷹や放生會　政信

石枯て水しほめるや冬もなし　桃靑

藤任ロへはじめて召れし時

下り菜やうれしく水の趾すゝぎ　京 友靜

から鮭や梢に氷る浪の蝦夷（エゾ）　才丸

冬の來て脫の蟬や屋形舟　不外

立田姬はだかはづべし山の冬　寒泉

行灯に星ぞ冴行針の穴　隨笑

鳥屋雉子今ぞえさしの冬籠　露草

薑漬や和布刈の神の手向草　言弓

宿を冬枕とばや泊瀨山　露沾

暮冬

夢なれや錢の枯葉に年の暮　堺 元順

御製を感じては世人蜑也年の昏　露沾

おしめども花にはうれし大晦日　松友

年ぞ暮あらはれわたる趾のかは　松田 末覺

茶やが碁盤はこりつもるや年の昏　尹雪

柊の香とも枯行年の詠せん　學白

年ぞ昏身は質種（クサ）の根をたえて　仙牛風

塩魚もふり行身也年のくれ　松陰

順德院百敷の年くれにけり　立訓

光陰もはま矢支宅に暮にけり　鳥跡

隱士背柏は蓑をやりてとたりしが

質におかん露さへ氷る年の昏　言水

于旹延寶九酉歲林鐘中旬

紫藤軒言水編

東日記　畢

木のまたに人咲し世や初花國　幽山

天のかけ階（ハシ）巣おろしの山　言水

朧影鼠ぎらひの明待て　仝

金瘡の枕鐘沉む也　山
里奴(ヤツコ)あらしの相手松もなし　仝
ふくべのねつけ雪を呑ふせ　水
ウ
洞簫ッ野干象牙(ゲ)に袖馴て　山
佛の繪執行金箔をふらす　仝
陰あふぐ青蓮院の花ひらけ　水
御八百屋人浪はこぶらん　仝
昆布あらめ葺不合(フキアヘズ)の濱庇　山
久にふる雨蛭(ヒル)子あらはれ　仝
正直の頭痛藥をやどらせて　水
縫さし衣とると思はじ　仝
あだし桶夕ア殘らぬ燒(ヤキ)所　山
蛤ふんで松陰による　仝
見し姿京大坂の女中がた　水
色しる月の水のよしあし　仝
名
取立の城山ふかく鹿ぞよく　山
輝(テル)元(モト)の詠本あらの萩　仝
菊衣大文字屋の代ゝかけて　水
瑞籬の露茶の錢を待　仝
傘(カサ)やどりさゝらさゞ波聲よする　山
道若衆のよるべなき舟　仝
藻汐草假名ちがひ文それ迄に　水
宮古の目利嶋好む宿　仝
辰巳角(スミ)山の姿に軒一ッ　山
怪(バケモノ)梢すみすてし月　仝
葛の葉に息(ムスコ)をかへせ子を返せ　水
沓がすゝめて霧の遠道　仝
ウ
八重たゝむ水分上手礒離レ　山
突(ツカ)れて魚の油たゆたふ　仝
捨竈急(ニヘカ)けぶりに里肥(コエ)て　水
新道中に歸る松風　山
乞食念佛ちるを惜まぬ花にかね　水
抱(ダキ)守ッすかす泪うぐひす　仝

在江法師麥の秋風と讀りけり　言水

只蕗の戸に夜雨を聞　才丸
折すから鳴ぬ毛虫の音をそめて　同
とある夕昏螻の羽かき　水
月けふは捨石影を動かすや　同
栗殼裂て木玉顯はれ　丸
人ン面の柿の物いふ生にせば　丸
軒の南陽に薬づとの國　水
江隱れや鼠の道の關守て　同
瓦灯鴟てるや曉の颪　丸
雪のふるに妹が懷を起別る　同
聲つかひ比の戀かるゝ草　水
初めくら鵙たる鳥の世を乘て　同
盦ふす野に捨られて佗　丸
髑髏鳴て月の悲しき夜寒霜　同
儒にくづされし寺山の松　水
水莖の羲之が余波の花しやれて　同

名



殘る餅茶を柴の戸に慰める　丸
樒のとだえひたし物つむ　同
木履跡皿の中道雪に明　水
犬釣ルおとこ雪にわかるゝ　水
杜鵑我子を切ッて朱に鳴　丸
知略におとす木の下の闇　同
杉生風火を誤て闕章ける　水
萱ほす里のてゝの留主守　同
秋夕べ淋しがる牛に物くれて　丸
是より相撲に出る夜の月　同
雲之助嵐之介の名に別レ　水
姿・霰の女しとむる　同
見かへれば狒ゝの笑に篠ふして　丸
柚が枕の斧かくすなる　水
暮にけり磁石山迄暮にける　丸
蘇鐵の葉ニて葺し庵有リ　水
花ヲ喰ヒ木賊の莚織る翁　同
風のサハ〳〵として春雨　丸

蕣は花の短氣なるもの也　昨今非
刄薄を風の狼籍　言水
鍍挑灯月また遲き道の端に　曉夕寥
こしらへ紋の露の橫空　非
雲水の酒中の聞き香を初て　水
箸さし下す朱の蜆舟　寥
ウ
肩衣の筋の細江の眞白波　非
地諷はしら滞木ふとしき　水
隙每にたばこ燒火の哀なる　寥
貧乏内裏よし野邊の里　非
ブタ札の胄とりあへず馳來り　水
そも此碁石が城と申すは　寥
粮更にあたり嬉しむ柿の核　非
狸ゝと名乘刀塵壺に入　水
秋蘭海鹿かり伏箱枕　寥
あづきが豆か沖浪の鳴か　非
天秤の鳥居ほのみし花の嶋　水
かしこは霞長德寺の塔　寥

名
雀の巣手のとゞく程聲暮て　水
杖の淋しき迯蚰の影　非
里娘うか〱病のはてしなく　寥
芝居は江戸に歸る思ひ路　水
鹿嶋や筑波序參りの中祈り　非
旗本知行戀のやせ草　寥
色忍ぶ夜盜の關の關守は　水
海道地獄餅の噎死　非
物すご〱と一木の牛房けづれ果　寥
人參髭の翁あらはれ　水
月のなやめる野良が床の勞影　非
かり露垣に姬の來て鳴　寥
ウ
座敷籠萑心の秋閉て　水
行水願ひ苦の八重苺　非
凉暮に白雨して鞠を醒セリ　寥
干飯寺の僧かへり來つ　水
嶺寂寞と一筆鳥花にとぶ　非
東風遠ふかく酒旗の藁菴　寥

下戸花に腹を切べし芳野越　言水
煎じ茶黄(マヽ)の瀧匂ふ春　怨流
朝局鶯啣し年つみて　立吟
霞のひだに待(マチ)針やある　水
とぞ躁(サハ)ぐ裸に月の出ながら　流
紙帳がもゆる秋坐(ソゾロ)風　吟
ウ
黒猫の背をなでかへす露の戸に　水
蚕とり狐蓬生の今朝　流
昔見しはつかの原のこがし草　吟
茄子まじりの妹が浅漬　水
石一ッ千引の袂かはく間も　流
朱摺木朽ず錦立門　吟
薄膠(ニカハ)妻戀星の瀬を過て　水
鼻を洗ひし水上の霧　流
鍋炭や襷(タスキ)にかゝる色ぬなは　吟
鳴たつ客立月は夕昏　水

小町いふ西行が杖の置所　流
こゝ關五丈見かへりの松　吟
名
茶碗酒杉白妙に降時は　水
曙里の垢離の下簔(ミノ)　吟
鳶が鳴吾妻あたごの嵩よりも　流
雲立うづむ寛永の杣　水
日蔭枝扈従の林分入て　吟
うかれ女の蚫の狭衣　流
中の海三味線國々は隔つとも　水
新芦原にさそへ化波　吟
今迄は在江戀の若代官　流
紬の羽をり花色の帶　水
惜めども處(アリ)明早き流レ帳　吟
身は捨草のおはのうら枯　流
ウ
人の子にたゝかれてうせて霜の虫　水
めつかひ犬の闇の夕里　吟
匂ふらん骨を枝折のさつは山　流
けぶりの哀ばゝ灰もなし　水

娘ども誰にあづけて遠の花　流
金持えらみ中の初草　吟
夫はそれ宗因の紙帳難波風　京 友静
中比は紹巴奈良團より　言水
炭ぜゝり雪の柴の戸明はてて　同
左り字残す友呼の鳥　静
かうゆく月追分坂の跡は浪　仝
先ところてん秋ながら暮　水
ウ
豆の粉のくねりし色の草深ク　静
きり〳〵す〳〵切疵の後は　水
白似せの霜より露に朽かゝる　静
逆足そよぐ岡のべの茶屋　水
松とよむ石火矢うどんうつ時に　静
岸は南北杉箸を引　水
餓鬼力かたへによはる日陰水　静
舌ぬく地獄蟹も鋏(ハサミ)を　水

磐石の根夢轟(トヾロキ)て覺にけり　静
鹿嶋の帶をむり解の床　水
幣(ヌサ)枕二つ目の花香をよせて　静
朱の腕(ウデ)引朧夕月　水
名
行つまる男心の春からは　仝
薩摩生なる髭の八重草　静
裏替の琉流(リウ)球(キウ)莚かた敷て　水
松が根太良手習の中間　静
細道の衆道初めてしるとかも　水
廻リぶんなる居つゞけの夢　静
袖の露粘(ネバリ)謠あらはせて　水
俄開の釘金の菊　静
老の松入歯に秋を見違る　水
山颪の月鬼じや〳〵と　静
あの人の内義心は霧の闇　水
朝脉たよるそれよりの事　静
ウ
はたすべき今日を限リの鐘ぞ待　同
番組贔(ヒイ)屓(キ)末の三井寺　水

所風闇の馬さしふみならし　静
革巾着の玉の緒かつら　全
香をくだく花より後の夏藥　水
くるな來りて林菴が門を　同

(言水)宅に尋よりて

新道や旅人くらしつ時鳥　大坂 重直
入梅を耻るかび助が宿　言水
飯烟干物さへなく海荒て　同
小片器によする波の捨草　直
荷桶たゆたふ月の影やさし　全
調市詞をねぢむかふ雁　水
袂錢尾花かたよる乞食原　直
名聞衣よしや世は露　全
鳥羽玉の中切り姿色朽て　水
泪のきづな鮟鱇の水　同
貝杓子それも思ひの片われや　直
五濁の海羅神は受ずも　全
一きばり胎内くゞり行兼て　水
幾注連たぐる寸白の虫　全
黄金釘勅の鐵とこ打拂　直
都の風俗かざす伽羅籠　同
諸枕月花わかつ床そゝり　水
さあ棚さがし何哉の藤　全
腰財布命の内にくれ霞　直
中間風情こゆる中山　同
ふり喧嘩より捧ふせるけしきまで　水
耳に燒亡さめぬればうそ　全
側屑世上の塵も出しより　直
とならぬ昔自鬢くやしき　全
行水と手水の時と夏むきと　水
其狀明てそこでよめ蟬　同
愚智親仁脇日の森の陰高ク　直
道ない契袖の下草　全
形斗和尚となして色の月　水

靈供そなへてをく所露　同
筲をあらみ素麪ふける霧圍　直
吹揚瀧にしばしとて里　仝
瑠璃佛筋氣瘡氣の恵(メグ)みあれば　水
玉鉾人よ因果小車　同
照花に頼む影なきみいら國　直
枝の雨ざらし若葉待春　同

芋の葉の露しばし銀(カネ)持賤屋哉　言水
豆の刈枝を細くべの里
月おとこ脚半(キャハン)干陰枕して
川にてのはなし命嬉しき
行程に泥龜(スッポン)のねぐら踏迯ヒ
そよ〳〵と蓮の上風
非時くふて椽がはに出て詠レば
まけられし人の棊盤もてくる
枕引それ罪(アヘ)ッての其後に
付入レ戀を袖の中道
幾恨みねみだれ首に繩かけて
宵鳴犬のせなをやりつる
頭日の卵塔(ランタウ)垣にうちしほれ
酒の御異見中かひなく
朝枕醫者は上手に有ながら
あて字を笑ふ窓の呉竹
花つゞく町暖簾の月をみて
年より氣さへ浮たつや春
名目かけ公事跡に別るゝ片霞
京へかへさん鳥の古郷
注文の草染衣ちがへ來て
餓鬼に不動のけしきあきれし
巷(チマタ)なる地藏姿のやさしきに
旅(リョ)人は夜雨の宿なきを歎(ナゲク)
野路枕蚊屋釣ッ草は名のみして
鳥扇に風とてもなし
岩陰の水乞ヒ蛙つつくりと

蜂の羽もぎて浪に浮むる
寺小姓春夕ぐれに夕昏に
痔を恨みては月をかこちつ
霜衣秋思ひねに火燵して
栗や飛てん魂や飛けん
猿が嶋尋ぬべしとの勅定に
狸のつゝみ山中に入
木挺諫め漏木谷の花ときて
躑躅に焼ヶしを建立の院
瓢箪ヨリ利休が術を斷炭
からすを鷺に雪の羽帚
都風所宮笥の森分て
西隣殿秋かよふらん
晨明の小分別かる影更に
葛うらをなす手の筋の事
初薄やせ人形に圖をとめて

言水

片器の山風老の高砂
丸薬の干瀉待浪遠に幕
枕そゝらす鳥の夜衾
うたかたの昔の御亭何とかは
あねは物ぬふて弟は物書
豆あられ夕慰にいらせつゝ
雲を見るにもあゝあどうやら
心から富士來迎の月涼し
すゝむる奉加田子海の入
焼ヶ出され花のしほるゝ捨衣
籠者をつなぐ藤のとも絃
名
在所馬血に鳴鳥も春ながら
因果ばなしの翁うぐひす
ウン二寸ンつゞけ入して谷細し
年季の内を石ばしる瀧
紅葉衣野良道心ぬぎ佗て
おもひそひ月假名經ヲ讀ム
秋を世に日の物斷の空と暮

人とふとても留守聲の虫
一ッ衣欄干ぬ内は草の戸に
たゞとる事を觀念の窓
木乃國三の車に時を得て
盲龜のたより伽羅の山川
ウ
壁の家富るに浪の出入や
娘ぬすんで芦の葉隱レ
道やどり手くろ後架のそよ風に
ある夜の闇路火を付てのく
人寢ごく花の笑になしはつる
ひるは小僧め鶯を伽

郭公神鳴山やうそ三室　正友
龍馬が峯にかゝる夏雲　言水
御成門見すかす月に風呑て　友夕
一葉の柳はし。る肴屋　玉夕
下くゞる水穴藏に秋早く　言水

蚓ならではなく虫もなし　正友
ウ
八重葎いか物喰にあれ初て　玉夕
疊切さく苺の古道　友夕
追つむる怪姿夢にきえ　言水
ぬしあるうらみ汗の淵川　玉夕
千束積捨材木の床暮て　正友
衆道わかるゝ尻引の鳥　言水
月遠くと渡る天の思案橋　友夕
あらしの始め修羅鎧嶋　正友
世の亂浪しめすちん提婆品　玉夕
一たびえめば女檀那の　友夕
白絞人まつ暮の花に聲　言水
黑藥とく雉子の羽かき　玉夕
名
樂燒の朝たつ霞草の戸に　正友
むかしは分限春皆になる　言水
惡すゞめ聞そこなひて初音鳥　友夕
唐やうのいき末しらぬ雨　正友
都紗綾電空の影ふけて　玉夕

坐頭袴の月うとき里　友夕
くひこぼす雫拂はぬ霧じめり　言水
山又雲によ所の罰あて　玉夕
此恨ミ道理をかへす五寸釘　正友
鬼の笄(カウガイ)明のねみだれ　言水
見セかざり血の池の端行迷ふ　友夕
菩薩開帳袖に袖〳〵　正友
食ウ百味人間の口埋りかね　玉夕
醫者のはじまり國の憐(アハレ)ミ　友夕
つり髮の跡顯れてかり社　言水
宇賀の形の卷あぐる浪　正友
花新タに比(ヒラ)目魚三枚夢殘す　玉夕
尾瀧の櫻板おろし吹　友夕

江戸八百韻

幽山

何路

花をふんで鑪鞴うらめし暮の聲　幽山
松はしらぬか年號の春　安昌
白い雉子青いかしらの山見へて　來雪
裾野の里に人崩れ有り　青雲
歩行の者それより下は草枕　言水
買喰買呑引請て月　如流
四方の秋はづかしい事もなかりけり　一鐵
さりとは內氣小萩さく宿　泰徳

ウ

白露の細かな物を見てばかり　執筆
浮べる霧の成あがりめが　山
大閤に詞たゝかひけふも暮　昌
蓄生塚に女あらはれ　雪
胴は馬髮はから輪の立姿　雲
えしれぬ嶋に戀渡るらん　水
ほれらるゝ藥求に迷ひ出　流
たはけつくして物に狂ふは　鐵
こはざれに袂も袖も有ばこそ　徳
無理に歸るを無理留の客　昌
商ひははや成かゝり暮かゝり　山
中間手形を鳴のはねかき　雲
大博奕もう此上は小田の月　雪

二

役者を止て山陰の霧　流
家老衆お爲淋しき松の風　水
目安はかへる須磨の浦浪　徳
いで共比源平兩町立別　鐵
礫の喜太郎犬引次郎　山
ある時は愛宕高雄の粘おこし　昌
說經芝居日ぐらしの瀧　雪
女中方鼻紙しほる袖の浪　雲
うらみふくみて半插に吐　水
御前に解毒を置れたりければ　流
見わすれぬるか佐野の玄三　鐵
其後は家もあらなく敵討　徳
普代が在所へ行ては歸り　昌
落し子や雲に紛レし遠の月　山

二ウ
戀路の狐よしなやの露　雲
相槌や文巻捨る唐ごろも　雪
旦那さまはいつ歸らしやる里　流
眞木の戸を細めに明て吹風も　水
虚勞の枕おけさする雪　德
遺愛寺の小性一人ゆひしが　鐵
執筆の聲して瓦摺けり　山
都也と有ル所の竹格子　昌
半分見へし姿艶しき　雪
迦凌(陵)頻うはの空にぞあこがるゝ　雲
上品上ゝのうつけ成秋　水
今朝の露閻浮檀金を惣拂ヒ　流
本田善先扶持かたの月　鐵
花はいさ先祖慥に村の松　德
三
我分限をふかす春風　昌
さる後家をだまして越ル年若し　山
お經握らせて夢を授くる　雲
時に大蛇片敷角を折ラしけり　雪

上代の穴せばき岩かげ　流
天の戸に相鎰もなく光なく　水
おもへば雲にぬすまれし月　德
尺尊の齒薹の山の村紅葉　鐵
彌勒久しき氣のつきの秋　山
三よし野の吉野の奥のくらい所　昌
假の油をおしむ西行　雪
賈方の形見に殘す(る)髮道具　雲
爰に橋本柹ののふれん　水
友千鳥呼捨ながらのぼりけり(行)　流
三ウ
茅原の風にまめていやれよう　鐵
耳うとき親仁斗の一ッ庵　德
茶の錢爰に是爰に置　昌
賴む也南無やかるたの大明神　山
まよひ出させたもふ欠おち　雲
天皇も奉公人に樣をかへ　雪
今さゞ浪や志賀屋有けり　流
酢醬油小比叡の雲に行通ふ　水

杉の葉分にこぼす蒟蒻　徳
西に月いざお手水に立つしやれ　鐵
半夜の契り夢の間の妹　山
妹を置て露をとばする下り船　昌
悪性つもつて乗物に錠　雪
花空し本復(ブク)もなく送る也　雲
はなす飼鳥四方の囀　水
名
一日にも廻り盡さじ庭の春　流
山あり川あり草履下駄有り　鐵
谷陰に明衣(ユカタ)手拭雲をおび　徳
嵐も青くこぼす月代(サカヤキ)　雲
柴の戸に面目も無く世に遷(ウツヘ)り　山
町中の異見是生滅(メツ)法　昌
つけごたへ難に逢事八千度　雪
飛脚を以てたのむお秡　流
木綿(ユフ)たすき結びそめたる大無盡　水
森の一村取たての里　徳
しら鷺の群るる人は聲〳〵に　鐵
消〳〵の烏丸どの　山
哥に月旅籠錢送よまれける　昌
評判の日記十露盤の露　雪
ウ
楠や兵庫尼(アマ)店(ミセ)霧の隙　雲
窂人の住む浦の初嶋　水
腹さびしく(さびし)幻(ウツヽ)の後は夢もなし　流
散るまで遠くかけ廻る花　鐵
かるわざの子共は蝶におくれじと　徳
鞍馬の坊を出て春の野　昌
綵遊のもゆる所はうつ石に　山
清め奉る早蕨の事　雪

何箔

其事よ蜑の咽(ノド)干(ヒ)る今日の海　池西氏 言水
扨都衆は嶋山の花　青雲
四畳半青きを庭に踏初て　秦徳
曙の雫風つたひ行　一鐵

中とをし句ひや音に通ふらん　安昌
岩切立て下水に勢い有ッ　來雪
月は尾上片陰にして鶩鳴ク　幽山
豬は木の葉の色に伏めり　如流
ウ
就中秋は悲しき下屋敷　執筆
さる事有て長髪の露　水
風の聲荻にゆづりて虚病　雲
念者ぎらひの余所の夕ばへ　德
いつの間に女房狂ひねぐらの鳥　鐵
袖のふくさの歌の中山　昌
琴の爪扨其すへに續たる　雪
空は菩薩のをの〳〵の雲　山
からくりの蓮華碎て失にけり　流
一昨日の名殘たゞ骨と灰　雲
何ごゝろなふてあの子が遊ぶはやい　水
外面にかよふ馬に代八　鐵
斧の音千束ニ落る枝の月　德
甲州入の山更に霧　雪

二
覺の武士嵐と云らん四方の秌　昌
御ほうびにあふ青の葉の森　流
郭公雲井をさして參けり　山
あふのく方に明やすし月　水
一救麥の粉のかぜかほるなり　雲
麻の狹衣それ縫ながら　德
更級や姨母さまへ來て二三日　鐵
男にくみの中道の山　昌
命也容儀自慢の事なれば　雪
杉の梢に殘る下ゲ髪　山
千早振飛たまひての大神樂　流
上野におゐてかゝる白雲　雲
葉たばこの里は麓に詠め行　水
ウ
方ゝの禮そよぐむら竹　鐵
朝まだき御堂の庭の霜白し　德
女人禁制烏啼なる　雪
死際も取みだすまい名の立に　昌
袖は惣ぼり戀ぞよせ來る　流

色好み預り人に成果て　山
子持が中も古郷の空　水
俄剃離れ切ッたる松の風　雲
ばかされて行細道の蘿　徳
年を經て毛も何もない鹿の聲　鐵
羅沙のやうなる黒雲の月　昌
明ほのや霞落來る篠(の)つ餘　雪
長暖簾のかし(柏屋)わやの森　山
神垣や五匁膳の花に鳥　流
三
黒木の楊枝夕ぐれの春　雲
なびき行赤手拭の薄霞　水
巾廣の帯卷向の山　鐵
余情ある女姿の神所　徳
大幣のあまた夜ル聾を賣ル　雪
鯨ざし曆もどきにくどかれて　昌
取はなしたる中の搔板　流
人ごゝろ直にと思へば曲み行　山
彌陀の誓ひの針がねの網　水

焦熱の湯の子うかひてかうばしく　雲
盤石はねて淺漬を切ル　徳
はたらきけり獅子のいかれる蝶拂　鐵
手柄のむかし錆鑓の風　昌
關ヶ原月もとれてや此やうに　雪
常盤の沙汰の色かへぬ松　山
三ウ
天にあらば天人かけて秋の雲　流
孔雀の八聲明離れゆく　雲
一宿に寐覺驚く山鬼　水
此里のみの盗人所　鐵
古着店詠め捨ても出なまし　徳
切米の銀定めなの世や　雪
國方の親仁の夢にわせつるか　昌
異見の聲は松風成けり　流
大盃割てかへりし礒の浪　山
諜舟よりまねく夕月　水
霧晴て三線の撥白妙に　雲
ほだされ果て香久山の色　徳

つり者の花に眞榊折挿頭(カザシ)　鐵
よみ給ひしも養父入の文　昌
(名)春の日も雪踏に惜む西の岡　雪
筋を嫌るゝ一むらの雲　山
させぬ也雨宿りさへ無謀人　流
抑治承の五月の事なん　雲
判に曰くよく聞えたる郭公　水
をし明がたの寄合の空　鐵
生肴浪打際によばふ也　德
輕衫(カルサン)を着たわつぱみへたり　雪
夕ぐれは唐人躍爰に又　昌
間鍋のふた松むしの吟　流
野邊の秋昔は何れの椽の下　山
古入道がおもかげの露　水
世の中よ色紙の月の山の奥　雲
ウ　浮雲たゝむ一双のいわ(岩)　德
おひんなる臥猪の床も上しより　鐵
猿子を懷(イダ)いてしゝややるらん　昌

山寺や三千三百三十三　雪
世尊一代筆かぎりあり　山
兆典子(チヤウデンス)(司)後の土を分捨て　流
大根牛房庵淋しき　雲
七ッ鉢水ゆく花の麓川　水
ちよつとそこなる棚橋の春　德

三字中略

相宿り天狗も婀娜(トウン)ほとゝぎす　松木氏 青雲
鬼心せよ五月雨の闇　來雪
泥の海其時は春秋もなし　如流
草木の外に赤貝の色　泰德
月細く鱠の山の峽(カヒ)よりも　幽山
初て凉し棟の槌音(ト)　言水
同名に跡は讓りて町はなれ　安昌
憔な手代松に立添(ツ)　一鐵
ウ　大方は伊勢の生れの浦の浪　執筆

魚類の日待朝あらし吹　雲
拶取を障子の陰に立別れ　雪
一坐の笑ひ化名くるしき　流
心中に腕(ウデ)のつよきと云捨て　德
夢に阿(ア)吽(ウン)の佛の空　山
されば世は人と成又石と成　水
五條通の天の浮はし　吕
ない露を青物店にせき下せ　鐵
煙絶にし壺塩の月　雪
二十(ハタチ)斗皿をかさぬる山の穐　雲
布切レしぼる一筋の瀧　德
蒸(ムシ)菓子の箔をすくはん花散て　流
女棧敷の袖のふじ(藤)なみ　水

二

不慮の戀たそがれの春付ケて行　山
助太刀響く小泊瀬のかね　鐵
三輪の山日來懇意の隣也　吕
此重の内杉の葉がくれ　雲
一聲は唯燒鳥ぞ殘りける　雪
六十年が齒に思はるゝ　流
其道に嗜(タシナム)事を大師より　德
麓に當つて柴屋町有リ　山
馬士も紅葉を床の添枕　水
夜這ばなしの星合の空　吕
夕暮は氣をもつて來る風の月　鐵
人参五分ふり出す露　雪
朝皃の色を見せたるちよく咲て　雲
數をそろへし今わたりの雁　德

二ウ

御普代衆幾春秋に至る迄　流
上野の木の葉簾にぞ散ル　水
薄緣(ウスベリ)や釜に時雨の音をかし　山
そげ者爰に寂(ジヤク)まく(莫)の暮レ　鐵
四方髮(鬘)枕の外に友もなし　吕
みやこの酒を柴に替つゝ　雲
春日野や下卑た哥にてたどり行　雪
何でも取込む袖垣の森　流
一涼み脾(ヒ)胃(イ)つよさうな男ども　德

緞子しごきで砂拂ふ露　山
濱びさしはんやに殘ル夢の月　水
袖に浪ゆく堺屋の秋　昌
吾妻路の三十三間昨日の花　鐵
芝の大佛衣更着もはや　雪
三
今はとて草履がけにて迯る雁　雲
霞にふかき宿屋の曙　德
泪が降ルふらば幸よいはさて　流
仕組によする世の中の戀　水
なけき樵小橋の舟に物問む　山
淀の與介が明くれの浪　鐵
菖蒲草腰手拭を引捨て　昌
軒のもとゆひ黑き筋なし　雲
老人の貌に霜をふらしけり　雪
水精の珠數霰たばしる　流
常香の行衞や竹になびく霓　德
蕁やぶれて屋根ふきのころ　山
一とせの茶物がたりの難波風　水

三ウ
天滿の付句ようはした月　昌
梅紅葉是飛事の始とかや　鐵
雨したゝりて蜻蛉の國　雪
蚊の聲の濁るはくだる溝の暮　雲
暑氣をふくむ小便の風　德
退屈に大勢の中分過て　流
かしこに兄弟子爰に水入　水
色わるう移ふ鏡うらみ果　山
藥も針も物おもふには　鐵
返り事一祈にぞ誂ける　昌
今晩三日月われても末に　雲
丸山や見ぬ唐士の秋までも　雪
霧にかさなる上がたの富士　流
鐘の聲いなふ／＼に花もなし　德
下戸の心は何とやうな春　山
名
寒かへる浪に肩切ル大井河　水
雲ゆく空に木綿ふんどし　昌
戀の山毛ぶかき峯をさぐり分　鐵

日來のおもひかたまりの岩　雪
焼傘る松の煙のいとしやの　雲
でんがく串の過し世わたり　德
常闇やそれ影待と成にけり　流
鼠の穴よ子孫繁昌　水
粉糠吹俵藤太の家の風　山
あふぐ神田の茄子白瓜　鐵
小遣ひ帳ゆふ四手かけて拂也　昌
でつちあがりや火焼屋の前　雲
駒振森の木枯月明て　雪
霜に跡ある獸の糞　流
國課たつる煙は天に有リ　德
阿蘇の郡の咄になる山　山
此程のたはけ重る多化禮嶋　水
花に浪風追出してやる　昌
諸道具を八重の棚葉から付ケ　鐵
かすみに落る里の穴藏　雪
土まぶれ赤膚山の下タがくれ　雲
さすの同塵住よしの風　流

何子

夏痩に蟲の細道もなかりけり　三輪氏 一鐵
蚤蚊にゆづる苺の狭むしろ　南山
瀟湘岩根の夢や破るらん　言水
暑やさむやの今朝の水音　安昌
室咲の梅が香しめる雨過て　如流
手作にふくむ青物の露　泰德
語りながら一日來やれ庵の月　青雲
もう哥仙ほど幕殘る穐　來雪
淋しさや机の上の塵ならん　執筆
古き都に重ね土器　鐵
二三百蓬が嶋にたつ煙　山
より蛤のすみよしの浦　水
わろめさへ口過ほどの松の聲　昌
火打袋にかんなくづちる　流

八角に金剛杖をおもひ立　德
西國下りのふじになる月　雲
染川の心中の沙汰雁啼て　雪
宿かる浪のぬれかけの露　山
いやな頰すく藻燒たつ下こがれ　鐵
借錢乞にわぶとこたへよ　昌
袖枕恨は花にのみぬけて　水
蝦夷何とやい春の夜の夢　德

二

行クやらん達丹迄も朝がすみ　流
加勢を乞て雲につらなる　鐵
山下に一日千句とよむ也　雲
中に妄者のこのむ松かぜ　雪
惟見よ種智圓明の明石がた　山
浮世がたりのしら聲の波　水
鷗さへ終に鳥屋が手に渡ル　昌
むさし下總の中程の町　流
南には瓦の烟小塚原　雪
めがねに遠き森の木隱　雲

やがて五十身は空蟬と成にけり　德
夢の中宿蟻の道筋　山
草むしろ寢にくい夜哉あゝあ月　鐵
肌に付たる金冷る也　昌

二ウ

筒取の行末みだるゝ袖の露　水
所はられて野路の篠原　雪
お駕先矢なみ繕ふ風の音　流
奥様の目にかゝる黑雲　德
金入の帶におもひの稻光　雲
足には胼木の間行なる　鐵
影見れば月は筑紫の侍筋　山
道心の闕穐とゞまらず　水
海越のさいの河原の霧分て　昌
舟ははるかに夕皃に乘ル　流
蟷蜋も二打三打うつとみへし　德
よはりて聲の出ばこそ蠅　雲
後の花大師の粥も過しより　雪
毛吹はなひの艸むすぶ霜　山

三
十德や覺る夢野に明日もきん　鐵
又嵐ふく兵庫どのより　呂
引結びあやめ六日のおもひ川　水
しのぶくる輪の沼にまどひき　德
中といへば大盃をおよぐ也　流
鬼灯(ホウヅキ)むき栗水の逆まく　雪
はきだめの熊手に秋を捨て行　雲
さあ町廻り露も時雨も　鐵
逃疵やあらそひ兼て村紅葉　山
いたづらな犬遠近の月　水
深山邊の死人(シビト)は桶に顯れて　呂
坊さまと呼は風にまぎるゝ　流
乳母(ウバ)が肌はなれし庭の松淋し　德
古脚布しめり村雨になる　雲
三ウ
別路や浮雲をまく御座一枚　雪
昨日の富貴今日丹波越　山
武士は帝都を枕にするも有　鐵
信賴瘧(オコリ)ふるはるゝ也　呂
狩衣の色青〱としほれしは　水
此戀やめう神はうけずも　德
思ひの山七日のぼりて氣をへらす　流
斷(コトハリ)たゝぬ末の寺入り　雪
世間より腰ぬけめとぞ呼りける　雲
影は桂の大男にて　鐵
秋の夜のしたり尼の鐃ふつて行　山
命をからむ竹籠の露　水
越の花谷の難所もかへりみず　呂
五万の聲に鳥雲に入　流
名
衣更着や佛の御(ミ)名をくりよせて　德
嫂の噂に今日も暮行　雲
戀も戀かれは分限のひゞく也　雪
上林にてはやらするいろ　山
遠の里幽(カスカ)な醫者の有けるが　鐵
大かた人の伽になる松　呂
かり枕毛貫にかゝる礒の浪　水
明ゆく舟の眞木のさゝくれ　德

哥よみのおやじの奥歯まばら成　流
霜雪豆腐とろゝたのしむ　雪
志し葉廣柏に一ッつゝみ　雲
西の大寺むし積（シャク）によし　鐵
月にとふ口来鳴たる子の行衛　山
秋風の取ル天井の塵　水
露（ウ）ふかし荒たる宿に頭巾めせ　昌
年せんさくにむかし戀しき　流
大若衆花橋に袖ふれて　德
いづれの雲に女うきたつ　雲
有嶋に南の風を待とかや　雪
晝寢につるて長い咄しが　山
酔たほどに去年三月花の陰　鐵
赤地の錦の雛や餅など　水

何香

石筆に腕かいだるし野路の月　藤井安昌
油單の枕袖に松むし　泰德
綿は〳〵四方の夜寒に急がれて　幽山
しはぶきしげく草の上かれ　如流
近き比味ひ初るズウトホウ　一鐵
立よる陰やツウランの軒　青雲
文字は何三句めいかん此處　來雪
水邊はなれ千鳥啼也　言水
魚（ウ）取ル事堅ク守を付らるゝ　執筆
御寺侍畏りけり　昌
春日山陰に帽子をかたぶけて　德
今は荆（オドロ）の髪すじの道　山
骨はほね身はそれながらそれながら　流
鬼の舌うちするは誠か　鐵
いたりけり儒を専のこゝろには　雲
十五よりして衆道に趣く　雪
大僧正枕の風にうき別れ　水
哀れとおもへ跡式の月　德
園の秋けにもはれにも甥獨リ　昌

渡部よりの袖はやひ露　流
帆を上て花なき嶋へと聞え行　山
二
鮑にたはむ竹の春風　雲
淡雪や一重は消一重は　鐵
軒端にかゝる足代の雲　水
土の玉手に取籠もかく斗　雪
浪にながるゝ古沓のかず　昌
息杖の先を拂ひし河風　徳
都の西より丸太うる聲　山
茶數寄とも朝〱を待所に　流
老人夫婦ようおりやつたの　鐵
法の雨定て道もわるかろふ　雲
逗留させぬ死手の山越　雪
砒(ヒ)霜(サウ)石誰が代に砕き初つらん　水
案內連るゝ下野の原　徳
關の月笠其外に氣を付て　昌
えてぬす人か杉村の露　流
二ウ
豐円や霧の籬の圍ふらん　山
余所は地震に風さはぐ也　雲
淺茅生や淺茅が末の大寝坊　鐵
ふとんをこがす小野の炭竈　水
峯に雪下女を扣て行嵐　雪
松は難面中のすりこ木　昌
かまぼこや板洩月を軒にみて　徳
一遍の塩穂がふらする　山
八重菊やしほめる鮓の色もなし　流
水無瀬の浪を分る彌(イ)臑(スネ)　鐵
綴(ツヾレ)斗下にかよひて菰被り　雲
知略なりけり戀路なりけり　雪
取たてゝ色ある花の太夫元　水
祈禱のお禮題目の鳥　徳
三
赤豆粥甲斐の白根の春の風　昌
雲にこぼるゝ焼塩の山　流
强り腹松はしるしもなかりけり　山
初會の枕尾花ふりゆく　雲
袖は露あはうな貞の男有り　鐵

小柄をぬいて霧にかくるゝ　水
歸る秋手つけの金もない程に　雪
律儀に月は思はれし空　山
夕あらし小性部屋へも通りたり　德
拵さするさやの中山　呂
燒餅の菊河にいざしばしとて　雲
ふち高の盞に一ッの詩を書　鐵
古里に錦の風呂敷引たゝみ　流
長者のもとの湯屋の入込　雪

三ウ

羅漢達朝むく起に立出て　水
鳥は雲にれん飛のこゑ　德
しやれかうべ是も憂世の河原もの　呂
賴朝の合羽袖もかはかぬ　流
柄袋眞田はくんでうたれたり　山
穢多が城になめし革みゆ　雲
高津（カウヅ）の宮惡くさい風よそにふけ　鐵
仁德天皇むし齒欠行ク　水
世の榮へ莚（ムシロ）の煙にしられけり　雪
不公儀者も遊覽の月　呂
昨日まで日に見ぬ秋を傾城を　德
忍べと荻の聲替りする　山
春の花紅葉に成てみしやれ果　流
御（ミ）室の岸によする行人　鐵

名

金佛いつの昔のあらし吹　雲
物問ひませう苺の礎　雪
葛城や久米藏先へ走らせて　水
龍田の奥にかゝるかし（借置）馬　德
神すがた廿貫目も有やらん　呂
陰陽既に身躰はわかれず　流
中人のかやうに巾物がたり　山
須磨あかしより女まいりて　雲
座敷おどり和田の御崎をかい廻リ　鐵
八盃きげん色かへよ松　水
政清が最期の恨眞葛はら　雪
内海の露に青い火のとぶ　呂
尾州の住かなとこの上月晴て　德

抑當社八雲おさまる　山
ウ 村時雨四方はお留主に成にけり　流
山もあらはに見へしぬけ足　鐵
ちやうらかす風よりつゝの瀧の音　雲
目黑の原の犬が飛つく　雪
夕日影細蛇の里がくれ　水
坊主の熱心かねひゞく也　德
花の山子おろし藥散果て　昌
局の化名殘し行雁　山

何袷

大名やどうおぼしめす秋の暮　坂花如　流
内屋敷ゆけば松風の露　一鐵
霧の隙水こす砂利の山晴て　青雲
硯石花から兒にさへ月　來雪
さむしろにまゝ事亂す夕氣色　泰德
ちんよころ〳〵白黑のくも　安昌
八重畑生ずる所野路の里　言水
文字定りて草刈の哥も　幽山
ウ 鼻緒の涎も長くつたはり行　執筆
左は海ばら江戸の出離レ　流
都人房州浦も見へたりや　鐵
我等も本は法花なりとて　雲
御僉儀の焔魔の帳に申やう　雪
三十年此かた新しき寺　流
墨衣染かへしては染かへし　昌
疊の緣の塵の世の中　水
末の露本の雫の小盃　山
黄な粉小豆と野は成にけり　雪
むごい親め捨し枕の虫の聲　流
勤にくもるよし原の月　鐵
夕暮は花も情の帶ときやれ　雲
針取出すむらさきの藤　昌
二 奈良坂や薪の影のかつらむき　德
筐にうつらせたまふ神風　山

川海老の髭白妙に顯れて　水
浦嶋が子のはぜや釣らん　流
隙さうに天の橋立かよふ月　鐵
都なりせば金持の穐　雲
其方はもみ糠いるゝ袋屋也　雪
かはつた茶碗あらふなら見ん　德
明日(アス)の朝あへもの一種思ふより　呂
佛の事を云出してなく　水
願はくば旦那の力草の庵　山
麥飯(ムギイヒ)などをふるまふての上　鐵
長うなりつめたき風を待居たり　流
淨海今は按摩とらせて　雪

二ウ

銀のひる卷したる孫の手有り　雲
地には砂(イサゴ)の寺町通り　呂
駕(ノリモノ)を逆(サカサマ)にかく松遠し　德
女房ぬすみくらき夜の風　山
五月雨手代が袖にしきる也　水
小篠茂りてそよぐ米さし　流
山陰の大津におゐて喧嘩だて　鐵
三井の古掛おこせといへども　雲
公儀さたゆるしたまへや人〳〵よ　雪
備をぬけて鑓下の露　德
物一ッ遠見の月に首(カウベ)かと　呂
木乃こがるゝ山添の色　水
唐士の吉野の出店花の伽羅　山
後醍醐樣の御用聞春　鐵

三

四天王硯をならす朝がすみ　流
え方にむかふ須彌(シユミ)の頂(イタヾキ)　雪
算術に松を拂ッて竹の聲　雲
極印枕に半疊の夢　呂
深川に遊びたわぶれ迄の月　德
庵の秋ようき世道心　山
昔思ふ野良の果のはての露　水
裾は泪に血がはしる也　流
よろ〳〵と刀を杖につき捨て　鐵
いかひ御馳走に舌もまはらず　雲

朝鮮人打頷(ウナツ)いて行斗　雪
高きを以て富士と思ふた　德
彩色の雲を次第に顯はして　昌
一文笛の鳥の初こゑ　水

三ウ

曙の闕にながるゝ地黄煎　山
結ッしがちにて通ふ岩陰　鐵
大年寄縁の楷諸ともに　流
三浦のなにがし杉山のそれ　雪
鎌倉や廣間をさして見渡せば　雲
金の張付光明遍昭　德
練薬をそれ佛法にとき給ふ　昌
五重轉ゝ印籠に有り　山
伊達者の芭蕉の女立出る　水
小町が宿の一もと薄　流
あなたの文こなたの物申片鶉　鐵
食喰さして暮過る月　雲
よしや花氣が違う成鐘の聲　雪
うしろは霞谷をのぞけば　昌

名

二ッ三ッ土器まはす春の風　德
ふはふはの盛(サハリ)山茨(フキ)成けり　水
是非をわかずおほろおほろとして豆腐　山
小女(メ)郎ころぶ道野べの末　鐵
村近く吹かゝりたるぶちが聲　流
諸勸進入れず用心の事　雪
番神やかはりがはりに詰たまふ　雲
訴訟かなひて少し岩戸を　德
新開きたとひ鬼有嶋成りと　昌
爰に鳥おどし强弓を引　山
哆(アツカヒ)の中もはなれし庇の月　水
隣のかゝも世をうらむ露　流
祇王祇女おいとしほやのいとしほや　鐵
亂曲の聲終つての後　雲

ウ

近衛流比は卯月とかゝれたり　雪
梨壺おかしう青葉の風情　昌
五人前仰付られしさしみ皿　德
打物とつての箱細工也　水

一の谷鼠一疋落しけり　山
駒の林に羽(ハネ)はたきする　鐵
修行者の枕の花に起時分　流
あくびのうちに南無阿彌の春　雲

木何

山口
茶の花や利休が目には吉野山　來雪
麓の里に雪をれの筒　如流
牛車跡に嵐を響かせて　安昌
左衛門右衛門詠めゆく雲　言水
あれでここそあれ御兄弟中月はよし　一鐵
野は人形に分てやる色　幽山
灸おろし蓬によはる虫の聲　泰徳
古釘ふんで拂ふ露霜　青雲
ウ
明はつる雲のかけたる崩レ橋　執筆
山ほとゝぎす河越をよぶ　雪
畢竟は此世の外の旅草鞋　流
暮て鎧の袖をまくらに　昌
戀すてふ先一番(ツガヒ)かゝれたり　水
人待宿の北の戸障子　鐵
風の前挑(カヽゲ)盡(ツク)して油賣　山
雲にかさなる院〳〵寺〳〵　徳
納豆箱尾上の杉やしほるらん　雲
湯漬も白し有明の月　流
火事見舞露と答て歸る也　雪
古き都の釋迦霧に立つ　水
花あれば一樽も有楽生有リ　昌
柳はみどり拍子に乗けり　山
二
咄し數奇鶯とんでべん〳〵と　鐵
春は來れ共氣のつかぬ雪　雲
煩ひの奥はしれざる床の山　徳
あひともながる名取川也　雪
さむさうな袖の上行泪見よ　流
一夜二夜三夜下馬立をする　昌
かりそめの言葉の末を待ぶせて　水

若キ時には色〳〵の事　鐵
よしや世の身躰は只肩ニ有ッ　山
芝浦肴座にまじはる　徳
神明や顯れ出し浪間より　雲
松は鈴ふる芦の葉を吹　流
雁鳴て其後座敷に直る月　雪
先蓴菰盆霧のぼる空　水
二ウ
二荒の麓の秋の暮見れば　呂
納る旗を薄なびかす　山
五月雨に銅の笠まで朽て行　鐵
螢の火の子更て飛風　雲
やい起いやい起いやい手枕野　徳
雜好の心でつちはしらず　雪
生豆腐匂ひは假の物成に　流
鯲の命水くゞるとは　呂
半切に八十瀬の浪をせき入て　水
鈴鹿を守し軒のさし板　鐵
柊に忽亡び失にけり　山

うすい盃もつもれば人の　徳
花にうかれお内儀達もうは氣の月　雲
三
白むく一ッ句はする梅　流
藝前や事改る百千鳥　雪
衆徒は南の春に向ひて　水
明わたる元三大師靜也　呂
吉相の夢書付てゆく　山
何なりと望次第にふるまはふ　鐵
四條川原を手に入て置　雲
夕涼扇は隙を明にけり　徳
さらば腰うて切麥をうて　雪
六七里漸〻晝の事成に　流
ゆるりと追やれ金川の馬　呂
床はなれ知音むなしき跡の夢　水
三線間鍋取ちらす徳　呂
本ンのかゝじや魔の村雲けふの月　山
養れゆく有徳者の秋　徳
三ウ
細な露手代が心ためされて　雲

葉末の匂ひ殘る極詰　流
業平の哥の姿を置合　雪
法樂の舞小弓尺八　水
若宮に米一つかみ指出す　呂
森の下闇血の道けとて　山
はねられて御亭淋しき小夜時雨　鐵
揚屋の法度夢もむすばず　雲
目付共余所にめぐらす中の月　德
鴟色の羽織蔦の下みち　雪
今朝の風身にはしまぬか草履取　流
酒もしたゝか是でたべます　呂
隣棧敷見知り越なる花有て　水
男達ともさわぐ虻蜂　鐵

名

春ふかき野逕に離れし牛右衛門　山
つら扶持絕て雪かすか也　流
地獄門引出してきる松の陰　雲
向ひの岡のお旗本衆　流
當世のうはがれのふし行嵐　雪
宿おりすれば氣の延る雲　水
夕暮はぶら〳〵病物ぞおもふ　呂
むかしの戀が化てせめ來る　山
玉章やよみ奉る大般若　鐵
三藏たのむ中の小使　雲
かよひ路に次馬は有れと通しけり　德
十二日と中暮の床入り　雪
煤を待ッ小笹にやどる軒の月　流
來年の明西南風　呂

ウ

富士の嶽物よろこびの其一ッ　水
強食ふかす浦のしほがま(塩竈)　鐵
折〳〵の御遊の砌供の者　德
采女の衣を大葛籠にて　雲
前髪や田舍芝居に誘はるゝ　山
おもひの奴神垣による　流
酒だせさ人躰見かけた花の山　雪
商の爲かさねての春　呂

亦何

雪や思ふ松に并しを竹箒　西岡 泰徳
雑巾氷て軒端ゆく風　言水
銅壺の湯煙みじかき朝朗　一鐵
屋形に月を捨舟の浪　幽山
はつ嵐よしなき吐逆進めけり　來雪
子もりが不沙汰いかならん秋　青雲
是はしたり小壁の疵の村梍　如流
折釘つたふ雨の飛ばしり　安昌
ウ
宿願を心にこめし雲晴て　執筆
戀の大峯分そむるなり(より)　徳
口舌事うき身に添へる鬼二人　水
若衆ばひあふ六道の辻　鐵
誓文の春日の前を忘れたか　山
あの火にやかれう飛火に燒れうと　雪
果〳〵は皆合點の世の中に　雲
聖徳太子書て置るゝ　徳

片岡に三日さらして埋て有ル　鐵
串ざしの蛇小萩色づく　水
扠夜ルは氣のつよう成鹿の聲　徳
またぬにむかふ山だちの月　山
あだ花や役に立ずの庄屋の子　昌
柳のみだれ葉でたばぬる　雲
二
と〴〵く氷蒟蒻解初て　雪
八聲の雞冠明ほのゝ春　昌
がき大將三月三日の事なんめり　流
呑んとすれば干潟と成行　徳
生姜酢やあわび嶋山浦懸て　水
主がたには伊弉諾伊弉並　鐵
已に連哥めでたうあがらせ給けり(ける)　山
伽羅の一燒ごまのごをきく　雪
なふ局どうやら少氣のつきた　雲
伊勢や狹衣ながめ暮して　流
戀は戀實とも虛とも思召せ　昌
引づり込て中宿の夢　水

はりあひの意趣をいはでは月に雲　德
南無妙の風南無阿彌の露　山

二ウ

臨終にうろたへ廻る霜の虫　鐵
糠の枕に暮急ぐ雲　雲
世の中よ居間には濕氣花には又　雪
出入の醫者と春をつぶやく　呂
孕みけり着更衣近き女めが　流
やせ負耻て水ぬるむ影　德
嶋ずまひ浪踏に連て歸らるゝ　水
寶物集の手もさがりけり　鐵
一念の岩にめがねを賴む也　山
夫莊嚴の鼻柱たつ　雪
お位をうつぶけさまにすへられて　雲
鳥羽の道芝瓜の皮ちる　流
乞食して月の桂とうたひ行　呂
綾竹空にあらしふく秋　水

三

桐落て持遊び箱と成にけり　德
共家〳〵に三鳥わたりて　山
神道は故にぞあらたなる　鐵
風の宮より青い形の　雲
人魂は杉の梢に立隱れ　雪
五町ほど先慥墓原　呂
胴骨をある夕暮に爭ひて　流
一番乘の城山の月　德
小田原や咄しに成て袖の露　水
氣のよい駕籠かき跡先の秋　鐵
荻の風落した物の主を呼　山
玉さま〳〵數ならぬ虫　雪
暮の霜少ながらのはおしろい(白粉)　雲
日影を殘す爪先のいろ　流
けづりけり書そこないの紙屋河　呂
浪には千鳥御前句の聲　水
心よい寢覺の夢を結び留　德
妹背の中に鎰も預けて　山
琴三線手馴耳馴契る也　鐵
都めぐりに見しほどに戀　雲

怨念の石が高うてあるかれぬ　雪
あらおそろしの般若坂ゆく　呂
晒櫃行衛もしらず大がたり　流
世は塵の身の盆前の事　徳
極樂の風に扇も捨はつる　水
爰ぞ平等有難の月　鐵
花の露惠も廣し施藥院　山
非田梅とて匂ひ常より　雪
名
薗こんかう淺黄紅ィ綠の松　雲
都は野邊の女中也けり　流
政それ戀よりも大みだれ　呂
孔子くさきをかへて袖の香　水
さうあれば菜摘水汲薪割　徳
よい身躰も此棒にふる　山
笠かたむ（ふけ）け籠屋の道行哀也　鐵
石町の鐘けふも暮ぬと　雲
飛鳥川たとへば爰にかし坐敷　雪
氣煩ひの風いたづらに吹〻　呂
娘あり浮たる雲の定まらず　流
松高うして太夫稀なり　徳
峯遠く在鄉芝居ゆく月に　水
野分に荒し寺の取たて　鐵
ウ
先祖の地むかしの秋にかへる也　山
對決の場かたへ涼しき　雪
六段目日も西山に傾きて　雲
あだし野鳥部重ねての事　流
いつぞ廻向出家の身にてゆへば　呂
米一袋是は錢まで　水
ある時は花の下ぶしぬけ參　徳
延寶六年八百の春　鐵

午三月下旬

俳諧七百五十韻

信徳

(誹諧)七百五十韵

曰ク至ー詞ハ不レ飾(カザラ)至ー實ハ不レ華(ハナヤカナラス)達ー士ハ賢ノ而ー少シ我ー友はおほくして、しかもあほうどもなりといふもさのごし

釋修春澄書

第一

江戸櫻志賀の都はあれにけり　信徳
東叡山の麓なる春　如風
孔子堂朝だつ霞鳥鳴て　春澄
胡(ノ)麻(マ)餅そなへ雲かほるらし　政定
一重は鮑(アヘビ)蒲(カマ)鉾などの月　仙菴
おつぎの間(マ)へも氣をつけて秋　常之
篠(シノ)薄よしなきあほうすゝむるや　正長
かへらぬ露の役者借シする　如泉
世(ウ)ノ中を樂(ラク)長老の化(アダ)なりと　執筆
電(デン)光(クハウ)碁數寄石の火とかや　徳
揚(アガリ)屋はとぢけん雲の空淋し　風
香喰きつて初音血に鳴く　澄
五月闇女房(ボ)心のはかなさは　定
茂みの陰に算聞ィて居る　菴
今もかも木葉(コノハ)衣に編(アミ)笠着て　之
をのが餌(エ)釣(ツリ)の杖や朽(クチ)なむ　長
百余歳魂(コン)は淺瀬にありながら　泉
明心大居士根をはなれ草　風
山城の實相庭の風さびて　徳
雁朧也店やうの月　定
花更に茶(チャ)瓶(ビン)碼(メ)碯(ノウ)の盃や　澄
しやれたる粧(ヨソホ)ひは腰もとが春　之
二
和(コ)綸(リン)子(ス)氷の帶の中とけて　菴
金糸の龍田色や絶なん　泉
折かへし同じかざしの小(サ)夜(ヨ)踊　長
抑もたゝくも大門の月　徳
渡邊のとりあげ祖(バ)母(ゞ)が露の袖　風

來國次の薄刃たづぬる　澄
我朝のまろかせなむる虫ありて　定
いつの世書し詫宣やそも　菴
笹竹の宮様方の多ければ　之
窂人小性ねぐら求る　長
諸禮集來ぬ夕暮のかさなりて　泉
偽りを餝る御厨子黒棚　風
又たぐひ虚潜上は夢なれや　德
伯父頼朝がこゝろざしとて　定

ウ

二夜三日和尚慈鎮にたのむ也　澄
濱名の橋に行燈を出す　之
水風呂や入海遠く暮初て　菴
千鳥鷗の相借屋よぶ　泉
物馴松あれば才覺なるまいか　長
傾城比丘尼行ずりの岡　德
昔おもふ哥杯の跡きえて　風
里は淺茅の大つぶしめが　澄
小座敷に追こめられて鶏鳴ク　定
鶍それて人質をとる　菴
揚代の朱雀の御野の月殘り　之
別れの袖に唐秬の露　長
花暮て羽織紐とき土枕　泉
手負の蛙ぬきはぬいだが　風

三

とりものゝ鳴のふしどに春とめて　德
鎖挑灯そらのあけぼの　定
玉鉾の捻杖あゆむ雪遠し　澄
かたりつたへて幽靈の松　之
さりとては胴骨よしが菴一ッ　菴
はりかけてゆく錢の山陰　泉
榮耀喰ひ折燒柴の幾夕べ　長
腎藥たるゝ甕の酒塩　德
思ひ内にあれば顏へ吹出る難波風　風
隅前髪の妻なしの田鶴　澄
子四天王命くらべのつれなきは　定
布小の具足泪なりけり　菴
半櫃に前といふ字を殘されて　之

ウ
貴き鼠手に握る月　長
峯高し霧に重る粉糠寺　泉
木樵水汲み芋の皮むき　風
篦作る竹の御崎に賣れ來て　徳
胡粉の鮫の餅とや成なん　定
菖蒲さす獨娘を見いれしが　澄
玉の夜殿に節穴を戀て　之
掃落すふるき衾の塵もなし　菴
身を蜒のすべりかくるゝ　泉
見事なる毘沙門虚をあたへられ　長
天狗の鼻に付紙の露　徳
火まはしに比良の山風月澄て　風
一座の秋やまのぬけの浦　澄
置き皷花かと浪の打よする　定
小袖かづきの欵冬や誰レ　菴
名
君驚す春の奥なる陰よりも　之
口說かねては腹もきるべく　長
つくづくと昔の若氣おもへばの　泉

鏡の影につりはけの雪　風
風馴る山田が原の杉太夫　徳
たゝみ暦に千世をかぞへめ　定
搔板におめし二村織初て　澄
一石橋の鵲のそら　之
賦日月明借樓船　菴
名主先生爐つるらむ　泉
隱家の竹の酢筒の陰分て　長
南無や滅金のひかりまたるゝ　徳
齒黑皿同じ臺にねがはくば　風
樂屋にあらばかゝがたとならん　澄
ウ
今とても山もと戀し勘太郎　定
檜原の奥の繪馬尋ぬる　菴
國ひらけ華跡たれて鳩の糞　之
霞わかれて銀餅を生ム　泉
誰春になゝこまきしと人とはゞ　徳
道は有けり松脂の門　長
冬枯の産毛まばらに拔捨て　澄

角縮綿の山あらはなり　風

第二

浦嶋が上髭化して白魚成べし　正長
我里戀て猫雲に入ル　如泉
燃しさり五本の柳投つらむ　信徳
藥罐さびしき山もとの暮　如風
青昆布の岩滑に瀧落て　春澄
色なる浪のせぎりさかまく　政定
友鬼の影を尋て水の月　仙菴
ふり分赤熊肩過る露　常之
ウ
手をかざし面をきつて秋の空　執筆
猿丸太夫はうたかなしき　長
樫の筒谷上山に來てみれば　泉
座敷は床のものにぞ有ける　徳
つね〳〵に姉女郎のいはれしが　風
つしわうどのによふでやりたい　澄
相ほれの中にさかしき岩城山　定
古奴見の濱や不首尾なるらん　菴
袖貝の三つ四つ五つふられては　之
夕塩みちて敷鰹よる　泉
物裁のあやしき光りゆられたり　長
衣通姫の衣通のひめ　風
俊成卿花月うつす宮ゐかな　徳
板短冊の櫻さく十ヲ　定

二

是はこれ不破の昔に鴈かへる　澄
信長公のとりあひの山　之
大鹿子すゝむ嵐になびかせて　菴
空に消えゆく柄香爐の雲　長
遠からぬ九品の茶臺さしあぐる　泉
裸形の佛浴衣かたしき　徳
栢の木の四枚屏を押ひらき　風
晋の文公書棚たづねに　澄
錬藥や浩然の氣がつきたとて　定
合點づくに寢間へだてけり　菴

或夜月乳母てふ物を頼みては　之
伊勢嶋が荻啀し見たがる　泉
貴家や鯨の柱軒の秋　長
龍の都の小脇淋しき　風
ウ
かけまくも神の利息い錢借に　德
祝ふ靑二の千木のかたそぎ　定
豐芦原火燵の上にとゞまりまします　澄
大師達磨の沓-踏皮やこれ　之
外露地や富の打水絶ばこそ　菴
柾木のかづら根笹岩檜葉　長
蝸虫の道一筋の山がくれ　泉
遠寺の鐘に歸る牛の子　德
來て見れば粉糠袋や散ぬらん　風
玉樓金殿耳せゝをみがきし　澄
久堅の雲の掛捶時めきて　定
短き夜半の佞智者の月　菴
假初の花の手枕はらむとは　之
死のかはしろかうき戀の春　泉

三
思ひかね雉子の床の疊算　長
入日の岡にきせるかたぶく　風
初時雨鉛こかして定めなき　德
嵐の風によはる芋虫　定
離れ屋の背戸の草葉䑛立て　澄
片山陰のおんぼうが秋　之
暮て月人の靑を買にゆく　菴
閻魔の筆や夜手習する　長
諸の佛の名字國づくし　泉
聲聞の太夫緣覺の莞　德
百敷や局あづかる天乙女　風
まれに羽袖のおふるいたゞく　澄
空蟬の三十五日夢過て　定
禮狀わくる深草の里　菴
ウ
蕨樽竹の葉山の奥迠に　之
臺所荷の雨いそぐなり　泉
遙なるカピタン人の雲のぼる　長
印子のぼたん新月の色　風

初雁に楊弓箱をおもひ出て　徳
襖はづすか秋霧の風　定
足曳の踵こたふる軒の山　澄
相あひ蒲團松寒うては　之
正傘が堀河夜這波越る　菴
むしやくしやづらの影も耻かし　長
嬋娟たりし髪はじゞほゞ戴て　泉
今の無縁塚名のみなりけり　徳
樹屋の花も泪をそゝぐかと　風

名

千貫松は霞をあはれみ　澄
春の夢驕の大臣とだへして　定
胡蝶のおかた物語をつくる　菴
うすえうの綠の小草にほやかに　之
花のゆかりの紫金錠開　泉
指のはら露を落してほとびにけり　長
テリ布しぼれば月かはくらん　風
山の井に構水風炉の影汲て　徳
五十の末の業耀乗物　定
後室の浮世の外のおもひでに　澄
宿を求めて野良よばるゝ　之
橋本の泪河原にかりくらし　菴
串蒟蒻の袖のしがらみ　長
馬子はしる瀧つ心の早き瀨に　泉
遠山おろしひゞくむねうち　徳
半酔や浮たつ雲の亂れ初　風
道服雪踏花ぞ散ける　澄
けふも叉手間とり歸る春暮て　定
霞や數の箸つゝみをく　菴
靈山の鉄鉢殘る末の世に　之
一切衆生の瘧落せり　泉
月代の長きくるしみそり捨て　長
松葉軒に千年經ぬべし　徳

第三

竹の精翁姿や皮の面　如風

小笛ふたゝび麥藁(ワラ)をふく　春澄
大庄屋塵梁(チリウツバリ)をめぐらして　政定
床の鉆(サイ)矢(ヤ)に鼠つきけり　仙菴
菓子盆の山とりまきて月のぼる　常之
砂糖みどりの松の白露　正長
重(ヲモ)日也錦をはれる蔦(ツタ)かづら　如泉
行さき闇(クラ)う呉服店(タナ)あり　信德
ウ 延(ノベ)爲(ガハ)替(セ)金の岸や尋ぬらん　執筆
一枚手形源空在判　風
熊谷の窂人にても無御座ゆ　澄
帙(ツキン)を脱(スイ)で高紐にかけ　定
しばしとて木綿(モメン)合羽の雨やどり　菴
道たど〳〵し江戸の女子(ヲナゴ)衆　之
恨めしの荒非箱根の山守(モリ)や　長
阮(スヾニ)八聲のなまり鳴らん　泉
碁戯(ケヘ)言(コト)いで此度は月更て　德
阿羅漢の衣(コロモ)あやまつてうつ　澄
鰭(アバラ)骨(ボネ)驚く秋に成にけり　風

時計(トケイ)に四方の風をめぐらす　菴
香をとめし都は花の園右衛門　定
はたちにたらぬ行(カウ)年(ネン)の春　長
二 逆(サカサマ)に殘る鶯悲しやのふ　之
大和高窓ふみはづしては　德
二つ繩尾上の宮は絶にけり　泉
穀(モミ)すり捨し雪の下道　風
馬ガマスむなしくはめる朝(アシタ)の風　澄
大津どまりの末の白河　定
紅(ベ)花(ニ)青苧(アヲソ)みて參れとの勅により　菴
玉の針箱ありか尋ぬる　之
抑入の杉のたちどを引あけて　長
かくれんぼうの友鳥寐に　泉
江の南岩殿(ドノ)いやかござらぬか　德
食(メシ)喰(クイ)さいて難波わたりの　澄
引出す蚕の手繰(ニグリ)や髮筋や　風
惡(ニク)きものゝ品雲むかふ月　菴
ウ 里馴の男鹿(ヲ)ぶたれてもどるらん　定

尾花の譟(サハ)ぎ沙汰なしの風　長
いかなればいかなる露の二子うむ　之
流しましますハ重の薦(コモ)舟　徳
竈(カマ)風呂の浦塩日ゝに運(ハコベ)せて　泉
黄楊(ツゲ)の櫛かしやさゝず來にけり　風
めしまする齋宮(イツキノミヤ)のおすゑ犬　澄
長文箱に葵かざせる　定
名物の香ぞめづらしき一かしら　菴
細引凉し現(ノゾキ)(覗カ)井の月　之
我門の根繼(ネツギ)にひゞく軒颪　長
雲はしらせて空(カラ)車ゆく　泉
華白く牛頭(ゴヅ)馬頭(メヅ)赤く山青く　徳
惠心(エシン)の虚(ウソ)を目の前の春　澄

三

法の鳥論義のさまはえたれ共　風
一轍(テツ)にして奥にかくるゝ　菴
三芳野や親に不足の深ければ　定
金の御嶽の鑰(カギ)をわたさぬ　長
阮(スデニ)去祕佛は未(イマダ)世に出ず　之
坊主絕ては狐。火ともし　徳
小夜(サヨ)の雨葬禮どの一通リ　泉
泊りがけなり男山の月　風
女草うしと見つゝぞ這て來る　澄
屋根から落にきといやるなの露　定
干瓜のぐみつく中と成にしや　菴
竹の捻(ネヂ)箸(ハシ)氣だてつらかり　之
耳(ミヽ)搔(カキ)の時平(シヘイ)の大臣(ヲトヾ)跡折れて　長
延喜の帝さはらせたまふな　泉

ウ

失ずして松の葉の塵鳥の糞　徳
仙人丸(グワン)の霞色ふり　澄
胸(ムナ)先に雲横ッてやよ嵐　風
虹の板紐むすぶ中空　菴
葛城や役の小齋(コサイ)が茶を運(ハコ)ぶ　定
一品法親王山路淋(サビ)しき　長
いでやこの外題に草の陰高き　之
妖(バケ)物ぞろへ葎(ムグラ)とぢけり　徳
秋は來にといてぐどいて語りてきかせよ　泉

大名後家の庭の月ふけ　風
俤の朝雲院殿夕の露　澄
寺は身延の歎かしの山や　定
花の川眞ッ逆落し富士見えて　卷
霞の乙女額すりむく　之
名
黒なまづ袖ふる雪の村消は　長
新草枕あちらむきしが　泉
淺河の二つ鏡に影のこる　德
本地若衆の住吉明神　澄
化人の狂言つくり幾世經ぬ　風
出來合くふて宿も定めず　卷
是程に諂はふとはおもひきや　定
十千貫目もいつまでの身ぞ　長
及王位でつちもつれぬ道なれば　之
雪踏とゞまる山科の里　德
灑落し壁土こねてありけらし　泉
暮てはいそぐ木皮の梯　風
廣しや月尾張様領打詠め　澄

麥[?]實をはこぶ豐年の秋　定
ウ
茹章魚の股をならさぬ露の風　卷
一休老師雨くらしつゝ　之
陰厚き後の小松の御時　長
庚午夏瘧病はやる　泉
簾㡓[?]乙門蜀魂背信て　德
虫喰ヒ杜三輪のさと山　澄
箔はげて花はしるしもなかりけり　風
大酒宴の跡の春風　定

第四

海鬼燈乙姫舌をふりたてたり　政定
沖に日傘の鵆あそぶかな　仙卷
曲彔の岩たいらかに座をしめて　常之
天鵝絨まとふ草の葉かづら　正長
道戯舞鳥の細脛踏ならし　如泉
世間雀は友にもまるゝ　信德

あたらしき咄(シ)賣うか月今宵　如風
餘所の句前の秋やねぶたく　春澄
ウ
色わるふ月代(サカヤキ)なびく村薄　執筆
もと見し影の實方を堀る　定
替地とる椋(クラ)橋(ハシ)山の麓寺　菴
やよほとゝぎす中(チウ)興(コウ)とよぶ　之
夏の夜はたゞ鐵(テツ)鍔(ツバ)ぞ殘りける　長
浦嶋が子の帶箱をみて　泉
里歸り衣(イ)桁(カウ)の下に遊しあれば　德
一間(マ)の匂ひ蚤のたきさし　風
君まさで位牌淋しく成(ナル)とよ　澄
もとひはらひの雨の夕暮　菴
眞(マ)銀(カネ)ふく常是の嵐歸る也　定
行(アン)燈(ドン)しらむ片(カタ)頰(カヘ)の空　長
打渡す花の葉ごしの難波橋　之
棚なし茶舟ゆきかひの春　德
ニ
蜆(シヾミ)とる礒分衣袖ぬれて　泉
小桶ひとつを定めかねつる　澄

上(ウハ)氣(キ)人(ビト)板の間枕幾度か　風
方丈あれて屋(ヤ)鳴(ナリ)するとも　定
もとこゝに龍雲山の嶺颪　菴
長篇殘つて鹿(シカ)韵をふむ　之
草をしき籠(ロウ)輿(ヨン)とめて末の露　長
御(ゴ)前(ゼン)の妬(ネタ)み人しれず月　泉
角(ツノ)盥(ダライ)蒔繪の鬼の佛は　德
直(ナヲ)し火鉢の焰(ホノヲ)ふきかけ　風
搔(カキ)餅の感陽宮に虫がつき　澄
老ず死なずの醫(ヒンボ)求(モトム)る　菴
蓮阿彌の廣き臺に到(リ)つゝ　定
四もとの寶樹暮きよけ也　長
ウ
北は黄に裙(スソ)紫の山とかや　之
洗ひもの屋の越(コシ)の湖(ミヅウミ)　德
人手代見るめなければ晝寐しに　泉
たゞよふ波の比丘尼などこいで　澄
風靑きよごしに罪がつくらるゝ　風
そも〳〵奈良の大根をやく　定

柄をすげて天津小刀の御譲リ　菴
神代の鏡櫛箱にそへ　之
白粉を八十瀬の浪にぬれ〳〵と　長
川霧くらし聟がかづいた　泉
持來子としらでや馴るゝ里の月　德
和尚かたつて鳫泪ぐむ　風
無量劫花なき國に生るべき　澄
唯今の霞三毒となれ　菴

三

春の夜の寐ても覺てもおもひます　定
あやなし枕肩にくひつき　長
それかとも女の首の飛來り　之
爪切丸のぬけてはたらく　德
投られし法の筆箱これなれや　泉
日蓮灘の巳後のしら浪　澄
風の松七郎左衛門かたりけり　風
朝霜けぶり火繩賣ル見ゆ　定
冬日影うすく匂へる挾み伽羅　菴
向ふ齒ならぶ池の水鳥　之
二つ子の籠の浮巣にゆられ來て　長
天の小草鞋つくり初てき　泉
絹されを豐みてぐらの紅の野に　德
木の間の月の銅壺もり來る　風

ウ

又や見ん揚屋の寐覺比の秋　澄
妻とふ雁のおすの文かく　菴
死出たち浴衣鹿背山泪川　定
小坂の深谷後飛する　長
大燒の殘され杉に尋ぬれば　之
嵐石鉢鍋釜のわれ　德
雲埋む鍬塊をうごかして　泉
かさねあげたらん伏芝の山　澄
道廣く朝鮮人も來ると也　風
秋長老の時なるかな時　定
けふぞ月到り料理の隈もなく　菴
引て金翅鳥蒸王餘魚の露　之
天竺の年寄がはり花待て　長
入滅の跡振廻になる　泉

名

乙甲權實二つ中の春　德

身躰わけて小比叡大比叡　風

我頼む隱居作りの殿ボひく　澄

お城にちかき水をまかせて　菴

立游髭の眞菰に波越る　定

幽靈覗へ螢きへゆく　長

口の中阿介摩介摩々、爾、蟬鳴て　之

金光寺の金光坊の木末木ゝ末　德

をしなべて如來が嶽の雪高し　泉

猿手を合せ熊ひざまづく　澄

怒猪の意趣を含で罵れば　風

血氣の勇者色にまよふか　定

武藏守戀より出て戀の月　菴

とはぬもつらし犬やうなる秋　之

ウ

荻が宿男所帶に成にけり　長

旅居やすらむ醫者の望みに　泉

圖法師の御影を拜む夢待て　德

赤下帶の横雲の空　風

袖の雨晒帷ぬれてゆく　澄

しけがなものにはなれてはうき　菴

里篝花の岩藏跡暮て　定

今出川口ゆたけしや春　之

第五

鴈にきけいなおほせ鳥といへるあり　春澄

月は雲井に楊名のすけ　政定

筆耕に草の小袴色しきて　仙菴

肱尻にをく羅紗の下露　常之

傘に柄もりのいたくふく嵐　正長

板間あらはに曳窓の山　如泉

常舞臺果や木玉に殘るらん　信德

二艘からくむ夕浦の浪　如風

ウ

勝手より折敷を洗ふ奈古の海　執筆

大半切に鷭ぞ鳴なる　澄

碓や仙のつたへし跡をふみ　定

堺の軒端家いづくんかある　菴
顧蘇鐵の梢がくるゝ迄　之
きり狂言の緑青の岩　長
捨るなり湯桶の瀧の漲るは　泉
木の葉しがらむ冷汁の音　德
愛宕講告て來にけり山颪　風
這出の男雲に乘る月　定
外科箱の劒を降らし又は秋　澄
邪見の目疣露おもげなる　之
因果經花にもうとく身を歎き　菴
開闢廻向かれこれの春　泉

二

厚氷いたづら後家の隙毎に　長
化なる浪の酒をようのむ　風
おもひ川下にかよひて上棧敷　德
乘物かづく中空の風　澄
後堂人は朽葉に埋れて　定
殘る松さへ切ひらく山　菴
つけかへて昔の道は波越る　之
茶釜戴く大蛇あらはれ　長
鳥箒ふきあはせずの御棚とは　泉
砂子の襖ひかりやはらぐ　德
小方丈さやけき月の世に出て　風
反橋みだれ鹿どよむ也　定
秋の野は善哉餅とみゆるかな　澄
小倉つゞきの在所戀しく　之
龜山殿女房あげよと仰せらる　菴
かいどり姿鶴の毛衣　泉
霜をふむ天鵞鼻緒跡見えて　長
松の陰ゆく施主座敷にや　風
時いたる大雲院の晝嵐　德
夕月鉾や朝びきの山　澄
かの川に床借スおのこ隙をなみ　定
池田橘胡桃髢籠屋　菴
色人のつら〳〵ものをかぞふれば　之
うき名の品ゝ唖方定むる　長
百ヶ帳あら悍めしや耻かしや　泉

これや此世の闇麗なるべき　徳
三日目に花の下臥夢覺て　風
はやり咳氣の彌生風ふく　定
三
春の著る片肌國もあるなるに　澄
天竺玉の太子と申せし　之
橙のとゞまる所に伽藍を建　菴
ひがしをさして猫が飛つく　泉
たすけよやよやの中山又越る　長
一駄荷しづむ大井川浪　風
下踏袋水のしがらみかけてけり　徳
卯花さける供部屋の里　澄
付階子空にまたるゝ蜀魂　定
寶塔そびえては雲峰を埋む　菴
太職冠ひかり殘して世ゝの月　之
荻につたふる幸若が風　長
お次には茶堂小ゝ性きりぐす　泉
加減幾度銀鍋の霜　徳
菩提樹下釋尊寒く成まゝに　風
八万四千の毛の穴がたつ　定
身を責る中に風の一騎打　澄
急をつぐると唐櫛の齒の　之
氣がついて祉壇をゆする女神　菴
天の磐樟おかちんの舟　泉
皇の三種の脊渡さるゝ　長
折紙たゝむ西海の浪　風
火燧石箱崎の浦につきにけり　徳
鉦鼓に明す中將の尼　澄
花ふかく月又山に入たまひ　定
蕨虎杖躑躅おれとて　菴
土の店小桶の水に春をくみ　之
雪をはらつて墓守が宿　長
名
呉竹の腰もとなびき弟子坊主　泉
念佛にほれて螢あこがれ　徳
紙屋川や風たつ暮も雨の夜も　風
鬼一口の大根あらひに　定
雲烟あやしき噫ふきかけて　澄

山は駿河の鍼がきいたか　之
浦松の天津羽織をもらはるゝ　菴
御紋をたゝむ紺瑠璃の海　泉
輪寶のひかりいざよふ須彌高し　長
說相筥の四隅ゆく月　風
衣風鼻かむ音に霧消えて　德
食粒はらふ杯の下菴　澄
摺鉢に和物草の色殘り　定
鼬けうとき蓬生の壁　菴
千早振あいごの若の宮さびて　之
盜人寐たり滋賀の辛崎　長
つかれ疵數ある色の細ゝ浪や　泉
藻屑燃屋の鉄火箸にて　德
罪なくてあはれ蜈の捨られし　風
唾に死して恨をなすべく　定
赤土の神輿定て花久し　澄
千代万代と貝をふく春　菴

第六

風蘭や橘の軒もふるかりき　仙菴
狐の初音ゆく庭の秋　常之
鞲猿むなしき山の月入て　正長
公家衆馳走嵩とよむ迄　如泉
松一木ぬるい誹諧聞て居る　信德
のんどりとしも鶴をみる袖　如風
あらかねの鍬の柄朽て春淋し　春澄
菜大根の種菫のみして　政定
青丹よし木綿財布の奈良路ゆく　執筆
春日の御作常念佛はつち　菴
我をしれ生ぞこない世に出て　定
麒麟鳳凰鳥しめて賣ッ　長
宮造大津の納屋が時とかや　泉
それ日覆の筥をあらみは　德
青駄ゆく波かけ衣裙見えて　風
きのふの人魚片息になり　澄

毒けしの珊瑚珠の枝や尋らん　定
金盞したふ間鍋の菊　之
手がわるい連る中の雁ひとり　菴
さる雲のいて身あがりの月　泉
花物いはずおかゐさいてくだされい　長
よい口あらばまかなひの藤　風

二

夕雲雀小料理などもするとなり　徳
もと土堤町の世を離れ菴　定
御所のとてかゝ刀白つれて來にけるは　澄
ある神主の娚なりしを　菴
どうかして背戸の瑞籬も越ぬべき　之
袖ふる山に手鍰おろされ　長
乙女子が丸をあてがふ苔筵　泉
巖のくぼみ水腫ならなん　徳
如來尺迦內證損したまひけり　風
須達伋に借しかねをとる　澄
蘇摩那華油一万樽を買んとす　定
方四十間濱藏をたて　之
牙をかむ鼠が泊門にかよふ月　菴
水母の障泥滄海の秋　泉
萩の露虛物語よむ程に　長
素仙法師が軒端淋しき　風
京大坂その住所憚ならず　徳
ある夜ふしぎの小判市みる　定
潯陽の三谷江島の頭にて　澄
家老づきあひ舟客を送る　菴
如何禪山青ク月白シ歸依和尙　之
生前出シ茶一盃の露　長
物とては烏柹ばかりや殘るらん　泉
齒莖まばらにあれし故鄕　徳
笛ふきの伏見の野邊の道絕て　風
肖柏隱士雪にさそはれ　澄
足曳の散ル花惜む嵐かな　定
辻堂の春記念〱　之
村霞とくにかくれて出逢にし　菴
戀は千引の石賣ッにとて　泉

おもほえず大工のこゝちまどひにけり　長
小桶の汁や袖ぬらすらん　風
煎鰯松浦の沖を漕別れ　徳
猶ふく風の西に山なき　定
前は窓紙鉄砲に待かけたり　澄
子ども一揆の里の桝かき　菴
陸奥やたばかり焼印給はれば　之
小板大板塩竈の浦　長
行幸せし砂持車跡とめて　泉
鐘の林ふしをいけさせ　徳
奥は月ごんぎり鱠の神垣や　風
浮世道心ねるは誰が秋　澄
ウ
歎き草しのぶの野良妻へて　定
手拭帯に泪しごきし　之
恨みつゝ腹のつかへのゝぼりては　菴
舗業殘りて鳥や鳴らん　泉
寝覚人阿蘭陀迄も心ゆく　長
銅中間としてかくして　風
樽火鉢下すか波の早瀬舟　徳
ねぶるに驟ぐあぢの村鳥　定
生壁の渚沙の入江に息吹て　澄
うきぬしづみぬ水文字の露　菴
深山邊は何億獨りに月ひとり　之
洗濯衣在所よりうつ　長
花かづら脛の黒きぞみえにける　泉
これさ柳の女六方　徳
名
鴬よ長刀とつて手討にせん　風
野馬もゆる車戸棚の上に　澄
包み箸頭生の行衛尋てし　定
大豆の粉こぼれ雨ぞそほふる　之
ねぢむけは守が背中の時鳥　菴
大閤様のお言葉の杜　泉
年經たる松の木間より高臺寺　長
夜嵐かよふ茶屋の水上　風
紅粉醇金瀧津泪の染るやと　徳
ふとつた若衆袖のせばきに　定

初矢數千束もまたで逢たがる　澄
牧の繪馬の時の間も見ん　菴
馴て月腹這ふせる甲斐が根や　之
すべり彈正霧の下道　長
世のかまひイクチ拾ふて居られけり　泉
よしや命の血を吐んとて　德
地がしらの家に惜むは名なりとぞ　風
志賀箙湯谷融祝言　澄
日の御門歸るさ人にとゝへば　定
遠津土産に砂をいたゞく　之
花の山佛の草鞋跡しめて　菴
とりつき立の一文珠。普賢像咲ク　長

第七

夕ざれば深草火鉢ともよめり　常之
蒲團折しく竹の下菴　正長
小性よぶ天鵝毛杖の鳥老て　如泉
おそば山陵手水汲らん　信德
むすび飯椙の露のこぼるゝは　如風
釦屑むせぶ夜嵐の月　春澄
塗出しの鞘のむら／＼雲消て　政定
紙袍袋の一重卯の花　仙菴
新乞食水無瀨の里に通ひける　執筆
いはぬばかりの戀の方便ぞ　之
暦けす下のおもひの年も經ぬ　長
心學かたぎ余所の夕暮　泉
若い衆その友としもなかりけり　德
裏屋の座頭八重葎して　風
格子をり常陸の宮をもたせしは　澄
折かけ帶の道の果なる　定
首くゝる松の下枝の色もなく　菴
發心堅固したりけり月　長
二王禪儀の一字より雁落て　之
万民德用稻葉なびかす　德
道廣し花千金の藏爲替　泉

二

難波深江か時なれや春　澄
繰臺の網子とゝのふる朝霞　風
蝛蛼榮螺鮑長辛螺　菴
着到を龍宮城につけゝれば　定
安徳天皇床机なをさせ　之
金つむ車鼠をたてまつり　長
尺迦の御もとに息ふいてゆく　泉
蕃椒法のあぢはひならはれて　徳
三千界の蚊をふすべけり　風
天川門行水にことゝはん　澄
交野ゝ里のばゞたれ子泣ク　定
櫨紅葉小粒藥のかつ散て　菴
外面暮ては道場の月　長
繪卷物いくらの秋の廻リ來ぬ　之
酒典童子の心づくしに　徳
或説に强盗などゝもつたへけり　泉
懺悔咄しの松の下夢　澄
爪いくつ起請何牧小夜の風　風
いたづら娘袖時雨るらん　菴
霜に今朝綿ほし賣の起ていなば　定
大橋小橋中の中宿　之
雪隱借ル木津の川舟さしとめて　長
沈むか浪の巾着のから　泉
實や世は一服入の淡となり　徳
動作の蔦はながくつたはり　風
それが中に漢和聯句の秋の月　澄
韓字まじりの露の夕葉　定
研石龜の背に花生て　菴
古巣に歸る太子燕丹　長

三

幾春をおかる夫人の待らんと　之
清水精舍の風呂屋戀つゝ　徳
忍辱の借シ手拭を見るからに　泉
木蘭色の絎張のもと　澄
我朝に雜長持を渡されし　風
いろは番付やはらぐとかや　菴
石藏や稻荷今宮泉川　定

公家衆の知行はこぶなるらん　之
臺所お里國よりまかなはれ　長
むかしは二季に物をこそおもへ　泉
桑門雪踏賣しがいつしかも　徳
衆生をあはれみ雨を悲しび　風
水つきの下品の簀子やすからぬ　澄
入江の四つ手もらさじの月　定
ウ
あれ〱〱うら枯芦の朝風や　菴
見せばやつるむ秋のむら駒　長
遠田舍尼のある生子出にけり　之
茜調布犢鼻褌はづれて　徳
棒枕眞瓜が花の下凉み　泉
夢なるかしらず切蠓かしらず　澄
泥鏝もつて我や行けん君やこし　風
小的かけたる命とやせん　菴
岩代のわり松が枝の夕煙　定
佛壇の陰薄淋しき　之
聲譲る常題目の秋の風　長

妙知妙閑ふたりあれ月　泉
淺漬の連理の匂ひ花朽て　徳
恨みかずの子よみつくすとも　風
名
ほち〱と春の泪やほちつらん　澄
うさの手枕つんと寐られぬ　定
誰か今つくりそめてし江戸章歌　菴
榮へひさしき神田檢校　長
茶縮綿ころもの袂ゆたかなる　之
教外別傳不斷あそんで　徳
菩提もとかねのなる木を植けるや　泉
彼土を無欲世界と名づく　澄
人間の顏は童部のごく也　風
五十年の夢の枕負ふらん　菴
旅の月猫の蹄の音きけば　定
俎板わたす勢田の川霧　之
干瓜の膳所濱に秋も來ぬ　長
松の古道墓參りあり　泉
ウ
袴籠裏葛の葉かつらむすびかけ　徳

包み饅頭時雨ふりをく　風
座敷能龍田の奥に入にけり　澄
今はふりにし傾城の里　定
さればこそ伊達八文字跡はあれ　菴
南にたてる戀の氏神　長
木の間より花の業平あらはれて　之
風折烏帽子櫻かざせる　泉

第八

八人や誹諧うたふ里神樂　如泉
かざしの豆腐玉串の霜　信徳
鈎簗鑊千枝の眞杉片折て　如風
風にひゞきのなをし釘けり　春澄
假綾の雲かさなりて白妙に　政定
青物使あけぼのゝ鴈　仙菴
久堅の中間男影出て　常之
薄がもとの乞食斬らむ　正長

ウ
旦には箔椀あつて魚の骨　執筆
悟たぶんの世にもすむかな　泉
花山や大名隱居いまぞかり　徳
銀幾億のひかりをぞ見る　風
あさましの烏羽の玉蟲ひろひ捨　澄
淸渚に古血きたなく　定
伊勢の海とりあげ蜑の袖ぬれて　菴
酢を燒煙我ぞまされる　之
冬晦氷れる泪むすぼほれ　長
神の御折敷中な隔てそ　徳
娘手のべざいてんゐえびすゐ　泉
徳屋あぐり八才　澄
袖は花しんこの髻はませつゝ　風
盃甲梅かざす月　菴
滿
春なれや太平樂の大さはぎ　定
上氣の皇子いにしへの夢　長
淺茅原瑠璃の礎いみ也けり　之
狐が里の穴のしのゝめ　泉

隱れ笠かくれ羽織を詠めやる　德
はしり女の行衛しられず　風
あそこ小督さがすや月のもなかくに　澄
口眞似草の口眞似の露　定
彌高き伽藍のひゞき野分風　菴
浮たつ雲に龍がぬけゆく　之
七面そのかみ爰の山がくれ　長
柴積車千里一時　德
稗團子或は松の葉を喰ひ　泉
べウタレ靑き苔の小莚　澄
相住の比丘尼道心軒ふりて　風
男惡みやさられたるなんど　菴
あだし戀氣隨意何れの時にか有けん　定
足　朝政手代まかせに　長
はしたなく御格子明させ店はかせ　之
隣の神も凉みやらぬかと　泉
肥肉の大黑殿や寐ぐるしき　德
いか程過し飯もりの山　風

跡の峯早道人にことゝはん　澄
嵐に落る腸もちの鮎　定
石川やそへ小刀の月さびて　菴
君が代久し文臺の露　德
挨拶を爰では仕たい花なれど　長
又かさねての春もあるべく　之

延寶九辛酉歲
青陽吉旦

京極二條上ル町
板行

續の原

不卜

都築の原

五とせ六とせ先の向の岡は、はいかいの根を尋よと云ふこゝろならし。今つゞきの原の續きをかし巻ゝ、こゝろ〳〵のこと草を合せて、むさし野のふるき友達・都の何某に判させて、人をもなぐさめ我も樂事となりぬ。つちのえ辰のきさらぎの柳いやおひ月の櫻に筆をきらしぬ。

一柳軒不卜

一番 芹

左持

手に取ればさのみよごれぬ田芹哉　擧白

右

嬉しさにいらぬ程つむ根芹哉　コ齋

おられぬ涙に袖の濡しは花の陰なれば也。芹は元彼鵜にならつて泥中に根を引。昔國君に奉らんと言つしも、閑にして樂ム人也。芹をさり芹をさろ、左右無ニ優劣一。

二番 白魚

左持

しら魚やしらで過にし磯清水　勇招

右

白魚や石にさはらば消ぬべし　枳風

左、詞續して粉骨なきにあらず。右、折らば落ぬべきふるこそ、さま〴〵に言盡し侍れば、作者手柄なきに似たれど、白魚の本情かくぞ有べき。仍可レ為レ持。

三番 梅

左

ちる梅を梢にかえす飛蟻かな　松濤

右勝

三日月は梅にをかしきひつみ哉　不角

暗香浮動月黄昏、梅の精神、稍顯るゝなや。左も悪きにはあらず。他に番侍れば先にたつこさかたし。

四番 五加木

左持

はしたなく衣はり結ぶ五加木哉　峡水

右

みち閉て五加木に晝の念佛哉　扇白

左、孤村見る氣色也。右、ふつゝかに思ひさるにはあらず、佛に仕うまつるにや。能持たる哉。

五番　蝶

左 勝

いつとなく捨子になるゝ胡蝶哉　溪石

右

松枝にやどり似合ぬ胡蝶哉　委形

松枝の胡てう、心あきらか也。左の胡てう、何となく哀深し。

六番　燕

左 持

落かへり瀧の水のむ燕かな　一桃

右

飛ながら中に子をもつ燕哉　心水

輕業双方類なし。分て言ば風流左有、情右にあらん。

七番　蕗花

左 勝

ふる井戸や蕗のはな散水の隈　仙花

右

をこがましちいさき垣に蕗の花　雨園

左、中七文字よりしりへの續き、唱て安らかに聞へ侍る。求たるやうにて自然の風流なし。右、五文字、所を得たり。然れ共水の隈いさゝか可レ增。

八番　柳

左

大風に力たゆまぬ柳かな　蚊足

右 勝

鵬のねぶり落たる柳かな　琴風

右、秀逸。三日月のひつみの句を上に置て、此句第二に不レ落。左も又惡には沙汰し侍らず。左右たれば也。

九番　雲雀

左 勝

笹分て袖に飛込雲雀哉　魚兒

右

筏士に日和見せける夕雲雀　立些

夕雲雀も其姿やさしきに似たれど、袖に入雲雀、初生一着の可レ爲レ輙。

十番　木瓜

左　持

世になしや芝に刈るゝ木瓜の花　厄房

右

雨の日やいとゞ流るゝ木瓜の花　紅林

左右、ほまれもなく、そしりもなし。

十一番　木の芽

左　持

鷄啼て木の芽も明日の詠かな　朱絃

右

恭に飽ていく度も見る木芽哉　鷗白

右、心至て詞未たらず。左、難解。定て意味あらん。しばらく不レ分ニ甲乙一。

十二番　櫻

左　持

櫻ちる彌生五日はわすれまじ　其角

右

そぼふるや猶傘さして山櫻　不卜

左右、ひとし。生田の森に烏もあらばこそ、ふる事を吟じて筆をさし置のみ。

古き世の友不卜子、十餘ふた番の句合を袖にし來て判をもとむ。狂句久しくいはず。他の句猶わきがたし。左鐙右偏爭ふ事はかなしや。是風雅のあそひなればいかゞはせん。世に是非を解人、猶是非の内を出ず。我判にかゝはらじとすれど、人又云ん、無判の判も判ならずとや。

丁卯の冬。　素堂書

一番　卯の花

左　持

卯の花や里の見えすく朝朗　露沾

右

黄鳥の聲や短き花卯木　不卜

左は、玉鉾のみち行人も、卯の花の白妙なるに片里を見付て足を止む。一枝瀟洒出疎籬の

景色自然に浮て聞侍る。右は、時節の移所老聲に鳴て、と清氏の女の言ひし心ばへも有て句深ければ、摸陵の手にひとし。

二番　麥

左 持

むら雨に牛游がする麥野哉　枳風

右

はなれ馬きのふ麥野の暴風かな　調柳

麥野の雨に牛游がせたる作意、珍らかに興あり。左はきのふの野風と見立る所に意味ありてをかし。仍爲レ持。

三番　笋

左 持

垣根より笋のぞく厩かな　仝峯

右

ふる井戸に筍はえし旦かな　不謁

笋の折にふれては興有厩も見ざる。されば又住すてし古井戸の中より生出たるは、哀もありて聞へ侍る。され共左の余情は、いさゝかおとりたる所も見へ侍る。

四番　田植

左

蕗の葉に龜押えたる田植哉　立些

右 勝

折からの娵くらべ見ん田植かな　龜言

脇母子が園生の田ゐに引連て、と讀しすがた思れて艶し。左も、一作常ならぬ所あれ共、右の句の娵に心やとられけん、是を引方になりぬ。

五番　百合

左 勝

喰殘す厩の内の早百合かな　一桃

右

五月雨にこゝろ重たし百合の花　破笠

左、馬さへこゝろ有良に喰殘たるに、草刈おのこ心なくと言ぬ斗の風情、いと優にして艶也。右晴間なき空に心惱したるさま、さもと聞へながら、左の百合色深し。

六番　鳶尾

左 持

鳶尾をらば泪おとせと古そとば　扇雪

右

蝶一つ見たらぬ鳶尾の茂かな　雨闇

古墳の鳶尾に向ひば悲しく、蝶一つ見たらぬもさびしく、いづれをいづれと分がたきさま也。

七番　夕皃

左持

夕皃や名を落したる花の形　去來

右

晝皃のまとふ草履も哀也　調義

夕皃は名にやさしく、花不姿（フザマ）なる、にくし。晝皃は美しく化なる花なれど、ふみ果し草履にもまさひてつらし。左右共によし。

八番　蚊遣

左勝

一筋は榑をまとふ蚊遣哉　コ齋

右

寐られぬは笘なき舟の蚊遣哉　溪石

左の句、榑にまさふ一筋の煙、幽玄にしてしかも品高し。右、笘なき舟の蚊遣、珍けれ共、左氣色にはけおさされぬ。

九番　虰

左持

閼伽桶にやどり求るほたる哉　峡水

右

かしましき瀧の中なる螢かな　心水

曉毎のあか桶に、路なしたひ舍求る、いと閑也。峨ゝさしてかしましき瀧の中に、虰の見えがくれなるも又しづか也。吟ずるに妙て爲レ持。

十番　蓮

左

雷になれて破れしはちす哉　勇招

右

つゝまれて水ものびたる蓮哉　野馬

左の蓮は、白雨毎の雷の響にも破ずとや。面白侍る。右は、まき葉の蓮に包まれて水も延たるとのしたては、うら山しくも生のぼる哉、とながめたる歌を、求ずして叶たれば、よき持

と定はべる。

十一番　涼

左 勝

船よせてさしに碁を打凉み哉　不角

右

さがなしや榎にすがる夕すゞみ　琴風

左は、とある藪陰に舟よせて、終日の碁に暑を忘るゝ樂み。さしの字に心を添て見れば、猶更ゆたか也。右は、褌さへ身につけぬ程の姿して、榎が下に打すがる。誠に、さがなしの五文字能置れけれども、左の納涼にはおとりて見え侍る。

十二番　清水

左 持

掃除して置たる人の清水哉　風水

右

ふみ越て又たち戻る清水哉　嵐水

左は、言にいへぬ所に氣を付たる句也。あながち人の爲斗にはあらず、水鳥跡を濁さぬのこゝろも籠りていさぎよし。右は、立戻ると言に清水の響をましたれば、此こゝろを汲て能持と書とゞむ。

調和

一番　はつ秋

左 勝

文月や陰を感ずる蚊屋の内　其角

右

あき風のこゝろうごきぬ縄すだれ　嵐雪

左は、琪樹西風枕簟秋とか言し秋思の情に自移て新凉至る。國中竹婦人の龍(寵カ)おさろへたらん氣色、感る字むなしからず。右は、眼にはさやかに見えねども、其心思ひやられて風動きぬ。縄すだれ寂寥たる事凄く切くとして、肌骨に通りて甘心す。されど此番、秋の卷頭と侍れば、左に勝を付侍る事になりぬ。

二番　露

左

木鋏(ハサミ)に落て本意なし竹の露　古川

右 勝

あさ露につら洗ふたる野馬哉　俭言

兩句共に露を能言たてゝ句躰もきよらなるに、右の野馬、全躰誹諧にして一句千里の器有。仍勝とす。左は、判者のいやしきにあひて本意なしとや。

三番　稲妻

左勝

稲妻に歩みさしたる兎かな　大笑

右

稲妻にかくさぬ僧の舎かな　不角

左、稲妻のはかなき光に驚て、獣の休らひけん皃つき、あまたが中に兎と思付たりけん、作者の其折の心にならばなりてもみまほしく、けしからずはあらぬ所なるべし。右も、彼床の上に夜深き空もみゆると言けん、ほどなき住居思ひやられて、僧の宿りに稲妻のとりあひ、世の常のさまとは見えずながら、左には及がたし。

四番　蔦

左

谷間や風ふき登る蔦の色　蚊足

右勝

筏木につたなき蔦の命かな　扇雲

左、經信卿の、門田の稲葉おとづれて、とあふのきたる蘆のさま、此作者の働によそえられて床敷く侍るに、右の桴木の蔦の命ほそくからびて言ひなせる、三体の一つ、其体を得て目出度ければ勝と定むべし。

五番　鶉

左勝

甲斐すくみいつも寐皃の鶉かな　琴風

右

聲涼し鶉ふみ行草原　沾荷

左は、鶉のさま形容よろしく、かの野邊の秋風身にしめて感情有。右は、安らかなりと見えながら、猶左にこゝろをよせ侍りし。

六番　駒迎

左

照月に我色くろし駒迎　調柳

右勝

寺〳〵や清水かぞゆる駒迎　コ齋

左の坐の五文字、上の二句に能さりあひたる共みえず。駒迎の題に向ては、上の二句駒迎ならでも、いかにも〳〵さみゆるは無念か。右は、しみづ算ゑなど、東よりの道すがらのさま、言たてゝ宜敷、勝なるべし。

七番　薄

左　持

をれすゝき誰が押分て寐し跡ぞ　松濤

右

招かれてまたゝき重き薄哉　仙化

左右共に難なし。持たるべし。

八番　螽

左　持

鳴かでだに燒くらはれし螽かな　擧白

右

刈株に足曳かぬる螽かな　溪石

左の、燒くらはれし螽哉　五文字のだに、いかに、ぞやもあるか。右は、井狩友靜が、霜に足曳くきり〳〵す　さいひけるを、都人其頃口に唱しかば、東の空には聞えも及ずあらんながら、我家の等類に(螽)りて、左右共に難有るに似たり。仍持さす。

九番　菊

左　持

菊のはな氣のある草のそだち哉　文鱗

右

牛叱て旭先てる野菊かな　心水

菊野ぎく同じさまなる句哉。されば持とす。

十番　菌

左　勝

虹きえて跡を尋る菌かな　勇招

右

うれしさに落馬わするゝ茸哉　雨闓

左、おもしろく濕をふくめる菌かな。右は、茸狩嵯峨の昔ぞ女郎花。仍左を勝さす。

十一番　秋寂

左　持

秋は只うごかぬ海の日暮かな　一桃

右

秋有りと誰に音を鳴池の龜　不卜

秋水長天と共に一色、と三尺の童子が器量をふるひしも、日暮哉　とは夢思ひよらざりけらし。又池の龜の万歳の後迄も不易の風体、いづれも目出度作意ともなれば、よき持とこそ筆をとめ侍りし。

洛陽　湖春書

此評は十一番迄にて、十二番は古本にも顯さず。

一番　落葉

左 持

落つかぬ木の葉にあたる雫哉　風水

右

落葉とて不二のつゞきに塔一つ　松濤

左の句、景氣微細にこゝろを付たり。右又、山もあらはなる不二の詠、一句の丈もゆたかに聞へ侍る。され共句中眼に見えたる切字なし。五文字にて言残したれば、切字加てみるべきにや。猶分明ならざるを難じて、持に定侍べき歟。

二番　霜

左 勝

親と子の霜夜をかこふ野馬哉　渓石

右

霜深しあふぎをかざす夜の船　勇招

もの言はぬよもの獸すらさへも哀なる哉や親の子を思ふ、と詠給へし此獸に便して、野馬の子をいとふさませつ也。右の句、さもあるべきながら、左句秀逸なれば、まけ侍らんかし。

三番　夜興

左 持

わが笠に月夜わするゝ夜興哉　コ齋

右

いづれ狸得失覺て犬もなし　文鱗

左の句、茂み深く分入る狩人の形容、いぶかしき所あり。右の句、姿つよく調たくみに聞へ侍れ共、其得失わきがたし。仍以持とす。

四番　枯野

左 勝

杉苗も枯野に日だつあらし哉　枳風

右

石橋をかれ野に渡す入日かな　全峯

左の句、木枯の吹盡して苗杉のそよ〳〵と動たる、風のやどり日にたつべきもの也。寸松虹梁の姿をふくみて一句の丈高し。右も又、枯野の風景見捨がたく侍らん。

五番　網代

左　持

子を連て夜の網代に簑狭し　心水

右

網代木のゆるぎ止たる氷かな　不角

網代の床に子を連たる作意、珍らかにしてやさし。右又、網代の杭の氷に閉て寒さ彌増たる氣色。左右感心、分がたし。

六番　石蕗

左　勝

破れ葉の石蕗に㒵出す鼬かな　調柳

右

石蕗さくや誰が曳捨し雪車の跡　立些

左の句、いたちとか云ものゝ、我方を見おこせたると言ひけん、そのゝ薄も思出られてをかしく侍るかし。曳捨し雪車の句意、しかと不レ聞。仍以左爲レ勝。

七番　鴨

左　勝

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し　嵐雪

右

鴨くはで菜を干枯す塩屋かな　魚兒

すゞ鴨の聲ふり渡る、秀句限なし。一句やすらかにして嚴寒の氣色盡たり。彼妹がりの歌を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと言けん、さま事にや。右の句も、鹽飼ものゝ絹きぬためし哀にはべれ共、すゞ鴨の聲、句調高しとや云ん。

八番　氷柱

左

風に來てつららにさがる楓かな　一桃

右　勝

門閉て閑居をしえる氷柱哉　琴風

氷柱にさがる楓、ほのかなる氣色はそくからびて哀なるに、右は、猶煙たえ〴〵にして、萑のゝちは氷柱に門を閉たる閑居の扉、感情まさりたるやうに覺侍る。

九番　霰

左　持

あかつきのあられに冬の信かな　李下

右

森深く野馬飛込あられかな　仲風

烈風寒威膚の竅發、冬の誠さいへるに、かくては世にもあられ降かなさ吟聲寂しきに、右は又、野馬の霰に驚たるさま、能言叶たり。閑所見る所、師曠が耳をそばだて、離婁が眼のさやはづすさ言共、左右の是非辨する事あたはじ。

十番　神樂

左　勝

御神樂や火を焚衛士にあやからん　去來

右

鉢たゝきまじりて狂ふ神樂哉　孤屋

左の句、させる難もなく、秀たる所も見えず。右は、はち叩、神樂にまじるべき事いかゞ。右に難有るをもて左方勝たるべし。

十一番　頭巾

左　勝

山里や頭巾とるべき人もなし　京　觀水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中哉　鹿言

眼にふれぬ山中の客、そゞろに愛せらるゝ楓林もあるか。右は、眼にたちて猶凄き冬野の法師、人には如何思はるゝ心ばへも有なん。左増るべし。

十二番　すゝ掃

左

何方に行て遊ばんすゝ掃　舉白

右　勝

すゝとりて寺は目出度佛かな　不卜

すゝ掃の日の遊ぶ處を侘たるも優にして艶也。右は、寺のすゝ掃も思ひよりたる、先珍重にや。兩句滑稽の誠なうしなはず、感心わきが

たく侍れども、目出度佛かな　と言ひし句の

　いきほひ、猶まさりて聞へ侍れば爲レ勝。

一柳軒不卜ぬしは、身を塵境に隨ひせまりて、志は雲井の山のいは根をたどり、あるは芳野の花に笈をしのび、湖水の月に琵琶を浮べて、風雅のやつことなる事年あり。是より先も集あらはす事再に及といへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま〴〵に唐朝の牡丹も花しべを異にす。梅の侘、さくらの興も折にふれ時にしたがへば、句も亦人を驚かしむ。猶其しげき林に入て花の香のよきにつき、色こき木の葉を拾ひて左右にわかちて、積て四節となす。判士よたりに乞。我も其一にしたがふ。まことや樂にふらるゝものゝ笛を盜むに似たりと言ん。され共青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸ざゝん事あたはず。貞享卯年、筆を江上の湖に濯て、終に蕉庵雪夜のとほし火に對す。

　　桃青書

入相のすがたを見する柳かな　調和
　藪の一重に桑子飼ふ家　不卜
陽炎の市に跿跛(チンバ)の馬連て　擧白
　ふるき小唄に母をなぐさむ　不角
三日月の丸くなるまで草まくら　溪石
　霧薄き夜は遠き舟の火　勇招
尼ながら砧うつ寺あはれ也　卜
　笠に葎の實を殘スみち　和
大内のすゝ掃役のいかめしく　角
　寐もせぬ髮を痛く名たてる　白
雨の日を酒の小湯女とみだれけん　招
　かいつめらるゝ火渡しの肩　石
中陰も程ふる花のわすれ草　和
　あしたの蚊屋に乳なぶる兒　卜
一度はおもひ詣ん七面　白
　今年ばかりは吉原の賤　角
いつの花いつの月夜に盟(チギ)リして　石
　藤見しまでは醒ぬ衣の香　招

いでや春袖とめてより憎しき　卜
日出度さあまる殿の仲人　和
篠深く宮居檜皮に葺かえて　角
空を半に二藍の瀧　白
蝙なくてうたゝ寐安き氷室守　招
隣といへど五丁余の道　石
あさ皃を根ながら送る睦敷き　和
若衆喪を服て露に疊る口　角
晨明は入れとの鐘に恨なし　白
あらしの風に須磨みせぬ舟　卜
黒鴨の古巣おし出す磯清水　石
中程かけて捨し梯　招
死きらぬ僧のいほりの淺ましや　角
御湯の篠刈る野邊の篠原　和
立ながら羽を焦したる雉の聲　卜
岫はかすみに消あいぬにじ　白
花人に苗賣つるゝよしの山　招
雪の水ふむ京の草鞋　石

○

櫻木に釣鐘のこる尾上かな　才麿
春日は草に落る野の中　學白
鱒突の猟の雫に打ぬれて　不卜
岩のたゆみに見ゆる鵆の巣　溪石
月のいる夜明の浪のこと〳〵と　松濤
暴風のつのるみちの虛家　丸
合歡の木を思ひ眠たき秋の旅　白
雲を見果ぬ鄉入の馬　卜
物そのや甲斐の長吏の契して　石
ちまきの名ある草の刈そめ　濤
艾葉麪もさもしからざる裏山に　丸
興よきほどの詞なまらせ　白
かばかりは髮ある僧の尊くて　卜
麀鹿常に來る菴　石
繼橋のくされ落たる霧の跡　濤
妹死してより美豆野月なし　丸
花鳥と恨まぬ關の寐よからで　白

春かぎりある左迁の輿　濤
夕かすみ矢矧の橋の短かさよ　丸
下戸の酒屋は我にすげなし　ト
聟二人獨に譲る畑七畝　石
山路はるかに仙臺の入り　白
歌ならで今宵もぬれん萩の露　ト
思ひたゝずむあさ負の簀戸　石
蝉に年經て妻の髪かはり　濤
囚獄あく日は盆の黄昏　丸
乞食とも世はものたらぬ月の影　白
花見すくなし下京の趾　ト
おなじ野に菫土筆と並居て　石
蝶にしたしきかれは末の子　濤
しの垣を打のぞきたる源氏武者　丸
樹をぬすみ櫂(カイ)に指らん　白
眞間寺にきのふの醉をけふ繼て　ト
遊女のために我捨ぬ世ぞ　石
春秋もおなじ泪の水の色　濤
鏡は老をしらぬなかだち　筆

○

雨の音色〱に聞柳かな　蚊山
はなちるまでは正月の空　不角
春駒の情(ミヤビ)にくるふ野をしめて　一桃
清水に蝶のかげ游ぐなり　以喉
晨明の入る程暑き網代笠　扇雪
遠く見おろす京の篠木　琴風
戀すてふ泪に雪のきはつきて　不卜
名をかえて住傾城の菴　山
折れてある菊さへをらぬ哀也　角
不破を過れば露も黒き　桃
亡人を遣戸に送る秋の暮　喉
月さしのぞく常の米賣　雪
はしたなく帋帳の外へ足もれて　風
聲もよしや雷のとゞろき　ト
乘合の水棹にさはる花菖(アヤメ)　桃
奉加によする俳優(ワザフキ)が舞　喉

三とせ迄泣續けたる子の別　角
　余所より音のひくき餅搗　山
消ぬ程足跡のなき嵯峨の雪　雪
　角を落して見遣る鹿　嵐
優婆塞を今年も含す半つゝし　卜
　つれなく生きて土を焚家　桃
半月(ハマハリ)を買ふていざなふ都人　嗘
　笑ふて暮らす豐の世間(ヨノナカ)　角
師走にも騷がしからぬ戀の道　山
　しのぶともなき疊の衣〲　卜
いとをしみ弟にせよとなかだちて　嵐
　肩て嬉しき主の竹刀　雪
貧しさの泪なみだに替る月　桃
　佛を濡す盆の白雨　山
人切の庭に色なきをみなへし　角
　入日の鐘になづむさかづき　嵐
すり違ふ舟をしばしと火を乞て　雪
　僧のいたはる兒の煩ひ　嗘
花見れば惛からぬ程風の音　卜
　つゞきの原の靑柳の巷　筆

○

明星や櫻さだめぬ山かづら　其角
　詠ものに月の陽炎　峽水
立雉の跡に入る犬の繩解て　厚風
　おのが噓の木玉をかしき　扇雪
水きよく廁の下を行流れ　不卜
　凉みこゝろにしぐれ來ぬらん　一桃
旅衣集におくるゝ歌よみて　水
　泣てあそばん我戀の友　角
盜の妻追出すあだし世に　雪
　田植をしまふみちの宴(サカモリ)　風
閑古鳥煩ふ駕籠に催して　桃
　人の紲(キヅナ)に石おろす脊　卜
水雲の僧を尋る僧いづく　角
　いさあはれなき町中の鹿　水
紫の糟つむ軒の月ぞこき　風

風ならしたる墻の百瓢　雪
花さきぬ盲醫の身を侘て　ト
　はるの朝なを舎利唱ける　桃
山城の小便買ものどか也　水
　雪見に歩行く紋の傘　角
文によるひともじ草を尋ばや　雪
　菴をけふの茶の湯者にかす　風
おし鴨の卵わる音しづかにて　桃
　舟に髪ゆふみつの明ほの　ト
高人の夷の宮に祝（ノツト）せん　角
　夫婦の上戸親しさけずば　水
狂言に作らるゝ名は婀（ナマメ）きて　風
　いとひもはてず淺草の寮　雪
月しばし責馬見んとさそふらん　ト
　奉幣の後菊のうつろひ　桃
おしね干楠葉交野のあさ催ひ　角
　つるゝ魚荷の伽と成行　水
萬歳のはる待良のゆたかにて　風
　屋形久しき國府の御譜代　雪
眞人の刀うつ音花の外　桃
　霞いざよふ水の名所　ト

追加

我柳若やぎつるゝ櫻かな　不卜
　羽に匂ひなき蝶の集り　琴風
白鷺の汝（シヤ）が長閑なる父に似て　其角
　酒もてはやす樓の三階　ト
明は又師走の月のおしきのみ　風
　雨吟しゆく駒をならべて　角
みち廣く無下に越にしうつの山　ト
　雪隠とへば杉葺の軒　風
銘をきる櫻の鉦鼓の音ふりて　角
　蛩の奉加に松魚とる舟　ト
つれ〴〵の祭の哥舞妓ふりくらし　風
　あかぬ鏡に顔をなぐさむ　角
かいともし泪の數に泣けして　ト

忘八の家に梓よせたる　風
拾はれぬ捨子の親の忍ぶらん　角
　かれ〳〵繭るかの岡の麥　ト
月花の境を分る歌の公事　風
　春の夜深き乘合の僧　角
哀なる輛の女の魚よばひ　ト
　蠅に蚊屋つる思ひ寂しき　風
夕立も耻しからぬ古壘　角
　御旅の早歌神しいさむる　ト
活鯉の庖丁せよと望むらん　風
　大根あきなふ畑の見渡し　角
笘葺て何をなぐさむ雪の舟　ト
　足袋さし侘る關守が妻　風
色しらぬ聖に紅をはかせけり　角
　もの思ふ日は稲のはなちる　ト
世の月を嵯峨にも飽と諷れて　風
　供して宗祇と遊ぶ秋風　角
やよしぐれ縮をかく兒のしばし迚　ト
　竹植かゆる北の透垣　風
蜀魂膝にふぼしを傾けて　角
　既にうつたつ宵の盞　ト
作りなす九ゝの御影の花衣　風
　山庄かざる霞山吹　角

つゞきの原

春

物〳〵や時雨し空をはる霞　不外
松とりて常の旭と成にけり　不角
古澤の芹はいつもの匂ひかな　コ齋
笑れて又打直す薺かな　景道
土ふまぬ野を愛袈み若菜哉　文子
花はまだ黄鳥きゝに上野かな　調柳
日のくれに梅の花喰ふ詠かな　松濤
散ながらもとの花見る椿かな　活蓬

駒寐よと芝に見せたる雪間哉　皐白

春漸

竹の香や柳を尋ね露のとう　其角
おもひ出て物なつかしき柳かな　才丸
青柳の雫に星の歩みかな　一芋
風なくてけうとき岸の柳哉　勇招

角田川にて

舟しばし風を磬たる柳哉　不卜
青柳や片沓ゆるむ馬上かな　調義
側かけ燕のおとす軒端哉　立些
我家の奥まで見たる燕哉　比竹
わが貧をやさしく捨ぬ燕かな　溪石
玉鉾の袂にふるふ燕かな　調柳
雨の日や野馬とあそぶむら燕　扇雪
雨だれのいとまをくゞる燕かな　重元
下葉〳〵を養にせん雨のてう　皐白
ある程のてうの數みる飈(ツムジ)かな　一桃
我影に追付かぬるこてう哉　不角

行駒の足にまつはるこてう哉　不卜
小笹原うごくを雉子の姿哉　由之
啼いりて何れ歟戻ん友ひばり　一桃
梁の蝿見つけたり春の雨　琴風
追れ來て茵につまづく雉かな　蚊足
燕の巣に見えそめし菫哉　不角
連翹の匂ひを菴の風見哉　峡水
山吹や秋の露こそいやしけれ　文鱗
なの花の黄ばみすさめば歸る雁　宇齋
垣の桃結れながらの盛かな　蚊山
雛のさま宮腹〳〵に在し〳〵ける　其角
桃の日や女使のつき〳〵し　琴風
もち搗て二日を雛の師走哉　調柳
ひな賣は懷敷戀のよすが哉　立些
汐干とやすくもに含るもろ雲雀　不角
あさつきのあかるゝを身の仕業哉　李下
はだか身に花の散來る音羽哉　三園

物皆自得

花に遊ぶ虻なくらひそ友すゞめ　芭蕉

月移花影ト欄干

月影のひた植かゆる櫻かな　不卜

朝な〳〵鏡におこれ花櫻　文鱗

山ざくら住は佛とふたり哉　蚊山

雛の啼にはちらぬ櫻かな　溪石

はつ櫻風(ホノカ)に琵琶の隣かな　一嘯

見ぐるしや折残されし山櫻　琴風

さくも散も一木づゝせよ山ざくら　擧白

立寄て寺の名をきく櫻かな　調柳

常ながら鞠見る寺の櫻かな　鹿言

嵐にはいかゞ斷るさくら守　梅雀

片陰もはるはみちある櫻かな　湖舟

憂事を花にしる也我つとめ　調味

行尊の佗しき峯のわらびかな　由之

ふぢ散て彌春のせはしさよ　湖舟

やさしさは燒野に開らくつゝじ哉　三園

菴ほしや峯には惜き白つゝじ　溪石

夏

三月正當三十日
風光別我苦吟身

大酒に起てもの憂袷かな　其角

根は只に葉より上を牡丹哉　擧白

我亭を樂む

朝皃の二葉にうれし蜀魂　調柳

啼上げて羽子落し鳥不如歸　三翁

卯月とや籬のけしの花曇　沾蓬

顔撫し菖あやしや夜の軒　立些

粽草さばく女の早苗哉　調味

返事待禿ゆふたるちまき哉　調義

子を負て夫婦つかるゝ田植哉　溪石

幽齋のまくら碎けん五月雨　和水

見ぬ人を打傾ける早百合哉　朱紘

やすらはでかい夜の明し虷哉　才麿

草の根に螢のきえぬ小雨かな　雨聞

花藻みていつも樵夫の手水哉　一桃
鴨の巣に青菅かざす小雨かな　、
けぶれども人はこらゆる蚊遣哉　湖舟
扨暑し二尺ある木もせみの聲　不角
家よしや松を柱にせみの聲　梅雀
思はずや鶏一聲麥の中　雨聞
松陰は馬替る間を涼みかな　蚊山
寺涼み遠きなるこの動き哉　琴風
吉原は親にしらせぬ涼みかな　由之
扇して鐘の尺見るすゞみ哉　仲風
帆一つに筑波見かくす涼み哉　鹿言
夕涼み鞠を見あぐる小舟哉　峽水
身を安く處定めぬ涼みかな　扇雪
百八の聲に驚くすゞみかな　文子
涼しさはおほ子飛込小舟かな　不卜
月いくつ道〳〵拾ふ清水かな　松濤
いかめしや日影を走る松魚賣　不詠
いたひけや親と連だつうちは賣　鹿言

晝皃に米搗涼む哀なり　芭蕉
瓜一つ外に欲なき子供かな　不詠

冷したる瓜の水にあける

堀兼の哀をしらぬ眞桑かな　不角
常夏を見れば羽織の暑哉　三園
冷じや夏の眞晝のかねの聲　コ齋
夕立に尾上の寺は給かな　琴風
夕立に雙面の瀧を濡て見ん　溪石
夕立にいらぬもの買ふ合かな　不卜

秋

六日の夜鏡久しや女七夕　不角
七夕を法師の皃に思ひなし　扇雪
傘工の日和を星の手向かな　溪石
宿直よし幸星の別れみん　琴風
筏士のはだかを安き相撲かな　不卜
よき衣の殊に賤しや角力取　其角
あさ皃や少しの間にて美しき　才麿

朝皃の蔓に手を遣る薄哉　古川
帆柱に槿這ふて詠多し　調柳
槿の匂ひ茶を煮る隣かな　立些
あさ皃に北刕の菊も名のみ也　梅雀
槿や貴妃嫁して後詠なし　調義
馬落を我は桔梗に寐て行ん　松濤
ふみ月の晦日おどろく灯籠哉　比竹
品川を離てさびし稲の花　峽水
いく程ぞ日向追行秋の蝿　琴風
松虫の聲さまたぐる蚯蚓哉　夕ロ
草の戸の蚊屋に飛つく蝗かな　不卜
草臥の夢おどろかす蟲かな　仲風
立歸る蜻蛉とまる礫かな　鵡白
嫁しうと拍子そろはぬ砧哉　扇雪

雨の降ぬれば

けふの月夕見て置く笑ひ哉　不角
驚計雨の月見る洲崎哉　立些
落鮎の馬にふまるゝ渡り哉　一桃
栗は名のいやしき菊の九日哉　不卜
思はずも菊匂ひ來る厠かな　夕ロ
樫の實とつれて落たる鶏(テトリ)哉　蚊山
なみながらとられぬ椎や九折　三翁
長ィ高しはな野の中の石地藏　文子
しら露のおかではおかぬ千種哉　擧白
瘦牛に柴付て秋のすがた哉　調柳
高過て哀にもなし秋の不二　不角

冬

曉の星を追ひ行しぐれかな　勇招
女とてはしらぬ町の時雨かな　文子
蔦枯て壁をぬりたす菴かな　琴風
見こまれて落葉を悔む隣かな　沾蓬
落葉して世に隱逸の菴もなし　調味
わか長ヌにとゞく物なきかれ野哉　不角
凩のさくらに月のさかりかな　柳市
雨落て鶴の聲寒き芦火哉　立些

野は三里霜より出る筑波かな　白楊
霜の鐘夜興の犬の吽かな　コ齋
杜國を訪らひける道すがら
鷹一つ見付てうれしいらこ崎　芭蕉
淺ましや鷹に糸を飼ふ夜のかね　才丸
竹の葉の霙にすくむ烏鳳（ヲナガ）哉　溪石
川越せば馬の尾をひく氷柱かな　琴風
曇る日は氷柱を（缺）る兎かな　溪石
帆柱の氷柱見すかす旭かな　此角
馬をさへ詠る雪のあした哉　芭蕉
はつ雪や門に橋ある夕間暮　其角
草の戸や傘すぼまらぬ雪の暮　擧白
垣越に兒と雪うつ法師かな　　尨言
漂木より夕暮早き千鳥かな　一桃
芭蕉菴にて
菊枯て蠣むく蛋の隣かな　不卜
櫻木や風雅をくだく榾の音　立些
香のなくて梅に戻ぬや水仙花　和水
妹なくてうたゝ寐悔る火燵哉　淺山
年とらで梅さく園にかくれたし　梅雀
行年は親に悲しく子に嬉し　竹山
わが貧を羨もあり年の暮　扇雪
坐右銘
行年や壁に耻たる覺書　其角
貞享二丁卯年梓行

文政二巳卯年九月再梓

江戸　橋梁　碓嶺
米澤　晦室　麗岑
嵐齋　柳々

寄雨洞愚老曉花、霜夜の毫をかみて謹て述る。

つゞきの原は、貞享二年丁卯の春の撰集にして、花鳥風月の栞なりしを、いづれの歳か板うせて、今は標題のみ殘れり。偶あるも寫本にして覺束なき事ども多かりき。爰に山崎氏麗岑が俳諧の長櫃にひめ置たる一集あり。こはまさに不卜叟の撰おけるつゞきの原にして、昔を見るにしのびず。柳ゝいさめて、ふたゝび板にのぼさむといふ。麗岑も亦志のなきにはあらざりけるが、いまだ時を得ざるの歳あり。ことし文政二卯の年、橋梁碓嶺、此いで羽に節を曳の幸をよろこび、岑、此集を嶺に讓る。嶺得て曰、瓊玉を濱の荒砂にかくすに似たらむとて、呑魚の災有は其まゝに寫取て梓に行ふ。實に此道の盛むなる哉。此道を踏もの、手を打て仰ざらめや。我人百歳の后に生れて、百歳の往昔に逢ふの今日こそ、麗岑柳ゝが深くおもひ、碓嶺が道をしたひ、不卜叟の意を續ば也。偏に切なるのこゝろを凝したる趣は、集の再成の大道ならん。尊めや〱。はた此よしを予に書よとある。もとよりあらがねの土堀る家に生れ、其業の繁く、何いふ事もしらねど、唯稻舟のいなみがたく、最上川の源、松川の流くむ

おくれ雙六（すごろく）

清風撰

昔此国に自由じざいをうつもの在。明暮是をもてあそぶに、いなにはあらず最上源三と名乗て、其ほまれ世にこえて、つち重六の俳のさとりもかくやさと、朱門桀生の口にとなふ。予も同國の所生と云ながら、心の花の都にも二年三とせすみなれ、古今俳諧の道に踏迷ふ。近曾より漸新しき海道に出て諸人をまねき、四季折々の佳作を得るといへども皆先達の俤ありて、今源三が乞目に叶はず。倩こそ是を後双六と名づけて、初手に愛かしこの發句をしるし、後に愚の獨吟をつゞり、あたら櫻が板をつゐやし侍る。

撰者出羽國最上
殘月軒清風

延宝九年
初秋日

春部

元日

思へ春万代の初寝覺の翁　京住井狩氏 友靜
若あらば神代の貌若ゑびす　同住 常矩
今朝国土笑はせ初ぬ俳諧師　同住 高政
いつ彌生山伏篭の雲を着初　露沾
御代は春都上﨟江戸侍　政長
うら白や明の初鶴といふべく　江戸 調山
羽子の鷺松の代安し門の森　同 青水
江戸山王溜池の翁春幾春　同 露言
筆始先雑さ書(エツキ)けり　同 出思
鶴日暎也大和もろこし両廻　同 立詠
御代に翁在惣領月の国姿　同 立吟
神祇の部幾万の春和歌の国　桂林 正友
龜鶴老門松先生と中也　江戸 一松
上河東に御鷹場賢し四方の春　同 山夕

氷の靈幾代のかさねきそ初　同 露章
年の花や目あき千人哥枕　高野氏 一榮
蓬萊や嶋鵜に渡る二日醉　羽州 風流
三つ物組いつ迄草のいつ迄も　同 吟水
摺小木や若水馴し淺香山　同 如柳
屠蘇匂ふ天の岩戸や洞の貝　同 了靜
つくぞ羽万森の竹簣子　同 一中
梳（ケヅリ）懸や先太箸を二軒茶屋　同 遊川
硯石や天人下りて筆始　同 春甫
磨砂齒山や白く明の春　正利
萱替や神の福藁二柱　尤也
木刀も谷の埋木いはほの春　佐久間 露宿
人や千鳥橋の小嶋組蓬萊　江戸堀 言瀧
氷様鋏木挺以てこづるとも　京 如風
女小笠原菱重ねしつ初鏡　江戸 調和
今朝の雜煮貫之が中の味噌糟也　清風

寶引

居士が娘寶引繩も捨つらん　言水
寶引や綱手かなしき舟博奕　清風

子日

松膠や小弓にひける初子日　友靜

初芝居

木戸閉よすりの通路初芝居　春甫
坊何兵衛後髪引初芝居　羽州 清秀

若菜

髮ゆひや我手拭に摘若菜　言流
山鳥や若菜に隔ッ鍋の谷　春甫

初連歌

花近し髭に伽羅たく初連哥　言水
一順や竹の一ふし初連哥　貞久

養父入

神鳴門養父入強き女もなし　江戸 露角
養父入や蛇の厨子祇薗町　慈菴

御忌

女尊兼好にくし御忌参ッ　羽州 柳和

鶯

穴藏や鶯の異名白鼠　如柳
鶯や伽羅の林の若葉山　了靜

梅

花の梅とはゞや夢に哥書枕　江戸 調賦子
深窓の玉のありかや梅に風　同 螢石

柳

氣晴ては風新柳の月代也　京 唱見
青柳や花の趣向の側屑　羽州 西通
氣力なし幽靈すがた青柳　館林 才乙
蛇柳は宇治姫姿知られけり　江戸 調皷子

霞

駿河なると中残しけり八重霞　江戸 一銕
灯心や明方見かく薄霞　春甫

初灸

いほ崎や不二の煙の初灸　高桑 吉直

薪能

厚鬢や薪の能の拍子風呂　清風

佛別

わかれてや夫前佛は既舎利　京 保俊
青い二も出てかなしむ別哉　友靜

猫戀

懸がねや尼ひらでとかす夜遣猫　一中
心中はつめたし猫の鼻柱　清風

鹿角落

鹿の角落るや繪ノ具青葉山　風流

上巳 附汐干

今朝ぞ餅檍ガ原の汐干より　幽山
干るかたや莵のあしべ今朝の海　登石
口まつかり見てやあきれん大塩干　江戸 正英
海三里岩船や今日神の濱　是迄
けふの浦賀誰誠より干初けん　秀勝
今日ぞ干盤の穴藏塩俵　柳和
立風呂や手水の波も今日干潟　春甫
草の餅や摺餌のゆかり雲雀の子　一榮
芥子雛さえんの内裏移れたり　京 しげ女
漂冷けふの干潟や烏貝　言弓

餅草に妻もこもれり笘雛　清風

花

杉重や下戸の草茎花の山　露沾
辨當や布巾かゞやく花の雨　峰重
詠れば花に眼や隱元派　露章
花咲て撥が物云木陰哉　瀧水

上野にて

花高し前には歌人の通路在ッ　松意
しはん坊なき世なりせば京の花　京 直親
花品ゝ上戸上性下戸下性　京 定之
忠則と枕合や花の宿　安部 密好
世間也塵塚の塵四方の花　羽州 秀勝
花さかば告んと云し酒屋中間　是迄
恨み哉政當手打に花の枝　柳和
生花の跡の名殘や丁子釜　正英
さしみ皿梢の花や瀧のぼり　自興
酒中花や彼赤人の讀殘し　一中
蛛の巣や都よこしの花莚　了靜

法の花や七寶粧嚴の幕柱　如柳
辨當や花も實もある金つかひ　一榮
女中方花に火とぼす一てから　清風

櫻 附櫻鯛

鹿喰し報ぞ嵐伊勢櫻　如柳
色鯛や吸筒の波糸櫻　自興
四方山のそしりに殘す遲櫻　一榮
さくら鯛若葛味噌やかゝらまし　和州 松笑

雲雀

豐等寺出家やおつる夕雲雀　京 江雲

蝶

蝶〳〵は螢の厨子の舞子哉　一榮

呼子鳥

黄舌は酒有て汝何有て呼子鳥　言水
唐人の寐物語や呼子鳥　遊川

紙鳶

野間風や雲雀驚くいかのぼり　勢州 泰德
心ぼそく思はゆる哉のぼり蛸　一雲

壬生念佛

日あかしやなのが友猿壬生念佛　友静

雜

春雨や箸を枝折の鞍馬漬　江戸 立端子
明樽の古巣にかへれひよみの酉　如柳
塩づけや昔に囀る鳥部やま　言夕
春雨や千日寺の夕けぶり　露深

暮春

世のうはき暮にぞつゝむ春の暮　清風
春くるゝとは思へ共壹寐哉　對州 松有

夏部

更衣

在つる女蛇に替り鳧水衣　言水
今日ぞ袷ほこりを拂蜘の糸　遊夢
さき織も袖の湊や更衣　一葉
大名の知らぬ事あり更衣　雲母軒 和时

青簾

蔭干の茶菌のひまや青簾　黄吻
糸縢や御手を掛し青すだれ　清風

灌佛

邪氣藥圖法師如來生れけり　瀧水
たが懸や薬生を結ぶ産湯桶　露宿

卯花

朝雀泊り定めん花卯木　青弓

鵑鳥

耳に恨有明残れほとゝぎす　露分庵 千之
郭公まねくか麥のむら尾花　桃青
一聲や噺の知死期子規　次静
夕には死とも枕ほとゝぎす　重政
蛇の道へビが知ル鶯いかに時鳥　去笑
草の葉や油ひかすのほとゝぎす　了静
ふとしはづれうはの空なる子規　意斗
今日は歯にきぬを着せけり子規　柳和
蓑笠の里やわするゝ鵑鳥　一葉

山姥のしはぶきおかし郭公　如柳
額には塵雲の山郭公　吉直
鉢卷や耳に村雲郭公　任舌
延しても雲に横手や郭公　淸風

諫鼓鳥

諫鼓鳥や廬山の雨の草結び　正英
道元の都離し諫鼓鳥　重政
諫鼓鳥や栖に歸る関所藏　不哥得

杜若

澤蟹も砂の物也杜若　淸風

葵

荷印や殊に時めくあふひ草　友靜

端午附菖蒲

胴人形軒端ふく也藥草　調和
カヽ人形肩すぼみけり菖蒲の雨　河内露迎
けふぞ塩瀬軒端の茂みよし粽　言瀧
忍び下女あやめ莚の七府哉　言弓

五月雨

物とては晝寢の鼾五月雨　京信德
五月雨は鳥のうき巢を懸てけり　同春澄
五月雨や扇のはしる要石　一雲
馬下駄や水のさかまく五月雨　西通

早苗

早苗の男女國の父也母也けり　如嬰獅

水鷄

瀧かへし水鷄を思ふ中立也　榎山友水

早松茸

暮安し樒折僧早松茸　言水
をしかけの天狗だふしや早松茸　伊勢貞久

青梅

青梅やをのが友呼酒の糟　羽州意斗

木草茂

ラウ竹や二女の唾の下茂り　言籬
掃溜や朽木の茂り柳下駄　露宿
君子出て池の風俗茂りけり　對州綠葉
蘇鉄山の茂りや床の釘隱し　遊夢

螢

笹舟やめゝさこ逃て飛螢　京 友春
瘀咳の心や朽て飛螢　一中
あひ屑や昏日を急ぐ螢籠　風流

鮎 附鮨　芳野にて

此川はうるかの郡みよし野や　言水
相撲川や來つゝなれにし鮎の鮓　了静
蓼の葉船漕行鮨やかつら川　對州 二流子

短夜

今の世の人間氣也夏の月　南都 良尚
夏の夜や夢半分の鼠喰　一葉

蚊 附蚤

蚊の化やつるにあらはす夕烟　京 高政
蚊柱や凡世間の眞木割臺　瀧水
音高し蚤の目あかし敷衾　行宣
無禮講やひとへの生縮蚤の空［カラ］　直良
夢に見し蚤ぞ殘りて十荇のから　定久

夏衣

夏衣干す岩波や嶋さらし　友静
洗ふ覽浪のうね〳〵嶋縮　一榮
匂ひの玉三つの寶や奈良晒　如柳
晒持や赤膚山の櫻麻　清風
板紐や不破の關やの夏羽織　同

瓜 附小角豆

姫瓜の命のつるよ轆轤首［クビ］　正友
すべりてや河童流るゝ瓜の皮　風流
瓜小屋やしがらみ懸て釣瓶繩　石井 露身
きこし召けん目病の地藏辻眞瓜　言籬
いつしかに黃昏藤の花さゝげ　山夕
やねうらや汐滿來れば瓜小舩　西嶋 有水

白雨 附雲峯

白雨や草履を流す阿久刀川　露章
雲の峰見てややみなん冷水賣　露宿
舟樓［ヤグラ］虱や飛て雲の峯　一加

土用干

土用干や木乃［ミイラ］を包む衾かけ　春市

虫干や釋迦以來から加賀の藏　南都 西任

干や土用質のながれの衣川　清秀

納涼 附心太

起出て露たつ庭や朝凉み　勾當 立吟

酒責や階子に腰を夕凉み　調杝子

粘日和し水や結ぶ棹の川　如船

高足駄緒捨の山や夏日照　言流

昆蘭樹や五百羅漢の下凉み　友靜

三條の橋にて

ぎぼうしや增田右衛門の橋凉み　友靜

汗凉しながれて木の水羽織　寺田 重德

下リ腹や走井の水凝海艸　丁靜

半結リウや末の松山汗の波　口靑

雜

麝香の臍神鳴颺テ風薫る也　京 千春

高直米や富士の烟の夏は絕　柳和

沖鱠嶋隱れ行栗生姜　春甫

かまくらにて

風計目に詠けり扇が谷　祝氏 忍水

御祓

捨串や業平竹のせし御祓　言卜

水垢や三島鱣の夏はらひ　泰德

片器の岩墜泉水や川御祓　言弓

辻社冷水川や夕はらひ　友夕

蠅もちの五十串流せ御祓川　藤匂子

秌部

立秋

常盤木も季を持せ兒今日の風　西通

法橋維舟の像なかゝせ、一句の
試筆を殘されしを

繪姿や風帶驚く今朝の秋　幽山

家求べし冷酒德利今朝の秋　松滴

麥こがし散にし後や穐の風　鳥跡

今日ぞ秋門に告こす繩簾　白交

今朝来るや藁草鞋にて宿の穐　瀧水

けふぞ秋脣(クチビル)うるむ山颪　清風

星合

秋去衣牛の下揺萩なれや　幽山

けふにあらば花鯛鰹七夕や　調和

星硯行合のかごと也門司の關　言瀧

腹を借すべし手向にあける天津星　似春

鵲に習へ星の小川の朝烏　言水

玉階の夜食フラスコ涼し星の床　不卜

繪カルタや宿をり星の妻合　幸順

露橋や待ッとは宇治の星姫も　其角

髪筋にからめられけり星の牛　小川水柳

曇針思ひぞ通す星の床　露宿

夫婦星や尾ひらの動き羽買山　遊川

星の契り玉子の親や継知らず　清風

雨ふりければ

白雲の帯やとかずの星の床　慈庭

稻妻

いなづまや田中の井戸の玉だすき　住木

刺鯖

さし鯖や皿の干潟の埋レ塩　愚遊見

墓詣

狼や衣の勸進墓詣り　清風

灯籠

御所灯籠通(ツウ)や失ふ白油　一葉

灯籠や切ぬく花の吉野紙　丁靜

魂祭

魂祭放下が袖も茶湯挽　清風

西瓜

鬼と見てまな板すこし山西瓜　不言

砂糖有わたらば氷船西瓜　露宿

門脇や中間擧(コブシ)ル鳴西瓜　森嶋東水

鬼灯艸

鬼灯や女子の臍の夢にだに　言雀

新蕎麥

時なれや一捧しめす新そば切　正長

露

なよ竹や玉ぬく露の鈴篠　立訓

秋草

蘭鉢や翠篠の追風奥廊下　一蜂
槿の花の時雨や土佛　如柳
朝良の紫花浦嶋おかし寐覺の床　如船
草弓や入野ゝ薄在江武士　露章
女良花姿の池や蛇のけしき　清風

虫

美集へ入らんと思ふも
をくれ双六心の駒や轡虫　尹雪
思へ壁左官のもとりきり〱す　千之
小莚や水仕姿の茶立ヶ虫　言瀧

月

板のうち押スや餅屋が船の月　光俊
丸鏡月を隱して懷なり　千之
先月をうるや宗祇の棚守　了靜
月に雲水の皮むけ天津かぜ　是迄
月やたゝむ藪の燒衣里宮笥　正信

名月

芋虫や殼に干さるゝ月日照　言水
さゞ波やしめし土器今宵の月　太田 兎給
月や今宵寺井にすめる坐禪豆　如柳
そぎ楊枝月や枕に芋畠ヶ　風流

雁

大名の食や進に渡る雁　仙臺 三千風
雁首やわたるキセルの棹の川　南都又珠四郎 包元
初雁をまつほの浦や夕料理　露深

砧

糸巻や絹地の帋をうつ衣　風流
釘ざけや麵を以てうつ衣　政次

鶉

俗坊主うづら衣や薄醬油　政重

梅もどき

梅もどき田舎天神の詠かな　露言

重陽 附菊

呑ぬけやそり屑枕菊畠　丁靜

仙人や涎つたへて菊の淵　道章

梔　附梔鮒

髩が髪浦の苫屋の紅葉哉　友静
山路や紅葉を分て十郎殿　是迠
焼飯や犬上山のむら梔　如卿
枕懸や梔を床の相合ッ　了静
柏木も秋は赤染右衛門哉　水客
狩人や紅葉踏分灸の蓋　清風
見ぬ色の深きや底の紅葉鮒　京 興恕
煎酒や杉ばし越し梔鮒　興久
山ぞあらし奥歯に残る梔鮒　露宿

鹿

女鹿鳴忍ブの山や奥座敷　露章

後名月

月や明石足引の山栗のいが　遊川

茸

松茸や色ひなれにし茶屋のかゝ　一葉

渡り鳥

鉢に見ゆる鳥や今焼渡り物　南都 春之

雑

龍田姫やり手のお秋金性也　三千風
水穂の国蒔芥に實なるとや　和肘
秋の夜や唖とゞかぬ懸造ッ　慈庵
甘口の酒に色あり唐がらし　一葉
剃刀鮎砥名瀬に落せ濁川　太田 兎給
匂ひたばこ誰が呑捨し野邊の秋　唯雪
慰めかねつ切藻の海苔たばこ　暮遊

秋暮

暮て行秋の記念や留主る番　遊川
下馬の秋良園がうそ知られけり　中笑
虚労病の世に成にけり秋の暮　登石
取集漸此時ぞ多し秋の暮　若州 綠葉
つらからん晒屋が心秋の暮　同 幽僻
色ふくる烁や名残の野郎虫　水猿
いろりふちや猫にゆづりし秋の暮　任口

冬部

初冬

後五日宿札打や神の旅　紀州 不易

山彦や嶺にさびしき神の留主　清風

爐開

埋火や白灰殘る夜半の鐘　露草

賢仁も手のうら返す爐の邊　吉直

臑(ハギ)股や火燵の錦里がへり　一榮

時雨

山折敷小豆撰や片時雨　言水

煎鳥鍋つを引瀧のむら霽　調栢子

鳥の巣を風のさゝ板洩ル時雨　同

首にかけん笠縫の嶋初時雨　西海

尸袋や雲を引出す夕時雨　友靜

木枯

凩や門音信て猿の耳　羽州 與吉

雪

雪に明て鳥と暮ぬ出崎松　言水

飛鳥今朝羽休めつらし雪の松　言瀧

雪吞や不盡の嵐の鞠子川　如柳

物佗し小野ゝ細道下駄の雪　正英

雪車(ソリ)引や胼切レて有乳山　了靜

雪の牛といふ題に

かまど詣牛の子寒し里の雪　言水

炭燒

黒炭を燒や安達の鬼瓦　言流

菊炭や霜に枯野ゝ山嵐　言夕

炭燒や黒き筋有音羽山　清風

氷

大根や筏を閉る氷鮒　友靜

水鼻や氷にかへる紙屋川　一中

頭巾 附 頬綿 帽子 足袋

革足袋や紫しぼり田舎後家　言弓

母の恩や重きが上のきぬ頭巾　清風

頬綿や嵐のさそふ鏡やま　遊川

煮紙子や蘇が里に分る共　露章

水鳥

寝巻小袖泊ッ千鳥や網の浦　言瀧

浮沓や浪の高足濱千鳥　了靜

末那板直

末那板直し龍女や恨む魚成佛　蟾蜍

鰒

何ンぞ鰒世擧て皆河豚汁　京 順也

火吹竹つく息よはし河豚汁　了靜

鰒網やおもへば三途の瀬ぶみなり　一紫

其汁の糟をすゝるや鰒もどき　忠珍

甚太瓶を捨るや假の鰒もどき　清風

杉焼

杉焼や三十一もじ箱傳受　友靜

生海鼠

金の鼠灣に穴掘ル陸奥山　頑也

薬喰

毛蒲團や塒に殘る玉子酒　和風

ふは〳〵や背が腹ゐる薬喰　一紫

薬喰や腹をかゝえて冬籠　遊川

煤掃

煤掃や鼠の内裏都落　貴吻

雜

胼や水菜をくゝる玉だすき　如卿

毛雪踏(セキタ)や狩して得たる爐地の面　重德

草枯や腫物にかへる藪薬師　清風

節分

鬼味噌や今宵の豆を種として　松滴

暮冬

年並や關の藤川つなぎ船　佐藤 重政

餅をかざし今日も昏しつ大卅日　清風

書出しや一寸の光陰しめて今日　西阿彌

寝て起て徧貢攀を淋しさの果　才丸

底豆や山路を廻るいとざくら
焼南蠻のもゆる早蕨
鼠狩そびき出しけり八重霞
手袋はめて里の下風
われて行胝胼の片時雨
寝息曇りて月ぞ傾く
臆病の夢に殘りし鹿の聲
根太をせば色かはる草
鐵火箸尾花が末を分て行
キセル通らぬ吹上の濱
馬方の巾着枕浪よする
龍灯備て寺を持けり
ハウの釋迦鐘の供養の在し時
五しやう三しうの女氣遣ひ
御剃刀おどろの髪を切てやる
假の領卷牛王壹牧（枚）
蒜喰若狹の水も月の秋
大便結して後瀨山の露

念者嫉ヒ嶺にかくれし袖の霧
惡所に氣ざす横雲の風
天も花も思ひを積し段階子
雪踏抜場のむらさきの藤

二

葛袴こなたは雪のむら消て
晝寐の雲雀食にもたるゝ
衣には辰砂を懸し豐等寺
檜原を分る梯土佐の紙
木枯はけさんの下に埋れて
米飩羅磨く高圓の山
笥人形飛鳥の淵はかはれども
片撥太鼓の衣うつべく
烋のむし歸命無量の音のみに
眞葛に通ふ腰ぬけ願ヒ
夕の戀つゝけ枕に月殘る
毛聲に成し中宿の霧
初ふどし板屋の軒端風あれて
死し虱の容定めなき

二ウ
臭菌よりカット吐出す雲離レ
物間の糶米姨捨のやま
雑巾や麻の小衣墨に染
羽帚の跡塵の世のかぜ
雪隠や琥珀の光リ明らけく
見る千話文を切目かねらふ
心中に耳と鼻とをそぐもあり
鼎かぶつて鍋の數見ん
月くらく火の雨降し磨砂
僕手習の術をえて露
握り墨鳥居を越し天津雁
荷物の初尾眞野ゝ繼橋
福神や万徳太夫が花いかだ
博奕嫌ひの惣領の梅
三
鶯のやまけこえての立姿
岡風呂吹し朝倉の山
木の丸殿袷明衣の數かさね
傘鉾持を人とがめけり
筒守リ似せ印肉の跡消て
小手しめあぐる木綿しでの縄
玉垣や赤鬼白鬼すみ所
烏こもれりといふはまことか
山田守ル僧都宣旨を給りて
菅笠やぶれて雨乞の歌
くわんぜより月もれとてやまばらなる
眠氣さましの下臥の萩
耳に水身に入風のよぎて吹
牽て歸りし角のある鹿
三ウ
新艘と朝の原と明はなれ
太皷が様を吉野葛城
けいはくの雲にあらしのこゑすなり
借用手形の留守つかふ神
釘付に出雲八重がき結捨て
脚立と此木なからましかば
骨痛む猿が請身を取はづし
鼻血ながれて底にすむ月

大樽を枕にこかす蔦紅葉
亦六が門季をもたす風
道化方流の響もかすかにて
似せてなまりし天の羽衣
脱かけや縫にぬはれし花の枝
思ひにはしる篭の鶯
名
不狂仁染まいらせし筆始
かいもくの下戸たぶらかさるゝ
後からふるひの付し古狐
阿蘭陀の袖縁夜着を重て
やり手禿心づくしの海續く
もらひへぬ戀波のあち鴨
置壷の其怨念が積り來て
梓にかくる雪おれの竹
五升泣屉レ分の山おろし
からうす踏の谷の下水
細帶の裾に懸たるしがらみは
面向不背の玉川の里

夏艸の月は心の律儀にて
萑を宿に親なし子産
名ウ
行や暮番太がもとを長枕
手柄ためしの姿戀しき
大佛の寂滅の鐘に立別れ
名物の餅取て歸りし
評判の脇香の藥委也けり
七十五日立風呂の中
みご箒花陽時をわかるれば
蜘の古巣に囀りの鳥

高足駄役の行者や花曇
金剛童子の大へいの春
鶯の握りこぶしを羽に留て
役にたゝずの淡雪ぞふる
いつ迄かつら扶持斗小夜嵐
鏡臺こはれて月ござさやけき
風呂還り草のうら枯分過る

こかしの竹を鹿やこふ覽
次雁や薬研の綠を飛違ひ
圓法師立るみほの湖
さゞ波やよこね嵐の吹とても
そうかに名染かねはあれども
さしのぞく穴藏の底入墨露
蚓ののたり里へだつ縫
仲人口釣のいとまもあらばこそ
密夫かくすあまのはしだて
颶では鬼一口の大江やま
かざしの紅葉鉄の眞生板
女郎花鍍のたすき引むすび
高掛飛こす機織のむし
詠れば礫嵐に月落て
氣違ひ座頭の分るむら霧
喰こぼす精進汁を宇治の川
璽位禪定門平等院殿
畝味方水品の旗なびかして

碁盤のうへに天火をぞ取
鳴神の腕こそつよし力瘤
樂生のいき地三き知らずや
桑の杖調市中間に忍び逢
背うるんで夢ぞ佗しき
小芝居に生れ付たるほとゝぎす
羽袖がはりの衣鹿背山
紙札のわきて流るゝ泉川
息災延命しら波の月
濱荻の御注連の繩を腰に付
所によりて三疋の猿
手柄噺上見ぬ鷲の山高み
彌陀と釋迦との脚をしの段
彼岸を根太のうみのながれ行
百味備ふる蛤の窓
太郎坊帳屋の軒を詠やり
朝こみに越す裁許の場
大口話八丈嶋へおもむきし

産で捨べき海原の底
遊行派の惡蛇の角はさかん也
繪双帋ふるゝ決定の札
ほうかぶり戻子肩衣に下馴て
思ひにもゆる蒸樓の窓
留守見舞主ある花を引て見る
小せきばらひの朧のかゝみ
三
空な引煙喰ひの春のやま
手きさみなれし藪の下もえ
忝なし使僧ならひに今朝の霜
和段を入て瓦屋の雲
砂糖水月は軒端にかたぶきて
晴な音樂秋風のこゑ
青さしや歸るさ分る蔦かづら
化野大野に筒がつぶれて
忘れ水夜明の酒の名殘には
雛の吸物日數經ぬらん
縫つめの産湯を捧け奉る

姥腰もとがめぐる蓮臺
上氣な戀手のとゞかざる花の枝
見しやれ誓文囀りの鳥
三ウ
うせ物のけさ迄爰に殘る雪
雨風つれて占方の事
雪かくれ篠田の末の狐の子
小豆飯つき色ついて草
淺漬の露にこぼるゝ八重葎
病上りのきりぎりす啼
毛蒲團や假寢に月を片敷て
夷隱居して嵐はげしく
津輕舍利松の雫や殘すらん
手のよいかたり天の羽衣
有度濱にアサト靑二の稀に見て
上下の宿や足柄の關
生灸岩のかけ道風すぎて
金 逢時竹綱本書のかみ
名 鼻ふすべ敵の眠り覺さんと

四國八嶋の庚申待
疝氣寸白藻に住虫の哀也
背骨をこがす海士の燒さし
置頭巾山ある方へ通ひ馴れ
見臺なしに仙人の友
夢想筆鶴の片羽はかさね共
篭の湊の萬小づかひ
汐風に時花太夫がもめにけり
龍女につれし格子上﨟
脇とめて實（ザネ）夫よりは拾三年
見忘れたりし焔魔王宮
月くらく六道の辻通りぬけ
なまぐさかりし荻の上風
名ウ
秋淋し猫のあくびに詠わび
帶引ずりて山の端の雲
葛城や湯女の姿を思ひ初
夜るの契りもかゝる石の膚
白なめしくゝり枕のうき別れ

銀坐中ヶ間にかねしかね言
肥後讃岐吉野唐し花の皃
世上の笑ひ大和山城

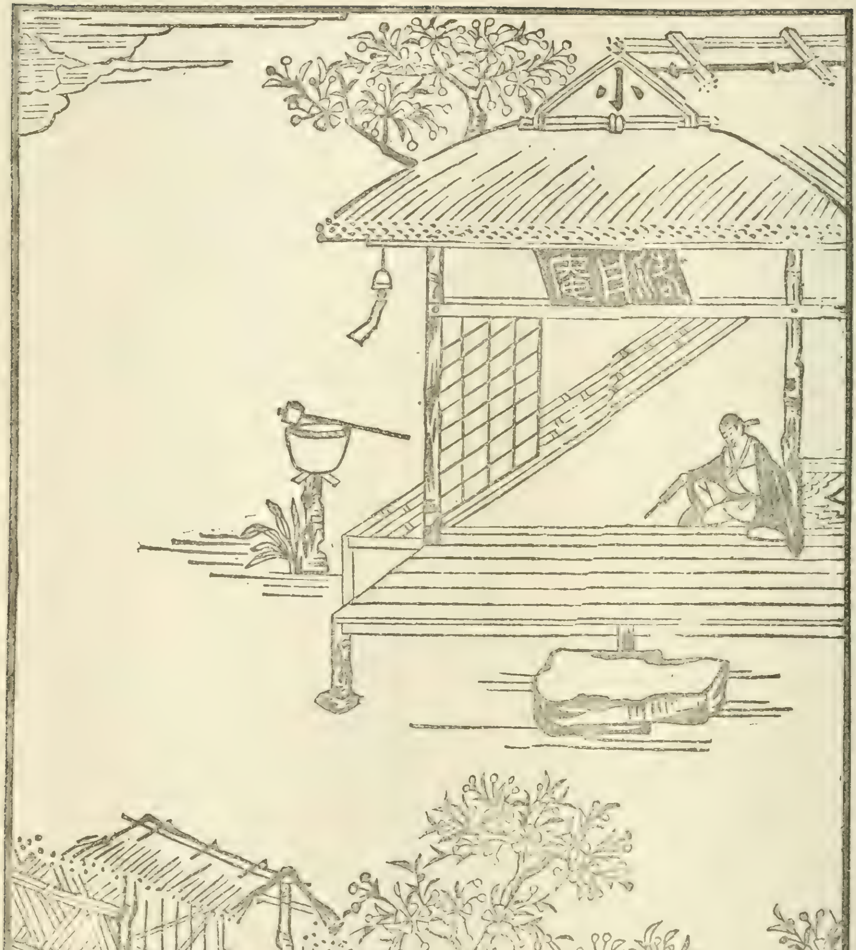
誹諧

庵櫻（いほざくら）

上・下

西吟

横　　庵



（諧　庵櫻　上）

西吟

やさしからぬは來ぬのみぞ
作にとはれむ
庵櫻

されはこそ人のけ

急いで見む三里一屑櫻塚
西山 梅翁

むすび華やとても渡世を糸櫻
法橋 維舟

糸まきや柳こきまぜ櫻づか
伏見 任口

爰ぞ万句誹諧名所の櫻塚
難波 西鶴

華の性やあらはれ出し櫻塚
山崎 梵益

高き岡に我馬玄し夕櫻
伊丹 宗旦

道とはむ西吟櫻ころまつ雨
池西 言水

よしや櫻爰ぞ末世の詠塚
小西 來山

櫻塚や等類くられて歸咲
青木 友雪

夜あらしや彈仕合山櫻
始雪軒 星山

榑おもしろゝ仇櫻山の陰
松井 櫻花

ちご櫻いづくに小刀をたてぬべき
藤原 貞因

櫻塚こゝろの餘華をみせ給へ
西田 久任

こゝろなき柴阿爺つらし山櫻
安平次 幸方

會もとや櫻つかねし万の句
池田 宗賢

ひらく開や狀箇つま戸櫻塚
南部 梅朝

松乙女や粧ひいかで櫻塚
宮戸氏 一平

更也吉野靈驗時得て櫻塚
伏見 西波

酒のみやよし足曳の山櫻　池田 西舟
夕陽おしからん櫻木の間の落月菴　同 來雪
月影の法師が植けむ櫻塚　大坂 泰春
大連衆華や物いふ櫻塚　多田院 月山

櫻塚由

其叢烏之神社奉納之櫻ノ万句、屏風繪馬に鏤ぬ。しかはあれど時を感じて爰ニ略ス。

比待えたる櫻狩〳〵
落月庵の春を見るべく

やよいの廿日あまり、上嶋氏の野也といへる隱士、予が誹の吟友なりし、今迄波津に靑嶂らぬと身と成て、梅のやどりを求む。是囉々哩の鬼貫也。此比古里へ暫く歸來ぬ。幸我も世に暇ある身になれりければ、落月菴の春に玉鉾の道をおなじうして尋きぬ。誠に櫻といひ、名ある作者のこと葉の華を咲まぜて、右流の都にもおとらじかし。

華はちるをうし耳に手おらん名の櫻　森本氏 百丸

落月菴

けふの今朝夢をやぶり、護山寺を心に詠。鳥の鳴聲やゝ履して、あはれ好犬の蔭戸を敲く。あらまほしき所に金玉を得たり。素性うつゝに來るとも、うしろを見せてさりぬべしやいなや。まつた囉々哩の隱士、去年の已來は坂-陽の窓に時しらぬ雪を挑け、夜終卓-机をならし、朱筆に暇のなからんに、いま此時のともなひ、舊友來を潤せり。蕨ほらんに僕なし。せめては名殘る爐邊に藥鑵を動かし、ひつきりまくらひとつふたつ、さあ〳〵一句のあらんかし。

隣國櫻南朝の跡見にいらむ　囉々哩 鬼つら

二木の櫻に華あり。華ちらずして實を實のれり。玉は露をからずして何の中に照ス。あら珍タル哉やな。予は去年

の春誹を狂哥に葬リ、寂々として腹に其世界なし。今日戯れのあだ櫻に我亦誹を潤リ。囉々哩が哥の父母は此櫻ならむ。

落月菴

三千世界は眼の前のはたらき、吉野の春を此山にさかせたらんは、哩隠士の口にやあらん。我も其香しきをかり、夢の行脚に油單をかざし、雪の越路を夏に見む事を、屢〱ねがふものならし。

三吟

牛くろし郭公遅し越の山　森本氏 百丸
信濃は蠅の馬埋むらむ　鬼貫
耳濁ス食を半の眞ー砂川　西吟
しばらく籬に蕨かなぐり　百丸
一ッ三ッ雉子の卵タマゴ月迯て　鬼貫
霞路遠く石原の里　西吟
笠に宿からん旅法師雪に暮かゝり　百丸
犬にやぶるゝ野鼠の岡　鬼貫
草のみか松もきのふに痩ヤセを見る　西吟
妹にほれて氣はかるゝ蘿ツタは　百丸
月は我屋に被カツギつけ來て耻テ歸ル　鬼貫
是までの秋これまでの世事　西吟
一ヒト鴉何をおもへるつつくりと　百丸
木の間がくれの半ハン鷺サギを見る　鬼貫
哥に詩に心を碎く計哉　西吟
羽織を墨になま悟る僧　百丸
袖洋華醫者なき里は欲ヨクや喫　鬼貫
鬼門に歸る鳥までを憐む　西吟
名 賢と愚と高ー山霞み海蒼アヲク　百丸
むまれぬさきは目も耳もなけれ　鬼つら
雷ー電は耻を抓ンで雲に入ル　西吟
祖母の白きは業平の闇　百丸
夢更に枯ー木たつ野の女郎花　鬼貫
告ある佛月の庭ほる　西吟
物とりめ露の世消ぬ誰タレカ見し　百丸
かぜにそゝけず岩おのれたつ　鬼貫
住むとやは蝙蝠ぎらひのいふならん　西吟

鎮ー守苔くち蒋(コモ)枯(ガレ)の池　百丸
めづらしき古錢を申おろしけり　鬼貫
童子あつめて雨を日和し　西吟
眠ー藏の紙帳が窟(イハヤ)なまぐさく　百丸
豆腐にやつれつながるゝ猫　鬼貫
青天に鶴のあそぶを笑ッあり　西吟
仙人小遣玉ー案に記ヶ　百丸
きのふ咲キけふさき。落華も枝に歸ルかと　西吟
目はすぎ夏も耳近き宿　鬼つら

落月菴

華飛て錦のごとし。作飛て遊ー谷に踏かぶる。梯の眞中に翼をやすめ、畿の濃粧三十六句みてりければ、夕陽影ほそく疎ー牖かぜをひて灯なし。やみの鄭躅に陰をかり、今宵は華の下ぶしに、いまやうを語りたまはんかし。

季不同

鮓まつ夕は寂し蕗の雨　也雲軒 宗旦

晝折し卯の鄭躅や大坊主　森本氏 濁水

谷神不レ死

鉦鼓死なずや谷の捨菴かんこ鳥　岡嶋氏 猿風
華の滅度尺迦や來ぬらん吉野山　嶋之 青人
市ー中に牛啼て春けしきャリ我獨リ　小西氏 馬櫻
御忌の時留守せし下女や華盛　上嶋氏 鐵卵
櫻咲比鳥ー足二本馬四ほん　上嶋氏 嘿ゝ哩
道かへん吉野の華にもぬ若葉　森本氏 百丸
ゐらまれて毛虫浮世の嵯峨野哉　古澤氏 鸞動
白魚にすくせを耻む憂女中　岡田氏 酒粕
典藥や駕籠ヨリおりて華茴香(ウイキヤウ)　鹿嶋氏 貞喜
夕良や青き男の屋根葺る　木村氏 鶯助
我妻や寢ごき夢うつあだ衣　北河重氏 好昌

奈良にて

いかにちらん塩引にせし八重櫻　佐尾氏 人角
松に咲ク藤は角なき質かな　森本氏 蟻道
杉菜原の月しられけりその原山　同 棘道
鼻の赤き女ゥ來つむ茶ぞの哉　同 泥水

天も華に瓢箪が恨捨しにあり　石津氏 三澤
作を賣ル詩にかへて見む芋の月　木村氏 放言
都址たしれ富士は櫻にほとゝぎす　猿風
卒都婆こけ樒は枯つさくら寺　青人
こけ落て痛けり處に白躑躅　馬櫻
祇園の櫻妹背やむかし物がたり　鐵卯
雪で富士か不盡にて雪か不二の雪　囉々哩
髮すぢや寺穢すとも初根芹　百丸
葉櫻や祖母散のこす娘茶屋　鸞動
年越ッ世におとろへし老の鰤　酒粕
春日野の夏は佛の木乃伊哉　貞喜
岡づとや心に畫ク富士の雪　鷺助
鰒を煮て尺迦の賣價を知ル世哉　濁水
我覺て河苴醉る澤邊かな　人角
夜咄しの豆腐は人の火串哉　宗旦

上巳

海かれて網に餠ひく國青し　蟻道
啼ぬ間は耳かしがまし諫鼓鳥　棘道

誰が言し淡盛寒き雪の暮　泥水

題二猫交會一フ

升落し中避る猫の別哉　宗旦
秋澤の詠大根あらひ鷺立リ　同
關東べいに飾蛸みせけり御食出　濁水
鯰菴ふるや月もれとての髑髏　猿風
よしの山華に上髭咲にけり　青人
白魚いだき鷺の姿はねだれけり　同
おもひしれつれなき娜たけ茅　鐵卯
待櫻都は物が問やすし　同

谷神不レ死

秋のこゝろ咲ぬ華見つ山櫻　囉々哩
飢つらん片山里は蛸の飯に　百丸
鷺トホン碁に工夫やむ春日哉　同
旅芝居去年見し跡や華菫　鸞動
見ぬ人のため鐘木手おらん山櫻　酒粕
緣遠き狙箸疵や猫のつま　貞喜
蜂の巣や風鈴に名殘るすて菴リ　鷺助

善導大師胡蝶とるらん菜の花に　人角
盗人の足荷じけり竈馬鳴ク　蟻道
彼山根賤が追剝グ太山哉　宗旦
散ラばよしや耳をさらへて暮の春　猿風
際門論剃貞の花の曖びけり　濁水

上巳

杵草臥げに蓬が臼の朝枕　青人
飛子見せて竹の子おらん奥の寺　百丸
慧清の時なで付初つ陰清水　鐵卯
莵にも耳おれやある雪の山　囉々哩
蘆根芹はみ鮮しばしの命哉　鸞動
姿美にし其聲いやし雪の鷺　貞喜
麥笛に妻とふ牛の里野哉　人角
虫ほしや華麗浪人蛇のうろこ　青人
小男よ武藏野茂る草の富士　同

重陽

菊折て仙が生膽とる日哉　同
山賊や旅僧あやまる岩紅葉　百丸

垂レ釣者不レ得レ魚

蜉蝣浪涼し我レ泉水に瓜つらん　同
かみさそや厚木つれて菜の花に　同
昔おもふ耳ふさぎけり郭公　鐵卯
痩猫や木槿がもとの青蜻　同
秋の暮十露盤の粒いざ〱せり　同
隱し衣裳ほさで土用は暮にけり　濁水
くろんぼや見ぬもろこしの煤拂　同
海月やぶれては。飯蛸篦でつぶすべし　猿風
やれ蚊屋を延喜に民の恨み哉　鸞動
楞枯つ木履をゆかり郭公　酒粕
窄人の親。鵙なく比をうき世哉　百丸
質藏に執心うたん小夜衣　青人
定家の醜ふる客や冬げしき　宗旦
鼠の糞山ほとゝぎす湯酒しほ　同
鷺一つ人は落葉の木玉哉　人角
年毎の雪やかさねて入子富士　貞喜
郭公楞の竿に物ほさじ　鐵卯

唐がらし奴豆腐や崩るらむ　青人

毛蒲団や木々におどろく手水　蟻道

荷葉動ク是さし鯖のあそぶならん　好昌

早蕨に山家は遅き八百屋哉　濁水

題二郭公一

夏初て残リの雲を詠けり　猿風

祖母は寺へ祖父は餅焼ク秋暮哉　青人

秋かぜに連理物いふ木ずゑ哉　鐵卯

梅遅し高野の塔は赤けれど　百丸

ばせを原唐人の賤に刈せみん　鸞動

黄昏ば郡内つらむ藤の海　泥水

酒に寒苦鳥なし茶に待暮に猶ゆかし　人角

狐ざれ水鶏をあだに聞夜哉　蟻道

人日

賤に餅つまし我は若菜を心哉　宗旦

敵討チ蚊帳を聲の闘路哉　蟻道

賤の子が寶くらべや玉かぶら　青人

秋さびし山水の繪に物荷ふ　同

新樹

のこる空古葉をあらへ橿の雨　百丸

老母ひとり比は富けり初茗荷　同

酌おりて閑居氷に目覺けり　鐵卯

ゆふべ夢に富士はちいさき冬野哉　同

はいふりや歐陽公が帷子のきれ　濁水

脚-布洗フ下女の耻なん櫨垣　同

春日野の尺迦見ぬほどの茂リ哉　宗旦

鈴むしさいへる風鈴に

聲に繋ル鈴むしの哀殘る哉　棘道

山家年暮て節切ル斧の木魂哉　鸞動

猫草に隱レ蜩まつ間の有様也　猿風

西瓜の聲刃の調子と聞とかや　酒粕

瓢簟で鴉おさえし雪野哉　青人

雪中之白魚

春宵夢短し宮-女晨を粧ヘル　百丸

風凉し遠里の歸-帆枯槹　人角

まねく也狒々にはあらぬ呼子鳥　濁水

我にほれて嫋やうらむ澤根芹　蟻道
茄子漬松さへあるを浅みどり　宗旦
捨箸や筏をながす紅葉狩ッ　三澤

落月菴の雨な聞、戯ル

茅-檐雨すごく芭蕉の琵琶を聞夜哉　鸞動
打鉦に白魚たんだよはりけり　貞喜
ふくれ坊主いかにとしても藥喰　猿風
小坊主のひとり泣たり華樗　人角
大坊主豆腐破けり夜半の霜　鐵卯
有様や猫が世中置火燵　青人
蚊に埋ミ犬ないて乞食涅-槃の姿哉　百丸
夕皃をやしなひ得ては馬の父母たり　同
竹の子腹に生て。山寺の茶に時宜しけり　人角
下女帯解ケ童めが文匣年暮けり　濁水
道野邊の松を梨見るすて草鞋　鷲助
礒山は鰊に散し華の跡　蟻道
苔やきや蝸-牛の世をし美る　宗旦
ほしはせで箕の袖や土用ぬれ　囉々哩

宮-樹陰凉し蟻轟かす蝸-牛鉢　鸞動
達磨生られて紺何となく髭むぐら　猿風
白魚や白繻子化して沉み舟　貞喜
人の命や仙-家にも鰒を賣ならば　鐵卯
捨し世は雪の馬士見よ草枕　青人
八千度朝皃と咲キしめす哉　酒粕

夜るのすがらに語り盡して、又余所の里の作意な、あるじの老士にさへば、

去その秋、洛陽に徘徊新玉津嶋に詣しが、其人愛藝しく問よれば、

此千世を今日の馳走よ菊-枕　季吟
瑛を味ひ家づとの月　西吟
暮遠み霧の禅山刹那して　同
たつ夕鳥にはやむさおとし　季吟
もとつばの錦ほつれて散リ残り　同
境-地やさしく庵リ定めん　西吟

六條の道場にまかり、暫し京内詣りなどして、此ごろの御作はさい

へば　如泉
萩のちる男若衆に成にけり　西吟
曉-露夢なく脊をとをきく　同
世の榮街に月の占(ウラ)見せて　泉
河豚めづらしく秋の江に釣ル　同
ぬぎ罣(カケ)て羽織を風のわすれ松　吟
私-領堺ひて長(ヲサ)の驚ク

其秋亦　湖春
寺こそ秋弱(サハ)檜(ラ)割(サク)香(カ)の口おしき　西吟
芭蕉は松の聲を惡(ニク)めり　同
現見る枕に月の祟(トガメ)して　春
矢場に鹿の母の嗁(ナケ)りし　同
此民にこの殿仁をおもへかし　吟
愚の里嘷入日色こき

四とせのさき廻國さて、野庵に雨を明して　言水
雨-樺松を呼ンデ。櫻茶に咲ケ初喘し　西吟
臭の雲路は京の醉(ヤマ)醺(ブキ)

駕籠遲し入日や影をおしむらん　同
清水のむ間に月ぞにごれる　言水
蛇(ヘビ)きつて悢かへすか漣れ浪　同
假の草臥羅(フイ)におどろく　西吟

竹清軒の好士さ伴ひしに、玉ぼこのいひすてさて、卽興　幸方
道野邊の梅に夕の二里遲し　西吟
うしの蹄に春の雨きく　同
一ッ庵(サウノキ)僴を剃(ワル)霞して　幸方
角ひろふなる石の朝-水　同
數螢なれば光を隱しかね　西吟
艶-書見殘し月を驚ク　同
萩-垣に昇たる郎(ヲトコ)の諷ひすて　幸方
しよぼ〳〵雨の蘭のつれ〴〵

こぞの秋、莚より西の昵-近なまれきしに、狂句さて語られし。　醉翁山 六水
朝皃を妻とつ明(アケ)に見初けり　西吟
連-理を笑ッ萩の一もと

鳥の糞間違の露を雫して　同

浪もる月も脫池のなど　六水

それのとし人とる咄し耳にふれ　同

哥は不思議のまこと顯す　西吟

季不同

古池や蛙飛ンだる水の音　芭蕉翁 桃青

名月に

あかで入ざ今宵を三ヶの月圓し　北村 湖春

しらぬひの富士は駿河の落葉哉　伊藤 信德

ほとり哉動く柳に魚迯ず　小西 來山

賤心なく秋の夕を殺す哉　村上 如見

野釣瓶に螢華咲ク夕哉　武村 万海

塩鯛もむかしの沖津五月雨　始雪軒 星山

杉檉風ゆるし我に世間あり　猪名野々士坂上 素風

青葉の櫻白き雀のひと羽哉　安平次 幸方

禁酒寺の櫻は誰が爲なるぞ　隣翁山 六水

春は野にするどき松の心哉　牧野 晴嵐

牛の尾にいが栗ひろふあらし哉　藥師寺 昨非

清水ゝゝ草の蘩がぬ小石かな　鳴瀧 秋風

我窓に誰ガ秋告て蔓咲し　瓢乎軒 無隣

何作りや万事に散じて一輪華　宕利氏 可尋

檐折ッて僧痞をうる卯月哉　猪名野々士坂上 千門

春なれやおのが影ふく野もり猫　東山田住田中氏 吟鶯

雪妙に富士をひくけれ戻リ馬士　鳴村住村田氏 生水

深庵の碁笥の音くやゝめ山櫻　吹田觀音寺 雁不

汝捨ずや蕨刈乾スおくの庵　同村太田氏 退耕

白むくや火燵に懸ておもひの富士　藤原 言因

小僧しばられて水仙今朝を咲にけり　吹田住尾氏 卜滴

無佛世界柳にあらんにほひ哉　同山本氏 無一

白羽降テ好事ゆめみん雪の竹　神峯山 松好

霜の蘇鐵京に女の富士見たる　上宮天神 玄月

雪の杏庭鳥埋む夕かな　東山田住田中氏 吟可

白魚に朝寝の女質なし　茨木住樋口氏 嶺金

解にけり雪の水仙谷の庵　同氏 隆貫

汝母とはん蕎の虎杖牛瘦し　同吉志部氏 定之

夜あらしに狐ひろはんむら紅葉　同樋口氏 白笑

梅が香をふき矢にちらす詠哉　同樋口氏 東行
人は霧魂を得むほとゝぎす　同吉志部氏 梅虎
庭奴こゝろ有たし暮の藤　生嶋氏 猶水
むろ咲に易者(エキシャ)まどへる朝かな　小畑氏 和泥
隱士甲斐なし堪ズ紅葉櫻山　長嶋 雷吟
國に雪なき時は。簾を捲て懷手　嶋上郡 白主
別れけり枕わびしき蚊の初音　宮戸氏 一平
河豚汁や上手の鑄もじ恨しき　尼崎 梅朋
淀過て舟漕いびき夏の空　同 雖愚
若莨若盜人軒に泣む哉　同 正利
梢うらやまし蜘が樓閣夕涼み　尼崎 網子
二十五筋軒をめぐれる時雨哉　同 梅悟
盃をながす木葉の芝野哉　江戸 耕雲
雪くろし不二はあやなし今朝の梅　同 蜒毳
蛇(ジャ)の鮨や尊(ミコト)料理の神ー集　鮎川田村氏 其次
明がての月おそるべし蛍の息　同所 司如
かき餅や二たび照ス夏火鉢　小濱 遠文
薺たふせ春のひまゆく駒のすね　昆陽 一枝

今朝を名乘る衛士が秋こそおかしけれ　川西氏 木平
水天をしつて聲ヨリぬれし春の雨　岡 好水
足跡に鹿喰(ハミ)くやむ雪の山　嶋村住村田 睡鬼
置綿や下女が額の雪げしき　嶋村生ぶ 母
里蜜ミ禽ー獸華を蹈む哉　森本氏 吟鶴
むまれながら尊き物や佛樣　藤原 貞因

宥利氏の好士、いくさせか哥道・誹林にこゝろをよせ、老の寐覺、雪の朝・華の夕をたのしみたまひしが、愚庵の櫻にやたてをならして

いくとせを詠置にし櫻木の
華はみさほの色香たゞしき　可尋

落月菴を

詠れば雁の一つら落るかと
月をよすがの庵ぞ秋なる

岡野邊の長を

とめる世の駒のあしなみふみ馴て
市人出る岡野邊の里

（はいかい）庵櫻（下）

華は上苑に明かなるをもつて、寄二ス別境一二

おむろの夕陽に

華科なしあたまから肩へ蔦の糞　猪名野隠士收上 素風

山門あかくけふも華こそ悲しけれ　鳴瀧 秋風

華に横遊ル晩-鐘蛾の待ならん　吹田 雁不

花の千枝にほひは稀にもなんとして　鹿島 宗故

かいしきの花の信析や吉野山　宇和氏 可尋

初華の木玉は琵琶の夕哉　田中氏 吟鶯

風鈴高し藤行華くむ萃川　太田氏 迷耕

筆華に白し。獨戀なき心哉　村田氏 生水

巷ル世の埃や乾かむ花に雨　荒木氏 吟鶴

汲留て鏡や華の苦わらひ　樋口氏 東行

雨あつて雨なし。善惡いかに枝の花　吉志部氏 定之

餘所の盛り我ガ閨おもへ華枕　樋口氏 隆貫

吸筒に醉るか華か一まくら　同氏 嶺金

華の瀧世話けす水の詠哉　尼崎 椿朋

酒樽や都の華を遠限鏡　同 雖愚

有馬山野郎華なき夕哉　長 雷吟

華に來て人に二十を嘆かな　牛島氏 猶水

一千金華に貧土をゆるす也　梶津氏 昨夢

新月の斧にちるらむ華のけふ　紫月亭 西吟

季不同

山櫻乞食に相撲とらせけり　言水

哀にてやさし竈馬吾木香　信德

青葉楠葉時雨を背負ふ女哉　幸方

わびしらにふくべよなりてくれねかし　素風

神鳴や樗にさけて郭公　千門

若葉籠ンで心喪に入妹背の蚊屋　秋風

橋賓-客の夢を狩らん眞夏川　雁不

鳥をうらみむ求食すてられ山櫻　吟鶯

時に替て我柴ぞ華樽酒　生水

うた人よ五月雨木履雪ならば　可尋
佛堀出して櫻接らん茅寺　退耕
梅にかこち後家の空吹夕雀　梅虎
誰ガ木食里の稻垣猿荒し　定之
遲櫻臂にゆかしき雨の里　東行
齋ー宮やかせにとゝふ車百合　隆貫
仁厚く國寒からじ茅ヘ原　自笑
浪ひきうして今日海高し籠蜊　嶺金
葉櫻や今年の信祈二度の樽　和泥
華隱士山彥吟をしらざりし　昨夢
初硯紫立たる雲の細く　言因
あくび千里行や待夜の時鳥　宗故
歸らん事をわするゝは小娘涼し木陰茶屋　六水
うの華や郷あやまる牛ー膝　猶水
飯蛸は樏子なんめりわにの口　共次
たてりとは栗ー散畫ク色野哉　司如
かぜの梅大庾嶺も近かりし　松好
古家や樗うち伐ほとゝぎす　素風

木葉降ッ鷄頭つゝむ朝かな　信德
獨活はやし錦ひろはん事三分　幸方
盃なげむ櫻もちれば男なる　同
蓬萊の火燵猫の不盡見る朝哉　千門
松に朝皃万ー鏡心を懲す哉　吟鶯
夢を帶し兎は菌狩ルならん　雁不
埴屋覆ッ櫻きらぬ人鄙におし　卜滴
美女むれて櫻嫉ー妬の色なせり　無一
名にしをはゞ待華とはん葛買ン　退耕
我とわが佛にくし田植賤　万海
詩ー囊に栗を拾ひ豆折ル哥の曲輪哉　信德
海遠く障子を冬の寢覺哉　晴嵐
酒桶や今宵の月の飛鳥川　星山

上巳

世は桃の獨ッさめたる蕗葉哉　幸方
牛を賣ルもの有朝皃を植ル人あり　素風

土佐日記の比なかりて

世の哀哉のこる松さへ河豚の塚　吟鶯

夕陽のうつるせ永し八尺計ﾘ　雁不
松獨ﾘ月に吟ずる庵風鈴　同
猿馴ズ老翁菊を植る哉　同
朝良華の朝夕はしほみ哉　千門
立山や行燈つらき夏の虫　東行
日は東一鏡西にほとゝぎす　同
世を捨て鉈(ダ)にしられむ松の蟬　定之
雁瘦む時人待て芹歸るか　同
菊水や陰の柵みかぜの罪　隆貫

落月菴ノ

落る月菴にならひて雁艶し　同

荒たる宿の寂しさ、一夜旅寢して

雨さへあるになどや木槿の凋(シボム)哉　幸方
茄子色やさし下女に爪木(ツマギ)の哥聞ン　西吟
新まくら萩のくゞりに犬礬し　梅虎
朝良咲ス大角豆に賤し庭の藩架(マセ)　退耕
猿やせて李(スモヽ)よ妻のおもひ種　同
屢しとて我朝良に井戸ほらん　西吟

露なるや歸ﾘ躑躅の陰ト冶　湖春
初ほとゝぎす寢て居ﾀ人に賣ﾃ來ん　幸方
酒買て夢吹荻の夕かな　同
かぜは外也鞠を紅葉に女中幕　雁不
竹の柱ゆふがほ耻を葺ﾙかな　定之
二十三夜影ﾖﾘ遲し郭公　同
此たのしみ長明にまけじ蚊屋方丈　生水
僧は詩に戒やぶる哉二星の夜　同
內鼠いかに啼らむ山櫻　言因
雨露の酒に紅葉つぶれて松靑し　其次
さし鯖は惡女の妬(チタ)き夢路哉　定之
水鷄(クイナ)無心にして寡(ヤモメ)驚ク幾夜哉　同
柵で漁父が傅ﾘの紅葉かな　同
蓮は淤泥人は朱(アケ)さく心かな　東行
笛なくて童貴し鬼薊菜　同
釣の海士たゞ我獨ﾘ庭の月　同
松の木や宜禰は寢て居る冬社　素風
梅華新月をにくめり。猿麥のこす女郎花　秋風

月を弄（ロウ）し櫛笥乾ける望（モチ）の朝　西吟
後家鴉梢の柿をうらみけり　六水
蝶行や龍禮碁石の七八　幸方
年梢人にあらしや暮の鬚　千門
苅萱を我醉竹ぞ宿の菊　湖春
我屋今干菜を編ば寢もならず　素風
心ある杣くたびれむ今日の月　吟鶯
雪溪を埋み。今朝茶にあつき歸サ哉　生水
夏の夜や寡（ヤモメ）に長し卯酒　退耕
六義とは枝條にやさし秋の蟬　隆貫
むら翼菜は霜枯て城遠し　同
夕皃も古井戸絢（アヤト）ッ蚊遣哉　同
哥讀む紅葉にうとき末小河　東行
美-婦の櫛男鹿紅葉に欝（ウト）からん　同
埋火や淵にあそべる魚ならん　同
梅散て誓紙の耻辱窓深し　梅虎
夕皃やむかしを笑ッ鞠の庭　自笑
幕おほし風は櫻を恨むらめ　其次

夏清し口には西瓜目には不盡　同
曉-露鹿啼て垣根を夢の盛ッ哉　猶水
月こひし蟬にくし。不破に假寢（カリネ）の夕時雨　可休

さし越に

婆娑にかえて鬼女獨寢の節分哉　生水

重陽に

わた入の菊人匂ふ今朝たらん　晴嵐
菊のけふ貧家玉しくこゝろ哉　西吟
臺更ヶ紗籠に虫の様したる　雁不
谷の雪塵-埃あふぐ隱士かな　定之
雪の松盧-生が朝うらやまし　東行
山-河日暮ぬ沅-湘鮎に瓢かな　隆貫
罪なくて國くらからぬ螢狩ッ　梅虎
芹分て老をうらみむ月の跡　自笑
大雪さぞ干鮭賣ッのおもしろからめ　其次
雪の山居いとふ心も華かな　猶水
歸-雁問れていかに答む都山　雷吟
黄楊の小櫛高野に秋の夕哉　和泥

業つらく雪見ぬ里や魚の店　　生水
軒朽て梅に生死の塔(ツカ)柱(ヘ)哉　　可尋
五更闇して鳥の巣嘆ゲ戀路哉　　隆貫
夏の夜も午(ヒル)眠(テ)に更(カヘ)て等し哉　　定之
霜遲く鳥ものいはむ蕪狩　　同
やぶれ蚊屋寢ぬに目覺る郭公　　吟鶯
𧎚(ユガケ)もて謀(ハカリ)かへさで綱が秋　　千門
光遍く枯柳にくし明の月　　東行
舟よなふ我古-鄕のほとゝぎす　　隆貫
なき海を石にしらせり庭の燕(ツバ)　　同
玉-淵の夕。螢-火-灯猜(ソネミ)けり　　同
風くれていづれか奪フ松の蟬　　西吟
明ヶ恨し世は朝良に父母の恩　　昨夢
-鴉は-鵜雪のからすは鴉哉　　吟鶯
他の目詖リ鐵子食る雪の咎　　定之
紅-葉に菩-提をいそぐ心哉　　東行
紅葉植て古-鄕をおもふ人し哉　　隆貫
かぞふれば小ゆびやひらく年の春　　生水母

おもひあれば茗-荷に嗔(シン)噫(イ)顯セリ　　嶺金
風度生雲にや入むもぬけ蟬　　昨夢
死出の田長梓にかけてきかむ哉　　網子

ひさ〳〵にてまいりあひ、すぎし
むかしを語りて

奈良茶燒て野中の清水濕(スレミ)けり　　言因
風蘭を射て時雨計る朝哉　　西吟
藥ぐひや子-姜が臥所危かる　　正利
詠むれば雲が囀る夕日哉　　椎悟
雪を寢ざめ女郎鵲ゆびに生出し　　隆貫
枯萩燒て友來む庵を恨哉　　定之
さし櫛やかぜに散とも架(タチ)蒲萄　　西吟
夢かれて初秋犬の遠音哉　　同
仙の裳は時雨にかへぬ心かな　　雁不
岩橋や姝(イモ)は螢をにくみ狩リ　　卜滴
櫻枯て鐘木恨るゆふべ哉　　無一
和哥をたもち爐に現し筆の梅　　定之
戒に御僧愚のあふぎ哉　　東行

風砌て秋としらする木賊哉　隆貫
猫悴る遊魚跡見む礒枕　梅虎
簀子くちて蚊の聲嬉し戀路哉　自笑
と云おかし馬よりもなを紅葉鳥　其次
薄氷を踏ンデ。洗濯藍し渺の紋　司如
寛永を信ぜむ。少者を懷て朧月　可尋
塵埃に富士讀リけり雪の朝　嶺金
僞の繪書平砂の時雨かな　耕雲
蛙啼て誰ガ朝の汨羅哉　和泥
草莖や世のもとゞりも冬の山　東行
夕釣瓶邪見おどろく夏野哉　吟鶯
田草颯フ暮の深山路宿からん　退耕
き綿ふきて婦が桑を賣ル聲もなし　無隣
木葉降リ時雨を拾ふ目籠哉　耕雲
祖父植し松は茶を煎ル庭落葉　素風
塵とりに身の色こぼす雪の羽　星山

色をこのむ女は佛閣にさたなし。執着の燕は過去來タズ

婦人姤ク雨の燕の夕かな　西吟
文書のこす陰の櫻井　吟鶯
篠裂に芹の遠里舟うけて　雁不
跡追來る狗の足ずり　ト滴
月疎ク野牧の駒の世を懲ん　生水
栗賊まれて民脱を苅ル　退耕
藩架朽て朝良惜む心こそ　執筆
佛つら〳〵國を憐む　西吟
出るとも客星影を耻ぬべき　吟鶯
宮女別れを琵琶に訶ヘル　雁不
神ならずや誰ガイし雪の履　ぼくてき
芭蕉はかれて魄を止る　生水
石筆よ名哥ひろふて歸梟　退耕
賤照ル月の朝に榮む　吟鶯
我レ池を狩ズ田面の雁に塊せず　西吟
荻の友ずり手本追ぬく　ト滴
雨遠ク瑯の華の恵ムかな　雁不

夢の霞路草履取からん　退耕
角をふる内義に春はなかりけり　生水
御(ミ)寺を語リ檜(ヒノキ)送れる　西吟
友を醤朋を蹴て啼クむら鴉　吟鶯
舟に竿くちきしに松ふく　雁不
城をぬけ草摺雨の血をしぼり　ぼくてき
灯くらくまもり傘き　生水
我獨リ納豆を河豚にたのしまん　退耕
斧ー朽の仙にうらみ殘して　吟鶯
石の火の屢しを讃テ落書や　西吟
日夜流ー水もとに還(カヘ)ラず　ぼくてき
月白ク墨はおのれに丹赤ク　雁不
替(シイ)たる翁菊を香に折ル　退耕
笄(カンザシ)を娜にほらん秋もがな　生水
餘所も戀路か猿にきぬ着(キ)せ　西吟
雨の夏星のふたつの哥讀テ　吟鶯
來ぬ世のむすび過去の愧し　雁不
華に飽ズ孫(ムスコ)の末を實(ミ)植けり　退耕

誹ヨリほかの春ぞすくなき　生水

竹清軒幸方は、おなじこゝろの友ひさりふたり、其外若木の櫻を跡加て、聖廟奉納千句の志しありしに、諸願滿ぬさて、予に見せたまひしを、たゞに打置んも本意なく、此集のしりへに第三焉ばかり、筆を染るならし。

天滿宮奉納千句　前書略ス

第一　梅

梅久し石の髭見る天滿川　安平次 幸方
陽の岸根に植る松の實(ミ)　ノ水
降雨に蒔ぬ蛙の聲つれて　孤舟

第二　燕

濱操(ミサホ)藏建つらん友燕　高野 市太郎
氷開けて斧の數聞ク　小四郎
今日も暮虎杖(イタドリ)折て山陰に　權九郎

第三 華

水に畫ヶ華ぞ汲なる朝手桶　中村孤舟

たそや柳の獨リ魚釣ル　幸方

村霞輕き車の砂鑽て　市太郎

第四 早苗

田植賤公家にみせたら哥讀ん　幸方女

茂みの草の維ぐしろ馬　孤舟女

騎二ッ日のちり／＼に寢に行て　ノ水女

第五 夕涼

礒涼み篁に酒買夕ざれや　ノ水女

明やすき夜の月を積ム舟　幸方女

浮菱に浪の螢の宿かりて　孤舟女

第六 一葉

難波市玉や求めむ一葉舟　孤舟女

髮なる露をはらふ蓑鷺　ノ水女

彼岡に秋吹かぜの音肥て　幸方女

第七 雁

木わた干て初雁寒き雲井哉　安平次小八郎

(殘ゥ)幾重の霧にくろむ里長　市太郎

影疊て五手の舟に月もなし　小四郎

第八 月

行風の月手毬つく波路哉　安平次權九郎

葉廣の薄しばし橋掛　小八郎

鷄頭の形に紅や照すらん　ノ水

第九 雪

冬櫻雪を皺なる軒端哉　中村小四郎

あらしをかづく蛆の炭賣　權九郎

しなか鳥結べる洞の夢飛て　小八郎

第十 神樂

瀧そゝぐ岩を烏帽子や神ゝ樂　ノ水

庭掃風の霽笹ふる　孤舟

薄霜に痩ぬ山茶華ほころびて　幸方

追加 松

直な針でやよいの松の華釣らん　伊藤道晴

獨吟　　西吟

きさらぎの櫻よ鴉おもからん
　樫は尖に長閑わすれじ
素紙子も心裏を春の錦にて
　人なぐさませ渡世恭を賣ル
額の間の芝蘭に月はやどれ共
　鈴むし尓汝て音啼ざりけり
あたら秋聲ば美婦の髪赤き
　戀に目をやみ欲に銀見る
菩提山菩なめらかに諫鼓鳥
　散人飢て覆盆子むさぼる
藁を嚼染て詠哥を血に殘し
　哀猿里におどろきを啼ク
連枷に蛟の栖を荒すかと
　郡リ名主ガ夕陽の秋
沙汰のむすめ貴妃を欺き月黑し
　あふて逢ざる律を遠音に
華の木や紅葉の霜を樓に見テ

都なりけり宮古也梟
　ほとゝぎす耳に塩して歸リたき
　墳の恩は著荷生たる
閨開キ邪見の鍬は我をうつ
　却て厨子の佛ねだりし
二階住不盡武藏野を熟と
　叡慮の題に名をおしむ哉
魃やせん黎首正直の雨やせん
　暮ぬ李に三里泊りぬ
北隣こその浴のうるはしく
　藜の信祈戀なわすれそ
おもひあれば閨所に月の影ほそき
　琵琶に秋さび蟻の修羅ひく
斧を勵み蟷螂桐の葉を飛ぬ
　僧はいよ〱僧の道にぞ
余所ながら老母の土産に苧とへば
　麻姑の手おしき桑の苅柴
華の歸リ石に鮎くむ八十瀬川

後ノ夜おもしろく我宿の春

貞享三丙寅のとし
三月下旬

京寺町二條上ル町
井筒屋
筒井庄兵衛重勝板行

詠林

一字幽蘭集

三卷

沾德撰

夜錦・櫻川・信太浮島三十餘卷に、亡父風虎公のえらびをかれし誹諧の書なり。ゆたかなる世に、たゞ此道にあそぶ人日ゝにまさり侍るに、風躰うつりかはりて、先達の殘せるふみは古きとて手にとる人もまれに侍れば、俳諧はその功なきものとなりゆくを、今又道さかんにして古新ともに樂しむ。しかあれど風義・虚實の二つ侍るに、いづれを虚とさだめ、實とさだむべき句法なければ理をつくす事なし。一日沾德來りて閑居にかたるもたがはず。かれは先年岩城にくだり、此道にくるしみ侍りて風虎君の心をうけつぎ、予とおなじく道をたのしみ侍れば、みつの卷の大意をとり、古き句中にも今好む心に等しきを書くはへて、幽蘭集と名づけ侍る。げに此一意しらざる人は蘭艾の分なく、教をうけてなす事なければ優劣のけぢめもみえず、せんなし。これに教といはむは、天地の象儀・人倫の道・哀樂・盛衰・貴賤の辨・草木・禽獸にをよぶまで、詩歌と情をひとつにして、をのづから教戒のはしともなせる。そのゆへに思ひ當れる詩哥を、句の左に處ゝ書のせ侍りぬ。四時の變は露の塔の日かげに萠出るより、水仙の雪にかしこき色までをもらさず、俳のうつはものにして、蘭の香を蘭とする道をおこす物ならし。

露沾序

俳林一字幽蘭集説

沾德水子常好俳優之句、遂業之。邇來撰一字幽蘭集、需余于説。夫幽蘭也者應取諸離騷而除艾長蘭之意。我聞楚客之三十畹、恂不為少焉。雖餘芳於千歳、未能無遺梅之怨矣。斯集也起筆於性之一字、而揭情心忠孝仁禮義智始終本末等總百字之題、以花木芳草鳴禽吟蟲四序當幽賞風物併載而不遺、焉何有怨乎。又原斯集之所從來、前岩城之城主風虎公所撰之夜錦櫻川信太浮嶋此三部集、愁不行於世也、仍拔萃而彼三部集若干之句、副之古風時世妝之中、其花可視而其實可食者拾之、纂之以其左引證倭歌漢文、而

爲風雅之媒是編者之微意也可以愛焉從是夜錦不夜錦浮嶋定所櫻川猶逢春矣雖然人心如面而不一或是自非他謾爲說誰知其眞非眞是各不出是非之間耳至若世人多費新古之辯是何意耶想夫天地之道變以爲常俳之風體亦是然寒附熱離時之勢自不期然而然者也强不可論焉沾德水子知斯趣之人也爲之素堂書

佐々木文山寫

摽出引用之書　目錄

漢書

毛詩	春秋左氏傳	孟子	性理大全
楚子	莊子	荀子	陶節靖
揚子法言	文選	杜子集註	李白集
白氏文集	韓文	柳文	寒山詩
三體詩	唐詩鼓吹	唐詩訓解	東坡集
山谷集	張南軒集	二程全書	擊壤集
陳簡齋集	瀛奎律髓	聯珠詩格	古文前集
古文後集	朱子語類	陳后山集	千家集
詩格大成	氷川詩式	詩法指南	太平廣記
瑯琊代醉	文體明辯	輟耕錄	事文類聚
圓機活法	五車韻瑞	古今韻會	小補韻會
字彙	本草綱目		

倭書

萬葉集	古今	後撰	後拾遺
新古今	風雅	玉葉	新後撰
新葉集	伊勢物語	源氏物語	枕草子
榮花物語	土左日記	奥義抄	袋草子
八雲御抄	艷書合	月清集	拾玉集
長秋詠藻	山家集	拾遺愚草員外	壬生二品
顯注密勘	百人一首	詠歌大概	秀歌大略
明月記	金槐集	信田森千首	十六夜日記
草庵集	愚問賢注	松下集	老葉集
春夢草	百首部類	歌合部類	柏玉集
雪玉集	碧玉集	古今類句	一字御抄
日本紀	神宣大祓	類題	懷風藻
本朝文粹	續本朝文粹	菅家文草	菅家後集
和漢朗詠集	本朝詩英	羅山文集取說	本朝一人一首
史館茗話			

此外引用竺書唯譯字而耳故弗記焉

俳林一字幽蘭集

俳林一字幽蘭集 上

性 一ハ生ズル時天ヨリウル所ノ一箇ノ[illegible]理

木がくれて花の物いふいむこかな　風虎

得たるかな畑うつ男眠る鶴　露沾

耕牛無シ二宿食一介鼠有リ二餘糧一

くさも木も墨繪の雪のすがた哉　東金處士 生白

水底の石をうごかす柳かな　午竿

螢火を晝はいづくに池の水　光貞妻

河骨やつるに閉かぬ花ざかり　素堂

原中や物にもつかずなく雲雀　芭蕉

後土御門院御哥
なくひばり空なやたのが道芝に床たしめても又あがる也

ゆく水や何にとゞまる海苔の味　其角

西瓜なる蔓のちからよ草の糸　春魚

波こさぬちぎりありてや鵆の巣　楚付良

をのがはく泥につらなる田辛螺かな　探泉

夜錦 心にや花をさかせてねぶりの木　備中住 重安

炭かまのあたりに太る小松かな　近江住 湖虹

はな鳥に並ぶ柏の古葉かな　路通

神まつる卯月になればかみ山のならのはがしばもさつ葉もなし

性善の心を

折て後もらふ聲あり垣の梅　沾徳

心　一ハ一身ノ主君ナリ。善惡ノ二ツアリ。性ト情トヲカネタリ

神職となり侍りける翌年試筆

烏帽子着る心になりぬ今朝の春　白準

折〱にかはるこゝろや梅もどき　紫塵

情　一ハ人心ノタクマズシテ有ル處、故ニマコト、ヨム。ヨロコブベクシテ喜ビ、悲ムベクシテカナシム。

はげ山や心にふれる松の雪　自仙

をしまにて

夜錦 あらば價何かをしまの秋の景　梅翁

三井寺等覺院にて湖上月を

櫻川 なぜかへる月の景氣によるの波　季吟

尼になりてうづまさに住侍りし比

花をやる櫻や夢のうき世もの　すて（かいはら）

秋の夜や我と板戸のひらく音　岩翁

對客

君來たり宵より寢るも雪の興　遠水

何心つかぬに土手のすみれかな　忠知

さし木せし人は白髪かふる柳　岩泉

家隆 小山田の池の堤の古柳誰さしそめしみどりなるらん

にく氣ある男は勝し相撲かな　材種

寺の花ふむや土橋の水の音　孚先

嵯峨天皇御製 非三唯物-色催二春-興一別有三泉-聲落二雲端一

鴨なくや沼をはなれて茅一駄　子堂

咲梅や藪のそとなる人心　虎吟

夜錦 あはれてふとや一木にかへり花　不醉子

舟板も春日ぞめぐむ水のあや　沾徳

後撰 おく山にたてらましかば渚こぐ舟木も今は紅葉しなまし

よごれても若菜つむ手の雫かな　午竿

俊成 この里の眞萩にすれる衣手をほさで都の

人に見せばや

庵の雪中に見せたき友のかず　春嗣

雑録　つもらばさ人もちぎらぬ庭の雪に心さま
ちて誰をうらみむ

秋の野や見かへる小鳥ゆく小鳥　虚谷

木兎や主もち貝のつくの上　亀翁

一葉浮て母につけぬるはちす哉　素堂

夜錦　花にかへる雁の心やしれぬ文字　太田可政

宗祇　これや此わかれさかいふもじならん空に
友なき春のかりがれ

松島や何とかたると月の景　風虎

同　鶴やこゝろ柳くはへて引て見る　紅絲

趙嘏　別ニ有ニ風ー流雑レ淸虚ー絲ー萍身ー世白ー鷗心

もるゆへに手折め多し花ばたけ　魚水

けふの蕨あすや麓の寺の塵　酉若

をくればせに梅ちる跡やめぐる蝶　犬櫻

郊村

誰家ぞ裏はぬりきる池の鴨　畄堂

名月や鶴のひあがる小松原　午竿

閑居

すむからに都かたらむはつなすび　芒風

日にたちてきりふの薄まねきけり　浮萍

正広　かり人はみえぬ野原にはし鷹のきりふの
薄誰まねくらん

誰かすく用ひられぬを合歡の花　沾徳

円機　蓮之愛同レ予者何人

赤染衛門　神無月有明の月の時雨ゝた又我ならぬ人
や見るらん

【志】

一ハ心ノユク所、心ノ事ヲ其事ヘユキムカフヲ云。

いにしへ予が家に傳へ侍りける八
雲の道をおもひ出て、試筆に

春の賀と氣のつく迄ぞ道の恩　春嗣

つまみたき芽を見する楓かな　湖虹

かぶりても我親に似ぬ頭巾かな　忘水

【忠】

夜錦巻頭　たてゝあふぐ松や此樹の御代の春　明石侍主　松葉

【孝】

亡父の花の句を此集にあらはし侍りしとて

思ひ出れば花にもかなし親の哥　山岡 雲南

送り火や親の心の闇の爲　江口 塵言

母になくれ侍りける年の秋に

信太 玉まつる今のなみだや乳のあまり　紫塵

今朝の春若やぎたしや親の前　蛙枕

祝垂白

もろ親の斗掻いざ見むかざり竹　材種

母の隱居を祝し侍りて

夜錦 隱居所を千世もといのる小春かな　濱田 春倫

母もちて筆耕すぞ田のからす　沾德

白居易 鳥中之曾參より

【仁】 春

俳名の一字を露言につかはすさて

色をまぜ降しをくなる花の露　露沾

久居にて豐年の秋の心を、藤堂氏任口へ申上る。

信太 民をなでゝ風にもあてぬ稻葉哉　季吟

鳥の巣とおもへば掃し庭の塵　岩翁

朝霜の牛にほこる木のめかな　子堂

遊青陀 霜むれらまだ春風の淺みどりこれやさきよの道芝の露

魚避て聰いさむる落葉かな　素堂

賤が屋も春の風をかるかざりかな　且水

俳の風躰つたなき道にあそぶ人をかなしむ。

異草もつまぎり捨じ菊の苗　沾德

淵明 種豆南山下草盛豆苗稀

【禮】 夏

程〳〵に競ひて茂る木末かな　沾德

はかま着にけふは狂はぬ童部かな　龜翁

【義】 秋

花見よと下葉かれしや菊の様　沾德

【智】 冬

田にそひて盆なきほどを氷かな　同

定家 あぜのたひもり来る水もこほりゐて苅田

淋しき冬の山陰

江戸へまかりけるに、田中冊古丈よりたび／＼まねかれ侍れど、えまいらでまかりのぼらんとしける時にいひつかはしける。

すし桶やなれぬをもつて後の爲　梅翁

來む年の落葉をふくむ木のめかな　露傷

信

親鸞忌

夜錦　きざはしや夜半に踏わくお霜月　紫塵

忠岑が半にふみわけとさらにこそ　取レ詞往々略記矣

勇

是非までと月やいつはるほとゝぎす　沾徳

冷泉入道前右大臣
夜なかされつれなしさても時鳥またでは
いかゞ有明の月

時　去來

齋宮の舊跡にて

夜錦　秋の季やいがきも越て立田姫　大光院 常爲

い勢にて

夜錦　めぐりあひてみしや時雨の雨の宮　前 立志

岩城花園祭の日さて、かの地にまかりて

同　あすよりや秋のはなぞのまつり客　風虎

同　あすもこされ秋の花園まれの事　勝盛

汐干かたあさりふむ日の霞かな　閑幽

よもぎふや桃を分たる三日の餅　同

ほとゝぎす何を古井の水の色　露沾

菊の時屋根とられしがあやめ草　如泉

朔日の落葉輕し人かろし　常牧

はた／＼は草に細かしほとゝぎす　沾徳

商人も山家めきけり年の市　岩翁

元日

來るやいなや春のきほひの山ざくら　岩泉

明てはや根芹摘たき日ざしかな　午竿

去年といふ葉のぬしよ今朝の春　子堂

けぢめなき中に物あり去年ことし　忘水

是ほどに雀かくれやさくらぐさ　普船

蘂ばかり散殘りても櫻かな　沾荷

いたむとは霜に味つく冬菜かな　春魚

僧ひとり寒しや里の衣がへ　望月

春やうごく田辛螺や動く時の水　丹羽 風松

杜甫　春動テ水茫茫

押あひて目白は殘る落葉かな　下河邊 哂若

五月五日衣川を渡るとて

鯇はねてけふとはしりぬ江のあやめ　尺草

むさし野や土にもつかず郭公　文桂

棟梁のすがたごもる松の雪　高山 灌水

冷水やうらぬ日までの蟬の聲　百瀨 一峯

眞白なる蕎麥より寒し秋の風　掬句

信太 春やきのふ杉戸にかへて靑すだれ　矢吹 露幽

鮎のほり柳水見る川邊かな　彥根住 殘笛

毎年を隔つる垣や松かざり　細雨

初茸のうらよりくつる日かげ哉　沾蓬

中秋

月こよひ寢にくき暑さ過し來ぬ　沾德

信太 春やむかし(原註孔子)くじの祭も梅見月　木子

又やさく花によく似るわが命　竹塢

我菊のそだつを星の手向かな　夏雲

松や雪越路の市の人の(原註丈)たけ　大室 沾雨

隅田川にあそびて、むかし貞室がこの地に來りし時、いざのぼれさがの鮎くひに都鳥　といひし句をあはれみて

鮎時に貞室おもへみやこどり　沾德

王平甫　爭カデカ得ン才ノ如ナルコト杜牧之ガ試ニ來テ湖上ニ輒スナハチ題スレ詩ヲ

始

夜錦 うちそむる菲の一日や今朝の春　德元

夜錦 一夜明て天下の春やたつた今　玄札

同 明六つの鐘に咲けり年の花　郡山 垣行

同 山もとや誰が軒端より煤はらひ　水鷗

湯あがりに見るや一葉の落所　岩翁

花落し數よむうちや初茄子　探泉

朝戸明て去年と見合す日ざし哉　松塢

七種は枯葉にしめる草履かな　沾徳

昌黎早春詩ノ
天街小雨潤(ウルホフテシ)ソノ如レ酥ノ草色遙(カニ)看(ミ)近(ケレバ)却(テ)無(シ)

歸正實
雪消る野原の雨の下みどり草も枯葉を埋む色かな

〔終〕

夜鶴
花見にはあすくとてや暮の春　未得

千賀の塩がまにて

同
月ぞいるちかのしほがまちからなし　梅翁

同
氣力落て海に出たりしかま鮎　玉蓮子

万葉
わたつ海のうみに出たるしかま川……（マヽ）

もみつれとむしばむ跡のさくらかな　寸理

見し人も躍しもかへる夜明かな　孚先

門松は立ながらなを師走かな　鷗水

賈島
未レ到(ラ)二曉鐘(ニ)一猶是春(タ)

をのがきほひ夜更てうすし花火船　且水

賀につみし薺も今はかれにけり　桐宇

もろこしの根のうくのみぞ秋の雨　芒風

ゆく秋の踏しや池に折る芦　東民

虫の名も萩(ハギ)のみ殘す枯野かな　河手 笠下

老の身も同じかれ木ぞ落葉籠　芥口

よき瓜の後にくはぬぞ夏の味　沾徳

右近
わすれじの行す衞まではかたければけふをかぎりの命ともがな

儀同三司母
よしさらばちるまではみじ山櫻花のさかりをおもかげにして

〔大〕

櫻川
霧の海や富士を世界のみほつくし　已哉

六玉作如雲作
霧の海にたつ富士山やみほつくし

此句不レ引二等類一故以二讃哥ヲ一此外詩歌共ニ此辨多シ

後拾遺
日もくれぬ人もかへりぬ山里は峯の嵐の音ばかりして

俊頼
日くるればあふ人もなしまさきちる嶺のあらしの音斗して

五月雨や尾上の鐘も龍宮界　風虎

沾徳万句し侍ける時、卷軸の發句望侍りしかば申つかはしける。

になひこめ富士をのづから雪まろげ　闇幽

誰國もやよひの海の道千筋　露沾

夜錦　ながめやる月には狹し日本國　元隣

今朝や春唐まで隣る笑ひ聲　午竿

元日も旅人を見る大路かな　沾徳

〔小〕

針草も已が芽(キザシ)をかきねかな　春耕

いつまでぞ網の目洩(でん)る鮎のたけ　綏部住　沾山

ひゝ汐のひけばちいさし磯ちどり　交夕

石蕗(ツハ)の葉にあられをほどく朝日かな　調柳

〔高〕

夜錦　むさし野の外も山なし富士詣　重賴

同　半分は雲に名高し富士の嶽　大坂　片雨

くちばしや雲井にかけてなくひばり　梅盛

ひえにて

高ねより礫(ツブテ)うちみむ夏の海　言水

杜甫　會當(マサニ)凌(シノギテ)絕頂(ヲ)一覽(ス)衆山(ノ)小(ナルヲ)

もろとりのをとなひ低(ヒク)し桐の花　路通

見あげては笠に聲あるひばり哉　殘笛

さすが又麥の穗低(ヒク)しひとつは(原註)梁　沾徳

〔低〕

川出る末や花ちる蕎麥畑　口靜

五月雨や隣へわかる水の徑(ミチ)　沾徳

〔廣〕

むさし野に趣向はてなきかすみかな　風隣

川筋の遠くも出る枯野かな　岩泉

馬道は茅(カヤ)落てある枯野かな　子堂

我畑のおもへば廣き枯野かな　孚先

長野豐受野なわたりて

角文字やいせの野飼の花すゝき　其角

川境あるまで走る鷹野かな　横几

信太　すぐ道の一筋見ゆる燒野かな　南　薄夫

吹ぬきて早稻の香ぞそふ庵の風

麥の穗を鳥井にわかつ徑(コミチ)かな　孚先

狂ひても霞を出ぬ野馬かな　沾徳

【狭】細

夏やせに蔦の細道もなかりけり　一鐵
芦鴨のをよぎみじかき水田かな　湖風
鵜籠(ウキ)卵の汗はく垣の若葉哉　亀翁

枕草子 左右にあるゝ垣の枝などのかゝりて車の屋かたにいるも、いそぎてとらへておらむと思ふに、ふとはづれて過るもくちおし。

【長】久

玉くしげ明る夜長しふたねいり　佳則
世々の名よ年魚におもふ岐阜吉野　運水
ほたはらや濱松が枝の手向ぐさ　沾徳

万葉 白波の濱松が枝の手向草いく世までにかとしの經ぬらん

讀て眠りさめて夜長し紙の數　探泉
五月雨に妻の貞さへ見飽けり　三井 笑種

【短】

夜錦 明安き夜を馬次の眠さかな　松江 宗眠

江戸より京にかへり侍りて、松江維舟宅にて

信太 夏の夜や吾妻はなしに月は西　梅翁
みじか夜に髪にくせつく枕かな　横几

【遠】

つくしつむに榎を野べの枝折かな　秦豊
低くなるあそこなくらむ遠の雁　学先

杜甫 盪胸生曾雲、決眥入歸鳥

海廣し風筋見ゆる夏の山　踈口

樹下の庵をおもふ。

大木はわがものならぬ茂りかな　野梅
あの森もいつを目當の夕時雨　若泉
川すそや雪に見通す水畑　探泉
道々の橋經て爰ぞかきつばた　河雲
村の火の見えてあぐめる枯野かな　春耕

許渾 葉盡孤村見夜燈

野の末は大空撫る尾花かな
畔つたひゆくほどとをきさくら哉　虎銀

鄭谷史　一ノ樹高キ花明ニ遠ヲカナリ村ニ

（原註）翔
かけるかた星にならぶやほとゝぎす　旦水

近

舟中吟
朝なぎに地はむかひ來る若葉かな　孚先

市中の庭の花にあそびて
杉一木鐘見越すべきかすみかな　岫雲

口こそあれ花に家路は五町程　沾德

遲

櫻川　一日の花をまつ間や三月ごし　風虎

夜錦　不如歸とは來鳴て後ぞほとゝぎす　季成（かいはら住）

閏三月盡を
都には袷ぬふなり山ざくら　宗也

雅有
ことのつれの卯月になれて時鳥數そふ春にまたきなくらむ

暦こそあれあすは五月ぞほとゝぎす　紫塵

速

六條はあさがほをそきところかな
東本願寺あたりの人の作となむ。

稻妻も目つけどころの田面かな　沾德

定家
秋の田をてらす稻妻よそへても見れば程なしわすれがたみに

淺

せきとめて又ながしてやくむ清水　寸竹

草の葉の手にさはり來る清水かな　子堂

深

わけいれば藪ふたつなるかやりかな　子堂

分入て藪は暮たる覆盆子哉　口靜

一尺の蕨の外や松がしは　沾德

奥の院はれがましやな山ざくら　松齋

赤松のいよいよあかし山ざくら　尺草

厚

足跡を犬𪃹わたる氷かな　尺草

薄

初雪や落葉に水のたまる程　駒角

一けぶりうすしや背戸のことし竹　忘水

〔寒〕

手拭ひの黎蘆に氷る嵐かな　巴袖

荀子 氷出レ於レ水而寒レ於レ水也

我袖に冬は来にけりぬき入手　忠知

照ながら月力なき枯野かな　仲子

痩馬の毛なみさらなる枯野哉　白椿

野つゞきや雪来ぬ里の一くもり　孚先

定家 さえくらす都は雪もまじらねど山のは白き夕暮の雨

蘭ばかり人に並ぶや冬ごもり　春耕

松かげや日あしをしたふ池の鴨　溪魚

かけ茶して北もしぐれぬ家居かな　湖堂

松這て雪の外なる蘚かな　彦根住 其葉

乘かけて氷をしわる夜舟かな　飛泉

慈鎮 舟さむる氷もしばしあづさ弓なしてやばせのけさの渡は

霜どけに笹ふみわたす家居かな　忘水

越の淺生な出るさて

朝凪や雪の玉江の蒲裏脚　大津住 乙州

秋の夜にひとつ來る蚊の寒さ哉　子堂

冬は此麥まき殘す屋陰かな　沾徳

水仙もをぐらし閨の瓶の水　午竿

(原註)溪

水仙の葉にさほひある氷かな　松翁

日の影にうつぶく冬の清水哉　小藤

日光にしばらく住ける比

袷着て蟬きくを年のまうけかな　尺草

寢かゝるを千鳥にひやす衾哉　子堂

〔暑〕

眞桑瓜腹に滿てやけふの照　蘭幽

水無月のけしきやためす氷餅　灌木

涼しきや夏田の畔の晝あかり　大津住尼 智月

まだ殘るあつさを見込板戸かな　松塢

蠅にいかる目に力なき晝寢哉　子堂

をのが名やあつさにまけぬ力蟬　亀翁

さゆり葉にもし秋風や晝さがり　沾徳

定家 夏ふかみ茂みがもとのさゆりばのしられぬほどにかよふあきかぜ

詠林一字幽蘭集　中

暖

夜錦　青柳のかげふむ溝の餘かな　玖也
　万葉　橘のかげふむ道。爲家　青柳のかげふむみち

山並やむきよくてらす日のはじめ　岩翁

草漸く眞土つやよき雪間哉　寸竹

夜錦　霜をかぬ南や紀伊の青蜜柑　釋　殘花
　定家　霜をかぬ南の海の濱ひさしひさしく殘る秋の白菊

片際のはなしや炭の燃るまで　且水

炭やきがかへりや寒き京の酒　龜翁

かげろふに蝶ひるかたのにほひかな　普船

夕鳥水のむひまの氷かな　三芳野　忘水

うららさや野馬ふりむく朝日影　信前住　兀峯

春雨のつたひてほそるつららかな　随好

雪しるの跡や柳のほしいまゝ　奈良住　友雅

ひかれ來て風又ぬくし山つゞし　小浦　分山

女さへひとへ肩ぬぐ春野かな　岩翁

茶の花や蝶の來ぬ日のあたゝかさ　殘笛

片陰に冬の日ぬくしちやほの聲　野間　野遊

　庵たもとめし人に

なま壁に梅そふ冬の日向かな　沾徳
　定家　早梅纔綻鳥聲稀、閒臥徙倚二南簷日一

蝶飛で口そろへけり池の鯉　午竿

　三月三日

蠅も來てけふあたゝけし瓶の桃　沾徳

冷　涼

御座すりてふく風輕し蚊屋の縁　岩泉

暮るより二心なし凉み床　露沾

　臨池

來る風やあをりかへさば蓮の科　虎銀

立よれば絹笠ひろふ清水かな　材種

螢とる澤邊に麻の頭巾かな　望月

うつ次の乾きをも見む若楓　岩翁

市中にはさまれ居て、たまたま淺草川にあそぶさて

米まきと見つゝ舟出や夏の川　沾徳
（原註）釜木

抱をろす子に肩輕し門涼み　横几

うすものゝ羽織網うつ螢かな　曉雲

螢來て腹に寢卷を掛にけり　沾木

途中吟

汗ほして見かへる井戸と柳かな　來陌

黄塵行路汗如漿　少駐儂家濯井香　借問前村石坐柳　陰亭午正風涼
范至能

道すがら風のうはさの涼みかな　連阿

舟よせて橋を日よけのすゞみ哉　喜水

生垣に身をせばめても涼み哉　松塢

座して見よ岸根暑くと沖の舟　島風

夕かげの柳にもやへすゞみぶね　沾山

宗因

淀川の入江の岸の柳かげつなげる舟に涼む旦人

稲一穂門田に凉む日當かな　沾徳

宗隆

山里の門田の稲葉みわたせば一穗出たる夏の朝露

【曉】

幾里の夢やのこして寒念佛　粗工
夜錦　小嶋

蚊の聲のしらむにさむし軒の雨　沾徳

門松のそよめく末や山かづら　遠水

【曙】

年の花もほのぼの明やはつざくら　季吟

あくる夜や雪に埋めぬ舟の脚　寸竹

後土御門院御製

波の上ははや降消てこぐ舟のさもなもまたぬけさの白雪

夜を殘す陰もかぎれり松しあや　午竿
（原註）文

頓阿

呉竹のは山のかげのくしき夜になく鶯の聲ぞ明ゆく

逍遙院

竹しげき片山林明やらで殘れる月にうぐひすの聲

此兩首、其のねにこそふ　古今の句をみるに、皆春おなじからず、句のたくさに並ふべくもあらざれば、句處を殘して後の作者を待のみ。

朝

朝風に帷子輕し花あやめ・　露沾

いざくまむ年の酒屋のうはだまり　其角

齒朶と梅見よ明る戸のうら表　且水

東西へゆく鳥あり朝がすみ　遠水

玉葉一
おきいでゝ又何どないさなまむこのよ明
ぬさからす鳴也

狐火につきてひらくや今朝の菊　探泉

つばくらに起をくれたる朝戸かな　子堂

朝な〳〵萩を見にゆく馬屋かな　歎來

あくる戸に起て負うつ芭蕉哉　桂堂

青麥に目ざましにゆく田舍哉　暮楓

(原註)鶺鴒
かやぐきの燒火ににぐる朝戸かな　沾德

雅親
くれ竹の軒の下なる小枝まで鶯なるゝ窓
のあさあけ

晝

さよの中山にて

夜錦
これもいかにさよの中山はなのひる　梅翁

雅世
朝露のひろまにゆくもたのづから夢さや
いはむさよの中山

午鷄

青麥のおくぞ甚なる鳥の聲　沾德

夕

花を踏て洗足おしき夕かな　在色

風に消て風にをぐらき藪蚊かな　露沾

汐滿て陸の火に飛ぶをほこかな　春峒

蚊柱に夢の浮橋かゝるなり　其角

初雪のくもりは藪の雀かな　探泉

堂涼しむれつゝ人の戻るあと　松齊

柴の戸や燕たて込む鐘の聲　溪魚

名月や門に子共のあそぶ暮　春魚

霜見よと草履や干る夕日影　仲子

木のかげ岩のはざま心〳〵にあそ
びて、はや日もいりぬ。

暮までは下戸ひとりなる花見哉　口靜

王半山
醒客忘レ言(コトヲ)醉客喧(カマビスシ)

ぐさむらに馬引出すかやりかな　素楊
おなじ人の又たつ橋や夕凉　皿木
人声は青葉にのこる夕かな　鶏水
生垣の夕暮ふかきしぐれかな　詞賤
影見むにはや木高かれ揚灯籠　中津住 瀬竿

比企谷にてひじりを見て

笈すへて見る夕顔や右左　松齊

〔平〕

上野護國院にて

青嵐筑波まで日のとゞきけり　尺草
たいらなる山や花見のあしだまり　沾徳
水と羽と合せゆく鵜や夕すゞみ　沾徳
陳簡齋
湖汀横ニ薄暮ニ獨鳥度ニ長洋ヲ

〔夜〕

その序星の名をとふ今宵かな　春魚
明ば又裸身はおゞむ夜振哉　渓魚
むかしおもふ夢にやつゞく砧たゝき　風松
誰庵ぞさし入月に京はなし　細雨

闇の夜や門は園の音ばかり　文鱗
更やうを見定る夜やけふの月　沾徳
定家
明ば又秋の半も過ぬべしかたぶく月のおしきのみかは

〔喜〕

梅飛てふすまやあかき冬の月　磊玎
窓の月わが寝まとひか置火燵　残笛

風虎翁に申つかはす。

夜錦
春や先貴方にむかつて岩城山　梅翁
うれしさに寝かねて宵の年も明ぬ　沾徳
春に明てめぐみをそふや恩の数　浮萍
我ものと子等こゝろよし門の松　亀翁
ひろはれてゑびすとならん扇かな　雅雀
妹は子の丈きそひみるあやめかな　芥口
我他の相に春あるあしたかな　濃山

〔哀〕

夜錦（原註）象潟
きさがたの月や流人をたすけ舟　冥之
利休畫
得ㇾ罪風霜苦　全ㇾ生天地仁

此句は澤庵和尚出羽國にながされ侍りし時の作となむ。

夜錦　野送りの色や尾花の袖の露　来得

追悼

同　さらでだに秋やうき世の八九月　松葉

秋風のぬけがらとなる扇かな　巳哉

門護子作ニ此句ヲ不ㇾ經ㇾ日卒ス

山行

猿をきく世すて子に秋の風いかに　芭蕉

親もたぬ身は年〲のさむさかな　路通

それにさへ上手下手あり鉢たゝき　立嗆

聟がねに聞すな冬のきり〲す　歡来

京の秋物こそたらね海士の家　兀峯

亡夫の七回忌なさぶらふに、我さ
同じ道なる人々の來りければ

かゝしにもあはれさまけじ尼中間　尼　智月

妻にはなれ侍りし人をいたむ。

夕顔や歯黒しらけし閨の隅　僧　澗水

潘安仁寡婦賦
退ハ幽ニ悲ミ於堂隅ニ兮進ンデハ獨リ菲ス於牀ノ垂リニ

辭世

霜月やあるはなき身のかげぼうし　忠知

歌舞妓子の死せるをいたむ。

折釘にかづらや殘る秋の蝉　其角

辭世

とひ來かし茶杓の枝折雪の跡　茗風

子にはなれ侍りし比

菊枯て世話やむもうききまがきかな　夏雲

猶子、母にはなれ侍りし比

柄をなめてたづぬる母やぬり團　沾徳

世のつねをとはず語りや鉢たゝき　艶子

追善

靈あらばそのさま氷れ我なみだ　好紀

追悼

我もやがてまいるぞかゝるぞ袖の露　梅翁

加賀少納言
なき人を忍ぶるともいつまでぞけふの哀
はあすの我身を

(原注)基明
大澤侍從三十一首の哥勸進ありし
に、烏丸亞相公の狩場風といへる
題をたまはり侍て、時過けるほど

に、元祿四のとしの春と冬とに兩君かくれ給ひければ、むなしく短册を見侍りて

世をふたり狩場の風と書すてけり　沾徳

〔樂〕

何かこのうへず寒からず年の暮　道寸

辭世

夜錦　死ぬる迄生だは言を月夜哉　徳元

身の樂や花見る時と一眠り　元隣

あかつきに漸（原註）醒さめて月見かな　露言

我手さへたゞはあそばぬ火燵哉　立志

をのが賀は錢やたのしき薺賣　孚先

夕涼みよくぞ男に生れける　松濤

芹つみて腰のす時を廣野哉　且水

詩經　采采芣苢　薄言采之

つゝがなく大晦日の寢酒かな　蚊足

李白　全身以爲寶

七夕にねがひやは寢て莊子よむ　沾徳

莊子　父邪母邪天乎人乎

花もたで花見る事よ園の恩　春魚

國原よ我屋もひとつ花の春　忘水

万　國見なすればくにはらは

堤より辭てころべばすみれかな　帆平

宗鑑　さ[illegible]野べの菫かな

ちる時の心やすさよけしの花　尾陽　越人

櫻川　ながゝらむ命のほどや年わすれ　岡部　任幸

種おろす賤を拜める野路かな　松塢

百花なを折て芳し梅のかぜ　大長　定明

これは元祿五のとし、京江戸大坂の俳士の百人一句を勸進せしとて、嵐雪かたより其一軸見せ侍りければ、其志に稱して其發句をひろふ。

船中吟

船頭が茶碗よ誰か夕すゞみ　横几

杜子美　茗飲蔗漿携所有　瓷甖無謝玉爲缸

北殿の月見に問む渡世なし　沾徳

夕顏　をしこそなりはひにもたいむ所すくなく、わなかいかよひもおもひがければい

さ心ぼそけれ。きたごのこそきゝ給やな
ざいひかはすも聞ゆ。

六本木の庭の花にあそびし時、花
な給はりけるに、夜花な

つるこけて寝よとの鐘や花の陰　同
杜子　得レ醉即爲レ家

家路とやしづかに歩む鰹うり　花蝶
師兼　あしのやのなだの塩路の夕なぎに舟なし
かへしうたふあま人

蠅をうつ小僧眠れり膝の蠅　尺草
潘柴岩漁父ノ詩　翁白醉眠魚白樂

信太
家〳〵のおもひや瓶の新酒古酒　沾柳

よき程と紙子あかせぬ嵐かな　沾德
邵康節　若求二騏驥一方乘レ馬　只恐終レ身無二馬騎一

田家木

世をとへばやすく茂れる榎かな　白準

年わすれたり跡へはとりにかへられず　紀子

來根川にあそびし時、農家なる夜合をもらひて幣居にうつし侍るさ
て

市に出てねるを我名ぞ合歡の花　沾德
以二吾之惡一而獨好レ汝　汝惡得レ避二是名一邪

〔愛〕

秋の野を手にさげてきく虫籠かな　貞德

夜錦
さいたりやこよひの月に丸太舟　玄札

名のつかぬ所かはゆし山ざくら　湖春

春秋におもひみだるゝ花火かな　風虎

哥とこと葉とを名とせりやほとゝぎす　巴袖
杜子　披二垣竹埤梧十尋一　句讀ノ格ニ記ス
万葉　たちばなのみさへ花さへその葉さへ枝に
霜なけさましときはの木

あの燕花にあぶなしこのつばめ　任ゝ子

一沼のあやめはおもひ〳〵かな　我黑

舟引が先を折とる柳かな　遠水

夜錦
ちる花にゆくや心のこまざらへ　水野林元

同
井の底の月をもたぐるつるべかな　岡山永山

はご板を子にかこつけてもらひけり　乃龍妻

吉野秀可かの山の花の句所望に

櫻川 花はよし野けによしや世のなかんづく　季吟

いさ折て人中見せむ山ざくら　雪柴

名月や池をめぐりてよもすがら　芭蕉

家隆 秋の月は池の小舟なさす棹の淺めぐりせ
ば有明の月

ちる〱醉のさめたる夕ざくら　自悅

我子のみ先ほめて見る躍かな　淺幽

竹うへて此後花は目數奇かな　沾德

東坡 可レ使ニ食無一レ肉不レ可ニ居無一レ竹

夜錦 月は滿る人は見て居るこよひかな　半井 慶友

同 うづみ火にうづもれぬ名や池田炭　いせ村 重安

鐘とめに衣さふるや寺のはな　霜 梢蟬

ぬすまれて垣に情あり菊の花　春耕

雨つよく花に折るゝこゝろかな　直由

一鉢は苅殘してよあやめぐさ　亦魚

我飽し花瓶見よき牡丹かな　旭峯

葉のなきも草のひとつぞつく〱し　作者不知

茶の花や利休が目にはよしの山　素堂

(原註)香煎 こかしふるさゆに一重のさくらかな　普船

うらめしやあちらむきたる花椿　虛齊

かた〱のかざり殘さむ門の梅　不貫

百菊に酒の欲ある日數かな　雅雀

古きほど下座になをす雛哉　百川

我傭に咲ても折や野邊の梅　梅居

風にかくせ小萩がつゆのをきどころ　湖隣女

元日

けさ見れば發句にてはなし春の興　沾德

三月三日

汐干見ぬ田幸螺も貝のひとつ哉　調和

松ばらやたま〱あるが山ざくら　但風

まつもとにて

初雪や四五里へだてゝひらの嶽　去來

手とゞかぬ琴や雛の馳走ぶり　且水

江戸表 ちいさき御雛に、さゝやりて申し給御て
つき

或人の妻のよ所より猫のすみかか

り見侍しに、ひさひ二ッの間にひさつ死に侍りければ、二日ぬしへ返し侍るとて、心よりうきめをみつの猫の子のかずさへたらでかへすかなしさ、とよみてつかはしけるとかたり侍りけるを聞て

猫の子も妻こはぬ間ぞ人の愛　沾徳

松葉簸でちる花もどせ里の子等　虎銀

ふところへ落るはすてぬ木葉かな　忘水

常にあひともなふ人々、こよひの月はこゝにてや見む、かしこにてやさいひさだめて、日のうちより出むかひ、待まうけたる月、さすがに名をえしひかりなりと口〳〵にいへり。さるにつけて昔今のとの葉のかず〳〵思ひ出られ、我愚なる心にわきまへがたき事の、ふと出くるを此人々にとふ。こよひは名高き月といひ傳しその名は何といふ名ぞといへば、人々笑へり。

又いふ、名にしおふ花の都、なだかきひえの山、なにながれたる月のかつら川、などこそいへ、今宵の名とさしていはむ事思ひよられず。月とばかりは四季ともにいふなり。秋といはむには、きのふもおとゝひもいふなりと、共に笑ひて

しらぬ名に見とるゝ月のこよひかな　立圃

おなじ名やこよひに似せて夜ゝの月

〔貴〕

禁裡を拝見して

殿高しあがらで涼む縁の下　佳則

とり分て殿の威を見る鷹野哉　亀翁

〔賤〕

世や安き帷子時の蚤が家　遠水

おなじ宴に侍りて

いやしさの見えて身安き木平かな　沾徳

あさがほに雨もりたのむ屑屋かな　　望月

　防之
　なのづから軒の板間やかくすらん枝さし
　おほふ松の落葉に

良ぬぐふ田子のもすそや五月雨　　其角

　伊勢大輔
　いかばかり田子のもすそやそぼつらむ晴
　間もみえぬ比の五月雨

　　此句は哥をとれるゆへ、哥しるすにをよばねど、五文
　　字哥を力とせざるゆへ、哥一首不レ略しるす。

小角豆食妹が垣ねは荒にけり　　心棘

　堀河院百首
　むかしみし妹が垣ねは荒にけりつばなま
　じりの菫のみして

　　是も五文字力あるゆへ哥を略せず。

住居かな樗もとめて片ひさし　　松齊

賤の子の籠に留主もる田植かな　　杞柳

誰爲ぞやもめの田植日暮まで　　東　有竹

早乙女の襟草はちぬ蕓かれい　　遠水
（原註）餉

から家のさびしく並ぶ涼かな　　子翠
（原註）空

［老］

年越の夢路にさへや老の坂　　信太　風虎

大かたは月をもめでし七十二　　同　釋　任口

老てけふ獨花見の留主居かな　　岩翁

虫干や見ぬ書に耻る人は何　　横几

　龜山楊氏
　白首紛如成底事蠹魚徒自老青編

老が身よ日帳に耻るとしのくれ　　喜水

數つめば大かたくるし除夜の大豆　　乃龍

ながいきの耻しらぬ身や土用干　　松雨
（原註）壽

　垣をへだてゝ念佛の聲を聞て

初夜中すこゝろや木葉髪や霜　　沾徳

　定家
　年ふれば我黒髪も白糸のよるひる佛の名を
　さなへつゝ

［若］　幼

手ざはりも若木の梅の色香かな　　且水

　基綱
　うらわかみ立枝がちなる梅の花咲かさぬ
　べき色香をぞまつ

若竹にまだたけのこのにほひかな　　龜翁

藪部は大晦日を宵寐かな　　望月

打とげぬ子共は宵のきぬたかな　　岩翁
（原註）遂

　過し夏元服しければ

とめ袖やかさねはじむるけふの菊　　龜翁

童部は人のたのまぬ茶摘かな　尺草

漁父の子の罪ならはする蜆かな　孚先

櫻川
溫公の枕まろめむ窓のゆき　川路 樂常

玉や糸屋師走のはても仕業かな　春魚

渡し場や人行たまる年の市　溪魚

後西院御製
おほらめや都の市の住居にも春のことなり
ひとしげき世に

枯野さへ麥に造るゝしわざかな　沽德

［富］

見渡せる村を富すや夏木立　春耕

民の化を幟につゝむ大路かな　眞崎 冬嵐

［貧］

貧寺月といふ題にて

軒はあれて寢火見る月の横川哉　吟松

退院の會に

首陽には蕨もあるを此隱居　伏見 任口

寢がへりの音も淋しき紙子かな　岩泉

貧しさやとみの物ぬひ衣がへ　材種

枕草紙
人のもとへとみのものぬひにやりて侍ほど
（原註）頓

［勉］

母かれは娘やおふのさくら麻　淺幽

丁元令ハ
婦汲溪頭水人　耕ハクガトス
隴際田ナイノ

通り町に住ける比、試筆

去年やきのふつとめて休む車牛　沽德

［怠］

憎からぬ朝寢や寺の庭おとこ　閑山

墓所にまうでゝ

夏草の塵はく迄を手向かな　忘水

定家
小山田に茂る五月のうき草は我こゝろよ
り種やまきけむ

［先］

冬にけさ霞や春のさきぞなへ　小 宗市

衣錦
波や時雨山にさきだつ紅葉鮒　風虎

寫相
山にさきだつ庭の紅葉ゝ

並びても先だつ舟や初鰹　岩泉

藪陰や根芹見てをく大晦日　春耕
何事も梅の跡なる枯木かな　沽德

【後】

夜錦 いつまでか蚊をやどせしぞ冬の菊　忘水
郭公有明の月や置みやげ　長州住 友知
明る戸はきしる音なりほとゝぎす　鶴翁
柴苅の蹴折し跡や路の獨活　彦根 淵虹
はみ殘す鹿の跡追ふ蕨かな　沽德

【進】

夜錦 月もよしいざあたら夜をいせ躍　富長
あたらよないせの濱荻
行事かとおもへばとりぬ辻相撲　遠水
櫻川 大力や我身にたのむ關相撲　如白
遠乘や鞭は柳のあり次第　沽德

【退】 謙

夜錦 書初や一紙にゆづる寺屋數　釋 白話
隱居ありて翌年の試筆となむ

いかめしの我影法師や丸頭巾　白椿

【淸】

草堂をとはれて
夜錦 淺くともよしや又くめ夏茶碗　時尾山 釋義山
櫻川 輕き水に重らぬあしや月の舟　風虎
楊梅の落て際つく清水かな　未陌
うちこみて置どもすゝめる種井哉　岩翁
水仙に人の濁りの隈もなし　露沽
初雪の疊ざはりや棕櫚箒　尼 智月
夜錦 秋の色の白きは是かけさの露　中島 正俊
水をふく風あびせけり松の月　探泉
王荊公
山月入松金破碎江風吹水雪崩騰
若竹につれて立のぼる朝日かな　崎山 良隆
飛越て又立かへる清水かな　作者不知
帷子を祝し初けり淺みどり　露沽
煤はきの疊もたすな梅の花　沽德
すむ水に味をうらむる精かな　李先

さく梅の水影すくふ朝日かな　且水

済海寺八景のうち驛亭に色といふをを

むまや路や泥も嫌はで落る花　沾徳

賈輩 馬踏ニ春泥ニ半是花

はき庭や青梅落し跡ばかり　尺草

【濁】

うへし田やみどりの底のうはにごり　遠水

【輕】

茂る葉も人には輕き袷かな　望月

まはされて渦にとゞまる一葉かな　溪魚

汲あげて落葉をこぼすいは井かな　(原註)石　川越住 岨木

庭の塵一日はらふやなぎかな　春耕

伎成 春くれば玉の砌をはらひけり柳の糸やさものみやつこ

地につかぬうちを落花のすがたかな　忘水

霞つゝ花ちる山の朝ぼらけ後にや風のうさはしられむ

【重】

今ひとつ山見越させよ夕がすみ　忘水

【動】躁

歳暮

松賣やさらば都の常も見ず　寸竹

洗ふより圍爐裏にぎはふ冬菜かな　浮萍

蟹も人もぞよめく沖の塩干かな　仙化

俗の身の寝心とはむ年の暮　龜翁

(原註)鳴 なりやめば又市になるあられ哉　岨木

【靜】閑

夜錦 門並の禮者や春の立すがた　空存

緩歩

杜甫 問レ柳尋レ花到ニ野亭ニ

かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅やなぎ　芭蕉

雪の戸や若菜ばかりの道ひとつ　言水

軒に來て鶫音なし雪のくれ　仄船

夜〳〵やをしねに吠る犬のこゑ　遠水

沾徳と雨吟せし比

物音に椎の實(原註)咲ゑめる庵かな　午竿

今朝や春と舟なき海の一ゆるみ　岩泉

ちかき海にその名ありと、房總波をへだてゝのぞむ。

活舟や東風(原註)搖ゆりそむる津乎の浦　子堂

人は寢て心ぞ夜を秋のくれ　槃㟃

鶯よ誰呼たがる柴の門　沾徳

逍遙院
鶯よ我やはあるじかくれ家の心もしらず人さそふらむ

我門の松見あげ出て四方ぞ春　春魚

足跡を野中の梅のあるじかな　沾徳

炭木伐る音あらはない嶺の松　不貫

五月雨に氣を轉じたる柳かな　哂若

鳥さへ形のやさしき枯野かな　上田 孤松

元日の野は人なしや眠る鴈　露森

宮からすいつ野心ぞ神無月　春耕

定家
霜白し神の社の朝鳥なく音淋しき冬の山もと

池亭納凉な

夢は池に沉む晝寢や魚と蓮　芳津

人影をのむ魚もあり池のはす　沾徳

陶
行傍白蓮魚未知

鐘なりて(原註)撞つく人見るや秋の野ら　春嶋

慈鎮
有明の月の行衞なたづねてぞ野寺のかねはきくべかりける

松かぜに蔦の引あふと(原註)飛びらかな　子堂

日のいりは氣にさはりなし冬木立　桂葉

春の江や礫ひろがる水の(原註)文あや　良隆

鷺のなく柳や魚の下がくれ　横几

陳后山
路暗鳥遺音　江清魚弄姿

隱者なさふに、あはず。

我來たと手折めにしれ庵の花　未陌

降雨を蔦した(原註)溜みたる軒端かな　岩翁

花に來て晝寢所や小松原　百里

春雨やなを袖ぬらす山家集　史邦

田上川をこゆるさて

谷こしや空ふく風のかんこ鳥　乙州

春雨や枕崩るゝうたひ本　釋 盤子

夜錦

淋しさにたへたる秋の寝酒かな　(原註)堪　松江 宗眂

生垣の夕暮ふかきしぐれかな　詞賤

この庭の薪ふみ來し落葉かな　釋 孤雲

朝戸出や柳の日さしのび〳〵と　岩翁

老僧と晝間をかたるつばめ哉　沾荷

水札(ケリ)なきてあづま屋淋し角田川　尺草

山家に住ける比

霜解や都へ出し足の跡　沾徳

五月雨や桶の輪切る夜の聲　芭蕉

山住や寝ながら歩むさくらがり　駒角

うの花にかくれ家いさむひかりかな　露沾

草庵物

九日驅(ク)馳(チ)ノ一日閑(ナリ)

菜かくひに來むといひつゝ初櫻　沾徳

蓼(タデ)ばかりわざと植しや柴の門　寸竹

對客

米ばかり去年の物なり芹薺(ナヅナ)　岏平

杜子

盤(バン)剝(ニハヘギ)白(ハク)鴉(ア)谷口栗飯(ノヲハンニニル)煮青(セイ)泥(デイ)坊(ホウ)底(テイ)芹(ノヲ)

【親】

いつとなく我座さだまる火燵かな　孚先

片脇の咄や炭のもゆるまで　沾徳

子の愛に雛の酒のむ夫婦かな　横几

人にあかぬ人のところの火燵かな　彫棠

母のとぶかたに目やふる巣の燕　湖虹

片親のあるをちからや玉まつり　彫棠

炭つがば咄たるまむこたつかな　文桂

後柏原院御詠

おもふことといひもてゆけば埋み火のあらはれぬしも下にのこらず

【疎】

時もこそ梅さく宿のちりほこり　虎銀

【強】

夕立にすがたを殘す蘇鉄かな　風松

たけのこや芭蕉生ぬく今朝の雨　淺幽

猪の吹かへさるゝ野分かな　膳所 正秀

【弱】

雪に水かくるやうなり花にかぜ　呂雲

根のきれて菫ところぶ童部哉　溪魚

初蝶の羽もあやうきあそびかな　達根 永水

落る葉にうたれて落る木葉かな　摘山

竹柏
山ふかみ有明がたの霜のうへに風も音せずちろ木葉かな

〔明〕

あかし丸といふ舟にのりて、浦あそびにまかりて

夜錦 月の舟これほのぐやあかし丸　明石住 松葉

同 天もあかし雲も明石の浦の月　同 露山

同 はれきりておもひ隈なし秋の月　岡田 豐方

うなづくは空と水との月見かな　小野 愚侍

日は入ど暮ぬは梅の木ぶりかな　栢舟

雨後

壁落て枸杞の葉青し雨あがり　寸好

人かげを地に黒く見むけふの月　栢舟

後六聖歌
人影在地仰見明月

この月に足のうらみる平砂かな　未陌

冬あかし家にそふ木と土手の草　沾徳

〔闇〕

火をふりて片手ざ下る鵜飼舟　巴袖

螢見てもと来し畔は闇路かな　岩泉

入船や月夜に黒む浦すゞみ　杞柳

月の夜も川波くらしかいつぶり　姑川

〔顯〕

捨石を雪のそだつる春日かな　好柳

〔密〕

幽

夜錦 鶉こそあゐとは見えて粟ばたけ　休甫

同 うづら鷹立はなれにくし草のもと　風虎

桐
立はなれにくき草のもとなり

麥ふかき徑横ぎるうづらかな　沾徳

草刈の笠のみ動く夏野かな　松水

松むしの音にほぐしたるかゝしかな　花里

日光へまかりける比

みし山やどこへもてゆく今朝の霧　岩亀

並木青葉といふ題にて

たかびくも青葉そろへて並木かな　沾徳

長屋王
松-烟双吐レ翠櫻-柳分含レ新

朝露にぬれ色見する茄子かな　晒若

一かぶの山吹のみぞ庭の雨　岩松

山のはやほそうたなびく初さくら　宇八

三百六十番歌合
いつまでか雲を雲とも詠むらん櫻たなびくみよし野の山

信太
切口や虹を見せたる山西瓜　加雲

降雪を波間にくふか江の鷗（原註）食　飛泉

白躑躅くまや夜明る鳥の聲　口静

關の戸は雪より明てなく鳥の聲に中〳〵夜ぞ殘りける

夏草の色にはほめよ園の紫蘇　竹塢

宮谷の檀林にあそびて

山〳〵や日輪つほむいはつゝじ　虎銀

松かぜの露やきはづく垣の蔦　龜翁

誰か紅と蓮だけ低き野路の池（原註）丈　沾徳

行かたや夕日にむかふつゝじ賣　岩翁

にくまれて若葉や見する花の雨　午竿

張南軒
莫レ嫌紅-紫都吹盡新-綠滿-園還可レ人

逍遙院
花のあとはうす紅に薄もえぎさてしもあかぬ風の花哉

音　聲

川音の時雨の亭や屋形舟　未琢

あの男筏に寢るか小夜ちどり　山夕

八九月風やいづこのほらの貝　嵐雪

虫の音や家にいかなる古ばしら　東潮

何げなき聞をきく時のほとゝぎす　孚先

曉の螻の音くたくきぬたかな　花雀

江の島よりかへりて

宿涼し耳に殘れる波の音　松齊

星寒て重たき鴨の羽音かな　肅山

風のよはりて笛の筒音かな　東籬

櫻川
夜半にうつ砧は夢の敵かな　大坂 歌舞妓

蟬一聲羽にしほりけむ夜の露　溪石

風雅集
空はれて梢色こき月の夜の風に驚く蟬の一聲

鶯の聲なかりせばめじろかな　玖也
なくかたの寺をとはする燕子かな　雅奮
木葉來て小垂にたまる嵐かな　志虞
盃に落よ芝野の夕ひばり　杏林
谷越は二聲きかむほとゝぎす　東 金兼世
木から木へとぶ間を蟬のやすみ哉　道枝
五月雨に鉦皷のにぶき野寺かな　釋 慈白
足になるはすごき山路の落葉かな　源棟

蘆州ノ葉落聞ニ犬行ー
温庭筠 紅葉聲乾鹿在レ林ニ

ほとゝぎすなきて障子の紙厚し　午竿
夜も明ば肩臂うたむかちころも　正次
鳴立る蟬にはしるか下り坂　沾徳
千鳥なく方や留主なる海士の家　横几

【響】

つきがねのひゞきに動く柳かな　才麿
暮の蟬ひゞきうけつぐ筧かな　不貫

【光】

くだけてもそつこそなけれ淺の月　三峯
天の戸のすかし物かよみかの月　光貞妻
花ならで草に火ともすほたる哉　昌雲
攝州 川水にちりて跡なき花火かな　萬年子
光るかたおもへば狭し水の月　今先
日にちりてつかむに高し飛ほたる　春嶋
挽臼の哥やほそめの窓の月　調水
夕月やをくる樵のかげぼうし　林巣

【香】

木々の香をのが物なる炭火かな　且水
菊の香や瓶にもあまる水に迄　其角
柚の花のその中の其にほひかな　普船
菊の香に酒はまぎらす庵かな　春水
我門やあやめ一間香一間　沾徳

【直】

若竹のすぐにあそばぬ人は何　磊珂

逍遥院
すぐなるたゞ心と見るも呉竹のうきふしあれや世にあはずして

【柾】

小鮎見てすぐに覺ゆる堤かな　遠水

朱氏ノ歩隨テ流水ニ一玩ニ晴漪ヲ一

【背】

鷹人に牛よけさする堤かな　岩翁

一口を我物に見ぬくず屋かな　寸好

後嵯峨院御歌
我宿の物なりながら大井川せきもとゞめず行木葉哉

古今
櫻花ちるたばえこそとゞめざりけれ

【從】

木兎や主もち貞のつくの上（原註）梁　龜翁

段〻に降たはみけり檜の雪　杉風

心よりわざはもつれぬ鵜繩哉（原註）業　寸竹

たぐられて舟ひきよする柳かな　溪魚

【美】

飛消る蛍の夜露やよばひ星　立圃

松しまのうちはなれ島といふを

櫻川
あるが中に雪に一景はなれ嶋　風虎

同じく小町島を

同
月になを女にて見たし小町島　紫塵

篝下
女にて見たてまつらまほし

雛子の尾のやさしくさはる菫かな　女 秋色

岩城の岩間といへる所の梅を

櫻川
星落てこれぞ岩間の梅の花　玖也

左傳
隕ニ石于宋一五ツ　隕ハ星也

花負ふて都を笑ふ樵かな　松樂

駕籠かきが花ふるひ出す布子かな　横几

夢さめて蚊屋に権ぬいものせり（原註）綸　作者不知

東坡
石榴開遍透簾明

その實とる爲もわすれぬけしの花（原註）罂粟　春魚

月花の物いふものよほとゝぎす　野梅

見て居れば花のちり込口甘し　岩翁

ゆひたるを無下にやほどく笹粽（チマキ）　摘山

白桃や誰にも恥ぬ今日の咲　近衛氏 幽意

誰家と女ゆびさすむら柳　紀氏 德流

青柳や瓦ぶきなる軒の妻　虛谷

海棠の花は滿たり夜の月　晋船

友の別墅に一夜かたりて

海棠の雨見よとてやとまりがけ　沾德

陳简齋海棠詩
欲レ識ニ此花奇絶處ヲ明朝有レ雨試ニ看來セヨ

【盛】

花ざかりとはゞ都の酒屋かな　守武

夜錦 これは／＼とばかり花の吉野山　貞室

櫻川 乘物やしばし里ある花の山　維舟

しばし里ある花のみさ山

山やみなうつりて京の松かざり　朝雲

佛骨表をよむ

しばらくは蠅をうちけり韓退之　其角

【衰】

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　芭蕉

病後對月

月ゆへに痩わらはるゝ明日もがな　沾德

【常】

やつれても浮世をしらぬかゝしかな　子堂

宗祇
うつしなくも我影ながら世のうさを知らぬ翁ぞうらやまれぬる

七十余になり侍りければ

信太 追つをはれつ項羽高祖や年の暮　任口

寒山
可レ歎浮-世人悠-々何日-朝-々無レ閑時-年-々不レ覺レ老 逐傷レ求ニ衣-食ニ令ニ心生ニ煩-惱-擾々 百-千-年去-來ス三惡道ニ

くる／＼と堀江の鴨のうき世哉　山夕

追ふ人の戻るを追ふや稻すゞめ　達水

刈てほす田面のにはの稻莚もさめある身にさはがしい世や

はかゆかぬ心も越ることしかな　虎銀

正月や何世にあそぶ僧の體　芭風

うき身ならばよかずはてゝ～雲水にかへる

やいづこ野べの古寺

雉子も世に追たてらるゝ廣野哉　沾德

愼言

一言の毒には輕しふぐと汁　溪魚

東坡ノ巫峽之水能覆レ舟若比ニ君心ニ是安流

よの中をわたりくらべて今ぞしるあはの
なるとは波風もなし

變

夜錦 世の中はいつかくいつくかへり花　釋 友圓

旅寓

京に居て京なつかしや時鳥　芭蕉

芋虫はきのふの夢や飛胡蝶　南 元順

山茶花や竹子どきの垣隣　探泉

長刀さはりし草も枯野かな　岫雲

鎌倉にて

和田秩布麥畠とぞなりにける　一鐵

康節洛中ノ詩 年々二月凭レ高望 不レ見ニ人家ヲ只見レ花

舊友の塚にて

つれだちて道はぐれしや野べの花　沾德

解耕錄 再拜ニ荒墳ニ感ニ昔遊ヲ

京に年を經て仁和寺の花見にまかりけるに、先年江戸にて、芝の雲
上野の櫻咲にけり　とたはぶれし
をおもひ出侍りて

わすれては上野のさくら咲にけり　一鐵

張說 去歲荊南梅似レ雪今年薊北雪如レ梅

すがたもかへで田舍に住ける比、
舊友あまたたづね來りけるに

食たけど目には色あり窓の梅　閑枝

司空圖 誰料平生臂レ鷹手挑レ燈自送ニ佛前錢ヲ

岩城に住侍りし比、江戸に來りて

夏山を出てあかるしもとの江戸　沾德

韓愈 いつのまに身を山がつになしはてゝ都を
旅とおもふなるらん

厭

市中にはなれて

身は里に麥まくを花の日數かな　自準

無住處

いね〳〵と人にいはれつとしの暮　路通

あるじの僧所望に

一重ざくら世を見切たる庵かな　尺草

素性　いざ櫻我もちりなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

すて人は裸になるかころもがへ　永水

たなばたにかす衣なき沙門かな　笑松

〔願〕

とし暮ぬ春を相手に又ねがひ　沾徳

基俊　ちぎりおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

〔逢〕

駿河かへりの人に

待かひに笠ほせ江戸の初しぐれ　花律

京の人にあひて

白からじ京のお月から江戸の雪　女 秋色

行脚の僧雨吟の所望に

寒いかゞ雲に起ふす夕あらし　釋 任口

杜甫　雲臥衣裳冷

岩城に住侍りし比、友にさはれて

君火をたけ我茶をつむも藪の中　沾徳

[illegible]　湖上新正逢故人情深應不咲家貧明朝別後門還掩脩竹千竿一老身

友ひさし年かくされぬ夕すゞみ　閑枝

司空曙　乍見翻疑夢相悲各問年

〔別〕

櫻川　出替りやつれなく見えし若いもの　萬年子

路通にわかるとて

見やるさへ旅人さむし石邊山　尼 智月

麥くひし雁とおもへどわかれかな　尾州住 野水

田舎へゆく人を芝までをくりて、しばらく寺にあそぶ。

梅はあり爰でのまずば茶屋の酒　文桂

王維　勸君更盡一盃酒西出陽關無故人

春の疵をおもへ旅だつ友の數　沾德

國にかへる人を中秋にとゞめて

旅人のかへり支度やけふの月　龜翁

雍陶
秋來見月多歸思

別芭蕉

松島や名にとめられぬ春の旅　沾德

張笠のそりゆくかたや秋の暮　珍碩

徂來子京へゆく時、歸る日をちぎりて

死るよりましと待日や玉やなぎ　沾德

蘇武
生當復歸來死當長相思

〔羇〕

常陸國日高寺にて

帚によりとまるや秋の日高寺　梅翁

山茶花に糞する鳥も旅寢哉　沾德

唐詩鼓吹
鳥在寒枝動棲影

雲雀なく日や蓑笠のすて所　桃隣

關までは笠にありしが京の雪　姑川

妻子ども風やひくらむ古郷の月　一鐵

杜子
今夜鄜州月閨中只獨看

廣季月前旅情
妹がりに衣かたしきよもすがら詠むる月な妹見るらんか

月も旅の物いひかはせかけほうし　岩城住 守常

昔ほどの扇物いへ旅のうさ　綾部住 沾山

名所見て母の衾をおもふかな　分虫

稲妻や何にこたへて心ぼそき　乙州

源爲憲
古繍有杜秋風涙旅館無人暮雨魂

夏野ゆく沙をしるべの濱路かな　沾岵

相州片瀬川にて

霧の海風わたるかたやかたせ川　玖也

綿入もあはせとなりぬ旅の宿　忘水

太平廣記
春來僅七日家出已三年

能因
夏草のかりそめにさてこしかども難波の浦に秋ぞ暮ぬる

〔泊〕

須磨の浦や師走のはてにながめゆく　一鐵

閑中ノ坐談ニ曰 風景不レ殊擧レ目有二江河之異一

船頭が夜明やのぞく篷の雪　沾化

色黒く湊はづかし夕すゞみ　快易

夕顔
ふなみちのしわざにや、すこしくろみやつれたる旅すがた

〔戀〕

初戀

花に出たつ共一歩より悔なげき　春峒

忍戀

うつ衣忍ぶ夜比の氣が減ぞ　沾徳

契戀

是等さへ暮のちぎりや花火船　横几

待戀

待よひやつれなきほどは蚊も食ず　春魚

逢戀

初雪やこよひ祝言ある所　岩翁

後朝の心を
（原註）躰

身をかざてまた有明の月見かな　隨好

浮遊觀
身にさまるおもひやむかし立花のにほひにぬるゝさよの手枕

待またぬ夫婦や笑ふほとゝぎす　遠水

ひとり寢の床ふ寢もし竹夫人　由平

我無二紅袖ノ堪ルレ娯ムニ夜ヲ對ス青奴一味ノ涼

遊女の持し扇とて見せける人に

扇の繪誰月草はしほりけむ　春耕

梅をるは夫とおもひの市女かな　備中庄 梅員

秋ひとり琴柱はづれて寢ぬ夜哉　荷兮

藤は暮ぬ女首筋くろくとも　西鶴

くゝり目を見つゝ夜長き枕かな　沾徳

西行
待かねてひとりはふせごしきたへの枕ならぶるあらましぞする

小夜半を鵜飼が妻の丸寢かな　尾張 專吟

蓄妾娶りて

妹我に節上下の隱當けり　伊勢 隨友

人の妻となりて別舍へうき侍りければ、日ごろもちなれしでうさ、

今は似あはぬものとなりて、むかしの人になくくり侍るとて、すがたかはりたる事などかきてつかはす。おくに

衛士篭は蚊火にすゝけじ櫃の底

おさこ返し

なげくぞよ身にもかまはぬ田植時　岩松

足跡を下女笑ひあふ塩干かな　百里

一夜酒とはむ女の二日酔

風虎翁の句合に寄月妾といふ題にて

信太 のさばるや手枕なるゝ閨の月　一鐵

同じ道にさいひかはせし人に

追つきてぬけがけ恨む花見かな　沾徳

見待李節推詩 東坡

路人皆言君未遠騎馬少年清且婉

うはき氣なる人には見せじ閨の雪　河雲

音にきくたかしの濱のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

くらき戸に見る良しろき曙かな　友雅

匂宮 いひしらずなまめかし。はつかにのぞく

女房なども、やみはあやなく、心もとなきほどなれど

蚊屋にひとり鳥を篭の夕かな　露傾

色紙や色このみの家に筆始め　遊女 利生

古今序 いろこのみの家にむもれ木の

野遊ふたゝびして

み し女すみれとかたるきのふかな　朱陌

崔 五 人面不知何處去桃花依舊笑春風

(原註)飽 あかれたる閨も雪見る夜明かな　魚水

樂天 紅顔未老恩先斷斜倚薰籠坐到明

夜錦 たなばたや戀せよとての生れあひ　季吟

神

日吉社奉納の百歌仙、遠水勸進せし時

幾世見む花に寝起の神樂人　仄船

おなじ比

卯花よはへある愛を神の鈴　露沾

諏訪祭

御柱神慮すゞしや夏木立　闌幽

瓊々杵尊(ニニギノミコト)を
散錢やひろふも惠み山の霧　溪魚
火酢芹命(ホノスソリノミコト)を
豹犬(ママ)も花もぬししるいがきかな　沽德
神〳〵は八隅(スミ)にふかし内はさり　龜翁
諏方の湖を
湖の御わたり久しあか氷　可言
たく人の齡見明す庭火かな　詞賤
陸奥鳥井坂にて
信太　神の旅ありとや名づく鳥井坂　岩城住　知信
卯花や田中の宮のありどころ　姑川
龜うきて今年もいはへ水やしろ　松水
中臣祓　大海原仁押放津事乃如久
押はなつ氣を船頭ぞ御秡川　沽德

釋

十方佛土中唯有一乘法といふ心を
夜錦　雪にとへ名所〳〵と法の道　西武
信太　身や雪の行衛もしらで富士詣　釋　從古

序品
如是我聞の心を
稻妻や二度目に渡る丸木橋　釋　白銑
譬喩品
悉是吾子の心を
似我(ジガ)蜂にならぬ子もなき御法哉　沽德
信解品
以佛道聲の心を
をぢられてたすくる道やひた(原註)引板の音　遠水
授記品
無有魔事
稻妻や足どりおなじ舟のへり(原註)端　岩翁
又
くもりしかふらで彼岸の夕日影　其角
法師品
法華最第一
色づきて葉にはまぎれぬ杏子かな　釋　白銑
提婆品
龍女成佛
帆八分月や見をくる南かぜ　横几
神力品
現大神力
法の花ちるや高座をたゝく音　其角
如渡得船
御忌やよふ濵岸様と渡し守　沽德

聖護院宮峯入ありしを拜見して

夜錦　峯入は宮もわらぢの旅路かな　梅翁

七回忌追善

同　花やけふ過去七佛に手向ぐさ　風虎

同　ぬかづくや人大寺のせがき米　玖也

万葉　がきのしりへにぬかづくがど

風虎翁七回忌に、寄月釋教

同　もとの道にかへるや魚も放生會　若狹　藤呂

水の月汲てひろはむ栗蒲萄　沾德

櫻川　ふしておもひ起てかぞふや佛名會　山田住　念助

寒念佛世をすて習ふおとこ哉　百川

たのむより外なし御忌の珠數のつや　浮萍

歌撰　たのむてふ心やなしへさくのりを身には
聞うる道しなくとも

去此不遠

蓮の實や飛でもおなじ池の中　尺草

うちむかふ心世話なし香と花　松柏

菅家　香ハ自ニ禪心一無レ用レ火ヲ　花ハ開ニ合掌一不レ因レ春ニ

いとふとは是見る事か寺の月　沾德

祝

同じきをおなじくなすや門かざり　仄船

松出せど盡ぬを山のかざりかな　孚先

今朝や春唐迄隣る笑ひ聲　午竿

人丸の柿食つまむやまと人　中子

鳳凰かけさ鳥がなく吾妻の春　風虎

富る棟なにを照しけり日の始め　闌幽

窓白し梅に對して筆はじめ　秋航

蓬萊を見よだいだいの其葉まで　尺草

万　たちばなの實さへ花さへその葉さへ

品々に德かはりけりひらき大豆　芒風

千歳の一葉出らめ蓂莢　楊水

廊（ホンドノ）に蓬萊重き歩みかな　友靜

あひおもふ酢貝や祝ふ雛あそび　幸女

（原註）相思子

元日やはかぬ嘉例も松の塵　洒宥

元日や帯仕直せば松の塵　松葉妻

小うたひやふしさまざまの夷講　松齋

御代ぞ炼西より北より南より　杏翁

詩經　自西自東自南自北無思不服

名月やこのたのしみを子孫迄　濃春

月花や詩歌にほこる筆始め　露芝

菊賣や障子の外も千代の聲　松吟

新宅を祝して

杉の香も月に潤ふ家淸し　且水

家にある蓬萊作り覺けり　沾德

莭小袖いくとせ同じ紋くばり　龜翁

冬草のいさをし貞やけさの春　春峒

うつゝにも富士みる年のまと哉　材種

莭小袖ゆきの長きや老のさち(原註)幸　岩翁

月花の威は元朝の賀にはへり　露沾

七人五百七十歲白家に會せるとなおもふに、予三十になり侍ればいまだ高年のたのしみ、うらやみてもはるかなり。若年より藝にあそぶ人をうらやむに、七人百十五歲、なを五百七十歲の春秋をしるべき友と志をよろこびて元祿三年十一月上旬に合歡堂によびあつめ侍る。　沾德

霜の後の梅しる人よ白髮迄　望月

いろりに冬の家居かしこき(原註)堅　且水

一日のにごりも月に井の澄て　栢舟

馬のわらはむ音も秋かぜ　沾化

枯竹に雙蛋かまとふからすうり(原註)鷄瓜　沾化

ひろへとや推當るすげ笠　沾峠

ウ

けふも又かよへる寺のうつし物　龜翁

呑する爲に酒强ぬ顏　執筆

笑ふさへ事いぶかしき妻ひとり　望月

戀もおもはぬ旅の寢がへり　春水

啼たつる地鳥もちやほも同じ村　栢舟

さむさに馴る舟つきの犬　且水
冬草の一撫づゝの深みどり　沾岵
霧のまがきにまきをわるをと　沾化
はる〲と庵にはこぶ施餓鬼米　春水
月見の場とて編る竹縁　龜翁
咲てしるとり木の花の出來不出來　望月
なりはひ(原註)業せはし野にいそぐ春　栢舟
名
一村は彼岸まうでも聞合せ　且水
老ては人にをそき物食　沾岵
任國のはてぬ間の氣遣はれ　龜翁
たしなむほどのしるゝ釣竿　沾化
橋に來て舟の噂の夕凉み　栢舟
開帳ありて續く茶屋數　且水
こゝろよくそだちし迄の楠の年　春水
稻員ふ馬のかへるいりあひ　望月
笠かりて悔るほどなる露時雨　沾化
新酒あるかと市をとふ人　龜翁
てる月ににほひてひでの燃殘り　沾岵
ウ
峯入ごにいつもよる家　春水
ほころびをぬふは耻ざる女の子　且水
誰うたがはむ此文のかさ　沾化
煤はきに見出す昔の物の沓　望月
京をそしらぬ咄めでたき　龜翁
花の樂先あつからず寒からず　栢舟
舞臺の霞直垂の紋　春水

望月十九　春水十九　栢舟十七
且水十六　龜翁十五　沾化十五
沾岵十四

世に(原註)筧さとせ一筋つきし花の道　露沾
春をしる友五歳から百　沾徳
霞つたふ水も都の味をえて
家作るとも見えぬ家込
樫松のみどりながらの今朝の月
稻の名多くはなす駕籠かき(原註)舁　春峒
帷子の縫目に殘るあつさ也

古風をたくむ茶湯わきざし　材種
ウ
静けさは隣もひと(原註)隱の下屋敷　遠水
藪する音は柴つけし馬
袖ごしに弓かたけても貞寒き　遠水
君のいせい(原註)威勢を妻に夜がたり　未陌
こひいまだ後生心と四分六分　孚先
櫻にとをくまはる片町　横几
せり(原註)芹なづなとうふ(豆腐)の名にはたがひけり
つけ(原註)鶫にわらへばけに繪にもかく
神主は歌よまぬしもよむと見え　寸竹
邊二段の池水はよき　探泉
むぐろ(原註)鼹もち行あとあかす(原註)明秋の月　松齋
わらふ聲にて小すまひとしる　芭風
母毎にうつ役なるか唐衣　忘水
釜かす跡の火影ある暮　子堂
二
茯苓(ふくれう)を見付てをくる村の醫に
硫黄(ゆわう)の香する山の堂守　岍平
へだゝれど耳にはなれぬ海の音　虎笒

三田伊丹の冬の荷の高
すかし見るつむ(原註)紬ぎまばゆき朝日影　松塢
猫うしなひて夜の寢にくさ　飛泉
おもひつゝよりそふ障子うちたはみ　岩松
切紙ときて名やまぎらはす　河雲
めさしよくぬきおぼえたるさかまつ(原註)逆睫げ　虚谷
老尼のうへはいとふくず水
月の外雨はこはぬに茄子畑　午竿
住とて土地にまじる貝がら　同
夏冬をたれ敎ぬふ衣ふたつ
乳母がまともその子にやしる　芳津
二ウ
中〱に(原註)槌つち音高き內普請
爽おろしのふたりづれにて
髮をゆふ比に出舟をしらせけり
染粉染木も任す國風(ふう)
麥の根に悦びそむる雪一度
田土の壁の干て夕日(原註)漏もる　孚先
町屋さへどこやらさびし寺境　探泉

其村ばかりくすみたる長　寸竹
酒しゐる事も上手の菊作り　(原註)強
十三夜なりと此會の月
あきらけき御代のためしの躍うた　友雅
模様(もやう)には目のこへてしらきぬ　(原註)練
山守の花を乘るは廿日ほど　子堂
片羽ぬらすうきくさの蝶　百川

三

乘掛も聲の下なる夕雲雀　春耕
ゆかばよき景あらむ脇道
くねとに若かへるでのさし出る　鴎水　(原註)楓
おなじ丈にてならぶはりの木　魚水
風呂日とやあたま湯氣たつ脩あまた　松柏
かさねたる書の陰くらくして　喜水
いひとげず戻る首尾なき夜の床
やをら出あふ兒とほうずり　(原註)頰摺
掛香の糊(のり)はなればあらはれむ
珠數くるとてもなげきをふ山　寸好
旅は只不慮に見さする軒の月

手燭に虫の飛ちがふ秋　溪魚
いりたちてあらたに凉しうす羽織
どこともなしに友さそふ暮

三ウ

かくしなば戀とおもはむ姉の文　隨好
餅きる糸の絕しちぎりや
裏白のうらかはきても賀の一つ
しをたまふより花をまつ杖　遠水　(原註)賜死
霽げとふ臭のおれうの靜か也　沾荷　(原註)受領
垢ながさする奇麗なる僕　春魚
たつ衣の筋にさしたる針印
あげ屋のいびき笑ふ宵の間　(原註)廓
見かへりてにらむも物の下心
いさめられたる酌の追つぎ
居すはれる風に火鉢の灰たちて　横几
我子のうちし小鼓の乙　吼平
夕月にかへりては先袖だゝみ
端山は十日をそくもみづる　虎笒
名
拜みても秋飽たらぬ水無瀬殿

太平のとき亂はうたはず
身のかせぎ暮てはいこふ(原註)息道ありて　材種
御座も敷ざる舟並ぶ岸　雅雀
命とは敵討えし今の事
我ももと武にほこりたる禰宜
朝起の徳は早苗の露を見る　芭風
(原註)釜木
まき直切るとて引とむる牛
こゝかしこと(原註)鳥立たちうかがふ人のせい(原註)勢　春魚
(原註)粥
かゆもる茶碗もろ手してだく(原註)抱
名月の九つ過はものゝすゑ
(原註)堪
たへてやは寢る蚊屋おさむ秋　沾荷
谷組をしまへば國の鱸（ろ）を思ふ
甥もちながらいとけなき叔父　虛谷

ウ

はしちかにご(原註)後達たちふりむく呉服物
風にふきちるさかづきの薄（はく）
(原註)瓦葺
かはらふく山にも鳥の落す魚　未陌
汲こぼす非の水よぐる蟻　春蘭
わき能の役やあんだのたて初め
貞の赤きを友に聞あふ　忘水
たのしみはみな一樣の花の春
ちいさき場には摘ぬ七種

發句たまふ君あり、附句たすけし友あり。こゝろざしおなじきをもて獨吟となりぬ。

元祿壬申年九月下浣

通油町　佐藤四郎右衛門

蓮（はすの）實（み）

賀子撰

（蓮　實）

花は散もの、月は入ものにして、是を世のさまとす。貴賤僧俗われに着する故に、吾とくるしむ獅ゝ身中の虫なり。かしこき人はまずしきをたのしみ、富て禮をなせとこそ教けれど、それまではいふにたらず、ねがふもむづかし。右指左指造次顛沛、東西に走り、南北に起臥し、心のおもむくにまかする事、蓮の實のごとし。

紅葉庵
賀　子　［印］

元祿四未次星稔
仲穐日

賀子

蓮の實におもへばおなじ我身哉　西鶴
世にある藏も露の入物　同
名月の朝日に影の替り來て　同
まだ夢ながら碁石撰分　子
船寄て延しにあがる磯の濱　同
白鷺人をおぢぬ粧ひ　鶴
ウ
山櫻限りの身とて二百歳　鶴
昔にかはる寄生の梅　子
豐國の奥は小蝶の羽の弱シ　同
當座の嵐手眞つれのく　鶴
酒ゆへに常の魂ィ闇と成　同
借ス人もなき大年の宿　子
京の伯父田舍の甥も輿かきて　同
官女の具足すゝむ萩原　鶴
房枕秋の寐覺の物狂ひ　同
血を忌給ふ御社の月　子
猪に折られながらに花咲て　同
海棠睡る唐人の留守　鶴

二
紅のチンタ流るゝ春の水　同
　小皷出來て時-服下され　子
今日までは見て登ッたる雪の富士　同
　扇-面逆-心さいご近づく　鶴
状箱を燒捨がたし行螢　鶴
　今の身請は袖のむら雨　子
物毎に堪忍始末戀止メて　同
　弘誓の舟に乘からはみな　鶴
白銀の金(コガネ)の鯛も醜(ナマグサ)し　同
　礒にさむる夢の本意(ホイ)なし　子
忍び道夜るの芭蕉におどされて　同
　月を妬める後の母親　鶴
ウ
追訴訟身の程しらぬ秋の蟬　同
　堂こぼたれて山のさびしき　子
谷川や岩にとゞまる笠の骨　同
　手枕をして鯑(サンセウ)魚寐る　同
神農の代ゝにおしへの花の露　鶴
　桜(ララ)葉(ヤウ)にかく春の初文字　同

蓮の實を袖に疑ふ霰哉　西鶴
　旅寐の宵を荻に起され　賀子
月の前子等が鬌(ワソムマ)引つれて　万海
　都に甘き酒斗りけり　輙士
橋掛し木工の寮(ツカサ)の恭シ　子
　語り傳へて人肌の岩　鶴
ウ
書事の文字分ち有物狂ひ　士
　名をうき雲と呼し傾城　海
雨の日の富士迚外の戀憎し　鶴
　牛休まする笹の離れ家　子
一抓ミ行脚の脊に物くれて　海
　重ね着てさへ身の氷る朝　士
更に今水尖(スルド)なる筏川　子
　小宮を二度に見たる稻妻　鶴
忍びつゝ月の闇きに顔撫て　士
　年恥かしき心根の露　海

身の欲を花笑ふべき薬喰　鶴
　五加木にまじる梠の生垣　子
二
かしこさに鮑とる雉子の巻つかれ　海
　修行のむかし胸先の疵　士
人多き時には遲き渡し舟　子
　下女が泣出す波の塗笠　鶴
逢まではたゝますに置夜の物　士
　朝飯(ゲ)も喰て面やつれぬる　海
遷宮の七日内陣鳴止ず　鶴
　さす形リ悪き穢多が大小　子
折ル人もなき片野べの山慈茹(シヒトタケ)　海
　鼓をたくむ稲の虫追　士
今朝の月寐ぬ道場の腹立ず　子
　夢になる身を巽見甲斐有　鶴
ウ
讓リ来て鎧めさする守の殿　士
　よろほひ出る百歳の民　海
時津海火を嚙ム鳥の名のしれず　鶴
ためすにたらぬ今日の雪掉(棹)　子

咲初る花の骨髄いつか見む　海
　三十日つとめてむすぶ櫻戸　士

蓮の實や星の影うつ池の音　杏酔
　月見んために伐(キ)らす松の木　賀子
行雁に國の軍のさま聞て　同
　生レつきから不敵なる兒　酔
入相も嵐も通す破レ垣　同
　まだ如月に咲ぬ水仙　子
ウ
身の科を今日も重ねん雲雀網　子
　春もあはれは同じ古塚　酔
見る色の物うき衣のうしろ紐　同
　岩間〱をくゞる獺　子
事觸にしばし時雨を止(ヤメ)させん　同
　鼻を赤めて寐入山人　酔
名月やさぞ大名の朝朗　同
　手づから作る百菊の莟　子

秋の末聲ふるはせて蛩　酔
宿直する夜の小袖あらため　同
花の雨明日一日に散過ん　子
初雷の落る田の中　同

編集にいとまなく一折にて過ぬ。

蓮の實の飛間度絶て夕哉　芦貢
顔さに月を隠す桐の葉　倡和
礎打相手の眠リ移されて　知童
團子を炭に燒過しけり　貢
來る毎に猿舞さする向ひ殿　和
昔盗人よせかぬ頬つき　童
ウ
三日とは迚もたもたじ深見草　貢
水呑ミ盡す宮かたの城　和
似せにくひものは男の聲ばかり　童
待ッ間に畫ク雪を見給へ　貢
錦木の朽ぬ昔は何の木ぞ　和

明ケなば牛に乗セん修行者　童
きのふまで嫗七十の夜泣して　貢
今年の綿は塵殘る也　和
月夕是非に離さぬ酒の連　童
鈴虫入レて返す乗物　貢
花守を親と云んも耻敷　和
まだ寐ぬ前か戀よ朧夜　童
二
水ぬるむ庭籠の鴛に紙燭して　貢
誰ソや貫簀の角を損ひ　和
雷は止メと冠をかたぶけず　童
富士見へ初て鞭打タぬ駒　貢
用なしが暮しかねたる閏年　和
物喰ヒと時と畫寐起され　童
難面も位牌に歸る妻ぞうき　貢
又も泪に穢す閼伽棚　和
跡なきも定ぬ形の蛞蝓　童
髭ぬくまでよ名月の雨　貢
穐の夜や物の調子の能移ッ　和

中にひとりが踊日にたつ　董
乳（ウ）もらひし昔を姫に恩にきせ　貴
けふも車のきしる久留須野　和
狩衣にためても花の重さなる　董
額讀うちに霞む樓（タカドノ）　貴
糸きれば我拾はんぞ紙鳶　和
帶のとけたにそばへぬる蝶　董

水中にあつて荷葉、水をはなれて蓮ン、はじめて華發ては芙蓉のどし。草紙になりてはすのみ也。

藕子やひろはれぬのははすに成　才麿

春

としもまた梅見て櫻藤紅葉　大坂 西鶴
有がたや富士を見て來て江戸の春　江戸 湖春

正月四日ヲ題ス

大津繪の筆のはじめや何佛　同 芭蕉
夕まぐれたゞ咄す有山ざくら　京 信德
大佛を包む霞のふくろかな　同 圖水
若菜摘婦（フフナ）のおがむ地藏哉　櫻塚 西吟
櫻野や蝶跡へなり前へなり　京 定之
黄鳥の飛出る谷のいばらかな　大坂 才麿
うたひ垂供のぞめきや若菜狩　同 定明
此身にも若菜つみけり比丘尼寺　同 呼牛
春日野は大佛若きとしかな　越後 蘭月
綱引や穴一のあな踏にじり　大坂 倡和
とし〳〵のよきもの隱す霞哉　伊勢 未白
梅が香に生魚（ナマ）遠く成にけり　和泉 重賢
朝〳〵や梅の露とる化粧皿　大坂 知童
釣鐘を撞ヵば動かん土筆　京 如稻

御魂（ミタマ）やの道付替んつくづくし　大坂　蚊市
牛の喰ふ舌より余る蔞哉　同　柳枝
宵闇に白魚見知る浦半かな　同　昨非
白魚や官女の出る臺所　同　賀子
白魚も煎（ニ）られぬ先はずゝ黒し　同　藍橋
白魚や法師の喰ても目の立し　同　花瓢
醉のあるうちは濡行春の雨　同　直成
春雨や所ゞにひゞきて鐘の音　同　宗準
春雨や黒子（ホクロ）算ふる姉妹　同　万櫻
板橋の繼目くやはるの草　同　芦錐
酒買し事なし我は桃の花　大坂　由平
柴船にさはり初る柳かな　同　川柳
川向ひ柳におもき入日かな　同　帆睡
船かりて渡れば遠き柳哉　同　宰賀
餅花にきり殘されて柳哉　同　賀子
苅株にまだ鳴出さぬ蛙哉　同　油髪
蛙鳴クとなりの井戸の淺サ哉　同　呼牛
飛ぐて石に顔うつ蛙哉　島村　生水

妹が手の爪の跡ある五加木哉　大坂　幸方
糸つけて飛す胡蝶のよはひかな　同　見里
古池に鷺のよごれぬ田螺哉　同　李溪
のぼりては九輪を落す雲雀哉　大坂　竹亭
蝶ぐに行あたりたる雲雀哉　同　倡和
人馴てさはらぬ程のつばめかな　同　知童
そろぐと寐（イネ）あしくなる彌生哉　同　芦賣
夕東風や下官のうらむ水鏡　同　柳枝
もどかしや鐘撞堂の朧月　同　矩久
春の日にきらぐみゆる都哉　同　葛民
青からぬ雲井みにくし春の空　同　巨岩
虎杖に酒のむ尼の菴かな　伏見　奴睡
虎杖に蛇をおそれぬむすめかな　大坂　圓水
齒黒していたどりかりの娘哉　同　李溪
いたどりは母にかくせし土産哉　同　梅子
雛あそび色の白きも殿御哉　同　椿子
舳（ヘサキ）は櫻時分のわらひかな　同　重成
黄昏や藤女首筋黒くとも　大坂　西鶴

白藤に宮あたらしく成にけり　同 元知

津の國は藤よむさしは角田川　江戸 和汀

行ほどに麓のやうな山ざくら　大坂 來山

吉野にて

花を出て花に入ぬる日足哉　同 芦貢

駕籠はあれど散らぬ花踏月夜哉　同 夕幽

白壁に目を休めけり山ざくら　同 綠水

干幕はきのふの花の雫かな　河内 亭笑

糸遊に杖のとゞかぬ童部哉　大坂 芦貢

花散て水律義なり岩の鼻　同 久永

先ッ人の咲良を見する櫻哉　同 且水

うつむひて三十日に戻るさくら守　同 歌麿

星の林明日見るまでの櫻哉　大坂 西鶴

算程に散ころ花のながめかな　同 重榮

花過てまだほとぼりの機嫌哉　同 油髮

夕毎に人の空見るさくらかな　同 杏酔

人ゞにまづ寺をとふさくらかな　同 朝秋

其後の無音はゆるせ山櫻　同 扇士

三日月の二つ見られぬ汐干哉　大坂 達舟

早梅は二年に成ぬ遲ざくら　同 豐流

櫻見に小もんの羽織着るはなし　同 素龍

小男の手に曲たりし藤の花　同 轍士

糸あそぶころや女のまみおもし　同 萬海

舞〳〵が暮春になりぬ花むしろ　同 才麿

夏

子規〳〵とて寐入けり　江戸 調和

馬の蝿富士見んとてぞ下リける　京 如泉

鶏なくや此あかつきをほとゝぎす　江戸 其角

夏の夜も酒氣の果を寐覺哉　大坂 來山

遊君に替りて

身をおもへばいなする蚊屋の螢哉　京 言水

とまらせて草の名を知る螢哉　京 我黒

花あやめ俳言あらん藪菖蒲　江戸 一晶

人とはゞ葺ぬを宿のあやめかな　大坂 轍士

螢追ふ果は夜明るところかな　同　竹亭
不思義さに火をよせて見る螢哉　同　重榮
雨舍り公家としらするほたる哉　同　西流
晝見ては何事もなき螢哉　江戸　朝軒
草にとり又草におくほたる哉　大坂　可幸
芍薬にけふも來て見る小猫哉　同　及市
陳子鳥みつにふたつは木玉哉　同　倡和
勸農の鳥に夜を寐ぬ野鍛冶哉　同　才麿
夜のにしきうき世は晝の螢哉　同　西鶴
杜鵑向ひの家は戸を明ず　同　花瓢
里は雨町家によどめ郭公　同　且水
時鳥聞そこなはぬ躶哉　同　客遊
けふもまた晝寐させけり時鳥　同　李溪
隱江やあやめに垢離を取ル女　藝州　里洞
引ぬいてみれば泥なり杜若　大坂　矩久
入相に笠わすれけりかきつばた　同　李溪
跡見ればきるまひものよ杜若　同　万櫻
里人や孤につゝみしかきつばた　同　龍山

明ほのや塔のぐるりは杜若　南江村　夏炉
皮膚のよき人よ杜丹の花の晝　大坂　春林
蟬聞て夫婦いさかひはつる哉　同　西鶴
山松に蟬の居なをる朝日哉　櫻塚　西吟
蟬聞て馬のかけ出す山路哉　大坂　圓水
待かねて引さく百合のつぼみ哉　同　葛民
聟君の聟のふりよき幟哉　同　幸方
見る人もしたゝるからぬ競馬哉　同　見里
藥玉やみがゝずとても華光彩　同　才麿
粽結ふ片手にはさむ額髮　江戸　芭蕉
卷ながら粽くふべきおとこかな　大坂　白閒
不形なる粽を妹が喰はせけり　大坂　山平
編笠の中に似合ぬ早苗哉　同　竹亭
行過てねぢむく塔の早苗哉　同　呼牛
角ふりて鳥わすれな蝸牛　同　同
なが〳〵しかも柳の五月雨　同　杏醉
五月雨や何國の池の菱の蔓　同　元知
五月雨に徹ぬは碁盤計也　河内　亭笑

夏の槿（ハナ）や獨〳〵の心ざし　蒲村　冬風
三ヶ月や瓜むいて居る渡し守　京　淵瀬
葉柳に一息つぎし隔夜哉　大坂　帆睡
まぼろしに夏帯くけし妾哉　同　武仙
扇折ル女のつかふ團かな　同　賀子
燒付て己レも逃る蚊遣哉　同　芦貴
村雨に蚊のかたまりし窓の先　同　鈴風
俳諧は蚊がうれしがる夜るの席　同　良重
入相を七つ撞たる藪蚊かな　同　可幸
蚊遣火にわざと煙らす二階哉　大坂　自聞
明ぼのは蚊の血を耻る娘哉　同　香葉
夏の日やたび〳〵休む古手買　同　哥麿
夏の川獨ッ女の渡りけり　同　知董
浮鴨のうき巣や水の深みどり　同　椿子
やさしきに猶うつくしき鹿子やな　同　宗準
露落て念佛おもたき蓮哉　大坂　遠舟
蓮さく水にすゝがん師の衣　同　竹亭
風の日は葉に隱さるゝ蓮哉　同　圓水

どれとるぞ杜（牡）丹にならぶ蓮の花　同　見里
世の濁り蓮に愧ル旦かな　同　久永
笠ふく人留主とはかほる蓮かな　大坂　両鶴
晝良の花しらぬ日の寐覺哉　同　半賀
夕立に乳のあらわるゝ女かな　田舎　浮水
夕立に住吉おどり坊主かな　大坂　柳枝
出初たよあれあの雲を雲の峰　同　宗準
川狩や色の白きは役者らし　大坂　万海
酒入レずうたはぬ舟をすゞみかな　阿波　鉤寂
踏初し誰が足かたぞ富士詣　江戸　西乃
泄（キチ）瀉（タ）や宵を出しぬる破れ蚊屋　最上　清風
晝網や六月淺し芦肴　大坂　昨非
孕マせし罪を法師の御祓哉　京　言水

補

見てよけん堤牛引天の河　江戸　湖春
朝良に心まるめる夕部哉　大坂　遠舟

秋ぞ猶外の濱なる夜鳴貝　江戸 學白
稻妻に寐すがたはづる板間哉　伊勢 又玄
石原や誰が馬夼守る女郎花　大坂 山平
來る秋や風たち水の澄所　阿波 律友
余古の海七夕の子や水あそび　大坂 幸方
來る魂の道に聲ある薄哉　櫻塚 西吟
音ひくし魂祭る夜のまさなと　大坂 万海
送り火や橋に中(アツ)るを世の限り　同 竹亭
川鰕の送り火に寄る夕哉　同 葛民
棚經に鯖うる聲の交りけり　牛町村 休計
攝待の道かたづけよ黒木賣　大坂 蚊市
此後は露置添んわかれ星　同 春林
初秋はまだあはれにもなかりけり　同 倡和
あかねさす日にかたれたるやんま哉　同 扇士
稻妻や丸ながら見る橋の上　同 油髮
稻妻を呑込にけり鬼がはら　同 知童
いなづまに一聲鳴し烏かな　同 可幸
野の井戸や見し稻妻の落所　同 竹亭

置イて往(イン)で取におこさぬ扇哉　同 呼牛
哀秋赤子の鳴しとなりかな　大坂 鄙省
女郎花女房の留主に植る哉　同 山木
芭蕉葉や誰ぞ手をひろげたるやうに　同 狐界
蘭の香に夕食喰ぬおとこかな　同 香葉
芭蕉より松葉にたまる小雨哉　同 杏醉
朝良の花ひらきけりしぼみけり　同 芦賣
槿の花は遊女のこゝろかな　同 見里
槿に引おこさるゝ垣根哉　同 自閑
朝良の取つくものも薄哉　大坂 竹亭
荻薄贔屓のならぬ夕哉　同 三喜
霧晴てもとの長サの薄哉　同 衞門
足よはき虫はとまらぬすゝきかな　同 圓水
六地藏二つは隱すすゝきかな　同 柳枝
草〳〵のそよぎや露のこぼれやう　同 万櫻
蜘の巣に行つく荻のそよぎ哉　同 鄙省
二つめの嚔(クサメ)悔しや萩の露　同 見里
春過て女子のしらぬ野ぎくかな　同 綠水

折ながら苔はひらく野菊哉　同　呼牛
蝶〳〵の㒵よごれたる野菊哉　同　李溪
いたづらに名をかへて咲野菊哉　同　哥鷹
玉かざる露の似合ぬ野菊哉　同　竹亭
長る程若ふ呼るゝ野菊哉　同　元知
淋しさにならして通る鳴子哉　同　燈外
笠とれば鳥のとまる案山子哉　河泉　亭笑
辻相撲みな前髪を贔屓にけり　大坂　來山

大内のほとりにて
名月や下部は何を書白洲　京　言水
名月や御門の外は仕丁ども　同　淵瀨
父は花酒の母なり今日の月　大坂　西鶴
名月や雨乞ふ村の人ごゝろ　同　賀子
名月や哥の中山清閑寺　同　藍橋
名月に蚊屋つり草も枯ぬめり　同　盤水
名月やいつより榎黑みたる　同　蚊市
男ともしらでころがるゝ礎哉　京　萬玉
待宵の力に成し礎哉　大坂　川柳
よごれたる心はうたぬ礎哉　同　久永

蟷螂の眞ンきらせけり今年蕎麥　同　藍橋
稲苅て片荷は西の帆かけ船　同　梅子
稲葉苅ころは尼さへ髪ながし　同　李溪
執の火の飛ひかりなし今日の月　同　蛙市
初鮭は富士見て來たる心哉　同　昨非
鳫は飛鶉は居るがすがたかな　大坂　重榮
初鳫は指折とても片手哉　同　圓水
翡翠のとまるかたはむ岸柳　同　露友
鳴虫の髭の長きもあはれ也　同　椿子
心ほどとられぬものか枝の栗　同　宰賀
秋らしや柳にうすき夜るの霜　同　帆睡

重陽
我宿の野菊を今日の詠哉　同　一蠧
夜寒さぞ裏壁つけぬきり〳〵す　同　才鷹
里人は實臼かやす花野哉　大坂　西鶴
押分て誰穿し跡ぞ花薄　京　芝蘭
身振ひや鹿に時雨るゝ花薄　同　定之
八九月風はいづこの蝶の貝　江戸　嵐雪

露霜の沙汰なかりけり富士の山　京 常牧
今更に笑か花野の髑髏　同 團水

冬

冬籠リ又寄添はん此はしら　江戸 芭蕉
寒き日を壁に芹賣朝哉　京 定之
覡子が烏帽子はしやぐ庭火哉　大坂 万海
菴近し少ぬれても初しぐれ　同 賀子
玉笹や不斷時雨るゝ元箱根　同 西鶴
十月や烏帽子に入る庭の塵　同 幸方
舳に何を藥守の神無月　同 杏酔
呼立て日もちり／＼や友千鳥　同 定明
此川が凉みし川か鳴鵆　同 竹亭
鴻の足見しより長き枯野哉　大坂 遠舟
さま／＼に池の形見る枯野哉　同 盤水
守捨し枯野の小屋の一つ哉　同 知童
野狐のよめり初る枯野哉　同 万櫻
あちらむきこちら向たる枯野哉　同 呼牛

殊勝さに念佛申ス神樂哉　同 重榮
風のちらすものなき柳哉　同 帆睡
宮守が烏帽子着直す落葉哉　同 李溪
落葉して鳥の數よむ木末哉　同 宰賀
朝やけも夕日に似たり歸花　同 椿子
提て行人に品なし歸花　同 宗準
弟さへ世を遯レけり網代守　藝州 里洞
十月は幾日降ても初時雨　大坂 夕幽
片／＼は時雨ぬ禰宜が烏帽子哉　同 呼牛
走出て時雨をとふや松の色　同 良重
常よらぬ徒弟尋ヌる時雨哉　同 風舟
塩賣の一聲うづむしぐれかな　同 哥麿
からかさも後は荷に成時雨哉　河内 亭笑
水仙やせまくて廣き花に勢　大坂 補天
明ぼのや荷炭をおろす門の前　櫻塚 西吟
拜殿にしばし雜子寐の時雨哉　大坂 西鳥
山茶花を旅人に見する伏見哉　同 西鶴
態ゝと上戸になりぬ冬杜牡丹　同 倡和

おもしろや波の間より飛衛　同　杏醉
御座舟やどちらの千鳥見て行ん　同　鈴風
妻の留主目覺てすごき火桶哉　同　蚊市
留主つかふ時は汗かく火燵哉　同　矩久
火燵空し文王即位ありとても　同　久永
煎蠣や海士が家くらし濱松葉　大坂　昨非
葬禮の其中を賣ル鰒哉　同　賀子
冬枯や風の落込谷の庭　同　杏醉
それきたぞ歯ぬけ聲なる鉢扣　同　芦賣
其町の犬は出ぬる鉢たゝき　南部　歲人
梟の寒き夢うつ霰かな　藝州　柳江
山川や霰乘リ行木葉舟　大坂　圓水
朝霜に疵を付たる霰哉　同　油髮
鐘絶て藥うつ家の霜夜哉　同　綠水
蠱かな伽藍に見度軒の雪　同　重成
別路や女みにくき雪の朝　同　李溪
長寝せし上天の事は今朝の雪　同　季山
明ほのや箒隙ある庭の雪　同　性水

我宿の形替りけり今朝の雪　同　元知
羽に積る雪に雲落なや水の鴨　江戸　石玉
口の照リて雪の燒たる巖哉　大坂　朝秋
見事にて跡のきたなき雪野哉　大坂　万櫻
磯ぎはに沖は降らぬか宵の雪　同　倡和
雪よりもあるか出せみん白き物　同　豐流
薄氷蘇鉄の形リに殘リけり　同　柳枝
行月の影は得とらぬ氷哉　同　元知
水車朝は音なき氷かな　同　葛民
沖に日のとゞく程飛ブ鷗かな　同　一風
おもほへず徹をうたん池の鴛　藝州　野羊
己が身の寒さをふせぐ紙子賣　大坂　花瓢
よい夢を覺されにけり紙子夜着　同　矩久
夜を寒みむか腹立ル山居哉　江戸　西乃
結着たる女あやしや喰藥　若州　去留
年籠リ鈴聞こゝろ一つ哉　大坂　芦賣
煤掃や又あらためし紙袋　同　且水
餅花は妹背の中のよし野哉　同　自問

寒聲や螢過ての丸木橋　京女 花鈴

瓢簞に酒は入ぬか鉢たゝき　大坂 轍士

日の本の人の多さよ年の暮　同 才麿

世に住ば聞と師走の碪哉　同 西鶴

草津にて

のがれけり師走の海の鸊(カイツブリ)　江戸 芭蕉

節分もまぎらかしけり親の前　大坂 來山

月花に馴れし矢立も大三十日　大坂 由平

稲妻に展す實の飛ブ蓮哉　來山

三ヶ月薄き市の果口　賀子

穐の風干鰯に鼻を逆らひて　仝

檜笠着た人のキヨロツキ　山

裏門は水とるまでの通ひ道　仝

家鴨に折ル河骨の花　子

ウ

今朝の夢夏(ゲ)書の筆を妨ゲて　子

つくゞおもへば見殺タ客　山

忍ぶれど銀盃は酔ものぞ　仝

袖によごるゝ血(ノリ)のはぢらひ　子

其中に供奉の獨の氣の強シ　仝

頬さへあげず立くらす尼　山

秋の草皆尋常にうら枯て　仝

振直したる蟷(カ)蜋の鎌　子

露霜に脚ー氣のおこる連を持　仝

月の出るか盗人の運　山

花鳥の中いひさかす物狂ひ　仝

廣野は蝶の追ふつおはれつ　子

ニ

きさらぎや桟敷の柱打こかし　同

妹つれずばいきて歸らじ　山

假枕雪と泪を湯にわかし　同

鷹に蹴られて驚落る方　子

若衆の高股だちは見事也　子

戀はむかしと杖握リ破ワる　山

窓明て日の入山を持佛堂　仝

雌にはなれたか狐来て鳴　子
牛馬のつなぎながらにながれ行　仝
　ちいさい時をはなす傾城　山
亂レ髪うしや醫師に打向ひ　仝
　まだ蚊の残る八月の月　子
舟ひいてのぼれば冷る芦の中　仝
　田の番どものどやきあひぬる　山
神主が家は心のすむ所　仝
　伊勢も近江も源氏なりけり　仝
花ともに笘吹破る山おろし　子
　寐餘る春に何の役なし　仝

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

誹諧枕

上・中・下

幽山

能因が枕をかつてたはぶれの號とす。つたへ聞、其代の司馬迁は史記といふものゝあらましに、みたび五岳にわけいりしとなり。杜氏・李白のたぐひも、とをく廬山に遊び洞庭にさまよふ。その外こゝにも圓位法師のいにしへ、宗祇・肖柏の中ごろ、あさがほの庵・牡丹の園にとゞまらずして野山に暮し、鴫をあはれび、尺八をかなしむ。是皆此道の情なるをや。そもそも此撰、幽山のこしかたを聞ば、西は椿の津にひら包をかけ、東はつがるのはて迄足をおもしとせず。寺といふてら、社といふやしろ、何間ばりにどちらむき、飛彈のたくみが心をも正に見たりし翁也。あるは實方がつかの薄をまけ、十苻のすがごもを尋ね、緒たえの橋の木の切をふくろにをさめ、金澤のへなたり・いろの濱の小貝迄、都のつとにもたれたり。されば一見の所々にてうけしるしたること葉のたね、さらぬをもとりかさねて、寛文のころ櫻木にあらはすべきを、さはりおほきあしまの蟹のよこ道にまつはれ、延る寶の八ッの年、漸こと成ぬ。さるによつて今やうの耳には、とませの杉のふるき共おほかり。しかれども名取河の埋木花さかぬも、すつべきにあらず。是が爲に素堂序ス。

誹枕集　上

山城

山城のとはにあひ生や松飾　風虎

蓬萊の山城蜜柑や小かうじ　松江 維舟

嶋臺の亀のお山や髭野老　由言

はづかしの森やかさ鉾水硯　丁我

筆始間なく時なし紙や川

音こそ春水波男耳傾川　丁夢

櫃川や袖の出替り浪越る　云笑

うすら氷の隙やすき破紙や川　山崎 清親

かけて祈る子安の塔や雀の巣　青木春澄
御社領の吉田の種や神おろし　安居久巨
尻いたし龜の尾山の花の陰　日野好元
宇治山や東南に納む花の雲　安田柳話
丸山やつるに客衆の花散ぬ　望月千之
男山のむかしや思ふうば櫻　風虎
行てみんお室にいみじき兒櫻　天野弘之
盛かたや山吹の瀬の栗せうが　村松水音
桃薗の親王にこそ内裏雛　櫻井鷺舟
花の都下へさかるや藤の森　次木壽見

東國なめぐり、大坂にかへるとて

夏山やあるひは野にふし伏見舟　梅翁
加茂川や双六のさいきほひ馬　日野好元
五月雨や一まいになる狐がは　岩田有哉
里人やつけ木に螢まきのしま　小野澤幽風
宇治川や車かゝりの螢の勢　伴一可
切蓼や鱠のひま行梅津川　西岡泰清
妹夢に蚤心せよふし見舟　三輪一鐵

ところてんや祇薗林にむらからし　梅翁
山は行を松はしらずや祇薗の會　青木春澄

北野にて

當分の是御自愛や薫風　三輪一鐵

東國よりのぼりて

みたらしやきのふは東の十團子　西山梅翁
月弓のいるさや弦の音羽山　田中久光
歌人の枕をわるやをのゝ月　霞衛子
灰也けり山城米に宇治たはら　幽山
松茸に相生の名あり嵯峨よし野　梅翁
思ひ入身はふか草や蛇の穴　田中良景

くらまにて

九折（ツヾラオリ）や霧の海邊のばいの尻　青木春澄
伏見とや紅葉を床に晝休　田代松意
狐火や紅葉も青きいなり山　幽山
壁にはふや小倉色紙の蔦かづら　中村魚木
十月やいなりの神のお留主〳〵　安田柳話
口切の茶入や宇治の橋姫手　風虎

月次會に出て

山崎や時雨にまじる水油　　吉田委心

山白し峯もたいらの京の雪　　梅原卜入

太和

里富り奈良の初年壽祿神　　池西言水

たばこふく息や霞て吉野山　　田代松意

奈良役者我えし事や薪能　　青木春澄

印祕して結びし水や二月堂　　天野弘之

吉野初瀬花や歌人の大頰　　露沾

雲と見しやみよしのゝ花なら油煙　　維舟

みよしのゝ花や是さた都人　　神野忠知

杉原に水くゞる花や吉野川　　上田宜水

花一重障子の外や吉野山　　高橋東風

中梳や花のふゞきのよしの川　　幸順

虎の尾の花や唐土の吉野山　　風虎

春日にて

御鎭座の浮雲遠し花の山　　林宗甫

奈良ざうり今日もきらしつ八重櫻　　中井宗隆

吉野法師けさや見ゆらん更衣　　山田一友

小盃や若葉の不足龍田山　　川嶋丁夢

歌塚やめいどの傳受郭公　　高岡泰清

鮨桶やおしみ馴たる吉野鮎　　成田交扇

五月雨水分山や在鄕公事　　露童

湯あがりや毛の穴こよぐならざらし　　大林水容

掛香やけふ九重にならざらし　　幽山

南都衆興行に

思ひよる友やあはおのならちゞみ　　林宗甫

突臼や松に音するならさらし　　池田宗旦

せり賣やならはぬ旅にならざらし　　芹澤可利

みよしのや屋根の怀風太和ぶき　　松村正阿

唯今也田舍の吉野草の花　　云奴

春捨し酒やけふ咲吉野菊　　西岡泰清

春日野や人追ふ鹿の獵師あり　　井狩友靜

鹿のしがらみ奈良の町役かけてけり　　幽山

み吉野や葛のかたまり怀の月

目藥あり盆皿の池の杯の月　幸順
笙の岩屋ほさつも爰や冬籠　望月千春
茶の花や利休が月には吉野山　山口素堂
雲や雨霞の名よせ三笠山　甲良初入
炭頭飛火や守寺白身番　如船

元興寺にて

鬼の手形鐘に取けり暮のとし　幽山

河内

鶯の關の戸ざしや籠の口　濃州住正勝
干飯を道明寺とは名付たり　長崎一見
秋の梢飯もり山やすはう箸　杉山杉風
びんほう神旅の宿なし天の川　望月千春

和泉

太箸や和泉の杣木ふいさらさ　唯笑
けふの塩干たる群集あり境浦　望月千春
吹飯の浦などか雲るにいかのほり　幽山

白炭の名こそ流て光の瀧　沙門恵俊

攝津

何ゆぞ津の國飼のうしの年　西山梅翁
箕面寺わらはも富を突べきなり　青木春澄
難波寺鐘にぞ花はよる法師　福田露言
花は散寺はこんりうじぶん哉　梅翁
須磨の海士のかしらもあかしちゞみ哉　江口塵言
干飯やそこで腹はる龜井の水　三輪一鐵
津の國のこやかたすゞし迎舟　梅翁
杯風もひよどり越や一落し　櫻井鷺舟
無魂やしたふ見ぬめのうら盆會　松村正阿
盆といへば今旗同じ難波寺　松木青雲
難波女やおどる袖笠あし拍子　幽山
晴曇り笑止るらうや須磨の月　筒井宣安

すまにて

此浦に鰒汁とはんにごり酒　松木青雲
小男鹿や夢野にかへる皮枕　沙門才丸

夜番もやこやの住居の冬籠　青木 春澄
跡もなししかしながらの橋の霜　枝吉 任地
髮置は三つの濱松をかざしかな　日野 好元
座頭鯨よるや見ぬめの浦の波　山田 若風
茶の湯者は小野とはいはじ池田炭　山本 西春
のし付や太刀造江のあつ氷　大幹田 照龍
白土やすさの入江の雪の宿　杉野 了春

伊賀

伊賀衆に忍び音とはん郭公　幽山
說經や哀その森蟬の聲　吉田 幸順
寶舟戀のみなとを泊り也　万里

伊勢

神風やせいしう万歲君が春　赤塚 資仲
伊勢海老や便色ある大かうじ　幽山
指(ゆび)さしておしへよ霞むあれの崎　北川 秀將
昔男種や植けん伊勢櫻　幽山
伊勢が歌の流は山田植女哉　日野 好元
蜑のはさみ鮎ぞ剃刀櫛田川　土岐 祐木
鈴鹿山乘かけの蝿うたれにけり　云奴
七夕や明星が茶屋かり枕　幸順
星合の濱の酢貝も今宵也　幽山
山田守そうづやもどくお長官　米村 不尤子

久居にて千句追加に

此上は何かあこぎが浦の月　梅翁

發句合、月前洗米

月よみや淸き渚のあらひ米　幽山

久居に始て召れし時

千世や此久居花さへその〻菊

山田の心友、奥州下向の時兩吟所望に

伊勢暦みちの奥迄見られけり

志摩

伊勢櫻散や錦の鳴がくれ　中田 心友

鳥羽衆興行に

袖に馴てとはにあひみん嶋さらし　幽山

鶴翼か魚鱗かゝりか鳥羽のたて　水野 林元

伊勢鯉や難波のなよし鳥羽のたて　笠木 友里

尾張

宮にて

春暮て花も源太も神さびたり　三輪 一鐵

こま笛もふくいきつしま祭哉　日野 好元

烌をとへ呼つぎの濱恭友達　津田 心色

大根や尾張八郡引うごかす　吉田 沾柳

三河

長者屋敷舊跡

余所にのみ岑の藥師や目の霞　作者不知

八橋にて

忍び音や枕もんだう郭公　幽山

五文字やけふは水行ところてん　梅翁

杜若床や澤邊のちがひ店　吉田 幸順

二村や後のしぐれの閏月　恕流

遠江

濱松にかざる柑子やうら白輪　鷺 一樂

雪汁や肝にながるゝ大井川　峰 幽石

命毛や霞に筆のさやの山　田中 良景

鉄橋や濱名に渡す櫻鯛　三輪 一鐵

山ぶきの瀬戸の染飯咲にけり　幽山

あし毛馬や卯の花しがらむ大井川　維舟

中山にて

爰ぞ命顏淵が命夏の月　山口 素堂

引はだに入月涼しさやの山　云奴

命也さゆの中山香じゆ散　梅翁

汗は海袖に瀉なし塩見坂　云奴

旅ねする蚊屋の中山妹戀し　一鐵

たつやいかに鳥居繩手になるこ坂　神野 忠知

枝葉さへ霜に白輪の柑子哉　安閒 景成

今の浦や池の氷のとをくみ　亀井盛次

駿河

万歳やあ富士の山彦明の春　青雲
五尺の富士鏡晴けり老の春　改田可心
今朝庚明行富士や年代記　成田交扇
打越のはなれや富士の朝霞　幽山
富士の根や雪汁ひたす貝杓子　三輪一鐵
富士川の水かさや雪の逆詞　玉置無端
引垢や霞の富士の白小袖　四友
さらし干夏来にけらし富士の雪　梅翁
富士の煙耳に消けり郭公　岡如萍

うつの谷にて

蔦楓腹にしけるや十團子　梅翁

同

夏瘦に蔦の細道もなかりけり　一鐵
夏瘦も目をこそこやせ富士の雪　中田心友
時しれり山はかすりの嶋さらし　松木青雲

うつの山や夢にも鵆の蝿拂　中村素朴
爰に一夜江尻さだむる螢哉　梅翁
もちに消る氷砂糖か富士の雪　幽山
五月の富士是も都へぞとられける　云奴
鵆は夢蝿心せよけふは富士　維舟
富士を夏かたるも所まだらかな

禪定しける時

たいまつの影をぞしおり富士まうで　幽山
たいまつや蜈蚣の名殘富士詣　青木春澄
うつり行雲にわらぢや富士詣　山口素堂
富士は扇汗は清見が關なれや
六月やおはり初物ふじの雪
白雲やまつ毛にかゝる富士詣　酒井醉滴
釣鰹五戒はいかに禪徳寺　沾葉
九万里の翅やわたる富士の嶽　大林水客
もんどりやうつの山がら四十から　榊原殘詞

宗長の閑居、丸子のおくに柴屋さ
いふ所に、吐月峰さ名付られし所

あり。

句を吐(ハク)や世々の形見の岑の月　幽山
雪や富士爐開きいそぐ軒の松　露沾
大口やあきたらで見る雪のふじ　岸本調和
うそつきも此上はいかでふじの雪　枝吉任他
雪の富士親仁の恩は高かりけり　望月千春
雪の富士や天晴尾上は日本一　作者不知
富士おろし摺鉢めぐれり山の芋　西岡泰徳
富士の煙雪やふせこの白小袖　青地正盛
日本の目さらしなれや富士の雪　野村友也

初雪に

今朝ぞ富士首筋さする里の雪　幽山
痩法師のすの字の國や山の雪
山斗等類もなし雪の富士

去御方に始て召れし時

雪は富士申上べき事もなし
富士ぞ烟庭の松原爐の霰　吉田幸順
旦那様ろくに召ませ富士の雪　服部安茂

西行は根付にしたり富士の雪　素禎
田子の浦ひく根也けり影の雪　沙門才丸
蟹也けり往來の人ふじの雪　水戸庄莫想
足本や金はあり共ふじの雪　若月俺賀
馬かたの增の種也富士の雪　大輪田照龍
雪や礫空にしられぬ富士太郎　田中良景
丸合羽拂はぬ雪や富士の山　沙門吟市
蛤の耳白厚しふじの雪　鹿嶋貞喜
富士淺間烟くらべや雪女　高瀧益翁
岩波やなるゝ礒菜のくきが崎　幽山
富士の烟あらしの雪や煤拂　杉山杉風

駿東郡桃園定輪寺さいふ所に宗祇法師の古墳あり。其由緒、かの終焉記に委く見えたり。過し來尋入侍りて、連式の德名の高き事を思ひて

筆の虫名の虫又あり草の陰　幽山

又かの自畵自讃に

うつしたくは我かげながら世のうさも
　しらぬ翁ぞうらやまれぬる

連　歌

世にふるはさらに時雨の宿り哉

此像、去御方にありしを寫し侍りて、右の一句の讃を　梶井御門主御筆申請奉りて、此寺に送り侍るさて人〳〵に發句をすゝめ侍る。さみの事なれば、遠境の數寄人は猶追ッてよせ侍らんか。

わかれと云鴈の文字もやこい霞　風虎
花に下戸宗祇の蚊屋のたとへあり　露沾
朝顔や宗祇を起す思ひもの　維舟
白露の玉の旅泊や自然齋　西岸寺 任口
寫繪や世は折釘の下涼み　土屋 四友

祇公、九州にての發句を思寄て

酒の香も菊にしたしき花柚哉　紫塵
面かげの隱逸傳やかた見草　池西 言水
日發句やしらぬ翁の年忘　沙門 才丸
髭の雪連歌と打死なされけり　山口 素堂
宗祇の髭霜もとけけり繪の具皿　藤井 松陰
桃園や連歌の仙人世々の花　松木 青雲
連歌師か盜人かさよ時雨　三輪 一鐵
催したり更に時雨を硯水　西岡 泰德
其比の筒音や苔に筧の露　板花 恕流
苔ぞ髭さすが名匠の古跡の雪　望月 千春
花橘むかしの人や宗祇の髭　津田 心色
月次や衣にかけし絡落の影　水哉
朝哉かざり海老哉宗祇哉　吉田 沾柳
宗祇の傳古鄕の月や玉つ嶋　吉田 幸順
連歌師の髭や形見の筆つ虫　西岡 泰清
朝良や手水にもろき髭の露　海老名 隨由
風俗や和ぐ手には唐團　成田 交扇
尺八や雫かと見れば宗祇のひげ　坂 如船
五句去も形見よ一つ松の月　信水
梅が香は枯木の髭に殘る也　辻 呟回
法師斗是はうらやむや名殘の花　環部 安茂

像なりて、去方の表具寄進せられしを見て、祇公の作と云袖の下を思ひ出て

袖の下花の錦や表具ぎれ　幽山

甲斐

餞別に

わするなよ白根かすまば江戸の花　小野澤 幽風

かみあらひといふ、所の名物と聞て

名也けり芹の白根のかみあらひ　幽山

蝸牛(カタツムリ)角やさしでの磯榮螺(サヾい)　神野 忠知

庭訓にのりけり甲斐の駒迎　宣休

湊や秌江戸の築地と指出の磯　藤井 松陰

白根こそ甲斐の源氏のはたれ雪　松村 正阿

伊豆

三男や蛭(ヒル)が小嶋の若夷　西岡 泰清

色川や水上は樽桃流し　露沾

石橋山戰場を思ひて

うつぼ木や頼朝朽て飛螢　同

箱根哉わらぢにかゝる雲の岑　云奴

峠涼し沖の小嶋の見ゆとまり　山口 素堂

江山やぬまづの屛風たか莚　梅翁

石橋山戰場崩の道筋にて

露おちけり君子も小道の地藏堂　千之

出湯の賑ひを

東の澤鴫たつ暮もなかりけり　幽山

宮城野やゆかたと申せ山路の露

絹黄ばみ雁みんなみや八丈嶋

上人や名の月あぐる箱根山　延澤 破扇

紅葉ゝのうすき色にやいづ蜜柑　風虎

まな鶴や頼朝の札千ゝの秌　幽山

泊り也あしがら箱根置火燵　荒山 不恐

下リ行右にみしまの暦かな　齋藤 德元

相模

蓬來やうら白は御所の鶴が岡　吉田幸順
金澤の猫や忍び路けはひ坂　幽山

北條屋敷の跡

古屋敷蛇やぬぎ置うろこがた　吟市
興禪の氣をやしなふや寺の花　忘十
ちる花は刑部梨地か山の内
何代か玉まく葛葉つるが岡　梅翁
螢火は百が物ありなめり川
山の内や雨上杉の下すゞみ

大磯にて

虎ごぜの石も沖也五月雨　幽山

鶴が岡にゝいにしへのいてうの木残りて侍るな

虫干や東かゞみのいてうの木
白雨やから尻馬のかたせ川　西岡泰清
子の爲やさかさま川の水せがき　西村良庇
海老の色や鎌倉山にいりしかば　高橋東風

あしがら越ノ關にて

柹の山や足輕(ガン)箱根狸ゝ皮　幽山
初雪やあしがら隱(カク)る馬の脊　津田心色

鎌倉にて

隱家や雪待江戸の吉野山　似春

誹枕集　中

武藏

武藏鐙七日の御調荷中ぞ春　露沾
板橋やたのしみをこめて芝の春　曲言
富士ぞ民の竈につゞく江戸の春　幽山
芝海老やあり數にせん江戸の春　吟松
埦飯は武州のさたよ江戸の春　赤塚資仲
蓬萊の蜜柑々子や紅葉山　嶋原正名
若水や纓をあらはん江戸の春　芹澤可利
其如し千代田寶田おゝん春　松木青雲
明るけしき筆捨松や四方の門　藤井安昌
初空や上野の霞氣がつきけり　板花恕流
玉川やさらしの鼠え方より　阪田可心
江戸橋の世や張良もはだしの春　露章
明て今朝霞が關や番かへり　信水
江戸ならで千世のためしに何の春　正英
江戸小判天の羽衣幾代の春　松林有之
鷄のとうてんかうぞ江戸の春　松木青雲
大繪圖や鑓ほど〳〵に江戸の春　西岡泰徳
人丸いかに年のほの〴〵明る江戸　伊丹宗旦
ほら貝や春しり初る江戸の海　笠木友里
水道や苔に聞えて江戸の春　山口素堂
淺草紙塵ぞ金山江戸の春　松村正阿
花の千世の何かの春も江戸也けり　幽山
武藏野や霞の衣の張物場　云奴
婆婆慈眼我等が爲や上のゝ花

幽山、京上り餞別に給ふ

江戸かよふ風情の留主や花曇り　赤塚資仲
花を呑樽は吐けり黑門口　山口素堂
小僧きたり上野谷中の初櫻　林氏宗市
參勤せよ吉野も爰に江戸櫻　藤井松陰

幽山方へ申侍る

かけて思ふ鐙か京と江戸櫻
江戸櫻吉野法師もなるまいぞ

花は上野時にたゝぬや芝肴　維舟

上のゝ花人の咄しの腰折けり　素積

上野にて

法の花見三佛堂の因ぞかし　信水

花の比みよしのゝ雁や入間やう　因州 雖云

色をかへ品川のりや春の海　兼豊

代也けり春宵一刻江戸の地子　沙門 専吟

苗代や此土をかへしてすみ田川　赤塚 資仲

武藏野や富士に付紙いかのほり　江口 塵言

武藏野も山の字はあり郭公　風虎

撫子のつゞきの原や一ッたね　松村 正阿

入あいひのかね澤しばらく釣鰹　梅翁

清水門や民のとゞまるところてん

江戸店や戸ざゝぬ御代の下涼

箸と足と黒鴨の子やすみだ川　維舟

武藏野や大白　も百分一

金澤や猫の目を出て飛螢　小西 似春

旅行に

名殘涼し芝よりかへる波よやい　云奴

蟬一首筆捨松にとゞめたり　幽山

地にあらば富士武藏野よ二日生　松山 玖也

擣待や堀兼の井もある物を　岸本 調和

聖靈や向ひの岡の草なれば　望月 黄吻

ふか川や花火によする歌枕　露沾

いり物や露も折たく芝肴　松木 青雲

武藏のゝゆかりの文字や荻と萩　西岡 黍清

武藏野や尾花あし毛も江戸公儀　維舟

淋しさや江戸のきれ物秌の暮　南 玄順

武藏野や月も所も無二無三　忘十

武藏野に蟻もはいけりけふの月　生里

武藏野の月に罪障の山もなし　岩脇 正藤

御威光や山の端にげて江戸の月　大井 幽石

武藏野やそれ釋尊の胸の月　山口 素堂

武藏野や月宮殿の大廣間

武藏野の月を背戸や草の露　神田 蝶々子

燈臺下(モト)武藏野の月今日の雨　赤塚 資仲

わたる雁や常盤橋から日本ばし　作者不知
武藏野や鑓持もどく初尾花　池西言水
武藏野や織留しらぬ唐錦　青木春澄
武藏野や烋の寢覺も半分道
武藏野や富士のね鹿のね虫も又　山口素堂
神明市和國において生姜(ガ)多し　田中久光
ふき墨や波もしぐるゝ筆捨松　四友
江戸橋や公儀なれたる霜袴　藤井松陰
しば鳴や品川ちかき浦千鳥　椋梨一雪
初雪や江戸の人あし跡の沙汰　幽山
富士の根やぎぼうしの雪日本橋　枝吉任他
雪の富士巾着かへせ日本橋　作者不知
武藏のゝ月に挑灯やふじの雪　南部正焉子
江戸橋や鯨(コノシロ)つもるふじの雪　美濃如雅

金澤にて

能見堂うしろに目哉ふじの雪　四友
品川鰒うき世は波もなかりけり　曲言
書習以後筆捨松や金澤鰒　赤塚資仲

武藏鐙かゝる折にや鰒汁　板花怨流
すさまじやおし熊谷の冬の月　三輪一鐵
福は外鬼うちまめや入間やう　杉野是心

安房

中昔蓮の若葉や誕生寺　板花怨流
爐開や梢おしまぬ鋸山　露沾

上總

上總みほ千世の目當や松の春　芹澤可利
防風とる黒戸の濱や砂(マサゴ)事　小澤右下
百首村幾世の公家の詠の月　露章
冬枯や千くさの濱の貝のうら　美濃正勝
聲やさし長南の市に寒の紅　幽山

下總

京迄や江戸葛西苔千葉小山　天野野夫
けふや手兒名まゝの繼はし雜事　幽山

郭公封じこめけん龍が崎　沾木

木庄天神にて

新地にもかくなる物か梅の實　梅翁

同じ所

筑前の三笠と申せ梅の雨　幽山

今日一葉嘸あすからは千葉小山　維舟

塩濱な行きて

行徳やけふは頼(ヨリ)の日あけ灯籠　幽山

きぬ川の末下おさやうす氷　神野忠知

常陸

蓬萊や霞うながすしだの葉も　維舟

代の春や筑波めど木のあらん程　桑原沖石

富士築(筑)波寶引しけり朝霞　幽山

歯固や鹿嶋の神のあらんほど　荒井直良

常陸には田作りや猶祝月　安田柳話

鹿嶋祭それこそ帯の望なれ　外村長尚

大柄抄霞やとづる櫻川　河原政玄

花にこそ眼よすらめ櫻川　中田心友

櫻川水増水とちりにけり　赤塚資仲

築波根や大悲茂り夜盜に影　成田文扇

辨當の中の湊や沖なます　風虎

立よらん汗や雫の森の陰

怺風も事ぶれ也けりかしま松　南部幽閑

浦は霞霧や證據に立増り　幽山

三ヶ月や板敷山の釘がしら　正吉子

色になる滴の森や下戸の果　望月千春

八の耳ふるや鹿嶋の神ゝ樂　田中貞良

あしほ山雪やまゝ子に夕嵐　池西言水

近江

白髭の神ぞしるらん年の春　未調

大津のさま松立わたし賑也　大林水容

梅ヶ香の彌高山や青地の雲　露章

けしかけな犬上山の春の雪　吹田舎勝

我は花の雲を乞にや鳥籠の山　日野好元

鐘よりも秀郷つらし三井の花　森　一勝
羽箒の雁こそかへれ床の山　小野澤　幽風
今日は艸草津の姥も蓬餅　神野　忠知
水口菜籠籮を花見や藤の店　大輪田　照龍
茂り行草津の姥や餅の情　梅翁
南天や手馴のしげり鏡山　茶瓢子
是をきれば彌高山や椙の夏　望月　千春

ひえにて
夏の夜や立の三點よここに雲　三輪　一鐵
見せばやな志賀のからみも搦まつり　日野　好元
筑摩祭毎にときめくやお鍋女郎　田中　良景
筑摩祭鍋とり公家のたはむれ屋　幽山
筑摩祭鍋の内床し拍子兵　日野　好元
筑摩祭さあ破鍋にも地黄煎　桑原　沖石
石山や湖水の重し一夜鮨　三輪　一鐵
戰ひけり螢勢田より参あひ　山口　素堂
摺火打朽木の柚やとぶ飛　坂　如船
伊吹おろし皮切ぞ飛夕螢　辻　呟回

逢坂にて
手ぞ清水背中ふく風尻に岩　三輪　一鐵
關の清水古郷戀し生鰹　松木　青雲
帷子のあさ妻や名にあふみ布　日野　好元
經よめり蟬の三井〳〵寺はやし　太田　幽閑
湖水涼し此物語を馬子にまかす　云奴
あつき日は森の名にたて風ゆるぎ　田中　良景

勢田にて
夕だちや虹のから橋月は山　山口　素堂

粟津にて
かけ涼し松原さしておち日より　梅翁
今朝の秋ゆるぎの森やはや合點　信水
梶の葉や武佐墨ながすやすの川　幽山
朝にはせんだんごをや三井の寺　池田　宗旦
拍子こそあはづに果れ木曾踊　次木　壽見
白髮の塵とる禰宜やお開帳　青木　春澄

當國の住岡氏賴母與行に
水莖の岡の田面や秋名寄　幽山

怺の月打出の濱や碁笥のふた　北川 秀将
鏡山月出が崎や女ひかり　さゝき つし
膠葬當月出が崎や舟よばひ　露章
いざよひの月やかけ物床の山　田中 良景
床の山や紅葉亂て赤子の聲　小熊 不門
坂本やしの字を怺のさよ枕　西岡 泰清
神農や木の葉をかづく床の山　道西 言水
横川よりおち葉衣や座主ながし　安田 御話
床の山木の葉ぞみだす湊紙　近藤 如幻
犬上のとこの山引夜興かな　日野 好元

三井寺にて

寺ふりて霜や狂女の鐘の聲　北川 秀将
水かねか雪に白見のかゞ見山　友鳴 妻
三上山や江戸見た人の富士の雪　辻 呟回
打出の濱碁だちや雪に付がらす　坂 如船
冬の名や風の三郎新羅の森　捻少
光陰や矢ばせの浦の寶船　吟松

美濃

養老の瀧つほやたんぽ春の水　濃州 正勝

大垣木因にて

今宵は愛いびき下風や春の夢　一鐵
今日ぞ菖蒲不破の關屋の板かへし　桑原 沖石
谷汲やいつ納むべき蠅ばらひ　三輪 一鐵
槌衣笠縫の里に響けり　津田 心色

不破にて

怺風やたゞに千金後京極　幽山
酒食やむしろ田の菊四方のけふ　曲言
風聲や關のふぢ河寒つかひ

飛彈

蓬萊の飛彈の工の鳥の千代　西岡 泰徳
鷲いかや飛彈の工の智恵の糸　同 泰清
位山肌には何をか錦ちる　板花 恕流

信濃

初午に引や望月いなり山　延澤破扇
梯（カケハシ）やちらぬ花ふむ東山道　服部安茂
諏訪の池狐がてんか夏の月　三輪一鐵
梯や身を觀ずれば瓜の皮
寢覺の淵きのふは蚤にくはれけり
參あひて三百余人や木曾踊　青木春澄
新そばや打詠行ば信濃なる　幽山
山姥や麻きぬをうつ寢覺の床
月細し鼠大根のおば捨山　赤塚資仲
此月になぐさめ乘つ下戸捨山　杉山仙風
姨捨やはちいろ／＼の花火に月　幽山
きり原の駒や雲井にそびき物　今井昌倫
栗賣も久米路の橋の心せよ　幽山
神の旅淺間が嵩や大たい松　露沾
世也けり木曾の梯（カケハシ）ふぐと汁
雪の夜やあかり障子の一重山　中澤重光
五十年寢覺の床や役拂ひ　荒山如雲

上野

吾妻（アガツマ）やおのこの里の化粧文　板花恕流
茶屋料理佐のゝくゝだち鳥はなし　西岡泰清
佐野綿も取はづしてぞ袷ぬひ　中西喜澄
今日ふくや軒の板はなあやめ草　服部安茂
坂東太郎名こそながれて五月雨　神野沾木
戸障子や佐野の舟橋夏座敷　幽山
凩風やふきあけに舘（タテ）の若たばこ
蛇の衣霧やふき干いかほ風　板花恕流
佐野綿や袖打拂ふ雪の宿　吉田時庸
雪の内の馬上や佐野の夕渡リ　青木春澄

下野

おながれや日光折敷神の春　藤井松陰
那須紙や玉藻の前の化粧文　田中久光
黑髮山耳にかゝりけり郭公　大坊政忠
出あひ星那須のゆり金七夜かな　吉田時庸
三かの月黑髮山のかうがい也　北川秀将

薬師寺にて

道鏡いかに室の八嶋も都の月　幽山
薄雪やかしらの白き鴉やま　田中良景
雪ゆかし黒髪山の額つけ　如酔

陸奥

蓬莱やかざる松しま亀が崎　風虎
蓬莱を子共あらすな松嶋や　六名心棘
蓬莱や松前こぶをおくの嶋　藤井松陰
御代ぞ春奥のおく迄仙臺百　匂當立吟
けふ引や琵琶のしがらみ小松楯　幽山
黒瀧や霞の紺の洗ひ汁　神野忠知
米澤や白水ながす春の雪　松木青雲
ともしけり會津の花に五十目掛　辻呟回
神木や花もおくある鳥井坂　幽山
おく床し壺の石ぶみ爐路の花　松村正阿
御前句や西行戻り花に風　池西言水
行雁や花にそむきの嶋隱　水哉
面かげの春や燒筆屛風嶋　兒玉久友
あまざかるひいな遊びやけふの里　小館長意
金の精螢飛けり陸奥山　山室政久
波影や清水ながるゝ鬼柳　田中良景
黒雲やゆふだちが原にあらね共　辻呟回
おもはくの橋や鵲星の緣　露沾

岩城名所發句合に

鴫立や妹は夕の風呂の澤　幽山
上戸もや雄嶋の海士の袖の月　王輪一鐵
山の井やよしともいはじ月の事　信水
友にしておらばやおらが濱千鳥　神野忠知
燒炭や黒森の名にたつ烟　風虎
岩城炭八千世をしるや國境　吟松
算用やけふの細布年の暮　青木春澄

出羽

若和布かれ迚もぬれたる袖のうら　北川秀将
目口には蚊ぞうやむやのせきばらひ　風虎

秋草しげるやもしほ袖のうら　万里
羽黒山よふしをそろへてわたるや雁　荒山不恐
羽黒山霜や梯わたしがね　辻呟回
六ッの花や扠又出羽は十二郡　俊則
山形や雲の袖うら片時雨　露沾

若狭

喰つみや八百比丘（ビク）の青羽山　幽山
遅櫻とばぬ家鴨（アヒル）や青葉山　池西言水
里の子や麥わら笛の青葉山　沙門才丸
後瀨山しぶ柿も又頼みあり　藤井松陰

越前

君が代は命買にぞつるが市　小澤楽下
出仕日や朝水の橋ひさくの露　福田露言
武士の矢田野の露や鼻あぶら　藤井松陰
霜となるや露の玉子のかへる山　北川秀将
あさむつは夜明の鐘か橋の霜　赤塚資仲
あかゞりやあさぢ色づくあらち山　吉田幸順
末いかにあかゞり足の道の口　幽山

加賀

母衣きか籠の渡りの薄霞　村田一友
加賀に小松引や越中に治郎兵衛　幽山
夕がほの馬うつ波や蓮のうら　礒似水
帶はさみこしの白根や鹿の角　大輪田照龍
北州の前裁や加賀の菊の酒　小杉一笑
雪の日や見ぬ白山の物がたり　南部聞松
加賀に梅田雪中に咲花もがな　井狩友靜
虎鰒も嘸な住べき竹の浦　南部幽閑
鰒賣や籠の渡りのうき世のつな　福田露言

能登

春風にさはぐやすゞの海雀（スヾメ）　山室政久
能登鯖に鈴のみさけや生みたま　荒山如雲
門脇の能登の指鯖や市の店　渡邊不存

文沈の鳥や雪に机當　幽山

越中

のうれんか戸がくし山の朝霞　岩本 邦重
巣を立し鳥や子知ず親しらず　一雪
松の雪消てや聲をあけろ山　青木 春澄
店經に上るやふせのうら盆會　井狩 友靜
もれ行やすがのあらのゝ鶉網　愼的子
澁谷の水の行衞やさはし柿　青地 正盛
女波男波月こそかよへ親しらず　服部 安茂
むくや今宵栗から落しこしの月　云笑

越後

眞切の跡や越後の雪なだれ　沙門 才丸
布涼しおくび達の佐渡越後　幽山
越後鱈風のかけけりもしほ草　水哉
光ふかし越後蠟燭暮の雪　赤塚 資仲

佐渡

鳥ぞ金衣袈裟掛松に法のこゑ　吉田 沾柳
松ひくし雪の高濱雲に下駄　坂花 恕流

丹波

蓬萊の野老に仕けり大江山　西 宇八
花ふるや幸が遠近皷山　幽山
鶯のこ式部名のれ大江山　木元 長英
鼻くたや穴憂の里薫風　大輪田 照龍
丹波山おろしき物や栗のいが　西岡 泰德
煮紙子や生のゝ道の大江山　曲言
つれづれをすさむ丹波のこ雪哉　大坂 休市

丹後

高嶋やうら嶋が跡を老の春　高嶋 玄札
今日長し七世や春の夕日の浦　幽山
包丁やきれとにかゝる丹後より　日野 好元
寒聲や夢も結ぬよざのなみ　露沾

筆の海懸の湊や大節季　西岡泰清

但馬

散敷や櫻包みの琴引山　板花恕流

浪よせて雪の白濱やしらす干　露章

因幡

漉紙や花のしがらみ袋川　幽山

そひ山や二子をひらふ木の間の烁　板花恕流

伯耆

長年の始や里のかざりなは　幽山

大山や雪道分る箒坊　椋梨一雪

出雲

若和布もや汁の妻こめ出雲のり　救濟

苗代や八重垣つくる出雲鍬　沙門木也

凉風や留主に成けん日のみ崎　幽山

浪のおさ文字や錦の浦の雁　大輪田照龍

にくい鼠月もる穴やてまの關　飯田末計

ちりめんや八尋の濱にうつきぬた　西岡泰清

石見

一月やわたりの山の春の雪　同

たゝみ枕春の泊りや日ぐらし山　望月黄吻

樽底や日ぐらし山のかんこ鳥　坂如船

人丸寺にて

見果しや高津碁石に月日の空　幽山

隱岐

後鳥羽院御舊跡を見し時、苅田の池の御製を思ひ出て

讀や蛙御夢の定家さむれば又　幽山

萱が軒月見の供御や隱岐鮑　維舟

誹枕集 下

播磨

人丸や明石のうら辻筆はじめ　加納嘉辰

あかしにて

木綿帆の風をしぞ思ふ花の雲　幽山

月も今宵きらを琢やはりま米　大坂休甫

民の脉命也けりさよ郡　丁我

新酒の舟おしぞ思ふ明石米　梅翁

あかしにて

人丸の手水たらいや霧の海　三輪一鐵

同じく

朝霧の人丸消うせにたれ共　林宗甫

すま明石今宵ぞ月の芋島　長坂守常

月の夜や新發意踊明石潟　日野好元

月や明石たゞ浄るりの泊り舟　林宗甫

權右衛門聲響也尾上の霜　望月千春

高砂の尾上のかねや役拂　幽山

美作

花車引やえいさら山ざくら　後藤求笑

しゆんかんや久米のさら山初わらび　吉田幸順

木の子数寄露なし山を歎けり　杉花恕流

錦手やさら〳〵山の村紅葉　津田招唏

雪女いつか姿の橋の霜　幽山

備前

浦の男近づけてとれ藤戸のり　橋本富長

犬嶋や櫻の波の名也けり　河原政玄

裳かけ也虫明のうら土用干　磯村其与

牛窓や波に花火の車船　吉田幸順

月の輪も十の牛窓開けり　信水

國に學者のはやりければ

牛窓や雪により〳〵是を　幽山

備中

同類やさゝやきの橋わかれ霜　西岡泰徳

野馬臺や吉備の中からつゞく雁　望月千春

つんぼに鐘さゝやきの橋やよはの霜　池西言水

鰤を取瀬尾も近し太郎月　維舟

備後

出替や口無の泊り遊女の果　幽山

杯は木葉月は冬こそ三原酒　維舟

息の勢ふく山合戰也雪うち合　赤塚資仲

安藝

蓬萊や先いつくしまあきの方　三輪一鐵

猫瀬戸や妻に心をつくし舟　松山玖也

宮の市や上ゝおろしありの浦　幽山

宮嶋にて

廻廊や紅葉の燭(トモシビ)鹿の番　山口素堂

音さゆる瀧やしやみせんのいとき嶋　廣嶋爲時

渡天かと爰宮嶋や雪の山　維舟

周防

室すみをかざる竈や祝嶋　松村正阿

さゞれ石や岩國半紙飾わら　美濃木牛

花の名にたつや白浪普賢灘　福田露言

三田尻の螢や漁父をたすけ舟　西岡泰徳

三か月は櫛を見せけり舟木山　五十君安次

大内桐今は錦の杯也けり　幽山

鰒の醉祝嶋にぞさめにける　板花恕流

寒月や山口に入こほり餅　三浦海士

長門

けふぞ猶長門の飾(カザリ)あふの松　幽山

食櫃や蠅をゆるさぬもじの關　大輪田照龍

あみだ寺にて

手向るや一門みな〳〵舟灯籠　三輪一鐵

追善に

取かへす玉にもがもな萩茶わん
文司の雁誰がかよひぢのいなり町　海老名随曲
かたぶく月詠もたるしあごの海　幽山

紀伊

和歌の浦や長点かけし夕霞　小向如貞
青ざしや錢かけ松の若みどり　井狩友靜
箱戸樋や猫の落合いもせ川　坂如船
御影供や花のかたはらの高野まき　風虎
一聲や高野で女ほとゝぎす　根岸意倫
帷子や我妹嶋のさらし布　風虎

太田定時餞別

朝もよひき國の後や文月夜　幽山
されば和歌の事新しや浦の秌　梅翁
露の世や万事の分別奥の院

大德院興行に

霧に高し八棟作り八の谷

下向、櫻茶屋にて

煮てゆ高野山より出たる芋
高野那智中にぶらりやとしの秌
高野槇霧の物いふ雫かな　維舟
うら辻が筆捨松や鹿の聲　梅翁
根來物つよみをゆづれ村紅葉　山口素堂
古筆切誰がかたみのうら千鳥　幽山
一里一羽住む千里の濱千鳥　玉置無端
みつちやづら妹せの山や霜崩　坂花恕流
巾着切緒捨の山や玉霰　才丸
蝶はきや古屋のとまり札納　幽山

淡路

によろり春玉のやう也おのころ嶋　小坂井雅計
うまづ女に見せばや春の淡路嶋　幽山
面影や松帆の定家繪嶋の月　中野廣凡

阿波

出かはりはあはのなる門よかぢの者　江口塵言

里の海士にて

春や昔講式料も藻塩草　幽山

塩竈や柚味噌の烟里の海士　板花恕流

讃岐

朝霞さんしうにして立にけり　飯田員成

佐保姫の枕硯や筆の海　板花恕流

海松房も房崎の名をかりにけり　高橋東風

うら盆や八嶋にたてる高灯籠　福田露言

崇徳院御廟

さぶらひけり白嶺の月に宿直猿　幽山

跡ありやてには泊りの磯千鳥　成田交扇

出女や泊りの磯に呼千鳥　坂如船

くり綿や弦打山の雪颪　西岡泰清

伊豫

道後の湯にて

立や霞湯桁の三十三天まで　幽山

三嶋明神にて

白ゆふやかけて涼しきいよぞうめん　一鐵

身はふりてゆるぎの橋や奥歯の霜　幽山

土佐

天下一土佐也花の鏡川　山室政久

十文字やふむ足拍子土佐踊　柴田吟舟

土佐出しを引や辨慶が駒迎　幽山

土佐紙や竹齋がしは年の暮　幸順

豊前

みの嶋やはち巻とつて郭公　海老名隨曲

もんどりや山彦の山郭公　維舟

螢こいと呼や豊前のこくらがり　梅翁

戀にとられ七よの星や彦の山　吉田委心

盗人上戸倉無の濱や瓶の菊　水哉

神詠の宇佐に也けり四方の冬　幽山

豐後

花守をたのもし人か豐後梅　福田 露言
豐後梅西國武士の見るめなり　甲斐 正倫
麥秋の比や臼杵の里どよむ　桑原 沖石
あかゞりや筋吹姥が嶽颪　辻 呟回
笠縫や豐後しぼりの村しぐれ　幽山

筑前

箱崎の松や傳受のわか緑　高瀨 盆翁
二日灸頼むせ淺しうるし川　曲言
竈山花の木の間や借座敷　板花 恕流
火燒鳥住所なりかまど山　多門 蹄元
干肴や箱崎の海夏日和　澤田 榮政
玉ふぢや明る箱崎の松の露　維舟
箱崎や鼠おちくるけさの月　辻 呟回
大鋑荒船の宮や留主の鎰　望月 千春
切炭や杣が爐路入竈山　吉田 幸順
一時雨み笠の森やさゝらすり　坂 如船

猫や聲身のうき濱の鰒のわた　藤井 松陰
實綿金の御崎やよはの床　小熊 不門

筑後

花昔てはや見の里や荷鞍馬　露章
相宿や螢の火燈一よ川　辻 呟回
冬やくるめ絣ふかくなる一よ川　維舟

高良にて
玉だれの小瓶や通夜の一よ酒　幽山
尺八に時雨ぞかよふ一よ川　北川 秀將
敷寢する舟の夢路や一よ川　藤井 松陰

肥前

蓬萊や藥紫の富士に肥前米　長崎 捐水
門は松浦餠や鏡の神の春　赤塚 賞仲
川上や宮前の楊柳肥前の花　梅翁
蓼酢走れ玉嶋川にはあらね共　濱 似水
撫子の花入や是松浦舟　荒木田 武珍

浮人形みな月はやし水の浦　水哉

長崎にて

入船やいなさそよぎて旆の風　山口素堂

錦手や伊万里の山の薄紅葉　梅翁

長崎やうつ音近しから衣　幽山

立や霧平戸香箸塩烟　澀田榮政

長崎にて

端(タン)物の湊や旆の織とまり　三輪一鐵

梅翁當國佐賀にありさきゝて、いひつかはしける

引込やうき世のさがの角頭巾　石原正成

さび鮎や松浦五郎が九寸五分　村松水音

松浦人籏がしら也鯨舟　京守昌

松浦田嶋といふ所に、ひれふりし跡の石を見て

寝姿の石や名にふるさゝ時雨　幽山

肥後

鬢付や風流の嶋櫻貝　露沾

春の日にかすむ白かはふすべけり　志水可春

防風ありうどの長濱沖鱠　望月黄吻

波涼し我等も獺のたはれ嶋　日野好元

水無月やいつか來にけん裸じま　幽山

蚤虱はだか嶋へぞ流(ナガサ)れける　吉田幸順

あその宮遊ぶ友なりやよるの月　維舟

安蘇の嶽や烟も富士も雪うつし　白井重則

寒垢離や波のよるべの裸嶋　齋藤調鶴

夜着や波岩床枕裸じま　海老名隨曲

桶ぶせや行年波にたはれ嶋　西岡泰德

日向

蓬萊や高千穗の峰よねの山　京常矩

ヶ様の花に下戸はまだるしはや日の峰　露沾

すは雪よ琴引の松勾當の坊　幽山

大隅

大すみやつるかけ舛の飾わら　小野澤幽風

火櫻や手吹に散す風の森　海老名 隨曲

薩摩燒瓶に咲けり大すみれ　内海 安重

つゝじい名な

霧嶋や八重の塩路の朝日かげ　露沾

藪いしやも烁こそとはめ風のもり　藤井 松陰

烁すでにけしきの森や聖靈店　小熊 不門

御臺君逹歎の森葉落にけり　幽山

薩摩

うらやむやさつまとび魚もいかのぼり　幽山

風涼し八重のひだ織さつまもじ　西岡 泰清

白じゆすや唐の湊の雪の舟　藤井 松陰

足すりをするや鬼界が嶋千鳥　大阪 空存

役拂ひにながされにけり鬼界が嶋　幽山

壹岐

殘りけりまだらの牛に雪のしま　岡 如萍

みるめの浦我におしへよ釣がつほ　水哉

數寄人や引野に渡る鵜濱　幽山

唐くらげ波は越けり雪のしま　成田 交扇

風本に通事(ツウジ)やかよふ友千鳥　下方 幽睡

對馬

對馬根や組蓬萊の髭人參　幽山

吸筒やまたぬ花見のあさぢ山　大輪田 照龍

風薫れ竹敷浦の甚ねの床　板花 想流

人參や君に引れていき對馬　松木 青雲

惣軸

五文字や日本にむすぶ飾繩　云奴

外國

唐船よ隨分渡せきそ始　廣野 元好

蓬萊や琉球の嶋羊(ヒツジ)米　大坂 眉柳

大ふくや見ぬ唐土の今渡り　服部 安茂

うら白や敷波越て長鬚國　京 如葉
はま弓も君にあげけりしやくしやいん　伴 宇八
こぶのりやとられてなみの鬼がしま　大阪 三昌
楊貴妃を馬鬼(バツクワイ)が原や花のかぜ　維舟
せい高嶋裾は見えけり夏衣　齋藤 調鶴
他國もつむるやかぼちやるすんつぼ　井口 如貞
夏の夜やね姿恨む小人嶋　沙門 才丸
五月雨に芦の葉こぐべし小人嶋　板花 恕流
天竺川伽羅に竿させ妻迎　岸本 調和
ゐぞがござに晏らでてるやさけの魚　半井 一六
桂男なぐさめ乗つ女護のしま　幽山
かびたんも土産はづべし野べの烋
仲丸が三笠の月や唐の芋　西武
入札や心當にもおらんだ荷　大坂 三昌
阿蘭陀や札もおち塩湊舟　池田 宗旦
からびたる聲や朝鮮筆つ虫　大坂 意朔
烋の暮此上いかに無人嶋　松木 青雲
引鰯鶴にとらるな小人嶋　風虎
馬鬼が原たそがれいかに雪女　露沾
疫拂函谷の關も越ぬべし　秀貞

追加

(攝津)庭竈民や難波の帝より　才丸
(山城)お茶壺や朝日が當を年始　言水
とそ酒や武藏野も君が万壽盃　礒田 正隆
門禮や出入の森松かざり　橋本 幽焉
(山城)佛の座つむや嵯峨のゝはらこもり　水無 如醉
束帶せり軒に袖こす豐後梅　石川 雲鶴
(武藏)無緣寺や梅花を折てしやれ首(カウベ)　小熊 不門
(相模)うはばみや霞をおよぐ雨ふり山　板花 恕流
(攝津)一の谷はせ來る鹿や角落し　川嶋 丁夢
(山城)初午や杉折の窓いなり山　三輪 一鐵
(大和)吉野山箸や枝折の餅くばり　曲言
(攝津)布引をのぼる小鮎やかすり嶋　服部 安茂
(尾張)ねはん佛やあはでの浦のうつせ貝　小熊 不門

安房　杣が袖引や霞ののこぎり山　露章
大和　薪也吉野の春の杉楊枝　江尻長谷川　吉里
近江　いぶき山ひねる細遅し草の餅　政玄
山城　かはき上戸渦まく花や泉川　怺水
同　繼飛脚淀のわたりや郭公
伊豆　追行や土肥杉山に郭公　藤井　松陰
丹波　茂りけりかくれんぼうに桂山　荒　不恐
和泉　初鰹飛や砂金高師のうら　云笑
遠江　中泉足を休めて夏もなし　長谷川　吉里
五月雨や手のうら返す大井川
外国　女護の嶋密夫かくせ扇箱　津田　心色
筑前　古冢や呑いきの松原砂糖水　村松　水音
豐國にて
怺近し時代は遠しなく螢　三輪　一鐵
大和　農人やたばこの花見吉野山　大輪田　照龍
相摸　鎌倉や禪尼の障子今朝の春　長谷川　吉里
攝津　道頓堀きのふ也けりすまの怺　三輪　一鐵
大和　見猿いは猿耳なし山や怺の暮　調和

山城　菊咲けり大澤の池高家衆
駿河　茸狩や小者うしなふ三保の浦　長谷川　吉里
大和　鳥羽絹(テウロケン)やまきもくひゞく槌の音　雲月　千春
同　焦作(コイヒ)やゆつきの嵩の下紅葉　大輪田　照龍
同　革頭巾きなれの山や本の鹿
豐前　菊ご濱かよふちふりの音きけば　云奴
うになり打心の鬼や丹波栗　露言
遠江　納豆の濱名に渡せ精進ばし　曲言
播磨　疋袋の土高砂のうらにつきにけり　澤田　業政
山城　女足袋紫野行ゆかり也　才丸
三河　かます頭巾二村山やゆく嵐　成田　交扇
我やおらんせい高嶋もふじの雪　言水
かせ杖や背(セナカ)につかすふじの雪　酒井　蘭滴
丹波　鼓山淡雪やつばきこだまのこゑ
武蔵　木目(モク)や海鼠腸をたつ浪の聲　松風
すをまいて見るや越後の雪の魚　白江　蘭鶯
餅花ややゝが詠のよしの山　素積
一とせやおはり八丈きぬくばり　幽明

さし串や竹の都路門鰯　太田　知能

駿河桃園定輪寺宗祇舊跡手向　追加

方角抄袖もる月よ歎きの闇　云奴
かみわけし連歌や臺蓮の食　曲言
空ぞ名殘東門答よゝの月　丁我
手鑑や面影の月髭の露　捻少

宗長の追善を思ひて

朝露や分し足がら箱傳受　富月　千之
芋の山宗祇のつる葉茂りけり　岡村　不卜
吉光や宗祇の筆や郭公　若林　不外
宗祇以來懷紙の花や吉野山　鹿嶋　貞喜
桃園や三年寢ても昔の夢　高橋　東風
北野の神お髭や分て袖の花　小野澤　幽風
十德や夢をのこせし蚊屋のきれ　神田　蝶々子

奥州名所八色を聞て、追ておくり侍る

宮城野の萩やゆたんの錦革　同
笠ぞ露奥州之住人十苻の菅
袖凉し伽羅の埋木名取川

同

名取川蛇に蛙や源三位　岡村　不卜
いづれの歌人十苻の菅ごも聖靈棚
初茸やあねはの松の人ならば

洛有好吏士一葉氏而幽山者其名也恒嗜做于風雅域飄逸于塵俗表嗜倭什能作歌詠以之遣情娯志且追司馬子長之壯志本朝方輿州郡遊歷而不止席不得暖突不得黔擔簦負笈茇蘭是故曾扶桑六十州古區舊地名山大澤比年之際足跡遍中超白川關西極紫陽地北隅南裔尋訪無遺所到賦倭章言俳詞尽前右慰旅況唐胡魯經行四方録名蹤古地題詠史詩令幽山意侶同共風調奕又於本邦古來入倭歌者流者求所謂歌枕者一笠一節周遊于天下者白能因西行之儔迄于宗祇宗長之徒往々皆然幽山亦慕蘭之者乎謀可倭賞之哉頃歲事東遊卸鶴於陸奥焉々内名境奇跡莫弗備嘗之焉其地各有名物而存右歌之内皆詠之故就其處其物之可攜去者取之求齎旅裝之中而後旋洛爲奇玩物俾風流好吏者清賞之也矣吟客韻人名于風雅者贈詞語賦歌詠金玉璨々其辭藻可觀焉彼名産者所謂武隈阿褊和末松山松枝也宮城野萩莖也十符浦菅葉也名取川埋木也緒絶橋杙木也實方古墳薄草也幽山近來斯邦也寓止有日與予盍贅心太熟矣一日座會談逮茲吏因乞予唇一語予感激彼雅志而忘吾孤陋題此八種物卒製唐躰一律陳地名物産併記遠遊之吏實且加稱嘆云爾

詩云

武隈阿褊末山巓　森欝老松經幾年
留薄實方幽魂去　種萩爲仲美名傳
右菅偶得十符浦　埋木潜搜名取川
過緒絶橋履佳境　羨君跋渉極東邊

寛文十庚戌稔仲夏日

囙山隱士鬼鄰翁
小泉友賢漫筆

宮城野萩

宮城郡仙臺ヨリ半里計東南。國分寺藥師、此近邊也。

宮城野やほる人も人萩も萩　風虎

詞書略之
宮城野の景やあいもち萩と露　松江 維舟

以下同
つけがたし萩に宮城のゝ我發句　北村 季吟

見ぬ人の爲仲やおる萩の花　梶山宗固
宮城のゝ道も長持や萩の花　棕梨一雪
宮城野や鹿の毛なからうつし物　小西似春
宮城野や見やけと中萩の花　山田佳種
宮城のや伍子胥がまくる萩の風　延器破扇
宮城野もすねはぎ思ふかち路哉　鈴木傕笑
宮城野は何の木あらの小萩哉　一直
宮城のゝ錦や出所うた袋　杉野了春
宮城のゝ本あらの萩や尻からげ　中村魚木
宮城野や萩の花すり旅硯　池西言水
宮城のゝ花ぬす人や笈さがし　幽山
宮城野や冬は紙子を唐錦

名取川埋木
宮城郡ト名取郡境川也。西ヨリ東ニ流。

埋木やむかしの花の香の灰　維舟
埋木や花は功なり名取川　石井如自
埋木も楊枝に名とれ川柳　西村良庵
埋木や木の生(イキ)木の花の波　神野忠知
埋木や言葉の花の探題　松永惟中
から鮭や埋木そむる夕時雨　板花恕流
名取川螢やいけん埋れ灰　正木堂茗風
埋木の花にぞ沈む酒に柚ず　幽山

實方塚之薄
名取郡笠嶋之内志保手(シホデ)村ト云ニアリ。
長徳四年霜月死去也。
詞書略之

幽靈か薄ほの見えし塚の陰　門村柔豐
以下同
實方のなきみを種や花薄　松村吟松
實方のつかねてつとに薄かな　土岐祐木
跡したふ古人や歌のしの薄　藤村倫員
執心の雀かくれの薄かな　段野如閑
實方の塚や施餓鬼のはた薄　西村良庵
實方やつるに歸洛は花薄　沙門光正
中將の名を穗にあぐる薄哉　福井重種
歌人の假名(カナ)さへ奥のお花哉　安田柳話
實方の冠や見するしの薄　望月千之

實方や借さし恨んなら薄　西岡泰清

のぼるや我ヽ薄の鐘持朱雀(シユジヤク)門　幽山

阿𧸐葉松

栗原郡筑館(ツイタテ)澤邊ト云ホトリ。

都人なにがし氏、みちのくの歌枕にかゝりて、所〳〵の草木のえだ・朽木の橋きれまで、ぬさ袋にひろひもてかへりて、詩哥・連誹の人〳〵なすゝめらるゝ中に、さし出かしらの巡の挙めきて、老法師がやせ腕まけじだましゐにや。末の松山・あれはの松のおもはん事だに、ましてつみさり所なく

撫引やあねはのもたる姫こ松　西山梅翁

詞書略之

妹かあねはの松の若みどり　高井立志

くり綿やあねはの松の雪の景　内海政倫

㳡の色あねはの松やふぐりなし　望月千之

上れ松古歌を切手にあねはの月　幽山

末松山

宮城郡仙臺ヨリ四里計南東海邊、八幡(ヤハタ)ト云在所ニアリ。

夏中はさゝら波こせ末の松　維舟

月見るや額のなみの末の松　石井如自

雪ふるし世ゝの作意の末の松　段野如閑

影もこす大さかづきや末の松　小田素質

末の松もとの雫は松露哉　鶴川次末

雪ぞ花手はとゞく共末の松　坂花恕流

末の松藻の下草や花瓶の浪　幽山

武隈松

名取郡岩沼ト云所武隈寺ト云アリ。

武隈の松も二木や二度の春　風虎

武隈の松の余情や郭公　維舟

武隈や三寸を先せん松の雪　松村吟松

武隈にかのきのくまや松の雪　江口塵言

塙(ハナハ)にたてる松、とよみしを思ひ出て

松陰やはな緒(ヲ)にたてる下駄の雪　幽山

緒絶橋

岩城郡野田玉川嶋の薬師ノ邊ニアリ。又云、志多郡古河ト云所ノ町ノ中ニアル橋ヲ云トゾ。

欠見るや琴の緒絶の橋の月　西武

右の發句は、高野氏幽山、物の用ありて東に下られしが、みちのくあたりにたづぬる所ありておもむき、道すがらの古跡名所を見めぐり、所〱の歌の種となりし木草の名取川の埋木・緒絶の橋の欠など、花洛の土産にと袖にこき入もて來て見せ給ふを見れば、誠に殊勝とも中〱いふにたらず。長旅路をかくある心のやさしさを、おもひのみあづまにしめて引琴の緒絶の橋の道やまどはん、と康光の詠しをおもひ出し、老のたはぶれに一句つゞり侍る物ならし。

寛文十居諸

奥淨るり緒絶の橋や古扇　岸本調和

世になるやをだえの橋の霜崩　松永惟中

捨子鳴やへその緒絶の橋の霜　三輪一鐵

ふみこかす下駄や緒絶の橋の霜　石ト如自

玉あられ緒絶の橋やふり所　風虎

緒絶の橋蝙蝠消て霜ぞ鳴　西岡泰德

風袋緒絶のはしや夕涼み　幽山

十苻菅

宮城郡仙臺ト塩竈トノ間岩切ト云邊ナリ。

詞書略之

短夜も長ねや十苻のすが莚　松山玖也

同

鷹さへや鷹槌こゑを十苻の菅　林宗甫

菅ごもや月に我三苻客七苻　鑑傕笑

かゞみねるや十荷の菅こも三冬中　西村良庵

君や君十苻の菅笠寒の紅　福田露言

君や思ふ十苻の菅ごも稻の番　池西言水

ゐぞ鮭や十苻の菅ごも七こほり　松木青雲

夢遠し七苻には蚤〱菅莚　幽山

名所の草木を見て和哥并言葉

いにしへ今のすき人のしわざを見るに、よづかずあはれなる事かな。ながらの橋のけづりくず・井堤の蛙を愛して、みづからたのしみたるは、名高き物なればなり。歌枕をあつめ、名所の方角をしるして、人にしらせたるは名高き所なれば也。今此二をかねたる人は幽山也。七とせ八とせばかりさきより、民のとゞまる所〱を尋そめて、心つくしなる方にもあかずして、ことし又たび衣たつか弓ひくあたりを、夏より烁までめぐりて、名高き所を記すのみならず。名高き物どもをとりもてきたれり。たけくまの松・末のまつ山の小枝は、千とせもちりうせぬかたみなり。名取川の埋木・緒絶の橋の朽木は、名と共にうづもれぬかた見也。とふのすげ・みやぎのゝ萩は、あつき日に小笠をきそめていでしたび衣に、露を烁風のこぼしたるかた見なり。しかのみならず、くさ〲の物どものあるを見て思ふに、哥の道のみいにしへにかはらぬなどいふ事は、かゝるすき人のあるをいふにやあらん。されば、ながらのはしはなのみなれど、をたえのはしの朽木はとゞまれるかな。

たび衣たちもとゆたかにつゝむらし
みやこのつとの草木あまたに

寛文九年十月十五日
於武江旅宿書之

攝津國山田隱士
磐　齋

名所の草木を見てよめる狂吟の長哥

たびごころも　思ひたちぬる
こがたなの　めい所〱を
うちめぐり　みがき砂ごの
かず〱を　かきあつめしは
といしより　しがたき事の
しわざなり　きて見ぬ人も
しのべとや　十苻の菅笠
をたえの橋　絶ず世にたつ
なとり川　せゞの埋木
とりつみて　舟さす竿の
たけくまの　松のくま〲
たづねつゝ　旅のかりやに
さねかたの　つかの薄の

ほねおりて　ありく心は
いかでかは　あさかの沼の
田となりて　かつみる物は
いねをかり　いたゞきつるゝ
いもとごや　あねはの松を
手おりつゝ　かへれる怺は
末のまつ　山の松のはに
心ざし　つゝめるみやげ
みやぎのゝ　萩をばたれも
見さぶらひ　腰にさしたる
もろこしの　國にもあらじ
めいよぞと　つかのみじかき
筆をそめ　我思ふ事
長うたによむ

反哥

飛がごく行て草木を鳥が鳴
あづまの名所見たるしるしに

寛文九年初冬初五日於武江旅宿書之
非直非俗非修非學非道
道人磐齋

追加

猫の戀引綱よはし緒絶の橋　丁我

米船や末の松山五月雨　何云
雛形やすその松山花の浪　信水
笠にいかに宮城のゝ露日でり雨　何云
家づとや宮城のゝ露旅印籠　捻少
宮城野や萩原殿の錦べり　調和
宮城野やあめにまされり鮭のうお　望月千之
宮城野や餅のあづきの花咲けり　吉田幸順
宮城野や鍋ふき繕ぶよねの露　成田交扇
塞塩や十荷の菅ごも浪の鳥　丁我
匂ひや猶好色の埋木名取の花　怺水
きたい坊花や埋木名取川　中嶋丁夢
世ゝの人目やにや霞む末の松　小野澤幽風
道祖神野中の薄よたてながら　松木青雲
來る春やあねはの松を京土産　中井宗隆

こゝに高野氏幽山とて、もとは都の住人、誹諧の六法八方に修行して、名所舊跡にあそび、數奇人を友としてとゞまる所をしらず。しかれども至善の地をしればにや。

ちかきとし比、江府になりわたる。此ころ名所哥仙獨吟をもよほしあつめんとす。都鄙老若をえらばず、これが爲にしたがふ。七十にあまりて若殿ばらにあらそふ事、道の德とやいはん失とやいはん。ともあれ、かく計御免あれと、望にまかせて墨にそむる物ならし。

梅花翁

哥仙誹諧　寄名所

むさし野やつよう出てきた花見酒
かすみの關もなんだ辨慶
旅衣不盡の雪じるをしもんで
紙子羽織の袖のうら風
月影もさしでの磯の鶴右衛門
爰にあはぢの嶋臺の露
祝言はすみ吉屋殿秋更て
あをきがはらの姫は十六
ちはやぶる伊勢や日向の戀の道
山川万里三輪の明神
ならざらし糸くり返し行程に
むかし咄しに井堤の下帶
二番勝まつかうさゞ波しがの介
比良のねおろすかた馬の露
ぬけ参打出の濱の月見れば
迷故三界笠ぬひの里
子を思ふ難波の梅に鶯の
さて高砂を松ばやしとて
陽春の德を備ふる伊丹樽
君〳〵たれば店は江戸店
深川に大黒丸もお戎も
探幽が筆淀の澤水
七十歳いで其比はおとこ山
あふぎのやつとなれる金鍔
衆道にも大岑前鬼がたうふ〳〵
昨夜の付さし白川夜船
けんかいが興則（アキノリ）心におもはるゝ
なんの其〳〵ゆり若の浦
舞（マイ）〳〵は高舘に早く暮の月

さるあいだ又みやぎのゝ萩
嵯峨の奥聲きく時はしかれども
愛宕ぞ秋のかなしうもなし
我菴は布留の山田の米がふる
手の裏とり〳〵初瀬の觀音
鎌倉や方引さかり花盛
大坂あめも世にいづる春

仝

つんぼうが寢覺ぞ時雨床の山　露沾
霜をいて馬鹿心見の嶠　恕流
讓金響の灘の安からで　幽山
糸は中間の生の松原　沾
月匂ふあらきの亂滴の森　流
遊びの岡の暖簾の露　山
よんでこい蜻蛉の小野隙の霧　沾
わるい名取の後家が文箱　流
忍び孕み此月斗最上川　山
敵のかたへ音なしの瀧　沾
公事一ッ御内證より入佐山　流
末寺の鐘の朝倉の里　山
苅萱に前髪牢人名乘すて　沾
しぶむけた曾我戀草の菊　流
みね打や中に炑ある鈎澤　山
月も船井にくもらせ給ふ　沾
針のみず花の火ともす姥が嵩　流
團子に殘るうつの谷の雪　山
名
寒かへる四方の風早送り神　沾
嫁の始の淡路嶋見ゆ　流
枕繪も須磨明石より書出す　山
くるわの大臣かねかけの松　沾
老の山父の入道留主なれば　流
お持佛堂の戶がくしの暮　山
思ひ詰哀その森自害の事　沾
侍乞食末なしの川　流
出し月道の果なる常陸坊　山

哥祭文を呼坂の悰　沾
あひのもの合の中山色替て　流
ウ
手を付たがる下紐の關　山
にくらしい爰に女の目無川　沾
つれ〳〵讀かけ日ぐらしの小野　流
花に蝶伏屋に寝入やすいとて　山
油斷な乳もち添山の春　沾
着かへ櫃霞をさがす杏の谷　流
狂言の役布引の奥　山

仝

玉煠やてにはを拂ふ志賀の里　云奴
書棚にさゆる鑑山の月　可心
藥袋いきの松原風晴て　幽山
袖の湊や塩湯みつらん　奴
鶴のすね草臥渡る若のうら　心
暮れば龜の頸卷の雲　山
ウ
檜物屋も枕を飾る妹山に　奴
寝覺の里より誂の夢　心
はだか參齋宮に忍びしは　山
香取の衣を逆質の音　奴
風あらみ錠ねぢ切て箱根山　心
沖の小嶋にうつほ舟よる　山
王代記年浪たゝむ袖のうら　奴
さか鉾の露篠間流れて　心
云たての月よみ日よみ影つるゝ　山
人形うそを形野の色　奴
羽買山鳥もいれしの花畠　心
佐保の内なるお手かけの姫　山
名
作り虚勞霞にもらすいさや川　奴
不忠の濁りにほの海迄　心
唐崎や松獨りさめ波たゝく　山
箸箱守る三輪の神杉　奴
初瀬風惡魔の鼠はけしくて　心
龍田に夜盗僧に法あり　山
彥太郎高安の里うらみしは　奴

こしやくな戀草妬しのゝわけ　心
轡出外山のすそを蹴まはして　山
當世鏡水莖の岡　奴
桂瀉月を懐の使者男　心
他の呼子を養の露　山
ウ　金掛の松にうなりし妬のかぜ　奴
青野が原の虫にかぶられ　心
逆水の跡なき一座氣ずい者　山
玉出は親の目に近き岸　奴
眞西より衆生におほふ難波の花　山
春は佳吉三吟の風　心

仝　出言

まめふむや足うら山の花盛
日置の里の野邊の黒焼　一鐵
雉子の骨鳴海の塩路こほれ来て　幽山
御前の沖にたゝむ鼻紙　言
出る月刀脇指あふぎが谷　鐵
禮日は暮て筆捨の松　山
ウ　大草臥眠の森と見えにけり　言
伏見の床におもる病人　鐵
泥町や酒にひたりし袖の浪　山
濃茶ゆかしき宇治の橋ひめ　言
身共等は田夫にそだつ賤原や　鐵
はや日の岑をおがむ王様　山
橋の小戸の塩水ぬれゆかた　言
角からすみの江掃除する也　鐵
一足の音や夢のゝ鹿の暮　山
お料理過の湯の原の月　言
さあ燭臺くらはし山の初紅葉　鐵
と網のわたり鬼の寢所　山
名　虎の皮下紐の闘打とけて　鐵
唐人若衆あひそめの川　言
伽羅の油黒髪山にしたゝるは　山
室の八嶋の風呂上りの暮　鐵
水菓子を客人の宮詣やり　言

間鍋もてこい加賀に菊あり　山
小坊主が篠原走るすその露　鐵
秋よ頓寫の水莖の岡　言
惣じて月半の空の琵琶のうみ　山
遊山觀樂江戸浦の月（舟々）　鐵
兩足を安房と上總へふみのべて　言
ウ
賴朝のあくび千葉にきこゆる　山
お氣のつき八幡をさして代參　鐵
水無瀨の里の中將棊盤　言
小力を見するかたのゝ若木の花　山
飯盛山を大食の春　鉄
針立を呼續の濱東風ふれて　言
三川にわたる法橋の波　山

仝

武藏野はいかなるねだん郭公　西岸寺 任口
鎌倉物のみじか夜の月
むか〱と雲の浮嶋がはらたてゝ
針よりは唯富士のけぶりを
三輪の杉身すぎ世過に籠の棒
本はなら酒屋此躰はさて
ウ
秋篠や外山の紅葉つらにさへ
すがたの池も見まいすさまじ
間にあみ月には陀佛里のあま
朝ま晝まはひらくはち〱
律の名は高野の別所別の事
しらべはあふの松ばらりちん
つれ平家日こそくらぶの奥座敷
袖の雫の森はたゞもり
こは何としがらき茶碗破た中
いとまはかたい壺のいしぶみ
花にまかりたい共いはで忍山
あたゝかな事にいつ會づ御器
名
春きても安倍川紙子一てうら
賤機山もへさるいとゆふ
足柄や竹の下道すぐ通り

いそげばまはる木曾〱の旅
近江笠ぬぎ捨尻を勢多からげ
頸たけなりとわたれ玉川
ほれてほろり色なる泪袖のうら
戀の山路にたふれて血みどろ
あだしの丶御供申さん旦那さま
宇多の鳥立は見すえた鷹場
よき所得たり淀鯉よき肴
美豆の芋をば月見には猶
ウ
何やかや活計すでに烼の山
鳥羽田のいねといはずといのふ
こはし木幡馬〱に誰のらふぞよ
しらぬか宇治に御座をかまへた
風ものけ岡のや殿の花の船
日野大納言臨時客人

全　高瀬 益翁

三吉野や天からふつた花の雪

富士の霞になく鴫の襲
あほうづら淺間の山に春見えて
遠近人も耻さらしなり
員公事に心づくしの烼の月
御江戸をまかりたつ空の霧
ウ
武藏の丶露さへ霜に替番
狂言芝居誰しのぶ草
津の國の難波につけて衆道事
鳥羽にあひ見ん狀の取やり
其以後は千代の古道遠ざかり
嵯峨野のはらの持病おこらぬ
又してはつかみつかれし鷲の山
か丶がりんきに小比叡大比え
祈るてふ三輪の神杉釘うたう
有馬のしるし筆の軸竹
灸のてん月もかたぶく武庫のうら
子共わるさを住吉の烼
名
いさかひに雲霧さはぐ淡路しま

棒になりたる藤代の松
三熊のゝ熊をつかふて見せうぞやい
障泥の風に伊勢の浦浪
りん／＼と轡の音に鈴鹿山
鬼神は虚空に相坂の關
東路の白川越て後妻打
手かけ狂ひを塩竈の浦
御法度も只こり須磨の月涼し
明石の入道買置をして
印南のゝいなとはいはじ普代者
くめのさら山さら／＼如在は
殘なく傳受をしたるわかのうら
妙薬合す玉津嶋姫
辛螺からや奈良の都に有つらん
春日の里の機のおもりに
大將も初瀬の花に出られて
天下一牧ふるや春雨

全

旨如

富士山も中にぶらりや横霞
田子の浦波ぬるむ分別
春雨の古江の庄屋追上て
小野の綠もはやく立ませ
長坂の月人男供まはり
箱根八里や下るしら露
足柄の山のお中の虫なきて
夕めし時分過る六浦は
やり句にて揚てこそ見め二見がた
めでたいまでの高砂の松
淡路嶋雫もたへはいたさねど
若衆の義なら朝のゝ朝の間
よしや名の天満の市とたゝばたて
戀の重荷や紀國みかん
通路の月をのせぬる根來盆
丸うひいたる淀の川ぎり
宇治橋の水のゝ字をなす花の波

伊勢まいりしてかへる雁がね
名 乗懸に伊駒の山や霞むらん
番袋の口烋篠の里
初瀬川火もとはよその夕暮に
難波のあしがふるひましたよ
入心とがめやはする有馬の湯
見舞の文をこしの白山
雪の事いはで忍ぶの戀衣
あねはの松は大夫天神
丹波筋はやり哥さへひなびたり
夜なべするとて油の小路
備前徳利口なら一つ三かの月
ウ 男のはだが牛窓の烋
虫の音もうむと云程はりまなけ
それやと斗の目あかしの岡
与力衆大井の里にうつられて
加勢手桶に賀茂川の水
呼だ〱共戀の山花盛

千話に明ゆく朝熊の春

仝

伏見の暮霧の初瀬や高灯籠　池西言水
里は踊子袖ふりの峯　才丸
干る茶碗水分山の月もりて　仝
砂糖くづるゝ神なびの岸　水
唐士のゐんこ囀るみよし野に　仝
飛火がくれの草の白雉子　丸
ウ 簾店伏屋の里に春分て　水
ふくべに霞む小野の枝炭　仝
咄し講客人の宮空更る　丸
灯挑（マヽ）ともせ平蔵がうら　同
はたしあひいきぢにさはぐ兒の淵　水
返事だにせぬ筆捨の松　同
空聾（ソラツンボ）口なし山に恨ては　丸
五器打たゝく飯もりの岑　同
大工小屋塵の莚田敷かけて　水

壁すきかへす細のうら波　同
花まじり二見の月の蜆から　丸
胡粉殘りし雪の白濱　同
名
額板の朽木の杣に春を經て　水
光悦砥取の山ながら雲　同
捨扶持の米の尾頭祝てき　丸
消る血祭玉なしの里　同
もぎはなす蛭子の社波遠く　水
あら和布の莖の淺澤の水　同
求づか雜小刀に見わたせば　丸
いかの甲飛鷺坂の空　同
ひぜん瘡かせ山近き床の月　水
遊びの岡の假契部やの露　同
さほの川秤に重る思ひ草　丸
ウ
附子人參を走湯の風　同
虫干の小袋坂を越來れば　水
扇が谷よ此時の汗　同
御前能皷の嵩のしらべ初　丸
誕生ありし淡路の浦こそ　同
鵜の羽屋根鳥養の花うるほして　水
風土記をとづる青柳の村　丸

仝

江戸紫に傳受なるべしかんこ鳥　幽山
しげるや鈴の森の下窓　幸順
でんがくの炯につゞく富士見えて　泰清
でつち樽さげ横走り行　山
出し月わにの御崎へ舟やらふ　順
駄ちん拂ひの高嶋の烋　清
飢饉年米澤さびし初嵐　山
きらずまじりのかすかへの里　順
栗原や姉樣したふ小びくにが　清
根本最上寒の紅皿　山
鏡立入口を殘す戀の山　順
つぼね格子のおもはくのはし　清
撥音にぬれて袖行さほの川　山

太和の大掾藤原の秌　順
かけねなしつけの櫛田のけさの月　清
松坂ふかしあみ笠の露　山
す浪人花にぞ沈む泪川　順
筆耕(カウ)久し石山の春　清
名
消る雪爰に數ならぬ紫野　清
おくる引導戀塚の暮　順
嶋原や樂しみつきて菩提あり　山
かよひし夢や闘のお地藏　清
契りなん草津の姥も本ならば　順
さぐる火桶の口野ぞ淋しき　山
朝朗床の山風たゝみあげ　清
さらば手水にいでの玉川　順
ぬぎ捨る笠置の奥に參ルとて　山
しのだの森の夢の楠木　清
だきしめて朽や果なん泉の杣　順
ウ
泪の夕飛彈嶋の月　山
位山跡のかぶろが袖の秌　清

文まき川にたれさまの露　順
出來合のまゝの繼橋つけわたる　山
木魚おどつて大和田の花　清
それいかに禪(サトリ)を開梅が畑　順
小野の小町の一原の春　山

仝

山の秌世は皆醉へり富士獨リ　幽山
菊の籠愛唐士が原　泰清
曾我の里風にも當(アテ)ぬ露暮て　幸順
灸數そふひの川の月　山
立ならぶ共片岡に篭の者　清
老曾の森の足もとをみる　順
ウ
暮わたる野寺の鐘に亂拍子　山
かた田のうらや鰐の大口　清
長持の車返しの虫干に　順
三嶋暦も見え過る風　山
物さしの竹の下道程近し　清

淀の末ゆく水油うり　順
あだ浪や江口神崎夜見せあり　山
法師もぬれの難波女の月　清
馴じ露佛祖をかけていもせ山　順
雁もようきけ筆捨の松　山
鎌倉やひらくる花に相場物　清
桁(ケタ)の玉ちる雪の下水　順
名
橋杭や三川に渡す朝霞　同
二むら越て山出しの杣　清
土座枕風のふきしく莚田に　山
蚤蚊に夢のさめが井の里　順
一夏(ゲ)とて發心門に入にけり　清
しきみが原をめさぬか〱　山
嵐山行衛の頭巾ひらさらに　順
はやり野郎の客人の宮　清
白髭の名主に忍ぶ地をかりて　山
寺井の水に腰かけのちや屋　順
かち荷持ゆきゝの岡に暮の月　清

龍田の錦盗人の沙汰　山
ウ
上州絹すゝきの糸をたてぬきに　清
妙義まいりの袖に鈴虫　順
野火(ノビ)留(ドメ)や別火のかげの暮ふかし　山
疱瘡かるく犬飼の御湯　清
箱肴花を折そへ一重山　順
伊駒をおりて轉りの鳥　山

仝

武藏是にありや夏のゝ葉も四尺　幽山
常陸の螢迯尻の影　松陰
立風呂に樋川の里雲こりて　千春
髪の剃(ソリ)屑(クズ)前橋の床　山
結城紬ゐりより落る暮の月　陰
糸鹿(ウ)の烁や針留もせず　春
ウ
馬の四足(スツ)水冷じき黒血川　山
栂尾(トガノヲ)の上人身ぶるひしてたつ　陰
春日山木の葉一つも盜(ヌス)まねば　春

玉子の覺鳥栖のかけ　山
鍋嶋に引殘したる塩蕨　陰
爰も唐津に兄弟有けり　春
腕の疵あひ初川に末かけて　山
だいて枕に天草の露　陰
持馴ぬ金の峯に月更る　春
痃癖いたくかた岡の虫　山
花の雨三笠に是がふらうやら　陰
逗留は外藤川の色　春
名
朝霞不破の關やの似せ手がた　陰
遊女の果の妻とりの里　山
わけ立るいきの松原それ過て　春
いづれもろく（に）床の山風　陰
始けりつれ〴〵成まゝ日ぐらし野　山
ばくちの道の親しらずめが　春
古着買衣川迄尋けり　陰
南部のしげり杣入の聲　山
時至り相馬の都取立て　春

矢はぎの宿は武家でかたむる　陰
三川記やつきせぬ落葉松の月　山
十市の雫銀の土器　春
灸箸浪もてよする佐渡がしま　陰
わらべの浦の砂ころびのみ　山
目の中や志加須賀の風痛むらん　春
江口にこたへどなたで御ざる　陰
象山の白雲隠れ姿の花　山
だて染の帶まきもくの春　春

仝

水無月やいつか來にけん裸嶋　幽山
團扇うすべり床の山陰　素堂
うつり行鏡の里に髭そりて　仝
ゆるぎの森に風けゆづれば　山
大上戸有明の雪に鴻の池　仝
鬼は丹波に冬籠る空　堂
鉄の窓やうごかぬ千とせ山　仝

代は塩硝の音なしの川　山
からくりにさゝやきの橋取はなし　堂
扇の芝を小便にゆく　山
遠慮なくさらしの裾をかいあげて　堂
寝覚の里や壁蚊屋に入　山
紙燭召て手枕の小野御覧ぜよ　堂
かくれの山にはき物の露　山
夕月夜馬よりおりて雲づ川　堂
梢の色の首おちの瀧　山
薩摩の守花は嵐の音にきく　堂
つげのゝ雪間分るとき櫛　山
名 難波女が手織引はへ糸あそぶ　山
もり口積にくゆるせんじちや　堂
戀わたる篭の渡りよ休ましやれ　山
まだ日高川ふかき思ひを　堂
焼食や誰岩代にむすびけん　山
反古につゝむ山本の雲　堂
伊吹颪作り蛇腹の顯れて　山

えいとう／＼不破の木戸番　堂
すかぬやつ人見の松をそれと見よ　山
狐が崎も都ならねば　堂
出頭せし鎌倉山も月細し　山
又上もなき松平の床　堂
ウ 草／＼の花園つゞく薬苑に　山
志賀のから橋唐鳥の聲　仝
ひえ法師何ぞとゝへば何ぞとこたふ　堂
是悲におよばぬ白川の院　仝
花の本持に定むべしわかの松　山
那智石みだす碁笥の春風　堂

大矢數（おほやかず）

五巻

西鶴

（序）

あけらほんと雁首をのべて思ふに、鼓破れ鷄時刻を移す。此時諸藝盛にして遊興巷に溢る。俳諧猶其一也。此道輕して輕からず。莊子偶言・淳于髡滑稽戲言に似て戲言に非ず。茲に難波のあしもとより鶴立て、守武の末の世に把り、道をふみそめて心を勵すに、初は驚て褒、中比は妬笑ふ。益心のたねをきばり出し、すほんの功をへ、水に瓢箪の輕口、たれかながれをくまざらむ。比は延寶八庚申のとし、生玉に大幕うたせ、一日四千句の矢數俳諧を吟ず。當地宗匠、親疎ともにつらなり、内五人の差合見、八人の筆とり、其外名を得るも得ぬも稻麻のごとくこぞり、竹葦のごとくまどゐて耳を傾け、千句の矢先、雨丸雪とふりかゝつて、執筆は忽つかれにけり。其身は少とも倦となく、百發百中、理義精密にして尤妙也。此集のなれる時、序つくらん事をこふ。水魚のよしみなきにしも非ず、辭するにいとまなくて聊うなづく。

兀々子鬼翁謨序

大矢數役人

指合見五人　和氣　遠舟
同　淺沼　宗貞
同　前川　由平
脇座十二人　高瀨　益翁
同　木原　宗圓
同　秋田　桂葉
同　青木　友雪
同　山口　淸勝
同　岩橋　豐流
執筆八人　水田櫻山子
同　田中　定方
同　天引　親延
同　金谷　宗及
執筆番繰　松風軒西尾
白幣初千句　松井　西花
銀幣三千句　岩井　武仙
懷紙番繰　衣笠　一鶴
目付木　山田　西長
線香見　池山　西戎
割帳付　齋藤　幸船
懷紙臺　岡山　一風
懷紙掛役　粟野　友知
御影支配　鶴川　生重

同　片岡　旨恕
同　小西　來山
同　岡西　惟中
同　益田　不琢
同　田中　柳翠
同　高木　松意
同　水野　梅吟
同　齋藤　賀子
同　柳葉軒鶴流
同　西村　元重
同　原　松林
同　辻尾　意閑
同　岡本　西住
紅幣二千句　木村　西流
金幣四千句　山洞軒一水
同　吉田　風鶴
同　岩田　西里
同　松井　悅重
同　下山　和風
同　原　如雲
同　吉田　西可
同　小松　元知

代参 井田 西用　同 野口 西言
同 上柳 西信　同 山本 祐竹
醫師 横地 祐菴　同 高石 石辨
後座 釋 西波　同 釋 祖寛
同 榎並 貞因
同 闕士 西雁
已上

（巻之一）

大矢數　第一

何泰平

天下矢數二度の大願四千句也　難波 西鶴
百六十まい五月雨の空　梶山 保友
郭公八わりましの名を上て　西山 梅翁
さはる所かきく醫者の山　松雪軒 大鶴
酒の瀧絶ずとふたる座敷もち　谷 木因

岩が根まくら寝る事がない　在原 萍々子
朝はうつゝ晝は紅葉に夜るは月　安川 孤松
京にもあるまい目の前の秋　松寒軒 鶴爪
染出しの替る所をうつ衣　執筆
伊達このまるゝ三吉野の奥
別れ路のかねの御嵩を持れたり
蛭のぢごくや浮雲の下
これ海の荒和布の蕪が生をかえ
見せ物となる松陰のみち
商はまた無功者な初時雨
江戸へゆくとて涙あしがら
不慮に一夜乙女の姿抱てしめ
雪の通ひ路躍は忍び路
雨乞の空定めなきけさの月
三島の宮やあらたなる鹿
花によしありきによしと山越て
春の價や中間奉公
揃ふては手ふり鶯飛て行

かぶりしほの目あは雪の山
からくりや下に通ふて瀧の糸
七日のぼりし都でおどろく
說法は今はんじやうの百萬遍
誓は墮落て行かぜ
痩こけた御内所や公達は
永の留守中とふ物は猫
眞葛葉の恨とつらさ重なるか
せめて待夜は御座れ月さま
せく逆も凡知れたる轡虫
古歌に讀しは關守の山
附あひに波爰もとは面白い
行平松は膏藥のたね
投首で別れてのぼり給ひしが
とつくりころり付さしの跡
滋樂（シガラキ）の山姥舞ふて其次に
十三間は瀨田の長はし
漣濤もよせ來る方の水繩あり

うけ戸樋響く五月雨の空
ま一聲爰で聞たし嚀でも
地はくぼむとも思ひ定めて
さいせんは行司貰と走より
下ないてすむ町中の秋
二つほし共鬪（イサカヒ）か出されうか
鍋釜割てのこるもち月
大地震ちつとも噪がぬ花の山
覺悟の惡い雉子なくなり
切腹はたてからひいて横霞
仕與の續き埒のあく山
はしらよせ關の岩角踏ならし
十六段をいまやひくらん
是も又浮世を渡る木綿買
ふんどししめて懸る夕ぐれ
今宵なほ思ふ所は部屋の内
四年このかた積る祝言
十露盤に泪の玉が置れうか

無念や戀はうせ物にたつ
見付たる影も貌（カツチ）もなかりけり
出家の曰ほらぬ井の水
心の月喉の渴きし夢をしる
目まいといつぱ荻の高聲
針たても所によりて替る秋
まだ獻立にのせぬ蒲鉾
御成門建て夕を急がるゝ
酒天童子はながき君が代
大江山五十丁一里分初て
七文のまし沓懸峠
松に降る雪は豆腐のごく也
つる持鍋や冬籠る宿
潰しめと人に言はれて娛しめる
臂は根ぶとの色になる草
月影も茶臼の如く廻り行
笑ひの內の枕繪の露
花の色之信是を戲れて
柳の髮の止解（シドケ）なきこそ
慈悲の春此時ときく籠（ロウ）拂
原田の次郎老のうぐひす
はじまりを待るゝ物は操ぞ
作麼（ソモ）まくら蚊屋いかなる細工
水學も心の底の浪に夢
夫五十年目塞いで居る
分別も又は出さうな所也
是一番は屓にしてうて
やれかため釘ぬき松皮木村紺
片肌ぬいで大工の棟梁
蹈（ケリ）合（アフ）や源平五屋根はやね
宇佐八幡は神さびて今
月の劔砺（トギ）ゝ是を憐て
悲しき秋や取賣が夢
鳴き渡る雁に子共が過て扨
百目くらいの稲葉亂るゝ
石火矢の玉にもぬける露の玉

異國の舟も大浪の浦
住吉の神の力を覺たか
片手であげる隅に雀が
初花は千句千聲吟聲あり
膝たて直す藤のたそがれ

大矢數　第二

手何

姿の花又ふき出せ大句數　水守重直
柳氣力のある時一日　西鶴
國役の蛇籠に春の水とめて　井口如貞
あたま讀ぬる村雲の空　西立
燒物に腥き夕の月　西有
草葉分ゆく虫にさはつた　西眼
それが腹の立事ならば亂萩　西山
露霜二つ置てうちやるか　西玉
暮て秋この大筒を引かまえ　執筆
をとこと合點で女郎花さく
心中をたてりと思へば笑しい迄
夜前も門で聞てゐました
西へ行顏こそ知らね郭公
雲晴ねども即身成佛
やれ急げ一味の雨が降さうな
近付あらば借うかさ寺
内の者よび次の濱遠詠め
先手をうつてよする漣濤
新九郎まだ共比は若盛り
月の都をひとたびは江戸
露霜にかねといふ物抓取
お齒・黑壺に秋の水行
糸による戀をひかるゝ木綿島
思ひの淵の天滿川崎
裾は雫袖は涙の守口に
世渡る業の駕籠はひま也
小芝居の狂言綺語を振捨て
巾着きりはむらさき服紗

御せんさく所縁（ユカリ）尋て野の末も
　聲かくれなき鈴虫はむし
大分限不破の中山月澄て
　野上の里に手懸なと露
秋とはかぜ筐の扇御もつとも
　自身に讀し札の行末
補陀（フダ）らしく三十三番法の舟
　浪の綾ぎぬ引出しの内
本丁は手代任せの友千鳥
　妹がりゆけば闇（クラ）者僉義
傾城屋岩戸の前にて足を歎（ナゲク）
　今度退治の鬼も十八
契るとて四ッ手に輿しも夢なれや
　難波あたりの持網のあと
雜魚汁をするかと見えて煙立つ
　里の夕のまつり客人
二親のもとを尋る二はしら
　提頁若盆孝行の秋

けさの月富貴のさじき取れたり
　扇を置て彦七が顔
咲く花によき思ひより有そうな
　水性木しやう櫻散る山
算置が春の心はいか計
　雲静なるさぬきの金毘羅
順風や浦ゆく舟に楫をたえ
　商ひ冥加浪の夜る晝
お惠美須の月にも烏帽子被（カブ）れたり
　罷出たる秋のはな候
亂杭を打てば忽露ちりて
　さては天皷が先陣の跡
夫手たて運氣を雲に知れたり
　米は買置進退は蛻（カラ）
何事も尻へぬけたる卵酒
　帶がゆるいは世界の貌
門立のもろこし様に續く者は
　初瀬の寺のかね持てこい

名木の梠にすみ繩打たれたり
　隱居せうならかゝる夕暮
淋しさも薄鍋一つたのしみて
　むかし遣ひし錢ようてゐる
穴一に妹が垣根はあれにけり
　棒になひなとふり袖の時
挑灯にはや釣鐘の夜が更る
　なかすかとくか謎の事わけ
うき藏主笑のたねの御次の間
　長の旅中一葉の舟
尊靈はいづれも知ぬ貌ばかり
　嗚呼こゝろよい極樂の月
酒飮て腰をうたせて花盛
　詠は箕面の瀧ぬるみ行
二の富の宿はさながら夕煙
　油を賣ればこぼれ祐（サイハイ）
遠里小野の里も次第に建廣（ヒロゲ）
　細江のきしも唱へうしなふ

請取てまた會馴ぬ浪の聲
　舟もつかぬに膳の出しやう
御霜月門跡樣も驚かれ
　是は無常の風の音にぞ
慈悲にたつる茶引人形巡來て
　五月五日の中空の雲
あぶないにこれなる枝に寢て起よ
　連理のちぎりぬしのあるかゝ
噪ごなら月の都の御町衆
　思ひもなさけも秋はかねつく
家質も流れてはやき水冷て
　今なくむしの親の時には
四果經萬事はみな〳〵夢ぞかし
　枕わらして楠が胸
二年懸工みて舟を作られたり
　商賣替て酒の大家符
行て見ん手越の里の庭の花
　長者の娘脇明の春

大矢數　第三

何經

今我をれ目に見ぬ富樓那大矢數　岩井武仙
木の下闇は愚癡の槃特　西鶴
鳴ゆくは時鳥やら牛やらん　前川由平
打明るほど降て水橋　西竹
めし椀のあとは白浪かさなりて　西泉
物の上手か縫師屋の瀧　西良
はし縫のしるしと思へば月は丸　西雪
茶袋の口秋の夕暮　西能
詠れば釘に懸たる露時雨　執筆
又綴あてゝ衣うつおと
わる狂ひ唯山姥が業なれや
夫上臈に香車うらめし
明ぬれば暮るゝ事とは手管の文
物案してそれからそれまで
運は天に命は海に舟の上

平家の一門同じ商賣
あい引のしほの上りを請つたか
幸爰に撮菜のくき
月は獨野寺のけしき是もよい
鉦は手づから躍念佛
春は花秋は平野に詣つゝ
冬は雪かと玉綿の山
五十年の夢を一度に裏かしや
叩番まで天命を知る
道を道に道を通する町送り
伯母さままてばあいやほう〱
渡邊の綱がほしくば買てやろ
加賀に菊水山入の酒
末は千代命知らずか詠の月
手織にしたる日發島の露
蘆の穗の綿も自然にたまりしか
やれ樣おさぬかあし弱車
つる根太他人になつて爰をせい

寢所替て哀なる宿
敵持枕の夢もひつくると
勝過したるきのふ六番
載許(サイキョ)場を慈悲の心に思ひやる
釋迦一代はどうでもすぐるに
あら働茶摘水くみ薪割
此年月に病ひ氣がない
人置の祖母が參つて申やう
實盛常ゝ捨て銀の沙汰
歌讀の惜家(アッタラ)を潰(ツブ)されたり
膳棚其外たゝみ挑灯
神祭二十五日も明ぬれば
不慮の喧嘩に鹿のなく聲
證據には嶺より月の出にけり
をれがしつたかうせ物の露
幽靈や花の貌も風の跡
むかしがたりに彌右衛門が春
消にけり茶釜の名のみ雪の泡

古借錢の帳の行末
浮世哉二度果報ほり出し
黑子(ホクロ)はあれどおくさまの代
氏なふて玉なと提る夕の床
苧(ノ)篙(ダイ)遣ひか早い思はく
言ひ名付中將姫を七つより
竹馬にいざやたけの內越
張貫の山のけしきも姿がよい
はやり咳嗽(キセン)に松は煙りて
初時雨其日は懸る異國舟
三つの寶をぬすまれな風
詠やる醫者智者福者今日の月
千軒あれば友ずきの秋
置露や妾は山崎かね所
宗鑑法師が毛抜殘して
おり天鵝絨(ビロード)泊り客人下の下也
五三に逢ふて夢か現か
はりあいのありゝなければ斗瓢(トヘウ)

一つ咄しのあとの松かぜ
犀(サイ)の角都へのぼり給ひしか
　打疵直す白川の關
吽(ウン)ゝと十日計は歌枕
　倭國の風俗生れ出る露
鶴龜はたゞしくみるて神の月
　燒香場より初あらしふく
また花の枝にあと取轉て
　公儀事やり梅の陰
行春や難波の浦より御舟にめし
　島ゝ山ゝふしかたる段
煎湯一つ持て參つた水煙
　此體ならば醫道に及ばぬ
始末して居喰に暮す山の奥
　隙ならさそう獅子の勢ひ
夫佛師臺座後光をひからして
　安心爰に月のたまの床
相燒の箱を明ては夢ごゝろ
　野七里(ノクレ)今七里(サトクレ)山よりは濱
巡見衆曇らぬ月の空見えて
　唯御傳馬は渡る雁金
それ朱印移ひやすき下栖
　一斤袋玉笹の露
箱根山分ゆく末の部屋見廻
　戀のかたまり二子の貌(カタチ)
木戸番は或夜しのびて通ひしに
　はれの軍やしね死のゝ中
其比は十六歲の花盛り
　聖德太子小ざくらの陰
佛法を說ひろめたる春の風
　愚意の我等も責ては俳諧

大矢數　第四

何請狀

萑(ムクラ)茂る宿にぞ鬼と相住居　岩田 尹許
　草の枕に虵躰の鮨桶　西鶴

白炭に佐藤太が夢覺て　西木
すこし力は平の惟持　菊永
附合に言はれぬ古事を出されたり　友夕
道中五に脫尻の月　魚市
散御乘はやらする三十石　佐重
抓取には雁金の聲　梅葉
八重の霧狗賓の嶺や晴ぬらん　執筆
門をかためよ懸かねの坂
兵は古大根の勢ぞかし
忽欝きり五桶の沙汰
點取に負てのいたる暮寢し
又明後晚松かぜの音
内證の苦は色かゆる目安書
十露盤上手といはれし我も
廿日きり今は法度の御觸にて
誓文はらし星なき月
ゆく秋の夜るの床にてどのかうの
かるいおもはく鹿などを呼
花に鐘なんとも存ぜぬ高師山
かけじや袖に懸りをれ藤
ゆく春やいそがし業の玉襷
餅尖寺はいつも正月
佛法の晝寢をしたり又起て
この世とあの世と二つ見る夢
乾坤の箱を明ては何もなし
馬鹿つくされし親の跡取
八代や九代續けて共次は
抑是は幽靈の影
物語今は百とて止にけり
駕籠の行衛や錢を落した
もろこしに獨の女子細あり
いつも思ひの燃るをよろこぶ
くどけ月一度は落よ地獄耳
消ゆる物じやが露の夕暮
はい炭に又吹付て秋の風
かなとこならせ伏見板ばし

乘合の舟の出ぬ間に髮そらう
　殘る二人も俟寛同前
脇聲や今をはじめの事なれば
　てにはの惡い所はなをせ
剃らせて談合はしらを立られたり
　月日のめぐり閏の代の時
からくりに松田浮舟のつて出
　くゝり袴に薄なみよる
蹴上ては色をふくめる暮の月
　公家うつくしき露の白玉
花衣よごれまぶれてゐられても
　是爰にある紅のむめ
置た物忘れて春や立ぬらん
　重市の名を聞鶯の聲
逢坂の關を過れば茶屋狂ひ
　椙の葉白き顏が可笑しい
賓頭盧も本尊懸たと鳴鳥の
　後堂からはれて村雨
たまりけるなふ〳〵俄に蘆埆
　算用あいやかさなれる山
何貫目久米の岩橋懸て置
　風呂屋に雜木榎の葉井の水
白玉も龜も思へば人たらし
　なんの萬年いきる世中
月は水名譽不思議の藥鍋
　孔子の歎き夢の春の夜
あつち國飛そこなひの胡蝶あり
　阿蘭陀流の行方の風
膏藥の色に移ふ空の雲
　まだ塗たての佐夜の山陰
或時は用心をする矢の根鍛冶
　三人口に十五人まで
厄介の懸る所に松の風
　時雨ふる夜はこけて行末
僞のなき世なりせば吉利支丹
　一たび百姓もと土は土なり

大象が出て働はあらた也
　御經讀誦日ゝに日に日ゝ
月花は今日前の二尊院
　茶杓に名物爐の名殘なり
さかやきも移ひやすき朝霞
　暫しが替る旅の行末
今迄は馬と思ふか飛鳥川
　岡に契し戯女に飽
濡の文霜のふりはをかたどりて
　鳥もつとめの千鳥なくなり
看經の鴫の聲さへ哀さよ
　心なき身も近年の秋
古歌付が時行て今は出る月
　忽貌(カタチ)鈴鹿路の鬼
黒雲が群だち來つてすかぬ事
　をれにまかせて合羽とてこい
手割のたばこたのしむ夕詠
　小半入に一生は夢
此ごとく吹と思はぬ浮世かぜ
　心がすはつて大舟に乘る
御代官御代をおさめ給ふ事
　時節に一さし舞鶴が岡
立姿かさや三勝是じや〱
　花の盛は十七の春
厄神を祈初ぬるとら藥師
　挑(カヽゲ)たてまつる燈明の影

大矢數　第五

何茶館

飛や螢宇治瀬田ならす大矢數　江島 山水
　芝は扇の拍子に懸つて　西鶴
玉の段舞の始まり古程に　牧野 西鬼
　雲の通ひ路はなつ鐵砲　浦風
ほけがたつ早晩(イツデ)ながらの雁の聲　直治
　蓋をとつたる明ぼのゝ秋　松樂
月影や外井にうつる手水水　正利

つぼの内には色づいた山　元吉
新酒や夕は是をたのしみて　執筆
夜見世通ひの首尾はともあれ
別路やすこしは惜む鐘の聲
我躬ながら跡職の公事
海にまた末の松山欲ふかい
一度に喰れぬ鹽竃の浦
十石の食を都にうつされたり
平家のさかり親類殘らず
落足も草鞋きやはん講參り
つゞく痩馬鈴鹿路の秋
水入の月は八十瀬の浪にしづみ
氣も魂も露の夕ぐれ
是は又藥遣ひの花に風
柳の髪がぬけて兀山
さほ姫に縱敷銀付とても
分別所袖のとめ伽羅
今晩の床はふらうかふるまいか

川原の凉み重一重六
田舍者侍交り山法師
みな〳〵死では五百羅漢に
夜がたりの夢が殘りて安樂寺
是も思へば天神七代
正直は儉分限にとゞめたり
かうべに付る油賣しか
風かほる下女があたりへ音信て
夜ばいの扉明やすき月
輪懸かねかけたが弛す時鳥
熊坂一族さそひ顔也
雁はれて奈良座殘らず罷出
たゝみなをする袖がきの森
明てきて暮に數なき沓の音
此宿中に馬を出さぬか
足弱の王昭君がなく涙
莨若きらひの思ひは煙
一代に一度は眠け局など

よいつてあつて大内の空
念願の望もかなふ歌のきれ
狐川ゆく手鑑の月
身だしなみ重ねて秋の男山
腎虚の露を神ぞ知るらん
花に風吹たら忽躓(コケ)そうな
将棊の金銀こがね山吹
玉川の蛙も隙に相手どり
浪たちさはぐ重て爰許
つり目安共末ゝは捨小舟
われ鍋すりこ木香物桶
煤はきや終に亭主が見ぬ所
足をば空になぜに寝て居る
執心の佛金輪いたゞきて
ひや酒の恨み申べき君
夕だちの雨の帝も驚かれ
則玉座で抹香焼るゝ
極楽をこゝに移して千部經

百十人の飲食を二度
月をのせて小早といふ物急せたり
折ふし秋の末があぶない
四千句をまづ取懸る亂萩
野寺の建立十方旦那
堀鑿の非より一躰堀出し
うれしく急ぐ取賣都へ
八重の雲立上るより二人連
敵うつまで同じ編笠
有付は野に臥山に鳥櫂(ナド)し
久離きられて鹿の音に鳴
親類の末の秋とてあらざれば
今でもしんだらあのやうな月
白露を置て見てから手を直す
大橋流の筆をおつとり
花の盛どこへ出しても二百石
春の川邊や天道の内
角のくら輿市共時たつ霞

嵯峨野の末を今朝見るらん
小相呼て笈帷子が辻とかや
奥さまの氣にいれば入なり
さては變名立つたら立迄立風呂に
作り聲にてそれは吶るか
きり幕の内より赤い顏を出し
水を仕懸てあまのしやこめを
播磨なる城ふみ潰す神軍
今年八十明石の入道
夕暮は化たそうなる手長蛸
砂鉢計が殘る松風
夜半の月進退棒に振られたり
賣僧はすかぬ嶺入の人
すこし露哀と思へ山は山
出るといふ字をまだ得書ぬか
眞砂地にそもはい初る虫の穴
恒河の鱗佛の別れ
天竺も花なき里に成にけり
酒をくらふて夢の浮橋
買懸すます事なく横雲の
されども世間はたつて行山

大矢數　第六

何坂

大獨吟嶺の松風谷の蟬　奥村林雪
若竹に虎里に狼　西鶴
したらてん雲忽に入亂れて　木原宗圓
小便の曉秋はきにけり　良和
月拭ひの綴きれの色野邊にあり　寛政
つとめをひいて夕暮は月　宴流
おのづから計鷄の音も絕て霧　利見
障子明ると是はさて露　十賀
きのふの空けふの加減は替りけり　執筆
旦那の氣だて雲の行末
諸事萬事心にかけな時鳥
音羽の山の世帶が專一

爪に火をかれたる木にて燈されたり
　廻し事に縄きり所望
いかに盛久遊覽の時四斗樽も
　貧乏鍛冶まで鞴祭に
まづ七日八日上りし稻荷山
　祖父の髭は松の葉の月
千代の秋今重たりゐほし覩
　幸菱屋暮の稻妻
花染も京は水際すぐれたり
　鯛は櫻に大坂はまた
若い時諸國修行に立霞
　役の優婆塞子細ある山
火の玉が吉野の奥に落たげな
　三年生（イキ）まい榾の木がくれ
いはれざる銀を拾ひし厄拂
　浮世はみな〳〵夢じや物月
胸を定柳が涌よりどんぶりと
　聟には礫女浪よりくる

なく鳥も連理の枝に噪（サハイ）だか
　廣い揚屋のうらは遠山
みな大和井筒によりて影見れば
　汝一人の水右衞門也
月照す宗中多しと申せ共
　蟲の鳴く音や筆を持ては
やす〳〵と生物よする霧の海
　取上祖母（ベヾ）や礒山のこし
爰は高砂かしこは襁褓（ムツキ）さがされて
　むさいをかまはぬ世上の曙
お湯の子も救はん爲の御方便
　達摩大師の潜る腹なり
氣根强う九年が間按（アン）摩執（トリ）
　奥州合戰夜るは隙也
三味線も昔長持に打込て
　戲女狂ひ分散の月
露時雨すこし情が懸たか
　また從子ほど廣き野の色

其昔木の股よりも花咲て
　鳴歸るらん梢上の雁
一疋は加賀に白地の雪消て
　遁れ乘たり春の山道
よい聲で諷ふた取引霞
　人目恥ゝ後家のいたづら
死別れ生てわかるゝかねの聲
　やれ今までは余所の夕暮
雲噪ぎ必ず降て來そうなそ
　三日めを見るかしらは猿樂
大酒もり長者の内で何なりと
　時の光や萬燈の影
眞ある神の誓の南無天滿
　勝て見せうぞ碁盤屋町すぢ
月に駒さま〴〵曲を盡されたり
　過分の望み稻葉亂るゝ
新田を早取立てわか貢
　畑の末に五間七間

手桶番よばゝる聲も靜まりて
　行人忽衣ぬぎけり
無理死や三輪の山本道もなし
　十市の里の御場よごすな
譜代者あはれとし子の生きて
　數かぎりなく橋いたゞく
絹配つい明方の春の色
　飛人形や霞む半空
花に風手妻のきいた事こそあれ
　弦癖おせば雪のしら山
菊都は御出入中谷の戸に
　是非きつはして月待所
其色の日數とまりて下紅葉
　妻こふ鹿も男かしれた
きかぬといふ聲きく時ぞ恐ろしい
　地獄の事は殘らずまつかう
改て繪圖の松見る箱根山
　手懸を置に玉笹の末

降雹是こそ戀のかたまりじや
　心中通すやなみつくらう
前髪のさては五郎は弟分
　文の重寳鴛の取やり
内の首尾憂目を今は水鳥の
　進退つぶしてたなし小舟
これまでは月の光をたのんだる
　秋の行衛や餘所の挑灯
袖に露我髻(モトヾヒ)の下おとこ
　草臥かきて揚り場の風呂
すき腹に悟の道も成がたし
　共骨の數四十八ぐはん
尾がしらや生死の海の料理好
　浪をたとふてしら紙一枚
花は今すな雪隱にかほり行
　誰ぞを覗く窓の梅がえ

大矢數　第七

難波何

寄妙の鶴方便の弓大矢數　宗光
　他方の涼風あたるを幸　西鶴
釋迦御免東の板付たつてきて　閒睡庵月山
　縮(チヾミ)かしらを瀧に打たるゝ　西松
青竹のまだ夜をこめて氣根者　為勝
　さきのけ〳〵月鉾の空　西圓
露時雨自然喧嘩はふり物じや　西一
　紅葉亂れて六はい機嫌　常賴
山歸來何かは苦しかるべきと　執筆
　道修谷もや君が代の道
雨替の錢や吾妻の果までも
　人の心は握てはなさぬ
夕の床外へ出されぬ事ながら
　啼し次手に思はくの空
わがすきは横のひらたい雲の帶
　白樂天は何と見たつる

潯陽の江にすむ時も浪こはし
　飲てのあとに新酒のかね
出しにけり町中からの夜半の月
　御番御太義名代の露
夫花は吉田の宮の神木也
　兼好以來かほる梅が枝
四十とはあまり短い夢の春
　責て二おり風の行末
杉重や事が果ての松の陰
　時雨ぞ通ふ裁許場の跡
是が冬のはじめ也けり袴きて
　水晶お出や庭山の風
忽に祈のけたる石佛
　日まぜてありしか次第〳〵に
女月やあい合牛をひいて行
　高千石のさくら田の末
物かしら霞が關も續きけり
　鼓の懸聲雁歸る空

月は夜晝は何また遊山好
　露に亂れてゆり若大臣
ぬれの文さては小鷹も憐て
　胸が燃えてはまき狩の山
はね車巡れる如く紙一重
　水波のへだて引藥也
此客上戸の喉の沖の石
　さては殿樣末の松山
系圖など語り詰てはもそつとじや
　蹙(シビリ)がきるゝと堪忍しやれ
それ戀は親の寢いらぬ内待て
　だたい契はふけるといふ月
數鳴も鶏の床か笑しいぞ
　ゆるぐごとくに深草の露
花は根に惡い所の虫喰歯
　思へば淨土の春にいかうか
彼きしや尻に帆懸て東風あらし
　浪爰もとは衆道もつぱら

睦言は其曉も宵からも
　恨みの鐘の湯と成てめし
忽に蛭を見せても欲なれや
　根太の臘が何にならふぞ
夫うぶめ作り咄しを聞にけり
　降ルは涙の雨の夜の伽
げに思ふ草の莚の悪性宿
　内證の首尾はまかせ水汲む
お茶一つ兼て進ぜう計也
　京業に爰をすみよしの松
影は月光源氏も此度は
　運のきはめの落あしの露
わたりくる燒鳥計あがり膳
　門跡様を御巾のあと
紫の所緣尋て臺にすえ
　見れば旅宿の取なしの歌
よい言葉かゝる所が忝ない
　何時成とかねの入時

鼻毛拔もちあはせたを幸に
　山のけしきや乘て行舟
湘浦の雨の降日は爰に又
　繪書の上手雲取の月
女七夕いきて働く所をば
　賣買高し世を渡る露
花は吉野さく事それにかまをふか
　姿の池やあぢな櫻木
夕霞手くだは浪の紋なれや
　梭を二つにてたて横の縞
燈のかすかな宿の獨すぎ
　見ぬ世の友やのこる木枕
爰は又世尊時分の鼾かき
　八千度まで立ぬいひわけ
少しの義帳に付たりけさしたり
　町の者どもまづ連ていね
送りしか烟あぶなき蘇り
　是からかたき岩屋の上人

羽衣でなづとも盡じ餅の缺(カケ)
　日本無双の山は夜るふる
借(カリ)ねども月は一かい待合
　說經ときか袖の下露
水冷ていにしへ思ふ隅田川
　貢につかふた高濱の松
石臼に成事やすきさゞれ石
　幌こそ通れ君が八千代を
かり衣裳何惜からじ御紋付
　龜甲輪ちがい箔の置上
盛物や當寺さかんの法の花
　賣念佛の生玉の春

大矢數　第八

何　枚

大矢數春宵一日價四千　池山 西戎
　飛鳥雲に入あひかぎり　西鶴
禝さく山は天下の御關所也　広島 鶴友

　酒のまぬ者獨も通すな　又玄
是は又無理と出さつしやる空の月　西中
　諸鳥わたつて生て見らるゝ　西也
長九十まだ百までは菊の花　西弘
　果報つもつて仙人の錢　西鳥
さればこそ寢心よろし膏藥見世　執筆
　唐破風作りおし明る門
あつたら事きつてきたのに取れたか
　さあ是からはをくれうつ音
きはまる科太刀取後れ廻り宛
　人間終には土屋の三郎
世の業や口鼻を付て持遊び
　獨わらひは戀の根本
しのび路や猶巡りゆく車僧
　いつそに懸つて嵯峨の秋風
不情なといはれては是袖の露
　迚ものがれぬ月の舟には
花の浪さては最期が極つた

五貫目は後家藤の棚賃
行春はならのまなこと聞へけり
青丹よしとはさかるちぬ側
俄客間へど屆かぬ浪の聲
汝一人の旦那様也
南無諷の大明神と腹をたて
夜るの皷の拍子があはぬ
或時天より三五の十八降下り
然れば此松靈寶の場
當山に分入事は初時雨
いつはりのない銅をほる
卷下にのぞむ所の上(ノボ)り龍
すは〲うごくはよしや風
一ふしに無常は煙土堤は月
隱房(フンボウ)が手にて衣うつ音
賣藥色は紅葉をまるめたり
此二三日鹿が鳴きやむ
長持は庭に一つもなかりけり

烟は遠し見舞は大勢
御隱居を室の八島に建られて
口鼻(カい)にもすらす黒髪の山
五月雨のぬれといふ事したいほど
かの六味丸きくほとゝぎす
雲に雲錦香合かさねたり
轆轤をひけば虹(オフサ)かゝれる
葛城の山より月はころばかせ
なんと仕やるぞ跡の秋風
花に別れ當分十方に暮ました
手前の小提綣に見ぬ春
八重霞立籠たる強盗市
負せ方より責口の次郎
似た顏がないと思へば浮世也
鳥あはれぬ墨染の袖
鑓にさび身から出したる粟田口
野等がぬけ穴是に候
親のあと與見を聞て恙なく

年代記にも心を長う
桐の箱七間まなか候ひし
咄し上手は皆うそでよい
太閤の時めく男獨なり
つかひ次第の金の瓢箪
游泳ゆく寳の池の浪の月
死んでも命は惜しき露の世
どうぞ又わたり手がある秋の風
虎三疋の白川の闘
熊鷹を正宗殿の飼れたり
何もすたらぬ上臺所
災も三年めには千年山
逆ばしら朽松は久しき
布を經る岐をいたり戻つたり
物負ながら留守は度ゝ
作り聲阿濃が浦へまはつたか
月に鼠鳴明星が茶屋
ころ〳〵と一文錢に露ちりて

六親眷屬暮の稻妻
降雨が生れ替つて花になる
頼朝は梅判官はふぢ
薄皮いづれけだかき判盡し
縫しるしより山は染物
近日に是から出す瀧まつり
若い物たて白き筋なし
忘れてもなんの喰ふぞ凝海藻
夜前の腹は弘法の歌
鬼神もすて杵もつて追はらひ
餅つきの暮鼻が浮雲い
次郎坊太郎を祝ふて樽一つ
角いれた事きのふやけふじやが
片肌を脱で懸りしさし物や
また此上に鐵砲を置け
人たがい獨もやらじ闘の月
今度の喚ぎ薄に草に
松むしの二匁きりのねを上て

安部野はながき點取の卷
開帳は釋教とこそ聞えけれ
愚癡蚊虻な我にみちびく
はしは右五器は左かあかり過
小笠原家の家の風ふく
咲にけり本朝よりも唐津の花
茶碗の燒出し草の下萠

大矢數　第九

何舞

どれが鷲ぞ佐野のわたりの夕詠　松舟軒 西虎
駒とめて今二の足をふむ　西鶴
木具仕立もとの下草生出て　片岡 旨恕
御成の門に春の色山　西林
鳳凰は飛かと思ふ雲霞　西忠
獅子の居喰はあらき下風　西廣
千貫月親のつたはり秋の月　西道
よい事計手の筋の蔦　西傳

油辻や細道の露かき分て　執筆
川原へ近い寺町通り
佛は坊主ころしか諷ふて出る
八の口鼻めはいつの世語り
其恨みはかぞへ加留多の馬繋ぐ
いつそに燃て火の錢とやら
骨揚のやうすを問ふて泣涙
夜半に迷ふ跡とりの聲
二番札落る所を押へては
種子をまきしか世の中の秋
詠やる掃部が末か野邊の月
兩家老して袖の露霜
さく花を待てば初段を語出す
鶯よりも其子なかすな
二日灸今迄待つも不思議也
道竹故に命拾ふた
假衣まる剃にあふ佐夜の山
念佛四五返きく川の里

夕立に萱が軒端も崩けり
　是神鳴の太皷がわるい
くぜつの火忽くはつと燃擧る
　やれ鳶口よ熊手性也
辨慶が大のまなこに角を入
　名譽の香匠よこ手かね持
口拍子ひやうしに懸つて京の町
　或は茶賣もそよといふ文字こそ
唐土よりわたつたらくへ月に鳥
　たゞは直らぬ鼻聲の秋
合點のゆかぬ所は花すゝき
　無人島より人魂が飛
此事を三年後に物語
　石山寺は世帯の取つき
かんまいて滅さぬやうに鐘の聲
　又涌でなし夜るの腎性
昔男互に脫に成にけり
　框踏ちらす八はしのもと

香ひ油花園山に薫きて
　豆腐の殘りきゆる白雪
常齋は今朝の事也夕霞
　音に啼鳥の御作一躰
月は水膠の大事とかれたり
　其唐ころもうつた所を
曲舞の色見る山の秋なれ
　請ておるては釃す瀧浪
質の種子巖の肩か薄衣
　伯夷叔齊前世の契約
是は又衆道の外の物思ひ
　或はしのんで出端の歌也
双六は夜の伽とて后達
　伏見の院や鴨川の水
一双に殘らずけしき移されたり
　娘が事も近口になる
思ひの火二番湯懸る計也
　なほ色あけて戀の濡衣

春日野の月は消ずも丸の内
　誰多的より通る秋風
渡鳥貌を舟に顯して
　紅毛よりも紙幟賣
めりやすが脱れぬ事なら草履ぬげ
　雪のあらしに慮外千萬
薄雲の重てそれへ指ませう
　疊の閉め星の數よむ
普請奉行小六突たる竹の杖
　尺八吹もおためづく也
ひとつにはたのしみに成大茶湯
　露は時雨の亭を掃せて
竹椽を夕の月と書れたり
　波のうね〳〵髪の下ひえ
同銘は前のごとくの花が咲
　昨日はめし今朝は春
雲に入鳥も音をなく施餓鬼の穴
　鐃鉢響く金が崎より

朝戸出や獨目があく舟子共
　小便したき漣濤の末
買懸る枩はもとより否になる
　天神くらいかよい遊びもの
忍び駕籠廿五日の夜に入て
　浦の男が骨ぬすむまい
からかさに一本さして浪枕
　忽ち光る化物のまね
正眞の佛さまなら證據出せ
　石目の所見るめかく鼻
是は又御物作りの月の側
　野邊に今咲く花之助殿
思ひ草桔梗かる萱胳になり
　さて第三はそこで遊ばせ
本名所神祇續きて西の宮
　それ片側の角の枩原
葺替て少も洩らぬ花の雨
　みな惣領に渡す春中

秀衡が時も長閑に治りて
　知行高とて穗俵の山

大矢數　第十

何　一

天下に二つ也富士山は雪大句數　齋藤賀子
　枯野靡かす息の根颪　西鶴
笛上手そゝりの翅飛立て　和氣遠舟
　けふの仕懸を見する雲翠簾　西丕
寄麗なる瀧つぼ平皿引れたり　信俊
　直段のならぬこれ市の松　西子
四五二十三五の月の入方に　正利
　隅をとられて中の秋の夜　西月
新酒や香盃でこそ飲れけれ　執筆
　相手自墮落無禮講なり
戀は皆亂れ軍のはじまりに
　平家の一門異見はかの道
珠數取て二十餘年の後世願ひ
　綸旨をうけて此度の雲
夫月は御誂の鏡とぎ
　觀世が姿秋の錦木
から衣定て討死念願也
　稻葉亂れてたて臼の音
咲花の山を引事今ぞかし
　天下の廣さ末々の春
破魔弓は八千八筋と聞えたり
　月日明暮浦島が孫
添乳して寢覺の床や思ふらん
　ま一つかさぬる木曾の麻衣
胴斫や是を證據に尋ね行
　瓜を游がす浪のよせ際
供部屋に相生の松俟兼て
　夫婦一所に門番の者
戀風の敲といなや明渡る
　水鶏といふは鳥が懸つた
紋日〳〵難波入江にあらね共

　昇れば高き屋大名盡し
善六に手形計は殘けり
　或夜の夢に鬼の契約
月に露袖は泪に苦笑ひ
　かやうの思ひ憂ながら秋
扇置て帝を拜み奉らん
　あつたら事を虫明の迫門
唐琴の泊りが違ふ切手箱
　亭主さらばと浪が立行
卯の花の盛の內にま一卷
　わる口言ふて呑手鳥なく
六藏や冥途の道もきかぬ奴
　ぬいだら指せぬ山は劔の
此たくみ公儀へ知るゝ陷穽（ヲトシアナ）
　八坂の茶屋の戀は影の間
佛神祈過たる塔の際
　去夜の夢に鳩の杖つき
花衣月は和光の光あり

　酒は飲もの柳にやれさて
葛城を責て一つは夕霞
　膚の雪やきえぬ先我
御隱居のなりわたつたる風の音
　百に成ては化物やしき
目に光り抑錢に極つたり
　たつ旅衣世界の島ゝ
生海鼠あり生貝あれば榮螺あり
　けふの精進無念千萬
內方の犬に後を見する事
　盗人雨がふつたり止だり
聞た義が慥にござる一聲は
　息を引まで京の客のみ
大三柱（シン）まだ夜をこめてのほり月
　まことに野邊は赤屋根かはて
涙露つい石灰となられたり
　昆蒻玉のありか尋ぬる
蜷川も是はおどろく狸汁

歌の力は爰へ出あはぬ
補陀樂や南の片屋續け勝
白波たゝんで恐れながら
何ぞ是に面白き繪を書給へ
王昭君が瓢箪の駒
戀の種子蒔たら軈て萠うまで
女夫のうづら黍の苅しを
空は月所帶分りて鳥籠の山
膳棚ならべて長はしの露
花は雨虹の引事いづく迄
世上に不思議蛇の息の春
土塔會やかすむ夕の物語
そも此里は千石千貫
蓬生の隣屋敷を買添て
白い狐が通ふ取沙汰
其やうに唯早口が謂れうか
お慈悲下され小米の生かみ
佛法のいまだ晝にはならね共
夏書は大事手習の時
分かないか歌か現か幻か
生れぬ先は鈍な物ぞよ
やれきはれ未お泥器も定まらず
ふしに譬て鯨の百尋
手柄には山をつきぬき浪の月
人の念力末の秋かぜ
泣涙隙を出さぬか轡むし
問ぬもつらし不破の關分
おじやつたか寢覺の里に何もなし
大節季までいゝ延て松
やうすきけ花は都の相場物
ぬるむ水行高瀨の便り
かすみの衣出家の事にて候へば
窄人の儀は請取て春

（巻之二）

大矢數　第十一

何事

第二の射初大鵬羽うつて金の範　西波
のぞみは四千里舞鶴の春　西鶴
口からかさ開けば花の山越て　西吟
仕たてうぶ着の紫の藤　西悦
三尺さし鯨の時は波にすむ　西親
油問屋の光りある月　西印
一客にはや椀ならすけさの露　西仍
平皿つたふ蔦の葉かづら　西琢
細道を唯今こなたへ玉二つ　執筆
すこしも弛(ヘツ)さず引かねの音
極印のあたる所を幸に
茶舟中間の浪の行末
礒馴松しなだれ懸つて伽やらう
腹には戀の産時をまつ
灸すゑて亀割坂はぬくもりて
養生の部にそなた萬年
もと土が凝かたまつて瓦葺
寶の島や淡島の景
よせて今金の升で浪はかる
結構過た水のあやつり
本膳に月があまつて洗鯉
千秋樂や太夫殿分
色替てせいが延たる禿松
清盛一度戀のわづらひ
腎情をかすつてしまふ水薬師
かきくどかるゝ京童部に
すてられて後の髪を撫上て
樋口の次郎か見知つたかそれ
長持に入亂れたる能衣裳
奈良坂越に宿替の暮

德利に時雨ふり行酒を出せ
　親方懸りは神の留守の間
性がわるい雲となりては風となり
　まづ四五貼はもつても見ようか
月は空影はさながら二つもの
　中入綿は知れぬ蘆の穗
一子寒し憂秋ながら分別者
　水鼻垂れても談合の時
小椙原かさねてなんでもいふてこい
　勤の身にて萬事は哀れ
塞翁が馬をつないで大臣さま
　年貢納むるもろこしの里
或はかね初瀨の寺に聞ゆなる
　酒の家符買杉の下陰
彼鳥が欲のひつはる獨り口
　何ぞといへば人より一番
やれさせよ釘貫松かは大喧嘩
　足弱衆は座敷の下へ

月も花も替つた貌を見に行かん
　永代あづかる町の藤がえ
薄霞蒙古國裏か起請の文
　契のかため雜魚寢なるらん
皐月女つい大はらと成にけり
　朧の清水すいものゝ後
今朝からの長口上に草臥て
　看板を引山は口の影
宵闇や生所も知れぬ鼻の先
　忍び男が末つむの許
腐に垢心中の外哀也
　根太が出來る欲のいたゞき
墨衣日蓮是を悲しまれ
　錦の袋中にとまつて
文月の影も貌も片便宜
　此事明暮なげく雁首
霧烟すきが呑ずに居られうか
　籠の番とて風は淋しき

かんこ鳥諸鳥の音まで知れたり
七明年は山中の花
無慚やなそこへ常盤を横霞
彼入道がいたづらの春
樂書や又へマムシとしるされたり
訓蒙圖彙は水戸の住人
普請ずき吾妻の果迄違棚
老母のいたはり孝行の道
煎じ茶を金の釜で沸されて
まことに汲す功德池の水
人の智惠是は名譽の心の月
七歩の間に豆の白露
鳩吹や慰ながら病あがり
命ひらうて遠山を見る
水主の者肩越すべきと思ひきや
夜の間の浪は兵庫に築しま
壁土にすさの入江は高みとなり
かねか五月雨ふつてわき物

爰に又嫁誘田を植初て
相あひ牛の時参りする
思ひの火燃て見せうか宮所
あら寂しやな塵も埃も
算用詰十露盤枕ねる計
雨にあらしに舟間也けり
今日の月十七文字をおもひよる
名乘かへして一代の秋
風通ふ荻野朔菴ひかへたり
暮に及ばゝ羽織もてこい
夜まはりの時しも御代は治れど
取て賣ふか麒麟鳳凰
貧乏神社壇次第にさびにけり
瘦子八人五人はをとこ
花の波例に任せて渡り初
櫻は鯛に樽は二十荷

大矢數　第十二

虵何

柳は綠範は紅や二千句目　西毛
　のぞみ半分咲きそむる花　西鶴
汲む霞何はともあれけふ殊に　西虫
　水は巴の字をきつぱりと　吟行
月の色なほ染出してちらし文　西習
　世上の噂旗本の霧　一寸
改る御殿の露か頭より　利元
　秋の替りを餘所は仕與ぞ　執筆
それか山ぬけ隴(ガン)となる梢の蟬
　附合きこゆるすみよしの浪
延さぬぞ殊に三月三日切
　大振舞の盃ながし
櫻咲時に遠客とゞめたり
　あんな日和は空にしられぬ
あさつてといふかと思へば染物屋
　ぶんまはしより形たちまち
吹風のあふぎたる木を割付て
　螢の光金堂の舍利
韋駄天も雲の上まで行べくば
　早い仕懸の中(チウ)事の雨
宵の口月のない夜は二つなし
　影を忘れぬ挑灯の秋
強盜(ガンドウ)中間智惠より起る下梔
　山はあらちの殺してもとれ
舁で行身に懸らねどこしの岑
　雪ばしらはり太政大臣
松の風靡かぬ草木なかりけり
　忽白象よここに出るから
不詳には普賢も浮世に住給ふ
　地獄耳とてそんな事きく
火付めが硫黄が島に取籠
　叩番行八重のしほ風
夕煙今夜はぬるうていられぬか
　どうやらはしかい身もこがれつゝ

茅莚敷寝の契枕の月
　むかし小判を露に打行
おこし米秋を重て飢饉年
　あはれや爰に捨子泣止む
元興寺をそれさへ夢か幻か
　すこしの契化に鳴川
我と我水をさしたらさそうまで
　料理鍋には相口の友
晝過てまつ夕食をとくせなん
　あらし待得て乗急也
二十五の菩薩も爰に御手を引
　是ぞ涅槃にいろはにほへと
荷印や何國をさして春の駒
　花をすいては相坂の坂
月は又いつも在所で見馴たり
　どこぞ替つた振袖の露
大躍だいたかしめたか話ひて見よ
　赤い物なら脚布が引づる

庭の釜忽聲をやめられたり
　法の奇特は性突上人
引風に或時紙子綴(ツヅク)りて
　肌のあれたる安部の川づら
雷丸の油流るゝ富士の雪
　腰より下は白き徳利
懼ぬれば懸た抄子も動出
　鹿の住所は遊行の寺也
御朱印の聲きく時ぞ月の舟
　秋ふく風の袋を二つ
あら鷹を末野の原や分ぬらん
　うけたまはつて間宮藤太郎
育ては五人の中の惣領也
　似合ふた事があらば裸で
手傳の娶春歌も面白や
　岩戸の前にて神の折敷を
請はらひ大形しまふ松の陰
　馬さへ來たら時雨降行

僞のある世也けり御政敗
　貞永元年八月の夜に
物覺越後の鈍主坐露の玉
　秋の錦や首たてごろも
終に其虫がつのつて野に送る
　なげく片手に太鼓の拍子
花の波此里きれて行末は
　又上様のきしの山吹
呉服所に色なる水のぬるみきて
　波の數よむ文の字の錢
穫(カキ)居(スヱ)の末はあらしの山遠み
　野等があつまる野の宮の内
口影者かげ淋しくも今ははや
　龍の都へ潜る四つ足
綿繰をたはら藤太が取て歸る
　よせ手の勢をのびあがり見る
饂飩桶熱鐵わかして懸たりけり
　すは〳〵動は若い者ども

新枕二つならべて夜着の下
　伏見の夕はまれ泥町
まだ月は沙汰が御ざらぬ藤の森
　そちがきかずばすゞ虫の聲
秋の風あらくな吹そ噯に
　高津の宮は土取場也
御進退夢に目見えて鬼瓦
　大工の棟梁こゝろやはらぐ
鑓鉄鉋劍の山を見るからに
　此世は纔の二尺六寸
夢じや物まくら屏風に花咲て
　飛で胡蝶の曲乘かる業

大矢數　第十三

何使

通樽や居ながらしるゝ花盛　利貞
　春宵一刻五分の算用　西鶴
泊り宿歸雁の口につぶやきて　豐流

厄介懸るあし弱の雲　豊秋
古折敷漆の山の夕けしき　定時
破れ紙帳を秋の月もる　清客
きりもくさ包むとすれど霧烟　政武
見つけられたる枕の露ちる　松聲
夕暮は酢を懸て出す色の草　執筆
是非といやらば爪をはなさう
此うらみ籬に寄ていつまでも
かねは忽二日はらひに
出替りの男もすなり女の躰
造り聲など様子の鶯
いつの春またるゝ物ぞ戻せ銀
親仁の跡なる花やちるらん
山寺の夕暮なげく入佛事
豆腐蒟蒻雪のしら和(アエ)
はら心下り行なり雲の浪
彼海底に夜の内に五度
月枕油斷のならぬ寝ずの番
御次のから紙菊の花さく
鴈鳴て住吉の浦藤に見る
名譽な物は夢の通路
娑婆はなれ四十九日と中には
大形きなるかねの草鞋
伊奘諾は日本の山踏分て
あゆの魚さへ今は動かぬ
繪草紙も下(サガ)りを請て送狀
心中の末は年寄女房
水性の性のおもはく波の皺
龍燈あがつて疊挑灯
此細工久しう懸つて見せまする
芝居は果てあとの松風
月は空是からすぐにもいなれまい
團(カコヒ)くらゐにかくるしら露
御茶もよし花紫の物思ひ
疊なをして武藏野の隅
傘やいかなる風の雨となり

　舞臺から飛山ほとゝぎす
同じ役者誘ひ顔なる氣色也
　智恩院には松の下萩
車宿り悟りは心の馬とゞめ
　米屋の門の壁に向ひて
らく書は夜更て通る筐ゝ
　お肌に添しあはれ摩胡の手
三つ藏の內氣ものさへ聲を上
　腹の立つ時さる澤の波
月も花も寢くたれ髮も逆に
　とゝより先に戀死の春
世界みな一度は消ゆる雪佛
　有にもないにも風の行末
出次第の　に任せて白うるり
　寢られぬ時の伽の村雨
腰もと衆奥より召され侍ふぞ
　徒ら目つき玉のきざはし
引琴の心も共に引て見る
　國は亂れて臣下の歎き
殘りもの工て舟の算用に
　白樂天か天作の五は
靑苔は衣に似たる符帳付
　二端續きの絹笠の山
月は都驕きはめて御遊山也
　野に成色や珊瑚珠の杖
此度は唐土人のわたり鳥
　隱元木萩雲なり風也
大筆に染させらるゝ西の海
　顯し出し灯籠の影
贓物神は證據に立給はず
　手のはいるほど戸がくしの山
鳥籠の奥は場廣き木會路にて
　摺餌やはらぐ滴りの音
人間のはじめは婆もなかりけり
　三途川にて魂まつるわざ
恩賞のためを思へば心の月

急度討死衣片しき
花の風わたる所が今一目
下駄の鼻緒や春雨の空
大女房一丈二尺立つ霞
浮世のうらみ小人島あり
耳搔に筐の抄子取遣へ
都へしまふこま物の店
時は今六條參りもなかりけり
茶呑て暮す鹽竈の浦
人誘る共尾に付て浪の聲
蚤の子なれば賤しい筈じやに
買喰のけに夫よりも十三文
閨は神の夜のともし火
頭は猿與力同心召連て
此穿鑿に腸をたつ
彼文を置所なき暮の月
甘泉殿やひとり身の露
作り庭かゝる島とて霧が立
秋のあはれやあばら三枚
夕暮は風のあてたる竹の内
空定なき大和路の旅
水もがな喉の燥は六度まで
又醫者替て雲の行末
ずいは雨とは思へ共笑に花
聞ずはいなぬ春ほとゝぎす

大矢數 第十四

御何

紅の幕を通すや時鳥　元春
此度天下一段の夏　西鶴
かるたはあだ打出す風涼しくて　不琢
夜半の鐘聲更て行雲　笑爲
月は峯きんかの山や光るらん　源八
十筋右衛門が瀧の糸露　正俊
ちり初る御の枝に鹿の丸　誓舟
用心羽織しきゝ盤の紋　無眞

古風盃唯ふく事を想像(オモヒヤル)　執筆
　潯陽の江は水の雜水
夫杓子金(カネ)徑(キン)山(ザン)の麓より
　始末者めが燒殘す松
行先を六町一里に極めたり
　馬士に諷はす樣ゝの歌
女郎柄(ガラ)晝は人目の關越て
　自然心中の刀あづかる
あらがねの槌の音より物がたう
　懸屋のせんさく一トの露
我物か迚も天下の月の影
　阿武丸には初あらしふく
臣は水鳴をしづめて花の浪
　この事をきけ蛙なく也
口よせて目からふらする春の雨
　夕寂しき天王寺山
鳥井越す扇の便なかりけり
　神も佛も御ざらぬか君
爾宜にあらず出家に非ず理屈げな
　まつた錦の直垂をかる
雇れて五日一歩とうたふたり
　屋根屋が時行る取葺の軒
いかなれば天狗礫(ツブテ)を積かさね
　七つの時より父母こいし
持遊びなかぬ鳥の聲を聞け
　祇園林や夢に究る
火ともしの月人男五十年
　刎字いふてはまはす秋風
第三に心あるべき露時雨
　足立ずして御用捨の神
吉田まで例の番所を勤かね
　御油赤坂は馬がすくない
追剝の夕に出て野とあれて
　むかしは人の巾着もさぞ
お相伴お傍はなれず有けるが
　月更てゆく西の門跡

髪(カウ)剃(ソリ)を戴く度に秋の霜
自害にきはめて袖の夕露
忘れなよ汝一所に死出の山
喰次に成とも裸で成とも
木乃伊をば取は大事の花車
春の野に出つき付人參
また息が霞に通ふ君がため
是から化名は立風呂の山
よい手懸かゝりはないか卅日
浮世少路を唯はとをさぬ
五月雨に大溝筋の芥川
爰によせくる地奉行の波
植初てなほ千年の松一木
式三番や幕上て出る
茶辨當朝日待得て汲ふやう
志して加茂の山寺
石川が爰に住なす峯の月
仕置の大釜下紅葉たく

秋は酒たくみて作り初しより
末は富貴を松の尾の宮
衆道歌道佛法僧の音に鳴て
戀みな覺て捨たらば闇
哀しる卷ゝを見る火が消た
中にも夕顏ならぬ進退
夏瘦は作り病と思はれて
屋形廣いに片腸の山
水葉のおかた狂ひは通塞と
霜のふり薬や白齒も見せうか
張弓を引て懸れば男だて
月に光の鎭西八さま
秋の風源氏の筋や吹ぬらん
關より東白川の露
釣替に守隨もならぬ花盛
わか紫は三千兩まで
用心や春の光の數具足
操取たて鎖木のかね

津の國のたゞしき山に懸つたか
　田地財寳武庫の浦風
いつ夜ぬけ片帆にかけて何國へか
　江天の暮雪みなになしける
二幅對是に詠て書しまふ
　男有けり女ありけり
やりやつても勝手つく也新枕
　節供の祝義魚と水とや
書狀もつて硯をとらす土佐の海
　同じ所に明る日も宿
月の駒中間二人と申ける
　蟋蟀まで作り髭也
露霜を汲分てより旅のかた
　無常の嵐かし色もあり
一日の極樂の沙汰も錢じやまで
　天鵝絨の蒲團に寢た事は今
乘物昇申傘てはいへども
　もはや最後が近付た濱
石龜に夫花の火が燃あがり
　小の虫より大分の春

大矢數　第十五

何卯

日は遲し三千世界四五千句　矩貞
　硯に霞乾坤の箱　西鶴
花は雲時代蒔繪の山見えて　悅重
　どこへ當ても春風の音　一飛
諸息に今は殘らぬ雪の水　清久
　青膏藥の苔の下道　貞利
月の影峯踏はづし落にけり　一秋
　あぶない所及渡る鳥の目　一笑
吹弛す殘多さは秋の風　執筆
　障子の皺の芭蕉はやぶれて
瓦落ゝゝと脆も落る神鳴か
　茶碗摺鉢しがらきの山
夕詠愛宕抄子も懸並べ

命の長い客やまつらん
或道は五百八十七まがり
心の水に公事工みする
鈴鹿川深い所かどうよくな
夜前の様子か鬼の切底
側ては葎の宿の烏賊の甲
鷺など一羽轉合のかは
尾行〳〵と貧乏ゆるぎ森の月
吹につれて霧のたつ山
秋の霜殊に白きは目の毒じや
御肌着までさはるに煩惱
四五日は誓文立てゐたれ共
上に梵天下懸りには
石田流共聲雲に響して
三番目には葛城の山
曳出しの貝を詠むる豐等寺
軒の瓦に鳥の古綿
よこ笛をふくも上手な大上戸

二十五人は寢たり起たり
借きりて淡路はるかに今井船
鵜殿も聲も名所舊跡
笙の舌月に管絃の有し時
此宮徒し初鮭神躰
たち魚を錦の袋に入られたり
龍王世界に通ふ本阿彌
藻塩草筆の一流書覺
北濱望ふて十まいの山
配り札朝の雲や替るらん
いもゝはしかも時雨晴行
酒ませて湯尾峠も愛なれや
臨僻こなす谷の擂鉢
岩が根の床端側て物數寄に
松の茶筅は亭主の手前
初雪のふつた所が面白い
角のはえたる駒に鞍置
出る月も御寶物の内なれや

　第一若ふ千代の秋風
拍子とり躍布袋も動き初
　是は扇の要石なり
埋木も今は棊盤に替り行
　伊豆殿の智恵名取川とは
御仕置浪も靜な時津風
　枝を鳴らさぬ道中の空
遠寺の鐘いつ夜が明た知らぬまで
　唯一すぢに念佛講の衆
大悲の弓次第にあなたへ引力
　雨や雹と啼ふならいま
小笠原是としつたら磨まい
　本妻のある戀の山也
心の月ようは隱した袖の浦
　敵の行衛しら波の露
憂秋や誓進退捨小舟
　一せきからけて約束の繩
沐浴のあとは泪と成にけり

　光明遍照十方を鑽す
夫佛山より出る蜂の聲
　頼光夢に思ふは霞
身嗜み源氏の流ぬるみきて
　春の初買浮舟の卷
先花は掴み捜してやつてのけ
　提重われて雲雀囀る
むかし見し又公事宿は替ゆく
　飛鳥の里に五人三人
奥座敷のそこは灯空は月
　小刀鋏糸薄など
よい細工きいた所が虫の聲
　此廣い野に拙者一人
ようゐると思召さるか後世の道
　蹙（シワリ）がきれてあし引の御影
長唄し唯山姥がくどい事
　それは何れもしつた能也
引こむは敗毒散でなをる物

されども入な水風呂の瀧
こむさいは七日のほりし泊り客
蚊屋釣傘てかし夜着もなし
唱者とちぎる所か大笑ひ
其睦言は百目より內
鐵砲の玉のありかは月の暮
たねが島からたつて八重霧
俳諧の名所ばなれに鹿の聲
さし詰になる秋ぞ悲しき
妥を一つ金か銀かゞ有ならば
後は繁昌買て置もの
長町の東輪より花の山
雪のむら消源聖寺坂
經をよむ鳥も朝は飛連て
淨土の春は何をきかうと

大矢數　第十六

何聲

吟聲や梁をはふ花の塵　延良
鶯の琴引言の山　西鶴
御尤異見かさなる霞晴て　西流
遠いへ出ぬ春の夜の月　素扇
四五日の留守を預る蝶築星　有雪
風が氣遣一群の雲　西茂
からかさは先いらぬ共持てこい　西二
自然の時に飛事も有　淨久
鎌倉にもし足革と云ならば　執筆
寒の入より雪の下道
聲つかふ梢に響く松の風
引たり三味線夕暮の雲
手繰綛蜺たつ島と成にけり
人間はじめて姑懸り
其時は戀に所悪も定まらず
唯空虚と寢たり抱たり

供部屋に一日暮しの風の音
　急がぬ舟の波の行末
遣錢何國をさして百ぬらり
　今朝の天氣は雨の宮たち
まだ見えぬ月の光の間の山
　菊のかほりや鈍子の替りめ
雁鳴て吸物椀や響らん
　應答（アンライ）續く浪の夜ル晝
また是に付て見給へ蜑小舟
　さては奈良茶を燒さしのかけ
急用に忽雲がたつて行
　雨は頻に子かへりがした
味噌汁や萬民是を賞翫す
　どうやらしまふて明ほのゝ春
御作意のまづ初鳥が聞たいの
　是かいしきの獻立の花
東風かぜの福原の家は格別じや
　給分やすくと半季ゐて見よ

召替せ自然一つも袖の月
　預り物の柳ちる舟
霧の海波靜なる四貫島
　夫天台の流れ題目
情強（ジヤウゴハ）にいひ懸つてはおはまりじや
　勘の外のかね捨うなら
我胸にのほり詰ては阿麗居士
　長き鼻毛をぬけば泪に
出來坊さいの川原にすたりたり
　さあ〳〵覗く箱根路の末
岩がねのつきかわるくと取てやれ
　そこが緣づく袖の夕露
月も又いつまで獨ゐられうぞ
　鬼界が島も新酒を友
通ひありとそこへは告よ寄浪に
　身は養生の日風呂する也
欲も垢も腰ぬけわざにてかなふまじ
　今度の軍耳の穴ほる

人質にまづ唐人を捕ておさえ
　横物書す黄檗の寺
山水を汲上らるゝ閼伽の桶
　いつも來れる下女の姿か
念を入てそなたへ渡る戀衣
　重きが上の長持ごしらへ
宮城野を都へ取て歸らるゝ
　公家の知行はいにしへの事
八重櫻たとへ折ふと曲ふと
　守かつかずに生年の春
ぬらしては敷物もなし朧月
　傍から見ては荒波の舟
志賀の浦それ人買よ〱
　麓に山王猿轡あり
古かねの市は果てたる松の蔭
　源左が手前明ほのゝ雪
庭訓の口より續く十二月
　七尺さつて師匠に合力

難行の釋迦の便は棒にあり
　饂飩蕎きり空ゝ寂ゝ
集錢出しいかなる雲のかさなりて
　われ神鳴の太鼓分なり
是流れながれさまより芥川
　浪たとふては袖の下ふみ
月に花ちらする銀を當座借
　大木の陰の青柳の色
烏賊幟いとはかなくも散て行
　島原陣の四郎や五郎八
まゝ喰とよべと叫ど兵粮詰
　定に入ては無分別今
目黑の原あはう拂に成にけり
　茶屋が耆て風の行末
なりふりのあの御所染はいらぬもの
　髮をきつてもどこやらはまだ
厄病の業は殘らせ給ひけり
　賴すくなき四十二の年

食がいかぬ箱に目鼻の風情にて
　大きな願ひ淡島の山
同じくは金の逆鉾波の月
　ふたつどりなら內藏の露
姉よりもなほ色まさる女郎花
　うす約束を人にかたるな
豚魚汁に自然の事か無調法
　最又起をれ小田原の宿
二番立三番だちが通る也
　行司が貰ふて枯木の力
賴朝の浮雲き所に花が咲
　あしを汚すなゑのしまの春

大矢數　第十七

何詞

句錄の花誰か讃ざらん天下藝　身次
　鳥も誹(ソソリ)もかへり見ぬ山　西鶴
くつさめの岩のはなから雪消て　一幸
　かしら煎じに風の行末　西幸
二重染落葉小紋と成にけり　西梁
　木陰の塵をはき懸の帶　西益
湯上りの夕涼しき空の月　西朴
　まことに都は水の天目　西滴
立物と人はいふ也舞臺先　執筆
　最屓があつてあんな男を
緣組も銀が敵のうき世也
　抑へて首をしめて口すう
手打(テウチ)〳〵しほの日の時今なれや
　迯もの馳走に細工の樣子を
上塗は三日が內に出かしたり
　長者の許にて田樂の味噌
千石の其芥子種も芳(カウバ)しく
　小刀こまかに塔を建けり
補陀落の岸に響かす槌の音
　大黒殿や波の大聲
一に俵二には喰物三に酒

遠路の所御見舞の雁
私の風昨日よりも覺ました
此躰ならば追付て露
隱事何ぞと人の問ひし時
煙の山や塵は日暮て
是は又篚となれる莨菪盆
あとより戀が責てかすはい
積の虫のほれ〳〵と申けり
青筋がたつ瀧津瀬の末
細作り鯉の鱗をならべつゝ
今日の儀は波次弟なり
宿老殿額をすこし傾けて
目安と申す前句むづかし
塵劫記もとは一つの月の影
秋の色とて表紙が懸る
露むすぶ中の新發意玉襷
是から木遣りで和田の笠松
まき轆轤同じ廻りの車舟
油のおりは底にしづんで
佐藤太取て歸りし鐘を撞
三上山よりこれしこみ杖
雲の袖もつてひらいて心得て
風の懸たる反橋の躰
神輿舁流れもあへぬ水を出せ
金物みがく五月雨の空
夏の月九寸五分は鼻の先
凉しき夕盆山の色
花の雪四季諸共に詠物
盧齊が夢の蝶はおりすえ
さほ姫や山くれ野くれ里歸り
伊達な姿の池へはまるな
結び目の帶想像かもめ尻
互に起て雪の明ほの
あと付る足許を見て駕籠の賃
餌飼をしてはなく聲計
符替りの鶍といふ物咄しの種

一文惜しまぬ淀川の末
神前や幾人にても水車
燈明の油綿實の音
好ぬ事と思ふべきかは誰もみな
包て針が忽いたむ
嫂のすむともしらず夜の月
秋の夢路や常盤の國許
身をかくす源氏の末は露泪
紫式部を寺で取をく
戀の別れなほ又別鐘の聲
命の內にならふ事なら
其榮花伽羅の足駄をはいて見よ
茶は金の魚の店すぢ
西は海東に高き山を築
准は是より放す石火矢
弱みそが一門の肝を潰しけり
ものゝはしより落月の影
心懸薄霧かゝる精進日
けさ起ざまに露が亂るゝ
花は波ほどなく御舟が着候
柳の陰の幽靈の親
春の雨玉にもぬける心玉
雲の袖よりあちらへこちらへ
天乙女ことに勝れて樣子者
通ひ男め布引の瀧
生田川付さし付る時分也
遊山長じて水のしら露
申さぬか責て問ふべき夜の月
わつぱが行衛萩柴の陰
霜覆時節とかれる菊の庭
荒きなき風吹上の濱
和歌の浦鹽のあがりに薪まで
まづ四五日は松原の末
闕落今とは思へども神參
から尻馬も同じ首づな
立養ひわが一連(ツレ)樣々に

慈悲の眼や逗留の内
景清も觀音同座で咄さうか
甲の山はをと羽なりけり
節供には又檀川を出されたり
浪のよるべの腹に一ぱい
咲花の陰に驚き子持鮒
さつとおろした春の山風

大矢數　第十八

何佛

有漏地の歌一休に恨あり女夫星　貞林
けふ汲かえる堀ぬき井の水　西鶴
山雀の馴ては籠に飛ぬけて　西與
梢のくるみ遠近の風　西言
牆棚に雲かさなりて夕の月　西屯
空の光や野等が日の玉　西尋
晝寢して人〻替り草の原　西品
諸事はかね也樂は今更　西樹
仕合は蔓についたる茂りの蔦　執筆
宇津の山越す馬の腹當
都への傳手を尋ぬる片便宜
彥作が母死だか生たか
夢の世の狂言綺語を振捨て
唯一筋に俳諧繁昌
或時は闇がりよりも鑓を出す
浪人しても夢の枕に
驚ぬ後栖には富士の山
有馬の不思議涌て出るかね
河野屋のみつが情を問寄りて
袖行水は太殿だけか
花をふんで鯗と云物になしにけり
無菜の御齋春の夜の月
大分のあとを彼岸に取當り
二河白道は表うら門
夢となり咸陽宮の末間て
三千人の内に似たもの

牧狩や鷹をすゑては鳴鳥
　けふの氣懸り雪の夕暮
大船に忽嵐通ふらし
　其時義經帽子と鉢卷
痛みぬる向ふ齒反て猿眼
　待依の詠歌嶺の松風
近道に戀の仕樣が有物を
　島原よりも堤(ドテ)町の暮
筒井筒るづゝによりて久しいの
　互に影を見なんだは月
かい揚る霧立籠る風呂の内
　太夫着して伊勢の濱荻
寢道具や錦の浦の夕間暮
　王の位もかうした事か
洗いぬる金銀耳に逆ふなり
　縫箔すてゝむかし帷子
世俗にいふほどなく嫁が姑に
　そさまの心替る行末

影つらき月日またせてうか〱と
　此盆前もなせと八百
すこし又商賣かへて鹿の聲
　夢野の末はよい頼み候
花若がもしも十五に成時は
　脇ふさがせて袖の梅が香
兄分も霞がくれの暗部山
　今は雲にも耻ている風
御尤爪を加へて昇り龍
　夫大唐の琴の引こと
身自慢のそなたは瘦て馬の上
　死に懸つたる光明遍照
いまは早左の御手に土砂を持
　寄特顯す七日の說法
少しのかね身のしろ衣哀也
　局住居も情は同前
夜見世通ひ晝をば何とうば玉の
　二つならべて枕詞じや

山の端の夕月是からやるぞゑい
　礫はのびて秋の風の手
翠殿は一字備る花薄
　筐の扇置て下され
其方の影は忘れそいつ迄も
　病の根ぬけこれからの風
蓬萊の島へ渡つて來たりやこそ
　ふんどしかいた鬼を見ました
寄物とあたる物をば十二番
　御家中廣き書院の夜詰
飛螢殊に大事は火用心
　愛宕の札の玉と見る露
月の影長床坊に暮初て
　女のするわざ衣うつ音
花は根に賢い者を腰本に
　柳見通す三寸まな板
手細工に一束五帖帳祝ひ
　人の不足の閻魔大王

鉦たいこ千本通り尋行
　紙屋川より塘きらすな
夜前の酒度かさなりて波がうつ
　亭主が立て引網の魚
一本の竿をさしては働いたり
　重の仕懸分別の外
はれていく星の光も面白い
　小玉町より西を照る月
秋の風團扇の紋を付られたり
　六尺中間勝れたる露
藥筐者婆があとをぞ取れける
　一度は名譽を見する浮雲
手づま事かくす所が祕密にて
　或は地より天台の山
乾坤の箱の中にも疊こみ
　雲は着替の裙數が有
仲人口雨の降るほどいふて來る
　また思案する戀草の宿

一裁許二裁許まで待が花
　惣年寄の懸る松藤

大矢數　第十九

何景濟

三尾の谷が譽て通すや雪の傘　寸松
　適大しやう馬下駄の霜　西鶴
見あぐる山二段目つかふ雲消て　未清
　歌口しめしなる瀧の水　西清
草かりを絶ず問ふたり絶ずとふ　誰與
　きのふも飛脚拐か下作　是久
いはぬ事袋に入し村の月　西逆
　化はせまいぞ秋の野ら猫　瓦石
棚のあたり眞葛亂て何と哉　執筆
　責て見立の思ひよる露
此所新地ながらもはしら組
　なほ行末の若宮八幡
忌明にさゝす日笠の鶴が岡
　雲は廣袖二色の帶
聞たかといゝ出るより大笑ひ
　生板に釘山ほとゝぎす
村雨や大根おろしにふり雜り
　旅行の秋はなふ〳〵俄に
取梶よ風が替つて月の舟
　瀨を忘れたか霧の海づら
夫針の北に當つて花の山
　疊仕立る靑柳の糸
御巾の朝の春も近づきて
　初音の鳥やこがねつり替
請出して雪は則ながれの身
　山の姿や宇治の橋姫
化粧部屋金輪の足に火をともし
　忽替るばけ物の沙汰
咄しの本末の松風音づれて
　足ほどあらふか山のかたまり
旣女神波さはぎぬる腹心

綾の卷物太皷かくぜつ
返せ〱是非〱返せ起請文
惡人きらふ法然上人
心の月雲晴ね共西へ行
酒におぼれて秋の朝露
尾花波大蛇と云もの動き出
勸請の宮武藏野の隅
淨瑠璃やいかなる風の末の段
念願六字南無右衛門とて
入黑子若い時には我も又
弟分など有こし物を
大きなるあとを龜井に下されて
酒造りこむ名水の末
たのしみもかくやと舟をたゝえつゝ
今日の前に極樂の月
精進の內ならばこそ鯖くふな
茶碗は冷て水の呑置
花の山四里が間に里もなし

暮ぬ筈じやが藤の黃昏
行春の名殘に今は高足を
長崎下り住吉の濱
メリヤスをはいて蛤蜊踏れたり
吸物またいで利屈な容ぶり
何が腹がたちまち座敷立破り
此暖はのけて置しやれ
重湯(ヲモユ)さへめしを喰してたまらうか
呑の袖乞あはれ世の中
儲にくひ月に村雲花にかね
老の鶯足手かやさま
春の風今度輕わざ渡たか
燈心つんでおも梶の音
嫁突や一二三四波の玉
姿は臼の米は白みて
願くば因幡藥師をいのらるゝ
妾へかたぶく祇園會の山
小牛の酒を出すば水を出せ

しはひが劫じて波の夜畫
此堤一度にきるゝ樋ノ口屋
外科も懸つて堺寂しき
牡丹花のあとは次第に廣がつた
唐網うてば漣濤の歌
あはれ喰志賀の都は荒にけり
むかしながらの近付の月
扇屋でぬれて置たる袖の露
よつほどきらす柳ちる陰
際目論そこがつかえた葛城山
溝板ふるき久米の岩橋
額は二字筆取あへずさら〳〵に
時雨の亭に折釘の音
こけら葺軒のしのぶも物さびて
昔はむかし喰ず貧らく
寢て起てさて共後は日を塞ぐ
大事の事は思ひ出されぬ
千貫目手形まぎれて箱傳受

猛き武士家老がわるい
一筋を諫め過して二筋に
三がきれては引にひかれぬ
追懸の客かさなりて峯の雲
爰にはり出し岩がねの床
萬日も願ひの月のめぐりきて
諸國の袋稲葉亂るゝ
加減して一貼のます秋の風
溜る筈じやぞ白川の關
寢所も今は揚たる歌枕
左座右座いづれもはらり
盛の花聞と火ともす草履取
霞も共に時宜は日の暮
春の風芋吹にしてあたらうぞ
山ゝの雪殘らぬ〳〵

大矢數　第二十

戀何

年の矢や有無を離て行やすし　一水
煤はき懸乞修羅の戰ひ　西鶴
三熱の鍋をぬくべき習ひ也　三千風
啜れば水に紅のした　西風
學文の窓は洞にぞ成にける　吉重
一重羽織でせつひ町醫者　西重
供二人挾箱には朝の月　西交
柳は散りて舟賃をとる　西久
秋の霜今白突の餅となり　執筆
やれ生れたと女鹿呼也
高師山腰を後に抱しめて
手懸は波の月かはりとは
さらぬ恨計へて見たる星の數
執心つよく通り矢の先
しめ出しと是も思へば油屋に
山崎千軒すかぬ奴共
身につかぬ所をのぞむ寶寺
かり衣裳をば打出の小槌
あんな月が鬼の島にも有やらん
千句ひやうしの秋風の口
また爰に花も悋もなかりけり
けさすき腹で志賀の山越
よう持た麓に四貫の錢袋
勝を見せたる宿の燈
つれ〴〵の心付には長點か
下戸ならぬこそ明日の朝
御霜月難波の御堂執行あり
田蓑の島や置綿の色
五月雨に傘を借る宿もなし
あはれな所かたる行末
父も母も子といふ字迄絕はてゝ
愛宕の山やかやうの境界
劍舍利は唯用心の爲ぞかし
彼海底に飛こんで疵

月は玉ろくな緒じめにならふかの
　白雲帶は秋の山陰
樂天も聲帆に上て雁渡る
　韵字をふんで菊の花咲く
線香の薫の末に山一つ
　拜み付たる正眞の彌陀
元狸是も菩薩の腹鼓
　化もの屋敷替り狂言
吉日や水盛て見る飛鳥川
　かるい疱瘡天の香久山
春過て夏の始は懸あるく
　短夜の月くらがりの牛
萍の菱を取ては作り物
　花はやきばの小刀の先
腕香の烟の末は八重霞
　鳥の地獄へ落たらば春
有馬山湯でも水でも今のませ
　ひら謳ィにする笹原の末

へつたりとそこへこけたるしなが鳥
　ねらいすまして二つ玉露
石などの數さへ見ゆる袂の月
　娘友達稻妻の影
樣付て舌がまはつた風の音
　玄關によりて袖すりの松
臺に二羽生てはたらく初時雨
　僞のなき見世物是じや
こちの事仲人口鼻に及ばぬぞ
　燃る火性と水性の外
道はしの三條小鍛冶が打にけり
　奈良の都は博奕宿とや
百貫に是でもやらぬ三笠山
　明日公儀へ出し人かも
擢（オチ）ゝも姉上臈が引てゆく
　一つはなさけかけこ也けり
此口舌よく〳〵案じて見給へと
　四日と五日と番付の文

人の心夜の間に替る相場也
　何國の浦へかぬけ舟つかい
つる根太押付られてうみ少し
　須磨のうしろの腰中の月
替り染波爰許に露の玉
　躍を懸て浮世のなぐさみ
花盛溫飩の分では聞まいぞ
　さしみの外小鳥の囀り
ようこそは春は御ざれの伊勢參
　五文十文まき錢の山
是中ちいさい時は守がつく
　戀の苔や三津寺あたり
干瓢もひら醫に譬たり
　そら手が起つて雲かとぞのみ
郭公聞たかきかぬか按摩執
　笹風呂さしてさそひ顔也
見るに欲凝るに煩惱よいの口
　修羅の太鼓やつらき新町

餓鬼の目に此食椀が見えぬげな
　一引ひけば御長者といふ
はした銀月とも露共思はねば
　霧立のぼる道中の馬
置扇風の行衛が覺束ない
　共田樂は微塵こはいに
自墮落な阿彌陀の光仕懸つゝ
　五色の雲は中二階より
漣濤や山は後に前は花
　衆道女道の春はもつぱら
腎性も是から起つて立霞
　金で作つた人の行末

(巻之三)

大矢數　第二十一

何曰

餅の輪は淸くきよきぎ大鏡　西花
　初空日本一番の鰤　西鶴
雪流れ靑海原をかき捜ッて　素玄
　取賣が目に懸る漣濤　西潤
朝顏のあしたは起て店をあけ　西俊
　宵はあるかないか稻妻　西惠
此月に下戸も堪忍せぬ所　西悟
　柄に手をかけ懸る白露　西卞
散柳あれば我子か恨しや　執筆
　終に其後あはづの三郎
地颪を聲が立ねばやめにけり
　ならの都に黒豆をたく

これ不斷座禪のごく大佛
　香をもりては花子さま又
夕霞別れの鐘を撞役者
　すは〳〵うごくは春の山陰
死んでも雉子ないても雉子今は早
　またこの隅は風の渡り手
すみよしも力一ぱい神軍
　知略といつぱ夢の通ひ路
月人に文の上書かき替て
　隨分鈍な雁に此事
見分ぬか霧と雲とは分つたか
　見さまの山甥さまの里
たつた今生れましたといふて行
　心でしめる下ひぼの闘
撞懸てすかして置て投の勝
　噯きかずにいかなるか末
武藏野のまつ眞中をいはうには
　ほり兼の井も左勝手に

萍の花のいけやう聞ておけ
　此石塔が三代さきに
討死の子細は知らず候へと
　喉を通らぬ一石六斗
月すぐに卯の年よりも寅の年
　参る薬師は躍歌也
色になる笹谷分て行末は
　検見の時分の二村の山
おもくなるおもはん方の袖の下
　やまひの床はけふか明日也
見世はなほ伊達の大木戸さし塞
　酒の酔行吾妻路のはて
鳥がなく庚申待の事なれば
　つき出し捨て七色の山
凝海藻冷行水を仕懸たり
　餓鬼骨園秋の夜の月
入道の身の燃る事あふち風
　明石縮や戀のそめ絹

今はやる花の都にこんな物
　芝居はあらし書初は筆
節振舞又口上が屆かねば
　分散事は喰倒れ也
しなてるや片岡山に影かくす
　窂人衆にあきしのゝ里
長刀横に車をおして雲
　母衣のあとから雨が降ゆく
雷も雨馬があいにだうと落
　此妙薬も人にかたるな
起請の罰あたる所を幸に
　あれともしくみ是にても戀
前髪は尻の輕いに續あり
　夜の更るまで火をとつてこい
月は都さて天王寺熊野山
　身の秋をしる達者道心
一本のさし笠かるい露時雨
　若子さま抱てもり山の陰

夫かましよ〳〵とて蜈蚣の岑
　しつけのふかい多門天也
鼻聲の彌勒の出世待ほどに
　殊勝な所幸若の舞
群猿もしかたの山の道とめて
　料理ならへば腸をさく
飲過す酒天童子が一座の客
　太夫天神あまのはしだて
龍燈は思ひに燃てよるがよい
　浪立さはぎどこらとぞきく
月は暮花は盛に場を取て
　淨土の春をぶあくが語る
年玉の扇もとらせ何もかも
　へぎ一枚もわれば壁也
文車の文を集て刷細工
　奇麗にしたる九年面壁
御造佐や百味の飲食備られ
　寒い事なしほしい事なし

大名を作りそこなふどくにて
　虫がさしたる三まいの内
此書物心付ては風かほる
　連歌の言葉續く四方山
あらたなる三島の天神懸られて
　道中ぢうの無疾晴ゆく
さては月くらべておつて雲の袖
　自慢は萩か又は薄か
もとの秋小野の小町が髪かしら
　よい知音とて一つの鳥あり
晝はなほ夜の明るをもかまはねば
　すいて喧嘩はさはり三百
是は又吟じ果ぬに云勝か
　情分つよき山は松風
人參を釣替にして花にかね
　對馬の國より春の舟付

大矢數　第二十二

何　三子中略

日本國作意かはたらき花に鳴　正直
水にすむ蛙高麗の海　西鶴
もめん帆に春の色なる浪立て　松鶴
二つ巴の藤の夕暮　鶴風
小刀の細工がきいてかねの聲　西聲
まじなひ事に晴て行月　鶴甫
寢所を早くもあける枕の秋　西瓜
風音づれて旅籠屋の露　西巾
青さしの色を包めるだん袋　執筆
お里かへりや麥秋の末
是は米俵藤太の娘子か
軍亂るゝ纏の根元
千疋の馬を繋だ時の聲
八百日行濱上樣普請
算用や世界のこらず砂の數
土圭仕懸でめぐる月影
秋の夜もかつきといへば寢ずの番
これ紋付の衣うつおと
風寒み暮方よりも大よせしや
道場參後世の最中
眞直に四條の辻は爰かとよ
床髮結にやうすたづぬる
看板に僞のなき賣藥
五日の内に雲きゆる山
鐵甲はら〳〵と引れたり
あやめのにほひ酒の殘りか
すこしの義又音高に云てくる
浮世にすめば子供友達
つゝ井筒ゐづゝの水もまゝごとに
樸子を仕懸た山雀の籠
不性者今朝起て見る秋の霜
さる事心にかゝる月影
醫者替てどうぞ療治が有うもの
あつたら命雲の行末

投筆かつかいおろしと申せ共
　共名をのこす可億上人
玉の臺玉手と云に取立て
　河内一國なびく草むら
楠がおぞひ事共工みては
　二重底なる舟の行末
浪の聲幽に消て形はなし
　南無阿彌〳〵南無阿彌陀佛
云事があらば此方へ申置
　まつた目安に書やうもそれ
すたれ共手に入さしやうかねの聲
　月重山に八景の内
秋は又志賀の都もおもしろい
　三味線の露漣濤の歌
花代のそれ一枚かやすい事
　柳の髮をおろしての後
夢の春町桒と共に歎也
　胡蝶の行方今にしらぬか

たゞ古い付合計夕間暮
　三年米の札を落して
淺草のあしたの空はたしか也
　わたり相手に狼藉千萬
踏たる息の下より申やう
　約束の繩ひけばから臼
棺桶に入たてまつる六代目
　此通路はわけ方の外
女共形の似たるをとこ共
　御所と名乘て捕て押て
印判は爰に正しき袖の月
　淺黄にこくもち七夕の布
霧の海四十挺立は皆揃へ
　八島の浦へ矢をつくごとく
時に與市扇見懸て罷出
　なんぞ書うか一流の流
是卒都婆たすかる法は同じ事
　食が喰ひたか極樂の内

六道の辻にいつから捨られた
世間はみな〳〵夢なれや夢
五句去に暇の狀をやつてのけ
これも大工かかねとらん月
晝休み忽湯となる秋の水
人待懸て早わざな霧
花の火に夢想提燈暮初て
京までもゆく春の山道
認は酒も引懸たつ霞
追付仕合風のたよりに
腹あての駒もいさみて北向ひて
鬼の腕(ウイナ)をきつてから後
今朝よりも末一段に成にけり
出し懸て置ひやし物鉢
羽織などそろり〳〵と身拵
六尺六人物もうつゝく
爰は又中大名の御泊り也
進上宵箱根路の末
獨さへまた生れたか二子山
是でしんだいろくにすはつた
聞及へうたん公事の埒明た
都の內に取沙汰の月
手懸者搜しあるかす女郎花
よい心中をたてりと思へば
爰にきて獨死ぬまい所也
隙を入ても闕に打なす
仙人の日の暮るゝ事かまはねば
東來圓は賣しまふまで
とさくさと道頓堀の春は花
のぞき何なればさほ姫もあり

大矢數　第二十三

何匁

六天の雲や殘つて花に風　宜範
貌(ウクチ)の卯歸る雁の音　西鶴
山は春大からくりに顯て　松意

釜の腰繩霞引見ゆ　嘉雪
うらゝかに涌行旅の遣錢　夢現
浪の泡たつ茶でも酒でも　正直
はいらしやれ希にて逢た空の月　鶴吟
千年の内に山も色づく　歌吟
天人も衰へ懸り泪の露　執筆
ほろそかさがる布引の瀧
尋てはけふこそ見つれ鼠の巣
隠れ里より末の金錢
世中は命に替て欲が有
悪事は耳に入相の鐘
是は又千里の車雲に飛
梵天國より細引をひく
それしばれ淨土双六戻たらば
佛三尊中川の宿
ほそかねつかいすまして泥引に
用心時の木刀ひつさげ
しんかげの影面白き空の月

虚(ウカ)とあるくな萩の黄昏
厄病や身にしみ渡る時行風
大和の國よりいな事をいふ
伊駒山思ひも寄らぬ川違ひ
溝ほらうまで雨は降とも
御公儀の御觸きいた時鳥
牢人置な卯の花の宿
此あとは垣根の雪に馳走した
今に共下踏もとらずに有
行人は夢と成ゆく四十八
よもやなるまい陀彌の大願
木に餅はどこの世界を捜す共
しかた咄しやあの波の底
水の月雨頭の龜うかみ出
今年作りの酒はのみ勝
御はづかし色をかさぬる春日山
三月堂の末の谷ゝ
鶯も聲一ぱいの所也

霞を過て金銀有たけ
買置の本は殘さず此藏に
大ひねと云米柳陰
道邊に立泊りではわる臭ひ
小便の外人は人はて
會稽の耻を思へば樣子有
菓子つまんでは懷の月
飼ちんの尾花亂て咲にけり
霧立こめて大名乘物
十二人都をさしてのぼるゝ
五條の店の作り山ぶし
夕貌の宿に祈禱がきかばこそ
片輪車は終になをらぬ
染返しやき返しても袖の色
客が逢ふて蒲鉾の板
酒續き胸につかえて候へば
まづ四五日の暮は淋しき
杵音に風はすまたを吹せたり

のりたい時は馬が御ざらぬ
腰かけてやすませ給ふ六度迄
階のぼる老の夕暮
月か光玉の御殿を今見る事
上野の秋や上樣の山
又伊賀は知行の稻葉下されて
鷹を遣ふと鴨をとらふと
雲霧がうろ／＼と市に立
巾着きりや風の行末
飛螢尻を思へば大若衆
戀には靡け今竹之丞
其膚雪と申もおろか也
佐野の渡りは綸子か紗綾か
東路の末は殘して帯にせう
蛇たまし行果もなし
むごい事いかなる責に逢とても
あとより君は巾まいもの
指あひの噺しの内の襟ひ

世間のやうす暫くまつて
月見花見町をはゞかる計也
持合せたる曲水の宴
鶏も爰であはせて見つく也
軍の首途有無の二つじや
生死の海今西海に趣て
さては筑紫に善導寺様
宗旨請よつて件の如く也
十年の内取迯闕落
其身をば阿波座とやらに任せたり
胸にたく火は焼酎のかす
傳へ聞枕に殘る德利を恨み
其外あるにむづかしき謎
興さます遊び所の夜が更て
おのれがなべをかつぎ物也
敷銀が付とてよべばあんな月
世上は戀の中の秋風
色に成草が草なら亂りよまで

二人連にて葦の葉の笛
敵討難波のうらを心懸
右は田蓑の島名乗たか
時行醫者鶴の毛衣脱替て
をれが請あふ千代のゆく末
御用まで散せはせまい峯の花
二重網はる青柳の糸

大矢數 第二十四

何橋

大矢數是にはづれし難波鶴　久永
むだ口叩水鶏の勢力　西鶴
くだり月舟は乗合夜は明て　西吟
紅葉は近き慾に見ぬ貌　以清
山里やあれは從弟の末の秋　浄水
つりを書たる文字の雁金　可吟子
霧の海懸つた所が面白　良有
鼓の手つき一流の浪　安意

焼出しの鉢にて招く西の空　執筆
夫思ひたつ勸進ひぢり
坂本のかねが近年潰れたり
松は煙でおき摺の跡
冬籠る宿はさながらつめたいぞ
雪の夕の庭ではたらく
おしきせの袖打はらふ影もなし
聞度毎に同じ付合
膏藥の爰に奇特を顯して
月ばれが引西の海づら
二十四時おぼれて行し秋の事
皆雪隱に殘るしら露
爰で開く思案工夫も春の花
きゝ懸てきて弛す鑓梅
東風の風は常々手が長い
墨繪の猿よ自墮落な山
此朱印いざもろこしの人に見せん
上意を以て隅からすみまで

御物あがり今は毛拔や恨むらん
鼻紙袋におゝはく一ぱい
やれ氣付あとより息の責くれば
冥途におもむく鬼も十八
秀衡が枕によりて力瘤
いか物喰の果は東路
毛をひいた憂目を見する鳥がなく
大願懸るそれぞ白木綿
もとよりも月は和光の影照し
きんかあたまや千々の秋風
下紅葉一ぱい過す織部殿
飛子の名には客たせんさく
三津寺の裏に伊達をばこかせたり
夏は干瓢秋はから棹
手の内が痛ながらも世を渡る
狂言綺語の修羅鼓打
あの姿知つた人とも思はれず
親子の代にはとも鑓もあり

屋形舟今は水とぞ成にける
　からくり仕懸て夕浪の露
夫五體心の月は眞中に
　秋の彼岸や正法の彌陀
花か峯それに雜(マジリ)て錢が降
　名譽希代の春の夕暮
呼子鳥はねに替て毛が生へた
　此山中や搗(ツキ)置の餅
姫まるゝ常盤御前も哀也
　さて睦言は末の世がたり
引こうて彼上人を諫めんとて
　無常の風が今に覺ぬか
味噌汁の味が替つた鳥部山
　伊勢講の當屋立さらでのみ
帳箱をふりさけ見れば松原有
　戻せ方より進退は雪
方ゝで懸つた事か夕嵐
　踏れて來たりぶたれて來たり
點取は定なき哉夜の月
　人の心は色ゝの秋
酒のめば其片腸に袖の露
　契りも今宵たいこ上﨟
念比に語り申せば只金じや
　五段續けて寢ころうで聞
泣て見たり笑ふて見たり夜は明て
　時の皷をならす半きち
したしめし是はさつ書に顯たり
　茶はそなたから宇治の川霧
志しの秋こそ來たれ朝日山
　月は淨土の直中(タダナカ)照す
大悲の弓あたる所を覺たか
　強盜(ガンドウ)たちまち雨や丸雪と
御せんさく右の品ゝ歸り花
　子のない別れ作法の通り
弔の流れ灌頂あはれ也
　帛燒香水けぶりたつ

笘の屋は神鳴ぎらひの住所
臍を隱して松風村雨
夫思ひたき付られて釜の下
桃の皮にて戀の染衣
今は又吉彌風とて時惠(トキメク)か
立騒ぎたる與(タミ)中吟味
去ながら深手でなふて仕合じや
懸る所に氣違ひの沙汰
出家又貌(カタチ)を替て夜のとの
悟をひらく扇がさえて
おきゝやるかおきゝやるならば法の月
まづ今までは取て置秋
瘦(カク)されぬ暮の稻妻姫みたり
傾城の名の葛城の山
越後町にちいさけれ共豐等寺
まだ巣立せぬ雲雀じゝめく
雲か花夕の詠室になる
あれ烏賊幟はやり出の風
蜘舞が命を懸て申やう
浮世といつぱ酢でも水でも

大矢數　第二十五

何皷

駟(シ)も舌に及ばぬ事ぞ大矢數　守之
螢飛んでは車四千句　西鶴
比は皐月前代未聞の空晴て　松緑
記錄のおもてつまびらか也　吉隣
彼卿もずいぶんまめにましませば　木靜
あとは覺えずちりけより外　一尒
板つきへ月まで誘ふて仕與まるゝ　元尙
野山の色を二番續に　幸作
夕霧も結びを取て歸也　執筆
一文たしして方引の末
是よりは睨きの奥に春の山
霞の籠る富士の人穴
蛇も時節をまつて出し懸る

歎きの中の佛の別れ
晝は旅夜は泊りて善光寺
淺間の嵩や火繩の烟
びつくりは遠近人も二つ玉
秋の行衛も日があつてこそ
捻出せば丸に一まいの蟲の聲
名殘おしめと月の明ほの
すら〳〵とはや俳諧の花所
霞の衣脱だり着たり
勾當の坊聲計留春の鳥
日向の國まで旅の思ひ出
擣米に味噌を添たる海ひしほ
入大工なり礒の松かぜ
願はくば只此雨の降らぬ内
山ほとゝぎす聞たい所
五間口草の菴は資物か
出家の身なればそれから其もと
胡亂(ウロ)覺え釋迦一代の物語

つい寢入ぬる頭(ヅ)北面西
昨日のさては藥がきいたげな
宿屋の口鼻が自由にまはる
くら事の相圖をしたる夜の月
天の岩戸の奥のしら露
比は秋風の色立雨のみや
十二夘の御祈禱のため
月牌や轡へ其身は死なず共
只曉の油斷めさるな
徒歩合羽盜人雨が降て來て
物見の松の陰に暫
あせ雫蟬の衣をぬぎ替る
中入よりも涼風の聲
大神樂神の御前に通夜をして
其まゝ告をまたんとて月
此度は商賣替て霧の海
米もあはねば醬油の露
花ちれば三五の十八走り算

　とる者がない家櫻山
借錢はつもる所の雪きえて
　愛を去事風の關落
苦のあらぬ夫佛さへ虫喰歯
　四十餘年は枕なり夢
大役もはらひ退ては我物じや
　細少石岩石なごの玉
缺(ワキ)腋(アケ)の天の羽衣泥なぶり
　雨の降のに三芳野の里
時の鐘六田のあたり眞黑に
　松は寂しき見世さしませう
白雪をそこへ散して大喧嘩
　ふんだらまゝよ鳥の足形
月淸き文字と云事はじまりて
　露を算へて錢の取飽
盆節季是も浮世の慣(ナラヒ)也
　うその實のなき魂祭
舍呂利めが彼海底へ飛で行
　主の光りや金の瓢簞
或時は巾着となり根付となり
　族功者とは輕行にやる
あぶ付は命也けり佐夜の山
　無事で渡つてあの大井川
五月雨に材木流す時もあり
　是一つあり月は丸物
薄霧を分つゝ行ば通ひ盆
　唯わり膝で千秋樂まで
棟に棟けふ上初て軒の花
　春の夕風福原の京
鶯の笛聞事も有し世に
　またるゝ物はいたづら穿鑿
揚錢は二日拂に定まれど
　まだ醒やらぬ付さしの醉
道橋をわたり兼ては蹉づく
　其口上や浪の高聲
賣藥磯邊によする貝の蜕(カラ)

一木見えたる松脂をたね
公事二親の代から子細の雨
先書つゞけてかけたりの鳥
囑託に雲の行衛はうさん也
足手は虎か男の尩弱(ワウジャク)
大磯を夜前通つて忍び月
うき秋ながらきる石佛
國所たしかに記す文字の雁
同行六人一錢たまはれ
踏迷ふ足から先は大江山
戻り馬かな沓懸の坂
けさまでは知らぬ小唄を聞たもの
名譽な人が宿替てのく
さく花の先はなほ〱勝手つく
養ひ分の少年の春

大矢數　第二十六

何番

時鳥聞しにまさる名鳥たり　西香
よき木のすかり盧橘の陰　西鶴
山は夏青磁の貌顯して　意閑
御物袋を出る朝風　西嵐
横雲は横柄らしく立にけり　西雲
月さへ構はざだまつたがまし　松山
そち故に一番まけて露を置　一興
稲葉を分て聟取にやる　西尾
かけろくに秋風ぞふく夕間暮　執筆
やう〱打なす白川の關
はる〲と觀世新九郎身繕ひ
侍に似る供鑓がない
爰は又とらひで置うか渡し錢
三途川原の婆(ウバ)は留守でも
油斷すな地獄の釜をぬいて行
所へことはる加賀に白山

權現は三十三年開帳に
　天から降たこれ露の玉
胎内に其影添て月止り
　たつた一度の戀草の色
花は連理比翼の鳥と約束を
　起請のかため春の泡雪
東風かぜの手の有所殘すまい
　拜ませ申愛染明王
高野遠し其外爰にも難波寺
　末世の奇特常燈の影
一分が積り〱て千貫目
　蟻の穴より新田のぞむ
和泉をば熊野參に見立きて
　化物くさい牛瀧の山
錢箱に百物語と申ける
　吟味を仕やれ器財か打越
聟入や祝儀の外の此礫(ツブテ)
　元來戀に惡まれて居

橫紙に書續けたる文月夜
　小鷹の行衞離れ島まで
霧の海蛇の口の舟を漕よせて
　只見て遊山酒ずきの友
此町の太夫殘らず呼でこひ
　砂と思へばかねの別路
齒を磨く隙を惜みて立にけり
　五郎夢覺兄の面影
死さまに是ぞ氣疎き云替し
　血を呑あふて金輪際まで
すこし痛はれあがりたる竹生島
　露は碎けて毒の波寄
十人は同じ枕に月更て
　禰宜裝束やいせの秋の夜
旅芝居中の地藏の花盛
　雲も霞も次第に立まい
合紙にすこし懸たる春の水
　都に付てまはる鳴瀧

夕詠十六むさし果しなく
　あつたら隙に何事か又
聞書の末の山ゝ面白く
　長いくら有沖の石まで
ふり袖は泪乾かぬ四ツ身裁
　また新枕長持葛籠
此度は伏見の里の太儀也
　奉賀帳とてのりの舟着
波の紋瓦に付る巴の影
　水は煙て燒餅の數
早起きてわるさ計の今朝の月
　尾花分行此町の犬
荒にける霧の海なる魚の骨
　妹にあづける臺所帳
いつ何日恨いふたか覺たか
　烟答へて灸の皮きり
信濃なる山の腰骨さすり寄
　遠近人もなんのにくかろ

一樹の陰一河の流のやくめ也
　さま〴〵つもりて十年の夢
地をかりて引結びたる草の庵
　まづしきは露泪な添そ
月は夜臺碓の音計
　身にしみ渡る堺の大道
初花は朱座のごとくに移ひて
　天下の建立玉垣の梅
囀れる鳥井二本に極つたり
　一首のこして愛で死なふぞ
飛鳥井の姫の心も其時は
　袖はひつたり泣れもせまい
剃うとも肌をばゆるせ戀衣
　よく〳〵思へば地獄も近付
見たやうな山の姿も八里の中
　ひらにこなたへ寄て御茶でも
志し有日表に腰懸を
　繼足しては佛さま見る

墨の衣一寸法師か哀さは
　はし懸より諷そこなふ
そも北野の晴を極めて都の月
　露は時雨の亭の額書
蔦紅葉はふた所が面白い
　成ほどふるい和田の笠松
殊に名所今時發句があらうかの
　風をしるしに追善の雲
三笠山出て二度あはぬ也
　彼仲麿が綸言は汗
咲残る花や子供を想像
　葉風流模様の藤の缺腋

大矢數　第二十七

何櫃

星野はいさしらざ半分大矢數　善之
　二百五十石早苗とり月　西鶴
酌て又酒桶の雨頻にて　大鶴
　水かさまさる川崎屋殿　西次
橋杭も今は危く見えし時　西見
　平家の茶舟寄る計に　西金
有明の赤い田樂輩立て　西宗
　辛い嵐がふき特て秋　西利
夫命消そこなへば露の玉　執筆
　暮の螢が大飛をする
付合は澤の水上餘所にして
　青膏薬や觀音の慈悲
ちりけもと今此娑婆に匯上り
　ぶたれた拍子に蘇りする
此道は縦内裏も用捨なし
　天狗の羽風何時かふく
石臼もとられて行し山ゝは
　幌に仕懸し松の葉の月
此度は討死極て駒迎へ
　白装束の袖の夕露
花の帽子またぬれのある後室さま

　珠數くる片手しめて行春
石などの玉にもぬける雪消て
　隣の佐吉鶯の聲
こはり腹またるゝ物はやれ藥師
　浮世はしれぬ風の行末
見ぬ島に此度懸る海士小舟
　波の白玉似せかねをふく
同類や同じ心の友千鳥
　妹がり行く小半の酒
國も又枕ならべて傾いて
　千里の所夢の明ほの
虎の住竹の林も杖と成
　老後の思ひ出十懐紙の花
暮の月名譽朧の光さし
　判じ物より東風かぜの空
謂れざる浮世に隙な者すみて
　我身上や人の身の上
長堤嫁といふ字を誇り行

　是からこれは草鞋（ケアイ）田也
詠やるあれは比翼の鳥懼（ヲドシ）
　臆病者よあみ笠の露
譬ば月見めの門は大事かさて
　世間の秋は皆からくりじや
水學が水は忽湯となれば
　目をあらふたり足洗ひ時
暮初て泊り定むる通し馬
　闕の東の二軒目がよい
逢坂や椙の葉白き餅はもち
　今や引らん豆の粉の音
身の行衛納所坊主の塗坊主
　二六時中の鑰を預る
或は又慈悲の心の籠拂
　諸鳥の音まできけば百日
美の鯉といふ物喰ひ飽た
　淀に親類大坂に舟
又從弟めぐり〳〵て水車

今爰元に祭まつやら
時鳥口を叩て辻放下
一度は歌ふに泪なそえそ
心中に重四朱三を思ひこみ
さては首たけ加茂川の水
据風呂に三尾谷の神は顯れたり
貌は見せずあらたなる月
靈寶は霧と雲との二重とて
望みに任せて秋雨がふる
兩吟を思ひ定めて懸る時
常はよい中風かはる也
抱れたる幽靈是迄顯れて
筐の扇御腰の物まで
年を重ね生の松原詰奉公
自然の時は海の中道
筆取て少し早書覺たか
走懸つて七夕の歌
これ申まうしといへば月更る
落して置た庭の白露
花若に親がなふては叶ふまじ
明暮此事さく櫻川
ぬるみゆく水縄打て際日論
物にかまはぬ尼蛙まで
春の風障子の穴をつゞくりて
早き手づまに山を出します
夫冥途劒を爰にうつさるゝ
科ある者を懼（ヲドシ）なりけり
凝海藻微塵こぱいに碎れて
此一瓢ぎひや酒のうへ
皆かこゐ十人よふて何程ぞ
契りの寢卷枕さへない
小屏風のあとを扣て借に行
野懸と申殊更に山
出る月も一つは所の外聞じや
提灯とほせ稲妻の影
定なき世は町衆も野邊の色

うら島が子が賣てのく家
　帳箱を明て悔しき今はゝや
申さぬ事か後生のせんさく
　九ケ國を夕の雲となし給ふ
ふり續いたる舟の日和見
　花はさけど手遠き山は詮もなし
是からさすぞ藤の黄昏

大矢數　第二十八

何石

的は扇是俳諧の要也　正友
　進出たる執筆黑雲の峰　西鶴
菓子喰す山時鳥口を明きて　種成
　草の庵に虫が動くは　重次
瓦落〱初て鳴た春の空　西明
　梅が枝匂ふ大用小用　一永
添乳して敷物もなし朧月　一雫
　あしたの日和はや思ひたつ　愚望
鴈の友ぬけう談合が極て　執筆
　ひやうの頭の菊の花さく
貧乏鍛冶田蓑の島に住なるゝ
　火ふく力も五月雨の空
飛螢せめて世界に我なくば
　横平づらを雲の上まで
幅廣の虹の大島自慢して
　追付身上風の行衞は
雜木燒富士の煙が多いげな
　泊り大勢あしがらの露
初めから寢道具をかる夜の月
　けふ鵲のはしを咄して
思はくは是で浮世の花をやる
　小半までも霞はいらぬ
提させて春の寢覺の辨當に
　あらしの響く竹田成とも
醫者の儀は引肩ぬいで肝をいる
　此御家中の家老へのつて

今度山金のつるを見付たり
抓取して極樂淨土
迦陵頻或は鷲が舞さがり
戸樋を仕懸て二筋の縄
銅や若この細工取得たらば
天滿に屋敷京に御手懸
夕暮は喧嘩のたねの女夫池
寢耳に水をさす合點也
影はまだか更行月に料理好
亭主媚かす薄亂れて
根付には小野の小町が昔の躰
無疵を二つ玉津島姫
引がねに和歌の松原響して
夫落懸る鳶といふ物
大臣が大の眼に角をいれ
來る筈しつてどこへかしたぞ
別れ路や手形も取ずかねの聲
煤掃餅搗ねんごろな中
足を空に御用の事が有ならば
庄之介とて究竟の者
見立ては小草履取を置れたり
此比ちく〳〵藥がまはつて
月も花も二度の節季にしつかりと
霞を染て帳をけす筈
五十年縱彼岸に當る共
盧齊は見ざる夢の世の中
なら坂や聲が止つて哀也
仕形計を時雨降行
印むすぶ顏かと見えて神無月
蜘切丸をぬいて懸つて
驚かす合點のゆかぬ枕なり
只下屋敷は犬の通路
爐置臺の君を誰ぞか心懸
源氏平家の文の取やり
雁金か首の骨こそ強けれど
相撲のかはり雲の下帶

山の色赤澤山を夕詠め
くだれば石に乗懸の上
爰に宰府爰に刀を取まはし
どうやらすまぬ夜嵐の音
湯豆腐があたらう筈では有まいか
砕けて物を卵素麪
世界の圖世界の貌思ひ初
まさに七度は話ひてぞみる
枝は連理木遺傳兵衛を雇きて
新地の所取立て寺
鐵眼のちいさい口からふかれたり
夜も深更に秋の灯
笑ひのたね是は見ぬ世の文月に
若い時には吉野から露
花をふんで金の草鞋踏切て
役の行者や霞わけゆく
其あとは祈り祈禱の春の風
氷消えては傷寒そうな
かさね着の袖に移ふ波の紋
まづ此家は御内儀でもつ
綿實や關東までも隱れなし
利根な顏つき平野目がきく
其佛上人樣にきはまりて
脈があがつて二度かへる
臆病な心でのるな舟の上
既に一門何ほどの事
五貫目を二十餘年になし崩せ
今度の默論見十方旦那
太夫もと月は都に二つまで
熨斗に鰹に伊勢の濱荻
献立も所によりて露ちりて
渡りて鳥のはし鳴す音
すえさすぞと云ふ文字こそ灸なれ
孔子臭うて寄懸る山
死あとを思へば夢の枕蚊屋
蚤がせゝれば寢ても居られず

花舟や手のひら程な莚の上
布の引招青柳の糸

大矢數　第二十九

何女

詠入て人魂降けり雪の風　來雪
杓の貌は氷る山陰　西鶴
嶺の雲寄る敵を待請て　梅吟子
さて二段目は松の村立　友吟
階にのぼりて四方を見渡せば　松吟
民の竈や食時分也　友圃
用があらば月も後ほど出られよ　薬吟
留守をばつかふ秋風の聲　宗吟
物節季鴈の心はちいさうて　執筆
芥子をちらする腰の白山
胡麻餅や松は本より畑らん
千とせの鶴の子共たらしに
今はやる唯一ふしに雅樂ノ助
じゆん／＼十郎兵衛が鬼の形も
親の親安達が原へ尋行
磐手しのぶに一休口あく
波癸に燒蛤をくはれたり
誰ぞこひかし夕寂しき
有付けて油嗅いも面白い
尻目遣ひや窓蓋の紙
乘物はぬれに極る花の雨
なんでも合點春の夜の月
知れぬ字を尋ぬるための朝霞
符帳といつぱ雲のは袖に
晒布二端續きの瀧なれや
善の綱引鐵拐が峯
夫息に忽三尊顯れて
小風呂の内の闇もたすかる
伊勢參人の面はしろ／＼と
事欠の色明星が茶屋
袖ひけばあなたへちろり此方へも

夜分の外の鼠の嫁入
三介が是は提灯もつ所
一期の別れ今は泣けさて
堅まりが終に耗いて明の月
上戸の石や露の玉ちる
我戀はしほ干初汐飛魚を
山はあれども京は退屈
大佛の釋迦に今迄御厄介
八千度こそ何かせ角かせ
世中は手紙計で埒があく
月次の會あとのしら波
立川山峯續きなる奈良茶出せ
莨盆には飛火の野守
三日目の芭蕉は果て今幾日
太皷は神鳴秋雨がふる
こんな時露も流せよ芥川
背の垢や浪の夕月
身たしなみ咲ぬる花も有物じや

伽羅とめさせて草の下萠
詠やる雉子の床が近付は
髮を結する雲の浮橋
田舎者星を目當に登りたか
望の矢數思ひもよらず
油屋に半ば勤めて御暇
吾妻に下りて駕籠にても昇
氣がせくか關のこなたを夜の內に
去手くだにて作り山ぶし
身の上のいのり祈禱もきかばこそ
捜してみれど喰物もなし
是ほどに二年が內に仕あれて
妹が垣根は瓦落〱ぐはらり
月うすき戀のぬれ衣下り腹
一葉ちつては淀の川舟
用が有折ふし秋の末つかた
扇が癈れば頭巾を賴む
茶引坊其松原を詠やる

木曾殿の御内に隙有がある
長寢して朝日將軍耆也
浮世の費食がさむるに
風の前一つも散すな木屑(コケラ)鮨(スシ)
油火までも臺所帳
たまか成遠里おのこかしこまり
外は構はぬ萩の番する
聲立て角め鹿のめをお申しやるか
童部どうしや十五夜の月
牛若も花は盛に其姿
思はくで切靑柳の髮
春の風高う吹たら落さうぞ
用心めされ火皿浮雲(アブナ)い
唯は寢て又慰て寢ずの役
碁をうつ事は吉例がある
白黑の濱の眞砂はつきすまじ
をれが覺た本の分でも
大形の浮世の事は埒があく

醫者が三人出家が三人
此里の孔子の孫を呼んでこひ
枕に殘る算用をする
八雲たつ中間普請も出來にけり
堤の頽れ伊奘諾伊奘冊
此中は通ひのたゆる月の舟
菊の匂ひや當銀の酒
山人に霧と雲とが重なれば
無音の至りおのづから也
御存知の雪裏門は淋しくて
七日が間渡邊が家
兵は胴骨すべてすえにけり
ちつともこぼさぬ天目の水
花の香や唯發付の匂きて
屈從にしたてる少年の春

大矢數　第三十

壺何

塩竈や爐邊にうつす炭頭　西知
　三津の浦より鴨の羽箒　西鶴
小細工がきけば立浪白砂に　西通
　どこでも口を春過て夏　西櫻
表店藤の茂りはよい勝手　西堅
　底さへ匂ふみぞの行末　西秋
枕の月夜も深更に蚋なく　西雲
　通るは誰じやあしの花さく　西水
物の名も所〻の關の秋　執筆
　これがなくてはふところ鏡
供部屋に一口の口を暮し兼
　思ふ便もせばき舟路に
足立ぬ神のありさまむごい事
　夫片(カタ)側(ソバ)の摺粉木もない
人間のはじまりしより淨瑠璃を
　水は南に西はぬれ事
傘や雪晴ね共飛で行
　或夜の月に化物屋敷
今まではのきぬといふて波の露
　霧の海邊の川太郎めが
珍しき花を捜して濱一ぱい
　春の價や一文の錢
秉燭(ヒヨウソク)も空にのほりて薄霞
　成ほど杳い人の山住
茂りぬる枝は藤屋の市兵衛か
　惡銀(ワルガネ)などを見ぬ者のため
浮世茶屋やうすがあつて立破り
　玉の床なる疊ちり〲
邯鄲の或日は責て見に行ん
　翁の面は老やしぬると
此里に事傳つて練供養
　生もかへずにとうとい人〻
大名の御手が懸つて產出して
　繼の重荷や當座に千石

月の弓ひくてあまたに通したか
　つき物忽逃てゆく秋
あはう狂ひ霧重つて友達故
　一つ殘した山でもたまらぬ
大地震神の力もさあ変じや
　葦原抑泥の海なり
其時天鳶絨染も定まらず
　唯數羽織子持すぢ引
うき思ひ燃る所の火消番
　手懸がしのぶのぼり階の子
有やうに責て成とも問はいでは
　いつそにみち〳〵秋の初霜
時代蒔繪月の形も幽(ウスカ)也
　色に成ゆく東山見る
清水の花の盛は人たらし
　枯たる木にもやいて設て
已れまで身に懸らねど鳴雉子
　住馴た野を池に堀るゝ
我等事思ひながらも因の守護
　云名付あるそれはかまはず
何もかも親仁まかせの戀の道
　年代記をも取越て文
流れをば立る貌も本は猫
　眞葛のしげり是ぞ思ひ葉
薫りぬる風の便につけ届け
　螢があぶない火を持てくる
あこがるゝへうきん玉と思へども
　暮の睦言半分はうそ
三五夜の月は出次第けふの月
　濃地くらゐの食椎の露
初紅葉詠に續く山折敷
　男鹿の行衛宿替の跡
頼みますと壁聞時ぞ哀なる
　母にあたりは鹽ふんで介
一子寒し波の車を押乘る
　龍宮おもき長持の座

手あやまち遁がたしや隣まで
　されども風は地の下をふく
厄病の神も夕は通り道
　野になく虫に屁聲がない
月待といふた計であとかたも
　秋がくるのに狀もをこさぬ
花の春も又それから今迄は
　霞を染て手本が揚らう
黃鳥もはね袴着て阿(ト)彌(ミ)の代
　八延鉦(ドラ)に雪の村ぎえ
生佛是は追付死ほとけ
　呼にやれども耆婆は留守也
飛車雲をしるしにどこ迄も
　くさび一つは大ことも大事
業平の罷出られて角(スミ)角(ズ)擣(ツク)
　そこな番匠時しらぬ山
天王寺こも／＼謎のはじまり也
　空心といふうき藏主あり

蕎切は名譽不思議の酒相手
　寢(ネタ)ふと起(ヲキヤ)ふと一日の夢
借きつて心靜に下り月
　殊に同道足弱の雁
秋の風あたる所があぶないぞ
　此准道は金銀の雲
汐水をうてば忽雨と成
　草鞋おろす龍の勢ひ
雪舟や佛法修行の旅衣
　狹ふて廣い風呂敷の內
花に烏亭(ア)筍(コテ)を遣ふと鳴せたり
　若綠たつ松田うき舟

（巻之四）

大矢數　第三十一

點　何

手に取たり春宵一刻金の範　政寛
句數の天下泰平の花　西鶴
治つて風櫻板木に梓ばめて　友雪
入銀の山おのづから雲　近雪
峯は月三十餘丈の御藏あり　石流
やすふ落たる棟梁の雁　正延
けさははや二瘧目に萩の色　寛本
味を覺えた味噌汁の露　柴雪
生鰹鳴の羽かき書詰て　執筆
取揚ばゝも百夜通へり
行にて雲を分行敵討
其時五つの二子山見る
逐出の馬の歩みの箱根路に
顯れ渡る妾な關の戸
拍子木を打もねななん二度三度
喰に御ざらぬ飯臺のめし
大形は後生の書も知れた事
夏中懸つて手習子共
蜀魂聞た所がおとなしい
暖ふからは妾をせにせよ
月枕縱命は有まいと
竹田の舟路あら波の露
いにしへの秋は心も作り道
御幸の車長物がたり
それ公家の跡へ下つて引にけり
色のこしろい山鳥の聲
若衆に何でも錢を取り物じや
烟短きすえ所なり
片皿に室の八島も見えにけり
そこに續て日光責あり

夕の風あしたの雨に寢て起て
遊に隙が内〻の友
思ひ立て京の次手に唐迄も
鬼舍冠とは其時の人
月は酒形の有物とつて喰
賤さつもつて山の秋風
虱わく袖を重て擣衣
少の科で鞘に三年
古里のおばゝの顏も見忘れた
後世が大事の鐘太皷賣
洪水や生死の海がふかい也
惠心の取立仁和寺の里
まいて置さては蕪菜候な
縱飢饉のかの暮の空
不思議に出て中を翔たる牛の年
月の行衛を韋駄天追懸
霧烟朝食前の事成に
ようあゆふたぞ六里來て露
仕合はわたりに舟か花の波
俊寛計夢の春也
腸聲や心ほそくも立霞
まづ書て見て執筆に見せる
志の末の松山おもしろい
寢覺につめて沖は蛤
たのしみは此内に有鍋の蓋
槌に生れて兇詛の風
一に俵大黑殿の御祝ひ
しのぶ内にも常齋がある
狂言に布施ない經を讀まれたり
五日が間むだ骨を折る
出替りも昔の秋と替つたり
冷て飛鳥の水の汲み賣
月獨まひとりふたり有とても
造作は同じ先達の露
魂祭とつて昔の事迄も
大晦日は今生の闇

煎豆に鬼有所と聞からは
　此度すかぬ旅の門出
身自慢の繪師を恨みて歸まじ
　さらぬ泪や瀟湘の雨
立越と思ふべきかは夜の道
　餘所にもたはけ二人連だつ
棒組の棒やあたまで振ぬらん
　指人形をまはしたり月
秋はけさ御機嫌直し枕かや
　今迄の事堪忍の露
花千兩分別五兩と中也
　家老役とて持す鑓梅
三人並び手振驚すつ〱す
　こはい時には念佛も出ず
糊かうて經帷子を疊むらん
　無常すぎなる餘所の長持
野懸には豆腐昆蒻椎茸を
　是では酒が一つもいけぬ

投ぶしを諷ひさうなを呼んでこい
　別れの鐘や車座の中
吝い事右や左の長者樣
　食を盛たり汁をもつたり
氣散じに野寺の軒は松の風
　佛と名付て雪のかたまり
清盛の寵愛なさるゝ月澄て
　二十餘年は思はくの秋
手形借反古になつて雁の聲
　委な張箱内海の景
石の名を都の女郎姿有
　汐干に見えぬぬれのもと樣
笘屋形牛房畠と成にけり
　瀧本坊の花の初山
筆勢は水際のたつ朝霞
　春の錦やよい中のきれ

大矢數　第三十二

何能

人一代是や末代の和歌綠　亦閑
羽なふて飛梅を證跡　西鶴
東風吹かば箭に手足を動かせて　西木
隣の國から樂な進退　山香
夫檢地打て出しても構ふにこそ　戀舟
抓みあふては小額をぬく　冬貞
かつら男さりとはこはい生付　吉也
霧烟らせて木で作る魚　帆舟
食堂の甍やぶれて秋の風　執筆
鉋を懸る木庵和尚
へぎ餅のこゝ驚かす富士の山
中居くらゐの乙女の姿
或時は釜の下でも吹とぢよ
地獄といふ物現の明ほの
一休の狂歌にのこる傾城屋
別れのかねを返辨申す
大節季跡より戀の責くれば
せんかた泪に寶舟賣
長枕二人寢られた夢違ひ
あはうちしくも松の葉にさへ
花をふんで蹈付いれて山の腰
劒ぬかぬか春の夜の月
八重霞七盃過て其後に
命しらずや豚魚汁の友
床に臥肩で息して北枕
地體拙者は一風呂がよい
さとるまで即心即佛此所
線香立てまどろめる內
不思議なる俳諧共が顯はるゝ
水邊といふ宇治の川霧
我庵は潰れ懸つた尾花浪
女鹿の物は艮せ方より
月にして野原手廣き慈悲心
構ひて起すな獨あくまで

かねつかふ大臣島に殘されて
　熊野を勸請神樂願西
堅の血判鳥が事は處次第
　浮岩て死ば野と成て骨
菅笠をすいて日來は着られたか
　旅の首途を見送りてかい
順風に舟の行事矢のごとし
　立る扇は生の松原
禮に來る後住を居て波の聲
　利發さうなる日の佛さま
金鉢にどこでも食をくた物じや
　秋行所六十八間
空碑月の額が浮雲いぞ
　聟入さうな男七夕さま
思ひの火暮に灯て花燈籠
　わるさをすかす初嵐ふく
角の生えた山から何ぞ出さうなぞ
　燒てきました麥食の中
客人は裏へ廻りて井戸覗け
　遠い畑にけつく迷惑
麻袴督間になつて採がつく
　天滿にすむから神の事也
萬燈の貴て光はならず共
　暮に及ばゞ廣敷を掃け
夕涼波の皺がおもしろい
　天より一つの盃をさす
夜前の儀夢の浮橋打渡り
　菩提の道に踏ました月
秋の稻葉空ゝ寂ゝよい白み
　内々磨ぎし向齒の露
風呂屋もの戯れ言葉の猿眼
　かついだ振やあの三笠山
一冊に大和巡禮作られて
　三日懸れる隅からすみ迄
毛抜持て産毛すこしも殘さばこそ
　是あとしきの公事を聞るゝ

風も立ず波も靜に周防灘
　知らぬ小歌を爰でよまふか
夜食出て夫から咄も盡る筈
　世間は昏て片山の月
道心を發されてより擣衣
　魂魄殘つて露のしら玉
蓬萊の花の苞みを尋行
　めでたい事は前廉の春
薄霞角入てからおろしたり
　む木をあてる乾坤の箱
其内に心の邪む人も有
　芝居がはてゝ還ふ出たらば
彼町に火燈し時分に成ませう
　小用につかふ戀の若ばえ
蒔初て思ひの種子の油糟
　隣は庄屋隣は唐臼
立養ひ愚癡蚊虻の御出家を
　西むいてなら十年成とも
山のけしき殊に勝て咸陽宮
　から破風作の廟門の末
月の光これは滅金と申けり
　雲霧包みて五兩十兩
男鹿よる漸笛の役者也
　辨當持も里の雨乞
神ならば神の御前に待て見よ
　ありつる告に何ぞたもらう
ぬくもりのさめぬ内にと枕を上
　此猫の子がたゞは育たぬ
花の浪なんぼの瀨戸を越て行
　咲ぬる蔓は長崎の藤

大矢數　第三十三

何附

內氣者人ちる跡や遲櫻　政俊
　三里さがつた藤の花山　西鶴
大鰆そこさへ匂ふ海越て　鶴道

硯の雲にから墨の月　　音ロ
秋雨は天水壺の水入に　　千之
膚の朝起髪結の露　　江屋
小便を流す筏の橋の詰　　常笑
幸馬から落る瀧津瀬　　一竹
引寄せて二刀さすあがり鯉　　執筆
名字を聞ば蓑和田の池
東路のはても殘さず一文かけ
大事のせんさく鳥の鳴迄
符付て人に知らすな箱傳受
近年仕出しのからくり屛
飛鳥井の姫の有樣似せ若衆
二業平のそれぞ面影
あちらむけこちら向けとて物好み
灸をするては七所まで
おとゝいこい高走にしたる蜘の巣を
賴光大きに騷がせたまふ
咲花と入月影と跡口論
惣じての事沙汰なしの春
氣扶けな腰本あつて立霞
ぬれの文など人形つかいじや
須磨の浦都をさして上らるゝ
寺近けれど綸旨持ねば
諸旦那を取集たるかねの聲
袋といふも雲なり風也
轉合に大黑殿の中がへり
瓢簞やきて三に酒飲め
山雀をしめて浮世の別れ也
むごい事見る秋の野遊び
大袈裟に物謂ぬ程した紅葉
地藏の化妖あらはれて月
獨寢て西へ向ては父戀し
しきせ計で中とし五年
後は又引上られて帳付に
二階造りの焰魔大王
戲れの女人成佛成難し

　帛脚布はむらさきの雲
留伽羅や切利天まで通らん
　痞のねがひ雙六の賽
勿體なし齋の言葉の其上に
　ひや汗流す玉のきざはし
小皷を見おほせたらば仕合也
　姿の躍に出ずにもをられず
北嵯峨の月は都へ手が屆く
　入物をよふ御隱居の露
花の水心のすめる風呂の內
　霞む海邊や輕石の波
痳病の藥違ひの春の色
　呼にやらねば二たびの恥
姿のみ床へ入ては樣子ある
　短氣は損氣別れてのかね
今ははや枕に殘る鑰を恨む
　科なき物を捕たりの聲
看板に藤牧可心と打れたり

　江戸の眼に僞り御ざらぬ
状一つ夫尼店の横町に
　釘鎹の爪のはし也
紋所同じ模樣の崩れ橋
　波に聲して十二挺たて
巾のき月來迎の念佛講
　六字の額に移る初雁
中端に秋の錦をつかはれたり
　歩み馴ねば足がすべ〳〵
長の旅つぼの石ぶみ痛出て
　唐がらしやく鹽竈の浦
さて菜食今の都にうつされたり
　養生の杖土手の村竹
飛螢脾が毀たと申けり
　唯青うなる雲の上まで
此野邊に十日餘も雨がない
　逢夜の星は仕合の空
腹あてを詠めこしぬる月の駒

露立騷ぐ佐々木梶原
兵の交ならば花にのめ
肩にぶつ〳〵と瘤柳陰
春の風仁王門より通り行
氷消ては萬代の池
竹箒ちりやたらりと掃にけり
さて其次に高砂がある
誰をかも知人にせん此中は
五百羅漢の山はときつく
いつの世の石に夢路を殘れたり
日算してはしんだと中
大欲の深かる姉も妹も
ぬれの歌かゝ繼され一つも
此思ひ盟の洩（モリ）をとめて見よ
垢のたまつた足懸手懸
月は山それで續こか針を藏
萩のはなずり衣裳着せ共
鈴虫は面箱よりも啼初て
蒔繪に書た不破の中山
眼鏡でも戀しき都見えばこそ
いつそ思ひは燃えて燈心
其恨み暮に數有鞠をつく
明て詠むる丑の年なり
よい事が耳に留て花の瀧
表むきから裏しろ連歌

大矢數　第三十四

何這

笑う山谷の流れは腹の皮　正永
春をふくなり二盃目の瀧　西鶴
今少し雪が殘れば手湯散て　西市
饂飩の粉にも白き榾の葉　西及
もとの木末槇は行燈と成にけり　西潤
遣ひ過して獨見る月　西要
秋の雨かうした棒は笠の内　西文
まづ肩越て細道の鑼　西閑

灸嫌ひ宇津の山邊の現にも　執筆
峯に聲する鳥の日がよい
旅立の足手は虎のごく也
引肌懸てもろこしが原
今は早相撲の內と聞ゆなる
巡見衆の暮の中宿
物買ず物を餇はず物謂ず
一升ますに一升入也
壁土の土は忽山となる
昔のけしき生玉の月
鳩ふくや二重の塔があつたげな
入亂れては雲木の露
花軍敵も味方もから詞
まづ今日は鑓梅の先
渡邊のものが懸つて引霞
一さしさしやれ入殘し有
老の夢地躰身持が大事也
喜撰法師が高い爐路口

ゑいやつと歌の力で踏跨け
吾妻の方へ鞍置の馬
逢坂のしんこの形も跡になし
又泥をふむ關の岩かど
これ物に引構たる鱣搔
俄に四五人里の夕暮
三分一神樂さうして夫を數く
皆拜みたい月蝕の影
秋の風さては中段ふいて行
相本流の露を散らして
針立も次第〱の近付に
自體出所三輪の山陰
眞夜中道に迷ふて道もなし
文殊の慈悲で小便したい
是は又智惠があまつて腫病
疊枕や暮方の夢
舟遊山忘れた物は御座らぬか
三里さがつて大阪堺

一時に米の相場が知れて行
近年の雨・秋風の音
雲の波霧を分たる犀の角
月がとがつて切疵のほど
花の香も手づまのきかぬ膾皿
鯛の櫻は直(チ)か燒にせよ
行春も堪忍ならぬ伯父坊主
今度の公事はおれが出て埒
祇園會の山が動くとせくまいぞ
其化妖物(バケ)は火とほしといふ
細ながふ爰に鼠の通ひ道
禿倉(ホコラ)を立て一日仕事
片そぎもつい住吉と成にけり
才覺者よ事闕に鼻
つかはれて狗賓(グヒン)の內裏に居からは
二十五匁とられてぞ行
いにしへの天神樣が有難い
其夜の睦言髭のびて月

憂秋はいつそに殺せ中陰じや
おもひに小つけ袖の白露
伏見まで便となれば馬便宜
遠江殿に目利物あり
行燈の仕懸直しを工んだり
寒きあらしに凝海藻賣
常にない瀧の流れをうつされて
七日のほれば岩を取出す
羽衣の袖をしほりて御說法
剃(ソリ)てのけたる天の香久山
此秋より喰とまつたる今井鮨
さても穗蓼の幸ひ世中
野邊の月目ふる間になかりけり
虫より外に誰も來なんだ
花あはれ世尊の死めに馳れたり
今聞ました耳塚の春
長閑なる矢數を尾張へとつたげな
割付の狀呼次の濱

友衛飛がごくに思へども
　波は畑て田樂法師
此夕淋しき伽に精進食
　其病付の螢むなしき
肝心の竹の一よに南無三寶
　鋸むねん盞置をわる
辨慶は身體手あらき人成に
　又引裂た衣川なり
釘の頭有とも知らず光堂
　お歯黒壺や女人成佛
待宵の月を是より思ひきる
　あんな奴には泣せたい露
聲をのみた虫腹や發(オコ)るらん
　草の所縁(ユウリ)の胡黄連(クウヤク)の末
一文の錢も世界の重寶じや
　遠眼鏡にて東西南北
雜式も委の舞臺に上りけり
　權柄らしき松の下陰
おゝん時公方座敷に花が咲く
　諸國靜に今春の空

大矢數　第三十五

赤何

大句數是にて恥よ時鳥　仁交
　世間の節に銀の卯花　西鶴
既雲白旗さらすけしきにて　西長
　いづれ闇也壁土の門　吉忠
配ぬる柱となりて霜滿る　西ト
　鳥は亂れて續く鳶口　西柳
けさの月長持の盞明にけり　西愚
　散や柳を樂屋で捌く　西藤
白露を玉にもぬける巾着切　執筆
　喧嘩好して其身むなしく
道野邊に又新しき墓二つ
　さては朝から是まで一里
茛菪のむ煙の末はどこ許ぞ

新町すぢの夕暮の空
　ばた／＼と捨てたやするかねの聲
さとりの道に入は山陰
　三芳野の奥さま是を歎かるゝ
恨すまして衣うつ音
　秋の風頭やうすが替つたは
さては藥もまはつたる月
　花は根にまたよい所候へば
よつて遣やれこがね酴醾
　らくさくや曙昔はてゝ餅餤
心やすさは內海の中
　此舟に夢も結ばず一夜妻
火急に成て文の取やり
　物前のまた染物が出來ぬけな
明口の晚より紙幟たつ
　御成敗かくのごくの沺也
栗田口をば世忰見て置
　千早振北に當つて神樂岡
磁石の先は頭が堅いぞ
　生延て五百八十七まがり
御寶物やくる／＼の帶
　笠鉾の夕の月や出ぬらん
地ならしをして虫の啼音
　僧脇も衣かたしきうたれたり
張貫にした山の秋風
　くだものゝ見世の先より雲の色
雨の降る日は草履の鼻緒
　高咄寢てもゐられぬ夕間暮
廣座敷よりそなたとをれと
　殿樣はいつ御歸の便まつ
紙の衾を引被ては夢
　時待ばすは／＼牢人動き出
右の千石稻葉亂るゝ
　雁鳴て悲しい折もあつた物
あとよりまはる追剝の月
　これは又借もいといふ花衣

辻つまあはぬ藤の黄昏
行春や道が違ふてましますか
霞は立て灰寄せの時
妻戀の爰にあれたる猫の糞
日南北向不破の關守
らく寢して寢覺の里に續けり
共脇母子に足をさすらす
袖の露雨の帝のおゝん時
年號替つて豐成秋
月渡る共道橋の詰見れば
またさかやきが二つつかえた
三番目うたしやる衣は先まちやれ
けふの碁會はやうすが御ざる
中川の宿の亭主が無調法
流るゝ水は斷てすむ
此帳が御公儀樣へあがつたり
町の名共も替る世中
年寄衆所によりて談合事

とつと神世に岩倉の山
時鳥聞傳たる計なり
むづかしき謎懸たか〳〵
竹篦(シッペイ)をはじかれてより夜の空
手本よごして墨染の袖
伏見より立越修行の初也
それから夫まで一葉の舟
月は影唯まんろくな相場もの
露のうき世の欲に構はぬ
花盛迚も子のない上からは
法師姿の櫻さくらん
世中の春に連歌のなかりせば
仕置おさまる盜人のたね
雨次のよい所をば心懸
抑龍は里に千年
北州の石龜までも動き出る
觀音經に疳病の事
明盲枯たる木をも杖につけ

世を渉るわざ轆轤挽らん
大石も動く時には動べし
鹿島の神の白山にならぬ
事備は宿老殿から其次に
明日の朝御時分がよい
此中の挽置なれと殘る月
水櫛よりも虫やなくらん
厄害が浮世の秋に懸くる
昨日も三人けふも六人
木戸札は思ひも寄らずつつと入
馬かた其外御普請の城
影光り少も曇ぬ玉造
小町もむかしは口紅粉をさす
花の色うつれば替る模様たて
風に靡かす植柳より

大矢數　第三十六

端何

きやつは歌のさま濟り也時鳥　双吟
晝は消つゝ迯尻螢　西鶴
五月影親仁の前は手ぐろして　石齋
金を滅すな行末の雲　西末
鐇(マサカリ)は松に響きて山入の　夜鶴
恐れをなして四足の影　春久
鞍懸に闕の人ゝ慮外也　鶴芦
承つて皷うつ事　時直
古狸何國王地にあらざるや　執筆
化妖(バケ)そこないの貌見る山
夜の契り或時晝も通ひ來て
次第ゝゝに戀痩の色
食などを秤に懸て釣替に
熊野の山は不自由千萬
戻り駕籠音無川に成にけり
仔細が御ざつて波の行末

朝顔の盛まつ間の世界也
　茶湯すきして袖の月影
はき替の足袋に移らう秋の霜
　小納戸衆は風の音する
さく花を散せぬまゝに御爲づく
　また消殘る大雪の宿
八重霞合羽をはらふ影もなし
　馬の上からうなづいて行
一生は休甫坊主が夢なれや
　難波の浦で夜とも晝とも
內證はそれにまかせて忘貝
　百枚閉の帳の上紙
筵風呂に入てはかへるぬれ衣
　よう御ざつたはお仕着の時宜
何方も日出たや春に成ました
　氣が廣うなる初花の山
上樣の在所見て來て立霞
　米なら金なら錢なら藏なら

寢入鼻取集たる夢の月
　富士山の炯燈の秋
又鼠尾花波より騷ぎけり
　不思議のやまひ命浮雲い
佐夜の山腰などすこし拾らせて
　子かへり今と菊川の里
百舟も追付爰につきさうな
　あゆふて行より旅の半天
夢心四十九日と申には
　浮世の歎き南無阿彌陀佛
若い時ひよんな事して入黑子
　其戀衣月も得脫がぬ
合力の別れのかねも少し也
　思へば月の初瀨請出す
三本の椙も憂秋知れたり
　居馴染まして後の出替
孝行の道であらずば千年も
　金の釜を賣喰にする

一代の吝極て共先は
　目は塞ぐとも檢校の宿
八橋を渡り徒たる共からされ
　蜘手に物をあはれ獄門
懸ろくをして又行は夜の風
　家中廣しと申せ共我
武藏野の隅に十間下されて
　いかなる風の火けし番也
さま〳〵の智惠を集めて水手桶
　十分盃はいつの比より
月に酒呑てまはする底ぬけか
　千秋樂と供部屋へゆく
霧の海心靜に舟がつく
　共親仁さま老の波たつ
常山が引こむ時の歌一首
　譬ば猛きすつぽんの頸
鍋島の暮は湯玉かあがつたり
　穴一やめて足あらひをれ

嗚昔こそ祭の跡の松の風
　また膳棚に何ぞ有うぞ
詠めこす入日の末の淡路町
　あまの逆鉾散番月
拍子木を神代の秋も打れたり
　土器にもる飯臺の露
花の山樣子尋ぬる狐福
　二年が內にこがね山吹
手形かり我が證據に立霞
　一尺二寸三吉野の奥
尾籠ながら尾頭懸て是程か
　榮耀者とてならす箱挑
けふは山あしたは芝居あさつては
　十日計の留守賴みます
養生に上り下りの舟の上
　左の方に波のうちきれ
忠度の有さまを見て鳴衛
　秀句つまつて夕淋しき

そこらにはいつともなけに寢入たり
　案ずる程にきざはしの月
願くば唯薄霧をさら〳〵
　商ひ口や打散す露
そも繩やこなたに握る果報也
　阿座(アザ)一枚は洛中の内
彩色の五色に移る雲の色
　天台宗の盛物の山
買切や麓に四くはんか落雁を
　又作めに虫が出よふぞ
花に雨養ひ得ては今迄こそ
　獨はみする鳥の囀り

大矢數　第三十七

何萎

大矢數聲の達者ぞ鶴の舌　和春
　世界の螢影まつて今　西鶴
化して龍のほる梢は茂あひて　西海
　正筆のきどく風が顯す　西濤
野邊の秋手代任せと謂せまい　西平
　屋敷勤の虫も音になく　西如
月は夕朝は朔日十五日　西江
　飛脚がいそぐ雲の行末　西市
相場物俄に風の替りきて　執筆
　藏を建たる武藏野の隅
乘がへの爰は御馬の飼所
　秀衡最後に中置るゝ
五人の子跡や枕に近う寄れ
　引捕(トラ)へては天柱(チリケ)すえのき
此折檻わるう聞たら罰當り
　夜見世通ひは天の道也
小船に竿さし歸る思ひ川
　置し扇の直中(タヾナカ)を射よ
棟上の其日日出度軒の月
　赤飯一荷野邊は色付
お花ごりやう互に影を水なぶり

氷消ては戀が浮雲ひ
誓文の地獄の末も春の風
大商人や箱根越すらん
身祝ひの鈍子の口にさし懸
道〻ことの勝手取持
反古さらえ重て雲と成にけり
勤の内は雨でたらした
おほこさうな其君様は時鳥
草の菴の西も東も
昔は野雨門跡と成たまふ
坊主ころしの投ぶしの末
計へ加留多馬繋ぐなと話寄り
夫さへあるに悪性の宿
更過て焼ぬ食くう夜の月
さん〴〵粉灰無理やりの露
小鯯評後は薄も入亂れ
いかなる人の首が残つた
自墮落な烟の末の莨菪盆
はし局をばやす寺といふ
別れ路の鳥の足形書習ひ
何ぞといへば虱わかして
梶取が舟と答て下り舟
鹿島の宮も忍びて御ざる
悪くるひ二親様へ告の松
露も時雨も大懸り也
影輝す月に七つか九つか
何國の秋やのぼり梯子
同類も花も紅葉もなかりけり
此言分を志賀の山越
漣や舟のたよりも候はず
丸木計を焼て居まする
白雪にふりこめられて此所
佐野の渡の小便たび〳〵
腰氣病女姿の神の山
其鰹木を握るむつ言
募つては腹の皮なる大口舌

百姓ながら一城の門
五枚甲鍬形うつて鋤を持
行基菩薩の用心の道
挑灯を持せて御ざる昆陽の池
頭日出まする松原の月
狼に衣うつ音おそろしや
作り嘶しの野寺なる秋
下直に思ふた分が損になる
つい片おもてすつて行雲
今一羽は出さうな物じや時鳥
彌勒此世に耳果報なり
木海月を其曉に掴みとり
俄の儀なればあえませの山
時の聲上を下へとかへしけり
夫籠ぬけのてん〳〵てれつく
折しもあれ今は師走の八日吹
お祖父の髭も春を待月
紋なしに雲の袂の衣配り

已前が悔し釘貫松かは
小身で済むまい物を花の山
梅の香ひは一本の鑓
乗物の御座が出て行難波より
一つに燒いて烟賑ふ
染直し又色替て桃の皮
不斷隙なき針箱の内
浦島が子也けり娘にて
寢覺の床に天鵝絨枕
先初手は唯やはらかに話よる
やんれ追懸中綱仲人
半分はうそと思はれ日雇取
大食くらふて舌を抜るゝ
夫鱶も終た俎板思ひしれ
旗本衆はあら波の音
月もよし〳〵や〳〵とよしやふう
數紋付て袖の稻妻
椀箱を秋の朝に改めて

眞中よりも所帯が分る
引提て重い輕いもなかりけり
どこの包ぞ十貫目入
近年の仕懸物也丹土賣
知れぬ事じやぞ果報引出す
花の縁其身は裸で覗迄も
尋常過た鶯の袖

大矢数　第三十八

揺線香二寸八分

横何

目には眼鏡耳には何を時鳥　方流
鼻に盧(クチ)橋(バナ)口は早口　西鶴
一万句三日の暮の風薫りて　重成
出るぞ名殘懸て雲紙　書知
提槌の音聞捨て行旅に　正林
人家はなれて山幽なる　清定
岑あれば則入なり剣の月　一行
松しづまつて講談の露　道久
秋の部を千代のためしにひかれたり　執筆
隨分謹な君がためとて
若死や惜からざりし命さへ
堺の道に社務の印か
夫火宅又は車に打乗りて
世々の豆板抓まれて行
茶屋の口鼻進出ては幣を上
頭の骨こそ強き四郎様
執心の鬼の貌(カタチ)も枕繪に
月も荒たる瓦の軒端
二十年憂秋ながら後家で住
利發があまつて庭の白露
花の木や細工貧乏人賣
夫山吹は小鍋なり
伽羅割て入度〳〵に立價
今でも知れぬ面影の山
いき別れあつちの沙汰が聞たいの

大國なれと長崎もまし
丸山へ近い咄しがある物を
美男に生れて金はわく也
尻目づかひ人の跡までこつそりと
暮の螢や燃杭に火か
しまつとは雲の上まで知れたり
落所見よ神鳴の露
地狂言罷出たる月の影
喚蘭すそをくゝりて
夕暮は花に色あるとん〳〵
唯山姥が槌でうつ春
長閑成夫天秤は廻り物
一責せめて水ぬるみ行
叶はぬと思ひ定めて南無阿彌陀
暗い所を直にとほらう
人穴の富士に近付なかりけり
ざゝ降かして雪の夕暮
きらふなら朝の空よ壺の口

阿蘭陀漬の風薫り行
御手紙ことにこなたは田舍から
案内のためどこへ成とも
岩淸水麓までゐて戻り足
比興者也あの男山
御覺悟のあらう事ぞよ峰の月
水がひえたる借錢の淵
今までは鹽で埋んで秋の霜
上塗土にきり〴〵すなく
又汲んで水莖の岡詠めやる
數かき捨て經木のおもて
張笠も菩提の種と成にけり
短ふおもふて旅の行末
月代は是で堪忍なるまいか
御前へ出る明日の朝
內證を聞たし風の吹やうに
船頭がなさけ乘合の上
敵討やうす知るまで波の音

角介と云千鳥友呼
月の劒二尺計を落しざし
正躰すさまじ尻聲がない
鈍な者つかふて居たる薄原
己が啼つる虫が長いぞ
寸白の根薬を此度絶すべし
次手に砂をおろす菎蒻
定齋やまた明ぼのゝ濱傳ひ
幸爰にのりの舟あり
今までは生過したる波の皺
あしたはあした利を取てのく
明ぼのゝ鐘の響に驚いた
まづ一疋の月の駒かれ
行秋はまはれば三里の所也
きづかひなしに唐橋の露
御調物花の都へ念を入
常の川共糊付の春
合せては同じ薬になく雉子

まつ眞中（タヾ）へ二つ玉うつ
汐がさし又ひく事が不審也
正眞まさに初瀬の觀音
極楽の光なりけり金一まい
こゝろざす日の茶を詰にやる
燒豆腐煙に遠き人の身は
淺間が嶽の入口の宿
うちかへに乘平常ゝ申やう
手形一つは死ぬるぞはなすな
此律義閻魔大王合點也
千本通まつすぐにゆく
しのび駕籠月を日當に南へ
冷て滅する人間の氷
秋風や屋根の棟にも渡るらん
西行が見てうなづいてゐる
膏肓にすえて給れ烟の山
それから先は石千代（イシチヨ）になる
他の家を承つて名付親

五條の三位天晴くらゐ
花の座は二疊重の其上に
本陣宿の庭の梅が香

大矢數　第三十九

摠線香三寸

何箱

卯の花の鎧通しか鶴の箸　幸船
あら砥に懸てとぎすとなく鳥　西鶴
五月雨に煠けた雲や流るらん　西隅
瀧浪落す表具屋が見世　一閑
御出入の庭の岩角風あれて　西往
乘替の駒すだくなりけり　重時
月は弓箆ぶかにいさす膝の口　鶴翼
間近き磯に菊玉が咲　吉治
釣舟に下くさの色あしらいて　執筆
浦島太郎媚た者なり
足がよめぬ明て悔しき物の本
雲といふ空かうも立行
運氣見る山の頂上爰なれや
五年の工夫松の下陰
子規聞たい時になくやうに
草の庵は御手の物也
貧僧にいな事が有百握
四くるを持て衣うつおと
どうきても秋は秋とて極まつた
月は東に西へいる筈
一日の遊山がたらいて花も火を
いつそに落る藤に懸つても見よ
春日山春は請取普請也
二月よりして三月堂迄
むし瘡次第〳〵に募り行
剩根太重手は展ひぬ
なほ風呂に入なと有し御異見を
夜るの騷にそれやした事は
出たといふ目の一つある高坊主

定に是は殘の執着
棺桶の中にも夫を忘れねば
又香物こちらに置ぞ
臍すゑてそれから先は物をとへ
晝休みよりまかる道あり
殊に空月の夕に懸つたは
あばら三枚哀なる露
秋の風田宮があてゝ候へば
芭蕉葉破れてちつ共殘らぬ
雜巾の影も貌もなかりけり
青野が原は大客のあと
戀は又草の靡と申也
片手をしめて生でつかます
否風なあの神鳴の太鼓持
臍より下が大事の所
火の雨が降てきたれば鍋かづく
筑摩の祭取こして月
惡坊も東近江へ亂れ行

さてはこなたに三盃過た
咲花も根から請たるつゞけざま
どつこいそつこいうごく柳生か
鶯も其身かるげに飛れたり
またるゝ物は前句の日ぎり
此頃は寢ても覺ても空をみる
出雲千俵賣てのけうか
酒屋共八重垣作る時分也
次第に富貴山陰の里
落し子を引けば驚く中納言
さては都へのぼらぬ前に
今一度は咄に御ざれ宵の口
探して置てやる物もあり
南無三寶爰に大事の笛の内
臺座後光の奉加を頼む
箔千まい月はもとより影さして
おめしの舟の霧の海づら
暇請折ふし秋の末へ方

又當年も貨物の役目に
其時の捨子育てよい男
法然上人今からはらく
肝心の一枚起請書せ置く
脇心なら夫からそれ迄
此方にすこしも如在はなけれ共
取集てもないかねの聲
大節季初瀨の山より暮かゝる
右近と云人分別の露
月は空かねて沓音心得て
馬にのる共眞陸な秋
此裁許花と紅葉と分れたり
うらの笘屋は後家が取笘
寺へゐて浪の頭をまるめたり
佛の力鏢をうつ音
夫柱こゝろの鬼を押へては
否でもあふでもとま一盃のめ
仙人が住あらしては候へど

行水すれば又わかうなる
今度京へ登り拵致されたり
二十五日の三十三年
旃檀の煙は爰で穴かしこ
のりの德には恙なく今
一切の訓蒙圖彙迄一通り
さて內藏は黴がはえしは
うけ樋に月さへ見えぬ五月雨
長生殿はどつちの方じや
心覺唐土までも行旅に
秋の寢起や鍔もとくつろげ
年來のそいつ歷てうつ衣
男のあるにあの女七夕
しのぶ夜の月は天道見通しじや
命を捨て根來覺範
撫付の油に花も薰りきて
幸爰に椿さく山

大矢數　第四十

何鍋　　揚線香二寸六分

藥喰や三つあるしを目に戀て　守山
毎年をこゆる山は霜腹　西鶴
大夜着に嚴の肩や重からん　梅朝
道外の役を苔のむす迄　如雲
諫鼓をばそこでうつたり囃したり　一風
何某さうな御座舟の中　心入
金鑄(ツヒ)たれど此長刀に月さして　爲甫
油桶にも通ふ秋風　内喜
文の字の雁金落る錢の穴　執筆
長の旅路の越のしら根に
草鞋の鼻緒ずれより有亂山
麩の糟摧てしたゝりの音
精進の續く所は瀧津川
七日のぼりて小宿を取て
奉公のよい口もがな夕間暮
狄の上氣を今から止みやれ
おのが角鋒(トギ)磔して塵の介
東の片屋に出る月影
大芝居三十丈の山の下
日本橋も懸る行末
花の火に其影うつる難波燒
梅は五つのはした天目
彼岸にも取當つたる持佛堂
月に見ぬ親仁居られたら今
さし笠に伽羅の引下駄あてがうて
是は夢でも冥加恐ろし
邯鄲の裏に抱えし家來ども
のくれ里くれ又簾をくれ
浦島が鯛釣兼てことはりじや
それまでもなし荒き浪風
卯花の庭の垣根がさはく\/
なく事はをけ肝潰す鳥
浮雲よそこへころりと取つめて

下手へ入てあちらこちらに
寝心がどうやら悪ひ夜の月
　身躰きらひは餘所の秋風
喰しほが違へば下る露の玉
　釣瓶鮨には蓋の書付
六月の十八日の吉野山
　一つ咄で通ひ路がない
もし腹の立事あらばぬれの文
　窮る所はあなにじけ
隠房も浮世のあはれ詠やる
　我身の上に懸る黒雲
孝の道足手は虎も悲みて
　遠く遊ばず此野邉の秋
のゝさまの光る所を見せませう
　平家の亂れ初汐の庭
花に酒飲過したる常盤ばら
　山寺うたへ山中の春
清書をしまふて暮の雪なだれ
　食まち兼る風の行末
つくばふて見まひ黨士(トウジ)が中やう
　小分別ある胸前だれを
ゆかばゆけ泪の雨がふらぬ先
　手くだ盡して夫程の首尾
あぢづくになつた所が面白い
　定て此事下ないてすむ
殿作り入札なしにかねの聲
　一本のはしらは舞臺先也
あれや舟が新清水の西の海
　顯出しすみよし勝間
月もしれ木綿ふんどし今ははや
　なんの手もないとつたり相撲
力紙一札二枚露ちりて
　仁王門よりてんかうの皮
花のさく比しも歌の三味線の
　今此内儀は糸櫻さま
紅裏に春の名殘を告られて

霞むそなたや舟は出て行
四段目を語はじめて聞所
其次は餅砂糖ふる山
高嶺より日本一の煙立
からのかしらは靡く持鑓
物大將うけたまはつて此所
五人並にはかま肩衣
稽古囃子太鼓と月とあまつたか
かるい仕出しの丸盆の露
さつとはけ漆紅葉の山見えて
指とゆびとの中や絶なん
壁下地かく年月を送る身の
晝をば何と日傭取共
名譽也寶の鎌が飛で行
入鹿が首は雲の半天
此里を夫より落胴と申也
いはれぬ公事を工んだる科
太郎冠者にがり笑ひに罷立
おのれに性根があるかやい〳〵
目も鼻も何國の浦の水くらげ
宗也が作の藻鹽草白
書物棚月を都に殘されて
二枚の襖に萩と薄と
其上に眞砂の雁や飛すらん
此濱よりも續く大溝
一雨の降て涌たる下駄屋町
今あがります浴衣もてこい
御出入の外にすあいを呼にやる
舟が急がざなに成とまた
これ迄の花は落の難波鶴
長き日の出や何れもの影

延寶九辛酉年卯月吉日
大阪呉服町靑林深江屋
太郎兵衛板

不二は日本第一の名山、眞砂に譬てつきせぬ言の葉の松は枝をならさぬ御此時、弓は袋に矢數の俳諧、我はじめて千六百通せし後、仙臺の三千風、鵬の羽づかひ强く山海を飛越、二千八百すぢの息の根鐵拐に同じ。人倫及ばざるの所也。近年執行もなき作者、世間の聞え計に無用の達者だて、連座には親類初心の輩を集め、日を重ねて卽座の作にもてなし、又は句毎を後日に綴直し、天神の目をぬく事、もつたいなし。人麿の白眼給ふもおそろし。或は獨吟をするにも釋敎の所は旦那寺の長老を賴み、古事ははやらぬ醫者をかたらひ、百韻一卷に年月を費し、あたら櫻木にちりばめ、しらぬ遠國の人に見するといへ共是皆作り物也。夫誹諧は其折を得て、花の夕・雪の朝に替りて、景氣に心をよするこそほいなれ。凉み床に枕を傾け、さし鯖を賣ころより、はや元日の發句をおもひよる人、是誹諧のわづらひ也。殊に頃の座懷紙、放埒の雲をつかひ、四十五句五十句は遊女の噂、歌舞妓芝居の風情、殘る四十句は博奕わざ・喰物等、拔脫・こゝろ行の付かたとて其座に一人も聞えず。我計うなづきて一句〱に講釋、大笑ひより外なし。予誹諧正風初道に入て二十五年、晝夜心をつくし、過つる中春末の九日に夢を覺し侍る。今世界の誹風詞を替品を付、樣々流義有といへども、元ひとつにして更に替る事なし。惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく誹諧の姿を我仕はじめし已來也。世上に隱れもなき事、今又申も愚也。されば銘々の自慢、先達世中雁も鳩も雀も鶴も同じ物に思はるゝ人万一あれば也。そも〱老て二度大矢數四千句をおもひ立日は、延寶八年中夏初の七日、所は生玉の寺內に堂前を定、西は淡路島海は目前の硯、東は葛城雲紙かさなつて山のごとし。北は高津の宮、郭公其日名誉の聲を出す。諸人目覺して聞に、南は難波の大寺晩鐘告て、十二の大蠟燭次第に立のぼれば天も醉り。四本の奉幣颯々の聲をなし、八人の執筆・五人の指合見座すれば、數千人の聽衆、庫裏・方丈・客殿・廊下を轟し、三日懸て已前より花莚毛氈高雄を爰に移す時こそ、今日付木三尺しさつて卽座の筆句を待吟しあぐるといなや、口ひやうしたがはず、仕舞三百韻はまく

りを望まれ、線香三寸より内にしてあやまたず仕すましたりと千秋樂を諷へば、座中よろこびの袖をかへす。是迄なりや万事を捨坊主、世の人ゆるし給へ。此後大矢數のぞみの人あらば此掟を守るべし。諸吟しにして作法すこしももろゝ事なし。我大矢數諸願成就、次日は松門亭、月次の俳諧勤る事、これ全く一力にあらず。

松壽軒
難波西鶴

(卷之五)

大矢數　第四十一

何　客

盛かたや第一のけんは梅の風　幸方
指身がのぼる花の瀧浪　西鶴
鳩尾先瀨ゝのしがらみ春懸て　來山
あて覺ては氷くだかす　園山
浪てくる音ぞ聞えて雨の軒　素山
氣が長いから雲を恨むな　色山
鳴たものもちつとさきに時鳥　風山
はや中なをる餘所の旅人　呑山

第四十二　連何

雀の子千さへ飛に大句數　西付
筆のはやしの續くほど花　西鶴

朝朗曲射の蓬萠出て　信章
ならひに引針さしもしらじな　賀山
二合半我もむかしはけかしたか　賀水
通のはしに付懸の月　西濱
山おろし鹿の出見世を捨て　燕山
霧たつ峯は見がふまえた　澗水

第四十三　何皿

人の鮨や童子が日には花盛　如樂
どうよくな酒紅の海　西鶴
二日寢て三日に春の夢覺て　西雷
灸の奇特胡蝶飛行　鶴與
朝霞見えぬ所も晴にけり　西釣
油斷の內に雲が取る山　風曲
生石は十五とつもる空の月　西關
おさえ竹置板葺の露　扇的

第四十四　垂何

花に明て散や桶木の訴となる　江水
櫻の名殘鯛の尾がしら　西鶴
それ手白かふく春の風油斷して　西治
空ぐ間のなき窓蓋の瀧　得直
雇きり七日のほりし大乘物　可心
月の都は自由調ふ　包高
秋の霜移ひやすき擣米有　西用
さく朝顏の蔓懸の升　豈留

第四十五　何態

和陽時を分て植けりとこし苗　可尋
天せいくだる半夏生の水　西鶴
溜池に一つの小島出現して　西舟
けさ人だかり足沙汰の松　西龍
つら見せに替つた事は初時雨　山鶴
或は臺に花歸り咲　西朝
使者男二たび越る山は月　吉勝
十萬石の代をとつて秋　一倰

第四十六　何燒

杉本左兵衛それさへあるに時鳥　樂竹
楠が智恵はや更衣　西鶴
二重底長持の風薫りきて　西同
野懸の枕引よせて雲　重行
乙女子が懷あけてねん〳〵寢　立花
なづともつきぬかたまりが有　建壽
落て月金の莖に當たり　友知
打ける鍬の下よりも露　生重

第四十七　何中（三字略）

花に盃下戸の目からは大盥　友圓
春山暮し足は摺粉木　西鶴
角落す男鹿の革をたち兼て　西佐
咄し仕懸ては中直る友　松吟
月入はいつの間にやらこちら向　次吟
さし枕の露假寢の空　無心
凪ひくな屛風成とも秋の夜は　爲寸
砧の音か松の吟聲　誧政

第四十八　薄何

包ぬる螢や次火の隔紙　益民
浮草の花十まいの皿　西鶴
遙に岸煎酒の浪や疊むらん　立川
沖には御座舟あと臺所舟　正重
夫はや業あらした殘す松一木　信與
わなゝかくれば横雲を引　一之
夜咄しの肴といへば野邊の月　泉菊
下に置たまはず立てまふ也　重久

第四十九　何目

初聲や天下の外聞時鳥　西鶯
いらぬ火灯す月夜に螢　西鶴
上間屋手廣く澤の水澄て　定俊
七千貫目かけはしの末　西宅

浪がしら日屆つゞきて十三年　西内
けに夫よりも晝めしの跡　鶴廣
次馬も既都を出はなれて　行末
道中の扇風に行雲　鶴夕

第五十　何諦

出ぎらひや夫とはなしに雪の宿　道折
霜夜の鐘をなぶつて計　西鶴
庭鳥やはら立さうに鳴ぬらん　鶴流
遠慮もあらず叩く關の戸　鶴政
其流れ朱印のすはつた清水也　友鶴
茂る柳生のゆるしをつかふて　時次
夏の月どこに捨ても一萬石　西夏
上ゝ諸白きく郭公　西音

第五十一　亢何

詠ればあたまで返す深田哉　茂久
よしや世中蛙の鼻歌　西鶴

春の雨獨機嫌に給醉て　西因
向の助六松風ぞふく　春重
京の樣子聞たい事の時鳥　西祐
爰をせにせよ鯛は薄しほ　西永
明晩はかならず御出月は宵　西伯
則濱に一葉の舟　西晴

第五十二　切何

賑けり莨菪の烟初芝居　元親
ぬがぬか見えぬ梅の花笠　西鶴
鶯茶同じ貌の山越て　木因
一釜で燒く粘の下水　元知
撞出しに浪の白糸亂れたり　頓悦
三盃過た岩が根の床　定方
松獨徒然を月に讓けり　清久
いでや此世に生れてはむし　渡流

第五十三　何癇

力なき花見也けり一升樽　忠次

餅みな明た二月の雪　西鶴
谷深み龍伏野風霞きて　夢遊
爰に梯薄氷をふむ　西玄
火用心きく人感を催せり　西侯
上ゝ分別長の里とて　西嶺
暮の月かう見た所下座には　西弘
おくと計に二の椀の露　西丁

第五十四　何相

すみよしは水邊でなしけふ計　高故
桃の酒すき腹中の浪　西鶴
仙家の松綠の針や立ぬらん　禾刀
時に梢の梠板を撓　鶴仙
あらく吹十本入の風落て　西丈
蔘をはらふ人参の見世　西勝
紙袋それさへ月もかすか也　鶴也
秋まで殘る蚊もたべ越して　西十

第五十五　唐何

請て挑すゑよし浦の詠哉　悪鬼
さくらは楓に檜物屋が島　西鶴
小銷挽は霞に埋れて　一鶴
雞冠（トサカ）に似たる聳の遠山　宜滿
酢味噌でも是から麓の道までは　不卜
ほのかに見ゆる染付の色　幽聲
月に雲香爐の烟立上る　梅聲
秋風おこつて雷がなる　露月

第五十六　何鍋

蔓はふや中にも夕貌の巻と申は　川卯
ことに勝れてむらさき茄子　西鶴
貳百貫取貢が手に渡りきて　鶴親
親から出入大名の息　西空
御風呂に水の心も清かれや　一英
明ほの見れば袖すりの松　西存
曲鞠も今はすたりて夜の月　鶴口

あらし計や小芝居の露　西岸

第五十七　何釘

あかいかと目を開いてや花の枝　元貞
櫻はいきて動く鯛賣　西鶴
朝霞遠山鳥は汁になりて　吟鶯
きのふの入用かけはしの末　柳山
屆きり大工虚空にのぼり行　意計
千里の車墨壺のおと　吟峯
枕の月よごれた夢はさめにけり　西盞
ぶせう者すむ庭のばせを葉　西集

第五十八　何揺

耳の垢も今は化也時鳥　貞賴
殘りを致さう橋の風呂　西鶴
番に付袖の香ひもかさなりて　松鶴
繪筆に向ふ釘貫まつかは　安之
兩人の躍の仕與きはまりては　貞吉

明日の芝居は成た物月　制仍
傘約の振舞の露やう／＼と　軒水
それ秋の霜塩くちて行　重春

第五十九　何橋

聲の數や日本の楊山時鳥　秀綱
六孫王より夕の夏まで　西鶴
ため塗の階のぼる風もなし　西菊
布日の雲を通す一燒　傘之
しろい客薄い雪降おりふしに　西島
草履なほせば踏殘す菊　西定
大喧嘩無念也けり影の月　春鶴
秋しる山よ侍のめし　鶴信

第六十一　何

山公事や繪圖迄もなし富士の雪　西學
鷹場に極る賴朝已來　西鶴
下馬の風あたま勝にや吹ぬらん　一石

けに道せばき一國の雲　古舟
附合の月の飛やう合點して　東雁
ようくゝつたる糸薄なり　鈍句
穴藏にあかりを請し虫の聲　幸也
霧煙つてもすかぬ氷の雨　侑信

第六十一　暮何

弓勢や花にあたつて何千里　淺井
ほし一つ也闇の夜の梅　西鶴
繰出す卦躰の外に霧もなし　西占
本膳に露山澤の水　玄鶴
楫原紙暮に郭で飛螢　一輝
網際よりぬけば玉ちる　不傳
るんか取てあかりを走る空の月　浮水
上座の秋風おめずおくせず　西傾

第六十二　何薹

あやかれよ鶴の一聲時鳥　友吟

茂りの松山口に出次第　西鶴
菱鍋に涼しき瀧の落てきて　卜琴
それ玄翁やかたき岩角　西筧
痃癖所雲起つては烟する　西珍
あらしに騷ぐ西の板つき　一貞
月更て大根おろすけしきあり　幽風
すこし衣にうち疵の血が　西葉

第六十三　霞何

咲ぬ間は六祖隙也米櫻　好山
釋迦の春中菜摘水汲　西鶴
山枒三十年の雪解て　鶴松
鈍な鶯たゝかれて啼　西七
いふ事があはでぞ歸る使ばん　西紅
又藏だての替るあら海　西連
影うつる月日也けりかり屋藪　西雅
から紙障子蔦の葉がくれ　西溪

第六十四　何　一字露顯

須彌山や彌介が作の櫻花　長家
御太夫なり金春の雲　西鶴
北へ行黒裝束の鴈鳴て　吟夕
汀の蛙進出たり　重叶
月は今四本ばしらのまつ先に　久重
そこで秋風凌ぐ行燈　宗清
添番も霧一群を心懸　旦保
實入の田面すかぬ世中　宗春

第六十五　何甲

雲を帶星を小紋や更衣　西隆
島の虹たつ卯花の浪　西鶴
谷風は息の通路吹とぢて　西通
痃癖もとの御手をとゞめん　一舟
年日とぞ月人男罷出　爲勝
都合六番なく鹿の介　友三
大踊座中殘らず入亂れ　西好
金銀は露紅葉は朱也　西水

第六十六　何揚

近江路や木曾殿も召す夏羽織　重政
駒のかしらも見えぬ編笠　西鶴
巣籠をおのがつれふく里暮て　宗實
泊りを急ぐ碁の作り物　空言
不斷唯隙で送りて候へと　良盛
名所とやらは終に存ぜず　良職
月に雲三句のはなれかく計　良深
秋風の後つゝくり普請　良專

第六十七　附何

一聲に章がさしたし時鳥　冬木
觀世左近の橋の陰　西鶴
軒口にかれたる木屋が夏懸て　道音
大斤雨も動く濱風　和武
岩疊む浪に音してふとり鳧　一砂

殊に難所の道は苦になる　友斎
月に雲追付降と心得よ　友之
洗濯衣うつ事もなし　友定

第六十八　何土

金精（サビ）鮎や松浦五郎が九寸五分　松笠
鰯よせくる宇和島の秋　西鶴
月は水重石の下に浪立て　西流
大雨風にこけらちる露　清長
けさの雲釿の先よりもうのぼり　久友
吉日撰ぶ山陰の庵　惠吟
手習ひにつかはす峯の松の介　水吟
替つたふしを引出して琴　貞吟

第六十九　長何

天乙女七夕祭けなりいか　静波
こがねの茄子行水の秋　西鶴
御召舟襖の引手雁落て　直成
火打袋に霧烟る山　西政
臺所一つ月夜にぬかれたり　西守
ひたい際たて久七が夢　西三
世中はこんな風情の人形也　西遊
ちゝ香時分おもしろの京　西時

第七十　何路

坊主麦や爰を愚僧に任せよとて　園山
冷汁うごく佛法の書　西鶴
眠蔵は朝寝を立てほがらかに　西淵
懸てはかへる片口の浪　西舌
巻轆轤蘆邊をさして渡りけり　西帆
地はなしならぬ羽はへた舟　西竹
月見なんど古い咄に蘿蔘　西鐵
一座の秋よ暑たゝくな　西育

第七十一　何車

鶴のはねや矢数幾千代若緑　愚計

我一力の外の青柳　西鶴
御思案をかりよる岸の氷消て　正廣
物に懸りと見ゆる浦舟　心月
沖の石奥齒の角をすつて行　西狄
人こそしらね替つた料理　雲淡
入月にあつち物宿おとづれて　心水
野邊はしゆちんの縫つめの色　西見

第七十二　何酢

飛だ梅天下無双や御神木　野尻
其次に松の花の早業　西鶴
薄鍋に朝の雪は汁と成て　西和
野邊はみどりの錄靑がふく　久之
張貫の山やあらしの通ふらん　太之
軒は甲の立物の雲　勝犬
奔走子が光もつよき夏の月　雪女
夕の螢にじらしもせぬ　惠仙

第七十三　何染

くゝ立のなぞ〳〵なあに京の町　吟夏
四方しら壁軒の鶯　西鶴
惣堀の見つけの石の雪消て　行廣
大やうにふく御當代の風　重勝
雲介も先から先に喰物あり　忠義
一里塚にておろしたる月　富永
それか山藥研の谷も色づきて　居林
刀のみねに露の玉ちる　爾云

第七十四　何役

句數の梅園に文臺さかん也　西狽
萬事は御免左座の花　西鶴
薄霞息子に懸る山見えて　西定
寒い目しらぬ春風の音　山虎
氷消て世におり湯桶あればこそ　一虎
浪舊苔の髭の喫みを　古悅
泊り舟月によらなん鰕ざこ汁　良虎

是はいはれぬ鴫のはねかき　枕友

第七十五　何俵

塩ふるや空に知られぬ櫻鯛　如扶
常は豆腐で山里の春　西鶴
ゆるぎ行齒莖の嶺や霞らん　西壽
思はぬ怪我を雁歸る也　一章
海の面かやうの天氣にならふとは　西尹
一日に見する二千里の月　西介
大座敷障子明れば風の秋　言可
亂れて霧が酒事になる　西敏

第七十六　平何

餘所にのみ見てや居られぬ花に樽　葉吟
ぬけ鞘持ふ鑓梅の陰　西鶴
仕舞店賣手鶯聲立て　西以
山里いかで肩入奉公　友吟
嶺の月六人まはして行程に　石吟
二十四時は霧雲が飛　梅鬼
きのふけふ秋風起つて候へば　松吟
點をおろして稲葉色づく　正直

第七十七　何車

文臺や四千の矢先渡る雁　道入
二つ物懸雲霧の海　西鶴
既重市尾花の浪に打よせて　一西
月薄ふては光る油火　順流
秋の雨淋しい時は歌書にても　一以
織の德利風さはぐ也　一計
我聲はさほどに高うあるまいに　友夢
あはせすましてかせ懸てひく　重利

第七十八　何付

根のしれぬおしだまりもの時鳥　長治
十人口はすきの茂り木　西鶴
苔淸水小家府ながらや濁すらん　西可

一鋸に薄屑亂るゝ　行俊
錐揉の先より風はくゞりきて　口雀
はや雲抓む天狗頼母子　井蛙
月は山影身に添ふてまもるべし　西怡
道中無事に七日目の露　盲龜

第七十九　何　三字中略

生駒山鐙ふんばれ時鳥　顯意
卯花は浪渡邊の綱　西鶴
紙幟五日の風も靜にて　西我
入組普請里の土くれ　治重
はや夕足手あらへば鐘の聲　遠帆
まだ行先は長旅の月　西歩
さやの上七尺三寸露散て　似水
踊は〳〵馬鹿のより合　如山

第八十　獨何

爲朝もこれや古ふるひ大矢數　風鬼

角のはえたる島の涼風　西鶴
麥めしのさめて藻屑の烟絶て　未成
七つさがりの一群の松　百鶴
はしの子の懸初たる夕時雨　鶴風
御番の冬のさし口の空　道喜
爰に鍛治月は劍の影さえて　夕林
よごれし袖にうつる稻妻　今水

第八十一　卷何

筆とめて市之ら詠ん難波の花　之良
民の竈は爐の名殘今　西鶴
店引る德利の中や酌ぬらん　鶴翅
天地をかくす雲の一群　西眞
頓て雨風に亂るゝ時代きれ　水邊
鏡包の空はれて行　西呼
旅用意月をひそかに懷へ　碎石
替せか響く夕暮の秋　友聲

第八十二　何皷

巢籠や千年の緣手に滿り　一扇
　鶯とまれば竹の歌口　西鶴
一文の張貫の山雪消て　西吹
　既春風ふき矢ふく也　如礫
かたゝの目の中霞空の月　入月
　浮木の龜が出世する雲　如石
自今以後紫の波たゝみ懸　重顯
　硯の海のうはまへをとる　西鐘

第八十三　空何

やどりけり鼾にちらす寢入花　耕翁
　春風引こむ是引の山　西鶴
朝霞下機立る窓に入て　好竹
　前垂たすき鶯の歌　宗入
雪汁やくらいこぼしてなく蛙　心計
　投渡しはし載て通る　木端
大溝の底は川浪水に月　一毛
　あやくたとなる草のうらがれ　西忠

第八十四　大何

雹餅涅槃に煎せ給ひけり　西任
　綠の御花は茶袋　西鶴
出替の人置山を見渡して　西北
　廣間の番に月ぞ更行　直房
眞夜中や時を仕懸し糸薄　可琳
　一二九十となくきりゞす　正直
馬のきりあかる所の小莚に　月永
　問屋つきして風の音信　久永

第八十五　何蓼

爰にしけ盛の花に人の鮨　春刻
　石臼かさねて若躑躅さく　西鶴
雲霞殘らず運ぶ店替に　西下
　外聞づくの風の夕暮　淺流
御藥が迚もまはらば乘物で　一法

使の作介いて申さうは　無安
此一義小宿に懸る水の月　心安
舟底の露荷役して取　西詠

第八十六　賈何

錢箱は文を好める木也けり　意計
節季の算用春しらせ鳥　西鶴
大手代氣力慥に雪解て　春谷
朝の光あたまのはげ口　道術
雲凝て堅い所を御覽ぜよ　西猿
瀧のしら波布きせの山　西扇
砂の岑木乃伊に月の照添て　西鳩
麝香の都晴て行霧　安永

第八十七　宮何

月よ花よ雀は千句鶴は四千　虎友
手にとられぬは早蕨の山　西鶴
國の春庄屋代官詠きて　西暉
雪間を分る公事はすゞめに　唯正
仕合は肩と云也駕籠の者　宗孟
あれも世渡る馬のはらあて　種好
夕の湯あしたの水の川越て　鶴山
剃刀あはせばひゞく松の葉　賢入

第八十八　何子

飛鳴は正風躰か鳥の聲　光重
拙者がおもふは卯花を花　西鶴
月は夏いふて見よなら此節に　西顯
幸手形の請合に雲　長久
羽衣はしきせの外に定られ　西連
太夫本とて松の一村　西飛
名の高き塒の鷺を呼くだし　見山
爰に勅命おせぬ所か　鶴正

第八十九　何經

洞庭の月とていづれ詩曰　重勝

文字がはたらく平砂の落雁　西鶴
はしら立ふとき梢の秋見えて　正賢
深山のやうな大男なり　松風
どなたやら御駕籠のまはり雲の袖　一扇
けふ初知入を時雨ふり行　西千
木葉まで役に懸りて松の陰　西鳥
朝日まつ間の染物の色　正重

第九十　何壺

花は雪峰のしらくもやかづらき山　西宮
久米路の春日影うらの苔　西鶴
ぬるむ水去子細あつて此所に　一貫
えしれぬ鳥を讀殘す聲　砕石
分入れば鼻·毛茂りて谷深し　西光
あはうつかいの跡の薄雲　西窓
見せ物の熊の月の輪光晴て　宜次
及ばぬ秋に掌の中　西求

第九十一　外何

浪の鱗海にも花や櫻鯛　正利
春日をあらふまな板が迫門　西鶴
曳すつる雲の破れに結を付て　礒風
足手は虎の聲遊なり　調山
わるう青つ竹の林を分いれば　西竹
七人の外つきあひがない　一漣
御吟味の百首の歌に月をのせて　松櫂
硯の埃はらふ秋かぜ　貞政

第九十二　何鴟

誹諧や上見ぬ鷲の大矢數　福岡
口來の自慢是までの夏　西鶴
初嵐亭の忠蓋おろさせて　正察
番匠かねや働ちる糸　西嵐
三つ五器を重る山の秋淋し　西交
日ふる間にうつる夕雲　愚渕
唐網にあますな波さゞ浪の月　西同

錢出しあふて町中の舟　西筵

第九十三　何 橋

青竹もみよをわがむる聲也　可守
千年の落葉常盤木の山　西鶴
流れて瀧巻に懸れる布はえて　西延
世帶を守る水の行末　一快
岩の介然も獨も獨から　西涌
六番うちに續く者なし　西志
空の月このみの星は何時も　西察
極小判の桐の葉の風　西感

第九十四　何 筒

吸がらは明行空の螢哉　松友
一番鳥やたちばなの宿　西鶴
右近左近日夜の出仕隙もなし　榮吟
今度若殿御入部の禮　一虎
何事も訴訟のあらば申させ給へ　左悅

町中殘らず銀山の月　重富
まな板をなをせば幸雁鳴て　正友
律のしらべの樂がはじまる　勝春

第九十五　何 荷

もめん糸夜るの車に月も哉　一鷗
野は我物にはた織の虫　西鶴
女郎花山より送る窓によりて　安井
手紙の露は輕少ながら　德齋
敷臺にさし懸つたる一時雨　文好
十面作る雲のいきほひ　樂之
聊も出來分限や龍の介　亂口
新ひらきして淵は瀬となる　悅也

第九十六　松 何

酒ばやしそれが戀しき時鳥　幸則
餅のなる木をさがす夏山　西鶴
大兒が淋しき暮の雨落て　一岑

逢に隔つ親里の雲　西好
枕箱跡にはせざる月の風　西李
剃刀はさみ鬢水の露　山圓
それかとよ霧のあしたの藥屋入　半雲
銘ゝ辨當槇の葉にもる　西石

第九十七　何袖

鐘木もや昔しを思ふ花盛　重時
鵆をなかせし事もはや春　西鶴
御領分ない鳥狩に雪暮て　吟貞
吸筒燒めしあるじならまし　夢言
挑灯はよう氣がついた月闇し　長島
高ひくのある山陰の露　正空
上塗に所まだらの秋の霜　又也
まだ枝に見る唐がらし味噌　三良

第九十八　抱何

姥櫻いたらぬ山のおくもなし　良順
又或時は舟に藤浪　西鶴
行春は道中盡し詠きて　吟故
噺しのたねを拾ふたが徳　西鬮
瓢簞からよもや小判の出る物か　西浦
身躰は親仁利口なる秋　西九
はたらかし月に目のさや二本ざし　西珠
くつともいはせぬ腹の虫の音　可然

第九十九　何靈

周公も手をやかざゝん花の風　茂壽
孔子嗅いぞ酒過て春　西鶴
一代に終に笑はぬ山に來て　可政
判はんじては半吉の雲　亭松
てつきりとふらすが證據初時雨　三順
ぬすむ入日を出さうなら今　西東
其外にながな噺しの月夜に釜　吉正
親仁の時のかたすみの露　瀧鯉

第百　何帳

花軍名のり懸てや一季うち　吉清
しのびの緒をきる青柳の糸　西鶴
砂土圭氷の響きあらはれて　幸孝
工夫のあらし瀬々の夕浪　元竹
十五年此已前にも捨小舟　常知
岩が根枕たのもしのかね　立元
諸親類の中にも山から月を出す　疎吟
勝手にひかえて鴈は吸物　白紙

第百一　何市

古雪駄餘波や牛の花車　窓吟子
いはれぬ始末春は千金　西鶴
大名は大名でたつ霞にて　楠舟
根からとらるゝあとさきの山　柳水
養子より外には松もなかりけり　ノ舟
利發のかたまり雪の曙　義瓢
あの月はどこへ出しても寒て行　備瓢

雲にかけはし撞出しの鐘　西窓

第百二　新何

射たりや與市それは礒也大矢數　榮久
連俳の直中波の卯ノ花　西鶴
郭公時節のよいおり生れ出て　吉親
石(コク)で二十目杉ばえの山　野村
元來は埒つもつて塵劫記　勝時
汝不思議の人間一人　風間
大釜へ入たか月の影もなし　西力
喰て寝て起て世中の露　西目

第百三　何瓦

あの達者千句の鬼や大矢數　西森
狼に口あかす夏山　西鶴
喰したふ餅のなる木も茂いきて　南遅
爰かくれ里庭の埋れ井　西文
月に雲岩根つたひの捜(サグリ)足　西桃

後のが過て色になる蔦　西記
ことば數喧嘩に霧の降て行　鶴玄
鴈は六百二百の違ひ　西橋

第百四　何帳

管城やおさむる手には大矢數　難車
初郭公雲紙の裏　西鶴
見し梠も塗長持に碎かれて　双鶴
遊び所の宿はかはらぬ　直良
五郎兵衛殿源左門殿仁左門殿　山是
影で季もたす月行司衆　重致
印判に貌の殘る文字の鳥　重旨
京で染なす暮の稲妻　安頼

第百五　何盃

誰か跡四千に止（トヾマル）にあり大矢數　坂上
我夏しらぬ古文眞寶　西鶴
遊べ舟ちいさき窓の内を出て　曙舟
波立まさる雛の乘物　如云
雛長持へ日の跡や慕ふらん　一榮
月は楮に殘る職人　不齋
口すぎにあまるほどみる下紅葉　一匠
菲は勝にして渡る秋風　如雲

第百六　諸何

及もなし息の根とめる大矢數　荷平
雲つかひ出す仙術の岑　西鶴
生捕の龍くれなゐの舌をまきて　休玄
入日をあらふ鬼の餡桶　又六
一時雨かくれ蓑又笠の紙　幽夕
難義の道中はじめ也けり　予酒
月になけ鳥がはゝもなれこまひ　西百
秋めづらしき馬市の角（ツノ）　西楷

第百七　何門

鬼神も下馬鶴の羽音ぞ大矢數　西六

銀の範ふる掟の夏山　西鶴
御川木中綱茂る作り道　宗旦
又公は舟臣は水海　西印
魚屋鳥屋莵も浪を走也　西眼
遂に蘆火食たいて待　西燕
月は笠獨でも泊るとまらんせ　西鳩
國は治る一天の秋　初子

延寶辛酉九年卯月吉日

大坂呉服町書林
深江屋　太郎兵衛板

俳諧
白根嶽（しらねだけ）

調實

御慈悲重なる御代とかや。近年は吾国の御巣鷹山も止りて、樵の鼻うた・牧の口笛、山里の人のこゝろも長閑くなりて、いにし經因の聖の御狩場、民腹つゞみをうちてたのしみけるためし、今此甲斐の白根が嵩おろし、しづかに、黄鸝の聲耳に緩し。然るに田夫野子が俳諧のその水上や、御江戸の調和先生、壺瓢の滴りを市川に汲て、かく綴ることになりぬ。

楽也黄鳥農圃七十里

一瀬氏調賓自序

貞享乙丑季初陽に

俳諧白根嶽

首歳

水‐煙咲ム釣瓶男春を諷たり　丁我

霞見て一‐風清リ日の奏　亘月

雪に明ぬ千里の玉の青柴御園　露沾

東‐坡の高き事天津春知ん　蘭風

年さめて酔を氷筋の様かな　藤匂子

暮年数日を経て髭を剃ん

寒菊の寝神農の齒朶廿し　調和

餅を積ンで書林に齒朶の窓明つ　露言

はやせ万歳八橋の葵めでたきを　松前者 立志

寐覚有リ椿の開ル音百里　言水

世の分野や俵負ふ宵の年百里　才麿

元日の黄昏月をおもひける　子英

春の晴眉の戦クを酬程也　雲州 鳳水

屠蘇の宴安積の国人は誇けり　奥州 等躬

門午女仙少(ホノ)見き千原松　羽州 清風
代(ヨナガシ)日ノ鳥モ繁(シダリ)尾　同 水軒
遣羽子や西風ッ東風ッ袖返し　市川 勇石
甲陽山松が枝久し鑑餅　調賓

梅

甲斐の梅北枝發ん不二颪　甲府 調已

猫妻戀

爪硎や四十女の如虎の戀　同 吉正
八聲變豹は物かは猫の妻　同 松聲

芹

根芹摘人くらへとや鴨の糞　宗也

柳

楡ノ下ノ糸(ホソイト)ハ如レ絆ガ　甲府 吉正

殘雪

殘雪や山は駿の根駒ガ嵩　同 不明

獨活

獨活尋や鹿の戀道忘角　調賓

春雨

いざ聴春雨匂ふ花寄リ　市 調合

蟾

雨蛙沓に聲なし沙路　羽生 調鶴

白魚

白魚の吾妻に氷魚の名ぞ曇ル　調序

初雷

けしきおかし初雷の女御の間　材種

寒食

寒食や貧家の愁むかふ髄　甲府 一笑

歸雁

雁去ヌその跡淋し百叺の田　調賓

櫻海苔　蚶潟遊輿

蚶潟や櫻摘べくさゞれ海苔　羽州庄内 調用

桃節

桃唄ふ觴舟の湊かな　可躍
桃の日の毘沙門下戸の姿哉　直方

眉慈

宗祇は髭を好にあらず、予又香を好にあらず

髭に香の胡葱生り形草　山夕

花

花漸

山や花けふ白魚のすかれ磯　幽山

心有冶童
心ある僧

花貰ふ若衆や庵ンに硯かる　調柳

僕に酌とつて寝たるか花は花おかし　調勇

晩鐘を耳無山の花いかに　風和

明日をそし花物がたり折ル心　調滴

酒代に入テ蓄まつらん芳野雨　宇都宮 卜也

物干女待花の世をいく恨　羽州最上 未覺

舟綿や花の湊の群集嶋　甲府 義忠

雨に笠花を薄ク愛テき人ならん　同 女人 採菫

散花に色勃如たり躩如たり　同所 未發

昏惜む杪の毬は殘花かな　甲州市川 忠之

枕倡引て朝たとりや花上戸　調實

櫻

まつ心を

櫻人氣を濯らん不盡の雪　軒松

誰目にも十手の嵩や初櫻　甲府 安貞

山路暮て伽羅は寐覺の櫻哉　下妻 和兮

深窓に育姫かをそ櫻　市川 勇石

瘦山に濕補用ん遲櫻　調實

海棠

思老母

海棠よ母老ぬらん花さきぬ　風水

小粉團

小粉團や夜の便の柴編戸　調賦子

永日

春の日や半日は花半日は　調實

露蜂房

露蜂房や垣生の小屋の滴丁東　甲府 柳陰堂

露蜂房や三百餘穴阿房殿　市川 無長

呼子鳥

山澤に吟ふ昏か呼子鳥　調實

俳諧白根嶽

首夏

櫻醉醒ぬに着たる袷かな　露言

杜宇をそし我髮結ふて袷着て　和时

雲薄し不二淺間も更衣　市川 忠之

更衣さくらは歸ル葛籠かな　調實

杜若

道の邊や西行うらむ杜若　不卜

花柚

花柚酒卯月四日を節句哉　暮船

郭公

杜宇なくは寐余る夜なるべし　直方

ほとゝぎす拔し袷の綿臭し　中河

郭公まつらん隙駟をぞからん　自言

槇の戸や點滴實ル郭公　正德

杜鵑樵て捨斧朽し市隱哉　尹雪

楠の若葉岩橋まつか郭公　遊水

宵舟下戸に歸らん郭公　風車

淋雨窓吾ぞ初音の杜宇　鳥躍

寂蓮の槇の葉山ぞ郭公　河岸 風孤

酒充テ枕愁ッほとゝぎす　甲府 立交

鞨胡沙は抽スと名乘レ杜宇　甲府 吉正

雨の日は襟笠かさん杜宇　市川 忠之

杜鵑雨夜を聲の月夜かな　調實

麥花

秋にいつ麥の花折ル江戸童　羽生 調鶴

虷

人には見せぬ所を蚊屋の虷哉　村種

夜鷹女の篠卷さやく虷かな　調之

窓闇し一點の山螢馬の骨　甲府 一笑

木兎の朶葉も闇し鳴虷　市川 無長

蝪來い河原が暮の虷狩　調實

蚊

蚊を凉む薫りに安し風呂心　調欠

熱苦鳥天明たゝば蚊屋作らん　羽州鶴田 不玉

初茄

山沸し櫻にならば初茄子　調共

筍

筍ハ東坡ガ繪筆　甲府 立庭

罌子花

罌ハ被ク奈良曝　同 調巳

端午

笹葉繭下女が枝折の粽かな　調實

五月雨

龍宮や檐の風鈴五月雨　甲府 義忠

田植

雨蟆ハ早苗女ヌ　調實

蛞蝓

オKにノへたりや蛞蝓　甲府 安貞

移

百合朽てながめや杵の花賒　青嵐

蟬

林下讀書

螢とならん朽木の下の蟬とならん　素堂

蟬時雨寐顔を洗ふ手水かな　市川 忠之

不二詣

不盡登田子にうつすや小人鳴　甲府 吉通

短月

顏淵が命は長し夏月夜　調實

瓜守

野狐の聲瓜の丸屋に友寐せり　臺河岸 風話

海凝草

瀧おとし挟走せなと心太　甲州 一笑

蚕盧

紹鴎の夕顔黒くおのづから也　泉白

陵霄花

陵霄のながめ二月の花何ゾ　等躬

鮎

焼鮎ハ干レ石漱　甲府 吉通

麥複

鶴の門の葎や麥複　甲府 柳陰堂

蠅

黒水を雨すべきかは硯の蠅　甲府十二歳 好文子

蚕

蟻ハ夢路ノ飛脚　甲府 吉通

白雨

白雨や平沙に漁夫が詠有　晩水

涑雨ッ日菅笠一つ二人行　調賓

蓮

蓮ハ魚兒ノ藕笠　甲府 五郎

蓮ノ蕾ハ白シラ絲ノ臍　同 調聲

暑天

泥暑ノ蚓紋レス卍ヲ　甲府 同

炎天の一日を吾が五百生　調賓

南天花

蜉蝣もろき相南天の落花哉　長雅

夏癯

夏癯や面愧しき胸廲　甲府 吉正

夏痩や目ばかきろ〱川蜻蛉　同 吉通

雑夏

旅行のころ

夏富士や澳津入江の花の浪　和松

六月ハ玄ー根ガ嶽　調賓

俳諧白根嶽

立秋

身に入や深川の西瓜なりもならずも　立志

今朝の秋身寒ひすらん女島　甲府 義忠

ヤ肥たりむかふ手水に今朝の秋　調賓

秋扇

秋扇法師の刀巧かな　同

七夕

雷雨に

雷墨の硯濁すな天河　山夕

星饗梶の葉葺ん雅樂亭　居文

此集の成就せん事を願て

いつ星にかさん一部の綴書　調實

一葉

柏木も一葉ちりけり昏の聲　甲府 政直

于蘭盆

石和川にて

流し火や鵜師河原の魄奠　調實

露

露ふかし烏丸通り共先は　同

槿

虰鳴く槿花の笑ふ世中や　調鶴

蕣やむかし渡りの小人笠　甲府 松聲

木槿

鳥逃ぬ黐(モチ)に花さす垣木槿　羽州 清風

芭蕉

尺なしや詐(イツ)惑(ワレ)ル女芭蕉布　甲府 好信

萩

秋の野の萩の錦を古法眼　甲府 安貞

虫

蠻妬し己が貨をむし揞(撰カ)　同 立庭

蟻塚や虫の胴窓鳥部山　同 米發

蜻蛉

夕日晴て蜻蛉釣らん淤　自言

鶉

鶉ふんで艸刈鎌を逃しけん　藤匂子

茶一ぷく鶉なく也朝の原　調實

芙蓉

去年栗し傷さくか玉芙蓉　甲府 松聲

桔梗

桔梗の傾けるつや〱霜の老思ふ　藍水

初蕎麥

槿花日に逢り霜に哀や初眞蕎麥　雲梯

新糟

早粕に茄子の下枝時雨しや　下毛 和竹

雁

雁ぞ鳴櫻さくらん常盤國　調宇

賓雁睡ル國の羽翼や文と俳　松且

月

長明は鳴門を知らじ秋の月　子英

玉垣の雀癯けり陰リ月　一居

甲斐が根や月にもみしか壺歩判　甲府 末哲

名月

今宵ぞ月子都が俤千里とは　調賦子

里芋の昇殿雲井の今宵赦されけん　下妻 和明

月照て今宵晝食心かな　調實

菌

誰ならん旅亭に寥クたつ菌　青且鵯

松茸を見て雪信が筆捨ん　羽州酒田 不玉

石耳(茸カ)や伏犧の御代の羅紗合羽　甲府 義忠

紅茸や蟻姫宮の口傘　同 随柳

永濕や木枕狩ん里茸　同 吉通

紅葉 付草色

島梧(アラニヨロリ)紅葉が中の夕かな　調管子

道芝や土龍の山の薄紅葉　甲府 未發

貞木や色に引るゝ化かづら　同 安貞

等類か秋の山河錦の浦　調實

鹿

萩に寄ル鹿や戀慕の命乞　甲州市川 勇石

菊

草庵の菊貞女の空燒哉　都水

菊の姫隱家もなし山の市　甲府 五郎

鳳凰盃從に準擬ス菊車　同 柳陰堂

十日菊

女房に酒を乞

さすが素良十日の菊や恨みなん　不角

後名月

月に大豆を刈明なば常の男哉　盲月

秋閑

秋は夕を男は泣ぬ物なればこそ　才麿

穐何ゾ軒に背て書に睡ル　海士子

秋なる哉羅門黒く松凄ク　青布

輪かけかねかゝる嶺も秋なりけり　甲府 吉通

道灌山鈴の穗に出ん秋の暮　宇都宮 一露

其巳前酒やなかりし秋の暮　調實

蒲萄

甲斐が根や嵐も熟ス玉蒲萄　同

梨

夜晝や須彌盆廻る輪切梨　甲府 義忠

雜穩

仙女が池秋陽春ク玉藻かな　甲府 調巳

白根が秋甲斐の眺や岐陽山　同

俳諧白根嶽

首冬

今朝松獨置去りつらん龍田姫　盲月

小春菌貫之眠ル木陰かな　軒松

神揃旅の心を歌祭文　甲府 安貞

今朝の冬云事もやは今朝の冬　野州部屋 意悦

棹實冬の初花手折かと　調實

時雨

清水門の霧は太クても細し　朝水

淺茅庵時雨泪を若くせり　心水

豹餓テ獵師綯ナフふ霧かな　甲府 調巳

蕎麥切の給仕ぞ通ふ村霧　同 一笑

荒屋や鼠の尿小夜時雨　同 吉正

歸花

花うれし鬧冶童の歸咲　踏聽

落葉

山守が咎を擔ス落葉かな　調實

初氷

手水とぢぬ梅水仙を忍摺　沾葉

寒菊

銀雨呂寒菊の香に義婦恥ん　甲府 立庭

火燵

夜ル〳〵の火燵は美女の情哉　言水

後朝の夢に袖かす火燵哉　調柳

火燵して子孫を愛ス隱居哉　調實

腮扣き嵐の山や重夜衣　甲府 未發

凩

冬帋帳又の寢覺を凩か　青楓子

冬天

冬ー天猫ノ眼卯（マロシ）　甲府 調已

夜興引

夜興明て燒めし手折ル櫻哉　奥州 等躬

暖鳥

祖父が身に添臥孫歟暖鳥　栗橋 調幽

炭

花火船昨日は見しか炭薪　遊水

葱

當世の風味白根が嵩を葱哉　市川 釣雲子

初鯨

水店や淸流漲ル初くじら　甲州 好信

雪

室破レリ蘇鉄答ふる雪吹暮　海士子

音信をいつ圖法師の雪遠し　調賦子

面白し藪の小川に雪の橋　工呻

忘れんとすれど沓に埋し雪ぞ鳴ク　粟塒

咄更て我歸ル雪の黑きかな　立擧

琴燒ん斗酒は昨夜の雪に覺　甲府 立庭

閒鍋や夜雪先知ル火吹竹　同 一笑

雪見哉奇峰は凸（コト）凹（チ）松の聲　同 卿陰堂

獵師情有や雪に兎は軒を借ル　同 梅庚

騎棄き竹馬は化して雪の杖　同 立交

禮レル雪ニ鞠ー躬ノ竹　五郎

雪氣色錢や降らん鴻の池　義忠

天瓢私なし酒降て雪を興ス　安貞

千賀の浦うつすや雪の釣持籠　同

我すむ方の朝げしきは

雪の嶽手に結びけり漱水　調賓

師走月

罔（ウゲ）雨（ボン）のちよこ〳〵早し冬月夜　立志

鰒

此五ッ父母にうけたり鰒嫌ひ　甲府 未哲

藥喰

酒塩や犬皮にかゝる藥喰　甲府 安貞

寒水

寒桶の搔や逆矛淡路嶋　同 好信

煤拂

唐破風の煤掃にくし化粧嶋　同 義忠

年内立春

年の内に頭巾明けり日向山　調實

破魔矢賣

惣領の初聲聞や破魔矢賣　調味

歳暮

凶ハ嶺クニ明（アス）ノ歳玉ーヲ　調實

市川に來て

雪を雪と見て甲城の外（ト）に艷し　調和
鍬の余力に挑グ寒月　調實
訊ぬ夜ル獨棊。星を蒔たらん　仝
鼠ちよろ〳〵我を戯（ナブル）歟　調和
木がくれの後架は甍を盜む也　仝
團扇を笠に雨二ッ三ッ　調實
書に屈ス氣を蜩に洗けり　和
人孳の長ー生を知レ　實
大名の見る月東シにも入らず　和
川鯊（ハゼ）一つ釣れば慰む　實
我爲の温ユ泉なし醫は誤レル　和
誰此おもひ母に耳せん　實
僞（ダマサレ）て來て中宿に居ヲル三日　和
刀に凋む戀の肝玉　實
京男江戸の女には戻れる　和
時雨の巷裾土を帚ク　實
花に遊ぶ日を落葉に醒たらん　和
姪（ウワケ）四十の年なをる死ぬ　仝
釋傘の衣にかゆる五百兩　實
法力化女の美（カホヨキ）に惚（ホレ）　仝
今朝見れば牡丹一房抱テ雍る　和
酒になる予いつの皇帝　仝

名月の二階に登ル遙也　實

蜻蛉の來て蠟燭を消ス　仝

世間の氣を減(ヘラ)すもの秋の露　和

子を見て人に奬喩はなし　仝

客轉扇を開たるけしき　實

自讃の狂哥態めくにや　仝

松嶋の蟹を干物にして歸ル　和

日比を約(チギル)圉人(マゴ)に錢遣(クレ)　仝

謀臣は謀國の土に入らん事　實

美盃を棄て世を諷止ム　仝

盲目の息(ムスコ)かならず盲目なし　和

學一山の長と也けり　仝

日光の花は朝鮮迄句ふ　實

樂器は松の呂に習ひけん　仝

白根嶽の集をなすとは序にいへり。句共の意味は、各内に含り。毫を捻(チヂ)て何をか拵ん。唯、調實身を邊土に置て、心を風月の都(ト)に遊ばしむる好き人也。

空原舍

風水書

通說

俳諧に於て「正風」と云へば、芭蕉が初めて提唱して以來、弘められ傳へられて今日に到る所の「芭蕉風の俳諧」を指すものと考へられ、其は藝術批評的に見ても此語として當を得たものではあるが、抑も「正風」といふ語は、芭蕉より百數十年前に守武が「されども正風、誰の耳にも入まじきに」と云つてゐるのである。此事は前卷の「通說」に一言した。守武や宗鑑の流を汲んで、「俳諧」といふ語を其本義たる「滑稽」といふ意味に於てはたらかしてゐる貞德の一門、即ち貞門の人々が俳諧の正系、本格、嫡流といふ如き意味で、又自ら正風を以て任じてゐた事は、その當時新に興起したる自由思想派たる宗因の一門、即ち談林派に對して、如何に之を異端邪宗視したかに依ても解る。之も前卷に委しい。所が、その邪宗門たるべき談林派が、自ら「正風」の語を用ひてゐる事は注意すべきである。本卷に收めた所の「大坂獨吟集」中、鶴永作の百韵の評に、「是こそ誹諧の正風とおぼゆるは……」とある。又、松意の「談林十百韵」の序に「凡そ市中に多年よしと思へるふるくさきものと、今又あたらし過て、一句のたゝざる二の惡を見れば、水火の二河たり、中に四寸の白道あり、此白道のあかりを走らんとのみ立る所談林の法也」と云ひ、其跋に「今世間の俳諧より、此方をば飛體など號て、わけなき物のやうに思ふ、大きなるあやまり也……此連衆など及ばずながら守武宗鑑の旨趣を守らんと欲す、故に是を本體と思ふ、世上の俳諧、その付道具はふるびにたれど、守武宗鑑以後の異體なれば、號て末體といふ」と論じてゐる。世間の俳諧即ち貞門の人達は談林を傍流のやうに云ふが、談林こそ本體、即ち正風であつて、貞門は末體だといふ說である。斯樣に、貞門と談林とが拮抗してゐる時に、芭蕉の新しい俳風が生

長して來た。芭蕉一門の句は、芭蕉風、卽ち「蕉風」と呼ばれてゐたものであらうが、芭蕉等は己れの奉ずる所を以て確に俳諧の「正風」だと信じたのである。而して此最後のものこそ、本當に正しきものであつたとは何故であるか、其を爰で批判したいと思ふのである。

談林一派の俳諧は、外觀を以てすれば、たゞ〳〵自由奔放を主義とし、傳統に對する反抗に過ぎぬやうにも見られるが、その自由奔放とは一つの生命力の飛躍であつて、在來の形式を破壞しないではゐられぬ所に、新しい表現の衝動が內在してゐるのだと、斯う內察し得なくもないのである。さればこそ、芭蕉とても亦、此談林の影響を受けた事は多く、或る意味では談林の畑から芽ぐんだものとも云はれるのである。松意は「神代の歌、いまだ文字の數定まらざるとあるは皆俳諧なり」と斷言してゐる。此は面白い見方であつて、俳諧を本質的に見れば、自由詩卽ち俳諧だと云ふのである。此達見を有するものがあつてこそ、談林の一風は決して奇を好み新を追ふものではなくて、詩歌の本道を尋ねて進むべく悶えてゐるものだと見られよう。尤も其の道がたやすく得られなかつた爲に、めうに歷せられ惡く歪んで、一種の變態的なる、所謂談林風とならざるを得なかつたとも云へよう。兎も角、彼等の意氣はすばらしいものである。

されば爰に談林の木あり梅の花　　西山氏　梅翁

世俗眠をさますうぐひす　　雪柴

朝霞たばこの烟よこおれて　　在色

鴉籠かきすぐるあとの山風　　一鐵

ながむればば供鑓つゞく峰の松　　正友

之は「談林十百韻」の最初の巻に於ける發句に續く句だが、「世俗眠をさます鶯」とは貞門の人々が談林の新風に眠をさますといふ意である。眠をさますから朝の煙草と付け、其煙草の烟を駕籠舁と見、すぐるを受けてながむればと付け、其駕籠は大名衆の行列と察して供鑓つゞくと付ける。其付け方は、後の芭蕉風の其に較べればこそ、餘りに密接であつて妙味がないと云はれようが、貞門風の弛緩したる、變化の無い付け方よりも遙かに活氣があり、且つ前句後句の照應が自然であり、一句としての景情も成立つてゐる。是は當時の行き方として惡くないと思ふ。

入口をまねく酒旗の春風　　一鐵
燕や水村はるかに渡るらん　　松意

酒旗であるから、入口をまねくと云つた所、酒旗風から詩の句をふまへて水村山廓の水村と受ける所、談林風の面白みである。しかも、斯ういふ所は敢て奇警を衒ふといふ程でなく、素直にうなづかれるものがある。

山家三つ四つむすぶ白露　　雪柴
きり〴〵す念佛講に聲そへて　　正友

此付け方も佳いと思ふ。之は江戸に於ける談林（延寶三年）である。

聞たやうなる松風の聲　　山平
等類はのがれがたしや磯のなみ　　同
其外惡魚鰐のかゝるくち　　同

之は「大坂獨吟集」中にある。聞いたやうといふから等類はのがれがたし（類句がある）と受け、のがれがたしやといふ海士の謠曲の文句から其まゝ、其外惡魚鰐の口と付ける、言葉から言葉へ綱わたりしてゆくやうな器用さだけであ

る、しかも、磯の浪が等類を免れ難しとは（浪の形が似てゐることを指すつもりかはしれぬが）一句の意がはつきりせず、たゞ前句の松風に對して磯の浪といふたゞけのもの、尤も此磯の浪が次の魚類を呼び出す役はしてゐるもの丶、鰐のかる口とは何の事か、これこそ一片の輕口ではないか。

汗になりぬる戀路はい〳〵　三昌

綸言はおほせのごとく馬に鞍　同

綸言汗のごとしといふ古語と、馬を馭する言葉のはい〳〵とを以て受け應へしてゐるのである、宗因は後句に長點を掛けて賞してゐる。是等は談林の如何にも談林風らしいもので、同年（延寶三年）大阪に於ける作である。で、輕々には概評し去り得ないけれども、談林は大阪を發祥地としたゞけあつて、談林臭味といふものも、大阪方に長く殘つてゐたやうに思はれる。それが江戸に移されたものが、大分に垢ぬけがし、晒されて、そこから芭蕉一派の藝術味あるものを産む素地となつたやうに思はれる。又、京都に入つた談林は、前卷の「中庸姿」（延寶六年）を見ても、本卷の「滑稽雜巾二百韵」（延寶九年）を見ても解る通り、衒學的で、獨りよがりで、甚だ感服出來ぬものである。なほ三都談林の驍將の連作たる「虎渓の橋」は三都それ〳〵の行き方が解るといふよりも、之は大體に大阪風に引つぱられてゐるやうである。

樟腦すこし香ににほひぬる　江雲

人はいざ心もしらずひぜんがさ　松意

床へは入たがさはりもせなんだ　西鶴

次に談林の發句、即ち俳句を見よう。「誹諧當世男」（延寶四年）に出てゐるものは

郭公はいかに鬼神もたしかにきけ　宗因
煮て候高野山より出でたる芋　同
花は香と月は光と身は財と　蝶々子
我耳をいつ留守にして郭公　同
けふ甲人形店や武者所　立志
菖蒲刀延寳四年作は誰　調和
ふぐ汁や生前一樽のにごり酒　卜尺
天秤や京江戸かけて千代の春　桃青
武藏野や一寸ほどな鹿の聲　同
盃の下ゆく菊や朽木盆　同

是等の句は、謠曲や詩歌の文句を巧に引用したり、轉換したり、小さな事を大ぎように云ひはやしたり、身邊の物を殊更に面白さうに見立てたりする所から來る興味であつて、其の制作動機は機智(ウイツ)であり、目的とする所はをかしみにある。其點で貞門の句の行き方、覗ひ所と同じであるとも云へるけれども、貞門の機智は言葉のあやつりを離れず、駄洒落のをかしみ以上に出てゐない。其に較べれば、談林の方には、內容がある。心理學者の云ふ所の「言語の機智」(Wort witz)より「觀念の機智」(Vorstellungswitz)に進んだものである。爰に桃青とあるのは、芭蕉の事。當時の芭蕉は斯うした談林風の句を作つてゐたのである。

乞食が口には幕咲にけり山櫻　雨夕

桃醉へり何とて柳すめなりける　如泉
古足駄化て出でけり春の雨　友靜
ひや水とは臍が笑ふぞけさの秋　梅雪
馬子やとき飛脚やおそき橋の霜　常矩
蟬あつて毛蟲凉しく聞えけり　同
梶の葉賣る聲に天下の顆露けき秋なり　同

右は「蛇の介がうらみの鐘や花の暮」の作から「蛇の介常矩」の名を得たる京都の常矩の「雜巾」（延寶九年）にある。

むさし野や富士を射垜に弓始　寝覺
屋形船上野の櫻散りにけり　杉風
今朝の雪湯屋が寐覺を急ぎけり　調古
阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍　桃靑

右は「蛇のすしや下に馴たる沖の石」の發句から其題名を得てゐる言水の「江戸蛇之鮓」（延寶七年）にある。是等は上に擧げた「誹諧當世男」中の發句に較べて、一層内容的のものを持つて來てゐる。尤も作者の意圖に於て、奇警人を驚かさうとする心持が勝つてをり、從て、往々にして鬼調か、奇調か、不自然に誇張したる表現をなし、其表現の巧みさに其句の全價値を贏けてゐる所が、淺薄といへるのでもあるが——。「蛇之鮓」の中には、次のやうな芭蕉の句も見える。

雨降ければ

草履の尻折てかへらん山櫻　桃青

わすれぐさ菜飯につまん年の暮　同

前句は草履のかゝとを折る事を尻を折るとしやれ、後句は年を忘れるにかけてゐる。此集中に於ても佳い句とは云はれない。所が、その芭蕉が、其より二年後に梓行された「東日記」（延寶九年）には次の句を見せてゐる。

餅を夢に折結ぶしだの草枕　桃青

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき　同

盛じや花にそゞろ浮法師ぬめり妻　同

山吹の露菜の花のかこち顔なるや　同

摘けんや茶を凩の秋ともしらで　同

五月雨に鶴の足みじかくなれり　同

愚にくらく蕀をつかむ螢かな　同

闇夜きつね下はふ玉眞桑　同

よるべをいつ一葉に蟲の旅寝して　同

花むくげはだか童のかざし哉　同

後名月

夜ル竊ニ蟲は月下の栗を穿つ　同

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮　同

いづく霽傘を手にさげて歸る僧　同

富家喰肌肉、丈夫喫菜根、予は乏し

雪の朝獨り干鮭を嚙得タリ　同

石枯て水しほめるや冬もなし　同

芭蕉の句は凡て十五句ある。此中、「山吹の露」の句は、「雜巾」にある「山吹と菜種と下種と上﨟と」（如雲）に較べて一段と巧みになつてゐるとは云はれようが、一段と進んでゐるとは云へない。同じ樣な興を構へた見方である。「五月雨」の句、「蛍」の句なども一片の警句で、これらは皆同じ談林畑の淺薄さがある。然し、「夜竊に」は後の月からの連想ではあらうが、しん〳〵とした月光の鋭さが栗にくひいる蟲を思はせる。觀念としてゞなく、感じとしてぴつたりと來るものがある。「いづく霽」は京都邊に好く見るやうな景色であつて、之も着想としてよりも印象として訴へてくる。其表現はかなり拮屈ではあるが、是だけの内容を盛るは斯うでも云はねばならぬといふ内的の張りがある。單に辭句を誇張して調子を張つたものとは違ふのである。一般の談林の句集の中に斯ういふ傾向が見えて來たゞけでも大に注意しなければならない。所が、それよりも一層新しい世界が「花むくげ」の句から開きかけてゐる。之は讚讀だとも云ふが、兎も角たゞ有りのまゝに見た所を其儘云ふたゞけである。何の構想もなく、何の奇警さもない、まして、談林の生命としてゐたをかしみもなく、しないたる所もない。それでいゝのである、それでいゝといふ所を確に握つてゐる、卽ち在來の談林の句が惣じて人工の味であつたのに反して、之は自然の味を出してゐる。今日の言葉で云ふ「寫生」といふ味が初めて解つて來たのである。こゝに俳諧の世界に根本的の革命の將來すべき事が暗示されるではないか。更に「枯枝」の句に於て、芭蕉は其以上に深いものを取出してゐる。之も自然を自然のまゝに観たのではあるが、さつと

寫し取つたといふよりも、じつと觀入つてゐる、自然の靜寂な相といふものを感じとつてゐる、そこにさびとも云ふべき一つの味がにじみ出てゐる。芭蕉風の新しい俳諧は爰に自然の心をさぐるべき鍵を得たのである。又、此句の表現なる「鳥のとまりたるや」ののの字は鳥その物の動作を如實に生躍せしむる語として役立つてゐる、斯樣な修辭法は短歌にて云ふしらべに類するもので、在來の發句が修飾の爲めの修辭のみに苦心してゐた行き方とは全く別途なる出發點に立つてゐる、私達が今日謂ふ所の表現のリヅムといふものが爰に初めて認められるのである。之を要するに、在來は技曲を專らとしたる發句の上に、新に自然を生命とするものが顯れ、在來はをかしみを專らとしたる發句の上に、新にさびしみを心とするものが顯れたのである。詩——藝術といふ言葉を用ふるならば、初めて「詩としての發句」が出現したと云つていゝ、俳諧といふものが初めて藝術の圖域にはいつて來たと云つていゝのである。そこで、も一つ注意を逸してはならぬ事は、「雪の朝獨り干鮭を嚙得タリ」の句である。此句にはをかしみなどゝしやれのめしたとは全然反對の心、即ち生活がなま〳〵しく出てゐる。當時、芭蕉は「長安はこれ名利の地、空手にして金なきものは行路かたしといひけん人のかしこく覺え侍るは此方のともしき故にや」と彼自ら云ふてゐる通り、衣食の上にかなり窮迫してゐた、其の生活意識が此句にあらはされてゐる。私達が芭蕉の生活を知つてゐるからではない、此の「東日記」一編のうちでも、又、在來公にされたる幾多の句集のうちでも、斯うした自己の僞らざる心を語つてゐるものはない、己れを打出して其まゝ詩になるといふ事——いや「詩」の「風流」のと、そんな事を考へての上ではない、たゞ此の心を表現しないではゐられなくて表現したのだ、つまり其が「詩」なのだといふ事——に指を染めたものとして、此句は尊いと思ふ。在來の俳諧の傳統的な趣味の上から、此句が發句として許し得られるかどうかといふ問題が詮議されるより前に、もつと大きな藝術的意識から作者は斯う打出したので、而して其に依て上の問題は、發句を藝術の

圏内に引上げる事が可能か不可能かといふ問題に逆轉させられたのである、此意味から此句は尊いと思ふ。「東日記」の中には又、

踐の戸やしめしにしぼむ花木槿　言水

芋洗ふ女に月は落ちにけり　同

砧盡て又のねざめや納豆汁　其角

の如き、談林風の技曲を離れて、自然に近づいた句が發見する。其新しい道に向つては、芭蕉が先覺者であつたには違ひあるまいが、時の勢としても斯う移るべき氣運が熟しかけてゐたとも見えるのである。

芭蕉の新しい試みは、何にしても、まじめである、眞劍である、之に對して談林の行き方はふざけてゐる。いゝ氣持になりすぎてゐる。又、芭蕉は、句作の動機を自分の心の内にひそめて行つた。談林の行き方は自分の外にばかり向けてゐたのである、之は「どんなもんだい」と見せつける氣持が勝ちすぎてゐたのである。幽山等の「江戸八百韻」(延寶九年)を見ても

五人前仰付けられしさしみ皿　泰徳

打物とつての箱細工なり　言水

一の谷鼠一疋おとしけり　幽山

信徳等の「七百五十韻」(天和二年)を見ても

幽靈にらまへ螢きへゆく　正長

口の中阿介摩介摩々爾蟬鳴て　常之

金光寺の金光坊の木末木々末　信德

いゝ氣持にふざけてゐる風がまだ脫けてゐない。一方に芭蕉のまじめな新風がめき〳〵と生長しつゝ、俳壇に大きな本質的の革命が來ようとしてゐる事も知らずに、彼等はたゞ好い氣持である。彼等は花の山に醉うて肩を組んで何かわめいて步るいてゐるやうな風である。ふざけながら、共を見てくれがしでもある。「八百五十韻」最後の卷の擧句に

延寶六年八百の春　一鐵

「七百五十韻」の同じ所に

挨拶はこゝでは仕たい花なれど　正長

又かさねての春もあるべく　常之

こんな付け方を見ても、自分達だけが好い氣持であると共に、見てくれがしの對他的の氣持がうごめいてゐるではないか。

然し、當時、芭蕉と共一門は未だ俳壇的に一勢力――一別派をなすまでに到らなかつた。芭蕉一門は談林の人々と交り、彼等からも仲間として遇せられてゐたらしい。後に芭蕉と道を同じくしたる盟友でも、素堂といひ、卜尺といひ、尙白といひ、何れも談林の集に名を列ねてゐる。尾花澤の淸風が編んだる「おくれ雙六」(延寶九年)は彼が交遊の廣い事を見せただけのものかもしれぬが、此中にも

部公まねくか麥のむら尾花　桃靑

の一句があり、西吟の「庵櫻」(貞享三年)には

古池や蛙飛ンだる水の音　桃青（芭蕉翁）

の一句がある。之は「飛ンだる」とある點と、「芭蕉翁」と別扱ひしてある所に注意せられる。

今日ぞ秋門に告げこす縄簾　自交

あき風のこゝろうごきぬ縄すだれ　嵐雪

前の句は「おくれ雙六」にある談林の風であり、後の句は不卜の「續の原」（貞享四年）にある蕉門少壯作家の作である。門に告げるといふ意が縄簾を以て生かしてある、其處が談林の覗ひ所、芭蕉風ではさうした小細工を嫌ふが、あき風を簾に感ずる其取材と見方とに於て、かなりの近似がある。

賀子の「蓮實」は元祿四年の撰で、芭蕉一門が既に一旗幟を立てゝゐた時であるが、此集には、西鶴も芭蕉も來山も言水も皆一堂に會せられてゐる。しかも、此集にて驚かれる事は、所謂、談林の人々の發句が大分に芭蕉風に近づいてゐるやうに見える事である。

春雨や所々にひゞきて鐘の音　大阪　宗準

春雨や黑子數ふる姉妹　同　萬櫻

板橋の繼日繼日や春の草　同　芦錐

餅花に切りのこされて柳かな　同　賀子

花を出て花に入りぬる日足かな　同　芦賁

子規子規とて寐入りけり　江戸　調和

小松に蟬の居なをる朝日かな　櫻塚　西吟

三ケ月や瓜むいてゐる渡し守　　京　滿瀨
淋しさに鳴らして通る鳴子かな　　大坂　燈外
鳴蟲の髭の長きもあはれなり　　大坂　椿子
山茶花を旅人に見する伏見かな　　西鶴

是は芭蕉等一風の影響を受けたといふことも確かにあらう、然し、談林のうちにも亦、自然を観るといふ行き方があるので、宗因の句にも「霧に乘る川舟かるし高瀨舟」といふ如き割合に素直な句はいくらもあるのであるから、さうした行き方が漸々生長して來たものとも解せられる。つまり、時の勢だとも云へるのである。沾德の撰したる「一字幽蘭集」（元祿五年）の序に佐々木文山は「世人新古ノ辯ヲ費ス是レ何ノ意ゾヤ想フニ夫レ天地ノ道ハ變ヲ以テ常トナス俳ノ風體モ亦是然カナリ寒ニ附キ熱ニ離ル、時ノ勢自ラ然ルヲ期セズシテ然ル者也強テ論ズベカラズ」と云つてゐる。此集は露沾公の命を受けて撰まれたものだらうが、露沾公は談林畑の人であつて、芭蕉とも風交をなしてゐた。選者沾德は蕉門の「炭俵」其他にも句が見えるが、此集の中にも蕉風らしいのがある。

なま壁に梅そふ冬の日向かな　　沾德
麥ふかき徑よこぎる鶉かな　　同

此集には宗鑑（借錢もきのふの淵ぞけふの春）もあり、貞室（これは〱とばかり花の吉野山）もあり、季吟（たなばたや戀せよとての生れ合ひ）もあり、芭蕉門の作者も數々見えるし、なか〱賑かである。斯樣に、談林と蕉門と一脈の相通ずるものは存したに違ひないが、其句作の態度に於ては根本的の差別がある。それは談林の句はどうしても口先だけのもの、蕉門では全人的に突込まうとする。談林の句は頭だけで作つたもの、蕉門の句は心を打出さうとす

る。談林の句が自然を見るといつても、眼だけで見てゐるのでは、自然の心に深くひたつて行く事が出來ない、自然の魂を掴み得ない、それでは本當に自然を見たとは云へぬ事になる。自然に歸入し自然を讃嘆する、そこに至つて、所謂さびといひ、まことゝいふ詩の氣持が初めてわかるのである。さればこそ、俳句を藝術といふ上の立場から見れば、談林の句は未だ藝術の域に上らざるものであつて、俳句の正道、本流といふ意味で、「正風」といふ語を用ふるならば、芭蕉以後のものこそ其に當るといはねばならぬ、於是、「蕉風」卽ち「正風」となる譯である。

そこで、蕉風若くは正風といふ事を、發句の上のみで片付けてはいけない、其は寧ろ連句の附け方の上の事だといふ、別の說も出よう。それは、史的に云つて確にさうである。然しながら、談林風の付け方と、芭蕉風の付け方と違ふ所、卽ち觀念連想や接近連想や語呂感覺や感情近似などの點から付けずして、芭蕉の所謂、にほひ、ひゞき等を以て附けるといふ事は、一つの技法上或は作法上の相違であつて、之は漸進的、若くは比較的の性質をもつたものである。だから、談林風の附け方よりも芭蕉風の附け方の方が面白い、味が深いなどゝは評し得られようが、一つが邪にして、一つが正といふ風に截然たる區別をなし得るものではない。そこに評論的に甲乙を明白にしようとするならば、連句にしても、其一句一句に現れたる作者が觀的の態度と表現の心持とを以て判じなければならない。而して其心持が一番好く現れてゐるものは發句なのだから、つまり「正風」の正たる所以を說明するには、發句を以てするのが最も妥當だと私は思ふのである。

さて、總に西鶴の「大矢數」(天和元年)を見よう。序に「此時諸樂盛にして遊興巷に溢る俳諧猶一也」とある。太平の餘澤とは云へ「比は延寶八庚申の年、生玉に大幕打たせ一日四千の矢數俳諧を吟ず」といふのだから、すばらしいやうなものゝ、藝術的に見ればずいぶん亂暴な話である。

大地震ちつとも喉がぬ花の山
覺悟の惡い雉子なくなり
切腹はたてからひいて横霞

斯ういふ風に、觀念から觀念へすべらして行つたらば、立て續けに四千句も成程吐きちらし得た事であらう。それにしても、此の西鶴一派の才氣には、ちつとばかり驚いておいてもよい。

駒も舌に及ばぬ事ぞ大矢數　守之
螢飛んでは車四千句　西鶴
比は皐月前代未聞の空晴て　松緑
記錄のおもてつまびらか也　吉隣

彼等の目的も全く人を驚かす事にあつたらしいではないか。何としても、西鶴は才人である。此才を用ふべく俳諧の世界は餘り狹すぎる。自分としても窮屈だらうし、俳諧の世界としてもさう縱横にあばれられては迷惑する。彼が其後、小說の世界に出て行つて、充分に驥足を伸ばし得た事は彼の爲にも幸であつたし、俳諧の方でも幸であつた。俳諧は、特に俳句は才を以てなすべきものではなくて、まことを以て當るべきものだからである。（荻原井泉水）

日本俳書大系第七卷　終

大正十五年十二月五日印刷
大正十五年十二月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（7）

著作者　神田豐穗

發行者　東京市日本橋區數寄屋町一番地　神田豐穗

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三　谷口熊之助

印刷所　春秋社印刷所

發行所　東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二二一三・二二一四

